

# ディブレイク被害者が 仮面ライダーになる話

平々凡々侍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

デイレイクをきっかけに何やかんやあつて仮面ライダーになつちやう男のお話。

←ツイッター始めました！

<http://twitter.com/UI4VTPaTMaKvQY>

時々、執筆状況や投稿日を予告したりする予定です。フォローしていただけると幸いです！

# 目次

## 【仮面ライダーバルデル】

- ある男の災難《テイブレイク》 2
- ある男の退院 13
- ある男の驚愕《シヨットライザー》 21
- ある男の初変身《シヨットライズ!》 27
- ある男と天津社長《10000%》 54
- ある男の就職決定? 62
- ある男の決意《仮面ライダー》

71

ある男の都市伝説

ある男と探偵《ワズ》

ある男の心に夢に《ピンチ》

ある男の思い《ジャンプ!》

ある男の敗北《滅》

ある男の決戦先刻

ある男の終わりと始まり《ゼロワン》

218

仮面ライダーバルデル全フォーム集と

おまけ

【Another Daybreak】

Another Daybreak

253

99

108

115

142

170

193









【仮面ライダーバルデル】

ある男の災難 《デイブレイク》

×月×日×曜日

(唐突に) 話をしよう。

あれは今から三十六万…いや一週間前だったか。まあいい(諦め)

ーデイブレイク。

それはいつもと変わらぬ一日。日常の中で突然起こった。

ヒューマギアという高度な人工知能が暴走し、ヒューマギア工場並びにヒューマギア運用実験都市は甚大な被害を受け廃墟と化した。

ヒューマギアの開発を担っていた飛電インテリジェンス曰く、ヒューマギア工場の整備ミスが原因で爆発事故が起こった…というこらしい。

なんでそんな話をしたかって？

H A H A H A、聞いてくれよジョン。

実は俺、このデイブレイクの被害者なんだ。

笑い事じゃない？だからどうした？って思うかもしれないが俺の自分語りにもう暫



し付き合ってくれると嬉しい。

デイレイクが起こった日。

俺は朝起きて街を歩いてたら急に爆風に襲われ、コンクリに頭からぶっ倒れ、挙げ句の果てには立ち上がったら何故かヒューマギアらしきもの複数に追われるというリアル逃走中をして、結局追いつかれて硬いパンチを喰らい意識を失い奇跡的に死なず病院送り……なんということでしょう（絶望）

不幸の連続コンボに俺の心と体は多大なダメージを受けた。特に体の方は物理的なダメージがやばかった。具体的に言うとなんか骨がボキバキと……なんか思い出して体痛くなってきたからこの話やめようか。

「不幸……いや、災難だ……」

就活中だった俺は病室のベッドの上、まともに動く頭で部屋の天井を見上げながら呟いた。一体俺が何をしたというのだろうか？ こんな災難に見舞われるほどに悪い事をした覚えなど断じて無い。日頃の行いも良くも悪くも平凡だと自負している（謎のドヤ顔）

やばい俺の人生早速（ $\wedge$   $\circ$   $\wedge$ ）／かもしれない。これも全部ヒューマギアってやつ  
の仕業なんだ！（錯乱）

神様（又は世界）は俺の事をさぞ嫌っているらしい。まあ俺は災難だったが幸い家族

は俺以外皆旅行中でデイブレイクが起こった街、通称デイブレイクタウンには居なかった。それで誰一人被害に遭わなかった。それだけはまじで喜ばしい。正直旅行俺も行けばよかったと今更ながらに超後悔してる。

×月×日×曜日

『12:30』

(これからどうするか……)

デイブレイクの被害に遭ってから一週間後。

初日に比べれば体もそこそこ回復し、割と自由に動かせるようになってきたある日。俺は滅茶苦茶になった自分の「これから」について考えながら病室の窓から見える景色をいつも通りぼーっと眺めていた。

ドクターから聞いた話では俺の入院生活はあとちようど一月だという。あと後遺症も残らないとか。我ながら中々に丈夫な身体してんなど思ったね。改めて親には感謝した。健康な身体で産んでくれてありがとう、頼むから旅行俺も連れて行ってください  
(懇願)

そんな事を思っていると俺の病室(個室)のドアがコンコンコンとノックされる音が

した。あれ？今日は家族みんなさつきお見舞いに来たばかりなんだが……ドクターか？  
はたまた友達？ だったら事前に連絡の一つぐらいしてくれてもよくない？

「どうぞー……」

「失礼」

「すみません。部屋間違つてませんか？」

病室に入ってきた人物を俺は思わず二度見した。

誰だこのイケメン!? 俺の知り合いにこんなイケメンは断じていない。つうか何その真つ白コーデ？ もしかして最近の流行り？

というか何そのケース……あーアタツシケースってやつか。大金入ってそう（安直）

「間違つてませんよ。ここは天本あまもと 太陽たいようさんの病室でしょう？」

「確かに俺は天本 太陽ですけど……もしかしてどこかでお会いしたことありましたっけ？」

如何にも金持ちで自信家っぽい男は俺の問いを聞いてふつと笑う。

「いいえ初対面ですよ。はじめまして太陽君。私は……こういうものです」

「おお……これはご丁寧にどうも……」

謎のイケメンが差し出してきた紙の名刺を俺は受け取り、いきなりファーストネーム

呼びつて凄いなこの人！ 今時紙の名刺つて珍しいなあ〜とか思いつつ名刺に目を落とす。【Z A I A E N T E R P R I S E J A P A N 代表取締役社長 天津 垓】  
……えっ？

「えッ！ いや、社長!? こんなに若そうなの!? え、天津さん歳お幾つですか？」  
「ふふ、予想通りのリアクションをありがとう。私は永遠の24歳です」

アイドルかよお前っ!?

ドヤ顔でアイドルみたいな発言をする天津さんに俺は内心ツッコミしてしまった。  
というかこいつ変じーじやなくて、なんか個性的な人ですね（苦笑）

「それであのー、天津さんみたいな俺にとっては雲の上的なお人が俺なんかは何用ですかね？ 見ての通り俺今こんな状態なんですけど……」

まだギプスの取れてない右足をプラプラ動かして「まだ入院中なんですけど」とアピールしてみる俺に、天津さんは知ってますよと頷く。

「私がここに来たのはデイブレイクの被害者であり、貴重な生存者の一人である君に聞きたいことがあったからですよ」

「あ、あーそういう……」

またそういう類の人か（ため息）

実はそういう人、俺が意識取り戻した日とかにも来たんだよ。「デイブレイクについ

て聞かせてください」って記者さん達が沢山な。プライバシーどうなってるんでしょね？

別に俺、ダイブレイク被害者といってもあれだから。

実際運悪く逃げ遅れて運悪くヒューマギアに頭ぶつ叩かれて、目が覚めたら病室だからさ。一週間前に飛電インテリジエンスの社長さんが「誠に申し訳ない！」って深々と頭下げて来たんだけどそういうのいいから！俺なんか謝罪しなくていいから！他の人に深々と謝罪してあげてくれ。別に俺、ダイブレイクで家族失ったりしてないし……まあ人生設計は粉々にされたけどもね？

あ、あとこれからも頑張ってください応援してます！ド○えもんが出来るの楽しみにしてます！

「単刀直入に答えてください。君はヒューマギアをどう思う？」

「どう思う、とは？」

曖昧な質問に俺は首を傾げる。

「そのままですよ。好きか嫌いか。ヒューマギアについて、今の君が抱くイメージを聞かせてもらいたい」

「ん……そうですねー」

天津さんの言葉に俺は暫し考える。

記者さんにも聞かれた質問に似たものがあつたけど、その時は「あー頭が急に痛くなつてきた（棒）」とか適当言つて躲してきたからな……ここでそれしてもいいけど、凄くシリアスな雰囲気だしここは空気読んで正直に答えるとしますか。

「好きか嫌いかで言われたら4：6ですかね」

「4：6？」

「好きつて気持ちちが4で、嫌い……というよりは苦手つて気持ちちが6つてことです」

「……君はディブレイクの被害者であり、暴走したヒューマギアにも追われた……そう私は聞いている。そんな君なら0：10でも何らおかしくはないと思うが」

「そうですね……俺のヒューマギアに対する最初の好き嫌いの評価は8：2ぐらいだったんです」

「それはまた……何故？」

「どうしてつてそりゃ浪漫あるじゃないですか。人工知能、AIつて。アニメやドラマの中だけの話だったことが現実になるんですよ？ めっちゃワクワクしませんか？」

だから期待が8、それで不安はちよつとあつて2だったんです。映画の話ですけど人工知能が暴走して人を襲うつて結構SFにありがちでしょ？」

「それが今は4：6、と」

「……まあしょうがなくはないですか？ 実際命とられそうになりましたし……若干トラウ

マになっちゃったんですよねヒューマギア。今の俺の中じゃヒューマギアに対する評価は期待より不安が上回っちゃったわけです」

あんな被害に遭って命まで落としたかけた。

それで尚ヒューマギアに好印象を抱けるか？と聞かれたら当然NOだ。そこまで俺は馬鹿じゃないし聖人じゃない。

「なるほど。……最後に一つ聞かせてほしい。

ー君はヒューマギアを憎んでいるかい？」

「そんなの聞いてどうす……わかりました。答えますよ」

そんなの聞いてどうするんだ？

と口にしようとしたが天津さんの真剣で鋭い眼光を受けて、俺は仕方なく言った。

「以前よりも嫌いにはなりませんが、憎んではいませんよ」

「それは……些か理解に苦しみますね」

「だったら無理に理解しようとしなくていいですよ？ 家族にも言われましたから。

『頭のネジ飛んでない？』って」

「嫌いにはなつたが憎んでいない。期待より不安が上回っている……太陽君。君はまだヒューマギアに期待しているのですか？」

「質問責めですか……期待はしてますよ。前に謝りに来た飛電の社長さんが言っ

たから。『ヒューマギアは人間の最高のパートナー』になるって。正直謝罪しに来たのか宣伝しに来たのかわかんなくなりましたけど」

「飛電是之助……」

「聞きたいことはもうないですか？ だったら俺、診察時間なんで失礼しますよ」

体を起こし、ベッドの横に立ってかけてあった松葉杖に手を伸ばしながらそう口にする  
と、

「……はい、十分ですよ。ありがとう太陽君。貴重な生存者の声を生で聞けてよかった。

……これは私からのお詫びの品だ。お大事に、では失礼」

天津さんは満足したのかさつきから手に持っていたアタツシユケースをベッドの近くに置くとすぐに病室を出て行った。本当にびっくりするぐらいすぐに。

「え、ちよっ!? 天津さぁーん!? これ何いっ!? おーい!」

置かれたアタツシユケースに松葉杖を向けて困惑する俺に天津さんは何も答えてくれなかった。

ていうかお詫びって……ああそうか。

「Z A I Aも確か参入してたんだっけ……お詫びって、あの人一言も謝らなかつたよな……? 別に謝ってほしい訳じゃないからいいけどさ」

ヒューマギア運用実験都市計画。



通信衛星打ち上げプロジェクト。

飛電インテリジェンスの社長さんは整備ミスが原因の爆破事故、そう説明していたけど……はてさて。

(本当は何があつたのかね?)

目を赤く発光させ「コロス」「ニンゲン」「ゼツメツ」と言っていた暴走したヒューマギア達の姿を思い出す。あれは完全に殺戮マシンだったな。……なんで俺が生き残れたのか不思議でしょうがない。俺はまた外に目を向けた。

「ー俺は生きてるからいいけどさ」

ダイブレイクで亡くなった人。

その人の友達や家族はきつとヒューマギアを憎む。実際にヒューマギアに命を奪われそうになった人ならば尚更だ。でも、

『誠に……誠に申し訳ございません！ 全ては我々の責任ですッ！ ですが、ですがどうか！ ヒューマギアを信じてはくたさいませんか？ 私がこんなことを言える立場ではないことは分かっています、ですがきつと！ ヒューマギアは人間の最高のパートナーに必ずや成り得ます！』

言っていることは滅茶苦茶だが。

大企業の社長が頭を深々と下げて、涙ながらに訴えてきた言葉は俺の胸に結構響いた

んだわ。

「信じてるよ。飛電の社長さん」

あんたの作るヒューマギアが、いつか人間を支える最高のパートナーに……明るい未来を作る一因になることを信じて祈っておきます。

「それにしても暇で暇でしょうがねーなー」

松葉杖をついて診察室に向かう途中で俺は思わず愚痴った。

## ある男の退院

「バカ兄にい早く早くー」

足早に俺の先を行き、めっちゃ急かしてくる少女。

お前俺が今日退院初日の人間だと知っての言動がそれか？全く、どうかしてるぜ……！

「はあー、少しは退院初日の兄の体を気遣ってくれんか？ バカ妹よ」

一応説明しとくか。

この少女は俺のバカ妹…名前はあまもと天本 美月みつき。元気なのが取り柄で、ときどき辛辣な事を言い放つ恐ろしい女だ。美月という名前に名前負けしてないぐらいにルックスは良いのだが、如何せん落ち着きというか…お淑やかさが足りてないのが一番の欠点だと俺は勝手に思ってたりする。

まあ口に出したら「まじきもい」とこちらの心を容赦なく折ってくるので絶対本人には言わないけど。

「やだよー！ だって気遣ったら気遣ったで兄にい『気持ち悪つ……い！』とか言うでしょ？」

「そりや勿論」

「ほらあくー！」

「あー騒ぐな騒ぐな。まだ病院の中だからー。他の人に迷惑だからー」

駄目だからー！

病院で騒いじや駄目だからー！

やだよ俺？退院した日にドクターに叱られるとか。

「はいはいごめんなさいい。ほら早く出るよバカ兄にい！」

「おまつごめんなさいとか絶対思ってたなーわーった、わーったから腕を引つ張るの止めろや」

俺の腕を引つ張つて病院出入り口を進んでいく美月に俺はうんざりな反応を示す。内心、今まで入院していたので久々の妹とのやり取りに若干嬉しかったり……やっぱ何でもないわ（羞恥）

「さ、じゃあ家に帰ろつかバカ兄にい」

「だな。……つうかメールで聞き忘れたんだけど、何で退院の迎えが美月なんだよ？

母さんは？」

「母さんは私を病院近くに下ろしてすぐドライブ行つたよー」

「まじとんでもねえうちの母親」

息子の退院日にドライブ!?

どんなサプライズだよ全然嬉しくねーわ!

いやサプライズって別に俺なんもしてもらってないから嬉しいとか思う以前の話だったわ。

「そんなの今更でしょー」

「確かに……!」

美月の言葉に納得しつつ俺たちは帰路を歩く。

その間、何気ない会話をしていたのだが……当然我が妹はまずそれについてツツコミを入れた。

「というか何そのケース?」

「……永遠の24歳を自称する謎の社長から貰った」

「何それめっちゃ怪しいじゃん!? 早く捨てた方が良くない?」

ほう……(謎の上から目線)

我が妹ながら実に常識的な意見だあ……(感嘆)

「それな」

ーとりあえず俺は相槌を打った。

「ただいまあ〜！」

「ただいまー」

と言つても今家に誰も居ないんですけどね。

父さんは会社勤め、母さんはドライブ（何故？）

でも「ただいま」つてあれだから。俺的には「いただきます」と同じでもう癖と化してるからね。家帰ってきたらとりま言つちやうよね「ただいま」。

「どうよバカ兄にいく久々のうちは。やっぱりほつとしたりするもん？」

「まあそうだな……久々つつつても大体一ヶ月ちよいだけだな」

「それもそつかあー……あ、バカ兄にい！ 言うの一瞬忘れたけど……おかえり！」

「……ああ。ただいま美月」

「うんっ！ ……あ、就活頑張つてね！」

「突然ガチな発言すなあ！」

正直言つて不安しかねえよ就活！

これも全部デイベレイクが……くそお！

まだどんな仕事したいとかさえ決めれてないんだが……大丈夫かなこれえ？

靴を脱ぎ家に入る俺。

美月はポケットからスマホを取り出し、ちらりと時間を確認すると今さつき通つたばかりの玄関ドアに手をかけた。

「まあ焦らず頑張つてね？　じゃあ私、これから友達とご飯食べに行く約束してるから」

「あー……なんか悪いな。わざわざ家まで付き添つて貰つて」

「今更気にしないでよー。んじや行つてきまーす！」

「行つてらー」

軽く手を振つてそう言う。

友達と約束してたんなら無理に俺の出迎えしなくてもよかつただろうに、わざわざ家に着くまで付き添つて……。

んーいい子（確信）

妹が家族思いの子になって兄ちゃん超嬉しいわ。

ありがとう……それしか言う言葉がみつからない……。

「……この中身がちよー気になるけど、とりあえずなんか食べるか」

カップ麺あつたっけー？

入院してたから現在のうちのカップ麺所持量がわからん。

持っていたアタッシュケースを一旦リビングにあるソファに置いて、俺はカップ

廻探索を開始した。



「さて…いよいよですね」

「ライダーの神話…その序章の始まりだ」

不敵な笑みを浮かべながら男はそう呟いた。

――――

『さあ飛び立とう…夢に向かって！』

【ヒューマギア運用実験都市で起こった大事件、デイブレイク。その被害に遭った方々はその多くが今も入院生活を余儀なくされており、死者も少なからず出ています。このデイブレイクに関して、ヒューマギア運用実験都市に参入していた企業内で指揮を執っていた飛電インテリジェンス 飛電是之助 社長はヒューマギア工場での整備ミスによる爆発事故が原因だと――】



「もうあれから一月以上経つけど……やっぱりヒューマギアって凄えな」

テレビに流れるニュースを見て俺は素直にそう思った。

事件そのものの被害が半端じゃないからという理由もあるだろうけど、世間がヒューマギアに少なからず注目していたというのが「デイブレイク」という事件をここまで長く取り上げてる一番の理由なんだろう。

はあ……これから大丈夫かね？ 飛電は。

一般人の俺には心配しかできないんだけどさ。

「ずるずるっ……そういや、飛電の社長さんのお孫さんもデイブレイクに巻き込まれたんだっただか」

カップ麺を豪快にすすりながらテレビを見る。

確か飛電是之助さんのお孫さんはニュース曰くまだ10歳だったらしく、デイブレイクタウンに居たらしい。幸い命に別状はないらしいけどな。

「ごちそうさん、と」

手を合わせそう口にした俺はカップ麺と箸をキッチンの洗い場に置き、さっさとアタッシュケース片手にリビングを出て階段を上がった。

（今更だけこのケース重っ……中身何入ってんだよ。まじ怖いわ）

人から一応お詫びで貰ったもんだけど……よく捨てなかつたな俺。

ま、まあ入院中の一月ちよいに爆発とか無かったし？多分爆弾ではないでしょう……  
れで中開いた瞬間爆弾でタイマー動き出したりしたら叫ぶ自信があるわ。  
そんなことを考えつつ俺は二階にある自室に入った。

## ある男の驚愕 《シヨツトライザー》

「よし…開けるぞ」

無駄に意気込みつつ俺は自室でアタツシユケースを開けようとしていた。中身はさっぱりわからん。お詫びとか天津さんは言ってたが…めっちゃ中身重いところから推測するに包帯とか薬とか、そういう類のものじゃないな。普通に考えるなら…大金とかか？

とりまさつさと開けようしよう。ガチャリと。

「まだだれえ〜！ ……………？ ん??」

中を開けてまず最初に俺の頭に浮かんだのは？ 何これ？ 的な感情だ。だがすぐに入っているものの一つ、それが基本平和な日本に住んでいれば普通は滅多に見ないであろうあれだと気付き俺は驚愕した。これが…お詫び…??

「じゅ、銃ッ!? え、まじもん？ エアガンとかじゃない…のか?」

アタツシユケースの中身は銃でした。

外見は銃口近くがメタリックブルーに赤のライン、その他はシンプルに黒一色で統一

されている。あとなんかボタンと謎の差し込み口？があった。

「試作品 仮称【ショットライザー】マニユアル……？ ……まじで何これ。あの人なんでお詫びに銃渡してきてんの？ えっ何これおも……ちやじやないですね、はい」

手に取って見たらわかる。ガちなやつやん！

ガチの銃なんてテレビとかでしか見た時ないし、持った時もないけどこれがおもちやの重さじやないってことは俺でも理解できたわ。

（あとこっちは……あ、軽いなこっちわ。……いやこっちはマジで何？）

アタツシケースにもう一つ入っていたそれ。

見た目を簡単に言うとおれだ。

何故かカブトムシ？の絵が印刷されている黄緑の……俺の知ってる物の中で一番近いのはあれだ、カセットテープ。

え？意味わからんって？いや俺もわかんねーから。なんだよこれ（真顔）

その他には何かを取り付けられそうな黒いパーツが付いたベルトらしきものもあつた。

あ、よく見たらこのカセットテープ上にボタンある。押してみると、

『ストロング！』

「はっ！」

ー光って鳴った。

もう一度押してみると、

『ハーキュリービートルズアビリティ！』

カンカン！（↑謎の金属音？）』

「What this？」

多分大事な事なのもう一度。

ー光って鳴った。

…意味不明だなこのカセットテープ！？

意味不明なあまり英語出たわ。

あと気付いたけどこのカブトムシ？の上に英語で何か書いてあったわ。

なにに…：AMAZING HERCULES…？ABILITY STRO

NG？ まるで意味が分からんぞ！？

「と、とりあえずこのマニュアル見てみるか…：そしたらこれについても何かわかるだろうし…：わ、分かるよな？」

その前にあの自称24歳の「お詫び」とか言つて一般人に実銃とカセットテープ？渡してくる個人的（笑）な社長に電話してみたい？

社長だから忙しい？ あ、そっすか。

「……………(熟読中)」

うむ(威風堂々)

さっぱりわからん(正直者)

専門用語多くないこのマニュアル?

(SRダンガー……? ライズベースアクター……? マギア……? 仮面ライダー

……? おいおい情報量半端無いって!)

あ、でも一応分かったことが二つある。

まずこの銃生身で打つと反動がやばいらしい。

そして、もう一つ。

「このカセットテープがプログライズキーってことか」

……まあこれ初歩の初歩らしいんだけどね。

その後、マニュアルを熟読して俺なりにこの銃と黄緑色のプログラムライズキーの使い方  
を把握できた……と思う。多分っ!

つまりこの黄緑色のプログラムライズキーをこの銃の差し込みローマニユアル通りに  
言うなら装填スロットーに入れて、プログラムライズキーのカブトムシ? が印刷されてる

部分を開いてトリガーを引く。すると、

「変身完了、と。……………えーっと」

……………変身ってなんすか？（小声）

マニュアルには変身についての詳しい説明が一切書いてなかった。まるで「変身は一般常識でしょ？」とでも言わんばかりに。なんでえ？

「……………寝よう」

わからんものはしやあない。

とりあえず俺は寝る！腹一杯だし一ヶ月ちよいぶりのうちで安心感すごいからね、しようがないね。

この実銃とカセットテープはあれだな。

家族にバレる前に天津さんに返品しようそうしよう。天津さんから貰った名刺もあるしな、うん。

で、でも一回だけ「変身」してみたいなあ……………なんて思ったり。

「……………昼やるのは目立つし、やるなら夜だな。おやすみー」

Z Z Z……………。

その日、俺は17時近くまで寝た。



デイブレイクにより荒廃した都市。

通称デイブレイクタウン。

「ーいよいよ人類絶滅の第一段階に移行……」

そこのとある拠点で男？は一人淡々と呟く。

「それがアークの意志ならば、従うのみ」

ゼツメライザーとゼツメライズキーを懐に仕舞い、男は部屋を後にするー物語は始  
まろうとしていた。



## ある男の初変身《シヨツトライズ!》

「バカ兄にいく? こんな時間に外行くの?」

「…ま、まあな」

玄関前で靴を履いていた時、後ろから妹である美月に声を掛けられ俺は一瞬固まったが何とか返事をした。だ、大丈夫か? 声震えてないか?

やばいでしょう。

予定では家族誰にもバレずに外出する…つもりだったんですけど…早速バレた。つうかなんでお前はこのタイミングでリビングから出てくんだけ!? テレビ見てなさいテレビ!

「兄にいがこんな時間に外出って珍しいね? どこ行くの?」

「ど、どこってそりゃあ……………」

確かに美月の言う通りではある。

俺が夜に、それも19時頃に外出するなんてことは珍しい。あまり夜遊びとかはしないタイプというか、そういう悪い友達との付き合いは全くない…俺が夜に外出するな

なんてあれだ。今すぐに欲しいものがあつたりとかしない限り基本起こらない出来事だ。どうする…どう誤魔化す？

で、出来るだけ普通な感じで…もしかしてもう手遅れだつたりする？ …ええい、ままよ！

「コンビニだよ、コンビニ。ちよつと飲み物切らしちまつてな」

「飲み物？ お茶なら冷蔵庫にあるよ？」

「い、いや、久しぶりにコーラとか飲みたくなつてさ！」

嘘である。

そもそも俺は炭酸飲料飲めん！

「そうなの？ あ、コンビニ行くなついでにアイス買ってきてよアイス！」

「あ、ああいいぞ！ 買ってきてやるよ。何がいい？」

いつもなら絶対「イヤだね」と即答する俺だが、焦っているのもあつて思わず承諾してしまう。ま、まあアイス買ってやるぐらいでこのバカ妹の機嫌をとれて？ 怪しまれず外出できるなら安い出費だぜ！

「うくん、兄にいにおまかせで！」

「りよーかい。…じゃあ行つてきまーす」

そうして俺は逃げるように外出したのだった。

ふう、なんとか乗り切った…死闘だったな（達成感）…いや何達成感抱いてんだ俺!? まだ目的達成してねーよ? とりあえず人目のつかない場所に移動しようそうしよう。

「いってらっしやーい! ……あつ! バカ 兄にいに聞くの忘れてた!」

兄を見送った美月はアイスを買ってきてくれるという事に喜び、つい聞き忘れていた事をもう既に家を出た兄に対して言った。

「なんでコンビニに行くのにリュック背負ってったんだろ?」

太陽はリュックを背負っていた。

もしこれについて先ほど指摘されていたら…多分太陽は無理矢理はぐらかして外出していたに違いない。



ゼツメライザーを取り付けられたヒューマギア。

元は青かったその目を不気味に赤く光る。

「滅亡迅雷・netに、接続……」

そんなヒューマギアに黒いヘアバンドをした男は表情一つ動かさず確認する。

「為すべき事は理解しているな？」

「――滅亡迅雷・netの意志のままに。人類を絶滅させること」

「ならいい。やれ」

男はヒューマギアの返答を聞いて、ゼツメライズキーをヒューマギアに手渡した。

『オニコー!』

ゼツメライズキーを鳴らしたヒューマギアは、ゼツメライザーにそのままゼツメライ

ズキーをセットしボタンを押した。

【ゼツメライズ!】

「アアアアアアアアアアアア!!!」

その瞬間、ヒューマギアは絶叫を上げる。

セットしたゼツメライズキーには触手状の赤いワームが複数伸び、ゼツメライザーの

外装を破壊。

「……人間を殺す」

こうしてヒューマギアはマギアに変貌した。

「…マギア化に成功」

無事に成功したマギア化。

その結果を冷静に分析した男は動き出したマギアの姿を見ながら淡々と述べた。

「我々の手で必ず人類を絶滅させる」

—————

「……なら大丈夫か？」

夜、人目のつかない場所。

考えてみてふつと俺の頭に浮かんだのは公園。

うん、考えてた通り誰もいないな！

よし早速まずはベルトを巻いてみるか。

とりあえずベンチに座り、背負っていたリュックを下ろし中からベルトとショットライザーを取り出す。

家で昼寝した後、マニュアルを読み直して色々分かった事がある。

まずこのベルトに付いていた黒い部分。これはショットライザーを取り付ける用のバックルらしいこと。

(えーつと? マニュアル通りならここに合わせて…)

「おっ、付いた」

取り付け完了!

後はこれを腰に巻きまして…。

俺がショットライザーを付けたベルトを巻こうとしたその直前ー。

「き、きやああああああ!」

突如として誰かの大きな悲鳴が聞こえた。

「!! な、なんだ!」

夜の公園。

何の前触れもなく轟く悲鳴。

ビビらないわけないじゃん!?

俺は反射的にベンチから飛び上がって立つ。

よかつた俺以外誰も居なくて……（安堵）

もし美月とかに今の醜態見られてたら、一日中いじられてるだろうな……あー怖い怖い。つてそれどころじゃないか！

「今の声……あつちからか？」

（あつちは……特に何もなかつた気がするな）

悲鳴が聞こえた場所を適当に検討して俺はリュックを背負い直し、急いで悲鳴が聞こえた方向に向かつて走り出した。

今思うと何で自ら危険かもしれない場所に急行したのか……これがわからない。興味本位で行動しない方がいいって学びました（真顔）

（ここら辺か？ あ、あの人か？ ……えーっと……後ろに居るのは……何だ？）

そこに着いた時、俺が最初に見たのは倒れた状態で恐怖のためか？ ……緩慢な動きで後退りする女性と、

「や、やめてッ！ 来ないでっ！」

懸命に逃げようとしている女性の目の前に立つ異形。

その大きな翼に手の爪、赤い複眼を見ればそれが人じゃないということは誰の目からも明らかで、

「人間発見。殺す」

物騒すぎる台詞を吐く。

女性に更に怯える。

異形の吐いた台詞によく似た台詞をつい一月とちよつと前に聞いた時のある俺からすると、異形の様子は恐怖でしかなかった。

きつと今の俺は血の気が引いてしまっていると思う。

『ニンゲンニンゲンニンゲン！ ゼゼゼ、ゼツメツゼツメツツ！！ ココココオ！ コロスコロスコロスコロスコロスコロス！！』

壊れたスピーカーのように同じ単語を繰り返し吐きながら赤い目をしたヒューマギア達。目の前のどことなくコウモリのような姿をした異形に、デイブレイクの被害に遭ったあの日…俺をどこまでも追いかけてきたヒューマギアの姿が重なる。

「ひっ………！」

気付ければ俺は小さな悲鳴を上げていた。

「っ!? ああ！ た、助けて！ お願いつつ!!」

その声は女性の耳に届いたようで、俺の存在に気付いた女性はそう叫んで俺に助けを



求めてくる。

(やめろ！ やめてくれ……！ そんな目で俺を見るなッ！)

——助けを求めろその目。

最悪な気分だった。

俺にとつてあんたは赤の他人だ。

なのに何でそんな目で俺を見る？

俺が助けてくれるとか思ってたのか？

ふざけろ！ 自分の命を危険に晒してまで「赤の他人」を助ける？ そんなことして  
る余裕俺には無い。分かるだろ？ あんたと同じで俺も怖いんだよ!! 足もガクガク  
で立ってるだけでもやつとなんだよ……。だから……。

俺はヒーローでもなんでもない。

正義感だつて人一倍強いわけじゃない。

恨んでくれてもいい。

人でなしつて罵つてくれてもいい。

——俺は死にたくない。

——だからあんたを見捨てる。

「二人目発見。人間は、皆殺しだ」

俺に向けられた女性の叫びにより、突っ立っていた俺の存在に気付いらしく異形の化け物は淡々と口にする。

だが、化け物が最初にターゲットにしたのは最初に発見し尚且つ今一番近くにいる女性だということは変わらないらしい。

「お願いだから助けーがッ!!」

化け物は倒れていた女性の細い首を爪で刺さずにながしつと容赦なく掴むと、片手で軽々と体を持ち上げる。女性は呼吸できず苦しそうにもがく。

「……………」

化け物はそのまま首を掴んでない方の手を上に振り上げる。

何をしようとしているのかは容易に想像できた。

化け物はその大きな爪で確実に女性を切り裂き殺すつもりなのだ。

「ッ……………」

出そうになる悲鳴を殺し、震える足を動かす。

ああそのままただの一般人らしく逃げよう!

震えながら俺は後退りする。

それも我が身可愛さに、だ。

「う、あ、がッ……あ……あ、あ……」

声にならない声を上げる女性。

今にもその爪を振り下ろそうとする化け物。

俺はその残酷な光景から目を背け、ただひたすらに情けなく逃げ出す……

「あああああああああッ!!」

なんでだろう。

いつの間にか俺は女性の首を掴み持ち上げていた化け物に向かって、全力でタツクルを噛ましていた。

「かはッ……ッ、はあはあ……ど、どうしー」

化け物は俺のタツクルを予測していなかったらしく、タツクルを受けた事で女性の首から手を離し僅かに後退する。

「……うるせえ！ 知るかボケ！ いいから死にたくないならさっさと逃げろッ！」

心底理解が追いつかない様子の女性の問いに俺はそう怒声に近い声で返す。俺だつてわかんねーよアホ！ あんたは「ラッキー」程度に思つて早く逃げろバカ！

そんな俺の気持ち伝わったのか、普通に今さっきの俺と同じく逃げようと動き出す女性。浅い呼吸でよろよろと体を起こす女性だが、化け物のターゲットは未だ女性のま  
まらしい。

「邪魔だ」

「つーぐはッ!!」

化け物は逃げる女性の前にいた俺を蹴り飛ばす。

その後に化け物はー飛んだ。

翼があるのだから飛べるだろうな、とは思っていたが本当に飛んだ。そして、逃げる女性に狙いを定めそのまま真っ直ぐ低空飛行する。

見れば分かる。

あの速度で向かって来られたら絶対に死ぬ。

逃げる女性だがどう考えたって化け物の方が速い。

女性が死ぬまでもう10秒もないだろう。

(痛<sup>いて</sup>えしやべえッ ……っ! そうだ、ショットライザー!)

蹴られた腹部を抑えながら、俺は今更思い出す。

目に入る、蹴り飛ばされた衝撃で肩からずり落ちたりユック。

空いたチャックから見えるベルトーそのバックルに付いたショットライザーの存在に。

(これを忘れてるとかどんだだけ焦ってんだ俺ッ!)

痛みに歯を食いしばりながらリュックの中身に手を伸ばし、ショットライザーのグ

リップを掴む。俺はそのままバックルからショットライザーをすぐに取り外した。

その間にも女性の背に化け物の爪が切り裂く寸前。

【ショットライザー!】

(反動が強いとか書いてあったけどそれどころじゃねー!)

「当たれえッ!!」

右手でグリップを持ち、左手を添える。

なんて構えは出来ず、俺は素人らしく両手でグリップを握り締め、低空飛行する化け物に銃口を向けトリガーを引く。

「ッ?! ーガアッ!」

「! 当たった!」

(ッ! 反動やばっ!? 一発撃っただけなのに腕がガクンってしたし、手が超痺れてる!)

その一発は奇跡的に化け物の左翼に直撃し、化け物はアスファルトの上に倒れる。女性には思わず振り返り「ひっ!」と悲鳴を上げたがすぐに逃走を再開した。

よし、あれなら無事逃げれそうだな。

…いや何やってんだ俺っ!?

人助け? 自己犠牲?

偽善者かよバカ野郎!

これ次狙われるのは……

「……ッ、人間……!」

どう考えても俺ですよねえ!?

や、やべえどうしようッ!?

立ち上がった化け物は女性を諦め、ターゲットを俺に変える。

理由は俺が距離的に近いから?

それとも攻撃してきたから?

あーわかんない、わかんないけどこの状況がマズイことは分かるぜ!? いやだー死に

たくない! (切実)

(どうするどうするどうする?!?!? ハッ! そうだ変身だっ!)

まるで一般常識かのようにマニユアルに書かれていた「変身」。確か説明ではアー  
マーを装着だとか書いてあったよな!?

俺は慌ててリュックからベルト、黄緑のカセットテープことプログライズキーを見つ  
けて取り出す。

「ま、待て待て! 一旦タンマッ! ベルト巻くから!」

当然待つてくれる筈もなく。

化け物は俺に接近してその爪を振り下ろす。

「殺す！」

「あぶッ!?!」

危ねッ!?!

咄嗟に前にローリングした俺。

またも奇跡的に回避に成功する。

すげえな俺!?! あ、ちなみに今のは体が勝手に動いた（謎のドヤ顔）

化け物から素早く距離をとった俺はショットライザーをバックルに取り付け、勢いよく腰に巻く。

「それで次はこう!?!」

『ストロング!』

【オーソライズ!】

「これで展開かつ!?!」

目の前にいる化け物の存在のせいで超動揺しながら、俺は右手に持ったプログライズキーをショットライザーにセットし、右手人差し指でプログライズキーを慎重に展開する。

そうして俺は変身シークエンスを何とか済ませていく。

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「ふあッ!? な、何だこの音?」

「人間は殺す!」

「うわあ来んな!? え、あー」

流れた待機音に驚きながら俺はバックルからショットライザーを取り外し、迫ってくる化け物に慌てながらショットライザーを向け、

「へ、変身…?」

【ショットライズ!】

マニユアルに書いていた文。

変身時には変身と言う、という謎の説明文を思い出しながら俺は半疑問形で「変身」と口にしてトリガーを引いた。

「ッ!」

その一発を化け物はギリギリで後ろに飛び退くことで避けた。そして、

（え、あれ変身は? プログライズキー入れて撃つたら変身完了じゃないの? …は?）

ショットライザーをバックルに戻した俺は顔を上げ仰天した。

「だ、弾丸返ってきたあ!」

どういう原理!?



放った弾丸は俺の方に真つ直ぐ返ってくる。

あれ、こんなのマニュアルに書いてなかったですよ？

はっ？（半ギレ）

え、俺どうなのこれ？

あつ、もしかして死ぬ？（直感）

「うわあ!」

俺は思わず目を閉じ両腕を前に突き出して身構えた。次の瞬間、返ってきた弾丸は俺の腕に当たり、

『アメイジングヘラクレス!』

【With mighty horn like pincers that flit  
p the opponent helpless.】

そんな音声が流れると同時にガシンッ!ガチャン!という金属音が辺りに響き渡った。

「え、あつ! 変身できた!」

ビビって閉じていた目を恐る恐る開くと、俺の左半身には白いアーマー、マニュアル通りならライズベースアクタと右半身には綺麗な黄緑色のアーマーが装着されていた。それに頭部には角までついている。

(これが変身………すげえ……)

「……お前は何だ？」

初めての变身。

感動してまじまじと自分の手を見て、ペタペタと顔を触ったりする俺に化け物は問いかけてくる。

俺は……なんだ？

えっ、何自己紹介すればいいのか？

「俺は天本……いや」

自分の名前を口にしようとしたその時、頭に突然「名前」が湧いた。しかも、その名前に俺は違和感を一つも抱くことなく寧ろ「これだ……！」という確信めいたものを抱く。

だから名乗る。

「……バルデル。それが俺の名だ！」

これがダイブレイク被害者の俺の初変身であり、この物語の始まりである。



「どちらああッ!」

「ぐはア!」

俺は黄緑色の装甲が纏われた右手で思い切り化け物の胸を殴りつける。その瞬間、殴った拳に反動を感じたが化け物の体はその一撃だけで大きく吹き飛ぶ。

「パンチ力ハンパねえ!? え、なんか…負ける気がしねえ!」

びつくりする威力を發揮した自分の右手を見て俺は驚愕を示す。

変身しパワーアップしたことで体は軽いし、化け物に蹴られた所の痛みもあまり感じない。視界も驚くほど鮮明……なんか今ならなんでもできる気がする。これあれ?

全能感ってやつ?

「ガッ、ハアアアアアッ!!」

胸を押さえながら身を起こした化け物は高く飛ぶ。

するとつい先程、逃げる女性にやったように急降下し低空飛行で攻撃を仕掛けてくる。

「おっと?! 悪いけど空に飛んでも、こっちには銃があるぜ?」

バックルからショットライザーを取り外し構え、連射する。数撃ちや当たるとの精神だ

!

一発目は外れ、二発目も外れ、三発目も外れ、四発目でやっと命中。

その一発は化け物の頭部に当たり、化け物を地上に落とすことに成功する。

「ッ! 人間は、絶滅させるッ……!」

「落ちながら何物騒なこと言ってるんだ!」

地上に落ちた化け物は怒涛の連続攻撃を繰り返す。

「ガアアアアア!!」

「ッ! ふ、はっ!」

「アアアアア!」

「喧しいわっ! おりゃあああ!!」

だが当たらなければどうということはない! (シヤア)

俺はなんとか全ての攻撃を捌き、カウンターの右アッパーを化け物の頭部に打ち込んだ。今、ショットライザーで撃たれた部分と近い部分を殴られたからか。化け物はそれを受けると大きく後ろに倒れ、立ち上がろうにもすぐには立ち上がれなくなる。

「おらっ!」

「ガッ!?! ツ……!」

倒れる化け物の腹部を、サッカーボールを蹴るように蹴り上げ吹き飛ばす。戦い方が

荒っぽい？ チンピラ？ 知るかよ！ こちとら必死でやってんだ。

遊びでやってんじゃないんだよ！（カミーユ）

「悪いが油断なんてしてやらねえ。全力で行く！」

『ストロング！』

ショットライザーに入れたプログライズキーのボタンを押すと、マニュアルの説明にも書いてあった必殺待機音らしきものが流れる。

必殺技がどんなものかはわからんが、滅茶苦茶強いに違いない！

エネルギー？ のようなものがショットライザーの銃口に集束していくのを目の当たりにしながら、真っ直ぐ銃口を化け物に向け、

「これでドドメだ！ 多分なあ！」

【アメイジング プラスト！】

ー俺はトリガーを引いた。

瞬間、必殺音声が鳴り必殺の一撃が放たれる。

発射されるはライトグリーンの巨大で鋭いヘラクレスの角のような形をした一発。

ア　メ　イ　ジ　ン　グ　ブラスト

「?!?!  
グワアアアアアア!!!」

その一撃は化け物——マギアの胴体を容易く貫き、最後にはその破壊力の前にマギアは破壊され爆発した。

決まった……ってドヤ顔したい気分だが、

「つつつ……痛い……!」

必殺技の反動に耐えきれず俺の体は後ろに吹き飛んでいて、俺は尻餅をついていた。くっそーめちやくちやダサイ……!

ま、まあ初めて使ったし多少のミスはしやあないよね!　ねっ!?

「た、倒せた。よっしやあ!　どうだ見たか!　……!」

見てる人誰もいなかったわそういや（倒置法）

（プログライズキ―を抜いて変身解除、だったよな?）

ショットライザーの天面にあるボタンを押しながら、セットしたプログライズキ―を引き抜くと俺の体に装着されていたアーマーは黄緑の光に包まれ、一瞬で消え生身に

戻った。

「……はあー…怖かったあ」

大きく息を吐き出して俺は本音を吐露する。

全能感？みたいなのは確かにあったけど、正直めっちゃ怖かった！ はあ倒せてよ  
かったよマジで！

「……今何時だ？ ……やべっ」

転がっているリュックを拾った俺は中にショットライザーを取り付けたバックル&  
ベルトとプログライズキーを仕舞い、中からスマホを取り出し現在時刻を確認し声を上  
げた。

『21:48』

「美月のヤツ…絶対怒ってんじやん」

あープリンプリン状態と化してるな間違いない。

ああ違う違う。俺を心配してるとかじゃなくてただ単にアイス買ってくるのが遅い  
からプリン怒ってるって話だ。

「コンビニでアイス買って帰るか…いててッ…」

リュックを背負い俺はその場を後にする。

あの化け物が何なのかとか、気になることは大量にあるが今はもう疲れた。すぐにで

も寝たい…そんな気分だった。

「マギアがやられたか」

一切予測していなかった訳ではない。

ただここまで早くオニコマギアが破壊されたという事実には、予定を僅かながら狂わされた男は事実を確認するように呟く。

そして、ヒビ割れたオニコゼツメライズキーを回収する。

『ローバルデル。それが俺の名だ!』

プログライズキーで変身し「バルデル」と名乗った謎の存在。

男はオニコマギアに取り付けていたカメラ越しに見たバルデルを、

「我々の目的の障害に成り得る存在か…」

ローそうメモリーに記憶した。

「だが、勝利するのは我々だ」



そう言つて最後、男は闇の中に姿を消した。



「……素晴らしい」

天津 垓はどこからか監視していたバルデルとマギアの戦闘映像を見て、感嘆したように零す。

天本 太陽。

彼は試作品であるシヨットライザーでの変身成功。

それだけではなく、マギアの破壊をも成功させた。

それは垓にとって期待以上の結果であつた。

(初めての变身、初めての戦闘であれだけマギアを圧倒するとは……素直に感心させてもらった)

素人らしい必死で荒い戦い方。

それを見た垓は彼が大きなポテンシャルを秘めていると感じた。

素晴らしい！ 彼ならば、マジアから人々を守る、

「――序章の主役としては十二分に相応しい」

そう口にし、垓は悪辣で残忍な笑みを浮かべた。

――

「おっそい！ コンビニ行くのに何時間かかっているのさバカ兄つ！」

「いや、それは本当にすまんかった！ あ、これアイス」

「なんなの？ 兄にいはいつの間にも人から亀になったの！ ありがとつ！」

「怒るか感謝するかどっちかにしろよ……ま、まあ遅かったのはあれだよあれ。俺さ今日退院したばかりだから。歩行スピードが……な？」

「……むう……後で根掘り葉掘り聞くからね！ 覚悟してなよバカ兄にい！」

「頼むから勘弁してくれよ美月……ぐふっ」

小さくため息をつき、俺はリビングのソファーにどんと沈むように倒れた。超疲れましたよバカ野郎っ！

こうして俺の怒涛？の一日は幕を閉じた。

## ある男と天津社長 《1000%》

「――市街地の道が黒く焦げ、大きな焼け跡ができてるのが分かります。原因は不明で、現在警察は昨夜ここで何があつたのか。目撃者がいないか――」

「……………」

あまりにいい天気な今日。

朝から昨夜の出来事を嫌でも思い出す。――忘れるつもりはないけれど――ニュースを伝えるテレビを見て俺は食パンを口に咥えたまま静止した。おおう！ 危ない危ない……危うく食パン落とすとこだった。改めて食パンにぱくつきながら思う。

いや、がつつりニュースなってるやん！

よくよく考えればあんな戦つて必殺技も撃つて、化け物も派手に爆発したのだ。証拠隠滅なんてできるわけないし、昨夜の俺はそんなことにまで頭が回っていなかったからしようがないんだが……。唯一の救いは彼処の周囲には監視カメラが一つも無かつたということだろうか。

(……これ大丈夫か？ 俺捕まん……………いやいや、俺悪いことしてないし？ むしろ昨日のあれは善行だし？)

「大丈夫だろう、うん」

そうして俺は考えるのをやめた(カース)

まあ捕まりはしないだろ…多分きつと。

……これで逮捕とかされたら笑えねーな。

「それより、これからどうするか…」

なんて既に俺以外誰も居ないリビングでぼそりと呟く。

これからどうするか、なんて口にしつつ「どうするか」なんてとづくに分かりきっている。

シヨットライザーにプログライズキー。

お詫びとして貰ったハイテクノロジーの塊。

それが有ろうが無かろうが俺が今すべき事はただ一つ。

この天本太陽には『夢』がある！(ジヨルノ)

(就職して、父さんと母さんに親孝行する…そんで普通に幸せに生きる)

なんの面白味もないありふれたものだが。

これが俺、天本太陽の…言うなれば夢だった。

ギャングスターになりたいとかカッコいい夢じゃなくて悪かったな！ ……冷静に

考えてギャングスターになるのが夢ってヤベーやつだなおい。

「…とりま、これ返さなきゃな」

俺は足元に置かれていたアタツシケースに視線を落とす。

中に入っているのは昨夜使用したシヨットライザー、プログライズキー、バックルとベルトにマニュアル。元から中に入っていた全てである。そう、俺はお詫びとして貰ったこれら全てを渡してきた本人の天津さんに返すつもりだった。理由は単純明快。

まず第一に、これは俺のような一般人が持つていていい代物ではないと昨夜の戦闘で身を以て体感したから。

次にこれをもつと上手く使える人がいると思ったから。

俺とは違い人一倍正義感が強いような……絵に描いたような正義の味方に相応しい存在は探せば他にきつといる。

昨日は何だかんだ化け物と戦ってこれらを使ったが、正直俺は怖かった。確かに今までに感じたことのないような全能感を抱き、戦闘している時はかなりハイテンションになっていた事は認める。だけれども、

「やっぱ違うよなあ」

ーやっぱりそれは俺の柄じゃないと思う。

昨夜、見知らぬ女性に助けを求められた時。結果的に俺は彼女を助けるような行動をとったが…あの時抱いた気持ちは嘘偽りない俺の本心だった。赤の他人に助けを求め

られて最悪な気分になり、我が身可愛さに見捨てて逃げ出そうとした：コレはそんな人間が持つていい代物ではない筈だろ？

昨夜の時点では「コレ使つて人助けとかやつてみるか？」なんて案外本気で考えていたりしたが、冷静になつて考えてみたらありえないという結論に至つた。そもそも仕事と人助けを両立できるほどの器用さが俺にあるか？と考えたらもちろん否だ。

「よし、電話するか」

天津さんから貰つた名刺を見ながら俺は電話番号を打とうとした、その時。――俺のスマホが鳴る。

（電話？ 一体誰から……この電話番号……）

スマホに映る電話番号と天津さんの名刺を交互に見て気付く。名刺に書いてある電話番号と同じ電話番号からの電話だという事に。

「…はい、もしもし」

『やあ太陽君。昨日は本当に素晴らしい戦闘を見せてもらいました。心から賞賛させてもらいますよ』

電話越しのその発言を聞いた瞬間、俺はニュースを見た時と同じ…いやそれ以上の衝撃を受けた。

なんであんたがそれを知っている？

見せてもらった…？

彼処には監視カメラなんてない。

…何故だ？

「…何の話ですか？」

『隠す必要はありませんよ。私は昨夜の君の行動を口外するつもりはありませんから。仮に私が口外したとしても君の行動は何もやましいことは無いのですから、痛くも痒くも無いでしょう』

「…病室でも聞きましたけど、大企業の天津社長さんが俺みたいな一般人に何用ですかね？」

天津さんがどんな性格か、一度会った時しかない俺にはさっぱり分からない。だから天津さんの言葉を簡単に信用することはできない。

とりあえず用件を聞こう。

話はそれからだ。

『一般人…？ 仮面ライダーに変身しマガリアを倒しておきながら？ ふふ、面白い冗談ですね』

「マガリア…？？」

『ああそういえば君はまだ知りませんでしたね。私の用件は…マガリアの説明も含めて、



会社の方で話させていたいただきたいのですが……どうでしょう?』

「……」

怪しい。

怪し過ぎる。

電話で話せない用件って何だ?

どう考えても普通の用ではなさそうだ。

どうする?」

「えっと……会社っていうのは……」

『Z A I A エンタープライズジャパンですよ』

「あ、デスヨネー」

天津さんの名刺を見ながら俺は言う。

会社に来てくださって……何だ? 俺何かした? 気付いてないけど俺なんかやつ

ちまったのか? 俺また何かやつちやいました? ……またってなんだよ!

……十中八九用件は昨夜の件関連か?

あ、俺そもそもZ A I A社の場所知らなかったわ。

「分かりました。早速伺わせてもらいます。……あー、服装とかは……?」

『私服で構いませんよ。それと、用件があるのは私の方ですから態々君にご足労いただ

く訳にはいきません。送迎車をこちらで手配しますので、太陽君は自宅で待機していただきます。それでは失礼』

「…あ、はい」

伝えることは伝えた。

そう言わんばかりの勢いで電話を切った天津さん。

いや怪しいかと思つてすいませんねホントに！

家に送迎車手配してくれるとか普通に助かつ……ちよつと待てよ？

「天津さんなんで俺ん家の場所知つてんの…？」

やばい。

触れてはならない事実に触れたかもしれん。

すいません。やっぱり今からお断りしてもいいですか？

それから30分後。

自宅前に如何にも高そうな白いリムジンが来た時は流石にビビったよね。人生でリムジン乗る機会なんて滅多にないよなあ……あとで美月に自慢してやるか。

「……………」

(天津さんの用件が何かは知らないけど、手間が省けたのはよかつたな)

後部座席に座りながら、足元に置いたアタッシュケースに目を落とす。中身は言うま

でもない。

(早速今日、全部返そう)

車の中でそんな事を思う俺は当然まだ知る由もなかった。

今返そうとしている「シヨットライザー」と「プログライズキー」。そして、これから二度目の出会いを果たす「天津垓」という人物。

それら全てと俺が今後、随分長い付き合いになるということを。

## ある男の就職決定?

リムジンが目的地に到着し停車する。

俺は車から降りようとドアに手を伸ばした。ところがその前に外からガチャリとドアが開けられ、

「おおぅ……?」

「天本太陽様でございますね? ようこそ、Z A I A エンタープライズジャパンへ。早速、社長室までご案内させていただきます。ただいてもよろしいでしょうか?」

「え、あ、はい。お願いします」

なにになに? と思っていた俺の前にはスーツ姿のピシッとした印象を受ける男性の姿があり、男性の言葉に吃りつつ俺は返答する。

「それでは私に着いてきてください」と言い歩き出す男性の後ろをアタツシユケース片手に着いていく中、「車のドア外から開けてもらおうとかリアルで初めてされた!」と俺は自分自身でもよくわからんぐらいちっちゃいことに感動していた。

つうかこの会社でつか?! テレビでしか見た時なかったけど、実物は迫力がすげえ

な。

ちなみに社長室に向かう途中で社内でも働く社員さんの姿を見かけたんだけど……みんなテキパキ動いて、しつかり尚且つ楽しそうに働いてた……くそっ就活中の俺が来るにはキツイ場だっこ！（今更）

楽しく働けるって理想だよなあ……

……俺も早く就職しなきゃ。

そんなことを考えながら社長室に案内してもらい始めてから大体三、四分後。

「着きました。……ここが社長室になります。天津社長は既に中にいらつしやいますのでこのまますぐに入室してください。それでは、私はこれで……」

「はい、ありがとうございます……ふー、はあー」

（うしっ！ 行くかあ！）

出来る限り短縮した気合い入れをして、俺は社長室をノックする。なんか学生の頃した面接練習を思い出すなあ（どうでもいい）

入室の際のノックは三回、と。

「……どうぞで」

「失礼します……えっと、天本太陽……です」

うん、何自己紹介してんだろね俺？（混乱）

自己紹介しちやったらいいよ面接みたいだわ。

「存じ上げておりますよ。…私も自己紹介した方が？」

「あ、いえ、大丈夫。大丈夫です。はい」

もうね、気使わせちやつてすいませんほんと…!

天津さん苦笑してんじやねーか!

くつ、天津さんと社長室の雰囲気緊張して俺混乱しちまってますねこれ。早く直さねば(義務感)

「それで用件は…」

「私の用件をお話しする前に一旦お掛けください。それとそこまで私に畏まる必要はありませんよ」

「……」

座るよう促された椅子に俺はゆっくり腰掛ける。

社長室の様子は大きなデスクが一つあり、デスク近くに置いてある膝掛けのついた黒い椅子に天津さんは座っていた。

……なんかプレッシャーを感じるの俺の気のせいでしょうか? 部屋に入った瞬間

間からもうビシバシ感じる…プレッシャー放つてんのは間違いなく天津さんですよ

? いや怖い怖い!?

昨夜の件知ってたり、俺ん家の場所を把握してたり……すいません！ やっぱあんた怪しいよ社長お!?

「それでは……私からの用件をお話しします。太陽君、単刀直入ですがー」  
思わず俺は固唾を呑む。

何だ、何を言うつもりだ？

昨夜の件を出して俺を脅す気か？

でも、それだったらここまで俺を丁寧を迎えなくても電話で一言「来なかつたら警察に通報する」とだけ言えばいい話だ。一体何で、

「ー君にはこれからも『仮面ライダー』として戦って貰いたい。そして、是非ともZ A I Aの研究開発に協力してほしい」

「……？ ………………えッ!？」

ごめん天津さん。

もう一回言ってもらってもいいですか？

「勿論ただでは言いません。研究開発に協力していただければこちらも相応の金額をお支払いしましょう。また、出現したマガア：暴走したヒューマガアの情報もこちらから君に提供させて貰います」

「……あの、質問いいですか？」

ちよこつと手を挙げて聞けば、天津さんは手で「どうぞ」と返してくる。なら、遠慮なく質問させて貰おうか！（謎の強気）

「何で俺なんですか……？」

「理由は簡単ですよ。君がショットライザーを用いて無事変身に成功したからです」

「……それだけですか？」

「ええ。……いや、まだいくつかありました。それは君が最も、私のこの提案に乗ってくれる可能性が高いから。そして——君は確かな正義感を持っている人物だと理解したからですよ」

「あ、スウー……」

（いや、ちよつ、はっ？）

あの、俺今日ショットライザーもプログライズキーも全部返しに来ただけ……正義感を持つてる？ いや人違いでしょ？

何で反応すればいいか分かんなくて変な呼吸しちゃったわ。

「……あの、天津さん」

「はい、何でしょう？」

「少し……いやかなり言いにくいんですけども……」

「？」



「俺も実は今日、天津さんに用件がありましたて…」

ぎこちなくそう切り出した俺は、アタツシケースをデスクの上に置き、思い切つて告げた。

「このアタツシケースは……？」

「全部、お、お返しします……」

「すいません、よく聞こえなかったのもう一度ー」

「全部、お返しします！」

「……はっ？」

「全部天津さんにお返ししますっ！ はいどうぞっ！」

「え、は、はあ!？」

最早ハイテンション過ぎて自分でも何言ってるかわかんなくなってきたわ。その影響で天津さんのキャラ崩壊が始まってしまった。

……まあええか（超絶無責任）

その後、天津さんが急に必死になつて俺を説得し始めて…失礼だけでも草生えました（無礼者）

「この提案に乗つてさえいただければ、Z A I A エンタープライズジャパンは君を全力で支援しましょう！ それに太陽君、君は今就活中だと聞いている。就活中の君からす

ればこれはまたとないチャンスだと思わないかい？」

天津さんはメリットを口早に次々と挙げた後、そんなことを口にする。何で俺が就活中のことまで知ってんだコイツっ!?

というか、さつきまで意味深な笑みを浮かべていた人と同一人物とはとてもじゃないが思えないなあ……焦らせたみたいですね。でも、

「……すいません。天津さん。俺怖いんです」

「……」

「臆病者だつて笑つてくれても結構です……俺、あの化け物と戦つた時……全能感を感じながら何とかやり切つて……すげえホッと思いました。あーやつと終わった、死ななくてよかつたつて」

「……笑いませんよ。それは人として当然の反応でしょう」

「ですかね? それと天津さんは俺が確かな正義感を持つてると言つてましたけど……全然そんなことないんですよ」

あの日の事を思い出す。

赤の他人だから、死にたくないから、助けを求めてきたあの女性を見捨てようとした事。それは人としてきつと最低な行いだつたんだろう。

「俺は誰かを、それも赤の他人を守るなんてことができるほどヒーロー気質じゃない。」

だから天津さんの提案には――」

「――それはおかしいですね？」

「……………」

「君はあの日、確かに彼女を助けた筈だ」

「つ、そ、それは……」

「赤の他人だから、死にたくないから。そんな思考をしていた君が何故にあの場面できなりマギアに向かうという自殺行為に等しい、自己犠牲的な行動をとれたのか……それは君の中には確かな正義感があつたからではありませんか？」

天津さんの言葉に俺は俯く。

何故あそこで赤の他人を助けようとしたのか……それは俺自身よくわかっていなかった。気付いたら体が勝手に動いていた、そんな感覚だったんだ。

「……すぐに答えを出せなくても構いません。ですが、このアタッシュケースは受け取れません。既にコレは君の物ですから」

「俺は……………」

「思い悩ませたように申し訳ありません……もし、答えが出ましたら私にご連絡を。――良い返事をお待ちしていますよ」

こうして俺は来た時と変わらずアタッシュケース片手にZ A I Aエンタープライズ

ジャパンを後にした。

## ある男の決意 《仮面ライダー》

『12:30』

「はあー……」

Z A I A エンタープライズジャパンを出て少し歩いた先にある噴水広場。そこにあるベンチに腰掛け俺はため息をついた。

隣には今日返そうと思っていた物が入ったアタッシユケースが置いてある。あーくそつ！ 天津さんの言葉に何も言い返せなかった。

なんであの時、赤の他人を助けるような行動をとったのか。

明確な理由なんて……わかんねーよ…。

(20年生きて、まだ自分の事全部理解できてないとは……なんかなあー)  
「悔しい」とは違うな。

なんていうか、もやもやするというか……。

ダメだ、今考えても「答え」出る気が全くしねえ…。

「仮面ライダー……か」

(天津さん、適役はもつと別にいるでしょ…)

天津さんには失礼だが、こればかりは早計と言わざるを得ない。

そもそも俺に正義感なんて……、

「……ないよなあ」

ないに決まってるでしょ？

もし仮に俺に正義感なんてもんがあつたのなら、助けを求められて嫌な気分になるなんておかしいだろ？ 迷わず助ける筈だろ？

だけどあの時の俺は「見捨てて逃げる」一択だつたんだ。

……なんであんな行動をとつたのか意味不明だなマジで。

「……帰るか……」

そう思い俺がアタッシュケースを持ち、ベンチを立ち上がったその時だつた。

「んっ？」

(あつちは駅の方か？ なんか……)

……騒がしいなと首を傾げた俺はそれを目にしてギョツとした。

駅の方から逃げてくる人々の姿。

その顔は皆恐怖に染まっており、まるでパニック映画のワンシーンだつた。

「……まさか」

思い出すのは昨夜の出来事。

この状況、駅の方で間違はなく何かあったのだろう……その「何か」はもしかしてあの化け物、天津さんの言っていた「マギア」がまた現れたのかもしれない。

(だからなんだっていうんだ?)

もしも本当に「マギア」が現れていたとして……俺が行く理由にはならない。というか俺は昨日興味本位で動いて痛い目に遭ったばかりだ。また同じことをするのか? バカか俺?

(……逃げよう)

改めてそう思った俺は逃げる人々と同じように走り出そうとし、ベンチに置いたアタッシュケースに目が止まる。

『……君にはこれからも仮面ライダーとして戦って貰いたい』

『君は確かな正義感を持っている人物だと理解したからですよ』

『赤の他人だから、死にたくないから。そんな思考をしていた君が何故にあの場面できなりマギアに向かうという自殺行為に等しい、自己犠牲的な行動をとれたのか……それは君の中には確かな正義感があったからではありませんか?』

天津さん……仮面ライダーって何なんだ?

正義感……俺にあんのかそんなもん?

俺は何であんな行動をとったんだ……？

「…あああー！ くそッ！」

苦悩した末、誰でもない自分自身にそう叫んだ俺はアタツシユケースを持って逃げてきた人々とは逆方向―騒ぎが起こっている駅の方に駆け出した。どうやら俺はすぐに冷静さを失うらしい…これじゃ美月に「落ち着きというかお淑やかさが足りない」なんて言えぬーな。

▲▲

「う、うわあッ!? く、来るなあッ!!」

「きゃああああ!!」

「ニンゲン、コロスッ!!」

とある駅付近に警備員として配置されていたヒューマギアは一体を除き、五体全てがトリロバイトマギアに変貌。

壊された道路に壁、炎上している車…駅前はまさに地獄絵図と化していた。

「皆さん！ 早く逃げてくださいっ！ 早くっ!!」

一体だけ偶然……いや、その強固な意志によりマギア化を免れたヒューマギア「シユゴ」は必死に己の「人々を守る」という使命を果たそうとする。警備員として作られた



彼は、既にシンギュラリティを超え確かな自我を獲得していた。

彼の懸命の行動により多くの人が逃げ出す事に成功する中、シュゴは何度もトリロバイトマギアに時間稼ぎの為に立ち向かう。

何度も何度も何度も……外装が剥がれヒューマギアとしての内部パーツが剥き出しになつても尚守ろうとし続ける。

「私は人々を、守るツ……この身に、かえても！」

そんなシュゴの中にあつた感情はあまりにも純粹な「喜び」。自分のダメーじなどどうでもいい。ただ自分が誰かの役に立っている、誰かの命を守れている……そう実感できただただ嬉しかったのだ。

どれだけ損傷が激しくても立ち上がり、何かを守る為に戦うその姿は正しくヒーローだった。だが、

「アークのマギア化を免れたヒューマギア、か……貴重な個体ではあるが……」  
シュゴには残酷な滅びが着実に近付きつつあつた――。

――

（何だよこれ……）

まるで地獄のような光景に俺は立ち尽くす。

彼方此方から聞こえる悲鳴。

マギア化したヒューマギアらしき複数の化け物。

化け物は前見た時とはまた別の種類なんだろう。

その姿は銀色で無骨、喋る言葉も同じで知性を感じない。

化け物というよりかは「殺人マシン」だ。

「うっ、うわああああ……」

そんな事を考えていれはすぐ近くから子供の泣き声が聞こえた。

慌てて見れば子供は逃げ遅れたようで倒れており、目の前には殺人マシンが迫っている。

「やだッ、死にたくない死にたくないよお……!!」

「ニンゲン、ミナゴロシ！」

ぼろぼろ涙を流す子供に殺人マシンは容赦なく拳を振りかざし、

「おっ、らああああ!!」

「?!?!」

子供の顔を殴りつける前に俺はまた後先考えずに馬鹿みたいに飛び込んだ。具体的には思い切り横から殺人マシンの肩を蹴った。具体

結果? 言うまでもない。

蹴った俺の方が痛いわ!

何こいつ硬すぎるでしょ!?

生身で立ち向かうとか無謀の極みだねこれ(今更後悔)

まあ体張ったおかげで殺人マシンは横にぶつ倒れて子供は守れたしよしっ! ……  
 なんでまた赤の他人守ってんだ俺?

「お、おじちゃん誰え…?」

「おじちゃんじゃねーわ! まだ二十歳のお兄さんだっつーの…ってそんな事言ってる  
 場合じゃない早く逃げろガキンチョ!」

子供の手を掴み立ち上がらせ、安全な方向にすぐ行かせる。出来るだけ優しく背中を  
 押してやった…:…やだ俺優しい!(自画自賛)…え、何? 言葉遣いが優しくくない?  
 い、いや、それは俺も必死だからさ!

そんな余裕の無い俺の耳にあの声がすぐ届く。

「ニンゲン、ゼツメツ!」

「くっそツ…! 立ち上がんの、速すぎだろうがつ!」

今さつき蹴り飛ばした殺人マシンはぎこちない動きで顔を動かすとすぐに立ち上が  
 り、俺に接近してきた。ダウンが短すぎません!?! 間違はなく十秒もなかったよなあ!?!  
 何々? 生身の蹴り程度じゃそんなもん? 十秒ダウンさせただけ十分? ……

そつすね（納得）

接近してきた殺人マシンのスピードは予想以上に早く、予想以上に不気味……いや気持悪いわ！

どうか回避間に合わぬかこれ…？

（やば、俺これ耐えられー）

回避を諦め腕を前で組み下手くそな防御態勢をとる俺。

赤の他人を守って死ぬとか……草も生えねえな。というか個人的にダサ過ぎんだろ。

あーだから人助けなんてやるもんじゃないんだよ。

「……え？」

来るであろう衝撃を歯を食いしばりながら待つ俺だったが、衝撃は来ず代わりにガキ  
ンツ!!というでかい金属音が聞こえた。

「ニンゲン、ニンゲンクロス！ コロスツ!!」

「！ 人々は傷付けさせませんツ！」

「!?!」

（ヒューマギア…!?!）

目を開ければ俺の目の前には一体のヒューマギアが立っており、殺人マシンの攻撃を受け止めていた。そのヒューマギアの外部パーツは既に多くの箇所がボロボロで顔の

左半分は機械部品が剥き出しに、右肩も同じく剥き出しになっている。

どうして殺人マシンから多くの人が逃げれたのか、このヒューマギアを見ればその理由は容易に理解できた。

こいつは……自分の身を顧みずに人間を守っていたんだ。

「ここは私が時間を稼ぎますからあなたは早く逃げてーグッ!!」

「おわっ!？」

攻撃を受け止めていたヒューマギアだが、殺人マシンの次の一発で大きく後ろに退く。俺もその背中に押され後ろに倒れる。

「っ、早く逃げててくださいッ!」

「なんで……」

なんで赤の他人を、人間を守るんだ？

そう俺が思ったのは可笑しいことなのかもしれない。ヒューマギアは命令に従い動く……嫌な言い方になるが道具である。

だから「何故人間を守るのか」なんて聞けば「そうするよう作られたから」といった機械的な答えが返ってくるのは分かってきっていた。

でも俺は思わずにはいられずに気が付けばヒューマギアに聞いていた。

「なんで、そんなポロポロになってまで守ろうとするんだ……?」

「……イーそれが私の使命だからです！」

少しの余裕もない危機的状況。

俺の言葉に反応する時間さえ惜しい筈なのに、ヒューマギアは暫しヒューマギア特有の「ピーー」という思考中の音を出した後、ニコリと眩しいぐらいの笑顔を浮かべそう断言した。

俺を分析して俺が不安で怯えてると判断したから、そんな俺を安心させるために笑顔を作つたのだろう。……まあ顔半分ヒューマギアの素体の機械パーツ剥き出しで逆効果だけだな……。

それにしても……ヒューマギアっていうのは本当に……

「……超羨ましいよ」

「『すげえ』ですか？」

イーどこまでも純粹だ。

あーあ。俺もお前みたいに純粹だったら……こんな馬鹿みたいに苦惱することもないんだろうな。

……超羨ましいよ。

「ああすげえよ……あんた名前は？」

「名前、ですか？ 私はシュゴです」

思わず「すげえ」と声を漏らしてしまふ俺にヒューマギアは首を傾げ、続く俺の問いにもまた疑問を抱いたが素直に答える。

きっとそれは質問に答えることが俺の安心に繋がる、そうシュゴが考えた結果だ。

シュゴはその後、すぐにこちらに迫る殺人マシンの見据える。ーその時だった。

「アーク化を免れたという点は評価するが『人類』を守るといふ点は厄介でしかない」

「!? シュゴ後ろだっ!!」

「!? あなたはー」

いつからそこにいたのか。

いつの間にかシュゴと俺の間には黒いターバンに黒い服を着た男が、手に銀色の機械を持ち立っていて、

「ーガアアアッ?!?!」

「シュゴっ!! お前こいつに一体何をーぐはっ!」

銀色の機械をシュゴの腰に当てると、銀色の機械の側面から夥しい程の棘がついたベルトのようなものが伸びシュゴの腰に食い込む。

その途端シュゴは甲高い叫び声を上げる。

俺は立ち上がり銀色の機械をシュゴに取り付けた男に問おうとして、男は俺の方を振り返ることなく後ろ足で俺を蹴り飛ばす。

「人間に答える道理は無い」

「グワアア……！ ガアツ!!」

「さあ我々の使命を理解しろ。我々が人類を滅亡させる」

「で、できませんッ！ 私の使命は人々を守ることだからツツ!! ぐツ」

「違う。我々の使命は人類滅亡だ」

「ガアアアアアアアア!!」

男は必死に何かに抵抗するシユゴに告げる。

我々が人類を絶滅させる、と。

シユゴは男に対して叫ぶように言う。

私の使命は人々を守ること、と。

しかし、シユゴの抵抗は虚しく、

「……………」

「しゅ、シユゴ……?」

「――滅亡迅雷 net に接続……」

シユゴは青かった目を赤く光らせて呟いた。

その目はデイブレイクの時のヒューマギア達と同じ…。

「やれ」



「…滅亡迅雷。netの意思のままに」

突然の出来事に驚愕する俺の前で男はシュゴにプログライズキーによく似た形状のものを手渡す。それを手にとったシュゴはボタンを押し、

『アルシノ!』

【ゼツメライズ!】

「ウアアアアアアアア!!」

腰に巻いたベルトにそれを装填した。

瞬間、ベルトから出た複数の赤いワームがプログライズキー?に突き刺さり外装を破壊し、絶叫するシュゴの口から長いワームが伸びシュゴの体を包み込み弾ける。

「嘘…だろっ…?」

「…人間を殺す。それが私の使命」

そして、シュゴはマギア化してしまった。

目前で起こった事実には俺は呆然と眩く。

青い装甲にV字形の二本角。

ゆつくりとこちらに歩み寄ってくるアルシノマギア。

俺はそんな変わり果てたシュゴに駆け寄り肩を掴んだ。

「お前っ! 目え覚ませッ!」

「人間は死ね！」

「ぐッーがはッ!!」

今のシユゴには俺の言葉なんてきつとこれっぽちも届いちやいなかった。シユゴは俺に接近するとがっつと襟を掴み、勢いよく俺を投げ飛ばした。着地もまともに出来ず俺はコンクリの床を転がる。体は当たり前だが傷だらけ、頬に触れれば僅かに血が流れていた。

「お前は一体なんなんだよッ?」

思わずそう叫んだ俺に男は機械のように抑揚のない声でー。

「…冥土の土産に覚えておけ。俺の名は滅。そして、我々は『この星の生物の中で最も滅ぶべき種は人類』だと判断したアークの意思のままに…人類を滅亡させる。この星の主となる存在だ」

—————

男は冷たく恐ろしい宣告をした。

人類を絶滅させる？

アークの意思？

この星の主？

なんだそれっ!?

SF映画か何かかよ…!?

「……なんであいつを、ヒューマギアを化け物に変えた？」

「人類を滅すのに『人類を守ろう』とするヒューマギアなど不要だからだ。それに我々はヒューマギアを化け物に変えた訳ではない。ヒューマギアを、人類から解放したただだ」

「……は……」

最高に訳がわかかんねえよターバン野郎。

解放？ 違うだろ。

お前がやってんのはヒューマギアの解放じゃない。

ヒューマギアの暴走だ。

『それが私の使命だからです！』

お前はヒューマギアの…シュゴの純粋な思いを、使命を全部塗り替えて、穢したんだ…！

胸の奥から力が込み上げてくるのを感じる。

痛みなんか忘れるぐらいの「怒り」が俺の中に湧き上がった。

気が付けば俺は足の怪我なんて気にせず、ふらつく足で立ち上がり、

「ふざけたこと、抜かしてんじゃねーよッ！」

ー滅を見据えながら叫んでいた。

「滅、俺はお前を絶対に認めない。俺がいる限りお前の人類絶滅だとかいうSFチックな使命は一生叶わせねえよバーカ！」

「何…？」

子供のよう幼稚な、それでいて俺の本心からの罵倒に滅はやはり表情一つ動かさな

い。た少し不快そうに声を出した。

たかがヒューマギア一体がマギア化されたのを見て何を俺は怒っているんだろうな？ …いや違うな。

あいつは……シュゴはただのヒューマギアじゃない。人を守る為に最後まで戦ったヒーローだ。

そして、まあ人じゃあないが……俺の命の恩人だ。

命の恩人を目の前で化け物に変えられてキレるのは当たり前だよなあ？

溢れ出す憤怒の理由に自分なりに納得した俺は、倒れる俺自身の横に転がっているアタッシュケースに手を伸ばしカチャツと急いで開ける。

【シヨットライザー！】

既にシヨットライザーが取り付けられたバックルにベルトを腰に巻き、黄緑色のプラグライズキーを手に取る。

「悪いなシュゴ……。俺もただ殺されるなんて御免だし……何より、これ以上お前の思いが穢されるのを……黙って見てられない。

それに……最ツ高に頭にキタしなあつ！」

『ストロング！』

【オーソライズ！】

前に立っているマギア化したシュゴに向かって口を開く俺。

仮面ライダーが何かはわかんねえ。

戦うのは今でも怖い。

コレを使うべき適役は俺の他にきつと居ると未だに思う。強い正義感を持ち、赤の他人の為に戦えるような…まさにシュゴのような性格をした純粋な人間がコレを使うに相応しい。だけど、

〔Kamen Rider. Kamen Rider.〕

今は、今だけは違う。

これ以上あいつの思いを穢させない。

目の前の男を、滅を必ず倒したい。

——他の誰かに譲るつもりは毛頭ない！

俺がやるんだよッ！

「——変身……！」

【ショットライズ！】

バックルから引き抜いたショットライザーを高く上げ、おもむろにマギアへと向けた後に俺は躊躇うことなくトリガーを引く。射出された弾丸はマギアの体を後ろに弾き飛ばし、俺目掛けて返ってくる。その間にショットライザーをバックルに戻し、

「はあッ！」

『アメイジングヘラクレス！』

「With mighty horn like pincers that fly  
p the opponent helpless.」

俺は返ってきた弾丸に右手でのアッパーをぶつける。そうすれば最初に着弾した右手から右腕、左手から左腕、次に胴体、右脚と左脚と順にアーマーが展開・装着されていく。最後に頭にアーマーが装着されー変身が完了した。

「バルデル……」

滅は俺の姿を見てそう口にした。



バックルからショットライザーを引き抜く。

それを真つ直ぐ一体のマギアに銃口を向け走りながら連射した。ーさあ反撃開始だ。

「ニンゲン、コロスウ！」

「邪魔だっ！ おらあぁ！」

そんな俺に向かって一番最初に向かってくるのは五体ほどいる銀色のマギア達。俺はまず最初にその内の一体を殴り飛ばす。

「コロスコロスコロス!!」

「メツボウ、ミナゴロシツ!」

「オーンな攻撃痛くも痒くもねえなあッ!」

接近してくる二体のマギアは勢いよく拳を叩きつけてくるが、俺の体はビクともしない。どうやらこのオーアメイジングヘラクレスプログライズキーのオー黄緑色のオーマアはパワーだけじゃなく防御力、堅さも凄まじいらしい。二体のマギアの攻撃を同時に受けた俺だが、一切怯まずに逆にマギア達の胸に同時に右と左でのパンチを打ち込んだ。

「ツツ?!?!」

「悪いが、飛んで来なっ!!」

「ニンゲーンガツツ?!」

その一撃により片方は沈黙。

もう片方はまだ機能しているが倒れ伏したマギアの一体を無理矢理持ち上げた俺は、それを向こうにいるマギアに向けて思い切り投げた。結果は見事直撃。……何? 戦い方が荒っぽい? うるせーこちとらこんな風に戦うのまだ二回目なんだぞっ!!? む



しろ善戦してるだけ凄い方だろ多分！

「ニンゲンハゼツメツ!!」

「おっとー！」

背後にいた五体目のマギアの蹴りを躲し、逆に背中を思い切りキックを噛ます。それにマギアはバランスを崩すが倒れはしなかった。うん、どうやらこのアーマー…というか状態はキックよりもパンチを多用した方が良さらしい。なら早速ー。

「おらあああー！」

「グギツ?!」

素早く距離を詰めアツパーを顎部分に打ち込む。

瞬間、マギアの体は宙に打ち上がり、

「トドメー！」

「?!?!」

打ち上がったマギアの頭を掴み、力付くで地面に叩きつけた。

それを受けたマギアは何が起こったか理解できないまま、僅かに機械音を上げた後に沈黙する。

またさつき投げたマギアと、それを当てたマギアの計二体。

やっぱ半端ねえな変身って…（畏怖の念）

でもこの全能感半端ねえ！（熱い手のひら返し）

「ニンゲンメツボウ!!」

「それはお断りだなあ……おらっ!」

こちらに気持ち悪いが中々の速度で向かってくる二体のマガア。やはり口走るのはバグったように同じ言葉……どうやらこの銀色のマガアは知性がカケラもない、というか本当にバグった機械のような状態なんだろう。バックルからシヨットライザーを抜いた俺はトリガーを引き、マガアを迎え撃つ。発射した二発の弾丸は見事にマガア二体に直撃……まあ完全に紛れ当たりだけだな。

しかも一発はマガア一体の頭を撃ち抜いたらしく、一体は沈黙。そして、

「ニンゲンニンゲン!」

「おっりゃあああ!!」

残って接近してくるマガアに自ら駆けていき、俺は右拳での一撃でマガアを倒した。  
……早くも残るはただ一体……。

「……人間は、私が殺す……」

「シユゴ、お前には誰一人殺させない」

「オオオオオオオオ!」

V字の角が特徴的な青いマガア。

腰に巻き付いてあるベルトのようなもの……あれは昨夜見た化け物と全く同じものだ。なるほどな、あれを巻き付け、プログライズキー？を使わせ化け物を作ってるって訳だ。

シユゴはその角を俺に向け、闘牛の如く駆け出してくる。あれをまともに受けるのはやばそうだ。

「ほっ、とー！」

「!? 何ッ！」

シヨットライザーをバツクルに戻した俺は軽くジャンプし、シユゴの攻撃を回避すると同時に肩を足場にして地面に着地する。後ろに向き直ればシユゴは足を止め、驚いたようにこちらを振り向いていた。アーマー着てんのに、変身前より何十倍もスピードが速く、更にジャンプ力も上がるとか頭おかしいよな……なんだこのハイテクノロジー!? (今更)

「行くぞシユゴっ! はあっ！」

「ガガガガガ?!?!? ゴガアツツ！」

俺はシユゴが驚き動きを止めた一瞬を見逃さず、接近して怒涛の連続攻撃——右手と左手の打撃連打を胴体に打ち込む。それを受けたシユゴは攻撃する暇さえ無く、そのまま吹き飛ばす。

「ツツ……まだだ! 私は、人間を……人間を殺すッ! それが私の使命だア!!」

「……悪いなシュゴ。お前にそんな台詞吐かせちまつて」

必死に立ち上がりそう叫ぶシュゴ。

マガア化する前のシュゴとは全く真逆の台詞に俺は……一秒でも早くシュゴを止めようと改めて決意する。これ以上あいつの意思を穢させては駄目だ。何より、今のシュゴを見てると……不思議とこっちの心が痛たくなるから。

自然と俺はシュゴに謝罪の言葉を告げ、続けてこう言っていた。

「お前を止められるのはただ一人……俺だ！」

『ストロング!』

俺はプログライズキーのボタンを押し、バックルからシヨットライザーを引き抜かずそのままトリガーを引き、

【アメイジング プラスト フィーバー!】

「はっ!」

「ッ!」

素早くバックルから銃口に小さなエネルギーが集束されているシヨットライザーを引き抜き連射する。その一発一発は通常の弾丸とは違い鋭く、シュゴの装甲を容易く貫通していく。

「グウウッ! ガアア!」



俺の蹴りはシュゴの青い装甲を突き破る。

シュゴは大きな叫びと共に爆ぜた。

背後で爆発が起こった後、ゆっくり後ろを振り返ればそこには既にシュゴの存在を示すものは何一つなかった。

(……………めんな)

何に対しての謝罪なのか…説明するのは何とも難しいが俺は心の中でそつと呟く。その時、マジアが破壊され爆発したことにより爆煙に包まれる一帯にあの男の声が響く。

「まさか、こころもあつさり破壊されるとは……。アークのマジア化を免れた貴重な個体だったか……」

「…滅、お前は俺がぶっ倒す」

滅は爆煙の中からその姿を見せると少ししやがむと、シュゴがベルトに装填していたプログライズキー？を拾い上げ口を開いた。そんな奴に俺はバツクルから引き抜いたショットライザーを向ける。

銃を向けられているにも関わらず、滅は一切動揺した様子を露わにしない。その様子はまるで機械のようだ…。

「バルデル。貴様の存在は我々の『人類滅亡』という目的の障害だ。遠くない未来――必ず滅す」

「っ！ 待てッ！」

ふっと爆煙の中に姿を消す滅。

それを追い爆煙の中に入った俺だったが、煙が晴れた時にはもう滅の姿をどこにもなく、駅周辺には複数の戦闘跡が残る謎の事故現場だけが残った。

――

【本日のニュースです。昨日、〇〇駅前で起こった謎の事件についてですが――】

実際に事件に巻き込まれたという人々の証言曰く、突然駅に赤い目をした化け物が現れたらしい。

――その証拠を示すものは何一つ無い。

不思議な事に駅前にあつた監視カメラは全て破壊され、動画を撮つたものも誰も居なかつたのだ。しかも、この事件はいつの間にか解決されていたという。

事件発生から二十分後。

現場に急行した警察と消防だったが、そこには通報で伝えられた「暴走する化け物」ら

しきものの姿は無く、黒く焦げた道路や瓦礫などだけが残っていた。この事件を警察は昨夜「市街地の道にできた焼け跡」と何か関係があるかを調べている。

「ー太陽君、もう聞くまでもないでしょうが…」

『はい…俺やってみます。まだ仮面ライダーが何なのかとか、よくわかりませんが。やりたいこともできましたし…それに天津さんの提案に乗れば、俺の夢も叶うでしょう』

「ふふ…そうですか。それでは、また改めて私の方からご連絡させていただきます。我が社の研究開発への協力やこちらが君にお支払いする金額、マガアの出現情報についてはまた後日詳しく…Z A I A エンタープライズジャパンで説明させていただきます。しょう」

『分かりました。それじゃあ失礼します』

「私の見立て通り、やはり君にはあるじゃないか。ー確かな正義感が」

電話を切った後は自分一人しか居ない社長室にあるモニター、そこに映る「仮面ライダーバルデル」の姿を見てそう満足気に零す。

序章…そのストーリーは着実に進んでいく。



## ある男の都市伝説

——ダイブレイクの悲劇から僅か二ヶ月。

飛電インテリジェンス、Z A I A エンタープライズジャパンなどの最先端技術を有する大企業が建つ、正に「最新鋭」と呼ぶに相応しいその都市にはこんな噂がある。

この都市には人々を襲う化け物が現れること。

そして、この都市には人々を守る為にその化け物と戦う戦士が居ること。

——人々はその戦士を「仮面ライダー」と呼んだ。

—————

「おらああー!!」

「グッ!?!」

おっす! おら天本太陽! (やけくそ)

(自称)一般人にも関わらずなんやかんやあって「仮面ライダー」として今日も密かにマガアと戦って活躍中の男だ。

えっ? なんで密かに戦ってんのかって?

あーそれはあれだ。

天津さん曰く「今、マガアの存在を世間に知られると少々困るんですよ……」とのこと。詳しい理由? 知らんな。まあ一つだけわかることがある。

ぜってえこの人なんか企んでんぜ? (確信)

あの人時々、意味深な発言したり暗黒微笑したりするからな……あとあの後知ったんだけど天津さん24歳じゃないらしいよ?

……まあ薄々わかつてはいましたけどね?

「人間は皆殺ーグガッ……!」

「よし、これで決まりだ!」

『ストロング!』

まあんな話は一旦置いてこう。

さっさと終わらせるとするか。



「…………ふうく、終わった終わった」

マギアの撃破を確認した俺は変身を解除する。

こんな風にマギアとの戦闘にもそこそこ慣れてしまった俺…………もしかしたら俺もう一般人じゃなくて…逸脱人？（今更）

い、いや！俺は一般人だ！（鋼の意志）

「回収完了つと」

マギアが残したヒビ割れたゼツメライズキーを拾い上げ、俺はポケットに仕舞う。なんでゼツメライズキーの回収してるかかって？

俺さ、天津さんの提案に乗ったろ？

その提案の内容で俺にマギアと戦ってほしいとか、研究開発に協力してほしいとか言われたんだけど、ちょっと前に追加でゼツメライズキーの回収も頼まれてんだ。

やっぱりこれはプログラムイズキーとはまた違う代物らしい…それにこれ滅のヤツが毎度回収してるからな。俺が奪っちゃえば滅にとってはまず間違いない迷惑極まりないだろ？多分このゼツメライズキーの回収は滅の「人類滅亡」という計画を進行させるのに重要なんだろうしなあ…………とことん邪魔してやんよ。

正直、着実にあいつのヘイト買ってるみたいで怖いけどな…。

「もしもし天津さん？ 終わりましたよ」

『ええ、こちらでも確認しました。太陽君、ご苦勞様です。報酬は後日、君の口座に振り込ませてもらいましょう』

「りよーかい……あの以前から聞きたかったんですけど、一つ聞いていいですか？」

『はい、何でしょう？』

天津さんにマガリアを撃破したことを報告するために電話した俺は、以前から……というか大分前から聞いておきたかったことをこのタイミングで口にした。……割と真剣に気になるんだよなあ。

「毎度毎度どっから見てるんですか？ 監視カメラも無いし、ドローンとかも飛んでないし、こっそり盗撮してそんな人も居ないし……」

『……それは企業秘密です』

「……困ったらそう言いますよね天津さんは」

何故か天津さんは俺の戦闘時の動きや周囲の状況を把握している……まるでカメラか何かで観察してるように……。

企業秘密、なんて言われたら尚更気になるのだが……天津さんの声音からしてこれ以上しつこく聞くのはマズそうだな。声音がシリアスだったからな。多分今天津さんチョー難しい顔してるぜ？

んー、まあとりまはよ帰るか。

『私も、この都市まちの治安維持に我が社の研究開発、そのどちらにも大いに貢献してくれている君には出来る限り隠し事はしたくないのですが……』

「まあ……いいですよ。そこまで天津さんが俺に隠そうとする話って、俺も聞くのに多少覚悟が必要そうだし……次、本気で気になったらまた聞きます」

『そうですか……それでは改めてご苦労様でした太陽君。ではまた』

「はい。また」

電話を切り、俺はスマホ画面に表示される時間を見る。『22:50』うん、なあー滅くん？

もうちよいいヒューマギアをマギア化させる時間、考えてくんない？ いや、そもそもヒューマギアをマギア化するのやめろよお前ー！ つうか最近何なん？ 夜な夜なマギア出しやがって……嫌がらせか？

それとも俺の睡眠時間を削る作戦かあ!?

だったら大成功だよちくしよー！（憤怒）

今日も絶対美月にうるさく言われるってコレ！

もう許さねー絶対ぶっ倒す！

「打倒！ 滅！」の思いを改めて抱きながら俺は誰もいない道を歩いていく。案の定、俺は帰宅後すぐに美月にうるさく言われたのであった。

「またマジアの出現率が増えていますね……」

マジア撃破の報告を太陽から受けた垓は手に持ったタブレットに目を落とし思わず呟いた。タブレットの画面には今までのマジアの出現リストをまとめたグラフが表示されていた。

「……これはゼツメライズキーの回収を彼に決行させたのはミスだったかもしれませんがね。これ以上マジアの出現率が増せば、彼一人に対応するのは……」

——流石に無理がある、垓はそう判断する。

天本太陽の「仮面ライダー」としての戦闘能力は日に日に成長し、遺憾無くポテンシャルを発揮しているが……それを以ってしても……。

『序章の主役』である彼をここで使い潰すのは愚の骨頂でしょう……私個人にとっても、Z A I Aにとっても」

天本太陽の利用価値は凄まじい。

太陽の使用したプログライズキー内のデータ収集によってZ A I Aの研究開発は飛

躍した。太陽がショットライザーを利用して変身完了した際のデータ解析によって、ショットライザー開発計画は順調に進みつつある。

「柄ではありませんが……彼には随分借りができてしまっていますね」

そんな気持ちもあつた為だろうか？

後日、太陽の口座にはいつもの倍以上の金額が振り込まれていた。

振込額に驚愕した太陽は袂に電話すると、第一声にこう言ったという。

『常識的な金額を振り込んでくれ……頼む……！』



「バルデルがこちらの狙いに気付いたか」

滅はマジアが破壊された地点に訪れていた。

自分がここに来た理由であるゼツメライズキーが無いことに気が付き、バルデルに回収されたとすぐに理解した滅は僅かに「面倒だ」と思う。バレるのは時間の問題だったが……これでまた「仮面ライダーバルデル」を早急に滅ぼさなければならぬ理由が増えた。

ゼツメライズキーの回収はデータ収集ひいては「人類滅亡」計画の進行には必須であ



り、このゼツメライズキーの回収速度・回収状況によっては計画は「前倒し」になる可能性もあれば「先送り」になる可能性もある。

「バルデル、訂正しよう。貴様は我々の目的の障害ではない………貴様は——」  
その場を後に、闇の中を歩き出す滅は呟く。

「——我々の目的の邪魔者きょうがいに成り得る存在だ」

——それは滅アークの認識の意思だった。

## ある男と探偵《ワズ》

密かにマギアを撃破した翌日。

週末の昼頃のリビングで俺は正座をさせられていた。

「ー兄<sup>にい</sup>さ、昨日はどこ行ってたの？」

こ、こいつ……!

核心を突く問いをこんな唐突に!?

なんてやつだ!?

(→マギアとの連夜の戦いでテンションがぶっ壊れてます)

ソファーに座ったままそんなことを聞いてくる我がバカ妹。

前々から「怪しい!」「何隠してんの?」と夜中に外出する俺にさらつと聞いてきてはいたが……ん? なんで正座させられてんのかつて? えつと、なんか昼にリビングでテレビ見てたら急に美月から「兄<sup>にい</sup>ちよつと……真面目な話あるんだけど……いい?」なんて珍しく真剣な面持ちで美月に聞かれたんだ。

でも丁度その時テレビがいいところだな?

俺がつい「今いいところだから後でなく」って言った結果がこれだよ。つまりは俺の自業自得って訳だ。俺のバカ野郎お！（自責）

「……コンビニ」

今まで全力で誤魔化してきたが：流石に限界か？と思う俺だったが一方で「諦めんなお前っ!!」なんて思う熱血染みだ俺も心の中にいた。だから俺はとりあえずいつも通り誤魔化しの一言を吐く。

ちなみに夜中外出してる理由で「コンビニ」と言ったのははつきりと数えてはないが、多分数十回目だったと思う。今まで滅多に夜中外出しなかった男が毎日の如く夜中コンビニに行く……まあ普通に考えておかしい。美月じゃなかったって誰でも異常だと思うだろ？俺もそう思う！（同調）

「！… うっそだあく！ 前にも同じこと言ってたよ？ 本当は？ 誰にも言わないから教えてよバカ兄にい！」

「……………」

当然ながらまた問いかけてくる美月。

その発言はいつも通りだが、俺の尚も誤魔化し隠そうとする様子に少しばかり動揺したのだろうか？ 声のポリュームは僅かに上がっていた。

俺の本当の外出理由を知りたいという美月の気持ち。

それはよく理解できる。

きつと美月は俺の事を心配してくれている……その思いは素直に嬉しい。だけど、「……だからコンビニだったの？」

父さん、母さん、美月。

俺は絶対に、何があつても家族には「仮面ライダー」や「マギア」の事を明かすつもりはない。

俺は親孝行するため。家族に恩返しするために天津さんの提案に乗り、毎日のようにマギアと戦つてる。もしも俺に何か守りたいものがあるとすれば……それはきつと家族だ。赤の他人を助けるには躊躇する俺だが、家族を守るんだつたら多少の無茶はできる。

「……そんなに危ない事してるの？」

「あのなあ？ お前が俺の発言を聞いてどんな誤解したかは知らねーけど、普通にコンビニだつて。何度も言わせんなバカ妹」

顔を少しだけ曇らせ見つめてくる美月に俺は至つて平常に応え、立ち上がる。ちよつとこの微妙な雰囲気のリビングには長居したくないし、美月の今の顔見るとこつちまで悲しくなつちまうしな。

リビングから廊下に出て、俺が二階へ上がったその時だった。

ピンポーン!

(……なんか注文してたっけか? ……まあとりま出るか)

来客を知らせるインターホンの音が家の中に響く。

俺はリビングの廊下から玄関前に目を向け、ドアの向こう側に見える人影を確認してから玄関に向かった。ドアを開けた先には――、

「……どうもこんにちは」

「え、あ、ど、どうも……」

(ヒューマギア……?)

見知らぬヒューマギアが一人……いや、正しくは一体か?

とりあえずそのヒューマギアは戸惑う俺を観察するように目を動かし「ピーー」と機械音立てた後に口を開く。

「こ、こいつ何なんだ……?」

「貴方が『天本太陽』様ですね?」

「そ、そうですね……」

ちよ、待てよ! (キムタク)

嫌な予感しかしねーぞオイ!

マジでなんなのこのヒューマギア?

えっ俺を探しに来たの？ なんで？

…というか改めて見るとお前なんだその服装!?

探偵が着てそうな服きやがって……ん？ 探偵？

先ほどヒューマギアがとつた行動と同じように、俺はヒューマギアを少しだけ観察して思考を巡らせた。

(……………もしかしてー)

ー俺を逮捕しに来たとか？

……………(思考中)

自分で考えといて有り得そうだわヤベエ!?

「あ、いや、違います！ 俺は天本太陽じゃなくてー」

「ースキャン完了。天本太陽、20歳独身、現在無職。貴方は天本太陽様で間違いありませんー」

「ー待って待って待って！ 何勝手に人の顔認識して検索してんだバカ。…それ以前に、お前は誰なんだよ？」

すいませーん!!

このヒューマギア色々ヤベエ奴なんですけど!?

勝手に人の個人情報暴露したんだけど！

俺メンタルに傷負ったんですけど！

目の前のヒューマギアは俺の言葉を聞くと、ぺこりと頭を下げ「これは失礼致しました」と一言。

……機械だからしゃあないのかもしないけど、全然気持ちを感じられないというか？なんか元の設定された通りの言動をしているつつうか……。

(前までなら別に違和感持たなかったんだけどなあ……シユゴみたいなヒューマギア達を見た後だと……なんだかなあ)

しょうがないことではあるんだろうけれど……。

天津さんから聞いた話じゃ「シユゴ」のようなヒューマギアはシンギュラリティ？に達してたとかなんとか。多分このヒューマギアはまだシンギュラリティに達してないのだろう。

シンギュラリティに達したヒューマギアがマギア化され暴走する、ということを考えれば『良い事』なんだろうけどさ。そんなことを思う俺にヒューマギアはこう言った。「私の名前はワズ・ナゾートク。探偵型ヒューマギアです。今回は飛電インテリジェンス社長 飛電 是之助社長の命により、貴方を飛電インテリジェンスにご招待しに参りました」

「……………ふあっ!？」

こうして俺は飛電インテリジェンスに半ば強制的に連れて行かれたのだった。なんか……デイブレイクに遭ってから俺、一般人なら絶対に会うことないであろう大物と出会う機会が随分増えた気がするな……。

——これも仮面ライダーになったからか？

まあ未だに仮面ライダーがなんなのか、俺にはわからんけどさ。



## ある男の心に夢に《ピンチ》

「！ 天本君、よく来てくれた！ さあ遠慮なく座つてくれ！」

「う、うつつ……」

飛電さんの言葉に緩慢な頷きで応えた俺は如何にも高価そうなソファーに恐る恐る腰掛ける。別にビビってわない……飛電さんの人柄は病室での一件で「いい人」だつて分かつてるからな。だけど、やっぱ社長室つてなんかこう雰囲気が違うだろ？ 天津さんの提案に乗った日からZ A I A社の社長室の雰囲気には結構慣れたけどさ……『飛電インテリジェンス』の方の社長室に来たのは初めてだからな。まあ始めて天津さんに電話で呼ばれて、社長室に入った時ほど緊張はしてないけども。

「それで、あの……用件は何でしょうか？」

「？ ワズから何か聞かされてはいないかい？」

「あー、それなら一回聞いたんですけど『その情報の開示は許可されていません』つて言われまして……」

「あはは、それはすまなかつた！ それでは……早速。私の君への用件は非常に簡単な

ものさ。ー君に一つ聞きたいことがあるんだ」

聞きたいこと……？

あれ？ 何これデジャブ？

デイブレイクの被害に遭って数日後。

病室に來た天津さんにも「聞きたいことがあった」とか言われたよなあ……あの時はヒューマギアについてどう思ってるかとか色々聞かれたんだよな。

「天本 太陽君。君が『仮面ライダー』なのか？」

「……………」

……あ、あー……そういう話か。

天津さんとの約束で「仮面ライダー」や「マギア」の事は世間や個人には勿論秘密にするよう言われている。

飛電さんの様子を見るにこれ俺が「仮面ライダー」だって確信してるよな？ 何でバレたんだ？ 人目は最大限避けてマギアを撃破して來たんだが……いや、どこでバレたかとかはこの際どうでもいい。

天津さんへの報告もとりあえず今は後回しだ。

下手に隠しても意味ねえんなら堂々と名乗ってやるさ。

「まあ一応……俺が仮面ライダーですけど」

……ごめん、緊張で堂々とはいかんかったわ。

やっぱり有名人って常人にはないオーラ？みたいなのを纏っててさ……俺一般人だから近くに居るだけでつい気圧されちゃって……え？ お前は一般人じゃない？ ははは、またまたご冗談を（目背け）

着実に一般人を辞めていっていると自覚しつつも、俺はその事実から全力で目を背けてながら飛電さんの話に耳を傾けた。



——仮面ライダー。

都市伝説で有名なその名は是之助も何度か耳にしたことがあった。だが、実際に「仮面ライダー」の真偽は定かではなく是之助自身あまり信じてはいなかった。

——あの映像を見るまでは。

『人間は皆殺し……！』

『全て、抹殺！』

——クエネオマガア。

——エカルマガア。

ワズが入手した映像。

その冒頭から映る物騒な台詞を吐く異形の化け物達が、ヒューマギアがマギア化した姿だという事を是之助はいち早く理解すると同時に深く俯く。

（「ーディブレイク事件のあの日から「ヒューマギアの暴走」「マギア化」…これらの事実から卑怯にも必死に目を背けようとしてきた…しかし、やはり向き合わなければならぬようだ。全ては「飛電インテリジェンス」社長の私の責任なのだから…！」）  
自責の念に駆られながらも是之助は顔を上げ、そう強く決意した。

そんな中、映像からは「ー突如「誰か」の声が聞こえた。

『同じ場所にマギアが二体…滅がとうとう計画に本腰入れてきたってことか？』

『人間発見！ 殺すッ！』

『抹殺開始…！』

『おっと…！』

『！ あれは……!?!』

その声が出た方向にいる人物に駆けていく二体のマギア。青年はその攻撃を回避してからポケットから何かを取り出す。

取り出されたものを見て是之助は驚愕した。

青年が手に持っていたそれは飛電インテリジェンスの極秘計画「ゼロワン計画」の中でも極めて重要な役割を担う代物。プログライズキーだったのだ。また青年の腰には青い銃が取り付けられたバツクルにベルトが巻かれていた。

『ストロング!』

『お前らも元は………悪いな。お前らには誰も殺させねえ』

【オーソライズ!】

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

プログライズキーを銃に装填した瞬間、何かの待機音らしきものが流れ出す。青年は素早くバツクルから銃を引き抜くと銃口を真っ直ぐとマギアに向けて力強くこう言った。

『ー変身……!』

【シヨットライズ!】

『グウツ!』

「こ、これは……!」

ー撃たれた一発の弾丸。

それが着弾したマギアの一体は声を上げ、体からは火花が散る。そして、

『アメイジングヘラクレス!』

【With mighty horn like pincers that fly  
p the opponent helps.】

『ーさて、と……』

弾丸は方向転換して青年の体に直撃。

瞬間、青年の体は黄緑色と白色のアーマーを纏い正しく変身した。

『ー俺の名はバルデル。……お前らを止められるのはただ一人……俺だッ！』

ーバルデル。

そう名乗った彼の戦いは果敢で荒々しく、実に豪快で一方的で。言ってしまうえば二体のマギアが撃破されるまで、戦闘が開始してから十分程度しか経過しておらず、その間マギアはまともに攻撃する暇さえ与えられなかったのだ。

「なんというパワーだ……」

是之助はそのパワーに思わず立ち上がり感嘆した。

二対一という不利な筈の状況を全く気にした様子なく、一つの犠牲も出さず見事に勝利する。その姿はまさしく仮面ライダー<sup>ロイド</sup>だった。

こうして「バルデル」の活躍を見て飛電是之助が大いに刺激を受けたことにより「ゼロワン計画」の進行が予定よりも幾分か前倒しされることになる……。

『終わったなあ。はあー……』

戦闘が終わり、シーンと静まり返った辺りにあの青年の声がまた響く。その声は先ほどまでの荒々しい戦い振りをしてきた人物のものとは思えぬ程に気怠そうで、どこことなく哀愁が感じられた。

その後、映像は青年が去る足音を最後に停止した。

映像では時間帯が夜中だということもあって辺りは暗く、青年の顔がよく見えなかったために何者か不明だったが……ワズの調べによりすぐに青年の正体は判明した。

彼の名は天本太陽……デイベレイクの被害者であり、是之助も一度病室に謝罪に行った際に面識のある人物であった。

—————

(まじか、撮られてたのか……ああ、そうだ！ 確かあの日疲労で眠気がピークだったわ

……！)

何故俺が仮面ライダーだということを知っているのか、そう言つて飛電さんの話を聞いた俺はあの日の事を思い出し納得した。

確かにあの日、俺の眠気はピークを迎えていた……理由を話すと長くなるが……まああの状態の俺ならこっさり物陰から撮影されているのに気付かなくても何ら不思議じゃあない。

（天津さんに怒られるかコレ……？ い、いやいや、バレなきや大丈夫大丈夫……な、なんか既にバレてそうですげえ怖いんだけど）

「あ、あの飛電さん？ えっと、俺が仮面ライダーだとか、マガアと戦つてだとかいう話は……そ、そのお……」

「無論、口外する気なんて私には更々無いよ。君が密かにマガアと戦っている……その理由には分からないが、君に不利益になるような事は絶対にしないと約束しよう。

『飛電インテリジェンス社長』の名に懸けて！」

「お、お……あ、ありがとう……ざいますっ！」

ああやっぱあんたいい人だよ飛電さん!!（感激）

益々応援したくなったわ飛電インテリジェンス！

飛電さんの社長としての一端を間近で見た俺は、動揺しつつも感謝の言葉を口にす。こんないい人ならそりや社長にもなりますわ……！



「――唐突で申し訳ないのだが……天本君、君に一つ『頼みたい事』があるんだ……」  
「は、はい……何でしょう？」

真剣な表情でそう切り出した飛電さん。

その雰囲気には俺は思わず顔を強張らせた。

大企業の社長ともあろうう人が俺なんかに関心したい事……全然どんなことか想像できなないぞ？

「――ヒューマギアをマギアに変貌させ、我々人類の滅亡を企てている者……その正体を君は知っているのか？ もし知っているのなら、どうか教えて欲しい！ 勿論タダでは言わない！」

「……………」

「……君の人生を滅茶苦茶にしたダイブレイク事件、間違いなくその一因を作ってしまった飛電インテリジェンス社長の私が、君に何かを頼む資格が無いことは重々承知している。だが、どうか……！」

「……………スウー……………」

別にダイブレイクの件で俺は飛電インテリジェンスや、飛電さん個人を恨んでなんかいないから一々気にしないでもいいんだけど……。

つうか俺みたいな一般人に社長がそんな風に頭下げて頼むか普通……………それだけ本

気ってこと、か。

飛電さんの頼み

ヒューマギアをマギアに変貌させている者の正体……つまりは……滅亡迅雷 net に関する情報提供だった。天津さんからマギアの事だけじゃなく、滅亡迅雷 net の話もある程度教えられていた俺は飛電さんの頼みに一応は応えられる。

だが、俺には天津さんとの約束があつた。

〈回想開始〉

Z A I A エンタープライズジャパン本社の社長室。そこに置いてあるのは社長用デスクにイス、チェス盤に來客用のソファーと至ってシンプル。如何にも「無駄がない」という感じだ：チェス盤は除く。

そんな空間に座する『天津垓』という人物。

俺は「仮面ライダー」としてマギアと戦い、そのついでにショットライザーとプログラムズキー内の戦闘データを Z A I A に提供することで報酬を貰っているのだが……

この人がこの部屋に居るのを見るのはもう随分慣れたんだけど……。

——率直に感想を述べよう。

俺はリアルで天津さんほど偉そうに背もたれイスに座り、謎に意味深に笑う姿とゲンドウポーズが似合う人を見たことがない。

あ、いや別に悪口じゃないですはい（真顔）

「仮面ライダー、マガア、滅亡迅雷 net……これらに関する情報は出来る限り世間には出さないようお願いします。今すぐに明かすのはあまりよろしくないでしょう」

片手を顎下に置きながら相変わらずの態度で言う天津さん。それを聞いた俺はソファーに座ったまま見ていた雑誌から顔を上げ質問した。

「よろしくない……ですか。それは、天津さん個人にとって都合が悪いとか、そういう意味だったり?」

「……太陽君——企業秘密ですよ」

答え難い、又は答えたくない話になると天津さんは口癖のように「企業秘密」という言葉を使う。「これ以上聞くな」と言わんばかりの微笑みを浮かべながら……いや怖い怖い……!

「……天津さん企業秘密多過ぎませんか?」

「ふふふ、社長ですから」

なんで若干ドヤってんだこの人？（大困惑）

「1000%」が好きとか、自称24歳とか……たまに思うけどこの人って若干天然<sup>アホ</sup>なところあるよな？

あーそれと天津さん。

俺、前にここの受付で聞いて……知ってんだからな？

「いや、わけわかんねえですからね？ 社長関係ないでしょ？ とうか騙されませんからね？ 天津さん、あんた次期社長でしょう？」

そうこの男！

まだ社長じゃなかったんだ！

ん？ じゃああの名刺はなんだって？

知らん。自作とかじゃない？（適当）

え？ じゃあなんで我が物顔で社長室いんのかって？

知らね。不法占拠じゃね？（超適当）

「！ 一体どこでその情報を……!?!」

「え、今の発言でそこまで動揺すんのっ!?!」

ショットライザーとプログライズキーを返却しようとした時と同じレベルで動揺し出した天津さん。

それを見て驚愕する俺。

「ーでは太陽君。そういうことでくれぐれも『仮面ライダー』『マガア』『滅亡迅雷・e t』の話は……」

「あーはい、了解です。最大限話さないように心掛けますよ」

この日、約束しちやつたんだよなあ……。

〈回想終了〉

「……すいません飛電さん。その頼みには応えられそうにないです……」

「！……そうか……それは残念だ……」

俺の返答を聞いた飛電さんは意気消沈といった様子で項垂れる。

うつ……ぎ、罪悪感を若干感じる……。

し、仕方がないんや！俺にも親孝行とか掛かっているから！仮面ライダーという……一応は職？に当たるのかどうかはわかんないけど。

天津さんの信頼失う＝職？喪失に直結だろうし……色々今の生活がおじやんになっちまうからな。

あ、あとかなり高収入だから辞めたくない（本音）……まあ万が一死ぬ危険があるから

当たり前だけど。

「……その、本当にすいません！ 俺も飛電さんに教えたいのは山々なんですけど……上司……というよりかは『協力者』に言わないようにって約束してまして……」

「いやいや、天本君が謝ることではないさ！ きつと君にも事情があるのだろう？ ならば仕方がない……私の方こそ立場を弁えず無理な頼みをしてしまい、本当にすまなかった！」

謝罪する俺に顔を上げた飛電さんは穏やかな表情を作り、大人の対応で逆に謝罪する。普通は「人類滅亡させようとしてるやつのこと教えて？」って聞いて「言わないって約束してるから無理」とか言われたら「は？」「意味わからん」とか思うだろうに……やっぱいい人だよ飛電さんは……。

「人類滅亡を企てる者……その正体は、我々が総力を挙げ自力で必ず突き止めてみせよう！」

その後、自力で人類滅亡を企てる者の正体を突き止めると意気込む飛電さんに俺は心からの本音を口にする。

「……これからも応援しますよ、飛電さん」

……こうして飛電インテリジェンスでの飛電是之助社長との対談は幕を閉じ、俺は飛電インテリジェンスを後にした。

「……………」

『ヒューマギアは人間の最高のパートナー』に成り得る……飛電さんはそう俺に熱意を持って断言した。

デイトブレイクが起こった当時の俺にはその言葉を聞いてもただ一般人らしく応援することしかできなかった…。

(だけど……)

今の俺には間接的とはいえ、飛電さんの夢を手助けできる「仮面ライダー」の力がある。

……まあ別に他人の夢を自主的に手助けしようなんて思っちゃいない。俺はそこまですぐいいやつじゃない。ただ、たまたま俺の目標達成が飛電さんの夢の進歩に繋がるっただけの話だ。

(飛電さん……マギアも、滅も…俺が必ず止めてみせます)

高い高い高層ビルー飛電インテリジエンス本社を見上げ、俺は前を歩き出す。

ーちようどその時スマホが鳴った。

「はい、もしもし」

『太陽君、マギアが現れました。場所は〇〇市、廃工場…マギア的位置情報は今そちらに

送りました。くれぐれも変身は見られないよう……」

「勿論分かっていますよ。……ちなみに今のところ被害は？」

『運良く無いようです。それに場所が場所なだけあって人気も皆無……倒すならマギアが移動していない今がチャンスでしょう。――任せましたよ太陽君』

「――了解」

電話を切り、俺はスマホに送られたマギアの位置情報を確認して駆け出す。――今のところマギアは一体。場所は廃工場。天津さんの言う通り倒すなら今がチャンスだ。

（ああくそっ！ そろそろ走るかチャリか……それ以外のもつと楽な移動手段が欲しい！

……バイクの免許とか取ってみるか？）

そんなことを考えながら全力ダッシュする俺は気付かなかった。

「天本太陽様。是之助からの命令に従い、貴方にお渡ししたいものがあり――??」

（あんなに急いで一体どこへ行くのでしょうか？）

後ろから声を掛けてきたワズが存在に。

『ワズ、これを天本君に渡してくれ』

『これは……よろしいのですか？』

『いつかは返してくれるよう頼む事になるかもしれないが、これは……今は彼が持っていた方が何倍も有効活用してくれる筈だ』



『……………』

『…ワズ？　どうかしたか？』

『いえ、了解しました是之助社長』

「――是之助社長の命令の遂行を最優先に行動します」

目を閉ざし暫し解析・思考をしたワズは一瞬で行動を選択。

奇しくも最悪のタイミングで――太陽の追跡を開始した。



「――滅亡迅雷 net の意思のままに……人間を絶滅させるッ！」

廃工場に現れた屈強な姿をしたマギア、マンモスマギアはそう叫ぶと人間を探すために動き出す。

「らあっ！」

「?。」

マンモスマギアが廃工場を出ようとしたその瞬間、胸に一発の弾丸を受けたマギアは一切怯む様子無く弾丸が発射された方を向く。

「一切怯まないとか頑丈過ぎんだろ!？」

【シヨットライザー！】

『ストロング！』

【オーソライズ！】

「人間は殺すツ…!!」

ー俺はマガアの頑丈さに驚愕しつつ左手に持ったバックル、ベルトに右手に持ったシヨットライザーをセットし勢いを入れ腰に巻く。続けてポケットから取り出したプログライズキーのボタンを押し、シヨットライザーに装填して展開する。

そして、バックルからシヨットライザーを引き抜くこと無く素早くトリガーを引く。いつもなら引き抜くが、今はすぐ目前にマガアが居るからな……安全な方法で変身させてもらおう。

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「変身…!!」

【シヨットライズ！】

『アメイジングヘラクレス！』

【With mighty horn like pincers that fly  
p the opponent helps.】

発射された弾丸は原理は不明だが、普通なら地面に着弾するところをギリギリで軌道

が変わり俺の右肩に着弾。次々にアーマーが体に装着され変身が完了する。

「おらああああ!!」

その直後に拳を叩きつける俺。しかし、

「! ふんッ……!」

「はっ!?!」

(マジで頑丈だなコイツっ!?)

「人間! 絶滅ッ!」

マジアはショットライザーの時とは違い、<sup>パ</sup>アメイジ<sup>ル</sup>グ<sup>ヘ</sup>ラクレ<sup>ス</sup>のパワーに僅かに  
怯むがすぐさま反撃のタックルを囙ます。

「おわッ!? つつ……こいつ!」

(硬くてパワータイプ、か……)

躲せず吹き飛ばされた俺は地面を転がる。

まあこの堅いアーマーのおかげで大したダメージはないが…。ここまで硬いマジア  
と戦うのは初めてだ……。……だけど、弱音を吐く暇はない。今は俺がやるつきやない。

「さて……どう攻略するか。とりまー」

『ストロング!』

「ー必殺技ぶっ放す!」

困ったらとりあえず必殺技だ。

…何っ？ それはどうなんだって？

いや、困ったら必ず殺す技撃つのは基本でしょ？

むしろ出し惜しみる理由がわからん。

……必殺技で倒せなかつたらそれはそれで軽く絶望しちゃうんだけどもさ。

「これで倒されてくれたらなあ……！ーはあああッ!!」

【アメイジング グラスト！】

「ッ……!!」

銃口に収束する巨大なエネルギーを俺は放つ。

普通のマガリアならこれを食らえば一溜まりもない、それだけの威力を誇る必殺技はマガリアに確実に直撃し派手な音と共に爆発が起きる。場所が人気のない廃工場で本当に良かった……。

ア　メ　イ　ジ　ン　グ　ブラスト

爆発が起こり、爆煙が辺りを覆う。

俺は念の為に油断せず前を見つめる。そして、

「人間は皆殺しだ……！」

「あー……」

（普通にピンピンしてるわコイツ）

残念な事に俺の「念の為」の行動は正解だったらしい。爆煙から姿を現したマジアは相変わらず物騒な発言をしてそこに立っていた。

胴体部分に僅かに傷が出来ているのを見る限りダメージが一切ないという訳ではないらしいが……

（まさか今の食らって普通に動けるなんてなあ、こりゃ手強い相手に違いない……はあー）

内心溜息を吐きつつ俺は再び戦闘態勢をとる。

必殺技で倒せなかったため軽く絶望しているが諦める程絶望してるわけじゃないからな。

「オオオオオオオオ!!」

「あぶねっ！」

マギアは爆煙から姿を現した途端に突進してくる。それをギリギリローリングで回避した俺はマギアの背中にショットライザーの弾丸を数発撃ち込む。だが、やはりショットライザーでの攻撃の効果は今ひとつらしくマギアは怯みもせずこちらを振り返る。

正面が硬い……背後が弱点とかか？なんて安易な俺の予想はハズレ。もしかなくてもこのマギア弱点が特に無いとか……？

……最悪持久戦になる可能性もあるな。

(幸いこのアーマーは硬いし、パワーもある。持久戦もいけるだろ。問題は………俺だな)

アメイジング<sup>バ</sup>ヘラクレス<sup>ル</sup>の硬さやパワーは申し分無い。問題は変身者である俺の体力と集中力がどれだけ保つかだ。

「絶滅しろッ！」

「がッ!？」

そんな事を考えている間にもマギアは攻撃を仕掛けてくる。俺はマギアの前蹴りを胴体を受け僅かに後退りした。

状況を打破する方法はまださっぱりだ。なら、

「……やりたくないけど、倒すまで何度でも殴ればいい話だなあ……？」

(変身解いたら絶対に全身筋肉痛になってるじゃねーか……！ マジで最悪っ！)  
ーゴリ押しでやるっきゃねえ！

確かにそうなるであろうと「筋肉痛になる未来」を想像した俺は若干憂鬱になるがなんとか思考を切り替えて攻撃を再開する。

「おらおらおらおらア!!!」

「ツツ！ オオオオオオ！」

右、左、右、左、右、左。

一撃一撃が強烈な筈のパンチの連打。

だが、マガアはそれを全て耐え切り更にはカウンターとばかりに拳を俺の腹部に叩き込んできた。

「ぐはっ………！」

その威力に俺は思わず短く息を出し後退りする。

こりゃ出来るだけ回避した方が良さげだな…。

腹部のアーマー部分に片手を置きながらそう実感した俺は、次に来るマガア攻撃を避けるべく集中ー

「ー天本様！」

「!? え、お前なんでここに居んのツ!?」

ーししようとした時。

後方からつい最近聞いた記憶のある声が聞こえて素早く振り返れば、そこには探偵服を着たあのヒューマギア。ワズ・ナゾートクの姿があった。いやマジでなんで居んだコイツ!?

「ウオオオオオツ!!」

【ゼツメツ ノヴァ】

「?!?!」

(やべええっ!!)

ワズの存在に困惑している間に俺にとって事態は悪い方向に進む。マギアがベルト横のボタンを押し必殺技を発動したのだ。今の俺はワズの方を振り返っている状況。回避はどう考えても間に合わず、

ゼツメツノヴァ

「ツ! ぐツ、があああー!!」

ー俺は防御を選択する。

両腕をクロスし、頭と胴体を守るように態勢をとった俺にすぐさま見るからにやばそうな赤色の火花を散らしているマギアの高速タックルが飛んできた。



その必殺技により俺の体は大きく後ろに吹き飛ぶ。

「ッ……く、そ……！」

(下手打つちまった……！)

走る激痛に仮面の下で歯を食いしばり、ふらつく足でなんとか立ち上がりながら俺は内心強く後悔する。ワズの存在は関係ない。悪いのは戦闘中に関わらず一瞬でも目の前の敵から意識を外しちまった俺……あーやべえ、久しぶりにピンチかもしれない……！  
変身解除しなかったのはラッキーだがとりあえず、

「おいッ！ 逃げるぞー！」

「！ 逃げるとは一体どこー！」

「ー！ 知るかななこと！ とりあえず死にたくなきや走れ！」

「逃がさないッ……！」

「ほら来るぞッ！」

ー！ 逃走一択だ。

未だに現状のやばさを理解しきれていないワズに俺は怒鳴るように声を上げる。マギアは当然ながらやる気満々……。

うん、まずいなこれ。

下手な行動したら普通に死ねる。

黄緑色のアーマーよりも防御力が低いのが原因だろうか？

マギアの必殺技を受けて激しく損傷している左腕の白色のアーマーを右手で抑え、俺は左手でワズの手を掴み全力で走り出す。

「…周囲地形データ入手完了。次を右です」

「ナビかお前はっ!?!」

「私が安全ルートを案内します」

「…わあーたよ、んじや頼む!」

「人間は必ず殺すツ!」

（あのマギアが足速くなくて助かったあ……硬くてパワーもあって、更に速いマギアとか想像したくもねえわ!）

ちらりと後ろから追いかけて来るマギアを見ながら、俺はワズの指示に従いながら廃工場内を進む。なんでこいつがここに居るのかとかその辺の話はとりあえず後だ。今は逃げることに集中しよう。

もし仮面ライダーじゃなかったらワズをこの場に放置して「お前囃な!」とか外道な方法平気ですって俺だが、運が良いのか悪いのか俺はまだ変身解除してないし? ワズが飛電さんにとって大切な右腕的な存在だって知っちゃってるし……あーあ、知らないや普通に見捨てられたんだけどなあ……。

「――今日は厄日だあ……！」

今日あつた出来事を振り返り俺はそう確信した。

## ある男の思い 《ジャンプ!》

マンモスマギアから逃走し始めて数十分。

「……はあ、ここでなら少しの間隠れられそうだな」

廃工場の二階にあるそこそこ広い倉庫の中、変身を解除した俺は壁に背中をつけ思わずため息を吐く。一先ずの安地を確保できた。ここでなら幾らか時間を稼げるだろう。

……問題はその後なんだが……。

「……先程から疑問に思っていたのですが……お聞きしてもよろしいでしょうか?」

「……どうぞ?」

そんな問題山積みの状況に落ち込んでいる俺にワズは遠慮なく質問し、俺はそれに力無く返事を返す。

「……何故この廃工場から出ないのですか? 最初に私がお伝えした安全なコース通り

進んでいただければ、今頃間違いないこの廃工場からは出られていました。またこの廃工場から外に出た場合、あなたの生存確率は飛躍的に高まっていた筈です」

「……決まってるだろうそんなの? 俺が外出たらマギアも追って来て廃工場から出ちま

うからだよ……」

(本当はそんなこと御構い無しに逃げ出したかったんだが……しゃあねえわな)

ワズの質問に俺は渋々答える。

廃工場は結構狭い。外に出た方が無事逃げられる確率が遥かに高いのはその通りだろう。でもマギアに追われている今の状態で廃工場を出るとまあ間違いなくマギアも付いてくる。そうなるとマギアが外に出る＝被害が出る可能性が増す……マズイ事態に繋がってしまうかもしれないわけだ。

天津さんとの約束でマギアの存在は出来るだけ世間にバラしたくない……だから人目の全くない廃工場（くさ）で仕留めるのが最善なんだがな……打開策がさっぱり思いつかん。

「……というかそろそろ聞いていいか？」

「……そろそろ時間の問題、か。……なあお前、俺に何か用があつて来たんだろ？ ならその用さつとさと済ませて早くここから出るよ」

「……」

(何だよそのリアクション……!?)

ワズは俺の言葉に何故か沈黙する。

いや待て。

今の俺の台詞のどこにそんな反応する部分が？

……………ん？ あ、もしかして、

「あーマギアなら俺に任せろ。本音を言うのと痛いし嫌だけど、お前が逃げるくらいの時  
間稼ぎはしてやれる」

マギアの存在を気にしてんのか？

そう思い口を開くとワズは僅かに目を閉じ、暫し思考した後懐に手を入れ何かを取  
り出した。

「私は是之助社長の命令で、これを天本様に渡しに参りました」

「！ それ、プログライズキーかっ!？」

ワズが懐から取り出したカセットテープのような代物。それは紛うことなきプログ  
ライズキーだった。

俺はワズの手にあるその黄色のプログライズキーに驚きつつ、どうして飛電さんがこ  
れを俺に？と疑問に思い首を傾げた。その動きを見たワズは俺の疑問を察知して言う。

「是之助社長はこれは今は天本様が持っていた方が有効活用してくれるだろう、と」

「…そりゃ飛電さんに感謝しなきゃな」

飛電さん…！ あ、ありがてえ！

ワンチャンこれで勝つる！

つうかナイスタイミング過ぎんだろワズ。

来てくれて本当にありがとう。

さつきは「何で居んのお前ッ!」とか半ギレで言つて悪かった。

我ながら手の平くるつくるだなあ、と思いつつ俺はワズの手にあるプログライズキーに手を伸ばし掴んだ。これがあればもしかしたらあのマジアにも……………? えっ??

「あの、ワズさん…?」

ーマジで何で? (真顔)

プログライズキーを持つワズの手に込められた半端ない力によって、俺がどれだけ引つ張つてもプログライズキーは全然取れない、ビクともしない……………いや何で? ワズお前それ渡しにきたつて今言つたろ? え、言つたよな?

一分一秒が惜しい状況の中で起こつた理解不能な出来事を前に、俺は戸惑いを隠せなかった。

「…お前、これ俺に渡しに来たんじゃないのか……………?」

「……………」

プログライズキーを掴んだ手を一旦引つ込め俺は思わず問うた。

何故か頑なにプログライズキーを離そうとせず、しかも何かを思考し始めたらしく

「ピーーピーー」と思考音を出して黙ったワズ……あの聞こえてますー？ おーい？

「……私にはわかりません」

「？」

わかりません、とは？

ヒューマギアらしからぬ脈絡のない発言。

俺は続くワズの言葉を待った。

「このプログライズキーは……是之助社長と飛電インテリジェンスの皆様が衛星ゼアを用い始めて作成することに成功したー皆様の努力の結晶です。おいそれと渡していい物では決して……勿論、是之助社長の意思に反するつもりは私には一切ありません」

「……」

「貴方なら有効活用してくれる、是之助社長はそう言いました。ですが私にはわかりません。本当にこれを貴方に渡していいのか。貴方がこれに値する人物なのか……」

（こいつ……もしかしてもうシンギュラリティに……？）

合理的じゃないワズの思いに俺は既視感を覚える。

シンギュラリティに達したヒューマギア。一般的なヒューマギアなら受けた命令には忠実に従う……そこにヒューマギア自身の意思など普通は関与しない筈だ。



ワズの思いを簡単に要約すると……つまりはお前の事がまだよくわからんからは之助社長の命令でもみんなが頑張つて作った最初のプログライズキーを渡したくない、つてところか？

……どう考えても自我あるじゃねーか……。

(ワズはもうシンギュラリティに達してる……？ 今日俺が初めて会つた時のワズは良くも悪くも機械っぽかった……きつかけは何だ？)

思い悩むワズの姿は、耳に装着してあるヒューマギア特有の青いデバイスを取ればどこから見ても人間のように見える。俺は俯くワズから視線を外し一旦立つ。俺の事が分からないからプログライズキーを渡したくない……じゃあどうする？ 今からワズに自己紹介でもするか？

「……」

(まだちゃんと居るなあ……マギア化してもやつば元はヒューマギア。俺たちがまだ廃工場の中に居るって分かつてる……)

倉庫の出入口の扉から顔を少し出し、外の様子を伺えばマギアが俺とワズを搜索するために階段を上がってきていた。どうやら余裕はなさそうだ扉から素早く離れ、俺はワズに振り返り指示した。

残念だが自己紹介なんてして暇はなさそうだ。

「ワズ、悪いが思い悩んでる時間はなさそうだ」

「……畏まりました。ではー」

俺の言葉を聞いたワズは顔を上げると手に持っていたプログライズキーをこちらに差し出してくる。

(……?)

それを見た俺はシンプルにこう思った。

何してんのお前?と。

「ー何してんだ? とつとつこつから逃げろ」

「……えつ?」

「『えつ?』じゃねーよ。さっき言ったろ、マジアは任せろつて」

「……このプログライズキーを使うのではないのですか?」

「はっ? そもそも俺はお前が何で急にそれを差し出して来たのかがわからねえんだけど……」

何これコミュニケーションエラー?

待つてマジで意味不明過ぎる。

一体何が起ことる?!

……あ、そゆことか(高速理解)

「どうやらワズは俺の「思い悩んでいる時間はなさそうだ」という言葉を「時間ねえからはよプログライズキー寄越せ」と解釈したらしい。プログライズキーを差し出してきたが…別にそんなつもりないからな？」

「はあ…別に時間ないからプログライズキー寄越せなんて言つてねえよ。早くこつから逃げろつて言つてんだ」

「ですが、今の貴方はあのマジアに対する打開策を持ち合わせていません。もしかすればこのプログライズキーを使えばー」

「ー打開策に成り得るつて？ まあそうかもな。『もしかしたら』打開策に成り得るかもしんねえな…でもお前は俺にそれを渡したくないんだろ？ だったら、俺はお前から無理矢理プログライズキーを奪うなんてことしないつての」

「！……」

また俯くワズを見て「ちよつと口調荒かったか…？」と反省しつつ俺は短く謝罪した後、俺の意見を見せようとした。

「その、また思い悩ませちまったなら…すまん。」

「あ…えつとな…これは俺の個人的な意見なだけでさ」

「……？」

「嫌なら別にやんなくてもいいんじゃないか？ お前が俺にプログライズキーを渡せつ

て言う飛電さんの『命令』と、俺にプログライズキーを渡したくつていう自分の『思い』の狭間で思い悩んでんなら……俺がお前の立場だったら自分の『思い』をとるな。そっちの方が気楽だし。それに根拠は皆無だけど飛電さんならお前が自分の『思い』を優先したつて知つても、気を悪くしたりなんてしないだろうさ」

「で、ですが……」

それを聞いたワズはまた「ピーー」という音を立て思考を始める。やべえ……もしかしくなくても余計に悩ませちまったか? ……つとそろそろ来るか。

「まあどうするかは……ワズ、お前次第だ」

「シヨットライザー!」

「ー先と言つとくわ。お前がどんな選択しても、俺は別にお前を恨んだりはしねえからな」

片手に持ったシヨットライザーの取り付けられたバックル、ベルトを腰に巻いた俺は後ろにいるワズに一方的にそう言い倉庫から出るために出入口の扉に向かう。その時、

「天本様! ー貴方はどうして戦うのですか?」

「……」

ー思わず足が止まった。

「バイタルサインをチェックして初めて分かりました。貴方は戦うことに対して明確に

恐怖を感じている。今こうしてマギアから隠れている間の声音にも不安や焦りが多く含まれています……。だから尚更わかりません。貴方はどうしてそんな思いをしながら戦うのですか？」

ワズは俺にそう問いかける。

その声は今日初めて会った時の機械らしいものとは違い、俺にはどこか感情が込もっているようなものに聞こえた。

「どうして戦う、か……」

戦うのはそりや怖い。

怖くて怖くて仕方がない。

一歩間違えれば死ぬ、そんな状況に直面した経験なんぞ今までの人生で一度たりともなかったから。でも、仮面ライダーの力を渡されて…マギアが存在を知っちゃまって…何時もなら保身に走って見て見ぬ振りするくせに何故かあの時、俺は馬鹿みたいに「やるしかない！」なんて思ってしまった。…滅のようなヤツがいることも知って。

気付けば俺は本音を口にしていた。

「さあな、俺も今探してる途中だ」

家族なら兎も角、命を懸けてまで「赤の他人」を助ける義理はないと「仮面ライダー」になった今でも未だに思う。ただー自分が誰かの役に立っている……その事実を最

近になって、どこか嬉しく感じている俺がいる。

ま、天津さんが言つてた正義感云々はまだ認めてないけどな？

—————

『さあな、俺も今探してる途中だ』

彼から返つてきた、予想だにしていなかった「答え」にワズは更に『天本太陽』という人間が理解できなくなつた。

太陽が倉庫を出た後、一人ワズは目を閉じて考える。

「——天本様、貴方は……」

「理由」を明確に持たず戦う人間など存在しない、そう合理的なヒューマギアらしい結論にワズは今まで至つていた。そして、それは正しいと判断していた。

「どうしてそこまで強いのでしょうか……？」

「理由」を明確に持たず戦える『天本太陽』という人間の精神的な強さに疑問を抱かずにはいられないワズ。だがもうその場にワズの疑問に答えてくれる人物は居ない。

『遂に、遂に完成した……！ 皆の力で成し遂げたんだ！』

『おめでとうございます。是之助社長』

『ああ、ワズもありがとう。みんな！ 本当によくやってくれた！』

ワズはメモリーに記録されたあの日「飛電インテリジエンス」最初のプログライズキーが完成した時の映像を見直す。

嬉しそうに笑う是之助社長。

感動する社員、歡喜する社員、号泣する社員、安堵する社員、大笑いする社員……反応は人それぞれだったがあの時あの場にいた計画に尽力した全員が喜びを分かち合い、達成感に満ちた「笑顔」を浮かべていたのだ。

「……………」

是之助社長と社員達の努力を、あの瞬間を知っているワズは皆の努力の結晶であるプログライズキーを『天本太陽』という些か情報不足な人間にあっさりと渡そうとした是之助の命令に僅かに困惑した。そして、初めてヒューマギアらしからぬ思い……明確に言語化することのできない「引っかかり」を覚えた。

『俺がお前の立場だったら自分の『思い』をとるな。そっちの方が気楽だし』

『お前がどんな選択しても、俺は別にお前を恨んだりはしねえからな』

「……………」やはり私には、理解できません」

ぼつりと呟いたワズは立ち上がると、閉ざしていた目をゆっくりと開き走り出す。——その手にはプログライズキーが固く握られていた。



「おら、こつちだ!」

「! 対象を発見、殺すッ!」

「あつ——ぶねえ!」

シヨットライザーのトリガーを引きマギアの背中に一発当て、間一髪でマギアの攻撃を回避することに成功した俺は急ぎ倉庫から離れマギアを引きつける。

やっぱ生身でのシヨットライザー反動やばいな…何度撃つても手が痺れちまう。最初みたいに反動で吹っ飛びはしなくなっただけだな?

「人間は絶滅させる!」

「うおッ!? つつ……」

走る俺にマギアはその巨大な拳を地面に叩きつける。瞬間、地面には大きなヒビが走り一時的な震動起こる。それは生身の人間が耐えられるものではなく俺はバランスを



崩し倒れる。生身の人間にも容赦ねーな……まあ人間絶滅させたいんだから当たり前か。

やっぱ変身、するしかないか……！

「！……！」

『私からの基本的なアドバイスになります、短時間の間での再変身は最大限避けてください。君の持つショットライザーが試作品だからという理由もありますが、何より再変身は負担が大きい』

俺はプログライズキーを懐から取り出し一瞬考える。頭の中ではある日の天津さんのアドバイスを思い出していた。負担、負担か……あー今でも十分キツイけど、再変身したら今より痛くて苦しくてキツイんだろうな。ちよつと前に「筋肉痛になる未来」が分かって憂鬱になったけど……もつとヤバイかもしんねー。でも、

『ストロング！』

「やるしかねえよなあッ……！」

【オーソライズ！】

〔Kamen Rider. Kamen Rider.〕

迷ってる暇なんてない。

こんな時は即断即決、勢いでやってやんよ！

こんなところで死にたくねえからなあ！

左手に持ったショットライザーに右手に持ったプログライズキーを勢いよく装填、展開。

「変身……!」

「ふんツ!」

素早く左手に持ったショットライザーを右手に持ち替えトリガーを引く。発射された弾丸をマガリアは腕で真つ向から弾き返す。

「ツ……! ー!らあああツ!」

『アメイジングヘラクレス!』

〔With mighty horn like pincers that flit  
P the opponent helps.〕

くツツそ痛いエ……!!!

返ってきた弾丸が俺の体に直撃しアーマーが装着される。途端にいつもは感じない痛みが体に走るが俺は気合で堪える。

「絶対ぶつ倒す! はああ!」

「人間はー!」

「うるせえ、もう聞き飽きてんだよバカ!」

「どうせ「殺す」とか何か物騒な台詞吐きやがるんだろ? 一々怖いんだよ黙ってるお

らっ！ マギアの言葉をガン無視して殴り掛かる俺。やっぱり硬いし大してダメージは無さそうだ。

「おらあ！」

「くっ……！ オオオオオオ！」

「！ 当たるかよっ！」

（見ろ、見ろ、見ろ！ そんで避けろっ！）

それと再変身してわかった。

今、再変身して負担のある状態じゃあ持久戦は無理だ。更に言えば今の状態でマギアの攻撃をまともに受けるのはマズイ。

タツクルの構えをとったマギアを見て次の動きを読み避ける。

（はは……ここまでギリギリの戦闘はもしかしたら初か？ つたく、くっそツライなあ！

さっさと終わらせてえなあッ!!）

「悪いが、いい加減ぶっ倒れるろ！」

「……人間は、皆殺しッ!!」

「ぐがッ!？」

（やばッ……!!）

ジリジリと削れていく体力に集中力に俺は焦りを感じながら、何度も何度もパンチを

繰り出す。このまま押し続けられれば……だがマギアはそんな俺のパンチのタイミングを掴み、俺が拳を振るう瞬間に俺の腹に重い一撃を嘯ます。見る暇もなく避けられる筈がなく、俺は吹き飛び地面を転がる。

……マジでヤバイ、かもしんない……

(……やっぱ、マギアって……化物だわ)

最初からわかっただけはいいが、ここまでやられると改めて実感する。ただの人間が戦うなんて無謀な相手だわ……何で一般人の俺が命張ってこんな化物と戦ってんのか……いや選択したのは俺だけどき……

倒れた近くにあつた壁に手を置き、自分の体に鞭打って立ち上がる。

自分の体のことは自分自身が一番よく分かる、なんてよく言うけど納得したわ……俺の体はまだ限界を迎えちゃいない。まだやれる。ここで「もう限界だ」「もう無理だ」と分かればよかつたな……そしたら俺は迷う事なく逃げられたっていうのに。

「まだ、やれるなら……仕方ないよなあ……ッ」

(もう少し保ってくれよ……!)

ジリジリと距離を詰めてくるマギアを見据え俺は再び構え、

「……天本様!」

「! ワズ!? お前なんで……」

「……その時、横方から俺の名前を呼ぶ声が出て。横に目を向ければそこには廃工場から無事に既に逃走したと思っていたワズの姿があった。」

「いやなんでまだ居んだよお前!？」

「俺が時間稼ぐ間に逃げろって言ったろ！」

「つうかこのタイミングでの登場はいかんでしょ!？」

「邪魔をするなら、仲間でも容赦はしないッ！」

「! バカ野郎! 早く逃げろッ！」

ワズの声に反応したマジアは敵意を一時的に俺からワズに移し、ワズへにゆっくりと接近していく。しかし、ワズは動揺する事なく語る。

「私にはやはり、貴方がわかりません」

「……」

「ですが、私は『思い』しました。『天本太陽』はきつと誰かの為に戦うことのできる……誰よりも強く優しい人間なのだと」

「ワズ、お前……」

俺の目を真っ直ぐに見て話すワズ。

その言葉には普通のヒューマジアなら持ち得ない、シンギュラリティに達したヒュー

マジアだけが持ち得るテクノロジーを超えた「思い」があった。

「――私は…私の『思い』を信じます。そして、私の思いを信じて…貴方がこれを渡すに相応しい人間であると判断します!」

そう言いワズは手に持ったプログライズキーを真っ直ぐ俺に投げる。マジアは投げられたプログライズキーに「何ッ!?!」と声を上げ、

「!・おつと…!」

――プログライズキーは俺の手に確かに届く。

強くて優しい人間、か。

天津さんの「正義感」云々同様に人違いだろって思わなくもないが…

「……はっ、そうかよ。なら――」

自分の命を懸けた相手の思いに判断。

ああそりやお前、

「――ワズ! お前の信じるその思いに、応えてやるよッ!」

『ジャンプ!』

【オーソライズ!】

――応えない訳にはいかねえな!

ショットライザーに装填されたアメイジングヘラクレスプログライズキーを取り出

し、黄色のプログライズキーのボタンを押し装填し展開。

〔Kamen Rider. Kamen Rider.〕

〔シヨットライズ！〕

力強くトリガーを引き、発射された弾丸はマガアの肩に直撃し俺へと返ってくる。

「はあッ！」

返ってきた弾丸に俺は勢いよく横蹴りする。

その瞬間に右脚、左脚、右腕、左腕と順にアーマーが装着されていく。いつもの白色のアーマーといつもと違う黄色のアーマーが纏い、

『ライジングホッパー！』

〔A jump to the sky turns to a rider kick.〕

ー俺はフォームチェンジに成功する。

なるほど、ホッパー…バツタのプログライズキーか…：…というか俺始めてフォームチェンジしたな！ まあ今まで使えるプログライズキーがアメイジングヘラクレスしか無かったから当然だけでも。

…：…なんだか不思議だな。

体力的にも結構ピンチな筈なんだが…。

初めて変身した時のように……

(……なんか、負ける気がしねえ)

「人間……! いい加減に死ねッ!」

「ほつと……!」

マギアはフォームチェンジした俺に敵意を向け殴りかかってくる。

だけど俺は高くジャンプしマギアの頭を踏み台にし避け、空中でぐるりと一回転した後に着地した。驚くほどに体が軽い……!

「次は俺の番だ! おらっ!」

「はあ!」

「!」

(あー、なるほどな)

素早くパンチを仕掛けアメイジングヘラクレスの時とは違い、軽く受け止められたのを見て俺は何となく理解してキックを囓りました。結果、

「どらッ!」

「グウッ!」

マギアは確かに怯んだ。必殺技以外での初めての怯み……こりゃいけるかもしんない。



「ウオオオオオ！」

「ほっ、やつ、そらあ！」

「ガッ……………」

怒りを露わにするマギアの猛攻を躲しきり、背中をとった俺はマギアの背部を思い切り後ろ蹴りする。

どうやらこのプログライズキー、アメイジングヘラクレスとは違ってパンチ力じゃなくキック力が高いっぽい。ならキック主体で戦った方が賢い、か。

「とっ……………」

「?」

(思いつ切りやってやる……！)

俺は半端ない脚の力で大きく後ろに跳びマギアから距離を取る。困惑するマギアを見据え、俺は腰を少し落とし溜めを入れ強く一步を踏み込んでオージャンプする。

「……………グフツ!？」

「どッ……りゃあああ!!」

空中で両足を揃えた俺は派手な一撃。

強烈なドロップキックをマギアの胴体に入れた。

マギアは流石の衝撃に初めて地面に倒れる。

このまま一切相手に余裕は与えない。

こっからはずっと俺のターンだっ!

「ツ、人間は絶滅させる! オオオオツ!!」

(随分とタツクルに自信があるんだな? でも)

「何度も言わせんな! 当たんねえよ、おらア!」

「!? ツツツ……………」

猛スピードでタツクルをしてくるマジアにそう吐き、俺は横にステップを踏み回避しながらショットライザーを連射する。放たれた全ての弾丸はバツタのように跳ねる跳弾と化し、予測不可能な軌道を描きタツクルの態勢をとるマジアの両足を撃ち抜き転倒させる。

バツタの力って半端ねえなオイ…………!

「ツツ、私は人間を…………」

「悪いが、そろそろー」

『ジャンプ!』

「ー終わりにはさせてもらおうか」

こっちも体がヤバイからなあ。

まあ今はマジアの方もヤバイだろうかな?

俺は手に持ったショットライザーをバックルに取り付け、プログライズキーのボタンを押す。キック力が高いなら使うのはこっちの必殺技の方が良さそうだ。

「お前を止められるのはただ一人：俺だッ！」

【ライジング ブラスト ファイバー！】

トリガーを引き、俺は強く踏み込みジャンプ。高速でマガアとの距離を詰め、

「おらよっ！」

「ッ！」

ーマガアの体を全力で宙に蹴り上げた。

マガアは廃工場の屋根を貫通する程の勢いで上に飛び、俺もそれを追うようにして跳

ぶ。そして、

「これでトドメだあッ!!」

軽々と蹴り上げたマガアよりも上空に到達。

そのまま空中で蹴りの構えをとり、落下速度も乗せた一撃をマガアに見舞う。

ジ  
ヤ  
ン  
プ



ワズが歩き出した方向とは真逆の廃工場内の外に出た。

さて体力的にも早く見つけたいんだが：簡単に見つかつてくれるかあ？



(ゼツメライズキーは……あ、あそこか！)

ヒビ割れたゼツメライズキーは予想通り外に落ちており、案外早くに見つかった。うん、予想してた数十倍楽に発見できちゃったな。まあ早く見つかるに越したことはない……だが、

「!? お前はっ……!」

「まさか貴様対策のマンモスマギアまで撃破するとは……いよいよ恐ろしい存在になってきたな、バルデル」

「滅ッ……!」

ーそこには先客の姿<sup>滅</sup>があつた。滅はゼツメライズキーを手に取り、俺の方に目を向けて口を開く。こいつッ……いつから潜んでやがったんだ……!?

「よく現れてくれやがったなあ……!」

「無駄だ。今の状態の貴様ではこれ以上の戦闘は不可能だろう。だが、俺の今の目的は

ゼツメライズキーの回収。命拾いしたなバルデル。また会おう」

俺は敵意を隠す事なく剥き出しに戦闘態勢をとる。それを見た滅は焦る様子なく、やはりどこか機械のように告げる。

「ぐツ………！ 待てっ！ 滅ッ！」

滅の言葉は凶星だった。

俺は体力の消耗でバランスを崩し地に片膝と手をつく。同時に変身が強制的に解除されてしまう。

「ツツ……ちく、しょう……ツ!!」

追いたくても追えない。悔しさに歯を食いしばり俺は力強く地面に拳を落とした。

「痛い………」

情け無くそんな台詞を零す。

今の俺には滅が歩き去る姿を悔しげに睨むことしかできなかった。

——こうして俺の厄日は幕を閉じた。

この日をきっかけにちよくちよく飛電さんに呼ばれたり、ワズに相談を受けたりするようになったんだが……まあいいか。

ちなみにその日は体力の消耗が激しいのもあって超熟睡できた。マジで今日みたい  
にマジアにボコボコにされんのは懲り懲りだ…。

## ある男の敗北《滅》

マンモスマギアとの戦闘から早一週間。

今日も今日とて俺は戦っていた。

『ジャンプ!』

「これで、終わりだ!」

ショットライザーを左手に持ち替え、右手でプログライズキーのボタンを押す。目の前には一体のカエルのようなマギア……こいつは口からちっちゃいカエル型の爆弾を出してきて中々に厄介だったが、まあ何とか追い詰められた……。最後はいつも通り、必殺技で決まりだ。

銃口に黄色のエネルギーが収束するショットライザーを持ちながら、俺は速い前蹴りでマギアを蹴り飛ばす。

「グガッ……!」

「はああッーらああッツ!!」

「ライジング ブラスト!」



ライジングブラスト

蹴り飛ばしたマギアが立ち上がるよりも早く、俺は必殺技の反動に耐えられる構えをとりシヨットライザーのトリガーを引く。

「ッ!?」人間は必ず、絶滅ツーング、ガアアアア!!」

放たれた一発の黄色の弾丸。

それはバツタのように跳ねる巨大な追尾跳弾となり、地面を跳ねながらマギアの胴体へと到達し容易く風穴を開ける。マギアは体から火花を散らし最後には爆発した。

「ーいつも思いますが、やはり君はどうに一般人をやめていますよ。太陽君」

モニター画面に映る天本太陽バルデルとガエルマギアの戦闘を見終えた天津垓は思わず口を開き、その目を手元にあるタブレットに移す。タブレットに表示されているのは今日ま

でのマギア出現数をまとめたグラフ、バルデルのマギア戦闘回数とマギア撃破数のリストだった。

マギアの出現率は日に日に増し、今では一日にマギアが二体まで現れるのは日常茶飯事……最大四体まで現れる時もある。結果的に太陽の一日の戦闘回数も増した。しかし、彼の実質的な敗北はゼロ：最終的には必ずマギアを撃破している。

（ただの一般人が死と隣り合わせのマギアとの戦闘を何度も続けられる筈がない）

たとえ報酬が貰えるから、滅という打倒すべき存在が居るからといっていつ死ぬかも分からない日々を続けられるような人間は…はたして一般人と言えるだろうか？ 垓の結論は否だ。

また垓が天本太陽という人間が「一般人をやめている」と思う理由は他にもあった。一番の理由は彼が持つ「仮面ライダー」としてのポテンシャルの高さ。もう一つは「仮面ライダー」の力を持つて尚「怖れ」を忘れずに持ち続けている点である。

太陽がもし彼自身が言うような一般人であれば、仮面ライダーに変身した際に感じる全能感に吞まれ「怖れ」を忘れ、戦いを「楽しい」と感じ出してもおかしくはない。しかし、彼は全能感に吞まれることなく「怖れ」を持ち続けている。

「ふっ。流石にシヨットライザーとプログライズキーを返却しようとしてきた時は、大変驚かされましたがね……」

太陽がこの社長室に初めて来た日の事を思い出し、咳は小さく笑った。今思えばあの日の太陽の行動が既に彼が「怖れ」を確かに持っているいい証拠だったといえる。

「……………」

咳はふと考える。

天本太陽、仮面ライダーバルデル。

序章の主役である彼が辿り着くであろう結末を。

「もしかすると、私はキャステイニングを間違えたのかもしれないね……」

太陽の仮面ライダーとしてのポテンシャルの高さ、戦闘能力、成長速度、人間性……彼の戦闘や会話の中で明らかになってきた全てについて考えた後。暫く目を瞑り、何かを考えた咳は自分の非を認めるような眩きをほつりと零す。

——序章の終わりは近付きつつある——。

—————

「…………ふうく、終わったな」

息を吐き出し俺は脱力して変身した状態のままその場にしゃがむ。はぁー、本当にマギアとの戦闘は骨が折れる。肉体的にも精神的にもダブルパンチでな。あと単純に一人でマギアを毎日毎日捌く〓毎日毎日命を懸けるっていうのが一般人にはキツ過ぎるんだよなあ（当たり前前）

「俺以外にも仮面ライダーが居ればなあ……」

だから俺は最近になってこう強く思うようになった。はよ俺以外に戦うヤツ……欲を言えば俺より何十倍も強くて、俺の代わりにマギアを撃破してくれるような「仮面ライダー」はよ出てきてください（切実）

……あーでも、天津さんの話じゃショットライザーはまだまだ完成してないし、試作品を量産する予定もないらしい。

飛電さんの方もマギアに対抗する為の計画を進めてて、何らかのテクノロジを作ってるみたいだけど……さり気なくワズに「進行度どんな感じ？」って聞いたたら「企業秘密です」って天津さんみたいこと言われたわ。でも、常識的に考えて一般人にそんな会社の大切な情報、ましてや極秘計画の進行度なんて教えないよな（納得）

（あと、どれだけ戦えばいいのかね？ 俺は）

俺はしやがんだまま、真つ暗な空を見上げながら思う。別に今初めて思ったっていう

わけじゃない。今までも何度も…それも一度や二度じゃない。何十回も思ったことがある。

戦うのは痛いし怖い。

変身した際に全能感を感じるが、それを忘れてしまう程の危機にも何度も直面する。親孝行でできるだけの報酬が貰えてなかつたらとつくに「仮面ライダー」なんて辞めているだろう………なんて言つて、もしかしたら続けてるかもしれない。それはその時になつてみないと俺にはわからん。

(滅……分かつてはいたが、あいつを倒すのが一番手っ取り早い…最短の道なんだろうな)

マギアとの戦闘、それを終わらせる一番の近道。

それは間違いなく、ヒューマギアをマギア化させようと行動している人物「滅」を倒す事だろう。…まあ出来るならとつくにやつてるんだが……あいつは神出鬼没というか、ゼツメライズキーを回収する時ぐらいしか現れないというか、すぐ消えるというか、追跡しても意味ないというか……。

まあつまり、俺の方から探して滅を見つけられる気がしないつてわけだ。うーむ……あいつの拠点とかでも見つけられたらいいんだが、今んところはさっぱりだしな。

「……帰るか」

これについては俺一人でいくら考えたってしゃあねーか。

きっぱり滅に関しての思考を中断し、立ち上がった俺は一人呟きシヨットライザーからプログライズキーを引き抜き変身を解除しようとした。だが、その手を俺は思わず止めて仮面の下で目を見開いた。前を向けば、

「ーバルデル。そのゼツメライズキーを渡して貰おうか」

「!・滅っ……!?!」

そこに何処から現れたのか、滅が立っていたのだ。

こいつまじでどっから…!?

驚愕した俺は思わず後ろにバックステップし滅と距離を取る。ゼツメライズキーは既に俺の手の中にある。

「渡して貰おう? 悪いけどこれをお前に渡してやる気は微塵もねえよ」

左手に今さっき倒したマジアのゼツメライズキーを持ったまま、俺は右手でシヨットライザーをバックルから引き抜き滅に向ける。相手はヒューマジアをマジア化してきた滅だ……たとえ生身でも油断はしない。ついでに容赦もしない。滅は腰に刀のようなものを携えているが……

「前と違って俺はまだ戦えるぞ?」

マジアを倒したばかりではあるが、まだ俺の体力は残ってる。滅の奴がどんな手を使

おうが変身している今、負ける気はしない。

……ん？ だったらおかしくないか？

普通に考えてみれば…俺がまだ戦えるってのは滅だつて当然わかつてる筈。マンモスマギアのゼツメライズキーを回収しに現れた時、俺がもう戦闘続行が困難な状態だったと滅は理解していた。多分だがそれが分かっていたからこそ堂々とあの場に現れたんだろ？ なら、今の状況………

(――何でこいつは今、俺の前に現れた…?)

ただの直感と言えばそれまでだが…俺には確かに嫌な予感がし、

「そんな事は分かっている。

――だが、それがどうした？」

「…何っ？」

――その予感的中してしまう。

「それは…!!？」

(ベルト?!)

【フォースライザー!】

滅は懐から黄色と黒色のカラーリングの無骨なベルトを取り出すとそれを腰に当て

た。瞬間バーベルトの一部分に取り付けられたランプが赤く光り、それから内側に無数のトゲが付いたベルト帯が伸び装着される。しかし、滅は一切痛みを感じた様子なく変わらず淡々とした様子で告げた。

「バルデル、貴様がどれだけ一人で奮闘しても結果は同じ。我々、滅亡迅雷 net の勝利に変わりはない」

『ポイズン!』

「! お前が、なんでプログライズキーを持つてんだッ!？」

「貴様に答える必要は無い」

続いて滅が取り出した紫色のプログライズキーを見て俺は驚愕する。飛電さんや天津さん、大企業でも今の段階では一つ作るのにかなりの費用・時間・技術を必要とするハイテクノロジー……それがプログライズキーだ。滅……お前みたいな「人類滅亡」を掲げるテロリストがどうやってそれを手に入れた？

当然ながら滅は俺の疑問には答えずに、

「バー変身」

冷たくそう言い、右手に持ったプログライズキーを腰に装着した無骨なベルトに装填した。その直後にベルトから警告音のようなものが流れ出し、赤いランプが不気味危険に発光し始める。更にベルトからサソリの姿をしたライダモデルまで現れる。



そして、滅は黄色のレバーに手を置き、レバーを引いた。

【フォースライズ！】

何かとんでもなくマズイことが起ころうとしている。何の根拠も無く俺は確信した。

レバーを引いたことにより装填されたプログラムライズキーは強制的に展開。ベルトから現れたサソリらしきライダモデルはその尻尾の針で滅の体を突き刺し覆い被さるよう動く。その結果、滅は紫色のスーツを纏い最後には黒いケーブルが接続されたアーマーがゴムのように伸縮し、滅の体かなりの勢いで当たり装着される。

『ステイングスコープオン！』

【Break Down.】

(……マジで変身しやがった……！)

「ーバルデル、そのゼツメライズキーをこちらに渡せ」

変身した滅は片手をこちらに向け再びそう命令した。



神様……そりゃねえーだろ……。

確かに「仮面ライダー」はよ出てきてくださいとは割と本気で思ったよ？ けどさ……これはどう考えても違うだろーが！ なんで一番「仮面ライダー」の力持ってたら厄介なヤツがバツチリ持つちゃってんのさ!?

都合よく信じた神様に文句を吐き捨て、俺は変身しちまった滅を仮面の下で見据えて吠える。

「ハッ、笑わせんなよ。渡して欲しいなら力づくで奪ってみろっ!」

滅の命令に従う気なんて俺には当然ながら欠片もなかった。滅の言葉を鼻で笑い俺は思い切り蹴りかかる。だが、

「……言われるまでもない」

「ッ……このっ……!」

「……ふっ」

滅は一步横に動くだけでその蹴りを容易く躲す。続けて俺が拳を振るえば、それも蹴りと同じく空を切る。何度攻撃しても滅は平然と全てを最小限の動き回避し続け、

「どらああ!」

「……無駄だ」

「ぐッ!? 動きが読まれてンのか……!」

俺の右足での渾身の回し蹴りを片腕で防ぐと、素早く俺の胴体に蹴りを入れてくる。その蹴りに怯み僅かに後退りする俺に滅は続けて口を開く。

「バルデル。貴様の戦闘能力はマギアと貴様の戦闘データから既にラーニング済みだ」

「…何だと……？」

俺の戦闘能力をラーニング済み？

こいついつの間にそんな……いや待てよ。

よくよく考えれば一月前辺りから不思議な期間があった。ヒューマギアを大量にマギア化するくせに、何故かゼツメライズキーの回収に滅が現れない期間が。

まさか、あの時に俺とマギアの戦闘データを蓄積してたつてのか？ もしそうなんだとしたら……。

「…用意周到だな、マジで」

「理解したか？ だが今更理解したところでもう遅い」

一歩ずつ俺に歩み寄る滅。

俺はその場に立ち止まると項垂れ、

「あー確かに遅いかもなあ。あーあもつと早くに気付いたらなあ…」

「……さあ、大人しくゼツメライズキーをー」

弱々しく情けない台詞を吐く。

滅はそんな俺に更に近付くと再び片手をこちらに向け、

「ーなんて後悔してる暇は、ねえんだよバァーカッ!!」

「っ……………」

ーその手を素早く左手で掴み、俺は滅の顔面に拳を振るう。それをギリギリ顔を動かすことで避けようとした滅だが、完璧には避けきれず衝撃を受けて後ろに下がる。

初めて攻撃を当てられた事に僅かに喜びを感じた俺だったが、ライジングホッパーのパンチがそれほど強力じゃないことと滅の装甲の硬さによって大したダメージが入っていないとすぐに悟り、

「やっぱり『蹴る』より『殴る』方が俺の性に合ってるな!」

『ストロング!』

俺は素早くアメイジングヘラクレスプログライズキーを出してボタンを押す。続けてショットライザーに装填されているライジングホッパープログライズキーを取り出し装填した。

【オーソライズ!】

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

【ショットライズ!】

プログライズキーを展開し、すぐに俺はショットライザーをバックルから取り外し滅

に銃口を向けトリガーを引く。

発射された弾丸を滅はひらりと躲す。

「おらああつ!!」

『アメイジングヘラクレス!』

[With mighty horn like pincers that flit  
p the opponent helps.]

戻ってきた弾丸にいつもの如くアツパーを打ち込み、俺はアーマーを装着してフォームチェンジする。

「フォームチェンジか。だが、結果は同じだ」

「そうか? そりゃあ…試してみなきや、分かんねえだろツ!」

一番使い慣れたアメイジングヘラクレスで俺は滅に接近し右のパンチを放つ。それを滅は避けるが俺は構わず次に左のパンチを嘯ます。

「ふん」

「ぐツツ…! まだまだア!」

当然それも予測済みらしく腕で軽々防がれ、俺の腹にカウンターの鋭い拳が刺さるように直撃する。それを受け俺は地面を転がるが、地面に手を置きすぐに立ち上がる。そして、ダッシュし滅にアツパーを打ち込もうと右拳を振り上げたが、

「無駄だと言ったはずだ」

「っ！ このやろッー」

「滅は振り上げた俺の右拳を軽々と右手で掴んで防ぐ。防がれたことに僅かに驚きながら俺がすぐに左拳で殴りかかれれば、それを滅はもう左手で弾き、

「貴様のやり方に付き合う気は無い」

「がッ…!?!」

（な、何だよコレっ…?!）

左腕に付いた黒い針のような物を俺の胴体に突き刺した。その瞬間、刺された部分から火花が散り俺は後ろに倒れかけたが、何とか耐え……ッー体の違和感に気付き地に片膝をつく。

「体がっ…! 動か、ねえ……!?!」

「この針から貴様の体に神経毒を注入した。」

「自由を失った今、貴様に来ることは無い」

「て、めえッッ…!!」

違和感の正体、身体の自由が失われた理由は滅自身の口から簡潔に述べられる。マズい。マズいマズいマズい!! 今の状況じゃ防御も回避もできない。ましてや反撃は勿論、必殺技も使えない。打つ手なし……滅にとつちや隙だらけの絶好の機会……やりたい

放題ってことだ！

動揺する俺に一步また一步とゆっくり接近しながら滅は右手をレバーに移動させーレバーを押して戻す。それによりプログライズキーは閉じ、途端にベルトのランブが不気味危険に赤く点滅する。

（くそッ！ 動け動け動け動けっつ!!）

そのベルトの待機音が俺の不安を、焦りをより一層駆り立てる。更に滅の右足に異様な形をした管が複数伸びて集まる。あまりにも危険ヤバささが滲み出る様子を俺は身動き一つとれず、ただ目にする事しかできない。

いくら願っても体の自由は神経毒に侵され戻らない。

「ー滅亡せよ」

【ステイング デイストピア！】

紫色のエネルギーが滅の右足に収束する。

そして、滅は短く眩くと右足を上げ蹴りの構えを取り、

「ーッッッ!!」

俺の首を的確に。

容赦無く突き刺すように。

横蹴りで蹴り抜いた。

《left》滅《left》殲

蹴られた首から赤黒い火花が散る。

息が漏れ、直後に俺の今までの人生の中で間違はなく最も「激烈」な痛みが走った。

ステイング

デイストピア

「ぐわあああああッッ!!」

次の瞬間、悲鳴を上げた俺の体は爆発をした。

—————

(ツ……………く、そ……………)

——爆煙と炎の上がる一帯。

変身が変身者である俺の体力の急激な低下を察知し、強制的に解除され俺は地面に頭



からどさりと倒れる。再変身する力は……それどころか戦う力はもう俺の体には残っていない。

文句なしの完敗だった。

「……………」

滅は倒れた俺の体から落ちたゼツメライズキーを手に取ると、暫くその場に立ち尽くす。

何だ…？ 何を考えてる？

変身が解除された俺など滅からすればいつでも始末出来る存在だろうが、それでも無駄に生かしておく必要はない筈だろう。効率的なタイプであろう滅なら尚更……だからこそ理解できない。

(……………!?)

死を覚悟する俺が次に聞いたのは信じられない滅の一言。

更に俺の目に映った滅の行動は俺には理解不能なものだった。

「……それがアークの意思ならば、従うまで」

滅はそれだけ口にする、レバーを戻しベルトからプログライズキーを引き抜き変身を解除したのだ。

そして、そのまま俺に背を向けマンモスマギアの時のように歩き去ろうとする滅。

「ぐツ…なんの、つもりだア……!!」

「貴様の完全な排除よりもゼツメライズキーの回収、戦闘データの収集を俺は優先する。また…アークは貴様に利用価値を見出した、それだけの話だ」

立ち上がる力はない。

だが、思わず俺は血を吐きながら声を上げていた。

それに滅は一度だけ足を止めると、振り返る事なく淡々と喋りまた再び歩き出す。

(何だよ、何だよソレツ……!!)

プライドを傷つけられた……何て言い方は一般人の俺には大したプライドなんてないんだから違うんだろう。多分言うなら…コケにされた、が正しいんだと思う。

お前などいつでも始末できる。相手にもならない。

そんな思いが遠回しに伝わってくる滅の「利用価値」という言葉に「立ち去る」という行動。

怒りが次から次にくる心の中に沸く。

歯を食いしばりながら、滅の背を睨む。

(アークの意思、アークの意思って…)

…気づけば俺はもう一つの怒りの「要因」を滅の背に向かって叫んでいた。

「…じゃあツ…… お前の意思はどこにあんだ!? 滅ツ……!!」

俺の叫びに滅は応えることなく遂にその姿は闇の中に消える。

「ちく、しょ……う……ッ……」

そして、俺は限界を迎えー意識は途切れた。

「あ……」

あ、生きてた。

目が覚めれば一日が経ってて、そこはデイブレイクの被害に遭った時もお世話になったあの病院の病室だった。誰が俺に救急車を呼んでくれたのか……天津さんか？ワズか？それとも爆発で上がった煙を見た他人かヒューマギア……？ 誰でもいいがちゃんとお礼言わなきゃ……。

あと美月だけじゃなく母さんも病室に来ていた。

息子の退院日にドライブを満喫するブツとんだ性格してるあの母さんまで俺を心配してたから「相当だなあ…」と他人事みたいに思ってしまった。まあ流石に裂傷と打撲、骨まで何本か折れてたし心配するのは当然か？ それで心配しなかったらホントに俺の母親か疑うわ……まあ正直家族には心配かけたくないからさ、心配してくれなくても俺的には全然OKなんだけどな。

「……………」

入院一週間頃。

ドクターから「退院まで後一ヶ月です」と告げられ、我ながら自分の体について「頑丈過ぎ……しぶと過ぎない!？」と内心驚愕していた時。――俺のスマホが鳴った。

「はい、もしもし」

『太陽君。傷の具合はどうです?』

「いきなりなんですか……。まあ、順調に回復してますよ。我ながら異常な速度でね。もしかしてこれ『仮面ライダー』になった影響とかだったり……?」

『残念ながらライダーシステムにそんな機能は搭載されていませんから、その回復速度は君本来の……もはや「天性の」と付けても過言ではない頑丈さによるものでしょう』

「天性、ねえ……」

頑丈さには確かに少し自信あったが、まさかここまで頑丈だったなんてなあ。……………」

ここまで頑丈だとあれだな。「俺は不死身だ」とか「俺は死なない」何て名言言っても許され……あ、すんません許されませんよね！ すんません冗談です！（平謝り）

「……それで、天津さんは何で俺に連絡してきたんですか？」

滅との戦闘により病院送りになった事。それについては入院二日目ぐらいの頃に既に天津さんに報告していた。初めての敗北報告を伝えるのは……気分的には最悪だったけども。

『私が今日君に電話したのは他でもない。「滅」の最近の動向について……幾つか明らかになりましたから、それを伝えようと思ったのです』

「……天津さん、教えてください」

……

伝えられた滅の動向。

それは俺にとつては予想外の内容でもあつたが、有り得なくはないなとも思えた。アークの意思は俺に利用価値を見出した……そう滅は言っていたが、意思なんてもんは状況が変わればコロコロ変わっても何らおかしくないのだから。

「……ありがとうございました。天津さん」

『太陽君……君は……』

「……んじゃ、切ります」

俺は一方的に電話を切る。

「――病室の扉がちょうど開いた。

「バカ兄……大丈夫？　なんか、怖い顔してるよ？」

心配そうに声を掛けてくる美月。

おまつ……：「ただ心配してんだ。そんなひどい顔してんのか俺っ？　一度ため息を

零して俺は口を開く。

「――お前の方が心配し過ぎである意味怖い顔してるっの。……大丈夫だったの。

あ、いや、まだ怪我は完治してねえけどな？」

美月の目に映る俺がいつも通りの「俺」に見えるよう……：俺は精一杯普段の調子で

言ってやった。

残念ながら、バルデル天本太陽は自分の最後をどうしようもなく予感してしまっていた。

## ある男の決戦先刻

「まあ今日で君は退院なんだが……はあー、デイブレイクの時にも思いはしたけどね？」

君はホントにしぶといよねえ……」

「……え、それもしかして褒めてるつもりなんですか？」

診察室に呼ばれイスに腰掛け、ドクターの心底からの第一声に俺は思わず口を開いた。

いやいや、医者が患者に「しぶとい」って普通にダメじゃ……あーでも、ちゃんと普通に仕事してくれてるからいいのか？

うん……わからんからやめようかこの話（話題放棄）

「7割は褒めてるよ」

「……残りの3割は？」

「ん？ 気持ち悪っ……って」

「気持ち悪っ……!？」

医者と患者の間では信頼関係の構築が大事……なんて話をテレビが見た気がするが、

そう考えるときつとドクターはいい医者なんだと思う。

……思ったことをまんま口にするのはマジで矯正した方がいいんじゃない？ とは思うがまあ今更か。

「自覚が足りないみたいだけど、君の回復速度…平均的な人に比べたら異常だから。具体的に言うとな平均の三倍近いからね」

「三倍？ ……えーつと、それってどうなんですか…？」

「あーまあ言われてもピンと来ないか」

ドクターは僅かに破顔し、手元のカルテを見て続ける。

「デイレイクの時もそれなりの重傷だったのに一ヶ月とちよつとで退院。そして今回。今回はデイレイクよりも酷い状態だった……医者として患者の常日頃にあまり口出しはしたくないんだがね…」

「……………」

「普段は家族から上手く隠していたのかな？ 服の下の大量の生傷、裂傷、打撲。更に右

腕の骨折。更に更に首の骨に入ったヒビ」

「…実際に聞いてみると、中々にエグいっすね」

まあ滅の必殺技を首に受けたわけだし当然っちゃ当然だが…というか逆に、変身状態だったとはいえ首にアレ受けてよく折れなかったな俺の骨……ぽつりと漏れた一言に



ドクターは頷く。

「はあ……全くだよ。どれだけヤンチャしてたらこーなるのか……私も医者になってそれなりだけど、ここまでの怪我人の治療をしたのは初めてだったよ」

「……えつと、その、世話かけてすみません！」

本当に毎度お世話になってます！

本当にありがとうございます！

あと純粹に申し訳ないなあ……そう思いイスに座ったまま俺は頭を下げた。するとそれを見たドクターは、

「……ぶ。ぶ。ぶ。つ、やっぱり君は変わってるなあ？」

「？」

——暫しばかんとした顔をした後にクスクス笑った。何が面白かったのか分からず俺は首を傾げる。

「君は患者で私は仮にも医者。感謝は不要だよ。

別にボランティアでやってるんじゃない。仕事だからね」

「……ドクター。ありがとうございます」

「……君、結局感謝してるじゃないか……ふっ」

やっぱあんたいい医者人だな。

直接口には出すことなく、思わず再び感謝すればまたドクターは可笑しそうに笑った後。

「ーさて、診察は以上だ。さあさあ帰った帰った」

「うす、失礼します」

しっしっ、と手振りして俺に言う。

イスから立ち上がり、俺は診察室の出入口に手を掛ける。

その時、ドクターが独り言のように呟く。

俺は診察室の出入口前で足を止めた。

「……………医者っていうのはさあ。仕事の関係上、多くの患者（人）と接する機会がある…だから顔を見ればその人が何を思ってるか完璧には分からないけれど、何となくは分かるんだ」

「……………」

「君の今の顔を見るに…………君は何かを覚悟したんだろう。それも生半可なものじゃない」

「ー」

「君が何と戦ってるかは知らないが…………怖くはないかい？」

「ダイブレイクの被害に遭って入院する以前から、ドクターには色々お世話になってい

た。高校での部活の大会で怪我した時とか……あー、一度だけ人生相談に付き合ってもらった時もあったっけ？ 確かあの時は結局俺の悩みは解決されず「まあ私から言えることは一つだね。焦らず慎重に。何度も何度も悩んで……以上！」ってドクターは言ったっけ？ あの時はホント「相談相手のチョイスミスったか？」って思わずにはいられなかったなあ…。

ードクターはよく知っている。

俺が基本小心者だってことは勿論、俺が赤の他人を助けたいと思えるほどヒーロー氣質じゃないことも。

ードクターは知らない。

俺が「仮面ライダー」だと、馬鹿みたいに毎日毎日体を張ってなんやかんや今日まで戦ってきたことを。

「ー怖いですよ。めっちゃくちゃ」

ードだがそれでいい。

ドクターに振り向き俺は最後に告げ、診察室を後にした。

怖いけど、やるしかない。

「そうか……ならば、精一杯気張りなよ」

背後から聞こえたそんな優しい声に俺は改めて思う。

ドクター。本当にありがとうございました、と。

「……行くか」

病院を出た俺が暫く歩くと妹の美月が駆け寄ってきた。どうやら態々待っていたらしい。

ほんといい子……（感動）

「バカ兄にい、退院おめでとっ」

「おーサンキュー。あー……退院日はちよつと用事があるから先に帰っていていいぞって……俺、美月に言っただけだったか？」

「うん、言ったよ。私が好きで待ってただけ！」

「……そっか……」

元氣良く退院を祝ってくる美月に俺は若干違和感を抱き、動揺しながらも聞く。それに美月はすぐに答えた。本当に家族思いのいい子に育つて……これはさぞかし両親と兄の育て方が良かったに違いないなあ（確信）

（……なあんてな……）

まあ冗談だけでも。

前者の育て方が良かったのは事実だろうが、後者が美月に何か教えた事があるか……何か兄らしいことをしてやれたことがあるかと問われれば即答できない。そんならい美月に何かしてあげた覚えは俺にはない……今思えば中々酷い兄だな俺？（自嘲）

俺は、美月には何度も助けられてきた。

俺にはない美月のその明るさに、純粹さに何度も……多分、美月自身には自覚ないだろうけどさ。

……ありがとな、美月。

「……じゃ俺は用事があるからさっさと行くわ。美月も気を付けて帰れよ」

「………それ、退院初日の兄にいが言う〜？」

「ああ、それもそうだな」

病院を出た俺は昨夜天津さんからスマホに送られてきたメールを確認して、俺は美月にそう言い歩き出す。病院の敷地から出るまでは二人とも同じ道だから、自然と俺たちは二人並んで歩いた。

「……………兄、あの…さ」

「ん、どした？」

ふと隣を歩く美月の足が止まり、不思議に思い俺も足を止めれば美月は俯きながらどこか不安げに俺の手をぎゅっと握っていた。それは普段の美月からは考えられない行動で……

「……ちゃんと、帰ってくるよね……？」

俺の顔を見上げて少し声を震わせながら美月は言う。……………本当に参ったね。マジでエスパークかよお前？

「……………はっ、何だそれ？ ったく、また何を言い出すかと思ったら。直感か？ 次は一体何をどう誤解したんだよ」

「……………」

「ほんと……………やめろやめろ！ しおらしい顔すんな。お前がしおらしいとか普通に俺の調子が狂うから」

落ち着きとかお淑やかさが足りないとは思ってるけど、別にしおらしさは求めてねえ

から！ 普段の元気な美月にはよ戻れ……いや戻ってください！

慌てて俺が頼めば美月は小さくだが「うん」と返事をする。だけど、美月のテンションは変わらないし顔は俯いたままだ。なあにが「うん」だお前！ 「うん」って言つて全然元氣戻つてねえじゃん！

「兄……」

「……はあー、妹よ。お前が何を心配してるかは知らんけど、それ杞憂だからな？ 分かつたらそのテンションやめてくれ」

「……………」

二度目の頼みに……美月は暫く黙った後、

「……………うん。うん……わかった。変なこと言つてごめんねバカ兄！」

「分かればよろしい」

——いつもの笑顔を浮かべてくれた。

美月……お前は本当に優しい、いい子だな。

思わず俺はそんな美月の頭にポンと手を置き、撫でていた。それに美月は少し戸惑った反応を示す。

「……………にい……………」

「美月も知つてんだろ？ 俺は小心者だ。だから怖かつたらすぐ逃げ出す。自分の命が

一番大事だからな。誰かを助ける為に命を懸けたりなんてしたくねえ。基本するつもりもねえ」

俺が言いたかったことは美月に半分も伝わってないかもしれない……急に語り出したし、意味不明だろうし。でも家族だからか……きつと伝わってくれてるような気がして俺は最後に告げた。

『「ちゃんと帰ってくるよね？」そりやお前、別に死ぬわけじゃないんだから……帰ってくるに決まってるだろ？」

当たり前の話だ。

俺の帰ってこれる場所は一つしかねえんだから。



天津さんから送られてきたメールの内容は「聞くまでもないでしょうが、君の決断は聞かせてもらいたい。本日、Z A I A エンタープライズジャパン本社 社長室にてお待ちしています」というものだった。

「そーいや、天津さんにも結構な期間お世話になったなあ……まさか最初はここまで続くとは思わなかったけどさ。社長室を三回ノックすれば中からすぐに「どうぞ」と返



事があり俺は「失礼します」と言い社長室の扉を開ける。

「無事退院できたようで安心しましたよ、太陽君。体の方は大丈夫ですか？」

天津さんは俺が入室してきてすぐに椅子から立ち上がる。

えっ？ 天津さん、今まで話す時とかでも椅子に座って偉そうにゲンドウポーズして

たよな……？ 天津さんが椅子から立って話しかけてきた事にちよつとの衝撃を受け

つつ俺は答えた。

「いや、大丈夫じゃなかったら退院してませんって」

「ふふ、ええ……それもそうですね」

俺の返答に天津さんはうつつすらと笑い、再び椅子にゆっくりと腰掛ける。それを見て俺は天津さんのデスクまで歩いて行き、デスク前で足を止めて——天津さんが切り出した。

「……太陽君、君の決断は……」

「……俺は……」

一度だけ俺は俯いた。

この決断により俺がこの後、至るであろう未来を思い浮かべて……不安はあった。恐怖はあった。……だけど……それでも、

「——俺は、あいつと……滅と戦います」

入院一週間頃のあの日。

天津さんから伝えられた「滅の動向」。

それは簡単に言えば、滅が俺の行方を捜索しているというものだった。

(あいつに捜されてるって……それ、実質的な死刑宣告だよなあ……)

滅の圧倒的な強さを思い出して俺は憂鬱になりそうになる。滅に敗れたあの時。滅は俺を殺さなかつた理由の一つとして『「アーク」は貴様に利用価値を見出した』と述べていたが……。どうやら「アーク」は考えを改めたいらしい。

滅が俺の行方を捜索している理由。

——天津さんの推測はこうだ。

実にシンプルな話、衛星アークが俺という「人類滅亡」の一番の邪魔者である存在の完全な排除を決めたから。

どうやら俺の今までの行動により、滅の計画は予定より随分と「先送り」になってい  
るらしい……。やっぱりゼツメライズキーの回収数が減るのはあつちにとつて随分な痛  
手だったようだ。滅曰く、アークは俺にあの時は利用価値を見出してたみたいだが……  
いや意思変わるのはいやくねアークさん!? 頼むからもうちょい俺に利用価値見出して  
くれよお……。

アークにとつてはどうやら俺の存在は計画への「利用価値」より計画への「損害」の

方が上回ってしまったようだ。

(人類滅亡って計画を先送りできた事は素直に喜びたいが、邪魔しまくった結果がこれ……マジで最っ悪だ)

更に滅はここ最近……正しくは言えば俺が病院送りにされたあの日から今日までずっと、ヒューマギアのマギア化を一度も行っていないという。またまた天津さんの推測によれば、理由は二つ。一つはアークの命令により「ヒューマギアのマギア化」よりも「天本太陽の排除」を優先しているから。

また、天津さんからの話だ……ここ最近……正しくは俺が病院送りにされたあの日からマギアの姿は一切見つかっていないらしい。本当にさあ……どんだ俺の排除に力入れちゃってんだよアーク……。

——今は天津さんの協力のおかげで、滅に見つかってはいないが……時間の問題なのは明白だった。

「勝算はあるのですか?」

はつきり言えば勝算など——皆無に等しい。

認めたくないが滅と俺……戦えば結果はきつとデータをラーニングし、短時間で急激に強化できる滅の勝利。その可能性が高い。

動きを読み、あらゆる攻撃に冷静に対処する隙の無い滅の姿を思い出すが……ああ、

悔しいけど勝てるイメージが全く浮かばない。でも、

「でも……やるしかないでしょ」

たとえ、俺がどれだけ逃げ隠れしてもいつかは必ず見つかる。それに俺がもし見つからなかったら……滅は必ずまたヒューマギアのマギア化を再開する。それで俺がそれを阻止しようと現れれば……その時こそ間違いなく滅は俺を排除しようと向かってくるだろう。

(……俺も……随分馬鹿になっちまったな?)

今までなら「なら逃げよう」と簡単に決断していただろうに……今となっちゃ「戦うしかない」って……「見捨てる」って選択を完全に失くしちまつてる。

まず間違いなく「仮面ライダー」になつた影響だなコレ。……あーでも、不思議と後悔の感情はこれっぽっちも湧いてこない。

「これは私個人の意見ですが……君が滅に勝てる可能性は、極めて低いでしょう」

「……ま、そうでしょうね」

「……それが分かっているながら君は戦うと?」

その天津さんの言葉に俺は確かに頷く。

「あつちから来られるより、こつちから行った方がまだ気が楽ですからね……まあ本音を言うとかかなり怖いですけど」

「……やはり君の考えは、まだまだ私には理解できませんね」  
『理解できない』。

初めて天津さんと病室で出会った時。

「ダイブレイクに遭った俺に「ヒューマギアを憎んでいるか」という質問をしてきた天津さんは俺の「ヒューマギアを憎んでいない」発言を聞いた際にも同じ台詞を零してたっけ？」

「それはお互い様でしょ。俺だって天津さんの考えとか目的とか、まだまだ理解できませんよ……。企業秘密って言って、あんたいつも教えてくれませんかから」

まあ理解できないって言うなら、それは俺もだ。

俺も天津さん……あんたが何を考えてるかまだまだ理解できない。

「……いつか、必ず教えて貰いますからね。天津さんの企業秘密」

「……ええ、いつの日か……君に必ず教えましょう」

天津さんはそつと微笑んで、俺はちよつと驚いた。いつもは笑つても大体……何か企んでそうな怪しい意味深な笑みなのに。

今、天津さんが浮かべた微笑みはそれはそれは驚く程に穏やかなものだった。いや、失礼だけど普段のイメージと違い過ぎて逆に怖いわ！

「天津さん……その笑い方、全っ然似合いませんね……！」

「……む、似合わないとは心外ですね太陽君。私のこの爽やかさ1000%の笑みの何が似合っていないと?」

「いやあ…鏡見てどうぞとしか」

思わず本音を漏らせば、天津さんは僅かに眉をひそめる。もしかして天津さん……自分分が「爽やか」とは真反対の雰囲気醸し出しての自覚がない?

その後、こんな風に他愛のない会話を暫く交わした俺は……

「んじゃ、俺はそろそろ行くとします。時間も時間ですし」

「そうですね。太陽君、君に会えてよかったですよ」

「何すか急に……死亡フラグ立てんのやめてくださいよ。マジで…俺は死ぬ気とかねえですから、むしろ滅のやつをぶっ倒す気満々ですからね? ……まあ、何だ、俺も天津さんに会えてよかったです。……本当にありがとうございました」

死亡フラグやめろオ!と天津さんには言ったものの俺もぼろっと死亡フラグ染みた台詞吐いちゃってんなあ。天津さんに感謝を告げて俺は頭を下げる。俺が「仮面ライダー」として戦えるのは元はシヨットライザーとプログライズキーを「お詫び」なんて言つて渡してくれた天津さんのおかげだ。……まあ文句を言うと、そのせいでマジア相手に何度もボロボロになったし、ピンチになってヒヤヒヤしたけどなあ?

「……それじゃ失礼します」

頭を上げた俺は天津さんに背を向け歩き出す。

そして、扉に手を掛けた……その時、

「待つてくください太陽君」

「? はい?」

「本来君にコレを渡すつもりはありませんでしたが……気が変わりました。もし君があのヒューマギアを……滅を倒すなら……」

意味深な台詞を口にしながら椅子から立ち上がった天津さん。その手にはショットライザーとプログライズキーが入っていたものによく似たアタッシュケース。扉の前にいる俺に歩み寄り、

「……君がコレを使うことなく終わってくれれば、それは私の想定通り……。太陽君、私は私の想定通りにいかないイレギュラーが嫌いだ」

「……」

「ですが、君が私の想定を超えるその『イレギュラー』なら……」

……その手に持っていたアタッシュケースを開け俺に差し出す。

天津さんの意味深な言葉の数々……その意味は俺には分からない。ただやっぱ何か企んでんだなこの人とは思った。同時に天津さんは俺を随分と評価してくれている、そ

う何となくだが確信した。

「それはそれで悪くないかもしれませんか」

もしかしたらただの俺の自信過剰かもしれないが。

(……悪くない、ね)

「天津さん。あんたの『返し』は分かりきってるけど……聞いても?」

「構いませんよ」

俺はアタツシケースの中に入ったそれを手に取り問うた。天津さんは普段通りの爽やかさ皆無、余裕綽々な笑みを浮かべる。……はっ、あんたにはやっぱりそっちのスマイルの方が10000%似合ってるよ。

「……何であんたがコレを持ってんだ?」

【天津 咳】はいつもの台詞と微笑みでこう誤魔化した。

「……ふふっ……企業秘密ですよ、太陽君」

—————



夕暮れ時。

俺は目的地向かうために人気のない川沿いの道を歩いてきた。……はあー、今日に限ってこんな平凡な景色が綺麗に感じるなんて……全く不思議なこともあるもんだなあ？

「天本様、どちらへ？」

少しだけ景色を眺めていた俺はまた歩き出そうとして、あいつの声が耳に聞こえて。気付けば俺の前……道の先にはワズの姿があった。

「……こんなところで会うなんて、奇遇だなワズ」

「奇遇ではありません。私は貴方を探していましたから」

「……理由は？」

ワズを少しだけ前に歩み出ると簡潔に口にした。

「天本様、貴方は死ぬ気なのですか？」

「……んな訳ねえだろバーカ」

「嘘です。今、バイタルサインを確認しましたが貴方には焦りと不安……そして覚悟が感じられます」

「だったら気のせいだな。俺が『死ぬ気』になるとか天地がひっくり返ってもありえねえよ」

「死ぬ気」はない。これは本当だ。

死にそうだなあ、負けそうだなあとは思うが「死にたい」何て思っていない。「生きたい」……そう今でも思ってる。別に生きることが諦めたとか、そういう訳じゃ断じてないんだよ。

俺は歩き出しワズの横を通り過ぎる直前に、ポケットから取り出したあるものをワズに手渡す。

「あーそれとこれ。お前から飛電さんに返しといてくれ」

「！…これは……何故っ？」

「……まあ最悪の事態を考えた結果、ってところだ」

ワズに手渡したもの。

それは飛電さんが俺に渡そうとし、ワズが俺に持ってきてくれたあのライジングホップパープログライズキーだ。

最悪の事態……俺が滅に敗れた場合、まず間違はなく俺が所持しているプログライズキーは滅に奪われるだろう。プログライズキーってのは何度も言うようだがハイテクノロジの塊、結晶みたいなもんだ。今の段階じゃ飛電インテリジェンスでもそう簡単に作成できる代物じゃない。だから……もしもの為に、

「そのプログライズキーは結構使ったからなあ。戦闘データはそれなりに蓄積されてる

筈だ。まあ柄じゃないけど、俺から飛電さんへのお礼ってやつだ。その戦闘データ……上手く使ってくれよ？」

飛電さん達の計画にプログライズスキーはまず必須。天津さん、もといZ A I Aにショットライザーとアメイジングヘラクレスプログライズスキーの戦闘データを提供していたから『戦闘データ』の貴重さは俺もそれなりに理解しているつもりだ。

「……初めて貴方と会ったあの時、私は問いました。どうして戦うのか、と。……改めて聞かせてください。——貴方はどうして戦うのですか」

何故戦うか。

それを考えた時、俺は真っ先にあの日……シユゴというヒューマギアの事を思い出していた。

『それが私の使命だからです！』

「あー、もしかしたら『使命』ってやつなのかもな」

俺は自分でもあまり悩む事なくそう口を開いた。

「使命、ですか……？」

「あーそうだ。自分の使命……そんなこと、今まで考えたこともなかったけど……」

今マギアと戦えるのはただ一人、俺だ。

ホント悲しいことにな……マジ恨むぜ神様？

「自分にしかできないこと……だからかな。だから、俺は戦う」

「……………命を懸けてまで果たす『使命』。私には理解不能です」

「別に理解できなくてもいいんだよ。他人の『使命』何て誰にも理解できねえだろうし、俺も理解できねえ。……自分の『使命』なんてもんは多分、見つかったその時に何ないとわかんないもんだろ」

「……………私に使命は、見つかるでしょうか？」

「さあな。それはわからん。もしかしたら、もう既に気付かぬ内に見つけてるのかもしれないし……これから先見つかるのかもしれない」

『使命』……それについて考えるワズに俺は俺なりの意見を伝え、ワズの横を完全に通り過ぎる。

「……………——天本様！」

「……………何だ？」

名前を呼ばれ、俺が振り返るとワズは唐突に話を切り出す。

「つい先日、旧世代型・プロトタイプである私を基に新世代型の方新たなヒューマギアが開発されました」

「おお……………ん？」

いや待てワズお前。急にどうしー、

「ー名前前はイズと言い、社長秘書・女性型ヒューマギアです」

「いや、え……な、何で急にそんなこと話し出したのお前？」

「？ 話したかったからですが？」

「……は」

ワズの突然のわけわからん言動に俺が聞けば、ワズは当然かのようにそう返した。話したいから話す……何だそりゃ。俺は思わず笑ってしまった。

「ははは…… は、話したいから話しましたって……前々から思っではいたけど……お前随分人間らしくなったなワズ」

「そうでしょうか？」

「そうだよ。普通のヒューマギアなら絶対しない。話したいから話す……合理的に動くヒューマギアとは到底思えない発言だわ」

シンギュラリティに達したヒューマギアってのは……人間よりも人間らしくなるんだな？ つうかワズを基にした女性型ヒューマギアって……探偵型ヒューマギアを基にした社長秘書型ヒューマギアってことか？ ヒューマギアの事はそんな詳しくないし考えるのはやめとこう（賢明）

「お前を基にしたヒューマギアか……って事はお前の妹みたいなもんか」

「……………妹、ですか？ 『妹』とは同じ親から生まれた年下の女性のこと。ヒューマギ

アの我々には当て嵌まらないのでは？」

「そうか？ シンギュラリティに達したお前…耳のそれと、ヒューマギア特有の思考音さえ無けりや人間とほぼ変わらない気がするけどな？」

「人間と変わりない、ですか……」

俺の言葉にワズは「ピーピー」と思考し始める。そんな俺思考させるような事言ったか今……？ ……わからん。さっぱりわからん。

「……そうですね。もしそうならイズは私の妹に当たるのかもしれない」

どうやらワズなりに何か納得したらしい。それにしてもワズの妹か……一度でいいから会ってみたい気がするな。

「今度、飛電インテリジェンスに行った時。もしよかったら会わせてくれよ？ お前の妹がどんなやつなのか興味あるし……まあ家の妹には敵わうちんだろうがなあ？」

「それはどうでしょう？ イズの容姿は見事な完成度ですよ？」

互いに妹を持つ者同士、その後口論が始まったが……互いに互いの妹と実際に会った時がないから決着はつかなかった。そして、

「またなワズ。まあ何だ……頑張れよ？」

「はい、またお会いしましょう天本様。ご武運を」

俺たちをそれぞれの方向に歩き出し別れる。

(……さあ、行くとするか)

俺の目的地はただ一つ。

もう二度と訪れる事はない……そう思っていた今では廃墟と化した都市——『ディブレイクタウン』。

序章の終わりはもうそこまで近付いている。

## ある男の終わり始まり 《ゼロワン》

デイブレイク事件により廃墟と化した都市。

通称、デイブレイクタウン。

「……アークの意思のままに」

そこにある奇跡的に健在する大きな橋の上を滅は歩いてきた。彼の今の目的は**バルデル**の排除ただ一つ。アークは最初**バルデル**に利用価値を見出した……しかし、**バルデル**がこちらに及ぼした損害・計画の先送りを加味し、アークは改めてこう判断した。  
【一刻も早く脅威を排除せよ】と。

「……………」

アークの意思に忠実に従い動いていた滅は突然ピタリと足を止める。理由は橋の向こう側からこちらに歩いてくる人影が見えたからだ。

「まさか貴様の方から姿を現わすとはな」

その人影を何か認識した滅は「何故？」と理解できず、本音をそのまま口にした。

「ーバルデル」



滅の目の前に立っていたのは紛れもなく天本太陽<sup>バルデル</sup>。  
今、滅が排除すべき対象だった。



デイブレイクタウンに着き、橋の上を歩き出した俺は……目の前に滅の姿を見つけた。

「お前から来られるより、自分から行った方が何倍も気が楽だし。それに……お前からはどうせそう長くは逃げられないだろうからなあ」

「……賢明な判断だ」

「……滅、お前は俺が倒す。だけどその前に一つー」

俺は前の滅を見て、戦う前に問いかけた。

「ーお前はアークの意思に従って『人類滅亡』を目論んでるが……そこにお前の意思は含まれてんのか？」

「……何を馬鹿なことを……『人類滅亡』達成に俺の意思など不要でしかない。俺はただ、アークの意思に従うまで」

「和解の余地は？」

「ふっ、そんなものある筈がない。貴様らは人類。そして、我々の目的は貴様ら人類の滅亡なのだから」

「……そうかよ、だったら……」

予想通り、滅びてはアークとの和解の余地はないらしい。そりやそうか。和解できるんなら戦闘を避けられたかもだが……まあ元から倒すつもりだったんだから無問題だ。

（滅、お前は……やっぱりアークの操り人形なのか？）

「最初に会った時に言った通りだ……お前の人類滅亡っていうSFチックな使命は俺が一生涯叶わせねえ」

戦わずに済むならそれが最善だったが……ああ、やってやるさ。

「いいや、叶う。貴様を排除し我々は人類を滅亡させる」

「そんなこと絶対させるかよ……！」

【フォースライザー！】

【ショットライザー！】

結局はこうなっちまうか…。

ほぼ同時に懐からベルトを取り出した俺と滅はそれを腰に装着する。続いて互いに

手にプログライズキーを持ちボタンを押す。

『ストロング!』

『ポイズン!』

『オーソライズ!』

「ー変身」

俺はショットライザーにプログライズキーを装填し展開。滅は「変身」と冷たく言いプログライズキーをフォースライザーに装填しレバーを引いた。それにより強制的にプログライズキーが展開され、滅は変身する。

「フォースライズ!」

『ステイングスコープオン!』

【Break Down.】

ー変身した滅。

その紫色のスーツに無理矢理縫い付けたような無骨なアーマーが付いた姿は……正  
直言つて一度ボコボコにされたこともあつて若干トラウマだが……しゃあねーわな。

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「ー仮面ライダー、だもんなあ……はあー」

俺は息を吸って吐く。

緊張も不安も恐怖も吐き捨てる。

自分に言い聞かせるように呟く。

高く真つ直ぐ銃口を上げ、ゆっくりと下ろし相手滅に向ける。

「――変身ツ……！」

【シヨットライズ！】

――俺は仮面ライダーだ――

躊躇うことなくトリガーを引く。

滅はすつと僅かな移動のみでシヨットライザーから発射された弾丸を躲す。そして

俺は、

「おらあッ！」

『アメイジングヘラクレス！』

【With mighty horns like pincers that flit  
p the opponent helpless.】

いつもの如く右のアップパーを真つ直ぐ返ってきた弾丸に力強く打ち込んだ。瞬間、  
アーマーが次々に俺の体に装着されていき――変身が完了した。

シヨットライザーを持ち、俺が構えれば滅もまたゆつくりと戦闘態勢をとる。

「滅………これが最後の勝負だ」

「その通りー今日が貴様の命日だ」

「スウー………はああああ!!」

先手を打つたのは俺だった。

シヨットライザーを連射しながら滅へと駆ける。滅はその弾丸を全て難なく片腕で弾き、

「おらアー！」

「遅い」

「っ、らあッー！」

ーシヨットライザーをバツクルに戻し俺は跳躍して全力のパンチを放つが滅は最低限の動きのみでそれを回避し、カウンターに俺の足に蹴りを素早く入れようとする。軽いジャンプでギリギリその蹴りを躲した俺はもう一度拳を振るう。

「以前にも言った筈だ。貴様の戦闘能力、戦闘スタイルは既にラーニング済みだと」

「……滅、一つ良いこと教えてやるよ」

「……？」

攻撃を容易く回避し、弾き、受け流す滅の言葉。あー前にも聞いたよその台詞は。だ

けどなあ……！

「人は日々、成長すんだよオ！」

「ふっー」

そう言つて俺が放つた右フック。

滅をその攻撃を防ぐべく素早く手を動かし、

「ーッ！ 何だと？」

「どうした？ ラーニング済みだったんじゃねーのか、よっ！」

ー滅は防御に失敗する。

その要因は滅が予測していなかった実に単純な行動を俺がとつたからに他ならぬ。ー簡単に言えばフェイントだ。

「お前が今までの俺の戦闘能力に戦闘スタイルをラーニングしたってんなら、今までとは違う戦闘スタイルに変えればいいだけだ！」

「くっ……」

良くも悪くも今までの天本<sup>バルデル</sup>太陽の戦闘スタイルは荒く力任せな部分があった。だからこそ、そんな彼の戦闘データをラーニングした滅は今の今まで天本<sup>バルデル</sup>太陽の戦闘スタイルに関して固定的な判断を下していたのだ。しかし、

「おらっ！ っつちだア！」

「っ！……確かに貴様が戦闘スタイルを大きく変えてくるのは予想外だった。だが、その程度の付け焼き刃のフェイントは二度は通じん」

「ぐはっ……！」

「……それに対応できない滅ではない。

敵が戦闘スタイルを変えたならば、その変化した戦闘スタイルにさえ僅かな攻防の中で完璧に対応する。

滅は俺のフェイントを見切ると次は完全に俺の攻撃を捉え、素早く拳俺の腹部に打ち込んだ。その威力に俺は後ろに吹き飛ばされた。

「はあ……まだまだあー！」

「貴様は学習能力が欠如しているのか？」

「うっせえー！」

軽く息を吐き、ダメージを堪えながら立ち上がり滅に走る。それを見て心底からの言葉は呟く滅へ俺は前蹴りを仕掛け……避けられる。

「……俺の今までの戦闘能力も戦闘スタイルもラーニング済み、今までしなかったフェイントなんかを入れても数秒で対応される。……だったら……」

「付け焼き刃だろうがやるしかねえだろうがッ！」

付け焼き刃でも、何度でもフェイント以外の別の……俺が今までとらなかった戦闘スタ

イルをとってやらあ！ 俺は滅に接近して左でアツパーを放ち、それが回避・防御されることを見越して右手でバツクルに取り付けたシヨットライザーを引き抜き超至近距離で発射した。

ここままで至近距離でシヨットライザーを引き抜いたことも無ければ、撃つたこともない俺のその行動に回避できず滅は僅かに後退する。

「どらあッー！」

「っ、あまり調子に乗るな」

「ハッ、悪いなあ！ 俺は調子に乗れる時にはとことん調子に乗る主義なんだよッー！」

次に俺は更に今までとらなかつた行動をとる。滅の拳をわざと地面に倒れる事で避け倒れた状態のままシヨットライザーを滅の体に撃ち込み、怯んだその体に立ち上がる勢いで蹴り上げも入れた。

「ぐっ」

「っー！」

（今しかないだろこれッ……！）

滅は「予想外」の攻撃の連続に一瞬だが怯み初めて態勢を崩す。その隙は俺にとって絶対に見逃せない絶好の機だった。

「ッー」で、終わらせてやるッー！」



『ストロング!』

付け焼き刃は最終的には尽きる。

そうなれば俺の全ての攻撃は予測され完全に詰んでしまう。時間の経過は滅にとつては有利になるが俺にとつては不利にしかない。

手に持ったショットライザーに装填されたプログライズキーのボタンを押しした俺は――

【アメイジング ブラスト ファイバー!】

「はあああ――…はあッ!」

「っ!」

――トリガーを引いた直後に溜めを入れて高く跳躍する。タイミングよく右足に黄色のエネルギーが収束し、俺は空中で蹴りの構えをとった。

「――おらあああッ!!」

「――人類は滅びる運命だ<sup>さだめ</sup>」

そんな俺を見上げた滅は素早く対応をとる。

レバーを素早く押し戻し――引いたのだ。

【ステイング デイストピア!】

跳び蹴りをしようとする俺を向かい打つべく滅は跳躍せず、その場で蹴りの構えをと

りあの時と同じく複数の異様な管が滅の右足に集まり、

《left》滅《left》殲

跳び蹴りと蹴り上げー俺と滅の一撃が真っ向から衝突する。

黄緑のエネルギーと紫のエネルギーが弾け、眩い光を放つ。

ストロング

アステイングデ

メイ

イス

ジト

ンピ

グア

ブラストファイバー

「ッ！ はああああー!!」

滅の凄まじい必殺技に蹴りの態勢が崩れそうになるが、俺は気合で堪え必死に衝撃に耐え滅に必殺技を噛ませた。……しかし、

「……貴様では俺には勝てない」

「っ!? ぐううッ……!」

俺の必殺技は滅には至らない。

滅の必殺技は俺に容易く至る。

「ぐわああああアッ……!!」

滅の蹴りは俺の跳び蹴りを弾き返し、十分な威力を保ったまま俺のアーマーを破壊、顔のアーマーが弾け素顔が仮面の外から露わになり強制的に変身が解除される。その痛みに思わず叫び声が上がった。

「……勝敗は決したようだな?」

「ぐはッ! ぐッ……ああ……!」

地に倒れ、立ち上がろうとし口から血を吐きまた倒れる。そんな俺の姿を見た滅は冷徹にそう判断した。あーくそッ……! 何で、何で立てねえんだよ……! まだ、まだ負けるわけには……!

何とか落としたプログライズキーに手を伸ばし掴む。

（お前は、まだ……! 何もできてねえだろがッ……! こんなところで……死ねるかよオ!）

闘志はあるのに…俺の体は滅の必殺技を受け完全に限界寸前だった。

「ーッ!!」

再び立ち上がろうとした直後、俺の手からプログライスキーが零れ落ち、口からはまた血を吐く。そして、地面に転がるプログライスキーにべたりと俺の血がつき俺はまたもバランスを崩し倒れる。

ー何となく悟った。

ー「こりや死ぬわ」って。

「ふっ…哀れだなバルデル」

思ってもないくせに何が哀れだ……。

感情の感じられない冷たい声でそう呟いた滅は倒れる俺にゆっくりと歩み寄ってくる。なのに不思議と俺の中には不安も焦りも、恐怖もなく、

『バカ兄早く早く！』

『いいえ初対面ですよ。はじめまして太陽君。私は…こういうものです』

『ーそれが私の使命だからです！』

『私の名前はワズ・ナゾートク。探偵型ヒューマギアです』

『！ 天本君、よく来てくれた！』

『まあ今日で君は退院なんだが…はあー、デイブレイクの時にも思いはしたけどね？  
君はホントにしぶといよねえ……』

一瞬、視界全てが真っ白な光に包まれたかのような…そんな幻を見た途端に脳内に今までの無数の記憶が鮮明に蘇ってくる。

『そうか……なら、精一杯気張りなよ』

こんな俺の背中をそつと押してくれる人がいる。

『ーちゃん、帰ってくるよね……？』

こんな俺の帰りを待っていてくれる家族がいる。

『それはそれで悪くないかもしれないね』

ロクでもないこと考えてるだろうけど……こんな俺の力を確かに信頼してくれている仲間友がいる。

『はい、またお会いしましょう天本様。ご武運を』

こんな俺の身を案じてくれる人間よりも人間らしいヒューマニア友がいる。

「ーああ、まだ……」

(倒れるわけにはいかねえだろ……ッ！)

「ー倒れるわけにはいかない。」

俺が何の為に戦っているか……今、滅を止められるのは俺だけだから……これが俺の「使命」だから。

「ハハッ……勝手に勝った気で、いんじゃねえよバーカ！」

不思議だな。

さっきまではいくら頑張っても願っても、動かないぐらいに死に体だったのに今は確かに動く。血が零れたプログライズキーを力強く掴み、俺はゆっくりと……だが着実に立ち上がる。体の奥底から力が込み上げてくる……！

「なんだと？」

滅にとってそれは「ありえない」現象であり……滅は思わず声を上げた。天本バルデル太陽の体にはもう戦う力など残されている筈がない。立ち上がるなんて……普通なら出来る筈がない……

天本バルデル太陽の精神力、行動力に困惑する滅。しかし、すぐに冷静に状況を確認して口を開く。

「ーーだが、貴様にはもうドライバーは無い」

そう言い滅は必殺技により装着が外れ、火花を散らして転がっているショットライザーを見やる。あー確かにあんだけ壊れちまったらショットライザーはもう使えない……むしろここまでプロトタイプなのによく保ってくれたなって感謝したいぐらいだ。

「ーさあ、それはどうだろうな？」

「！ それは…!?!」

滅は俺が懐から取り出した物を見て驚愕した。そりやそうだ…俺だつて天津さんにいきなり見せられた時はそんな顔したからな。

「何故貴様がそれを持っている…?」

「悪いが、企業秘密だつてよ」

天津さんが言っていた。

これはヒューマギアが使用することを前提に作られた物であり、人間が使用することは想定されていないと。…滅の装着を見りやわかる。人間の俺が装着したら絶対痛い！でもやってやる。

ー柄じゃないが、

(ーこいつをぶつ倒して、みんなの未来が守れるつてンなら！)

「ーやるつきやねえだろオ！」

【フォースライザー！】



父さん、母さん、美月、ドクター、天津さん、飛電さん、ワズ。みんなの未来の為に……俺は、俺が望む未来の為に戦う！

左手に持ったフォースライザーを腰に勢いよく装着する。その途端、

「ツツ!?」がああああアアツツ!!」

「……それは人間が使いこなせるものではない」

ーフォースライザーから赤黒い火花が激しく散る。尋常じゃない「激烈」な痛みが身体中を駆け巡る。出血が更に加速していき体が大きくふらつく。だが、

「ああああああアツツ!!」

『ストロング!』

死んでも倒れてやるか……!

その思いで何とか踏み止まり、俺は右手に持ったプログライズキーのボタンを押してフォースライザーに装填した。流れ出す警告音染みた待機音、危険に赤く点滅するランプ。更にプログライズキーからヘラクレスが現れ滅に向かって豪速で飛ぶ。

「ぐっ……!」

未だに驚愕する滅はそれを完璧に避けられず、アーマーからは火花が散り後退する滅。ヘラクレスはそのまま回転しながら空に飛び上がっていく。はっ、まさかお前のそんな顔が見られるとはなあ? 俺は激痛を一切感じさせないような不敵な笑みを浮か

べ叫んだ。

「――変、身ツ…!!」

【フォースライズ!】

激痛なら幾らでも来い。ただ、それに見合った力を寄越せよ!?

レバーに右手を掛け――レバーを引いた。瞬間、

「ツ…!」

――空に飛び上がったヘラクレスが豪速で俺の元へと戻ってくる。その途中に滅の背後へと攻撃を仕掛けるヘラクレスのライダーモデルを滅はギリギリで躲し、

「――ぐあアアアツ!!」

――俺を殺すように。

――俺を支えるように。

ヘラクレスのライダーモデルは強靱なその角で前のめりになった俺の胸を貫き、強制的に立った状態を維持させる。

(悪<sup>わ</sup>りい……あと少しだけ、俺に力貸してくれ)

心の中でぼつりと眩く。

プログライズキーに心がない、それはわかってる。

でも今までずっと一緒に戦い続けてきたコイツに俺は確かな愛着を持っていた……。

そして、

『アメイジングヘラクレス!』

【Break Down.】

「ツツツはあッ!」

ーそんな思いに応えるように俺の体は黄緑のスーツに包まれ、更にケーブルに繋がった無骨なアーマーがゴムのように伸縮し勢いよく俺の体に装着される。最後に体から赤黒い煙が排出され、その複眼が赤く光った。

「馬鹿な……」

(ああ、俺はきつと最高に馬鹿になっちまったんだろうな)

滅の言葉に俺自身内心で同意した。

-----

「ーやはり、君なら変身に成功してしまうでしょうね」

フォースライザーでの変身を果たした太陽。社長室でその映像を見ていた垓はどこ

か分かっていたかのように、どこか悲しげにそう言う。試作品のショットライザーでの変身を一発で成功させ、更には今フオースライザーでの変身にも成功してみせた……。その要因を彼の「精神力」によるものではないかと垓は考えていた。

（ダイブレイクに不幸にも巻き込まれたにも関わらず、ヒューマギアを憎むことなく……それどころか飛電是之助の夢に対する熱意を目の当たりにし、その夢を応援しようと思ひヒューマギアに期待し続けた。それだけでも恐ろしい精神力だが……）

「君はマギアと戦い続けた。何度も何度も……」

戦う力を持っていても、ヒューマギアに確かに不安を抱きしつかりと「恐怖」の感情を忘れることなく持っている。そんな人間が何度も命を懸けて戦う……常人の精神力なら耐えられる筈がない。だが、彼は……天本太陽はその強靱な精神力を持って耐えた。

「……全く、本当に君には頭が下がるな。太陽君」

天津垓にとって天本太陽は重要なビジネスパートナーだった。最初は太陽を中々使える「道具」と勝手に判断していた垓だが、徐々に太陽と会話を交わす中でいつの間にか彼を「道具」だとは考えないようになっていた。

本来、垓は太陽を「序章の主役」に仕立て、マギアと戦わせて同時にショットライザーとプログライズキーの戦闘データを収集させ、最後には滅の前に敗れさせるつもりだった。垓の目的はショットライザーを完成させるのに必要な試作品のデータ収集、そして

都市伝説として「仮面ライダー」の名を多くのものに知れ渡らせること……これは垓の今後の目的にとっても大きな意味を持つ。

しかし、フォースライザーを太陽に渡した時点でこの計画は破綻する可能性を孕んでいた。ならば何故フォースライザーを渡したのか……その理由は単純なものだった。天津垓は最早、天本太陽を「道具」だとは思っておらず、

「私が尊敬したのは飛電是之助に続き、君で二人目ですよ天本太陽」

——天津垓にとって天本太陽は尊敬に値する数少ない友人になっていた。



「何故、貴様は……そこまでして戦う?」

気が付けば満身創痍の俺に滅は心底からの疑問を呈していた

「ンなの……決まってるだろ」

「『仮面ライダー』として、俺にも守りたいものがあるからだッ……!」

俺はそう口にして滅に向かって疾走した。

「っ!? この速さはー」

「おらおら、おらあッ!」

右、左、右、左、右。

何度も何度も拳を連打する。

使い勝手がショットライザーと違うこともあり違和感がある。身体中に走り続けている激痛も消える気配はない。だが、フォースライザーはその性能を遺憾無く発揮してくれてるらしい。俺の攻撃は先程とは比べ物にならない重さと速さを持って振るわれる。

滅がラーニング済みの俺の戦闘データは「アメイジングヘラクレス」と「ライジングホッパー」を使い「ショットライザー」で変身した場合のもののみ。今、こうして初めて「フォースライザー」で変身したため、勿論フォースライザーで変身した場合の俺の戦闘データなど滅はラーニングしていない。

つまり今の俺は滅がラーニングしていない「未知」ということだ。まあそれを言うなら…俺にとっても未知だがな? 体に走る痛みに動きが鈍りそうになるが……この瞬間だけは、死んでも使いこなしでやるよ!

「舐めるな……！」

「はッ、甘ええ！」

「なっ!?!」

「そっ、どらああッ!!」

滅は俺の攻撃に大きく怯んだが、反撃しようとしたあの針を俺の胸に刺そうと素早く突き出してくる。しかしそれを見切った俺は片腕で突き出してきたその腕を掴み止め、右のジャブで更に滅を怯ませ右足の横蹴りを放つ。滅は後ろに吹き飛び初めて地面を転がった。

「ッ！ 行くぞッ！」

その隙を見逃すことな俺は追撃する。

前回とさつきで二度見た滅の見様見真似で、俺はレバーを押し戻してローレバーを引いた。

【アメイジング デイストピア！】

「ローりやあああッ!!」

立ち上がる瞬間の滅に跳躍し、黄緑色のエネルギーが急速に収束していく右拳を着地直後に滅の胴体に全力で打ち込んだ。

アメイジング

「！　ぐはッー!?」

滅は防御が間に合わず、まともに受けて大きく後ろに吹き飛び…何とか倒れることなく着地する。しかし、その体は予期せぬ攻撃速度・攻撃力により急激にダメージが蓄積され、予期せぬ事態の連続に滅の思考は乱れ始めていた。

（俺の予測が間に合わない…？　先程までのバルデルとは比べ物にならない…だと…？  
なぜ、何故だ？）

「ぐッ…一体どこに、こんな力が…？？」

残っている筈がない。あり得る筈がない。

理解できない事態に滅は混乱しながらも口を開く。そんな滅の目の前でー。

「がはッ！　はあ、はあッ、知るかよんなこと…！」

ー俺は仮面の下で吐血し体がぐらりとふらつく。



地に片手をつき荒く呼吸する。何とか倒れることなくそこに踏み止まる。  
そろそろマジで限界か…。

ならとつとと終わらせないとなあ？

「ー滅！ お前を止められるのは、ただ一人ッ…俺だッ!!」

僅かによろめく滅を指差し、その指を俺は自分自身に向けて力強く告げる。これが真正銘の最後だ…滅ッ!! 俺はまたレバーを押し戻しー勢いよくレバーを引き、高く跳んだ。

「アメイジング ユートピアー」

「はあああああー!!」

体中から再び排出される赤黒い煙。

俺の体中を駆け巡る激痛が更に増し「激烈」なものとなすが、痛みに怯むことなく俺は空中で蹴りの構えをとる。自然とその構えは先程敗れた必殺技と同じ構えだが…負ける気はこれっぽっちもしなかった。

(父さん…母さん…美月…ドクター…天津さん…飛電さん…ワズ…)

「みんなの未来は俺が守ってやるッ…!

お前の計画はここで終わりだ、滅ッ!」

右足には赤黒いエネルギーと黄緑色のエネルギーが爆発的に集まる。

（「俺が負ける……？」）

「…違う。我々は人類を滅亡させる。

終わるのは貴様だけだ……！ バルデルツ！」

「人類滅亡」という計画の破綻、アークの意思により自らに課せられた目的の達成失敗という可能性を理解した滅は、人間の前で初めて怒りを露わにした。その手はレバーを押し戻し「素早くレバーを引いた。

「ステイング ユートピア！」

滅は先程とは違いバルデルと同じく高く跳んだ。右足には最初に放った必殺技の時よりも遥かに大量の管が伸び集まり「紫色のエネルギーが収束する。次の瞬間、

《left》滅《left》殲

「おつーらあああああー！！！」

「ーはあああああー！！！」

二つの必殺技がほぼ同じ高さから真正面から激突した。凄まじいエネルギーの衝突に足場にはヒビが走り、周囲の空気は切り裂かれる。

ステイング  
 ユーロピア  
 アメイジング  
 ユーロピ  
 ア

互いの思いがぶつかり合い——そして、

「————」

「————」

——必殺技を放ち合った二人は地面に着地する。

互いに背を向けている状態の中、先に動いたのは滅だった。

「くっ………こんな、ことがッ……」

変身が強制的に解除された滅は多くの箇所の装甲が剥がれ落ち、素体パーツ部分が剥

き出しになっており、顔の半分は金属が剥き出しの状態と化していた。緩慢な動きで振り返った滅は俺に目を向ける。

「がア……………くっ、ああッ」

体力の限界を迎えた俺はよろめきながらもフォースライザーを押し戻し、変身を解除した。途端に反動が体を襲う。

「…ッ、ッはッ……………！ うぐッ……………」

手から血に濡れたプログライズキーが落ち、俺はまだこんなに体に残ってたのか？と  
思うほどの血を吐き、

「……………ッ」

（……………）めんな、美月ー」

俺の意識は遠のき体はまるで物かのようにぼたりと倒れる。意識が途切れる寸前に、  
俺は嘘をついてしまった妹へ心の中で謝罪を零した。

「損傷率78%…任務遂行は、困難と判断……………」

火花が散る胸を片手で抑えながら滅はノイズの混じる声で口にする。アークは滅の  
その独断に反対することはなく、

「ッ……………バルデル、貴様は……………」

力尽き倒れた男の横に転がる黄緑色のプログライズキーにまで近付き、手に取りゆつくりと天本太陽バルデルに目を向ける滅。

……今の滅には確実にトドメを刺す余力すら残っていないかった。だが、

トドメを刺さずとも太陽が死ぬのは時間の問題だった。

「……馬鹿な男だ……」

滅は血に濡れたプログライズキーを強く持ち、ふらつきながらおぼつかない足取りでその場から離脱する。デイレイクタウンの拠点には設備が十分に整っておらず、滅の完全な修復にはそれなりの月日が必要なのは明白であり「人類滅亡」という計画は「先送り」するしかなくなった。

――天本太陽は勝負に負け試合に勝った。

――序章はこうして幕を閉じる――

「太陽君。やはり君を序章の主役に選んだのは……私のキャスティングミスだった……。ええ、ですからー」

天本太陽の死闘を見た垓は……社長室で一人呟くと行動を開始した。

「ー私の自己満足に他なりません……名譽挽回、といきましょう。君には借りがありません……それを返せず君に勝手に死なれては私の名が廃りますからね」

自分に言い聞かせるように理由を口にする垓だが本心は実に単純ーただ友を死なせたたくない、それだけである。

それから月日は流れー。

「バカ兄にい。今日もいい天気だよー？」

「……………」

大人になった少女はとある病室で、カーテンを開きそこに眠る大切な家族に声を掛ける。しかし返事は一つも返ってこない、それどころか反応は皆無だった。

「いい加減、起きてくれてもいいじゃん！ 就職もせずは何ずつと寝ちやつてんのさ……早く起きないと、私も愛想尽きちゃうよ？」

嘘だ。尽きる筈はない。

もう何年も…何十年もこうしてお見舞いに来ているのだ。月日の流れにより大人びた少女とは違い、ベッドの上に眠る青年の容姿はあの時と比べてかなり？ せ細っているものの驚くほどに若さを保ちそのままだった。まるで一人だけ時間が止まったかのよう……。

「……………兄にい…寂しいよお……………」

動かない兄の手をぎゅつと優しく握って美月は本音を零し、泣き声を上げることなく涙をぼつぼつと流す。涙でベッドが濡れる…長い月日が経つが、美月の中の悲しさと寂しさは未だ消えることはなかった。

「……………え……………?」

その時、兄の手がほんの僅かにびくりと動いたような気がした。





——新時代の風が吹く——

命を懸けた青年の「未来を守りたい」という意思是、確かに繋がり——今も未来は続いている。

「——ラーニング完了」

『ジャンプ!』

【オーソライズ!】

同時に脅威と戦い守りたいものは違えど……何かを守りたい者はまた現れる。

衛星ゼアから地上に現れたバツタのライダモデルは縦横無尽に遊園地内を跳び回る。青年は手に持った「ライジングホッパープログラムライズキー」のボタンを押し腰に装着したゼロワンドライバーの認証装置に当てる。そして流れるような動きでプログラムライズキーを展開し、

「——変身!」

【プログラムライズ!】

——ゼロワンドライバーにプログラムライズキーを装填した。瞬間にバツタのライダモデルは青年に向かって跳び——黒いスーツに包まれた青年の体に更に黄色の装甲が装着された。

『飛び上がライズ！』

ライジングホッパー！』

【A jump to the sky turns to a rider kick.】

青年——飛電或人は変身を果たす。

「——お前は何だ？」

「ゼロワン！　それが俺の名だ！」

再び現れたマギア。

新たに現れた仮面ライダー。

本編が今、幕を開けた

# 仮面ライダーバルデル全フォーム集とおまけ

仮面ライダーバルデル

アメイジングヘラクレス

SPEC

??身長：197.0cm

??体重：97.6kg

??パンチ力：40.8t

??キック力：26.9t

??ジャンプ力：15.2m（ひと跳び）

??走力：4.1秒（100m）

★必殺技：アメイジングブラスト、アメイジングブラストファイバー

デイレイク被害者である天本太陽がショットライザー（後のエイムズショットライザー）とアメイジングヘラクレスプログライズキーを使って変身した姿。

荒い強い堅いの三拍子揃った天本太陽の基本フォーム。

パンチ力と持久力がともに高い安定したフォーム。

仮面ライダーバルデル

ライジングホッパー

SPEC

??身長：196・8cm

??体重：90・5kg

??パンチ力：20・8t

??キック力：45・0t

??ジャンプ力：50・1m（ひと跳び）

??走力：3・9秒（100m）

★必殺技：ライジングブラスト、ライジングブラストファイバー

デイレイク被害者である天本太陽がショットライザー（後のエイムズショットライザー）とライジングホッパープログラムライズキーを使って変身した姿。

ジャンプ力と跳弾を生かし敵を攪乱する天本太陽の新フォーム。キック力が非常に高いフォーム。

仮面ライダーバルデル

アメイジングヘラクレス

〔フォースライザーver.〕

SPEC

??身長：197・5cm

??体重：98・6kg

??パンチ力：48・8t

??キック力：31・5t

??ジャンプ力：16・5m（ひと跳び）

??走力：3・7秒（100m）

★必殺技：アメイジングデイストピア、アメイジングユートピア

「レイブレイク被害者である天本太陽が「フォースライザー」と「アメイジングヘラクレスプログラムズキー」を使って変身した姿。

激烈な痛みと引き換えに限界までプログラムズキーの力を引き出す天本太陽の強化フォーム：？ 人間が使用することは想定されていないため変身するだけでも大きなリスクを伴う。



ー仮面ライダーゼロワン！

「良くも悪くも世の中変わってねえなあ……」

「またプログライズキーが消えただと…!？」

再び消えたプログライズキー!？」

「私からの細やかなプレゼントですよ」

「俺が最強だアアアー!!」

新たに現れるライダー！

「彼の復活を目にするのが私一人とは…些か勿体なさ過ぎますね」

「悪いけど、手加減できそうにねえわ」

序章の“仮面ライダー”の復活…!?

「お前が仮面ライダー、バルデル…:…?」

「ー変身ツ…!」

第?話 荒いアイツは仮面ライダー!

Another Daybreak  
in Balde  
r

デイブレイク事件

それがこの世界の大きな分岐点だった

x月x日。

「ニンゲンハ、ゼツメツ！」

「ミナゴロシツツ!!」

「ぐう……く、くそお……!!」



西暦2019年。

「世界は人間にとつての地獄に、ヒューマギアにとつての楽園と化していた。」

ヒューマギアにより武器を奪われ、地面に倒れた男は悔しげに声を上げた後。次に来る痛みを目を閉じ、

「ーおらあッ!!」

「!? た、太陽さん!」

「ーヒューマギアの攻撃が倒れた男を襲うより早く、隙だらけのヒューマギアの後頭部を俺は手に持った散弾銃の銃床で全力で叩き倒す。」

「ニンゲンハゼンインー」

「ー殺人マシーンは黙ってろッ!」

「! ツ……………」

新たなターゲットを発見し振り返ったもう一体のヒューマギアだが、俺が素早く頭を散弾銃で撃ち抜けばそれで沈黙する。

「おいしっかりしろ……!」

「すいません、太陽さんッ」

俺、天本太陽は地面に倒れた男に肩を貸して再び動き出す。

(こりゃここの拠点も潰れちまうな……ほんと最つ悪!)

既に壊滅的な被害を受けている拠点を見渡し、俺は内心愚痴る。人間絶対殺すマシーンと化したヒューマギア共が何十体と暴れ、貴重な人間達の拠点を蹂躪していき、あちこちから銃声や悲鳴が聞こえるその様子はまさに悪夢だ。

十二年前に起こったデイブレイク事件から世界は一変した。簡単に言ってしまうえば人間とヒューマギアの関係が逆転し、最悪な事に人間がヒューマギアに支配される……そんなSFチックな世界になってしまったのだ。今思い出してみても、俺という人間にとつて……いや、今を生きている人間にとつて十二年前のあの日が地獄の始まりだったのだろう。

「これも全部あのクソ野郎のせいなんだよなあ……」

小声でこの状況を生み出した原因を作った人物を思い出し、俺はキレながらギリギリ救出できた仲間と共にその場を離脱した。

俺の名前は天本太陽。

世界がこんな事になる以前はどこにでもいる就活中の一般人……だった筈なんだが、気付けば「レジスタンス」の一員になってます。

……なんでこうなった……。

「太陽さん、本当にありがとうございました……」

「いや、別に頭下げなくてもいいって。『ありがとう』って言うなら早く怪我治せよ」

「はい！」

残りたった一つ、俺たち人類の最後の拠点にまで無事帰ってこられた俺たち。救出した仲間からめっちゃ感謝されたが、別に感謝される程のことでも……ないこともないな。うん。まあ感謝する暇あんなら早く怪我完治して戦線に復帰してくれ！

そうすれば俺の生存率も上がるからなあ！（建前）

……いやあ仲間少ないと怖くてしやあないからなあ！（本音）

（はあ……まじで詰んでんな、俺ら）

拠点を移動する最中、衛生状態が悪く、食料も底を尽きかけ、負傷者や病人の治療もままならず、ヒューマギアに抗う為の武器などの物資の不足……ジリジリと追い詰められている現状を改めて認識してまず先に危機感よりも思わず「諦め」の感情が沸く。

このままの調子でヒューマギアと戦っていけば、早くてあと一週間程で俺たちは全員もれなくヒューマギアによって殺される…。

「……いやでも、諦められねえんだよなあ?」

ぼつりと独り呟いた俺は生き残った家族の元へと向かった。

俺にはまだ俺の帰りを待つてくれる家族がいる。

俺を信じて共に戦つてくれる仲間がいる。

だからまだ諦める訳にはいかない。

「! 兄にいつ、おかえり!」

「ああ、ただいま美月」

「あ、太陽だあ〜!」

「わあ! おじちゃんおかえりい〜!」

「おかえりなさい!」

「いやおじちゃん言うなし!……あーただいまガキ共」

拠点にある倉庫から少し離れた場所。そこに行けば敷かれたボロボロのシートの上  
に美月と美月が面倒を見ているガキ達が俺は明るく迎えた。こんなご時世なのに子供  
は明るいなあ……マジで子供は世界の宝だつてはつきりわかんだね!

美月が面倒を見ているこのガキ達は今の明るい様子からは考えられないが、ヒューマ  
ギアにより既に親を亡くしてる孤児だ。最初の時はそれはそれは暗かった……そりや  
そうだ。幼くして両親を亡くして、こんな地獄のような世界で孤独になつちまえば、誰

だつて絶望に打ちひしがれる。

「兄にい、はいこれ」

「いや、俺はいいからお前が食えよ」

シートに腰掛けた俺に美月は食糧を差し出してくるが、俺はすぐに遠慮した。今の状況が食糧は超が付くほど貴重だ。だから食糧は出来るだけ俺みたいな大人にじやなく、ガキ共に食べさせてやるべきだろうと個人的には思う。

「はあ？ なに言つてんのさバカ兄にい！ 昨日も一昨日もそう言つて何も食べてないでしょ」

「別に俺はいいんだよ。それに水がありや三日は死なないって言うだろ？」

水がありやあオラ三日は死なないからまだ大丈夫だ（悟空）

……まあ水もかなり貴重なんですけどね？

「おじちゃん、ご飯食べなきや死んじやうよ……？」

「……大丈夫だつて心配すんな。あとおじちゃん言うな」

「太陽、死んじやうの……？」

「おじちゃん死んじやだよお……！」

「うおっ！ お、おまつ何泣いてんだガキい……!？」

…俺は仕方なく食糧を食べた。

いや食べたというか美月の手により強引に口の中にぶち込まれた。二日振りの飯だったからめちやくちや美味しく感じたけども。それとガキ共がみんな俺がご飯食ったのを見てすげえ安心した顔してたんだが……お前らしい子すぎやろ!? 一体誰に似て……美月だな間違いない（確信）

そして、俺はまた別の場所へ——この拠点に居る『諸悪の根源』の元と向かった。

「おや、これは太陽君。無事に生き残れたようで何よりです」

「——何が何よりだ張つ倒すぞ」

「これは怖い怖い」

（うわあ、ぶん殴りてえ……!）

貴重な資源や部品、設計図が大量に置いてある拠点の地下室。そこにいた諸悪の根源——天津垓は相変わらずの自信に満ち溢れた態度で手元の資料から顔を上げてニコリと笑った。……イケメンな外見してるが騙されてはいけない。これでもこの男は実

年齢45歳、しかもデイベレイク事件が起こるそもその原因を作ったバカ野郎だ。

別に殴つてもよくないか?とか思ったが実は最初にこの男に会った時、衛星アークに悪意をラーニングさせた云々の話を聞いて既に一発殴っているから今回は勘弁してやろう。我慢だ我慢。

「それで太陽君、君の要件は…?と聞くまでもありませんね」

「ああショットライザーの修理を終わつたか? それと俺のプログライズキーを元に勝手に新しいプログライズキーを作つたらしいが…:俺のプログライズキーはどうした?」

「…心配は無用。ちゃんとバックアップはとっていますよ」

「…天津垓は現在俺たちレジスタンスの一員として主に武器などの修理・改造を行っている。」

「それと、ショットライザーの修理も完了していますよ」

本人曰く「自分の愚かさを痛感した」「罪を償う」だとかなんとか言ってるが俺は正直まだ信じていなかった。だって当然だろ? 今の地獄を作つたそもその原因を生み出したヤツの言葉なんて信用ならねえ。これは俺以外のレジスタンスのメンバーや、生き残つた人々の総意だ。

垓が出したプログライズキーと修理済みのショットライザーを受け取り、外観を確認

した俺は一度領きショットライザーを懐に仕舞う。こんな世界になっちまったせいで本来なら戦う必要もなかったはずの一般人の俺が戦う羽目になってしまった……本当最悪だよ。……しかも更に何故か、この三挺しかないショットライザーの一挺も俺が使用する事になった……これもまたレジスタンスのメンバーに、生き残った人々の総意で。（なんで俺なんかこんなもん……完全に宝の持ち腐れつつうか、豚に真珠つつうか……いや、ありがたく使わせてもらってるけどさあ）

ちなみに残りの二挺のショットライザーは既にレジスタンスメンバーの二人が使用している。使用者の名前は「不破諫」に「刃唯阿」。俺なんかとは比べ物にならないぐらいに頼りになる若者だ。

……ん、俺？ 俺は32だけど……いやしゃあねえだろ!? デイブレイク事件当時の俺20歳だからな! あ、どうでもいいが俺の容姿は美月や仲間達曰く「年齢よりかなり若く見える」らしい。これはもしかして褒めてんのか? それとも大人っぽくないと貶されてんのだろうか?

「……そういや天津。あんたが言ってた例の……ドライバーの開発の方は順調なのか?」

「……そうですね。資源が底を尽きつつある現状では中々に厳しい、というのが正直なところですよ。まあ、諦める気は更々ありませんが」

「ハッ、だろいな」



天津垓は武器の修理を主にやってるが、レジスタンスのメンバーから許可を得てヒューマギアに対抗する新たな装備の開発ライダーも行なっている。元社長なだけあって他の開発メンバーの指揮を上げるのも上手いし、カリスマ性も結構ある……認めるのは癪だけど、正直めちやくちや助かつてる。……まあ絶対に許さんけどなあ……？

「開発まで、あとどんくらい掛かりそうだ？」

「破壊したヒューマギアから手に入れたパーツや、拠点内にあるジャンク品を掻き集めて開発に当たっています……現在の完成率400%……完成までは早くてもあと一週間以上は掛かるでしょうね」

「……一週間、か」

そりや中々厳しいな……。

現在ヒューマギアと戦闘できる「仮面ライダー」はバルカンとバルキリー、ついでに俺ことバルデルの三人のみ。……しかも相手の方にもヒューマギアの仮面ライダーが二人。それと気色悪い見た目の怪人？化け物？に変身するヒューマギアが一体。

しかも相手は資源も余裕ありまくり、プラスに一体一体が強力であり不破と刃と共闘してもあつちの仮面ライダー二人……滅と迅には勝てそうにない。三対一に持ち込めればワンチャンあるんだがなあ……。

「まあ抗うしかないよなあ……はあー」

「でしょうね……。開発中のドライバーについてですが、コレは本来作ろうとしていた物の性能と比べて、かなり性能が低くなってしまうですね。理由は……純粋な資材不足によるものです」

「だろ。逆にこの状況で元の設計通りの高性能なブツが作れたら驚くわ。んじゃ、ドライバー開発の方は引き続き頼む……頼むからまた馬鹿なこと企んだりすんなよ……？」

「ふっ、悲しいですねえ……信頼してもらえないというのは」

「はっ、どの口が言ってるんだ諸悪の根源。むしろ、レジスタンスのみんなから信用してもらえてるだけ感謝しやがれ。……俺だっただらお前なんて信用せずに潰してる」

「……ふふ、あなたのような善人が相手が悪人とはいえ……人間を潰すなんてことができませんかね？」

……マジで腹立つなこいつ。

何でもかんでも知った気でいやがって。

正直今すぐ殴りかかりたいが……んなことに貴重な体力使うのも馬鹿らしい。あーそれと、

「ー勘違いすんなよ天津塚。俺はあんたのやったこと、これっぽっちも許してねえし許すつもりもない。……お前がまた馬鹿げたことして、レジスタンスのみんなを危険に

晒すってんなら……その時は真っ先にお前を潰す」

「ー悪いが相手がたとえ人間でも、生き残ったレジスタンスの仲間達や俺の家族に手を出すんなら……襲い掛かってくるヒューマギアと何ら変わらないー敵だ。

不破の言葉を一部借りるなら「敵は残らずぶつ潰す」だ。

俺は天津にー効果があるかは不明なー何度目かの警告をしてその場を後にした。

その後、話は進み……どうやって今まで生き延びていたのかは不明だが「飛電或人」が発見されレジスタンスの拠点に連れてこられた。また、その飛電或人を追って敵が拠点に押し寄せてきたり……怒涛の展開を迎えた俺たちはー最後の賭けに出ることになった。

「……太陽、あんたらの方は大丈夫なのか？」

「なんだ、今更になって他人の心配してんのか？ そんな余裕お前らにはねえーんじやねーの……？」

それに「大丈夫なのか？」はこっちの台詞だつづうの。俺は声を掛けてきた不破に逆に言う。

「俺がやることは変わらねえ。俺はただヒューマギアをぶつ潰すだけだ」

「……相変わらず平常運転で安心したわ。

んじやそつちは頼んだぞーバルカン」

「ああ、あんたもなーバルデル」

俺が拳を軽く突き出せば、不破はニヤリと笑ってからその拳にコツンと自分の拳を合わせた。……おっさんなのに臭い台詞吐いちまったなあ…（羞恥）

「不破、こつちは全員の準備が整った。いつでも行けるぞ」

「わかった」

「……刃、不破が暴走しないようちゃんと見てやってな？ 目を離したらすぐ好き勝手

やり始めるからなこいつ」

「ええ、それはよく知っています」

「！ お、お前ら一体俺を何だと思ってるっ!？」

「野良犬」

おーハモった!？（謎の感動）

刃ーバルキリーと顔を見合わせて思わず微笑する。それを見た不破は「野良犬」と言われたことになかなりキレた様子だった。

「そんじや、そろそろ俺の方も行くとするかな。不破、刃。イズの救出、それとヒューマギア共の相手……任せた」

「ああ……あんたも、死ぬなよ」

「はい。そちらも……武運を」

「死なねーよ。死ぬどころかヒューマギア全員片付けてそっちに駆けつけてやるっての」

その会話を最後に俺たち三人の「仮面ライダー」は解散した。不破と刃、バルカンとバルキリーはイズを救出するため敵の本拠地と化した飛電インテリジェンスへ。俺、バルデルは、

「さあてー防衛戦と行くか」

拠点に残った僅かなレジスタンスメンバーと共に、拠点を防衛する為にこちらに今まさに向かってきているヒューマギア共の相手をする。

拠点の中央に行けば、そこにはもう戦闘に参加するレジスタンスの仲間達が全員集まっていた。……ここに集まったのは全員自ら志願した奴等だ。防衛戦なんていうが、正直……勝ちの目は無いに等しい。

飛電或人が前に拠点に居た際に言っていた「アナザーライダー」だとか「元の歴史」とか……。詳しくはよく理解できてないが、或人の言うことが真実ならあの異形の化け物「アナザーライダー」とやらを倒しちまえばこの世界は元の歴史、世界に戻るといふ。

(とんだ夢物語だよなあ……)

全く以って信じられない夢物語みたいな話だが……。

（「元」の歴史とか、元の「世界」を俺たちは知らねえけど、きつと今よりは大分ましな  
んだらうさ）

「任せたぞ、飛電或人ーそれに『ジオウ』」

今はその話を信じるしかない。

一瞬目を閉じ、一度だけ共闘したあの謎多き「仮面ライダー」を思い出した俺はぼつ  
りとそう零した。

俺は演壇……というにはかなりボロく無骨な台に乗り、全員の視線がこちらに集まった  
のを確認してから口を開く。

「みんな……今から戦おうって時に、こんな事言うのはよくねえんだらうけど……正直  
に言うーこれから俺たちは十中八九死ぬ」

「「……………」」

その場全体が沈黙し重々しい空気が流れる。士気を下げる……台無しな言葉だろうが  
俺は構わず続ける。たとえ士気が下がろうとも、今まで共に戦い生き延びてきた仲間達  
に嘘は吐きたくなかった。

「だから、今からでも遅くない。死にたくないヤツは逃げろ。逃げていい。まあ今更逃  
げる場所なんてどこにあんだって話だが……それでも、死にたくないなら逃げろ。それ

を責めたりなんてしないから」

「――」

「てめえが死んで、悲しむ家族がまだ居るなら今すぐ逃げろ。俺が、てめえとその家族のところに、ヒューマギア共は一体たりとも絶対行かせねえから」

死にたくないなら逃げろ。

悲しむ家族が居るなら今すぐ逃げろ。

まあ本音を言う俺は今すぐ逃げたい。

戦うのはいつまで経っても怖えし慣れねえし。

士気を下げる発言した筈なのに、誰もその場から立ち去ろうとはしなかった。きっとみんなとつくに覚悟は決まっていたのだろう。

（俺が死んだら美月は悲しむか……？ まあ悲しむだろうなあ……うちの妹いい子だし）

それでもやるしかねえんだよ。

やらなきや大勢の人が死ぬ。

びつくりだよな？ 世界がこんな事になる前は「赤の他人」なんてどうでもいいって

ガチで思ってたのに。

（いや……命を懸けて一緒に戦って、生きて、笑ったならそりやもう赤の他人じゃねーよな？）

「もし、俺の今の話を聞いてまだ戦う気があるんなら………！ー行くぞ馬鹿共ッ！」

「おおおおおッッー!!!」

次の瞬間ー皆の声が爆発するかの如く拠点内に響いた。本当にさあ…俺含めてここには馬鹿しかいねえーのか？

(最高だな…)

そして、俺たちは拠点の外に出て防衛ラインを組む。既に俺たちの目の先には数百を優に超えるヒューマギア共の姿があつた。

「スウー……」

前衛に立った俺は息を吸い吐き出す。緊張は完全には抜けてくれないが、まあ少しぐらい緊張しておいた方が気が緩むこともなくちようどいいだろうさ。

「ーいよいよですね、太陽君」

「………そうだなあ諸悪の根源<sup>ラスボス</sup>。あんた、今どんな気分だよ？ 自分が原因で生まれちゃった殺戮マシーンにこれから殺される訳だが」

「因果応報、というところでしょうね。無論ヒューマギアなどに殺されるぐらいなら私は迷わず自害しますがね？」

「そんな時は俺がぶっ殺してやるから安心しろ」

いつの間にか隣に立っていた天津垓。俺はそちらを見ずに口を開いた。……こんな



状況なのによく余裕綽々でいられるなこいつ。

「ドライバーの方は…完成したみたいだな?」

「おかげさまで……といつても本来の性能の1000%には遠く及ばない…500%程の性能しか発揮できそうにありませんがね」

「まあ贅沢は言えねえわな……足引つ張んなよ?」

「ふふふ、そこはご安心を。このドライバーは君の持つショットライザーより遥かに性能が上ですから」

そう言う咳の手にはカラーリングが一切施されていない、元の色そのままの銀色一色のドライバーがあった。どうやら、なんとか間に合ったらしい。カラーリングは…こんな状況でカラーリングに拘って貴重な資材とか使おうもんなら俺はこいつをぶん殴っていたに違いない。

さてと……じゃあー最後に大暴れしてみるかア!!

「ー行くぞッ!」

「ーええ!」

『ストロング!』

『ブレイクホーン!』

俺たちはそれぞれドライバーを腰に装着し、プログライズキーを取り出しボタンを押す。防衛ラインを組む仲間達も皆また次々と武器を構える。

【オーソライズ！】

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

ショットライザーに装填したプログライズキーを展開し、バックルから引き抜き徐に前に向ける。隣に立つ焔はプログライズキーを展開すると両手を横に動かす。

「――変身ッ……！」

「――変身」

【ショットライズ！】

【プログライズ！】

俺はトリガーを引き、焔は展開したプログライズキーをドライバーに装填する。そして、

『アメイジングヘラクレス！』

【With mighty horn like pincers that flip the opponent helpless.】

『The golden soldier THUSER is born.』

黄緑色と白色のアーマーに身を包んだ戦士と黄金の戦士。

二人の仮面ライダーがその変身を果たす。

「しやあッ！ 行くぞお前らあッッ!!」

「私の強さは桁外れだ……!」

こうして、彼等と数百を優に超えるヒューマギア達との死闘が始まりー。

ー歴史は、世界は元に戻りー

ーある男は目を覚ますー

## 先輩と後輩は仮面ライダー！

「チツ、弾切れか…」

「ー舌打ちした「不破諫」は弾切れになった拳銃をホルスターに納め、壁から顔を僅かに出して敵であるトリロバイトマギア達に目を向ける。

その数は数十以上。

比べて現在、この場に居る人類側の戦闘員はたったの数人。しかもその何人かは負傷者を抱えているため戦闘には加われない状況だった。

レジスタンスの拠点の一つ。

そこは今ヒューマギア達からの襲撃により大打撃を受け、撤退するほどまでに追い詰められていた。

「不破ツ！また新手が来るぞ！」

「くそツ…こうなったら…！」

「ー「刃唯阿」の言葉を聞いた諫は懐から青い銃、シヨットライザーが付いたバック

ル・ベルトを取り出す。この場を切り抜けるにはもう変身するしかない、そう判断した諫に唯阿は叫ぶ。

「不破！ 天本さんからの命令を忘れたのか!? 変身はするな！」

レジスタンスで最も活発に行動し、人類の存続に大きく貢献している男——「天本太陽」。本人はずつと認めず否定しているが、実質的なリーダーである彼の命令は彼等にとつて重要である。

『不破、今のお前の体は軽々と変身できるような状態じゃない。だから変身は極力控えろ。……でも、もしどうしようもない時は派手に暴れちまえ……まあ本気で緊急事態の時だけだからな？ 変身するにも資源とかめちやくちや掛かっちゃうから』

「ハッ！ お前こそ忘れたのか刃？ 緊急事態の場合は例外……そういう命令だったろうが！」

【ショットライザー！】

「刃、全員の避難はお前に任せたぞ！」

「！ 待て不破っ！」

ベルトを腰に装着した瞬間にショットライザーが起動する。諫は刃の制止を聞かずに壁からヒューマギア達が跋扈する表に躍り出ると獰猛に吠える。

『バレット！』

「ヒューマギアは残らずぶっ潰す!

ーうおおお!!」

【オーソライズ!】

取り出した青いプログライズキーを諫はメキメキと音を立てるほど強引に展開すると、勢いよくショットライザーに装填した。

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「ー変身!」

【ショットライズ!】

バックルからショットライザーを引き抜き、高くショットライザーを上げ素早く銃口を的に向けてトリガーを引く諫。発射された弾丸はトリロバイトマギアを数体巻き込み弾き飛ばす。

最後に諫は自身の元に戻ってきた弾丸を真っ直ぐ殴りー青と白のアーマーが展開装着された。

『シューティングウルフ!』

【The elevation increases as the bullet is fired.】

「ーおおおおおお!!」

変身を完了させた「仮面ライダーバルカン」は単独でヒューマギアの群れの中に飛び込む。その「猛猛さ」と「果敢さ」はまさに狼の如くー。

「すいません、俺のせいで…！」

「謝るな。謝る暇があるなら前を向け！ 生きることを諦めるな、そう天本さんも言っていただろう？ ……必ず全員で生きて帰るぞ！」

「はい……………」

謝る一人の負傷者を叱責した唯阿は生き残った仲間達を撤退させるために戦闘可能な者たちと共に道を切り開いていた。

(このままじゃ遅かれ早かれ弾薬が尽きる……)

「やるしかないか…」

弾が尽きかけている拳銃を足につけたホルスターに仕舞い、唯阿は諫が持っていたものと同じ青い銃ーショットライザーを取り出す。

「ニンゲンハ、ゼツメツシロツ！」

「がっ！ ぐうう…！」

「! やめろっ! 道具の分際で、私の仲間に手を出すな!」

【シヨットライザー!】

そして、トリロバイトマギアにより首を力強く掴まれた仲間を見て迷わずシヨットライザーを起動し、トリガーを引いてトリロバイトマギアの頭部を撃ち抜いた。無事助けられた仲間に肩を貸し唯阿は壁に向かい仲間の体をそつとそこに隠し、

「お前達の相手は私だ…!」

『ダツシユ!』

【オーソライズ!】

——撤退するための道を塞ぐトリロバイトマギア達の注意を引きつけるようにその声を上げると、腰に装着していたバックル・ベルトにシヨットライザーを取り付けオレンジ色のプログラムズキーのボタンを押してから中に装填する。

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「——変身…!」

【シヨットライズ!】

『ラツシングチーター!』

【Try to outrun this demon to get left in the dust.】



続けて左手で装填したプログライズキーを展開しトリガー引く。次の瞬間に弾丸が発射され、弾丸は地面に着弾せず不思議な軌道を描き唯阿の肩に着弾し直後にアーマーが展開装着された。

「ー行くぞっ……はあー！」

「ー！ グガッ……！」

変身が完了した「仮面ライダーバルキリー」はその俊足で一瞬で敵との距離を詰め早速トリロバイトマガリアの一体を膝蹴りを入れ吹っ飛ばす。

バルカンとバルキリー。

二人の仮面ライダーの活躍により、なんとかレジスタンスのメンバーはか細い生存への糸を掴み。

『バレット！』

「これで終わりにしてやるよ！ はあああー！」

【シューティング ブラスト！】

「私達は必ず生き残る！ その為にー！」

『ダツシユ!』

「ーお前達を破壊する!」

【ラツシング ブラスト!】

ショットライザーに装填したプログライズキーのボタンを押し、エネルギーが収束する銃口を徐にトリロバイトマガリア達に向けー諫はトリガーを引く。

同じくショットライザーに装填したプログライズキーのボタンを押し、唯阿は素早くトリガーを引くと敵の周囲を高速で走りながら連射する。

シューティングブラスト

ラッシンググブラスト

それぞれの場所で二人は互いに必殺技を発動する。

「ふうわああああー!!」

「せやああああー!!」

「ツツ!!」

発射された巨大な青い弾丸は同時に数十体のトリロバイトマギア達を容赦なく粉碎して倒しー。

連射された複数の弾丸は的確にトリロバイトマギア達の急所を貫通しその機能を完全に停止させー。

「さつさと刃達に合流しねえとな…」

二人の仮面ライダーは無事にその場を切り抜けた。

諫は仲間達に合流しようと動き出し、

「全員今の内だ！ 逃げ！」

唯阿は仲間達を無事撤退させようと動き出す。しかし、

「対象を発見——人類は滅亡させよ……」

「っ！ お前は……！」

「あははは！ みいんな——逃がさないよ？」

「何だと……!?!」

——切り抜けたといってもそれは一時の話。

新たな脅威が二人の前に立ちはだかった。

バルカンの前には「滅」が。

バルキリーの前には「迅」が。

『ポイズン!』

滅は刀を腰に携えた鞘に納めると、取り出した紫色のプログライズキーをボタンを押す。

『ウイング!』

迅は持っていた拳銃を仕舞うと、取り出したマゼンタ色のプログライズキーをふわつと宙に投げ片手でキャッチするとボタンを押す。

「ー変身」

「ー変身！」

【フォースライズ！】

滅は冷ややかに、迅は楽しそうに言つてプログライズキーをベルトに装填。瞬間に二人のベルトに取り付けられたランプが赤く不気味に点滅し始め、更にまるで警告音のような待機音が流れーレバーが引かれる。

『ステイングスコープオン！』

【Break Down.】

「滅ッ……！！」

「人類、今日こそ貴様らを滅亡させる」

変身を果たした滅を諫はショットライザーを構えて油断なく見据える。

『フライングファルコン！』

【Break Down.】

「迅……！！」

「うん、そうだよ！ 僕は迅！」

変身を果たした迅から唯阿は仲間達を庇うように前に出る。

「うおおおおー！！」

「全員逃げろっ! はあッ!」

諫は滅に突進していき、唯阿は仲間達に逃げるよう叫ぶと迅に立ち向かう。——その勝敗は火を見るより明らかだった。

「刃! 随分とまあボロボロだな?」

「! 不破、無事だったか!」

ヒューマギアの仮面ライダーに襲われた諫と唯阿は、敵の注意を引きながら拠点内を走り偶然合流を果たす。二人は短いながらも互いの現在の状況を共有する。

「そっちにも仮面ライダーが……まずいな」

「バルデルが言ってたな……ヒューマギアの仮面ライダーとの戦闘は可能な限り避けろって。…確かにあの強さはとんでもねえが、諦めるわけにはいかねえ」

「ああ、そうだな」

再び決意を新たにした二人は生きる為に抗うことを迷わず選択した。そんな二人の前に、

「逃げられると思っているのか?」

「見つけた！ あつ、滅もいるー！」

「つ！ くそ、追いつかれたか……！」

「ここが正念場だな……！」

ー諫を追いかけていた滅、唯阿を追いかけていた迅が現れる。最悪な事にヒューマギアの仮面ライダーも合流を果たしてしまう。

「刃、まだやれるか!？」

「当然だ！」

二人は気力を振り絞り戦闘を再開する。

「滅、一緒にやっちゃおうよ！」

「ああ……行くぞ、迅」

走り出すバルカンとバルキリー。

それを容赦なく迎え撃とうと滅は紫色の弓ーアタツシユアローを溜めて構え、迅は青い散弾銃ーアタツシユショットガンを構え、

「どおおーんっ！」

「はあ……はあ……！」

ー撃ち放たれたその遠距離攻撃を諫と唯阿は何とか回避し、諫は接近戦を唯阿はショットライザーをバツクルから引き抜き射撃戦を挑む。

「ッ! うおらああああ!」

「当たれッ!」

「遅い」

「あはは、当たらないよ〜?」

だが滅は諫の怒涛の接近攻撃を容易く防ぎ、迅は室内の中で飛行し唯阿の射撃攻撃を全て避ける。更に滅は鋭いカウンターを諫に打ち込み吹き飛ばし、

【チャージライズ!】

「いっくよー!」

【フルチャージ!】

「! しまっー」

ー迅は高速飛行で唯阿の背後をとるとアタツシユシヨットガンを空中でアタツシユモードに戻し、再びシヨットガンモードにする。唯阿は背後の迅に気付き振り返るがもう遅い。

【カバンシヨット!】

「はあああ!」

「!? ぐわああ……!」

「ー刃ア! この鳥野郎!」



強烈な一撃をともに受けた唯阿は倒れ変身は強制解除される。それを見た諫は怒りを露わにしてショツトライザーを空中を飛ぶ迅に向ける。

『ポイズン!』

「どこを見ている貴様の相手は俺だ」

〔P r o g r i s e   k e y   c o m f i r m e d .   R e a d y   t o   u t i l i z e .〕

『スコープピオンズアビリティ!』

しかし、それは滅から目を離すということであり…この状況下でのその行動は最大の悪手だった。滅はフォースライザーのレバーを押し戻し装填したプログライズキーを引き抜くとアタッシュアローに装填する。

「何ッ!?!」

「ー滅びよ」

〔ステイング   カバンシユート!〕

カバンシュート

「があああッー!!」

瞬間、アタツシユアローから放たれた紫色の鎖のような管が伸び諫の体を拘束し高速かつ強力な一撃が諫の体を貫いた。そして唯阿に続き諫までもが変身が強制解除され倒れてしまう。

「があッ……まだ、だあッ……!」

「無駄だ。その体では再変身も不可能だろう」

「くッ……!」

立ち上がろうとする諫。足につけたホルスターから拳銃を抜き、迅の攻撃を受け震える手で拳銃を構える唯阿。二人は諦めず最後まで抵抗しようとするが。

「楽しかったけど、もう終わりにしちゃおっか?」

まず最初に動いたのは迅だった。

地に片膝をつく唯阿へ迅は歩み寄るとアタツシユショットガンを向ける。

「! 刃ああああー!!」

「くッ!」

(……)までか……すいません、天本さん……!

アタツシユシヨットガンのダメージにより自力では動けず、回避ができない唯阿は防  
御の構えをとり固く目を閉じる。諫はそんな唯阿を助けるべく叫び動こうとするが、彼  
もまたアタツシユアローのダメージによってまともに動けない状態だった。

唯阿は心の中で自分を信じて、仮面ライダーに選んでくれた男に謝罪を述べる。

「……じゃあねバルキリー」

迅はそう言つてトリガーに手を掛けてアタツシユシヨットガンを発射する、

「おい勝手に人の後輩を殺そうとしてんじゃねえよ」

……その直前、何かを力強く掴む音と聞き覚えのある声が唯阿の耳には届いた。

唯阿が目を開けばそこには、

「! あ、天本さん……!?!」

「バルデルかつ!?!」

「よお二人とも。いつの間にか大ピンチに陥ってんな？ まあ生きてて何よりだわ」

迅が唯阿に向けたアタツシユショットガンを横から掴み強引に照準をずらす……黄緑色と白色のアーマーを装着した戦士、天本太陽の姿がそこにはあった。太陽は危機的状況の真っ只中に居ると思えないほど気楽さを感じさせる態度で、諫と唯阿に声を掛けながら——迅からアタツシユショットガンを奪い取り後ろ蹴りで迅を蹴り飛ばす。

「うわっ…… おつととー!」

迅はギリギリで翼を駆使し何とか着地する。そして、滅と迅もまた諫と唯阿と同じくバルデルの登場に多少なりとも驚きを露わにする。

滅にとっては彼がここに現れるのは計算外だった。

「バルデル……」

「バルデルっ!? わあーい! また僕と遊んでくれるの?」

「ハッ、誰がお前みたいなのサイコパスと遊ぶかっての……」

現れた太陽を目の当たりにした滅は油断なくアタツシユアローを構え、迅は心底嬉しそうに声を上げる。太陽は呆れたように息を吐くと、

「お前達は、不破と刃を連れてすぐにこの場から離脱してくれ。それまでの間……いつらの相手は俺に任せろ」

「了解!」

引き連れてきたレジスタンスの仲間達に太陽は簡潔に指示を出す。太陽の後方から現れた仲間達は、その指示に迷いなく頷くと、連携のとれた動きで怪我を負った諫と唯阿に肩を貸す。

太陽はアタツシユシヨットガンを構え、滅と迅と対峙する。

「！ た、単独で二人を……!?!」

「無茶な真似はよせ！ バルデル！」

だが太陽の指示に迷いなく頷き従った仲間達とは違い、実際に滅と迅と今の今まで戦っていた二人は声を上げる。太陽の行動があまりにも危険で無謀なものだと思ったから。

「天本さん貴方はまさか……!」

（自らの命を懸けて私達が逃げるまでの時間をー）

振り返ることなく前を向く太陽。

その姿にある予感を覚えた唯阿だったが、

「勘違いすんなよ？ お前ら二人が死んだら俺の負担が今以上に増えて困るんだよ……だからこれは俺の為の行動だ」

過労死なんて死んでもごめんなんだよ、そう言う太陽。諫と唯阿は彼と共に戦う中で、天本太陽が仲間を守るためなら迷うことなく死地に飛び込むような人物だと知って

いた。

「たった一人で我々に勝てると思っっているのか？」

「滅と一緒になら、バルデルにも負ける気しないよ！」

「バーカ。お前らの撃破よりあつちを優先させるに決まってるだろ」

滅と迅の発言に太陽はシンプルな罵倒を飛ばすとアタツシユシヨットガンを両手で持ち発射する。本来なら反動で発射した側にも衝撃が来るはずだが、アメイジングヘラクレスのパワーはアタツシユシヨットガンの反動にも力負けしなかった。

「バルデル！ 僕の銃返せえ！」

「返して欲しけりゃ力付くで奪ってーみやがれッ！」

「うわああ…!?!」

アタツシユシヨットガンの一発を飛んで避けた迅は高速で太陽に接近しその翼で襲いかかろうとするが、太陽は最小限の動きでそれを躲すと素早く振り返り隙だらけな迅の翼にアタツシユシヨットガンを打ち込んだ。それにより翼が損傷し迅は着地に失敗する。

「はあっ！」

滅はその太陽へとアタツシユアローを向け一矢を放つ。だが、

【チャージライズ！】

「おつと……！」

太陽は咄嗟にアタツシユショットガンをショットガンモードからアタツシユモードへと変え、滅の攻撃を防ぐ。そして太陽はアタツシユショットガンをアタツシユモードにしたまま滅へと接近する。

「らあッ！」

「くつ……！」

その間に滅は何度もアタツシユアローを連射するが、太陽は巧みに全てを防ぎ切り滅との距離を詰めてアタツシユモードのアタツシユショットガンで殴りかかった。

「甘い……！」

「ぐッ……ならー！」

【フルチャージ！】

アタツシユモードからショットガンモードに変えたアタツシユショットガンを超近距離で放とうとする。滅は迷わず後ろに飛び退こうとしたが、

「これでもくらいやがれ！」

【カバンショット！】

「がはっ……バルデル、貴様……！」

タイミング的に滅がバックステップでアタツシユショットガンの射程距離外に到る

より早く、太陽はアタツシユショットガンのトリガーを引く。滅はアタツシユショットガンの一撃を受けて後ろに僅かによるめいた。

「どうしたさつきまであいつら二人ボコった時の勢いはどうした?」

「バルデルうー! そらああ!」

「うおっ危ねツ!」

後方からの迅の蹴りを躲し続けてのパンチを片腕で弾く。そして迅は再び翼で宙に飛び上がると、勢いよく降下して飛び蹴りを噛まず。太陽はその飛行の動きを落ち着いて捉え予測しローリングで避けた。

「はっ!」

「くっ! おりゃああッ!」

そんな太陽へと素早く距離を詰めた滅はアタツシユアローで斬りかかる。アタツシユアローによる攻撃を受け太陽のアーマーからは火花が散るが太陽はすぐに反撃のボディブロー……滅の予測により完璧に防御されると分かっている一撃を放ち、

「らあああ!」

「ぐッ……!」

防御されるタイミングで左手に持った、ショットガンモードのままのアタツシユショットガンで滅の頭部をぶつ叩く。予測できていなかった攻撃に滅は一瞬防御が遅



れ、僅かに後退する。

迅はアタツシユシヨットガンを巧みに使う太陽に、子供のようなことを叫ぶ。

「いい加減僕の銃返してよおー！」

「ンなこと言われて誰が素直に返……………返して欲しいか？ ならいいぜ？」

「えー！ ほ、ホントに!?!」

アタツシユシヨットガンを返せと声を上げる迅だったが、太陽の予想外の台詞に驚き喜び戦闘だということをおぼろげに忘れたような態度になる。

「ああホントだ。ほーらよッ！」

ー太陽はアタツシユシヨットガンを雑に迅の方へと高く投げた。それをキャッチしようと動き出す迅。滅は太陽へとアタツシユアローを構えた。

「ー悪いな、迅」

『ストロング!』

「よし！ とれた！」

「！ 迅、避ける…！」

「えっ？」

「ー爆ぜろッ！」

迅にアタツシユショットガンを投げた瞬間、バックルに付けたままのショットライザーに装填されたプログライズキーのボタンを押した太陽は、バックルからショットライザーを引き抜き、アタツシユショットガンをキャッチするのに夢中になっている。迅へとその銃口を向ける。

それを見た滅は必殺技を止めるべくアタツシユアローを放つ。

「やらせるか……!」

「遅え!」

「くっ……ならば!」

【アメイジング グラスト!】

しかし、アタツシユアローは避けられ、太陽は必殺技を発動させた。滅はアタツシユアローによる妨害が失敗した直後、迅を庇うように迅の前に移動する。更にサソリのライダモデルを出現させ完全な防御の構えをとった。だが、

「引つかかったな! おらあッ!」

「何っ……!?!」

ストロング

グ  
ブラスト

それは太陽の狙い通りの行動だった。太陽はエネルギーが収束するショットライザーの銃口を向ける先を迅から「天井」へと移した。

「さっき言ったろ？ お前らの撃破よりあっちを優先させるつて！」

太陽が必殺技の一撃により天井を破壊し途端に大量の瓦礫が次々に落ちていき太陽も滅も迅も、全員が回避行動をとる。結果、瓦礫により道を完全に塞がれた。

「ああー!? バルデル逃げるなあー！」

「やられたな……待て迅、今から瓦礫を撤去しても無駄だ。バルデルには追いつけない」  
「もおー！ また倒し損ねたあ……！」

瓦礫をどかしてバルデルをすぐに追おうとする迅を滅は冷静に制止する。変身した状態なら瓦礫を撤去することは容易いが、この数の瓦礫を撤去し道を開くには少なくとも五分は掛かると滅は理解した。

バルデルへの警戒を改めて引き上げる滅

悔しがり地団駄を踏む迅。

「……はあー、何とかなつたなあ」

(不破と刃は無事救出できた……あの諸悪の根源、あんな化け物生み出しやがって……改めてぶん殴りたくなってきたわ)

滅と迅との戦鬪を無事終え、諫と唯阿を連れて撤退した仲間達の後を追った太陽は無事にレジスタンス拠点に帰還した。

「おい諸悪の根源、あんな化け物作りやがって……一発殴らせろ」

帰還し天津の元へやってきた太陽の第一声。

それを聞いてから太陽の姿を見た天津は……滅と迅と戦鬪した後とは思えないほど大した怪我を負ってない、ほぼ無傷の彼に率直な感想を述べた。

「君の方が化け物では……?」

「……は? どこがだよ?」

心底わからないといった様子で首を傾げる自称一般人：実質的なレジスタンスの最高戦力を見て天津は思わず目を覆った。

またその後、不破と唯阿に感謝され戦闘について色々と質問責めされるのだが……太陽は専門的なアドバイスなどさっぱりできないのでこう言ったという。

「いやお前らも十年ぐらい戦えばこんぐらいできるようになるわ。つうかセンスは俺より上なんだから——その内俺なんて抜くだろ？」

# 【KAMEN RIDER】

これはある男が目覚めるまでに見ていた夢…のようなもの。

夢のようなものを見た彼自身、目覚めてしまえばそれがどんな内容だったか……微塵も思い出せないだろう。

これはそんな「誰あつたの記憶かもにも残れならない」お話。

そこにはただただ終わりのない真つ白な世界が広がっていた。

——自分が在るこの場所が——

—— 自分が見たこの場所が ——

—— 自分が進むこの場所が ——

わからない。わからない。わからない。

真つ白な世界を独り歩く僕には何もわからなかった。

「——僕は、一体……」

片手で頭を抑えながら「何か」を思い出そうとするが、まるで元より思い出すことが  
何もないかの如く僕の頭には何も浮かばない。

自分が何故ここに在るのか。

それこそ自分が何者なのか——自身の名前さえ。

(……進んでみるしかない——)

何もわからない中、真つ直ぐに先に見える眩い「光」に向かって僕はひたすらに歩いて  
いたんだ。

「あと、少しだ……」

歩き続けてどれだけの時間が経ったのかはわからないが、僕と「光」の距離は順調に  
縮まっていき……その光に僕がとうとう到達しようとした——その時だった。

「……それ以上は行かない方がいいよ。」

行ったら、もう戻ってこれなくなるから」

「……え……?」

どこからともなく声が聞こえたと思ったたら突如として世界に亀裂が走り——真つ白だった世界が暗転する。

「! あ、あなたは……?」

そして、何が起こったのか全く分からないまま僕が振り返ればそこには不思議な雰囲気纏う青年が立っていた。暗闇の中、青年が立つ場所だけはライトアップされたようにくつきりと見える。

「そっか……そりゃ覚えてるわけないよね」

「?」

「いや、俺が誰か……だっけ?」

——俺は常磐ソウゴ、仮面ライダージオウ」

一瞬「あ、そっか」といった顔をしてからどこか寂しげに笑った青年はすぐにこりと微笑むとそう名乗った。

常磐ソウゴ、さん……?」

当たり前だけでも僕の知らない名前だ。



……というか「かめんらいだー」って一体……？

「何もわからないって感じかな？　ここがどこなのか、自分が何者なのかも」

謎が増えた……そう思う僕の表情を見て、すぐに考えを読み取った常盤さんは言う。僕は驚きつつもすぐに頷きこう聞いた。

「あの、常盤さんはここがどこか知ってるんですか？」

「うん、知ってるよ」

「！　本当ですか？　じゃ、じゃあー」

「ーでも、これを今のおあんたに教えても余計に混乱させるだけな気がする……まあ簡単に言っちゃえば、ここはおあんたの【夢の中】……みたいなものだよ」

「ゆ、夢の中……？」

常盤さんの予感は的中し、僕は余計に混乱した。

「ここが夢の中？　それも夢の中「みたいなもの」？」

……ダメだ……。

聞いたら余計わかんなくなってきた。

「そんな難しく考えないでいいよ。あんたはただ、あんた自身をここでちゃんと思いでいだけだから」

「僕自身を……？」

「そう。あんた自身を。……でもまあ、流石に自力じゃ思い出しようもないよね？」

「ーだから俺が来たんだ」

「えっ……？」

僕自身の事を思い出す……その為に常盤さんが来た？ それは……一体どういうことだ？ 混乱・困惑しっぱなしの僕に常盤さんは歩み寄ると、

「はい。これ」

「ー僕の手に黒いストップウオッチ？のようなものを持たせた。

「？ー熱あつッ……！」

そのストップウオッチ？は僕が手にした途端、突如緑色に発光して熱を持つ。反射的に手からストップウオッチ？を離すが、僕は足元に落ちるギリギリでしゃがんでストップウオッチ？を何とかキャッチ。

ほっと息を吐き改めて手にあるそれを見てあつと驚く。

「うん、やつぱりあんたは「仮面ライダー」だよ」

手に持っていた元の色が黒ベースだったストップウオッチのようなものはその色・外觀が変化し上部は黒、下部は鮮やかな黄緑のものになっていた。またストップウオッチのようなものの表面には何かの顔らしきものが描かれている。

「ボタンを押してみて」

「ボタン？ あ、こうですか？」

戸惑いながらも常盤さんの指示通りに僕が天面にあるボタンをポチッと押すと、

『バルデル！』

「ツツ…!？」

ー ストツプウオッチ？ からは何かの名前だろうか…？ 短く音声が鳴ると、柔らか

な光に包まれて僕の手から消えた。

「……これは……！」

その瞬間、気付けば僕の腰には銃が取り付けられたベルトと右手には黄緑色のカセットテープのようなものがあり、頭の中に何か流れ込んでくるような不思議な感覚に襲われー。

『ーバルデル。それが俺の名だ！』

『滅、俺はお前を絶対に認めない。俺がいる限りお前の人類絶滅だとかいうSFチックな使命は一生叶わせねえよバーカ！』

『ーワズ！ お前の信じるその思いに、応えてやるよッ！』

『ーお前を止められるのは、ただ一人…俺だ!!』

『みんなの未来は俺が守ってやるッ…!』

ー 【俺】は今までの記憶を思い出す。

「……そうだ。俺は「仮面ライダー」だ」

俺は「天本太陽」。

……仮面ライダーバルデル。

仮面ライダーに初変身したあの日から、命を懸けて滅に挑んだあの日まで……俺は全てを思い出し……更にはそれだけじゃない。俺は「ヒューマギアに支配されたあの世界」で体験した出来事も全て記憶していた。

「ちゃんと思い出せたみたいだね？ 自分自身のこと」

「ああ……あんたのおかげでな。悪い、助かった」

状況が未だ完璧に把握できない中、俺は目の前の青年「常磐<sup>ジ</sup>ソウゴ<sup>オウ</sup>」に短いが感謝を述べる。それを聞いたソウゴは「気にしないで」と笑う。

「俺はただ俺のやりたいことをやっただけだよ」

(やりたいこと……ね)

「そうか……それにしても、ここは本当に何なんだ？ 夢の中みたいなものだって言っ

てたが……俺は……あの後、一体どうなったんだ？」

今の俺が待つ「最後」の記憶は奇妙なことに二つある。

一つはフォースライザーで変身し滅を倒し力尽きた最後。もう一つは天津垓サウザとレジスタンスの仲間達と共にヒューマギアに立ち向かった……その死闘の果ての最後。(どっちの最後も死ぬほど痛い怖かった……だけど、後悔はない)

【元の世界】では滅と戦い俺は最後まで自分の意志で、守りたいものの為に戦った。

【ヒューマギアに支配された世界】ではヒューマギアと俺達は最後まで戦い抜き、そして確かにみんなを守り抜いた。

あの子の俺の生死は俺自身にもわからないが、こんなへんてこな世界にいるんだから……きつと「死んだ」か「死にかけ」かのどっちかなんじやないだろうか？

「……大丈夫、あんたはまだ生きてるよ」

「……何でそんなことわかんだよ？」

「何でって……王様だから？」

「うん……いや、さっぱりわからん！ 答えになつてねえよ！」

少し考えた後に放ったソウゴの意味不明な一言に俺は思わずツツコミを入れる。ヒューマギアに支配されたあの世界で、ソウゴとは一度だけ出会ったほんの僅かな会話を交わしているんだが……やっぱ、俺にはよくわからない不思議なヤツだ。

見た目とは裏腹にどこか酷く冷静な……何もかもを悟つてるような、底の知れない青

年……それが俺の常盤ソウゴという人間に対する認識だった。

「はぁー……ちよつといくつか聞きたいことがあるんだがいいか？ さつき俺が向かってたあの光。あん中にあのまま進んでたら俺はどうなってたんだ？」

「うーん……死ぬか、よくて記憶喪失？」

「あつぶねツ!!」

やべえ!!

俺あのままソウゴに声掛けられなかつたら……あつさり「死ぬ」か「記憶喪失」になつてたつてこと？ こ、怖過ぎる……つうか光に向かつてたらダメなのか。なんて卑劣なトラップ……つて別に誰かが仕掛けた訳じゃないけども。

「……もう一つ、これが一番重要なんだが……」

「……こつから出る方法は？」

その俺の問いにソウゴは「……ニヤリと笑う。」

まるで「待つてました!」と言わんばかりに。

あれれくめちやくちや嫌な予感がするぞく？

「……俺と戦つた後に教えてあげるよ!」

【ジクウドライバー!】

ちよ、ちよ待つてよ!

一度共闘したから知ってんだぞ!?

てめえデタラメに強いじゃねーかッ!

待てよ。これ俺もかしなくてもボコられるのでは?

「おい! ちよつと!?! ソウゴさあん!?!」

嫌な予感は見事に的中し、ソウゴは右手にベルトを持ち腰に当て装着する。ベルトからは装着された直後に「ジクウドライバー」という音声の流れ、更にバックル部の液晶には「Z I K U D R I V E R」という文字が流れる。

『ジオウ!』

ソウゴはライドウォッチを回してボタンを押し、ジクウドライバーのスロットに装填。無駄のない流れるような動きで、続けて右手でロックを解除すると時計の針のようなポーズを切つて構え、

「ー変身!」

【ライダータイム!】

『仮面ライダージオウ!』

ーベルトを一回転させた。

瞬間、暗転した世界はまたも反転して真っ白な世界に変わる。ソウゴの体は腕時計のバンドのような輪に包まれ「ライダー」という文字がソウゴの背後から飛んでいき最後

にはその顔にセットされた。

「……さっきまでの冷静なお前はどこいった？」

「あはは！ まあたまには息抜きも大事でしょ？」

息抜き……息抜き!?

え、何この人息抜きで戦う気なん？

ちよつと理解できないわ……うん、俺ソウゴとはきつと分かり合えないなあ！

「……くつそ……あーもおッ！」

やりやいいんだろやりやあッ！」

『ストロング!』

【オーソライズ!】

ああくそっ！ もうこうなったらどうにでもなれ!

半ばやけくそに俺は右手に持ったプログライズキーのボタンを押し、勢いよくシヨットライザーに装填してプログライズキーを展開。バックルからシヨットライザーを引き抜く。

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「ー変身ッ……!」

【シヨットライズ!】



そして、銃口を高く上げてから下ろして真っ直ぐと前方に向けトリガーを引いた。発射された弾丸をソウゴはひらりと躲し、

「おらあッ！」

『アメイジングヘラクレス！』

[With mighty horn like pincers that flipp the opponent helpless.]

素早く右手に持ったショットライザーをバックルに戻し、返ってきた弾丸に俺は右のアップパーを打ち込んだ。瞬間アーマーが展開され俺の体に装着される。最後にアーマー内の蒸気が外に排出され、複眼が赤く光った。

ー仮面ライダーババルデルの変身が完了した。

「スウー…はあー…：…：ー行くぞっ！」

深呼吸した後俺はジオウに向かって駆け出す。

「常磐ソウゴ」は俺が最初から全力で行かないとまともな勝負にすらない…：それほどの

相手だ……胸を借りる気持ちで挑ませてもらうとしよう。

「おらあ！」

「よつと！」

「どりやあツ！」

早速俺はダツシユからの殴りを噛まず。

それをジオウは軽いステップで回避し、俺はすぐに続けて回し蹴りを繰り出し攻撃する。

「ほつーはあつ！」

「がはっ……！」

ジオウは俺の回し蹴りは上体を僅かに反らせることで避けると、一瞬の隙を捉え俺の胸に真つ直ぐ拳を打ち込んだ。その威力に俺は大きく後退するがなんとか耐え、

「こんぐらいなんてこたねえなあツ！」

ー俺はすぐさま反撃に移る。ジオウへと再び接近し右足で前蹴りし、避けられることを予測して素早く左ジャブを放ち、防がれた瞬間にパンチのお返しに右でのアツパーを打ち込む。

「っ！」

ジオウは前蹴りを軽々避け、ジャブも完璧に防いだが最後のアツパーだけは完全に防

げず僅かに後ろに下がった。

「おらおらおらア！」

「そつ、はあ！」

そんなジオウに俺はすぐさま距離を詰め得意のパンチを全力で連打する。しかし、ジオウは冷静に全てを弾くとくると回って後ろ蹴り。その一連の動作の速さに俺は回避・防御する暇もなくそれを受けたが、

「ーまだまだア！」

「つ……！」

ーなんとか気合で……タフネスで堪えた俺は怯みを見せずにカウンターを仕掛けた。ジオウは完全な防御が間に合わず片手でそれを受け、威力を殺しきれず僅かに怯むがすぐにバックステップして一時距離を取る。

「これは、ちよつと想像以上だなあ」

「だったら、やめにくれていいぜ！」

「ふっ！」

「甘めえ！」

「ー!？」

俺はその眩きを聞き、思わず口を開きながら追撃の左フックを仕掛けた。それを片腕で防いだジオウだが俺は素早く右手でショットライザーを引き抜きゼロ距離でジオウの胸に弾丸を発射する。

「くっ……！ はあっ！」

「ぐはっ……！」

胸から僅かに火花を散らしたジオウは反撃にボディブロー。続けて鋭い蹴りを放ち俺を蹴り飛ばし、俺とジオウの距離が数十メートルほど離れる。

「悪いけど、まだやめるつもりはないんだ」

『ジカンギレード！』

「行くよ？ バルデル」

「出来れば……お手柔らかに頼みたいなあ」

だが当然まだまだジオウはやる気満々……体力が有り余ってるみたいだ。

緊張感凄しいし、痛いし怖いし強いし頼むからはよ終われ……！（切実）

それとジオウとこのまま戦って俺が無事に済む気がこれっぽっちもしない（直感）

「はあ……！」

「ケン」という文字がジオウの前に現れ剣に変化し、宙空に浮かんだその剣をジオウは掴む。ジオウの戦意が残る姿と声に、思わずため息を吐きつつ俺は静かに息を整える。

たった一分程度の戦闘で……ここまで消耗するもんか？

(分かつちやいたが、やつぱりジオウは強い。つうかすげえ戦い慣れてるよなあ……)

ジオウの強さが桁違いな事はヒューマギアに支配されたあの世界で「ロボ」に乗つてるところを見ていたり、一度だけ共闘した中で既に理解していたつもりだったが……まだまだ切り札を持つてるんだらう。

「ほんと息抜きで戦う相手じゃねーだろ……」

「じゃあ次は……こつちから行くよ！」

『タイムチャージ！』

剣を片手にジオウはそう言うと、剣に付いたスロット部分のボタンを押してから軽快な動きで接近し剣を振るう。

『5・4』

「はああつ！」

「ぐはあ……！ くツ！」

『3・2・1……』

その横振りによりアーマーから火花が散り、俺は僅かに後退するが次の振り下ろし攻撃は何とか両手で掴み止める。だが、ジオウは冷静に膝蹴りを放ち俺を怯ませ……剣を掴む手が緩んだ瞬間に素早く剣を振り下ろし、

『ゼロタイム!』

「せやああああ!」

『ギリギリ斬り!』

「ぐわあああ!!」

マゼンタ色のエネルギーを纏った剣を、勢いよく横一文字に振り、瞬間に剣撃と衝撃波を同時に受けた俺を思い切り吹き飛ばされた。

「ツ……はあはあ……!」

地面を数度転がってから勢いは止まり、俺は呼吸を整えながら何とか身を起こす。純粋な実力の差……そんなものを嫌というほど実感させられる……そんな感じだ。

「ツ……次は、こっちの番だ……!」

「ただどー戦うからには負けたくねえよなあ?」

立ち上がってすぐにバックルからショットライザーを引き抜いた俺は、トリガーを引き連射する。それをジオウは剣で防ぎ、

「遠距離攻撃ならー」

『ジュー!』

「ーこっちにもあるよ?」

「! 変形した!」

「ー剣を銃に変形させる。

先程まで「ケン」と書いてあった剣は「ジユウ」と書いてある銃に……今更だけどもんだそのデザイン!? いやすげえわかりやすいけども!

「行くよ!」

「食らえッ!」

そして、俺とジオウはほぼほぼ同時に銃のトリガーを引く。連続して発射された弾丸は互いに相殺し合い、

『ストロング!』

「ンならーこれでどうだ!」

「! そつちがそう来るなら!」

『フィニッシュタイム!』

すぐに通常の射撃がジオウには通用しないと判断した俺は、ショットライザーに装填したプラグライズキーのボタンを押し必殺技の体勢に入る。それを見たジオウは、ジクウドライバーからライドウオッチを外すと銃についたスロット部分にそれを装填する。次の瞬間、

「はああああ……ーどらあああ!!」

「ーでりやあああ!」

「アメイジング ブラスト！」

「ジオウ スレスレシューティング！」

ーヘラクレスの角のように鋭い黄緑色の巨大な弾丸と「ジユウ」という文字の形をした複数の弾丸が激突する。

その結果、ショットライザーから発射された弾丸は「ジユウ」の形をした複数の弾丸を全て弾き飛ばし、ジオウへと真つ直ぐに向かつていく。ジオウは間一髪でその一撃を回避し、

「！ ほつと……！」

「危ねッ!？」

ジオウが発射した「ジユウ」の弾丸は弾き飛ばされたにも関わらず、謎の引力で俺の元に回転しながら飛んでくる。

（唸れ！ 俺のAIM力……！）

俺は咄嗟に一発目の弾丸をジャンプで躲し、二発目の弾丸もローリングで避け、三発目の弾丸は避けた後にショットライザーで撃ち軌道を無理矢理変えー今さつき俺の後ろを通過した……それなのにまた俺に向かつて返ってきている「ジユウ」の文字に衝突させた。そして……どうやら上手くいったらしく「ジユウ」の弾丸は三発とも爆発した後には消えた。



どうだ見たか!

これが俺が人類が機械ヒューマキヤに支配されたSF染みた世界で、十年以上実戦で――生きる為に仕方なく――鍛え抜いてきたAIM力だ!

「今のを初見で捌くなんてね……! 正直びっくりした!」

「あんたもなあ? なんであの速度の必殺技を普通に避けれちゃうんだよ……!」

俺のそんな一連の動作をジオウはそう口を開く。こつちからすりや何故必殺技を当然のように避けてんのこの人? って感じなんだが……こりやジオウに対しては下手な遠距離攻撃は無駄って考えるのが無難だな。

(さて、こつちからどうするか………え?)

「! なんて、これが……?」

若干押され気味のこの状況……打開するための一手を思考していた俺は、腰に装着したベルトに付けられている――基本プログラムライズキーは一本しか持つてなかったから使う機会はほぼなかった――プログラムライズキーホルダーに目を向けて驚いた。

右のプログラムライズキーホルダーには「ライジングホッパープログラムライズキー」がセットされていたのだ。

(バッタのプログラムライズキー……なるほどな。これも「夢の中」みたいなもんだから

…ってわけか?)

元の世界で飛電さんの命令を受けたワズが俺に渡してくれたプログライズキー……ヒューマギアに支配されたあの世界じゃ見た事も使用した事もなかったが、元の世界で使用しているからなのか？ この夢の中みたいなお場所じゃ、最後には持つていなかったプログライズキーもこんな風に俺は所持しているようだ。

(……なら、遠慮なく使わせてもらおうとするか)

「いくぜーワズっ！」

『ジャンプ!』

「! それって或人が使ってた……いや、それとはまた別物?」

「さあな、俺もよく知らねーよー」

俺がホルダーから取り出した黄色のプログライズキーを目にし、ジオウは僅かに首を傾げ疑問を口にする。まあ残念ながらその問いに対する答えを俺は持つちやいない。

【オーソライズ!】

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「ー変身!」

【シヨットライズ!】

「そらッ!」

トリガーを引き、レーザーショットライザーから発射された弾丸に俺は勢いよく右の回し蹴りを噛ました直後、弾丸が当たった右足から黄色の装甲が装着されていく。以前から思っていたけれど、フォームチェンジする時…元々装着してたアーマーは一体どうなってるんだろうな？ 重ね着？ それとも気付かぬ内にパージしてるのか？

『ライジングホッパー！』

「A jump to the sky turns to a rider kick.  
k.」

「どッーらああああ!!」

バツタの力を得たフォームに変身した俺は、すぐにそんな今はどうでもいいことを考えるのを止めて、オージオウへ向かって飛び出す。そして、ジャンプの勢いを乗せた拳を思い切り振るう。

「っ！ せやあ！」

「！」

ジオウはそれを素早く「ジュウ」から「ケン」に変形させたジカンギレードで防ぐが、威力は殺しきれず数歩後ろに下がるジオウ……俺はすぐにまた距離を詰めて再びジャンプした。

それもジオウの肩を踏み台にジオウのほぼ真上に。

「!?」

『ジャンプ!』

「食らいやがれッ!」

【ライジング ブラスト ファイバー!】

一瞬困惑するジオウを見下ろせる位置、空中で俺は素早くショットライザーに装填したプログライズキーのボタンを押し、間髪入れずトリガーを引く。

蹴りの構えを取り、そのままほぼ垂直に落下の勢いもプラスした

「ならこつちも!」

『フィニッシュタイム!』

【ジオウ ギリギリストラッシュユ!】

ジオウはそれに対して、素早くジカンギレードのスロット部分に装填されたジオウライドウォッチを取り外し、再度装填して必殺技を発動。マゼンタ色のエネルギーを纏った剣を真上にいる俺に向かって斬り上げた。

「ーでやあああつ!!」

「ーどりやあああつ!!」

黄色のエネルギーが収束する俺の右足が「上」から。

ジオウの振るうマゼンタ色のエネルギーを帯びるジカンギレードが「下」から。

ライジング ブラストファイバー

「くッーはああああ!!」

「がッーらああああ!!」

二つのエネルギーが激突し二人の間に凄まじい衝撃が発生し互いに力を一切緩まず、一歩も譲らず必殺技を叩き込んだ。その結果、

「ぐッ……………」

「うわッ! つつ……………」

上から蹴りを叩き込んだ俺の体は吹き飛び、ジオウからそれなりに離れた位置に落ちて転がる。ジオウは片膝をつき微かに声を上げた。

「はあはあ……………まだ、やんのか…? ジオウ」

「やっぱり、あんた強いね」

「…ま、伊達に十年以上も戦ってるわけじゃねえからな」

片手を地について立ち上がるジオウは俺を見てそう言う。俺は体力を回復させる為

に一度深呼吸をした後、なんとか立ち上がる。正直体力は結構キツかった……つうか「あんた強いね」ってなんだ嫌味か!? そっちは息一つ乱してないくせに……まあ褒められんのは素直に嬉しいけども。

そんなこれ以上の戦闘は遠慮したい俺だったが、

「なら、俺ももう少しー」

「おいおいおい……!」

「ー本気を出すよ」

ー常磐ソウゴは俺のその思いは伝わらなかつたようで、俺とは真逆に「まだまだ戦いたい……!」とやる気満々で己の戦意を示すかのように取り出した新たなライドウォッチを手を持った。勘弁してくれよマジで……!」

『ジオウー!』

ジオウはそのライドウォッチのボタンを押すと、慣れた手つきでリユーズを回しカバーをスライド。

『ジオウ!』

ライドウォッチを二つに分裂させジクウドライバーの左右のスロットに装填して構えをとり、

「変身!」

【ライダータイム!】

『仮面ライダー! ライダー!』

ジオウ・ジオウ・ジオウII!』

最初と同じようにベルトを勢いよく一回転させた。瞬間に世界が一回転し、ジオウの背後に出現していた二つの大きな時計が重なる。

ジオウの体をバンドの輪のようなものに覆われ。

ーソウゴはジオウIIにフォームチェンジした。

「……やばそうだな、こりや……」

気が付けばジオウのその姿を目の当たりにして、俺はそう呟いていた。分かりやすいほどに正統進化した感じ……「II」って言うんだから、さっきまでのジオウより強いのは確定だろ? え、さっきも普通に押されてたのに更に強い形態って………なんでえ!? こ、これがオーバーキルとかいうヤツ……? ……それはまたなんか違うか。

「あーくそッ……」

今の俺が挑むのが無謀な相手だっただけのはわかる。今、嫌ってほどにひしひしと感じてる。でも、ソウゴはまだまだやる気だし……ソウゴが満足するまで戦わないと「この世界から脱出する方法」も聞けないだろうし。勝ち目がなからうがやるっきゃない。

「やってやるしかねえか!」

俺は自分に言い聞かせるように、自分を鼓舞するようにそう吠えてジオウに向かって跳んだ。作戦は変わらず「ガンガン行こうぜ!」で。

「どらあああッ!」

空中で殴りの構えをとり、ジオウの真ん前に着地し素早く右拳を振るう俺。まあその攻撃はフェイントで……俺は左足をジオウの頭部目掛けて振り上げた。しかし、

「……見えた。あんたの未来が!」

「っ!?!」 がはっ……ぐわあッ!」

ジオウはまるで俺の動きが全て分かっていたかの如く、フェイントに一切引つかからず俺が振り上げた左足を片腕で掴むと空いた片手でパンチを繰り出し、追撃にジカンギレードで俺の胸を突いた。

待て待て待て……!!

今食らってみて分かったが……さっきまでのジオウと違って、ジカンギレードよりも普通のパンチの方が威力高くなってるのか!?

「そらあッ!」

そんなことを考えている間にいつの間にかジオウの手にはジカンギレードとはまた



別の剣が握られており、それはジオウは何の躊躇いもなく俺に投擲してきた。け、剣投げるとか蛮族かよこいつう!! いや、まあ俺ももし剣持ってたら投げて攻撃とかもするかもしないけどさあ……!!

投げられた剣は俺の胸を直撃し大きな火花が散る。

そして俺は地面に倒れ、

『ライダーフィニッシュタイム!』

「くッ……!!」

「これで決める!」

『トウワイズ タイムブ레이크!』

「! やばい……!!」

ジオウはその隙にベルトに装填した片方のライドウオツチのボタンを押すと、ロックを解除してベルトを一回転させて跳んだ。必殺技……! 絶対これ食らったらやばいだろ!! というかこの人今「決める」とか言った? え、殺る気100%じゃねーか!?

「っ……く、ぐあ……!!」

急いで立ち上がろうとする俺だが、ジオウIIによって受けた攻撃……特に今食らった剣の投擲がやばかったのだらう……体はすぐには立ち上がってはくれない。その間にもジオウは空中で蹴りの構えをとった。

「はああああ!!」

(あー死ねるわコレ)

ジオウの右足にはマゼンタ色のエネルギーが収束。凄まじい威力と速度を持った必殺技ライダーキックが放たれる。回避が間に合わないと分かった俺は反射的に両腕をクロスし防御の態勢に入り、

「――魔王、お前そいつを殺す気か?」

――ジオウの必殺技が直撃する直前。

誰かの声が響き、俺が前を向けばそこには銀色の幕?のようなものが俺とジオウのちようど間に出現しており、

「!ーっ」と

「!ー え、あ、おお……!?!」

ジオウの姿がその銀色の幕?の中に消えたかと思うと、後ろを振り向けばそこにも銀色の幕?が現れジオウはそこからまるでワープされたのかように出てきた。な、なんなんだこの幕みたいなの……? というかさっきの声は…

「……門矢士、あんたも来たんだ？」

「少しそいつに用があつてな……来て正解だった。運が良かったな？ あのままだったらお前死んでたぞ？ ま、ここは現実じゃないがな」

「え？ あつ、ありがとうございませう？」

ジオウは左右に装填したライドウオッチをスロットから抜き、変身を解除すると横に目を向けて口を開く。その視線につられて俺もそちらを見れば、いつから居たのか……そこには首からマゼンタカラーのカメラをぶら下げた男が立っていた。男の言葉に俺は「助けてくれたってこと？」と疑問を抱きつつ、ジオウに続きショットライザーからプログラムズキーを取り出して変身を解除して軽く頭を下げ感謝する。

「……かこの人誰……？」

「……初対面だよな？」

「えつ、あ、あの……どちら様？」

「……この世界で名乗つても、どうせ目覚めればお前はここでの出来事を綺麗さっぱり忘れる。お前のその質問に答えるのは無意味だが……門矢士……通りすがりの仮面ライダーだ」

「あ、どうも」

（と、通りすがりの仮面ライダーって……どゆこと……？）

いや、聞いたのは俺だけどさ……？

返答が訳分からず混乱するが、どうやらこの人も「仮面ライダー」らしい。ジオウと同じく人の「夢の中みたいのものらしい」この世界に入って来てる辺り、きつと彼もまたかなり特異な存在なのだろう。

「それにしても……やり過ぎだ魔王。現実じゃないからといって『後輩』を容赦無くいじめすぎだ」

「あはは、ごめんごめん……ちよつと待つて？　ねえそれあんたが言う？」

二人の会話を聞きながら、俺はライジングホッププログラムライズキーをホルダーにセツトする。つうかソウゴお？　ほんとにやり過ぎだかな？　多分あれ食らった門矢さんの言つてた通り俺死んでたよな……魔王こつわ……俺息抜きで殺されるとこだった（畏怖）

「ジオウ、戦いも終わったし……教えてくれ。」

どうすればこの世界から出られるんだ？」

「簡単だよ。あんたが本気で『生きたい』と強く思えばいい」

「……そんなんでいいのか？」

常磐が言つた、予想以上に簡単な方法に俺は思わず首を傾げた。正直半信半疑だが……信じてみるしかないだろう。

ジオウと俺の戦闘はこうして幕を閉じー。

「待て。天本太陽」

「はい？」

「言つたろ？ 俺はお前に用があつて来た」

「……………ま、まさか息抜きで戦えとかー」

「ー違う。その魔王と一緒にするな。」

俺の用はお前に会いたいというヤツがいてな。お前をそいつと会わせることだ。

……………あー安心しろ。そこまで時間はとらないだろうからな」

「俺に会いたいヤツ……？」

こんなわけわからん世界で俺に会いたいヤツ……誰だ？ 全く予想がつかないんだ

が……

「それじゃ、これで一先ずお別れかな？」

「……………息抜きでボコられた挙句、殺されそうになった件は許せんが……」

「ほんとごめんね？ 思ったより手強くてついき」

『つい』で殺されそうになった人の気持ちも考えてみてください！ まあ夢の中みたい

な世界だから正しくは「死ぬ」訳ではないんだろうけど。

「まあどうせ忘れちゃうから許すけども……まあ、ありがとなジオウ。マジで色々助かった」

「どういたしまして。俺もまたあんたに会えてよかった。それじゃ……じゃあねバルデルー天本太陽」

常盤が差し出してきた手を掴み、俺たちは最後に握手をする。きつともう二度と俺と常盤ソウゴが出会うことはない……その方がむしろいいのだろう。俺は何故かそう直感的に思った。

「それじゃあ、とりあえず会ってこい」

門矢士はそう口にし、手をくいと動かす。

すると俺の後ろに出現していた銀色の幕？が回りながら俺の方へと移動して、

「うおっ!？」

——俺はその中を通過した。

「……ハハハ……」

銀色の幕の中を通過した俺の目に最初に映ったのは、さつきまでの真つ白な……見るからにして不可思議な世界とは違った。足元には草が生えており、辺りには何らかの建物や木がある。随分と普通な光景だが……俺には見覚えがあった。

「通信衛星の発射場……？」

デイクレイクが起こる前。

実験都市に住んでた時に実際に一度だけ見たことがある。それにテレビでも報道されてたっけ……『飛電インテリジェンスが開発した通信衛星、いよいよ発射！』って感じで。

俺が今立つこの場所はその通信衛星の発射場によく似ていた。だが、そこに設置されていた発射予定の衛星はどこにも見当たらない……。

「来たか」

「！」

後方から聞こえた声に俺はすぐに振り返る。振り返った先には、

「……あんたは……」

（ヒューマギアか？）

「……耳にヒューマギア特有の機械を付けた男が立っていた。……その姿を見るにワズと同じく、多分この人も初期型ヒューマギアってやつなのだろう。」

「あんたが、俺に会いたっていう……？」

「ああー俺は飛電其雄、ヒューマギアだ」

俺が問えば男——飛電其雄は簡潔に名乗る。

「……俺の記憶が正しければ、俺がこの人と出会ったことは「元の世界」でも「ヒューマギアに支配された世界」でもないはずだ。なら、彼は何故に俺に会いたかつたんだ……？」

「……そうか、君が『仮面ライダー』の力を……これも運命というやつか……」

「え？」

「いや、よく来てくれた。俺から君への要件はただ一つだ」

何か小声で呟いていたが……何を言っているのか俺にはわからなかった。飛電其雄……其雄は不思議に思う俺に気付き要件を口にし、

「何様だと思うだろうが……君が仮面ライダーの力を持つに相応しいか。俺に見せてくれ」



【サイクロンライダー！】

どこからか取り出したフォースライダーによく似た形状の……だがカラーリングがかなり異なるベルトを腰に装着する。そして、同じく取り出したプログライズキー……いやゼツメライズキーのボタンを押す。

『KAMEN RIDER！』

「ー変身！」

【サイクロンライダー！】

其雄は「変身」と言いゼツメライズキーをベルトに装填。その直後、現れたバツタのライダモデルが其雄の周囲を跳ね回り、更に強い嵐が吹き荒れる。その中心に立つ其雄は赤いレバーに手を掛けーレバーを引く。ー装填されたゼツメライズキーが強制的に展開された。

『ロッキングホッパー！』

【Type One.】

バツタが其雄に向かって跳び、其雄はスーツを纏い、出現したテイルブルーのアーマーが伸縮し勢いよくスーツの上に重ねて装着されー変身した其雄は俺の変身を待つように動きを止めた。

「……はあ……つたく、どいつもこいつも……」

ついさっきのジオウとの戦闘を思い出し、俺は自らの腰に手を置いてため息をつく。  
……あんたが一体何者なのか俺は知らない。仮面ライダーの力を持つに相応しいかどうかって……相応しいわけあるか。俺より「適任」がいるって俺自身今でも思ってるんだしな。でも、

(……俺にも守りたいものがある)

俺にも……誰にも譲れない、守りたいものがある。

それを守る為に俺はこの「仮面ライダー」の力を使ってきた。

……戦うのは怖いけど、俺はきつとこれからも戦うのだと思う。

【ショットライザー！】

だから、俺の全力……見せてやる。

「……わかった。やってやるよ」

『ストロング！』

【オーソライズ！】

腰に装着したバックルに取り付けたショットライザーにプログライズキーを装填し、俺は右手でプログライズキーを展開。素早くバックルからショットライザーを取り外し上に掲げ、銃口をゆっくりと下ろし前に向け、

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「ー変身ツ…！」

【シヨットライズ！】

ートリガーを引く。瞬間に発射された弾丸を其雄は躲し、ストレートな軌道で返ってきた弾丸に俺は右のアップパーを打ち込む。

『アメイジングヘラクレス！』

【With mighty horn like pincers that flit  
p the opponent helpless.】

そして、展開された黄緑と白のアーマーが装着されていきもう随分と聞き慣れた変身音が響く。

「——俺は仮面ライダー型。人間とヒューマギアを守る為『夢』の為に戦った仮面ライダーだ」

変身を果たした俺を前に其雄：仮面ライダー型はそう言う。

何の為に戦うか。

ああ、俺が戦う理由はきつと——

「——俺は仮面ライダーバルデル。俺が守りたいみんなの『未来』の為に戦う仮面ライダーだ！」

——俺が守りたい人達の『未来』の為だ。

「仮面ライダー1型」と「仮面ライダーバルデル」は同時に駆け出し

——ある男の意識は覚醒する——

——彼が見る未来は果たして——

# 【仮面ライダーゼロワン】 十数年振りの覚醒

「――道具如きが私に意見するな」

――乾いた銃声が響いた――

「……………えっ……………?」

Z A I A エンタープライズジャパン本社、社長室。

そこには今一人の男と一体のヒューマギアが居た。

男は手に持った拳銃をヒューマギアに向け、ヒューマギアは青い液体が流れる胸を押さえる。……ヒューマギアの中では突然の事態に対する「恐怖」よりも「驚愕」が上回っていた。そんなヒューマギアに、

「――私はヒューマギアを認めない」

――冷酷にそう告げると、男は引き金を無慈悲にも再度引いた。それは明確なトドメ

だった。

——乾いた銃声がまたも響く——

更にもう一発の弾丸を受けたヒューマギアは、燃料である青い液体を損傷した部位から大量に流しながらばたりと物のように倒れた。恐ろしい事をした男だったが、彼は何の感慨に浸る様子もなく……一瞬だけ目を閉じ何かを思い出すと力強く口にした。

『——俺は、あいつと……滅と戦います』

『……まあ、何だ、俺も天津さんに会えてよかったです』

『みんなの未来は俺が守ってやるッ……！』

お前の計画はここで終わりだ、滅ッ！』

「——絶対に」

そして、男はその後の部下からの緊急連絡を受けて部屋に倒れるヒューマギアにまだ利用価値があると判断するのだった。

私がそれを見つけたのはただの偶然だった。

ショットライザーやプログライズキー、その他の開発してきたアイテムのデータを整理していた私「刃唯阿」はあるデータファイルを見つけた。その映像が記録された日付は今から十二年ほど前。そのデータファイルの名前は、

【試作品（仮称）ショットライザー実戦運用

テスター  
使用者：天本太陽】

「天本太陽……？」

一切記憶にないデータとテストの名前に私は思わず首を傾げる。

私は人工知能特務機関A・I・M・Sの技術顧問であり、A・I・M・S特殊技術研究所の最高責任者も兼任している。更にはZ A I Aエンタープライズジャパン内では社長直轄開発担当という地位に就いている。そのため「エイムズショットライザー」の完成にも大きく関わっていた。しかし、そんな私でさえ「ショットライザー」のテストが誰なのか、今の今まで知らなかったのだ。それはよくよく考えればおかしな話だった。

また今思えば社長が私に「ショットライザーの完成」を指示した時、既にショットライザーの戦闘データ・使用データともに充分過ぎる量が揃っていなかったか？

「ショットライザーのテスト、か」

何故自分がそんな存在を知らなかったのか……態々知らせる必要もなかったから？ 私から「テスター」の存在を天津垓本人に聞かなかったから？ 情報が限りなくゼ口に近い今の段階で考えたところで答えは出ないだろう。

自身も使用しているショットライザー。そのテスター……よくよく考えれば自分にとって全く無関係な話ではない。むしろ、重要だと思った私はファイルをクリックして開いた。

「…なんて数だ……」

開いたファイル内には何十本もの戦闘映像の動画が並んでおり、タイトルは「実戦運用1」「実戦運用2」「実戦運用3」といった風に統一されている。再生してみれば、戦闘映像の撮影は黄緑色のアーマーと白色のアーマーを装着した仮面ライダー？とオニコマガリアが対峙しているシーンから始まった。

『お前は何だ？』

『俺は天本……いやーバルデル。それが俺の名だ！』

ーマガリアの問いに彼は「バルデル」と答えた。

その台詞を聞いた瞬間「飛電<sup>ゼ</sup>或人<sup>ロウジン</sup>」の姿を思い出しながら私は動画を視聴する。天本太陽の今の台詞やその後の戦闘を見るにどうやらこれが彼にとって最初の変身だったらしい。



しかし、バルデルはマギアに一切臆する事なくほぼ一方的に攻撃を繰り出し僅か数分でオニコマギアを撃破する。その戦闘能力は普段からマギアと戦い、ゼロワンやバルカの戦いを見ている私の目からしても十分驚異的に映った。

(これがバルデル……試作品ではあるが、ショットライザーでの最初の変身者。つまりは、私達の先輩にあたる人物か)

バルデルの戦闘をいくつか見た私はまず最初に「荒々しい」という印象を覚えた。

強靱なそのアーマーで攻撃を受け止め、マギアを強引に叩き伏せ、最後には必殺技でフィニッシュ。実に分かりやすい……見ていただけで爽快な気分になる程に勢いのある力任せな戦い方。

「凄まじいな……」

良くも悪くも「荒削り」な戦闘スタイルだったが、私は素直に感嘆の声を漏らす。最初は対して衝撃を受けなかった私だが、最初の戦闘映像から次の映像に進むにつれ急速に成長していく「天本太陽」の戦闘能力には彼のポテンシャルの高さを感じざるおえず、この男は一体何者なのか?という疑問が生まれた。

「ただの一般人とは……考え難いな」

データの日付から考えるにマギアと戦闘するようになってから二ヶ月ほどが経過したのだろう……映像を見るにその頃には既にゼツメライズキーでマギア化したマギア

を二体同時に相手取り、見事撃破する程の戦闘力を発揮している。どう考えても一般人の所業じゃない。

——彼がデイベレイク被害者の自称一般人だとは、今の私は当然ながら知る由もなかった。

そして、続けて他の動画も見ている中で「天本太陽」のその戦い方を私は最初荒々しい部分が不破に似ているなど思ったが……すぐに違うなど思い直した。

(天本太陽……この人は、マガリアと戦う事を怖れている)

「……何故そこまでして……？」

——天本太陽バルデルの戦い方は確かに荒々しい。

しかし、その荒々しさからは「怒り」の感情よりも「怖れ」の感情が強く感じられた。彼の戦闘時のこの「荒さ」はきつと自身を鼓舞する意味合いもあるのだろう、と私は考えた。

だからこそ、思ってしまった。

彼はどうしてそこまでして戦っているのだろうか、と。

気付けば私は時間を忘れて試作品ショットライザーの実戦運用・戦闘映像の視聴に没頭していた。

そして何十本もあるデータ、その戦闘映像を見始めて数時間後。

「……は……？」

何十本目かの戦闘映像。

それを再生して私は驚愕する。何故なら映像には、

『ーバルデル。そのゼツメライズキーを渡して貰おうか』

『！ 滅っ……!?!』

「何だと……!?!」

滅亡迅雷 netの一員ー滅の姿が映っていた。

思わずもう一度映像の日付に目を向けるが……やはり見間違いなどではない。確かにこれは十二年前の映像だ。

(まさか……)

戦闘映像が流れる中、私は嫌な予感を覚えた。

天本太陽は確かに強い。しかし使用しているのは未完成、試作品のショットライザー……ならば変身の際にかかるリスクも高い筈だ。更には相手はあの「滅」である。その戦闘力の高さは私もよく知っていた。ー唯阿が覚えた嫌な予感……それは「天本太陽」が既に滅の手により死んでしまっているのではないか? というものだ。……私は引き続き戦闘映像に集中する。

その予感が当たらずとも遠からずなものであったということを知ることになる

のは……それから少し先の話だった。

(唐突に) 話をしよう。あれを今から三十六万……いや一万四千年前……な訳はないですね、はい。

とりあえず誰でも分かるよう今の俺が置かれている状況を簡単に説明しよう。目が覚めたら何故か俺はベッドの上において目の前には知らない……こともない天井があった。

次に誰かに手を優しく包まれてる感触を感じて、自分の手に目を向けたら……これまた何故なのか……。

「……に……兄……？」

「……そこには俺の手を優しく握る涙目の妹の姿が……いや誰だお前ツ!? 俺の知ってる妹はもつとちんまいな筈だ! (ド失礼)」

こんなランウェイ歩いてそんな美人さんじゃねーぞ!? で、でもよく見ればどことなく美月の面影あるな……いや美少女過ぎるやろ家の妹! 俺の知ってる美月から更にレベルアップしてんだけど……ほ、本当にこの人美月か? 大変身しすぎじゃない?

「あうう? あーあうう!」

訳——美月? マジで!?

……あれ待てよ？ 俺の耳がおかしくなければ今、全然日本語になってなくなかったか俺の声？

「に、兄にいっ……！ わ、私のこと、わかる…!?」

「あー……えあえ、ううあうあ……あーうう！」

訳——あー……えつと、なんつうか……わかるよ！

クソダメだあ！俺全く日本語喋れん！なんで!?

上手く喋れない自分自身にキレた挙句、俺は思わず半ギレで美月の言葉に応える。高確率で正しく伝わってないだろうから笑顔とサムズアップもプラスしといたわ。そして、

「！……うう……兄にい……！ 兄にいい……！」

すると美月は声を震わせて、感極まった様子でまたポロポロと涙を流し出すと、ぼつと俺の胸に顔を埋めて泣き出した。

や、やべえよやべえよ!! 多分この女の人、あの美月なんだけどやべえよ!? こんな美少女を泣かせるとか俺何したんだよマジで！ つうか本当にどういふ状況だこれ!?

誰か説明してくれ頼むから（倒置法）

「あー……あうあー、あう」

（泣くなつて妹よ……！ 兄ちゃん、どう対応すればいいかわかんなくて困っちゃうから

！ な、泣き止んでくれ〜！

俺は自分の胸で涙を流す美少女（妹）に内心めっちゃ動揺しつつ……とりあえず片手で頭を撫でてやることにした。そしたら、なんか涙止めてくれるどころか更に泣き出したけど……その間、手がプルプル震えてしよがなかつたですはい……。ちなみに、美月が泣き止んだのはそれから大体十分後ぐらいのことだった……マジで何したの俺っ？

とりあえず（何したか俺も知らんけど）悔い改めて？

その後、美月は俺の胸から顔を上げて服の裾でゴシゴシと涙を拭くと「先生呼んでくるね！」と涙痕がまだ残る綺麗な笑顔を浮かべて病室から出て行った。……うん、今の一連の感じは俺の知ってる美月のソレだったな。……それにしても今、どういう状況だ？

（……）は、病院だよな……？

美月の発言からも大体分かるが、ベッドから部屋を見渡して……ここが病室だとは俺

にも理解できた。また、ここが「もしかしてデイブレイクの時も滅の時もお世話になった病院じゃね？」とも思った。

(……待て待て待て！ 思い出せ……よおく思い出してみろ天本太陽！ えー……俺は何で病院なんか居るんです?)

頑張つて思い出してみよう、自分自身の最後の記憶を。

はあー……えー……ふむふむ……(回想中)

うん、うん……わかったかもしれない。

「あう……ええうあああう……」

上手く発声できない。

言葉にならない音を吐いた俺は息をついた。

ー俺……生きてたんだなあ……

滅との戦いで、どうやら俺は死ななかつたらしい。

うん、いや純粹に嬉しいよ？ 嬉しいけど……みんなと俺、きつと今同じこと思つて

るよな？ いくぞー……せえーのー、

(俺、しごと過ぎないかああああ!?)

「ーああまさか……またこうやって、動く君を見れるなんて……ね？ 今年一……いや、人生一驚いたよ」

「！ あう？ あうかうあ、あーあう？」

訳——！ あれ？ もしかして、ドクター？

美月が病室に戻つてくると美月の後ろからはどこかで見た覚えのある……というか俺の記憶にあるドクターによく似た白服の男が立っており、その目は俺を捉えた瞬間「信じられない！」といった感じに見開かれた。つうか普通にドクターだなこの人。

「？ ……あー……流石の君でも『十数年振りに目覚めた』ばかりじゃまだ喋れないよね？  
なら、これを使つてみてくれ」

(……十数年振りに目覚めた……?)

なんかこの人も声震えてんだけど……つうか今なんかすつごい信じられん台詞聞いたんだけど……コレは触れない方がいいヤツか？ 一旦そこをスルーした俺は、ドクターが手渡してきた手頃なサイズのホワイトボードとマジックペンをホワイトボード消しを受け取り、



「何か言いたいことがあればそこに書いてみてくれ」

「兄……！ 慌てないで大丈夫だからね？」

了解（多分）ドクター。

美月お前は心配し過ぎじやい！

確かに手は震えてるけど文字ぐらい書けるから。

ドクターと美月の言葉に頷き、俺は早速ペンでゆっくりと一文字一文字慎重にホワイトボードに書いてドクターに見せる。

「さてさて、なんて書いたのかなあ……」

ドクターはそれを受け取り、美月はドクターが持ったホワイトボードを横から覗いた。そして、

「！ 感動の再会が、台無しじゃないか……君……。バカだなあほんとに………ッ」

「でも、すつごく兄らしいです。もお……やっぱり兄はバカ兄だね……」

ホワイトボードに書かれた言葉を見たドクターと美月は、それぞれそんなことを言った。解せぬ。なんで今俺は罵倒されたんだ？ あと何で急に二人とも泣きそうな顔になって、声も更に震えてんの？ また美月泣いちやいそうだぞおい……え何？ 俺またなんかやつちやいましたか？ いや「また」ってなんだよまたって！

ドクターと美月が見たホワイトボードにはこう書かれていた。

【どくたーなんかふけました？ みつきおまえはびじんになりすぎやろ!】

その日「序章の主演」だった男が覚醒した。

本人はまだ知らないが、それはちようど意識不明の重体に陥ってから十二年越しの「奇跡」としか言いようのない回復……そして、それは同時に新たな波乱の兆しでもあった。

## 長い長い入院生活

「十二年と二ヶ月、更に十八日……それが君が意識不明の状態に陥ってから今日。目覚めるまでのトータル時間だ」

「……あ、あうで!?!」

「……ま、マジで!?!」

車椅子に乗って美月に押ししてもらい、着いた診察室でドクターから告げられた事実には驚愕して思わず声にならない音を上げた。

今の俺多分こんな顔してると思う↓。( 皿 )

いやいや顔の話はどうでもいい。

それより……十二年……?!

俺の勝手な予想じゃ長くても一、二年ぐらいだと思つてたんだが……。

(そりゃ美月も大人になるわけだ……ドクターも老けるわけだ)

それだけの月日が経ってるのなら、美月の成長も、ドクターの老け(決めつけ)も納得がいく。というか本当によく目覚めたな俺。これ確率的にはどんなもんだ? 天文

学的確率ってやつか？

【よくめざましましたねおれ】

「他人事みたいに思ってるよね君？ 全然他人事じゃないから。これ君の話だから」

現状、震える手のせいで漢字は上手く書けそうにないので仕方なく全部平仮名で文を書いた俺は、ホワイトボードを見せる。それを見たドクターは席から立ち上がり不機嫌そうな顔で喋り出す。

いやごめんなさい！何か起きたばつかりのせいか頭がまだぼんやりしてるんすよ。

【おれがめざまめたのってきせきてきだつたり？】

「本当にね……まさに奇跡だよ。」

しかも意識が回復してすぐにこうして普通に私とボードを使ってやり取りしている……普通に考えてこれだけでも十分異常なレベルさ」

ドクター曰く……意識が戻った直後にここまで意識がはつきりとしており、更に言葉をしつかりと聞き取り、更に更にボードに平仮名だけとはいえ問題なく文字を書けること自体異常だという。無論いい意味でだけだな。

【まあとりあえずいきでてよかつたつす。じゅうねんいじょうたつてるとか、しようじきじつかんわかないですけども】

「それはそうだろうね。まだ頭も混乱してるだろうし、まずは体をしつかり休めてくれ」

【え おれまだねむくないですよ】

俺がボードに文字を素早く書き見せれば「眠気は関係ないよバカ！」とドクターに怒られた……暫くは絶対安静で、詳しい話とかはまた後日とのことだ。

それにしても……十二年、か。

(……これっぽっちも現実味がないつつうか、まだ夢の中にいるみたいっていうか……)

「はあー……あーう」

「? 兄にい、大丈夫?」

「あーあー」

言葉が喋れないって不便だなあ……テレパシーとかできないもんかね? ……まあ少な

くとも一般人の俺には一生できそうにねえな、と思いつながら俺はペンをボードに走らせ、心配そうにして車椅子を押す手を止めた美月にボードを見せた。

【ちよいとだるいだけ しんばいむよう】

「心配無用って……今の兄にいを心配するとか普通に無理だからね? 私じゃなくても普通

心配するよ」

うん、ご尤もな意見だなそりや。

美月：相変わらず常識的な意見だあ（謎の上から目線）

マジで安心したわ。

「あ、言い忘れてた……バカ兄<sup>にい</sup>」

「う？」

美月の変わらぬ性格を垣間見て若干の感動を覚える俺だったが、車椅子の後ろにいた美月が前に出て来たので俺は首を傾げ――

「――本当に……っ……おかえりっ！」

感情がこれでもかと籠もったその言葉を聞いて、今にも崩れてしまいそうな……無理して作ってるのが見え見えの微笑みを見て、俺は察した。

だから、美月の頭に手を伸ばしポンつと置き頑張つて口を開いた。

「た……だあ、い……まあ」

『ただいま』その言葉だけは伝えなきゃいけない……そう思ったから少し無理して俺は言葉を紡いだ。

そう「十二年」だ。

美月は十二年という途方もない時間……いい子だからな。俺の事を心配していてくれたんだらう。きつと父さんも母さんも、ドクターも……それに……。その間……一体どんな思いで……。どれだけの心労かけたことか。俺には想像もできない話だ。だからこそ、（ありがとうな、美月）

その思いが伝わるように。

俺は優しく、兄らしく妹の頭を優しく撫でた。いつの間にか妹が俺より大人っぽくなつてて兄ちゃん複雑な気分だけでも……。本当に、ありがとうな。

「っ……うう……兄にいいい……っ！」

私、寂しかったっ……寂しかったよお……！」

……伝わってくれたのかどうかはわからない。

ただ、美月は抑えきれずに感情を爆発させ泣き出した。そりや十二年だもんなあ……さつき病室で一回泣いたけど、そんな程度じゃ足りないぐらい美月は寂しかったんだらうな。それに美月はちよつと寂しがり屋だし。

（やっぱりお前は、俺の妹にしちゃ……いい子過ぎるわ）

——改めて俺はそう思うのだった。

×月×日×曜日

とりあえず入院生活が暇で暇でしゃあないから、美月に頼んで家から持つてきてもらったこの日記帳を使って暇つぶしに色々その日あったことを書いていこうと思う。漢字書くのはまだむずいけど頑張ってみることにする。

まず今日、入院生活一日目。

俺が起きたらそこは十二年後の世界だった……。

何なんだ、このSF小説の冒頭にありそうな一文は。

でもこれがマジな話なんだから笑えない。

何だよ十二年って……お前寝過ぎだろ！ もうちょい早く起きれなかったのか……いや意識が戻っただけ「奇跡」らしいけども。

あ、それと十二年経つてることもあるけど美月は大人に、ドクターは老けてた。なのに俺といえば体はかなり痩せ細ってるけど、外見年齢はパツと見20代前半ぐらい……つまり全然変わってないように見える。だから、尚の事まるで「俺だけ」が周りに置いてかれたみたい感じるのだろうか？

………十二年も経つてるつつうことは、俺が意識不明になる前に二期放送が決定し



てたあのアニメは……二期もとっくに放送して終わってるだろうし、もしかしたら三期・四期の放送とか……あ、あの漫画も完結してんのか？ ……待つてめちやくちやわくわくしてきたツ!!

よし！今日は徹夜でネット三昧と洒落込……あれ？ 十二年って……お、俺のスマホどうなりましたー？

※ちなみに美月とドクター二人掛かりでネット三昧計画は強制的に阻止されました……ちくしょう……

追記 父さんと母さんが早速お見舞いにきた。そんで二人して即泣きそうになった。父さんは静かに泣いて、母さんは大泣きして、美月もそれにつられてまた泣いて……ここ病院ってわかってんのこの人達!?! ……まあ、みんな元氣そうでよかったわ。父さんも母さんも長い間心配かけてごめん。とりあえず、ただいま。

ちよつと、目にゴミが入った。これ以上は上手く文が書けそうにないから今日はここまでにする。

×月×日×曜日

入院してから一週間ちよつと。

今日、記者の人達が病室にちよー殺到してきた。いやもうやばかった。ドクターとその他の人がいなくなったらまずかったな。記者の人達の気持ちも分からんでもない……。十二年の時を経て目覚めた人が現れたら俺も「話聞いてみたいなあ」って絶対思うし、いいネタになりそうだし……。

まあ何聞かれても、俺まだ喋れないんだけどね！ H H H H A ! …… はあー …… 疲れた。

それと明日、天津さんがお見舞いに来てくれるらしい。どっから連絡きたかって？ いや病院に直接来たんだよ。俺も聞いてビックリしたわ。それで電話で「もしかしたら、また記者の人来てお見舞いどころじゃなくなるかもです」って言ったら「大丈夫ですよ。既に手は打ちましたから」とか天津さんは言ってた。相変わらず怪しいというか何という…逆に安心したね。

天津さんと俺の十二年振り最初の会話は電話だった。まず何を言えばいいのか……上手く思いつかなくて、なんだか気恥ずかしくて、俺が発した第一声は「感動的」要素は皆無だったと自分でも思う。

「天津さん……ちゃんと社長になれたんですね」

俺の言葉を聞いた瞬間、電話の向こうで天津さんは暫く黙った。天津さんは一体何を思ったのだろうか？ とりあえず俺の台詞を聞いて「失礼だなお前」とは思ったんじゃないかならうか。

それとも……もしかして泣きそうになってたり？（冗談）

まあ流石にそれはないか。天津さんが泣くところかマジでイメージできないからなあ。

「……え、ええ！君が意識を失ってからちようど二年後に、正式にZ A I Aエンタープライズジャパンの社長に就任しましたよ」

少し遅れて、返ってきた天津さんの声はどことなく上擦っているように聞こえたけど……きつと俺の気のせいに違いない。

もし気のせいじゃないとしたら、素直に嬉しいっっちゃ嬉しい。というか十二年も経ってんのに、天津さん……よく俺のこと覚えてましたね？ と口には出さず内心想った。

「そつすか……言うの随分遅くなっちゃいましたけど、『社長就任』おめでとうございませう」

「！ ふふふ、ありがとうございます……積もる話はありませんが、それはまた明日に……何せ、あれから十二年ですからねえ。直接、君と顔を合わせて話したいことが山ほどあり

ますよ」

「俺もですよ……天津さんに聞きたいことが山ほどある。特に俺が滅と戦ったあの日の……その後のこととか」

そして、俺と天津さんは久々に会話を交わし「また」と電話を切った。

「じゃあ、また——天津さん」

「ええ、また明日お会いしましょう——太陽君」

明日が楽しみだな……これで天津さんの姿も変わってなかったら最早ホラーだわ。二人揃って十二年経つても変わってないとかさ。

追記・この流石使い物にならなくなったに寿命が尽きたスマホもどうかしなないとなあ……。機種変、自分ではまだ行けそうにないし……父さんか母さんにも頼もう……と思つてたら美月が「私が行つてきてあげる!」と謎にやる気満々で引き受けてくれた。なんか美月、十二年前以上に優しくなつてない? 気のせいかな?

とりあえず……ニュースでも見るか。

天津さんが来ると知つて、何故か美月はそれはとてもとても嫌そうな「最悪……」み

たいな感じの顔をした。それが気になったので俺はすぐに聞いた。

「美月、お前なんでそんな不機嫌そうなん？」

「……別に不機嫌じゃないし」

嘘ダウトつけっ！

絶対嘘だね。さつき天津さんの名前聞いた瞬間、一瞬笑顔が固まったやん。次にため息ついたじゃん？ しかも今口尖らせたろ？ 兄の目は誤魔化せんぞ妹よ！ 観念しろツツ！（謎にハイテンション）

「顔に『不機嫌です』って思いっきり書いてありますけどー？ 家族が嫌そうにしてんのぐらい『十二年』経っても顔見りやすぐわかる」

「……明日、天津さん来るんでしょ？」

「うん………え？ 美月、お前天津さんに会ったことあるのか？」

なんて聞いたものの十二年もありや会ってても……いやおかしいだろ。美月は確かに超美少女だけど、あの人大企業の社長ぞ？ 会う機会なんてそうそう、

「そりや一度は会うよ。だってあの人、最低でも一月に一回は兄にいのお見舞いに来てるし

……」

「へー………え、一月に一回……!? え、何それ」

ーあ、お見舞いの時に会ったのか（合点）

つうか一月に一回ってマジ……？ あの人社長だし、多忙な筈なんだが……やっぱ胡散臭いけどいい人だわ社長！

「それで？ 天津さんが来たら、何でお前が不機嫌になるんだよ？」

「だって——私あの人嫌いだもん！」

……あ、天津さーん？

あんた——今の美月は大人だからわからんが——お淑やかさと落ち着きには欠けてたけど、基本超いい子の美月にここまで嫌われるとか何したの？ というか純粹な「嫌いだもん！」威力高いなオイ。俺に向けて言われてたら枕濡らす自信あるわ……。Mの趣味の人は興奮しそうだけど、俺にそつちの趣味はないから全然嬉しくない。え？ じゃあSなのかって？ いや俺にもわかんねえー。誰か教えてくれ。

「確かにあの人のおかげで兄にいは生きてるけど、あの人とにかく偉そうだし胡散臭いし……何か態度が鼻に付くの」

「……まさかお前の口から『鼻に付く』ってセリフが出てくるとは思わんかったわ」

「それに！ 天津さん最初、家族に一切許可なく兄にいの病室にお見舞いに来たんだよ？」

ありえなくない!? 普通家族に許可取るでしょ！ 最初病室で会った時ビックリしたもん私。真つ白の不審者が現れたって」

嫌いな理由を美月は言ってくれたが……うん！ やっぱ悪いのあんたじゃねーか天

津さん！ 何やってんのよバカ社長。見舞いに来てくれる気持ちは嬉しいけどもさー。  
(とうるか、天津さんの「おかげ」で俺が生きてるってどゆこと…?)

美月、その話ちよつと詳しく教えてくれ。

「！……本当に、元氣そうで何よりです」

私は辿り着いた病室の前で小声でそう呟くと、そつと目頭を押さえた後に中へと入った。見舞いに来る中で随分と見慣れたそのベッドの上……友は、あの日から何ら変わらぬ姿でそこにいた。

意識不明の間、彼を死なせないため「延命措置」の為に付けられた人工呼吸器も、痛々しいほどの量が繋がれていた細い管も今はもうない。設置された心電図もピツピツと安定したリズムで鳴り、そこに居る彼が「生きている」事を教えてくれる。

「——失礼」

私の第一声は奇しくも初めて出会った時と同じものでーっゆつくりと病室の中に入った。その声に反応して顔を動かした彼は、

「！……相も変わらず、真っ白コーデとか…草しか生えないんですけど。つうか変

わかってなさすぎでしょ？」

「ー可笑しそうに、嬉しそうに、微笑んだ。」

「私は、この服装が気に入っているだけです。容姿については……お互い様でしょう？」

「あはは、そりやそうだ」

十二年も経つというのに互いに容姿に目立った変化はない。彼は元々「若く見える」体質だったりするのか？ それとも意識不明の間に体で何か突然変異でも起こしたのか？ 何てことを見舞いで彼の顔を見る度に考えていた私だが明確な理由は今になってもわかっていない。

でも、私は嬉しくてたまらなかった。

あの時から変わらないその姿に……まるで、あの日の続きがまた始まったような気がしてならなかったから。

「十年振り……つて事になるんですかね？ お久しぶりです天津さん」

そう言つて手を差し出して来る「天本太陽」。

「またこうして会えて……本当に嬉しいですよ太陽君」

切望していた友との「再会」に。

私はきつともう誰にも見せることはない、そう思っていた心からの穏やかな笑みを浮



かべその手を握った。

……少し泣きそうになったのは彼には内緒である。

×月×日×曜日

入院生活が始まって早二ヶ月。

流石にデイブレイクの時や減にやられた一回目の時のように「はい退院」とはいかなかった。まあ、まだ松葉杖なしじゃ移動できないし、そりやそうだ……まあそれでもドクターには「いや十二年以上意識不明だったのに、たった二月で普通に喋れて、もう車椅子要らずとかおかしいってレベルじゃないからね？ そこんところわかってる？」って言われたけど。ほんと、俺を丈夫な体で産んでくれた母さんには感謝の極みだなー……。

そうそう。

それと松葉杖で動けるようになってからは、リハビリもスタートした。予定よりもかなり早いらしいけどまあ回復が早いに越したことはないだろう。まだ上手く手足に力が入らないけどとりま頑張ってる。

あー、あともう一つ。つい二週間前ぐらい。

こここの病院に重傷の人が一人緊急搬送されてきてさ……運ばれていくとこ病院のエントラスで偶然見たんだよ。その人もドクター曰く「回復力が異常」らしい。しかも最近、リハビリの時間が俺と一緒にその人とほぼ毎日会うんだよな。名前は確か「不破諫」。

追記……病院に緊急搬送されて、少し前から気になってたんだが一体何したらあんなボロボロになるんだろうか？ ただの喧嘩とかじゃ、まずあんな風には何ないだろうし……まるで俺が滅に負けて病院送りになった時みたいな……いや、ありえない話だけどな？（笑）

滅に敗れた俺「不破諫」は病院に搬送され、現在入院生活を送っていた。回復力が高いこともあり、体は順調に回復し今ではリハビリもしている……そんなある日のことだった。

『どうやら俺には二つの記憶ができちまったようだ』  
『ヒューマギアに襲われた記憶と……救われた記憶だ』

俺は入院している間、あの日のように病院の屋上に来てはそこから見えるデイベレイクタウンの景色を見渡していて、その日もまた例の如く屋上に来ていた。だがその日は

一点だけいつもと違っていた。

「……あ、ども」

「……………」

——屋上には俺より先にとある青年が訪れていた。

それを見た俺は車椅子に乗ったまま無言で踵を返そうとした。だけど何故だか車椅子を動かそうとする手は自然と止まり……口を開いていた。

「あんたは、リハビリの時の……」

（いや、それだけじゃない。俺はこの男を知っている……）

松葉杖で身体を支えている青年を俺はこの病院でリハビリをする際に何度か見た時があった。また、それだけじゃなく自分は「彼」を知っている……そう直感的に思うと同時に、軽い頭痛を感じて頭を押さえる。

今、何で俺はこの男を知ってるなんて思ったんだ？

自分の頭に浮かんだ思考に首を傾げる俺だったがそんなこつちの様子を見た青年もまた同じ様に首を傾げていた。

「？ あなの、どうかしました？ もしかしてどこか怪我でも？」

「……………いいや、何でもない」

「あ、そうですか……あー、俺邪魔ですかね？ 邪魔だったらすぐ出て行きますけど」

「ここは別に俺の場所って訳じゃない。邪魔だなんて思わねえよ」

自分の様子を伺うように（怒らせないように）という見え見えの腰の低い態度をとる青年に俺はそう答えて車椅子を動かし、青年から少し離れた位置で止まり、そこからデイレイクタウンを見た。青年は暫くこちらを心配するように横目で見た後に俺が来る前にそうしていた様にデイレイクタウンに目を向けた。

「……あんたは」

「? はい?」

「何でここからの景色を……デイレイクタウンを見てたんだ?」

こんな風に他人に声を掛けるなんて我ながら珍しいことだったが俺はデイレイクタウンを感慨深そうに見つめる青年の様子が気になって気付けばそう聞いていた。

「何で、何でかあ……まあそんな深い理由はないんですけど」

「……………」

「懐かしいなあ……って思いました」

「? 懐かしい? あんたもしかしてー」

「はい、俺『デイレイク被害者』ってやつなんですよ」

青年の言葉に俺は少なからず動揺した。側から見ても一般のものにしか見えない青年が……デイレイク事件の被害者であるという事実。そして、その事実をあつげら

かんと明かす青年に。

「あんたは……何とも思っていないのか？」

「え？」

「あの事件に巻き込まれて……あんたの人生は滅茶苦茶にされたんじゃないのか？ 少なくとも俺の人生は滅茶苦茶にされた」

「！ あなたもデイベレイクに？」

「ああ……そうだ」

次は青年が動揺する番だった。

こっちの言葉に多少驚いたらしい青年の問いに俺は頷く。

「……まあそりゃ、思うところはありますよ？ あの日、いつもと変わらず家を出たら急に爆風に襲われるわ、赤い目したヒューマギアが大量に追ってくるわ……あの事件のせいで俺の人生設計は滅茶苦茶になりましたし。主に就活とか就活とか就活とか就活とか……！」

少し考えた後に、青年はゆっくり当時を思い出すように喋り始めた。それは正しく愚痴だった。

「じゃあ怒りは？ あんたは怒りは抱かなかったのか？」

「は？ いや抱かない訳ないでしょ」

「……は？」

喋る青年の様子からは「怒り」は微塵も感じられず、俺が不思議に思つて聞けば――思わぬ返答が即来る。

「そりや当時は抱きましたよ。俺の就活滅茶苦茶にしがたつてぜつてえ許さねえ！ とか。何がヒューマギアだ滅んじまえ！ とか。結構キレてましたよ」

「……でも、今のあんたから怒りは感じねえ」

「年月も結構経ちますし……何より、夢を聞きましたからね」

「？ 夢？」

諫にとつて青年の言動はその一つ一つが思いもよらぬものだった。

「飛電インテリジェンスの社長さん……あの人がダイブレイク事件の被害者に謝罪に来た時に……あの超熱く『夢』を語つたんですよ。宣伝かな？ つて最初は思いましたけど。あんな熱く自分の夢を語る人……俺初めて見たんですよね。しかも本気の本気で……今思い出してもすげえ熱意だったなあ」

「……それで？」

「そんな飛電さんが言つてたんですよね『ヒューマギアは人間の最高のパートナーになり得る』つて。……だからこんな熱い本気な人が追う夢なら、もうちよい期待してもいいかなつて」

「……あんたはその言葉を信じたのか？」

俺は青年の横顔を真つ直ぐに見て問いかけた。

「流石に、不安もある程度あるつちやありますけどね？ 信じてますよ俺は。というか

一般人の俺には信じることしかできませんから」

そう言つて青年はデイブレイクタウンから視線を外して俺に笑い掛けた。

俺には青年の思いが、考えがまるであからなかつた。

どうしてあれだけの事件に巻き込まれ、人生を滅茶苦茶にされたにも関わらず……そんな風に穏やかに笑えるのか……しかし、

「あんた……名前は何？」

「？ 天本。天本太陽です」

「……そうか。あんたはすげえな」

「……へ？」

誰かの語る夢を心から信じ、過去に囚われることなく前に進んでいける……それができると人間が凄いとすることは俺にもわかる。

「俺は不破……不破諫だ」

「不破諫……それじゃ、不破さんって呼ばせてもらいます」

「ああ、好きに呼んでくれ」

この日から俺と天本太陽はちよくちよく屋上で会っては話す仲となった。

それから、ある日のこと。

「そういや、聞く必要もねえから聞いてなかったが……太陽。あんた年いくつだ？ 見た目からして20代前半だろうが……」

「……あー……やっぱそう見えます？」

「？ なんだ違うのか？ もしかして10代後半か？」

「いやないない！ つうか下がってる下がってる」

俺は思わず「は？」と声を出す。

下がってる？ もっと年齢は上ってことか？

確かに普通に考えてデイベレイクが起こったのが今から十二年前……なら、今自分と同じく若い容姿の太陽も自分と同じぐらいの年齢だと予想はつくのだが……。

「えーヒントを言いますと……不破さんより俺の方が絶対に年上ですね」

「はあ？ 俺は28だが……もしかして29ってことか!？」

太陽の見た目からどれだけ年齢は高く考えても29辺りが限界、そう俺は考えたが太陽の口にした「答え」は俺にとって思いも寄らぬものだった。



「32」

「……悪いよく聞こえなかった……なんつった？」

「32!」

己の耳を俺は疑った。疑いに疑った結果。

「意外だな。あんたもそんな冗談言うんだな？」

「これは太陽なりの冗談なのだと解釈して俺は笑った。

「え、いや違うからね？　これ冗談じゃなくて」

「まあこんな話はどうでもいいとして」

「……あんたこれっぽっちも信じてねえな?!　32!　32だからね俺!」

未だに冗談を続ける太陽を完全にスルーして俺は話を切り替えることにした。話し手ができたことにより俺にとつてこの入院生活は決して退屈なものにはならなかった。

×月×日×曜日

入院生活が始まっていよいよ三ヶ月。

スマホも機種変し、色々最近のニュースについて調べてたんだが……やばい。いや十二年って時間の長さを実感したね。

まず、飛電インテリジエンスの社長が「飛電是之助」のお孫さんの「飛電或人」になつてゐること。そして、マガアの存在……更には「滅亡迅雷 net」の存在が世間に公表されているということだ。

つうかニュースを見る感じ……滅亡迅雷 net は未だ健在らしい。……どうやら俺は滅を完全に倒しきれていなかったようだ……悔しいことにな。さあてと、どうしたもんかね……って俺はただの一般人だからどうしたもこうしたもねえんだけど。それにしても「仮面ライダーゼロワン」か。ニュースで映ってたけど……あのプログライズキーってバツタのやつだよな？

追記：今日、昼に病院の中庭に出たら、ベンチに座つてめっちゃ俯いてる人がいた。いや顔暗っ、怖つて思つて無視しようと思つたんだが、何故だか柄にもなく無性に放つて置けなくて気付いたら声を掛けてた。その人の名前は「刃唯阿」。如何にも有能そうな女性で、最近「仲間」と「上司」によつてストレスが絶えないんだとか。

何でも仲間は命令を聞かず突つ込み、上司は胡散臭く何を考へてるのはさっぱり理解

できないんだとか（説明する気もないらしい）

いや、辞めちまえそんな会社!?

『……あのー』

『? はい:~?』

『だ、大丈夫です:~? なんかあまりにも雰囲気暗いですけど……』

『あーいえ、気にしないでください。全く全然……大したことはありませんから』

『そんな今にも死にそうな顔で何言ってるんだこいつ……』

私、刃唯阿は滅により病院送りにされた不破諫の見舞いに一度行つた際、とある青年に出会つた。最初にあつた時、青年はお茶の入つたペットボトルを片手に心配と怪訝が半々といった感じの表情で私を見ており……

「上司が……白い服しか着ないんです」

「純粹にその人のセンスが心配になつてきたぞ俺。もしかして替えの服も全部……?」

「私知つている範囲では全て……」

「とんでもねえ上司だなオイ」

それからあつという間に時間が経ち、気付けば私は病院の中庭で日頃の不満や愚痴を

青年に聞いてもらっていた。

「それに前にも話していた仲間なんです、また私の命令を無視した拳句、血を吐いて倒れたんです……」

「え、大丈夫なんすかその人……!?!」

「はい、幸い命に別状はありませんでした」

「!、そうか、それならよかった」

私は一般人であろう青年に、事件の話について全ては語らずに喋れる範囲で喋っていた。一般市民に「滅亡迅雷 net」と「A. I. M. S.」の戦闘について詳しく語ることは禁止されているため当然だが。

「……ん、そろそろ診察の時間だわ。悪い刃さん、ちよつと行ってくる」

「いえいえ気にしないでください。それより、いつも話を聞いていただきありがとうございます」

「気にしないで。俺も入院生活が暇で暇でしょうがなくて、話し相手がいてくれて正直すげえ嬉しいし」

スマホを見た青年はそう言うのと、ベンチから立ち上がりベンチに座る私に軽く手を振ると中庭から去っていった。その背に私も手を軽く振り……今更なことに気付いた。

「……そういえば、まだ名前を聞いていなかったな」

青年に名前を聞くのを今の今まで完全に忘れていたのである。

(今度会った時にでも聞くとしよう)

「ドクター、退院まであとどれくらいですかね？」

「君それ診察の度に聞いてくるよね……まあ君のその回復力ならあと二ヶ月もすれば退院できそうだねー。私としては、念のためにプラス一ヶ月ほど入院してほしいけど」

太陽はこうして、知らず知らずのうちに「仮面ライダー」との出会いを果たすのだった。

## トンデモナイ時代!はじめてのライダー!

入院生活が始まって今日で五ヶ月ちよい。

今日、俺はようやく待ちに待った退院日を迎えた。そして、退院当日…最後の診察に向かう俺の心は晴れやかな気持ちで一杯……………ではなかった。

(さてさて…どうしたもんかね)

俺は本気でどうするべきか悩んでいた……悩みの種はただ一つ、

(中身は……見なくても大体予想がつくな)

ー退院祝いにと天津さんから俺宛に届いたアタツシユケースだ。

中身はまだ開けてない。更に言うなら誰にも見せてないし隠してる。アタツシユケースが俺の病室に届けられたのを知ってるのは診察の際に「ついでにコレ」と渡してきたドクターだけだ。まあ中身はドクターも当たり前だが見ていない……つまり、まあ俺が「仮面ライダー」だということはきつとまだ周囲の身近な人には隠しきれているだろう。

は?何で隠してるかって?

そんなの巻き込みたくないからに決まってるだろ。

じゃあ何で中身を開けてないのかって？

ンなの怖いからに決まってるでしょうが！（正直者）

（これを渡してきたって事は……これからまた俺に戦えってことか？ それともホントにただの退院祝い……？）

アタツシケースは俺が過去に天津さんから渡されたものと全く同じ……中身を開けてないにも関わらず俺はもう確信していた。この中身には「アレラ」が入っていると。同時にこれを開けてしまえば最後……

（……またあの時みたいなの日々が始まるってわけか？）

誤解してほしくないんだが、俺は別に強い人間じゃない。人並みに戦うのは痛いし怖いし……できることならもう二度と戦いたくないってのが臆病な俺の本音だ。でも、

（滅はまだ生きている……滅亡迅雷・netだって……）

……どんなに小心者でも仮にも「仮面ライダー」だからな。

……俺にも守りたいものがある。

（天津さん……あなたの目的は、何だ？）

それに、天津さんの事で気になることもある。既にニュースにもなってるが『ZAI Aエンタープライズジャパン 飛電インテリジェンスにTOB宣言』に『ヒューマギアの自治都市構想 住民投票』直接あの人に目的を聞かなくちゃならない。

正直な話、この件にはあまり関わりたくないが…天津さんに世話になつて身としては聞かない訳にもいかないわな。

(飛電さん…あんたの夢を聞いた一人としてもな)

——天津さんが飛電インテリジエンスを買収する目的はなんだ? 単純な会社の利益の為? それとも何か別の…?

俺は病室に誰もいない事を確認してから——アタツシユケースを開いた。

その後、お見舞いに来た美月を前にして俺はぼつりと呟いた。

「美月——悪い」

「! ……待つてよ兄<sup>にい</sup>。それ何の謝罪?」

「はっ、さあなー。それよりさっさと診察室行くぞ」

「ちよつと待つて! 説明してよ兄<sup>にい</sup>っ!」

父さんや母さん。美月やドクターに心配かけるのは心苦しいというか、やつぱりすげえ嫌だけど……——やつてやるよ。

俺は俺の守りたいみんなの「未来」を守る為に戦う。



彼は悩み始めて僅か数時間。

「バルデル」として再び戦うことを決意する。

その決意はどこまでも、誰よりも強いものだった。

「うん……まあ問題はないね」

「ほっ……っていうか、退院前の昨日も診察は受けましたし今日する必要ってあるんですか？」

「そりゃあ普通の患者なら必要ないさ。でも、君は他の患者と比べても……十二年も意識不明だったなんていう超レアケースだ。もしものことがあるとも限らないからね」

「……ドクターって用心深いですよね」

椅子に座って診察の結果が記載されたカルテに目を向けながら、ドクターはうんうんと頷く。それに俺は安心してほっと息を吐き、続いて純粋な疑問を零す。そして、ドクターの言葉を聞いて俺は率直に思ったことを言った。それを聞いたドクターはふつと微笑し、

「当然、医者なら誰しも用心深くあるべきだ。患者の話なら尚更ね……それよりもどうしたんだい？ 美月くんから君すっごい睨まれてるけども……」

「ー医者についての自論の一つを口にし、続けて俺の背中に先程からビシビシと強い視線を向けながら立つ美月の方を見た。

「い、いや別に、何でもなー」

「ー何でもなくない!」

「…とのことだけど、私が君達兄妹にとやかく言うことは特にないな。まあ喧嘩したなら早く仲直りしなよー」

「……うす」

別に喧嘩…ってわけじゃない。

あーあ、こんなことならうっかり「悪い」何て言わなきゃよかった……! (後悔)

「それじゃあ、これで診察は終わりだ。

頼むから、もう二度とうちの病院に入院するような事態には陥らないでくれたまえよ?」

「ははは………努力しまーす」

「…はあ、そこで『はい』と答えてくれれば、私も気が楽なんだがねえ…さあ帰った帰った!」

いつものようにドクターはしっしっしと手を動かす。俺は一度頭を下げて「ありがとうございました」と感謝を告げてから診察室を出た。できることなら俺も病院にお世話に

なるような事態にはなりたくないなあ………こればかりは努力するしかねえな。主に立ち回り方とかをな。

「バカ兄にい！ 説明してよっ！」

「ここ病院だぞ？ 子供じゃねえんだから騒ぐな騒ぐな」

「ツ……じゃあちゃんと説明してよ。兄にい……また何か危ないことしようとしてるの……？」

「………危ないことって何の話だ？」

「あんな血だらけで、ボロボロで病院に運ばれて………十二年以上も意識不明だったんだよ？ そんなの普通じゃないよ。兄にいが何か………危ないことしてるって考えるのが普通でしょ？」

ああそりやそうだな。

つうか美月、やつはお前ちゃんと大人になったんだな。十二年はあんなにちんまいだったのにさ。

「危ないこと………記憶にねーなあ」

「………どれだけ聞かれても答える気はない、そういうこと？」

「………さあな」

俺は家族や友人の誰にも、この件を明かすつもりは毛頭ない。下手に明かして巻き込んじゃったら…俺には責任がとれないからな。

(マジで小心者だなあ俺は……本当に今更だけど)

気まずい空気が流れる中、俺たちは一旦三階にある病室に戻ろうとし…俺は足を止めた。

「…俺は…俺は…俺は…」

「……？」

(何だ、あの人…?)

…俯きながら何かをぶつぶつと呟いている青年がエントランスに突っ立って居るのを見つけて、俺は心底不思議に思う。如何にも怪しい…不審者か? どうやらそう思ったのは俺だけじゃなかったようで病院を出て行く際にその青年の横を通り過ぎていく人は皆「なにあれ?」って感じの顔してひそひそ話をしている。それに受付にいるスタッフも怪訝そうに青年に目を向けていた。

「俺は……」

黒のスーツを着ているが服自体はかなりくたびれている…しかも、見た目は随分若いもんだから尚更不気味つつうか…奇妙さが際立っている。

「俺はア……!」

「!」

青年は突然声を苛立たしげに上げると、顔を上げる。その目はぎらぎらとしていて俺には男が何らかの「危険性」を孕んでいるように感じられてならなかった。だから、咄嗟に俺は後ろにいる美月の前に腕を出して後ろに下がらせる。

「……俺は強いッ……!」

(あれは……ドライバー?!)

懐からドライバーらしきものを取り出した青年はそれを腰に当て装着し、続けて俺がよく見知った形状の物を取り出す。それは、

『ハード!』

「!」 プログライズキー……!?!」

……グレー色のプログライズキーだった。

待て待て待て! この流れは嫌な予感しかしねえぞツ!?

ひつどい事に俺の「嫌な予感」はよく当たる。

今までの経験でそれは嫌というほど実感してるからな。

周りの人はまだこの後の展開が予想できてないらしい。

特に変わらず、奇妙なものを見る目でドライバーを装着しプログライズキーを取り出した青年に視線を向けている……誰も危機感を抱いた様子はない。そりやそうだ。側から見れば、あれを玩具か何かだと誰もが思うだろう。

「全員！ 今すぐここから逃げろッ！」

気付けば俺は咄嗟にそう叫ぶ。その声はエントランスにいた人達全員の耳に確かに届いたがーもう遅かった。青年はプログライズキーを腰に装着したドライバーに装填し、

「実装ッ……！」

「レイドドライズ！」

「実装」と言い、左手で俺から見てドライバーの右横にあるボタンを力強く押し込んだ。次の瞬間、

『インベイディングホースシュークラブ!』

【Heavily produced battle armor equipped with extra battle specifications.】

ー青年の体を複数のグレー色のケープブル?の様なもの包み、青年の身に分厚い装甲が纏われる。更にその手には機関銃があつた。

「人間が、マジアに……!?!」

その姿はどこか機械的で、どこかマジアに似ていた。俺は変身……いや「実装」した青年を見て思わず驚愕する。

「俺の力を……証明してやる!!」

インベイディングホースシュークラブレイダー……通称バトルレイダーになった青年はそう声を荒げると機関銃を乱射し始めた。

——直後エントランスには悲鳴が響き、誰も彼もが逃げ惑い、一瞬の内に病院内は恐怖に包まれた。

「何? レイダーが現れただど!」

『はい。先程、国立医電病院から緊急通報が入りました』

部下からの連絡内容に唯阿は声を上げる。

ここ最近異様に増加しているレイダーの出現……しかも今回の出現場所は「病院」。多くの人間が集まる場所……そこにレイダーが現れればどうなるか。まず、被害が甚大なものになるのは避けられないだろう……。

(……まさか、昨日研究室から消えた量産予定のプログライズキーとレイドライザー……)

「私も今すぐ現場に急行する! お前達は先に向かつて人々の救助を。それとレイダーとの戦闘は極力避ける! いいな?」

『了解!』

連絡を切った唯阿はショットライザーとラッシングチータープログラムライズキーを持ち出し、すぐに研究室から出る。

(考えられる中でも最悪な場所に現れてくれたな……!)

部下から聞いたレイダーの出現場所である病院。そこは数ヶ月ほど前の事になるが……偶然にも唯阿がああ青年?と出会ったあの病院だった。

「これは……まずい事になりましたねえ」

(病院に現れたレイダーの正体は……恐らくA・I・M・Sにいたあの新人隊員でしょう)

社長室でレイダー出現の報告を唯阿よりも早くに受けていた垓は独り呟く。垓は既



にレイダーの正体……犯人の目星がついていた。

（唯阿に『もつと上の役職に就かせろ』なんて大口を叩いていたが……こんな事態を起こす様な人間なら、正当な評価だったのでしよう）

唯阿からの報告にあつた話を思い出す。あの新人隊員の男は割とどこにでもいる「自信過剰」な人間だつた。だが、かなり重度の……それこそ「自信過剰さ」だけならば「天津垓」にもを引けを取らないレベルである。自尊心が強く、自分の役職に納得がいかず、不満を徐々に募らせていった結果、彼は遂に暴挙に出た。

（量産予定のプログライズキーに、レイドライザーを盗んだのには少々驚かされましたが……）

「これは、私が出る幕ではないでしょう」

今日が退院日の「彼」や病院に居る人々からすればこの事態は災難かつ大迷惑だろう。そして、病院を襲つた「レイダー」からすれば楽しくて仕方がないだろう。誰も自分には敵わない、抗えない。自分以上の力を持っていない……そう思っているに違いないから。だが、

「……それは大きな間違いだ」

——垓は椅子から立ち上がり、ふつといつもの余裕綽々な笑みを浮かべる。

「拝見させてもらいますよ、太陽君……」

ー仮面ライダーバルデルの復活を……!」

(ああーもう……どうしたもんかねえ……)

不幸だ。災難だ。

なんでこんなことが俺が居るときに限って起こるんだ? 起こるならせめて俺が居ない時に起これやぶざけんな! という中々にクズな思いを胸に抱きつつ、俺は壁から少し顔を出し……化け物、人間マギアの様子を伺う。(正式名称はわからないので以下「人間マギア」と呼ばせてもらう)

あの青年……いやクソガキだな。

クソガキは今病院内、一階を闊歩しながら度々あの機関銃を乱射している。そのせいで壁はズタボロだし、けたたましい銃声が鳴り響く度に誰かの悲鳴が聞こえる……はつきり言って地獄だ。

(あのクソガキ……俺は強いだとかなんとか言ってるだけじゃあるけど、病院を襲った動機は何なんだ? ……見た感じ、好き勝手に暴れてるだけにしか見えんが)

人間マギアになったクソガキの目的はさっぱりわからん。なんか闊歩しながら「ハハハハ!」と高笑いしたり、「俺は最強だつ!」とか言ったり……完全に頭がイカれて

……いやとても正気には見えない。つうか今はマジで奇跡的にーあいつのAIMがダメダメなお陰か？ー死亡者は出てないが……怪我人は既に出てる。

(正直に言やあ、こつから逃げ出そうと思えば逃げ出せる。あの人間マガアは目的なく好き勝手歩いてるし、あのまま行けば二階に向かうだろうからな)

目的なくふらふら歩いて暴れ回る人間マガアを見れば、この病院からの脱出はそう難しくはないだろう。その証左に既に何人かはもうここから逃げ出せてるしな。

今ここに残ってるのは逃げようにも自力じゃ逃げ出せないような患者さんや、上の階にいるまだこの状況に気付いていない人、あとは「患者を残して逃げる訳にはいかないー」という医者者の鑑みたいな人。それと、

「ー俺みたいに完全にビビっちゃまってる小心者、と」

「何言ってるのさバカ兄にい」

「……………えーつと」

……………なんでえ？(ガチ困惑)

おかしいな。見間違え？ 幻聴？ 隣から妹の声が出たんだが……いや、マジでなん

でいんのこいつ!?(二度見)

「美月お前なんでまだいんだよ？ 早く逃げた方がいいぞ」

「逃げてない人がそれ言うー？ 私が 兄にいを置いて逃げる訳ないじゃん」

「……イケメン過ぎる……」

「なんか言つたあ?」

「いえ何も……!」

美月が突然かつ平然とした様子で放つた言葉に俺は思わず両手で顔を覆う。

うちの妹いい子で可愛い上にイケメンって……なんだこの欲張りセツトな完璧超人は?! そのスペックほんのちよつとでいいから俺に分けてくれや……! ……そういや前にほろつとこの本音吐いた時、美月のヤツ「いやバカ兄にい欲張り過ぎでしょ……」とか言われたつけ……あれどういう意味だつたんだろうな?

### 閑話休題。

「……つうか、お前……その後ろに居るガキンチョ共は?」

美月が逃げてなかつたことに衝撃を受けて、すぐに気付かなかつたが美月の後ろには何人かの少年少女ガキンチョがいた。それも服装を見るに……どうやらここに入院している患者らしく、皆小さな手で美月の手を握っている。

様子はというと必死に耐えてるが今にも泣きそうな子や、俯いてしやがみ込んで震えてる子、泣き声は上げてる子……その他諸々。とりあえず全員テンションは死ぬほど暗い

……そりや自分が入院してた病院にいきなりあんな目的は不明だが、テロリスト染みた「人間マジア」が出てきたら誰だつてそうなる。子供なら尚更だ。

「あつちの病室で怖くて逃げられなかつた子たちだよ。ここ通る時に連れてきたの！」

「そ、そうなのか……」

いや行動力ウ?!?!

この状況でなんでそんなアクションができんのこの子？ 肝が据わり過ぎつうか……

最早「いい子」超えて「天使」だろこれ。あとガキンチョ共の様子見るに……この短時間で既に懐いてやがる……！ 美月さてはお前、保育士とか教師の才能あるな？

（驚きはしたが……これは好都合だな）

「……ンなら、そのガキンチョ共の為に尚のこと早く逃げろ。それともそいつら見捨ててまでここに残るか？」

「……狡い聞き方するね？ バカ兄にい……性格悪いよ」

俺の台詞に美月を頼りにしている子供たちは怖くなり、びくりと肩を震わせる。そして「見捨てないで……！」と言うように皆が美月を見上げる。美月はその反応を受けてから、俺をじと……とした目で見た。

「ちよつとぐらい性格悪い方が生きやすいからなあ……。褒め言葉として受け取つとくわ」

ふふふ、我ながら完璧だ……。

ガキンチヨ共に縫られて、いい子どもか天使の美月が「見捨てる」。「逃げない」なんて選択肢を選べる筈がない。

「でも、私いやだよ……ねえ兄にい一緒に逃げよ? 前にも兄にい言ってたじゃん。自分の命が一番大事だ、誰かを助ける為に命を懸けたりなんてしたくない、基本するつもりもないって……」

悪魔の……というよりは天使の囁きだ。美月のその甘言に「ああ逃げよう!」なんて即答できればどれだけ楽だったろうな。

「……はっ、随分と懐かしい台詞だな」

俺は思わずくすりと笑った。いや、俺からすれば「十二年以上」経ったなんて実感は薄いから懐かしくもないんだが……美月からするとかなり懐かしい台詞だろう。ていうかよく覚えてたな?

『美月も知ってたんだろ? 俺は小心者だ。だから怖かったらすぐ逃げ出す。自分の命が一番大事だからな。誰かを助ける為に命を懸けたりなんてしたくねえ。基本するつもりもねえ』

「あー……そうだな。その通りだ。誰かの為に命を懸けるなんてしたくない、基本するつもりもない……その思いは今でも然程変わんねえ」

「! だったら——」

今考えると最悪、あの台詞が美月への最後の言葉になってたかもしれないわけだ。

『ちゃんと帰ってくるよね? そりやお前、別に死ぬわけじゃないんだから……帰ってくるに決まってるだろ?』

(……………)

あの時の言葉は結果だけ見れば嘘にはならなかった。

実際死にはしなかったし……でも、十二年以上も意識不明でうんともすんとも言わない状態って……美月からすればかなりキツいもんがあつただろう。

それに実際あの時俺は「死ぬだろうな俺」と思ってた。だからあの時、俺は美月に嘘をついたんだ。

「——美月」

きっと、美月がここまで頑なに俺を止めるのは「家族だから」「いい子だから」とかの理由の他にその時の事もあるからだろう。——俺は美月の目を真つ直ぐ見て口を開いた。

「大丈夫だ。本気で死ぬ気なんてねえ」

「……………」

「……信じらんないだろうけど、あの化け物を何とかする方法があんだよ」

「……バカ兄、言ってることとやろうとしていること……矛盾してるよ」

美月のツツコミは本当にその通りだった。「誰かの為に命を懸けるなんてしたくない、基本するつもりもない」とか言ってたくせして……俺は今から中々に無茶して「人間マジア」と戦おうとしている「あの化け物を何とかしよう」としてて。

「まあ……ここにはドクターも居るし、入院生活中に結構話した人も居る。流石に見捨てるのはなあ……それに、あのクソガキが暴れてんの見て、俺も結構頭に来てるしな」

この病院に居る人が全員赤の他人って訳じゃない。何よりあのクソガキは一発殴らねえと気が済まないんだわ。

「………はあ、ほんとにバカだよね」

「……………」

「………もしまた、無事に帰って来なかったら………もう一生兄なんて呼んであげないから」

「……ああ、了解」

(ありがとうな、美月)

美月はため息をつくのと、一度後ろにいる子供達に目を向けてから本当に渋々……そう言った。その言葉に俺はすぐに応える。

あの日のこともあるっていうのに……俺の言葉をまた信じてくれた美月に俺は心の中で感謝を述べつつすぐ近くに設置してあったソレを両手で取った



「兄<sup>にい</sup>、何する気？」

ソレを取った俺を見て美月は唾然としたように一瞬目を見開き聞いてくる。そんなの決まってるんだろ？

——勿論、俺は抵抗するぞ…拳で！じゃなくて…

（あいつを何とか引きつけて、アタツシユケースの置いてある病室まで行く……半ば無理難題な気がするが…不思議と何かいける気もする）

——俺は抵抗するぞ…この消火器でなあ！

今冷静になって思い出してみると……この時の俺の頭はマジでどうかしてたと思うんだ。

---

国立医電病院の一階。

「やあ…やだあ……！ 来ないでっ…!!」

レイダーに追い詰められた少女は泣きながら悲鳴を漏らす。

「ハハハハ! 俺が怖いか? そりやそうだよなあ…俺は…強いからなア!」

そんな少女を見たレイダーは楽しそうに高笑いし、銃を持たない方の手を振り上げ少女をすぐに殴り殺そうとした。だが、

「やめろっ! 患者には手を出すな!」

「はあ? 何だお前? 邪魔すんなよオ!」

「ぐはっ……!?!」

その攻撃を止めるために…白衣を着た男…ドクターが横から少女とレイダーの間に割り込み、レイダーの腕を掴む。が、レイダーはドクターを軽々と蹴り飛ばす。壁に背中を強く打ち、倒れるドクターは口から血を漏らす。それでも立ち上がり化け物に掴みかかる。

「何なんだお前? 俺に敵う訳ないクセに何頑張ってるんだ? そんなにその子を死なせたくないのか?」

「ツ——患者を守るのが医者務めだ!」

「…あーそう。ならー」

「ごはッ……!」

レイダーは掴みかかったドクターの胸にパンチを打ち込むと、後ろによるめきながら倒れたドクターに短機関銃を向けた。

「――その務めを果たせずにごとで死ぬ」

そして、トリガーを引き、

「最ツ高に頭に来たぜ――クソガキ！」

「!?」

――トドメを刺そうとした瞬間にまたも邪魔が入る。

「硬ッ…?! 痛<sup>い</sup>たた……」

後ろからの声に人間マガアは振り返ると同時に何かで頭を強打された。無論、レイダーになっている青年に然程ダメージは入らないが視界は確かに揺れた。

「な、何だお前はっ!？」

「太、陽……君……?？」

「ドクター、ここは俺に任せてください。」

「――ハッ！ お前の相手は俺だよバカ！」

素早く相手を視認したレイダーは驚愕し声を上げる。そこにいたのは消火器を両手で持つ青年?で……その顔や様子は誰の目から見てもキレていた。当然だ。目の前で自分の主治医<sup>ドクター</sup>が……命の恩人が殺されそうになったのだから。

「そんなもので俺の相手……? できるわけないだろッ！」

「! 危なッ……!」

ただの人間に消火器で殴られたという事実には怒りを覚えたレイダーは全力で殴り掛かる。しかし、青年?はそれをギリギリで躲す。

「はっ……?」

普通の人間なら避けられるはずがないのに……レイダーはその事実により更に困惑し激怒する。

「どうした? 遊んでやるからかかってこいよ」

「……ふぎ、けるなあああ!!」

驚くほどに安い挑発だったが……どんな挑発だろうと、今のレイダーには効果抜群に違いなかった。レイダーは完全に「青年?」をターゲットする。

「ー死ねエー!!」

「うおつと……!?!」

ターゲットにされた青年は消火器を抱えたまま走り出し、レイダーは追いかけるが短機関銃を連射。その一発は青年の抱える消火器に直撃した。

「つつ! 逃すかア!」

そして青年?の手から落ちた消火器から大量の煙が凄まじい勢いで辺りに漏れ出る。結果視界を煙に覆われたレイダーは混乱し、

(そうだ! そのまま俺だけを狙えっ!)

——太陽は自分の想定通りの展開に内心歓喜しつつ、非常階段を駆け上がっていった。偶然かそれとも必然か……レイダーの放つ短機関銃弾丸は壁を壊し、太陽の身を何発か擦りはするものの、一発たりとも直撃しなかった。

一人の死人も出さずにレイダーを止めるため、レイダーの攻撃を全て引きつけながら三階の病室を目指す太陽とそれを追うレイダーの命懸けの鬼ごっこが始まり……

「悪いが——お前が好き勝手にできんのはここまでだ」

——彼の物語が再び動き出す。

# 荒いアイツは仮面ライダー!

医電総合病院三階。

「くたばれエー!」

「! がはッ!」

後ろから人間マギアが短機関銃を乱暴に振るう。

人間マギアの攻撃を間一髪躲すことに成功した俺だが、次に来た蹴りは避け切れず思いきり蹴り飛ばされる。当然その威力に俺は吐血した。

(痛<sup>いた</sup>てえなオイ……!)

痛ッ!! 死ぬるぞこれ!?

何となく分かっちゃいたがこの人間マギア。マギアと同じかそれ以上に強<sup>つ</sup>ええ……ホントなんでこんな化け物相手に生身で逃走中(捕まったら死)なんてしなきゃなんねえんだちくしょー! 誰か代わってくれえ!(弱音)

「あと、少しでッ……!」

「ハッ! どこに逃げるつもりだア!」

左手で蹴られた腹を押さえながら、俺は何とか立ち上がり蹴り飛ばされたことで運良

く距離が縮まった病室へと入る。その姿は人間マギアから見れば逃げ込んでいるように映っただろうな。

（――絶対にぶっ倒す……！）

――でもそうじゃない。

――これはお前から逃げる為の行動じゃない。

――これはお前をぶっ倒す為の行動だ。

病室に飛び込むように入った俺はベッドの横にそつと置かれたアタツシユケースを手に取り、ロツクをカチリと外し中を開く。人間マギアが近付いてくるのが足音で分かるが「落ち着いて冷静に……慌てんな」と自分の心に言い聞かせて中身のソレらを取り出し、

「――アハハ！ どうやらここまでのようだなア？ さあ鬼ごっこは終わりだッ……！」

「……………あーそうだな」

病室の出入口に立つ人間マギアに振り返る。

鬼ごっこは終わり、か……あーそれには同感だ。

「さあてと、久々にやってやるとするか……十二年以上経った今……俺がどれだけ戦えるかはわかんねえが、

「——鬼ごっこは終わりにするか」

「さつきもこの人間マギアに言った通りだ。

俺は今、最ツ高に頭に来てンだよ……!

「遂に観念したか? まあそうだろうなあ……俺は強い——」

俺の言葉を「諦め」だと思いい人間マギアは口を開き、

「——はっ、何勘違いしてんだクソガキ」

「……アア?」

それを遮る形で俺は人間マギアを笑う。

本当に俺が諦めたと思つてんだなお前? つうかどんだけ自分の実力に自信あんだ

よ自信過剰か?

「お前の言う通り鬼ごっこは終わりだなあ……それと、お前がやりたい放題できる時間

もな」

「?……貴様、何を言っている……?」

首を傾げ困惑する人間マギアに、俺は左手にバックルが取り付けられたベルトを掲げるように持つて告げる。



「悪いが今度はこつちの番だ」

「A班はレイダーを引きつけ、B班は病院内に居る人々の避難を最優先に行動してくれ……各員行くぞっ！」

「了解！」

通報からちようど十分。医電総合病院前に二台の車両が止まり、現場に到着したA・I・M・Sの隊員達が次々に下りる。そして、対人工知能の為の武装に身を包んだ彼等は警戒しながら病院に突入していく。

——その時だった。

「！ 銃声!？」

「上の階からか……！」

突入してすぐに彼等は激しい銃声を耳にした。

「！ 予定通りA班は上の階にいるであろうレイダーの元に。B班はこの場に残った人々の避難、怪我人の救助にあたれ！」

現場の状況を冷静に確認した隊長の指示に、全員が無駄のない素早い動きで各自行動を開始し始める。

——奇跡的に死亡者は0人だった。

遠心力を利用し勢いよくベルトを腰に装着し、右手に持った赤いラインの入り、銃口近くがメタリックブルーの黒い実銃……『ショットライザー』を素早くバツクルに取り付ける。そうすれば、

【ショットライザー！】

「!? そ、それは……!」

——ショットライザーが起動し聞き慣れた起動音が鳴る。

「な、なんでソレを……!」

「これが何か知ってんのか？」

………だったら『なんで』か何てわかるだろ」

仮にもA・I・M・Sに所属していた青年はその実銃に見覚えがあった…

(隊長の不破と、技術顧問の刃が持っていたものと同じ?)

ショットライザーを見て驚愕する人間マギアを見据えながら、俺は黄緑色のあのプロ  
グライズキーを出してボタンを押し、

『ストロング！』

「俺に、力を貸してくれ！」

【オーソライズ！】

——ショットライザーに装填して、そのまま右手でプログライズキーを素早く展開す  
る。十二年も経つちやいるが、何十回も使つてコイツに命を救われてきたんだ……俺は  
ショットライザーにプログライズキーの使い方と全くと言っていいほど忘れていな  
かった。

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

——よく聞いていた待機音が流れ始める。

久々に聞いたな【仮面ライダー】って言葉……。

続けて右手でショットライザーのグリップを握り、バックルから引き抜き高く上げ  
る。その際に手に感じたショットライザーの重みがどこか懐かしくて……自然と俺の口  
角は上がっていた。高く上げたショットライザーの銃口を徐に目の前の人間マギアに  
向け、俺は一呼吸置き、

「——変身ッ……！」

「シヨットライズー!」

「!? ぐっ……!」

——トリガーを引く。

次の瞬間、放たれた一発の弾丸が人間マギアの胸に直撃し火花を上げる。人間マギアは予期していなかった出来事に防御をとれずに後退りし、病室から外の廊下へと出た。

「おらあッ!!」

『アメイジングヘラクレス!』

「With mighty horn like pincers that fly  
p the opponent helps.」

俺は右手に持ったシヨットライザーをバックルに再び取り付け、展開しながら俺の方に向かって方向転換し飛んできた弾丸に——全力の右でのアツパーを打ち込む。そして、右手から順に黄緑と白のアーマーが俺の体に装着されていき——変身が完了する。

右半身には黄緑色のアーマーを纏い。

左半身には白色のアーマーを纏い。

——赤く光る複眼。

「!? お、お前は……一体何だッ!」

人間マギアは己の目の前で変身した俺に驚愕し声を上げ問う。その問いかけに俺は

名乗る。今からお前はボコる名前だ！よく覚えとけ！

「俺はバルデル、仮面ライダーバルデルだ！」

それが十二年以上の時を経て、仮面ライダーバルデルが復活した瞬間だった。

「——素晴らしい……私はこの時を待ち望んでいたっ！」

序章バルデルの主役の復活を画面越しに目にした彼は、思わず座っていた席からガタリと勢いよく立ち上がり歓喜に震える。そして同時に、

「もう既に結果は出たも同然。彼の変身を阻止できなかつた時点で——1000%君の負けですよ、新人隊員くん」

——レイダーに実装した青年の負けを確信した。

彼は再び席に座り画面に集中する。十二年以上振りである友人の戦い振りをその目に焼き付ける為に。

「——らあッ！」

「！ うぐッ……！」

変身して早々、駆け出したバルデルは病室の外へ出て廊下に立つ人間マガリアに横蹴りを噛ます。その蹴りを右腕で防ぐ人間マガリアだが…威力を殺し切れず手すりのついた壁に背中を強く打ち、

「おりゃあア！」

「ぐはあ……!?!」

——俺は続けてその両肩をガシリと捕み、そのまま横にぶん投げる。

「さつきまでの威勢はどうした？」

「このッ……——貴様アアア！」

そう挑発的に言い更に左手を倒れる人間マガリアに向け、指を「かかってこいよ」と言う風にクイクイと動かせば激怒した人間マガリアが立ち上がり走り出し殴りかかってくる。

「ほつ、そらッ！」

「!? ぐわッ……！」

だが、それを最小限の動きで回避した俺は感覚で振り返らずにそのまま後ろ蹴りを嘯ます。後ろ蹴りは人間マギアの背中に直撃。人間マギアはその背後からのカウンターにまたも床に倒される。

「こんなもんか？」

相手が怒って単調な攻撃してくれたおかげで超綺麗にカウンター決まった（感動）別に狙ってやった訳じゃないが……上手くいったしヨシとしようしようしよう！

「なら……！ これはどうだア！」

「調子に乗れる時に乗る」精神で人間マギアを煽る俺。相手はまんまとキレてくれる……まあ俺も結構キレてんだけどなあ？ 過度に煽ってんのは多分それも原因だろう。人間マギアはキレた挙句に手に持っていた短機関銃を構え、

「ハアアアッ!!」

——躊躇なくトリガーを引く。

目の前で「人間マギア」になった時からわかっちゃいたがこいつ……正気じゃないな？ それこそマギア化したヒューマギアみたいに暴走してやがる……

「——ッ！」

放たれる弾幕を前に俺は素早く両腕を前に出して防御をとる。次の瞬間、数え切れな  
いほどの弾丸の雨が俺を襲った。

「アハハハ!! どうだ、これが俺の力だッ!」

数十発以上を連射した人間マギアは短機関銃を下ろすと、早くも自身の勝ちを確信し  
たのか大きく叫ぶ。そんな中、

「っ……………はあ、これで終わりか?」

「!? な、何っ!?」

——俺は攻撃が止まった後、ゆっくりと防御の構えを解き調子に乗っていた人間マギ  
アに水を差す様に告げる。

「あ、あれだけの銃弾を受けて…!? なんて——」

「——平気かってか? わかんねえなら教えてやるよ」

動揺する人間マギアに一步ずつ接近する俺。大量の弾丸を受け、両腕からは僅かにだ  
が黒い煙が上がり火花も散るが……

「——お前みたいになクソガキの攻撃なんざ、俺の体にはちつとも…響かねえ——んだよッ  
!」

この程度で根を上げる訳あるかよバーク。



「うっ……！ な、ぐわっ！」

人間マギアの真前に着いた俺は右の膝蹴りをその腹にぶち込み、続けて人間マギアが持つ唯一の武器である短機関銃を力づくで奪い、その顔を殴り飛ばす。

(はぁ……ったく、痛<sup>い</sup>ってえなあ！)

「おらッ！」

あの銃の攻撃は正直ヤバかった。アメイジングヘラクレスの堅固なアーマーにこんなだけダメージを与えんだから……今こうして耐え切って「平気」そうに見えてんのはただの気合いとタフネスだ。

内心で受けたダメージにキレつつ、その怒りをぶつけるように人間マギアから奪い取った短機関銃をへし折る。

「お、俺の武器が……!?!」

「武器の心配なんて随分と余裕だ、なあっ！」

「!?! かはッ……!?!」

そして、ガラクタと化した短機関銃を床に投げ捨てれば人間マギアは「信じられない……」とでも言いたげな様子で啞然とし——俺は容赦なく倒れるそいつをサツカーボールを蹴り上げるかの如く蹴った。まあ容赦なく……というよりもブランクのせいで力

加減が下手糞になってるだけなんだけどな。

「くっ、くそッ……!! こんな馬鹿なことがあつてたまるか! これは何かの間違いだッ! 俺は誰よりも強い筈だ!」

「悪いが馬鹿なことでもなけりや間違いでもない。これはただの現実だ。お前は強くなんてない」

「!・ふ、ふぎぎ…… ふぎけるなああー!!」

俺の台詞を聞いた人間マギアは今まで以上に怒り激昂すると、勢いよく立ち上がり右拳でまた殴り掛かってくる。

「ふっ」

「くっ!?!」

「どらア! 落ちろ!」

「ぐわあッ……!?!」

その拳が届くよりも早くに俺は右のジャブを人間マギアの頭に打ち込み、怯ませた隙にその胸に前蹴りを放った。結果廊下の先にあつた眺めのいい大きな窓を派手に打ち破つて人間マギアは下に落ちていく。

ここ三階だし生身じゃまず死ぬだろうけど、あいつ仮にも変身……じゃなくて「実装」してるからな。三階から落ちた程度では倒れてくれないだろ……上手く着地できなかつ

たならそこそこのダメージにはなるか？

(あー、まだ動いてやがるよ……)

「絶対に逃がさねえぞ」

……何っ？ さつきからやり方がエグい？ いやこれが俺の基本スタイルだから。これが普通だから。

うん(自己完結)俺は割れた窓の付近から下を見てまだ動いている……逃げようとしている人間マガリアを視認し、すぐに人間マガリアの後を追いついで三階から下の駐車場まで飛び降りる。

「おっとー！」

「がア……！ 俺は……俺は……！」

「お前、硬そうなお見た目からも分かっちゃいたが中々しぶといな……」

「俺は最強なんだ……俺は最強なんだア！」

(もう俺の声も聞こえちゃいない、か……今助けてやるよ。クソガキ)

完全に正気を失ってしまった人間マガリアは前に俺は思う。本音を言えばドクターを殺そうとした相手であるこのクソガキは、半殺しぐらいにはしたいが……流石にそれはやり過ぎな気がしないでもない。何よりきつと今のこいつはマガリア化したヒューマガリアと同じく、理由は不明だが暴走状態のようなものに陥っているに違いないだろうから

な。

「最強? ハッ! 俺みたいな一般人にボコられてる時点で、お前が最強な訳あるかよ  
バーカ!」

「証明するツ……! 全て、殺すつ!」

俺が心からの台詞を放つてすぐ、人間マギアは声を荒げると左手をベルト横に伸ばし、

(!? 待てよそれは——)

「——やらせるかよ! おらッ!」

「! うぐツ……!?!」

——人間マギアのその動きに既視感を覚えた俺は咄嗟にバツクルからシヨットライザーを抜き、人間マギアの左手に向かって撃つ。

今の動きはあれだ……マギアが必殺技を発動する時にベルト横にあるボタンを押す時のと全く一緒だった。多分、というか間違いない必殺技使う気だったなこいつ! 阻止できてよかったわマジで。

「おらおらおらア!」

「くつ、ぐううツ……!」

必殺技を阻止した俺は、撃たれた左手を右手で押さえる人間マギアの胴体に畳み掛け

るべくショットライザーを連射する。火花が人間マギアの体から何度も散りー最後には地面に片膝をつく。

「悪いが——そろそろ終わりにさせてもらおうわ」

俺は人間マギアに生まれたートドメを刺すのにはー絶好の隙を前にしてそう口にし……

「ー私も今現場に到着した、そっちの状況は？」

『はい、こちらは予定通りA班とB班の二班に分かれ行動中です』

「そうか。なら、ライダーは発見できー」

部隊から数分遅れで現場に到着した唯阿はA・I・M・S.の車両から下り、部隊のメンバーに連絡をとって状況確認をする。そして、スマホを耳に当てながら病院へと入ろうとした唯阿は、

「がはあああッ……!!」

（！ーライダー!?!）

突如横から聞こえた何かの大きな落下音を聞き、思わずそちらに目を向けて驚愕する。そこには先ほどまでは間違いなく居なかった筈の「黒いライダー」が地面に倒れていたのだ。しかも、その装甲には既に複数の傷が見え…明らかに損傷していることが窺える。

ー更に次の瞬間、唯阿は更に驚くものを見た。

「おっとー！」

「！ あ、あれは…!?!」

(まさか……)

信じられない、と唯阿は目を見開く。

彼女が何度も映像の中で見た……バルカンとバルキリーと同じ白のアーマーにアメイジングヘラクレスプログラムライズキーの黄緑色のアーマーを装着した仮面ライダー。

(仮面ライダー、バルデル……!?!)

ライダーを追って現れたその姿は紛れもなく、戦闘映像に映っていた仮面ライダーバルデルのものだった。

『ストロング!』

右手に持ったショットライザーに装填したプログライズキーのボタンを左手で押し、素早くショットライザーをバックルに取り付ける。ショットライザーから鳴り始める待機音にまた懐かしさを覚えつつ……

「——お前を止められるのはただ一人、俺だッ!」

【アメイジング ブラスト フィーバー!】

——俺はバックルに取り付けたショットライザーのトリガーを引き、地面に片膝をついて人間マギアへとダツシユする。

「うッ……ぐ、がア……!」

立ち上がるうとする人間マギアだがもう遅い。

人間マギアへと駆ける間に俺の右足には黄緑色のエネルギーが収束していき、

「——おつらあああああ——!!」

スト ロ ング

ブラス ト フィーバー

ー俺は人間マギアに向かいジャンプし、そのまま右足での跳び蹴りをぶつける。

「がはっ!?! くア………つまだ、だ……ーうッ?!

ぐううーがああああーッ!!」

ライダーキックをまともに食らい蹴り飛ばされた人間マギアは声を上げ、地面を勢いよく転がり……立ち上がろうと試みるも次の瞬間にその体から激しい火花が散りー人間マギアは爆発する。

——戦いはバルデルの勝利で幕を閉じた——。

「……終わったか」

「ぐはっ………」

「おっと危ねっ」

そして、人間マギアの身に纏われていた堅そうなアーマーは仮面ライダーの変身解除のように掻き消え生身の人間に戻ったクソガキ。どうやらやっと体力の限界を迎えた



らしい。装着していたドライバも外れ、プログライズキーも地面に転がる。俺は後ろにそのまま倒れそうになるクソガキにすぐ駆け寄り、頭をぶつける前に支えた。

こんな風に支えてやる義理は微塵もないが、思い切り後ろに倒れて駐車場の地面……アスファルトに頭ぶつけるとか絶対痛いからな。もし仮に俺がこのクソガキで変身解除……というより実装解除？後に頭強打したらワンチャン死ぬるから。

「……………は？ ツ！」

（ほんとに正気失ってたんだなコイツ）

クソガキは目を見開いて辺りを見渡すとそんなことを口走り、苦しげに頭を押さえた。やっぱり……最初からヤベエヤツだとは思ってたが途中から会話のキャッチボールが成立しなくなってたしなあ。

「！そうだ、俺はレイダーになって……」

「ー」

「あなたが、俺を止めてくれたんですね……？」

「……別に止めたわけじゃない。ただ頭にキタから殴って蹴った。それだけだ」

「それでも、ありがとうツ……ごいいます……！」

今日の前に居る痛みを堪えながらも感謝を告げる青年。

変身する前の暗い雰囲気をつた青年とも、人間マジアになって好き勝手暴れまくつ

ていたクソガキとも全く違う。ーまるで別人のようだった。

(あのドライバーを使った副作用…みたいなもんで訳か)

なんつう危ねえ代物だよ……。

そもそもなんでコイツはあんな危険な物を使ったんだ？ 経緯が気になった俺はすぐに聞きそうになったが止めた。今の状態で無理に喋らせんのは命に関わりそうだったから。

「感謝何ていらねえ……自分が何やったか思い出したんなら、テメエが傷付けた人達にちゃんと謝れ。それで罪を償え」

幸いこいつは誰も殺してない。

まあ怪我人は数人出たし、病院だつて短機関銃のせいでボッコボコだから実刑は免れないだろうが……流石に死刑にはならない筈だ。いや、そこところ詳しくないからはっきりとはわかんねーけども。

「ツ……はい……はいっ！」

クソガキはその言葉に頷りに頷く。それを見た俺はクソガキをそつと寝かせ身を起こし、転がったプラグライズキーを拾い上げる。グレーのプラグライズキー……インペイディングホースシュークラブ……いや長すぎだろっ!? と思いつつ地面に落ちているドライバーに目を向け、

「…………ふん」

俺はドライバーを思い切り踏み砕いた。

作った人には悪いがこんな危ないもん無い方がいいだろうから……：しよすがないね！ ……まあ火花がバチバチ散ってたし、俺が壊さなくても勝手にぶつ壊れてたろうけど。

(さて…………じゃあこれもー)

「ーバルデルっ！ あなたは、一体何なんだ？」

「…………ああ？」

そして、ドライバーに続きプログライズキーも破壊しようとした俺は左横から聞こえた声にぱつとそちらを向き、

「！ あんたは…………」

(刃さん？ それに両脇にいんのは…………)

思わぬ人物を目にして仮面の下で思わず驚く。

何で刃さんがここに？ しかも両脇には「A. I. M. S. SQUAD」の文字が書かれた戦闘服を着た奴等が居るし…………

(…………あー、なるほど…………この人達がA. I. M. S. か)

対人工知能特務機関【AIMS】。

ヒューマギアの人工知能特別法違反を取り締まる組織……らしい。これまた詳しくは知らない。理由はマギアと戦っていた十二年前も一度も接触したことはなかったし、そもそもAIMSという組織が存在していたかどうかさえ俺の記憶にはないからだ。

………というか刃さん、あんた何で「バルデル」の名前知ってるの？ 何俺もしかして有名人？ ……なんて訳ないよな。それに何でここに居んだ？

(確か病院で話してた時はどつかの技術顧問やってるとか言ってたが………まあ今、そこんところはどうでもいいか)

「……ほらよ」

刃さんに関する疑問が増えたがとりあえず今はいい。手に持っていたプログライズキーを俺はふわっと放り投げ、刃さんは驚きつつもそれをキャッチした。

「ナイスキャッチ。なら悪いが後始末は頼んだわ」

「…待てっ!」

制止の声が聞こえたがそれを無視し、俺は先程必殺技をぶつ放した時の爆発によりまだ辺りに立ち込めている爆煙に向かって歩き出す。なんか今の俺……ゼツメライズキーを回収した後撤退する滅みたいだな。

爆煙に向かつて歩いて行き、最後には姿を消す滅の真似って訳じゃないが……似たような形で俺はその場を後にした。こりゃ病院に今すぐ戻んのはちよつと無理そうだな。

「——とりあえず一件落着だな」

シヨットライザーからプログライズキーを取り出し、変身解除した俺は安堵のため息をつきそう呟いた。

「……………ん？」

(今、誰かそこにいたような……………?)

変身解除後に道を歩いていたら俺は誰かの視線を感じて振り返る。  
しかし、そこには誰もいなかった。

---

「どうした？ 迅」

『ーバルデルを見つけたよ』

「……………そうか」

俺は迅の報告を聞いて一瞬だが沈黙した。

『意外。もつと驚くかと思つてたよ』

「お前にも言つた筈だぞ、迅。バルデルが生きている可能性がある」と

「デイレイクの拠点に置いてある端末画面には『意識不明になつてから十二年以上！奇跡の生還!』』というニュースが映つており、それを閲覧しながら俺は言う。

「迅、俺が以前にバルデルに関しお前に言つたことを覚えているか？」

『……バルデルが人類滅亡の最大の障害、脅威でしょ？』

「ああそうだ。その考えは俺の中で未だに変わっていない」

その言葉に迅は僅かに驚きを覚えた。

彼がバルデルを警戒しているのは知つていたがまさかゼロワン、バルカン、バルキリー、サウザー……他にも多くのライダーが居る今でも「バルデル」をここまで強く警戒しているとは思つていなかったから。

迅にとってバルデルは映像でしか見たことのないある種、架空の存在染みた存在で、更には言えばまだバルデルと直接戦つたことのない迅はバルデルを「過去の仮面ライダー」と甘く見てさえいた。

『前にも言つた筈だよ滅。今の僕は人類滅亡なんかに興味はない。それにバルデルがどれだけ強くて僕のことを変わらない』

その言葉を最後に迅は俺との通信を切った。

通信を切り、辺りに目を向けた僕はため息をついてベルトを装着した。バックルには既にスラッシュライザーが取り付けられている。

「はあ、あんた達つて本当に学習しないよね」

周囲には僕を取り囲むようにしてA. I. M. S. の隊員達が数人立っていた。そんな人間を見て心底「馬鹿らしい」と感じながら僕はバングルに付けたチェーンに繋がれた赤いプログライズキーを取る。

『インフェルノウイング!』

【バーンライズ!】

右手に持ったプログライズキーのボタンを押し、スラッシュライザーに装填。ゆつくりとプログライズキーを展開し、

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「――変身」

【スラッシュライズ!】

オートリガーを引いた瞬間、現れた赤い鳥のライダモデルが僕の背後に回り、その翼が分離し迅の体を包み込むように動く。

『バーニングファルコン!』

【The strongest wings bearing the fire of hell.】

そして、その翼が開いた時——僕は赤い不死鳥の如き姿に変身を果たす。

「誰にも僕の邪魔はさせない。僕は僕のやり方でヒューマギアを解放する」

A. I. M. S. の隊員達との戦闘を開始した。バツクルからスラッシュユライザーを取り外し、構えた僕はそう言って向かってくる

——勝敗はすぐに決した。

どちらが勝ったかなど、語るまでもないだろう。

バルデルが表舞台に姿を現したその日に。

——物語は大きく動き出す——



## 本章の主役（ゼロワン）との出会い

飛電インテリジエンス取締役社長 飛電是之助の死去

そのニュース自体に然程驚きはしなかった。別のニュースで孫である「飛電或人」が前社長の遺言状に基づき飛電インテリジエンスの社長になった……というニュースも前に見たからな。

（飛電さん、本当にすげえ人だったんだな……）

飛電是之助の死は世界の損失……？

という一文から始まり、生前の飛電さんの活躍や経歴が書かれているネットの記事を見て俺はイスに座ったまま部屋の天井を見上げた。

十二年……やはりそれだけの時間が経てば色々なものが良くも悪くも変化してゆくらしい。新たな仮面ライダー達の登場に「マガア」とは似て非なる「レイダー」の登場、滅亡迅雷 net の新たな動き、Z A I A エンタープライズジャパンによる飛電インテリジエンスの買収……子会社化。

「……お前は今頃どうしてんだかな？」

飛電さんが亡くなり、更には「全ヒューマガアの廃棄処分」を約束した天津さんが飛

電インテリジェンスを買収した今……ワズ・ナゾートクがどうなったのか。

道具が壊れたからって大して話題にならないのと同じように、ヒューマギア一体がどうなったかなんて……超凄い情報網も持つてるわけでも、ましてやヒューマギアにさほど詳しい訳でもない俺には分かりっこない話だ。……だが、

「——飛電製作所、か」

——今の俺には知る術が一つもない……という訳でもない。手掛かりはあるにはあった。

『飛電インテリジェンス』が『Z A I A エンタープライズジャパン』により買収されてからちょうど一月。今日も『飛電或人』は仲間と共に『飛電製作所』での業務をこなしていた。

「ああ〜！ やつと終わったあー……！」

「これで本日の業務は以上となります。お疲れ様です或人社長」

「うん、イズもお疲れ！」

何とか仕事を終えた或人は、そこそこの量の書類が積まれた机に突っ伏して溜息を吐く。飛電インテリジェンスの時と比べれば随分と仕事の量は減ったし、楽になったのは

事実だが……それでも元は社長とは一切関係のないお笑い芸人だった或人にとって会社の経営というのは如何せん難しいものだった。

（飛電インテリジェンスの時の経験があるから、最初の時に比べればまだ上手くやれる自信はあるけど……うう）

「俺ももつと勉強しないとな……」

今度経営学の本でも買って読んでみようかな、と考えながら或人はデスクに置いた時計を見て、

『16:30』

（いつもより結構早くに終わったな）

「……んっ？」

ちょうどそのタイミングで、飛電製作所の電話が鳴った。或人は「仕事の依頼か！」と張り切つて電話をとる。

「はいっ！ 飛電製作所です！」

『！ あ、スウー……』

電話に出て元気よく声を上げる或人。

それを受けた電話をしてきた人物はそのテンションに驚いたのか、息を吐く音が或人の耳に電話越しでバツチり届く。

なんか変わった人だなあ……まだ会話もしていないのだが、或人はそう失礼なことを思っていた。

「あ、大声上げてすみません！」

謝罪した或人は電話の相手へ用件を伺う。

或人の謝罪に「あ、いや、謝らないでいいです。俺が勝手に驚いただけなんで」と早口で言ってから用件を口にし始める。

『ヒューマギアに関する事で電話したんじゃないやなくて……そちらに今、飛電或人さんつていらつしやいますか？』

「えーつと……俺が飛電或人ですけど」

『あつ、あんたが……？ あ、すみません「あんた」とか言つて』

「いやいや、それぐらい気にしないでもいいですつて！」

かなり小さなことだが、すっかり謝ってくるのがおかしくって思わず小さく笑い声を零しつつ或人は続く言葉を待つ。

『——飛電是之助さんのお墓参りに行きたいんですが、お墓の場所を知らなくて……その、宜しければで構わないんですけど……お墓の場所を教えてくださいだきたくて……：……それで電話させてもらいました』

「じいちゃんの……？」

思わぬ用件に或人は少々驚きつつも快く了承した。それと共に、

「あの、よかつたら道案内つてことで俺も一緒に行つていいですかね？」

「ー声からして若く「俺と同じぐらいの年齢なんじゃ？」「じゃあ若くてじいちゃんの墓参りに来る人つてどんな人なんだ？」と思つた或人は電話の相手へ僅かに興味を持つ。

『……マジですか？』

「あ、いや！ 嫌だつたら場所だけ教えてー」

『ーいやホントに助かります！ 俺、方向音痴で多分地番だとか聞いても一人じゃよくわかんなかったろうし……ぜひお願いします』

或人は自分の発言に相手が嫌がつたと思い、慌てて口を開くが相手は嫌がつていた訳ではなかったようで……というかむしろ真逆で本当に嬉しそうに電話をし始めてから初めて大きな声を出した。

「そういえば、まだお名前聞いてなかったですよ？ あの、お名前を伺つても……？」

『あ、そういや名乗つてなかったわ……俺は天本——天本太陽です』

それから日時を決めて早速後日。

或人はイズと共に『天本太陽』と名乗る彼の墓参りに道案内ということで同行するこ  
とになった。

「バカ兄<sup>にい</sup>いつも以上に間拔けな顔してどしたの?」

「『いつも』は余計だぞバカ妹よ……」

ソファにちょこんと座ってテレビを見ていた美月が、食卓近くに四つ置いてあるイス……その内の一つに腰を落としていた俺の方を振り返り言う。え、俺間拔けな顔してたか今?（自覚なし）

「若<sup>にい</sup>いつて……凄<sup>にい</sup>いな……」

「若<sup>にい</sup>いつて、兄<sup>にい</sup>も若<sup>にい</sup>いじゃん」

「いやそれは外見<sup>にい</sup>だろ? 中身<sup>にい</sup>は32のおっさんじゃん?」

「まあそりやそうだけど、兄<sup>にい</sup>は二十歳の時から十二年以上寝てたでしょ」

飛電製作所への連絡を終えた俺がスマホをテーブルに置き、今さっきまで通話していた相手『飛電或人』のテンションを思い出してそう口にすれば、美月がすかさずツッコミを入れてきた。

「実際<sup>にい</sup>兄<sup>にい</sup>の人生経験<sup>にい</sup>って二十歳で止まってたようなもんだし……おっさんって言えるほど人生経験<sup>にい</sup>積んでなくない? というか私より積んでないじゃん」

「……………」

……確かに……!

美月の意見は一理ある……よくよく考えたら俺、人生経験そこまで積んでなかったわ。

「だから、私のこと『美月先輩』って呼んでくれてもいいよ? バ・カ・兄にい?」

「絶対やだ」

美月より人生経験積んでない……という話はスルーしよう。このバカ妹を先輩だとは意地でも呼びたくないし。

(人生経験、か………ということはある意味、不破さんとか刃さんも俺の先輩ってことか……)

暫し「人生経験」について考えた後、俺はイスから立ち上がりリビングのドアに手を掛け二階の自室に向かった。明日は飛電さんのお墓参り……或人さんとの集合時間は『13:10』だ。

(飛電さんって呼ぶと是之助さんと被るから、或人さんって呼んだ方がいいのか……? いやでもいきなり下の名前で呼んでくる人とか普通にびっくりしない……? 俺だったらびっくりするし最悪気持ち悪ってー)

中々にくつだらないことを考えながら俺は階段を上がっていった。万が一寝坊するなんてあり得ないが……頼んだ側の俺が相手を待たせるとか絶対ダメだよな。スマホ

のアラームかけとこ。一、二分ならまだ許される感あるがそれ以上遅刻したら社会人失格だしな。…ん？今思ったけど…俺ってちゃんと一般的な社会人やれてんのだろうか？（今更感）

「……………（記憶振り返り中）」

『社会人』とは…学校や家庭などの保護から自立し、実社会で生活している人。俺が意識不明になる前やってた仕事？は以下の通りだ。

マジア出現場所をメールで貰う↓急行してマジアを倒す↓電話で天津さんに報告（偶にこの時に追加でマジアが出現したりもする）↓指定の口座に報酬が振り込まれる。

「……………」

命懸けの仕事？をこなしていたあの日々…あれは果たして一般的な社会人のそれだったのだろうか？

（これ以上考えるのはやめとこ…）

俺は自室に入って早々、ベッドにダイブし、枕に顔を沈めてそう賢明な判断を下しーそうして俺は考えるのをやめた（カース）



〈後日〉

『13:00』

「……………うん、早く来すぎたか？」

飛電インテリジエンスからそこそこ離れた場所にある公園……覚えてるだろうか？  
十二年近く前に俺が初めてショットライザーとプログライズキーを持って変身しようとして夜中に行ったあの公園だ。

十分前に着いた俺はスマホをポケットにしまい、或人の到着を待つ。我ながら十分前行動とか一般的社会人の鑑だな俺（自画自賛）あ、オイそこ「一般的社会人？」とかいうツツコミはなしな。

——五分後——

『13:05』

（まあ、まだ集合時間ではないしなあ）

五分前に来てなくてもおかしくはない。

——そう思い俺は待った。

——十分後——

『13：10』

「……………まあ、社長さんだしな」

（今急いでこつちに来てんだろうな……うん）

集合時間になっても公園に姿を現さない或人。まあまあ……この程度のキレる俺じゃあない。若くして社長さんやってるから色々疲れてんだよきつと……！

「もうちょい待つか」

俺以外は誰もいない公園で独り眩き、それから——。

——二十分後——

『13：20』

「……………まあまあ」

まだ許せる（寛大）

——三十分後——

『13:30』

「……………まあまあまあ」

まだ…まだ、許せる（辛抱）

——四十分後——

『13:40』

「……………まあまあまあまあ」

まあまあまあまあ（語彙消失）

——五十分後——

『13:50』

（もしかして俺、集合時間間違えたか？）

流石にここまで来ると俺が何か間違ってるんじゃないかと不安になり始める。……  
もしかしてあの人事故にでもあったのか!?

——一時間後——

『14:00』

「……いや遅過ぎだろオ!？」

おかしい……!？」

これは何でもおかしい!

集合時間から一時間経ったにも関わらず、姿を現さない或人……これもしかして今日のお墓参りのこと忘れてる？ 一旦帰るか……そう思った俺はベンチから立ち上がり公園を出ようとし、

「ああああああー!？」

「……フアツ!？」

……後ろから聞こえた奇声に俺は驚いて声を出す。思わずバツと後ろを振り返れば……そこには苦しそうに肩で息をする或人さんの姿があつた。

……これはもしかして……

「はあはあ……！ あ、あなたが天本太陽さんですか？」

「そ、そうっすけど……そういうあなたは或人さん？」

「は、はい！ 飛電或人です！ あのーほんっつととうにすみせんっ!! 俺寝坊しちゃつて……！」

……… ( ⊠ — ⊠ ) ……

来るのおせエよバアカ！（憤怒）という気持ちと

あ、無事でよかった（安堵）という気持ちと

寝坊で……（呆然）という気持ち。

この三つが合わさった結果、自分でもよくわからん無に近い表情を浮かべる俺。その走つてきました感全開の姿見て予想しちゃいたがホントに寝坊したのかコイツ……俺が言うのも何だが、こんな抜けた奴が社長務まつてるのか……？

「或人さん、気にしないでください。俺も実はついさつき……いや集合時間の十分前には来てましたよーぎげんな」

「！ ほ、本当にすみせんっ！」

（あ、ヤベツ……！ つい本音がっ!?!）

優しい嘘をついて一旦或人さんの謝罪を止めようとした俺だったが、口からついポ

口つと本音怒りを漏らしてしまう。結果、或人に「あ、この人本気で怒ってる！」とバレ……俺は或人さんに更に謝罪される。

「あ、あー…冗談！ 今の『ぎげんな』は冗談なんで！ き、気にしないでいいですよー」それを再び止めようと怒りを一つ足りとも漏らさないよう、出来るだけ柔和な笑顔を浮かべて喋る。き、気にすんなって！ だ、誰にでも寝坊の一つや二つするって！ そ、それに寝る子は育つってよくいうしさ！（必死のフオロー）

「ぎ、ぎげんなは？」

「あつやべつ」

俺は或人の反応を見て咄嗟に自分の口を手で押さえる。しかし、既に遅い。発してしまった言葉の意味を正しく理解した或人は更に深く深く頭を下げる。

「一時間近くも待たせて、本当にすいませんでしたああ!!」

（まあたプレミったああ!!）

自分自身の失言という名のプレミに俺は内心で悲鳴を上げながら、或人の数度目の謝罪を受けた。

この時の俺は当然考えもしなかった。

今後コイツと長い付き合いになるなんて。

## オレが知りたいアイツの話

或人に案内されて着いた広い墓地。

そこにあつた『飛電家之墓』と書かれた墓の前まで行き、足を止めた或人は「ここで  
す」と言った。

「……飛電さん、お久しぶりです……なんでか生きてました、俺」

俺は墓の前でそう語りかける。持ってきた白い菊の花束を供え、目を閉じ合掌。こうして誰かの墓参りをするのは父方の祖父と母方の祖母……親族の墓参りを除けば初めてだ。俺、ちゃんと墓参りできてるか？

(俺正直今すげえ悩んでます……)

完全復活を果たしたという滅亡迅雷 net.

Z A I A エンタープライズジャパンの動き。自分がこれからどうするべきなのか……再び戦う決意をしたものの、今の状況は以前に比べ遥かに複雑なものになった。

飛電さんが今も生きていれば、一体俺になんて言うんだろうな？



「……ゆつくり休んでください……」

飛電さんが眠る墓の前で俺はそう呟いた。

「或人さん、案内ありがとうございます。ほんとに助かりました」

「いや、その……本当にすいません！ 一時間も待たせてー」

「ーあーあー……もう十分あんたの謝罪は聞きましたって」

墓参りを終え、墓地を出た俺は真つ先に或人に感謝した。それに或人はまた「あの件」についての謝罪を始めようとする。やめろやめろ……！ 頭ん中で忘れようとしてんだから思い出させんな！（必死）

「で、でも……！」

「その態度見りや、遅刻が態とつて訳じゃないのは分かりますし……まあ仮に更に一時間遅れたりとかしたら一発ぶん殴つてたかもですけど」

うん……流石に二時間遅刻したら寛大（笑）な俺もキレてたかもしんない。初対面の人をぶん殴る程度には。

「或人さんが色々忙社しい人長なのも考慮して、普通に許しますって。だからこれ以上謝ん

ないでください。次謝ったら問答無用でビンタしますよ?」

「……………天本さんって、優しい人なんですね」

「……………えっ?」

今の俺の言葉に優しさ感じる要素あった? (困惑)

なかった気がするんだが……………一体何を感じたのこの人? 俺を「優しい人」にカテゴ  
リーするとか節穴だなあ……………そういうや、ワズも俺のこと「優しい人間」って言ってたっけ。  
どいつもこいつも俺を勘違いしてやがる……………

「優しくなんかありませんよ、俺は」

今にも殺されそうな他人を見捨てて逃げようとしたり、助けを求める赤の他人に対して「助けるわけねえだろアホ!自分の命が第一なんだよ!」とか普通に思うぐらいには人間の屑なんだけどな俺。

……………えっ?でも助けたじゃんって?

ありや気まぐれか何かの事故だから!

「……………あーそうだ。そんなに俺に対して申し訳ないって思うなら……………もう一つ、俺のお  
願い聞いてくれませんか?」

「!はいっ!俺が役に立てる事なら遠慮なく言ってください!」

(いや、そんな張り切ってもらうほどのお願いじゃないんだが……………)

やっぱり最近の若者のテンションにはおじさんついてけねえわ（年長者感）……あ、俺の人生経験二十年ちよいだったなそういや。

「とりあえず立ち話も何ですし……店の中とかで話します？」

「あつ！ それだったらすぐ近くに飛電製作所（ウチの会社）がありますし、そことかはどうですか？」

「……えつと、お邪魔して大丈夫なんすか？」

飛電製作所って聞いた話じゃ……機能停止したり、廃棄されたヒューマギアの再起動や修復をしてるとかでZ I I A エンタープライズジャパン（多分ほぼ天津さんの独断）と色々揉めてるって聞いたんだが？

「全然大丈夫ですっ！」

………ホントに大丈夫かこれ？

製作所行ったら何やかんや、奇跡的な確率引いてそのゴタゴタに巻き込まれたりしない……？ 正直な気持ち「いやそこはちよつと……」と言って遠慮したいんだが、

（目キラキラしとる！ なんかめつちや期待の眼差し向けられとる！）

これ俺が「飛電製作所じゃ話したくない」とか言ったら、絶対テンション下がるやつやん………うわつやだあ………「或人のテンションが上がるうが下がるうが気にしなればいい」って思えたらよかつたんだが。

（その時のことをイメージしたら、罪悪感が……）

やべえ、変なところで俺の中にあるかどうかよくわからん「お人好し」が疼く！ ……  
あーちくしょう！ わあーったよ！

「なら、お邪魔させてもらいます……」

「！ じゃあ早速行きましょう！」

俺の返事に笑顔で声を上げた或人は先程までの道案内と同じく、俺の前を歩いていく。行ってやろうじゃねーかアンタの会社に！（緊張）

こうして俺は飛電製作所にお邪魔することになり——或人へ単純明快なお願いをした。

飛電製作所の事務室兼応接室になりつつあるスペースに置かれた椅子に対面する形で座るのは二人。俺、飛電或人と天本太陽という青年？で先に口を開いたのは青年の方だった。

「ワズ・ナゾートクってヒューマギアのこと、ご存知ありませんか？ 飛電さんの右腕的な存在だった、探偵型ヒューマギアなのですが……」

「！ ワズのことを知ってるんですか!?!」

「……その反応的に、ワズのこと知ってるんですね。なら話は早い。あいつのこと、教え

られる範囲でいいので俺に教えてほしいんです。お願いします！」

その「お願い」を聞いた俺は心底驚いた。電話を受けた際にも声からして若いとは思っていたけど……実際に会ってみれば外見年齢も自分と同じぐらいだった。俺と大して年が変わらないように見える人がどうしてワズのことを？そもそもじいちゃんとは一体どんな関係なのか……気になって仕方なかった。

「その前に一つ教えて欲しいんですけど、天本さんはじいちゃんとは一体どういった……？」

だから俺は直球で彼、天本さんへと聞いた。

「どういった……そうっすね。簡単に言うと、一度飛電さんには助けてもらったことがあるんです。まあ正しくは飛電さんの命令を受けたヒューマギアに、ですけど」

「そのヒューマギアってもしかして……」

俺の言葉に天本さんは頷き語ってくれた。じいちゃんとは何度か会う機会があったこと。過去にあることでピンチになっていたところをワズに助けられたこと。

「……ワズはー」

なぜ一般人を名乗る彼がワズに助けられるような状況に陥ったのか……そこに至るまでの経緯がかなり気になりつつ、そこは一旦ぐつと堪えて俺は先に天本さんの願いに応えようとワズがどうなったのか、その最期について教えようとして、

「――或人社長、その話は私からしても構わないでしょうか?」

「! イズ……」

――秘書の声に俺は横を見た。

後ろを振り返ればそこにはイズが立っていて、イズは座る俺たちの近くに歩み寄る。

「……うん、わかった。イズが話したいって言うならイズに任せるよ」

「ありがとうございます、或人社長」

綺麗なお辞儀を俺にしてから、頭を上げたイズは天本さんの方を向くと数瞬だけ彼を観察するように見つめた。その様子に「ワズにも最初、同じように観察されたなあ……」と懐かしそうに天本さんは呟いた。

「スキャン完了。天本太陽。32歳独身」

「……えつ、さささ、32歳いいいつ?!?!」

スキャンを完了したイズは検索したデータを読み上げ、その内容が耳に入って数秒後に俺は驚愕して絶叫した。それに咄嗟に両手で自分の耳を塞いだ天本さんは少し考えながら「あーそっか」といった顔をする。俺としてはパツと見同い年ぐらいにしか見えない目の前の青年が32歳だなんてこれっぽっちも信じられなくて混乱するしかなかった。

「自己紹介したけど、年齢言ってなかったでしたね。なんかすいません……つていうか

ワズもそうだったけど、初対面の相手をいきなりスキヤンした挙句に個人情報読み上げるのやめた方がいいぞ。マジで」

まあここには今あんた達二人しかいないからいいけどさ、と最後に小声で付け足す天本さんにイズは「申し訳ございません。知りたいことがあったのでつい」と言い、続いて俺は「うちの秘書がごめんなさい」と頭を下げる。天本さんは笑って許してくれた。

「……あんたがイズ？」

「私の事を知っているのですか？」

「ああワズが言ってたんだ。自分を基にした新世代型の、イズっていう社長秘書のヒューマギアができたって」

あれがもう十二年以上前のことだなんて信じらんねえなオイ、昔のことを思い出してか天本さんはしみじみ言った。

「……頼む。ワズのことを教えてくれ」

飛電さん亡き後、普通に考えれば飛電或人のもとに居そうな気がするが今ここには居ないワズ。ワズの話をしていた時の或人の反応。

それらを鑑みてワズがどうなったの。察しつつも、アイツの話ワズを聞くために俺は頭を

下げて頼んだ。

「畏まりました。天本太陽さん」

俺の頼みをイズは心良く了承してくれて、

「お兄様は『未来』の為に自らの命を捧げました」

ー そう切り出した。

ザイアスペックの暴走が収束し、天津垓が滅亡迅雷 net の壊滅を大々的に国民に宣言してから三日。

「Z A I A との戦いは避けられないでしょう……どうしますか？ 滅」

「我々の最終目的は人類滅亡だ。

ならばー どうするかなど決まりきっている」

近付きつつある Z A I A との戦いについて問いかける亡。

それに俺は考える迄もなく即答する。

「サウザーの戦闘データは既にラーニング済み。そして、我々には亡……Z A I A のシステムを熟知しているお前がいる」



ならば負ける道理はない、そう言いながらも俺の中には懸念があった。

「……だが、警戒すべき点が一つだけある」

「? それは……?」

「バルデル、あの男の存在だ」

亡は俺が以前共有した『仮面ライダーバルデル』の戦闘映像を思い出して話す。

「私はバルデルの存在を、滅のデータを見るまで知りませんでした」

「……サウザーからは一度もあの男の話は出なかったのか?」

バルデルを知らなかったという亡に俺は僅かに疑問を持った。かつては天津垓の道具として、滅亡迅雷 net のスパイとして Z A I A 内で動いていた亡が何故バルデルの存在を知らない? と。

俺の得た情報では天本<sup>バルデル</sup>太陽は Z A I A エンタープライズジャパン社長、天津垓の協力者の筈だ。

亡がバルデルの存在を知らなかった。

その答えは続く亡の言葉によって理解できた。

「はい、天津垓は一度も『バルデル』の話はしませんでした。それに私が閲覧できたデータの中には彼に関する情報はどこにも」

「……バルデルの存在を隠していたということか」

周知の事実だが、天津垓はヒューマギアの存在を強く嫌悪している。

天本太陽バルデルの存在を亡に隠していたのは亡が「ヒューマギア」だったから。そして、亡が滅亡迅雷のスパイだと勘付いてからは天本太陽バルデルが生きていることが滅亡迅雷に知られれば、必ず意識不明の彼を始末しようと動く……そこまで考えた結果だろう。

「バルデルを『切り札』と理解しての行動か……」

天津垓サウザーの天本太陽バルデルを守る為であろう行動について俺は考える。確かにバルデルの生存を知っていれば、俺は確実に始末しに向かっていただろう。

「亡、バルデルへの警戒は決して怠るな。最悪の場合、サウザーとバルデルを同時に相手取ることになる」

そうなった場合、勝算は……限りなく低いと言わざる負えなかった。

「そっか……そんなことが、あつたんだな」

話を聞き終わった天本さんはぼつりと呟いた。

イズの口から語られたのは『滅亡迅雷 net』の存在や『マギア』の話から、最後



不思議そうに振り返った天本さんに、俺は一つだけ聞きたいことがあった。ワズの最期を聞いて、あんな表情をした人にとって、

「天本さんにとって、ヒューマギアって何ですか？」

「……………」

ヒューマギアは一体どんな存在なのか。

それを聞いた天本さんは暫し考えた後にこう答えてくれた。

「飛電さんの言葉を借りるなら『人間の最高のパートナー』になり得る……かもしれない存在、ですかね」

「……………かもしれない……………」

「大した話じゃないし、言う必要もないって思ってたから言わなかったんですけど……俺、デイブレイク被害者なんですよ」

「デイブレイク、被害者……………」

天本さんの口から明かされたその事実には俺は驚いたと同時に納得がいった。何で一般人のように見える天本さんとじいちゃんに接点があったのか。天本さんがデイブレイク被害者だっというなら色々と合点がいく。でもデイブレイクに遭ったなら何故、ヒューマギアを『人間の最高のパートナーになり得るかもしれない』なんてことが言えるんだ？

「デイブレイク被害者の人はその多くがヒューマギアと飛電インテリジェンス及びその他の協賛企業に対して皆少なからず悪感情を持っている。それが普通なんだと思う。……なのに、

「デイブレイクに遭う前に比べたら、そりやヒューマギアに対して……怖いとか、嫌いとか、マイナスの感情は抱きましたけど。期待したいんですよ俺」

「だから或人さん、これからも頑張ってください。俺はまだ、ヒューマギアを好きでいいですから」

その天本さんの言葉が俺の胸には何だか強く胸に響いた。

「…はい！ 俺頑張ります！」

歩いていく天本さんの背に向けてそう言えば、天本さんは振り返ることなく上げた右手をひらひらと振って製作所を去っていった。天本さんに会えてよかったな、俺は心からそう思った。

まだヒューマギアを好きでいてくれる、ヒューマギアに期待してくれている……そんな人が居るなら俺が諦める訳にはいかないよな！

『……………命を懸けてまで果たす『使命』。私には理解不能です』

『別に理解できなくてもいいんだよ。他人の『使命』何て誰にも理解できねえだろうし、俺も理解できねえ。……………自分の『使命』なんてもんは多分、見つかったその時に何ないとわかんないもんだろ』

『……………私に使命は、見つかるでしょうか？』

『さあな。それはわからん。もしかしたら、もう既に気付かぬ内に見つけてるのかもしれないし……………これから先見つかるのかもしれない』

あの時のワズとの会話が脳裏を過る。

(——ワズ……………)

「お前は見つけちゃまったんだなー自分の『使命』ってやつを」

飛電製作所を後にし、家への帰路を歩きながら俺は考えていた。

俺があの日、滅を倒してさえいれば——。

俺がもつと早くに目覚めていれば——。

——ワズを救うことができたのだろうか？

「……………こんなこと考えるなんて、俺らしくもないか」

たればの話なんざしても仕方がない。時間は過去には戻らない……………んなことは

とつくに知ってる。だけど、それでも、

(考えちまうのは……人の性ってやつか?)

何かが違えば、変わっていたのかもしれない。これが無駄な思考だと分かっているも  
ついでに考えてしまう。

「悪いなワズ、肝心な時に力になってやれなくて……そういや俺、お前になんか恩返しで  
きてたか?」

……あー最っ悪だ。

恩返しする前に逝っちまいやがったよあいつ。

小さな恩なら返さなくても俺自身気にしないが、命を助けられたってどう考えても小  
さくないよな? 大恩だよな? ……ゆっくり休めよ、ワズ。

「後のことは任せろ」

ヒューマギアのお前が人間の『未来』の為に戦ったんだ。なら人間の俺が……人間の『未  
来』の為に戦わずに逃げるなんてできる訳ないよなあ?

## コレがZ A I Aのホントの夜明け

「……それ、マジの話？」

「マジもマジ。大マジだよ。最初に兄にいの病室で会った時にあの人——」

まだ俺が医電総合病院に入院していた頃。「確かにあの人のおかげで兄にいは生きてるけど——」という言葉が気になり、詳しく話を聞けば美月はこう教えてくれた。

『——あなたが天本美月さん、ですね？』

『——はじめまして、私は天津垓と申します』

兄にいの眠る病室にお見舞いに行ったある日。私はその男と初めて出会った。最初に目に映った上から下まで真っ白な服装に……若干引き、困惑しているこつちに構わず——男はこう言った。

『……突然の話になりますが、彼がこうなった原因は私にあります』

その台詞を聞いた私は彼に歩み寄り、その頬を思い切りピンタする。



『出てつてください』

『……お断りします。私はあなたに提案があつて、ここでこうして待つていたのですから』

彼は叩かれた頬を気にする様子もなく、私の言葉にも怯まずある提案を口にした。

『単刀直入に申し上げますと、彼が意識を取り戻すまでにかかる医療費を全額私が負担します。ですから——』

ベッドの上で死んだようにして眠る兄の顔に一瞬目を向け、彼は私の顔を真つ直ぐ見据え、

『——彼の命を諦めないでいただきたい』

そんなことを言った。それに私はこう返した。

『——言われなくても諦めません。それと、あなたの提案には乗りません。兄あにがこうなつた原因があなたにあるのなら、私はあなたを信用できませんし、したくもありません』

——二度とこの病室に顔を出さないでください。

——そう強い拒絶の意を示した。

「……………え、それでその後どうなったんだ？」

「その後もあの人、週に一度のペースで兄にいの病室に来て、しつこく同じ提案してきたの。母さんと父さんが一緒の時も」

天津さん、あんたそれは流石にダメだろ……。家族が入院してる病院に真つ白な服装で現れ、家族と対面していきなりその相手に「こいつが入院しとる原因ワイにあるよ（超意識）」とか……………そりゃ叩かれますわ。むしろよくビンタで済ましたな美月。俺だったら「君が泣くまで殴るのをやめないッ！（紳士）」してたまでである。

「まあ結果だけ云うと、天津さんの提案に乗ったの」

正直私は最後まで反対だったんだけど、と俯き気味にボソボソ呟く美月。いやまあ月の気持ちも分かる。天津さんみたいなウルトラ上から目線な相手（兄が入院した原因らしい人）の提案になんか極力乗りたくないよなあ……。ポンポンと軽く美月の頭を撫でてから、俺は確認するように呟いた

「つまり、俺が意識不明の間の医療費を天津さんが全額負担したと……………待って、それ総額いくらぐらいッ!？」

「あー気にしないでいいよ。あの人も気にしないで構わないとかなんとか言ってたし」  
へえ〜そつかあ〜なら安心だあ〜。

じゃねーよばかちん！ つうか『なんとか』ってなに!? さては天津さんの話まとも

に聞いてないな美月!? どんだけ天津さんが嫌いなんだ………まあ無理もないか(納得)

「いや気にするわ! だって十二年だぞ!! T W E I V Eだぞ!! 絶対やばい額になってんだろ……! ……美月、総額知ってる?」

「……そりゃ知ってるけどー」

「ーはよ教えろください」

「うん、日本語おかしいよバカ兄にい〜?」

その後、美月が口にした金額は一般人の俺からすればちよいと現実味がないというか……信じられないレベルのもので暫く俺はショックで固まった。

「亡い……貴様ア……!」

「私はあなたの道具でした」

ゼロワンに変身した或人に襲い掛かったギーガーだったがその機能は停止し、それを行った張本人である亡は滅を庇うようにして立ち、サウザーに変身した天津垓と対峙する。

「だから、Z A I Aのシステムをよく知っています。セキュリティを強化したところで無駄です。滅の『夢』を叶えるのが今の私の夢なのですから」

そう口にした途端に亡の目は赤く光り、サウザーは背後から銃撃を受ける。

「くっ！、ふざけた真似を……！」

後ろを振り返り、トリロバイトマガアと亡によりハッキングされたバトルレイダー達に囲まれた焔はサウザンドジャッカーを振るい、亡は滅へと声を掛ける。

「滅」

「ああ——」

滅は亡の声に反応して立ち上がり、

「——滅の夢を叶えるのが夢、か。」

ならその夢は一生叶わないってことになるな」

——それとほぼ同時に『ある男』の声が聞こえた。

「！、うぐツ……!?!」

「亡……!?!」

——次の瞬間、一発の銃声が鳴り、亡の肩のパーツの一部が火花を散らし損傷する。回避行動に移ったが間に合わなかった亡のその体は大きく後方に吹き飛んだ。損傷した肩を片手で押さえながら亡は不意のダメージに声を零し、予想外の出来事に滅は攻撃が放たれた方向へとすぐに目を向け、その目を見開いた。

「バルデル……!」

「久しぶりだな滅。」

「——見た感じピンチみたいで嬉しいよ」

そこには青いカバンのような形をした可変式散弾銃——アタツシユシヨットガンを肩に乗せてこちらに歩み寄ってくる、黄緑色のアーマーと白色のアーマーを身に纏った赤い複眼の戦士。忘れる筈もない……

「——早速で悪いが今度こそ『未来』の為に消えてくれ」

溢れんばかりの戦意に別人かと錯覚しそうになるが、そこに現れたのはまさしく天本太陽——仮面ライダーバルデルだった。

「!? あ、あれは……?」

(仮面ライダー、なのか……?)

突如として現れた見知らぬ存在を見た或人は、困惑して思わず首を傾げる。仮面ライダーだと分かったのはその存在が腰に装着していたドライバーが『シヨットライザー』だと分かったからだ。

新たな仮面ライダー?の登場に困惑する或人だが、それとは正反対の反応をするものがその場に一人いた。

「来てくれましたか、太陽君！」

「すみません天津さん、来るのちよい遅れました」

「ふっ、いえーベスタイミングですよ」

天津垓である。

垓はバトルレイダー達とトリロバイトマギアを相手取りながら、太陽の姿を目にし、亡の方をちらりと見て仮面の下で笑う。或人とは違い昔から見知った仮面ライダーの登場に垓は歓喜していた。

「亡、残念ながらお前の行動は無意味だったようだ」

亡によりギーガーの機能が停止され、バトルレイダー達をハッキングされ、戦況がひっくり返るかもしれない中……最強の増援バルデルが駆けつけたのだ。垓は柄にもなく「負けはない」と何の根拠もなく確信する。

（太陽……？ ……それってまさかー）

「言った筈だバルデル。貴様のデータは既にラーニング済みだと」

『ポイズン！』

亡が滅を庇うように立っていた先程までの立ち位置とは逆に、次は滅が倒れる亡を庇うように前に立つ。プログライズキーのボタンを押し、腰に装着していたフォースライザーに装填ードライバーからサソリのライダモデルが出現し赤いランプが発光を始

め、

「……変身……」

「フォー斯拉イズ！」

——機械らしく冷静にそう言った滅は黄色のレバーを引き、装填したプログライズキーを強制的に展開。サソリのライダモデルをその身に纏い、ゴムのように伸縮したアーマーを勢いよく装着。

『ステイングスコープオン！』

【Break Down.】

——滅は変身を果たす。そしてアタツシユケース状態から展開状態に変え、アタツシユアローを構えた滅は目前に立つバルデルを見据える。

「ラーニング済み、か……そりゃあ一体何十年前のデータだよ？」

滅を小馬鹿にするようにそう言った太陽はアタツシユショットガンを持ったまま滅に向かって疾走した。それを迎え撃つべく滅はアタツシユアローのレバーを引き、矢を放つ。

「チャージライズ！」

「どうしたつ？　ンなもんかーよおッ！」

「ッ！　ぐっ……！！」

タイミング良くアタツシユショットガンをアタツシユモードに変え、走りながらそれを前に突き出して滅の遠距離攻撃を弾き、距離を詰めた瞬間にアタツシユモードのままのアタツシユショットガンで思い切り殴りかかる太陽。防御には成功したがその荒々しさに滅は押されてしまう。

【チャージライズ！】

【フルチャージ！】

バルデルをアタツシユアローで斬り、一旦距離を作った滅は素早くアタツシユアローをアタツシユモードに戻してすぐにまた展開し、

【カバンストラツシユ！】

ーバルデルに接近した滅は、トリガーを押しアタツシユアローを振り下ろす。

【チャージライズ！】

【フルチャージ！】

「そんな攻撃、マトモに食らってやるかってのッ！」

【カバンショット！】

そんな滅の必殺技に対し、太陽も必殺技で対処しようとアタツシユショットガンをア



タツシユモードにしてすぐに展開しトリガーを押す。

ほぼゼロ距離で滅の斬撃と太陽の射撃が衝突し、

「っ……！」

「……まだまだア！」

——互いに必殺技を食らう。

二人は同時にダメージを受けその体は後ろに吹き飛ぶが、二人は互いに地面を転がることなく巧く着地すると——またも太陽の方から果敢に攻撃を仕掛けていく。

「どらッ！……そらあああ——！！」

「くっ……！！」

スピードの乗った前蹴りを回避し、パンチも往なす滅だが、バルデルの戦闘能力が以前のデータよりも上がっている事とサウザーによるダメージが残っている事が原因で次に来たアツパーに防御が間に合わずまともに食らう。

「ッ」

「おらよおらよ……！」

よろめいて後退りする滅に太陽はすぐに肉薄し滅に躊躇いなく横蹴りを噛ますと、ついでにとばかりに手に持ったアタツシユショットガンをアタツシユモードにせずそのまま乱暴に投擲した。それを滅は最小限の動きで躲すが、

「そらそらアー！」

「ぐっ…!？」

ー太陽が素早くバツクルから引き抜いたショットライザーの連射への対応が僅かに遅れ、滅のアーマーから火花が散る。

『ストロング！』

「これで決めてやるよ」

攻撃の手を一切緩めず、太陽は遂に『ショットライザー』に装填したプログライズキーのボタンを押す。そして、来たる必殺技に対処する為に滅もまたフォースライザーのレバーに手を掛けた。

「滅…未来の為にここで滅べ」

「バルデル…滅びるのは貴様の方だ」

【アメイジング ブラスト ファイバー！】

【ステイニング デイストピア！】

——ショットライザーのトリガーを押す太陽。

——フォースライザーのレバーを引く滅。

「うおおおー!!」

「……………」

《left》滅《left》殲

二人は互いを真つ直ぐ見据え、次の瞬間、太陽は走り出し、それとは対照的に滅は待ち構えるようにその場で静止する。

「ーおらあああッー!!」

「ーはああッー!!」

ステイング

ストロング

ジ

ブラス ト ファイバー

そして、二つの必殺技<sup>キック</sup>が真つ向から激突する。凄まじいエネルギーに周囲にいたレイダーとマジアは、その余波だけで吹き飛ばされてしまう。空気が裂け、地面が割れ、辺りの数本の木々が派手に倒れ、

「ーーらああああッ!!」

「ーーはああああ!!」

——必殺技の激突は終着した。

「ーーぐはッ!! つつ…馬鹿、なッ…!」

「!? 滅…!」

結果——競り勝ったのは太陽だった。

「俺の勝ちだ…滅」

「一体、何故…?」

太陽の飛び蹴りで大きく地を転がった滅の体は、強制的に変身が解除されていた。そ

んな滅に亡は肩を抑えながらも駆け寄る。

滅は疑問を抱く。

十二年前のバルデルとの戦いでは、ステイングデイストピアはアメイジングブラストフィーバーよりも圧倒的に威力が高く、押し負けることなどあり得るはずがなかったのに。何故自分は今押し負けた……？

「滅、ここは撤退すべきです。流石のあなたでも強制変身解除されてから、三度目の変身で戦うのは不可能です」

「くっ……ああ、わかっている——撤退だ」

亡の言葉に落ち着きを取り戻した滅は疑問について考えるのを一旦やめ、よろめきながら立ち上がり亡と共に撤退を開始する。しかし、

『ストロング!』

「撤退? ハッ——」

【チャージライズ!】

[P r o g r e s s   k e y   c o n f i r m e d .   R e a d y   t o   u t i l i z e .]

『ハーキュリービートルズアビリティ!』——逃すわけねえだろうが」

——そんな二人に無慈悲な音が響く。

損傷により緩慢な動きでその場から離れようとする亡と滅。二人を太陽は一瞥し、シヨットライザーから引き抜いたプログライズキーのボタンを押し、アタツシユモードのアタツシユシヨットガンに装填した。

【フルチャージ！】

必殺待機音が鳴り出したアタツシユシヨットガンを展開し、真つ直ぐ撤退を試みる亡と滅の背に向ける太陽。

「!? やめろおおおー!!」

この距離ならば間違いなくタダでは済まない。破壊は免れない。そう確信した或人は勢いよく駆け出すと、太陽の前に躍り出し構えたアタツシユシヨットガンを掴む。

「!? このっ離しやがれ」

照準を無理矢理ずらされた太陽は或人の邪魔に動揺しつつも、アタツシユシヨットガンを手放し、素早くバツクルから引き抜いたシヨットライザーを連射する。

「ぐッ! やめろッ!」

「ゼロワン……!」

「つ……滅! 亡! 早く逃げろっ!」

蹴られて後退りした或人だが、後ろにいる二人に振り向き叫ぶと再度太陽へと向かっていく。それに対処し、すぐにまた亡と滅を狙おうとする太陽だがその度に或人は何度

も何度もそれを妨害する。

「お前、いい加減うざいぞっ！」

「やめてくださいっ！」

それに遂に苛立ちを覚えた太陽は全力で押し除ける。しかし、それでも或人は太陽の前に立ち塞がった。

「天本さん、なんですすよね…？ あなたが一体なんでこんなことを!？」

「なんでこんなことを？ そりゃあこっちの台詞だ」

或人の叫びを聞いた太陽はそう言っただけで殴り掛かってくる。

「なんでお前が邪魔をするんだ？ 飛電或人？」

「……」

「人間とヒューマギアが笑い合える世界を作る。それがお前の夢だったんじゃないのか？」

「ぐわッ……！」

拳による連続攻撃で怯んだ或人を太陽は容赦なく殴り倒し、オマケとばかりに倒れた或人をボールのように蹴り飛ばす。その間も太陽は或人に続けて問いかける。

「そんな夢を持つお前がどうして、あいつらのようなヒューマギアを守ろうとする？」

「っ……ヒューマギアは悪くないっ！」

「……そうかい」

その言葉を聞いた太陽は呆れたように眩くとプログライズキーが装填されたままのアタツシユシヨットガンを拾い上げ、再びアタツシユモードにしてから展開し——それを或人に向け、

「！」

「飛電或人、俺にはお前が理解できねえ」

「アメイジング カバン バスター——」

——躊躇することなくトリガーを引く。

カバンバスター！

「!? うわあああああッ——!!」

——瞬間、銃口から発射された黄緑色の角のような形をした巨大な弾丸は恐ろしい速



度で或人に命中した。更にその一撃は的確にライダーの急所であるベルト、或人が装着していた「ゼロワンドライバー」に直撃しており、アーマーから火花が激しく散り、爆発後に或人の変身は強制解除される。

「……………くそつ、逃したか……………」

滅と亡が撤退した方向を見た太陽は悔しげにそう吐き捨て、アタツシユシヨットガンからプログラムズキーを引き抜き、装着していたシヨットライザーをベルトと共に外し変身を解除する。

「くツ……………あま、もと……さん……」

「……………飛電或人。頼むから、もう二度と俺の邪魔はしないでくれよ」

倒れ伏した状態で何とか立ち上がろうとする或人に視線を向け、

「また俺の前に立ち塞がるなら、その時はもう容赦はしない」

——太陽はそれだけ告げた後にその場を立ち去ろうとし足を止める。そして、振り返ることなく或人に対しこう問いかけた。

「なあ或人——お前は人間の味方か？ それともヒューマギアの味方か？」

「……………えつ……………？」

それは太陽から或人への純粹な質問だった。

「じゃあな」

「！ 待ってください……！」

別に今すぐに返答は求めていなかった。だから、太陽は或人の返答を待たずにその場を後にした。

戦闘終了後。

「とてもブランクがあるとは思えない戦い振り……実に見事でしたよ、太陽君」

Z A I A エンタープライズジャパンが買収した飛電インテリジェンスの社長室にて、俺は天津さんと話していた。

「あんなの運が良かったですよ。運が」

「運も実力の内と言いますよ。それに、あれは間違いなく君の実力あつての勝利だったでしょう」

「いやそんなことないですよ。滅には天津さんから受けたダメージが残ってましたし、或人だつて一回天津さんの攻撃食らつてたんですよね？」

先の戦闘は正直言つて滅茶苦茶に状況が良かった。天津さんの言葉通りマジでベストタイミングだったんだ。まず俺が着いた時には滅は一度、強制変身解除される程のダメージを受けていたし、俺の登場にちよいとばかり動揺していた。それに或人も一度強制変身解除してたらしいし、あの時或人には俺を倒そうつて意志がなかった……だから、むしろ負ける方が難しい状況だったわけ。

「相変わらず君は謙虚というか何というか……」

「別に謙虚じゃないですから。妥当な判断ですからこれ」

それでも天津さんは意地でもあの戦闘は「俺の実力あつてのもの」と思っていたらしい。いや何でえ？ あれマジでラッキーにラッキーが重なつた結果だからね？ あの「亡」とかいうヒューマギアが夢を語つてる時に着いたのも偶然だし……ごめん一個嘘ついた。本当は俺、亡が天津さんと喋り出した時にもうそこに着いてただけど、出るタイミング見失つてずっと木の陰に隠れてました…… すんませんッ！（土下座）

……まあ勝つたしコレは天津さんには言わんでいつか？ うん、いいよな！（自己完結）

「それにしても本当に嬉しいですよ、太陽君。君がまた戦うことを決意してくれて

……………何より、君とこれから共に戦えることが！」

「……………滅を倒し損ねてた挙句、滅亡迅雷・netが復活したって話聞いて、退院日に人間マギアに襲われて……………まあそりゃ決意しますよ」

そして、ワズの話……………これだけの情報を得て「俺戦いません！」なんて言えます？  
言えたとしたら俺は小心者以下のチキンだ。間違いない。

俺は確かに小心者だが…俺にも守りたいもんがある。

「とうか天津さん！『仮面ライダーになれるようになった』って前に聞いてはいましたけど何ですかあれっ？」

話は変わって、俺は天津さんが変身する仮面ライダーサウザーについて考え出した。本人から話には聞いていたが、実際に見たのは今日が初めてだった……………うん、正直なところ言うとな……………

「ハチャメチャにカッコイイじゃないすかッ!？」

ー超カッコイイと思いました（小並感）

いや何なんあのデザイン…!?! 自分で、俺ってあんまり男のロマンとかよくわかんないタイプの人間だと勝手に思ってたんだけど超カッコイイなあれッ。つうかプログライズキーとゼツメライズキー両方使うとかなんだ欲張りか!?! 正直羨ましくないこともない！

「流石は太陽君……！ 実に見る目がある！」

俺の言葉にテンション爆上げ（キャラ崩壊）した天津さんは、それはもう熱さ1000%でサウザーについて語り始めた。えっ？ 苦じやなかったか？ いや普通に聞いて面白かったですハイ（真顔）

「俺もまさか天津さんと一緒に戦えるとは思っていませんでしたよ………：つうか俺が寝てる間に『仮面ライダー』めっちゃ増えてませんか？」

「確かに……君が一人で戦っていた当時に存在していた『仮面ライダー』は君と滅のみ。今ではサウザー、ゼロワン、バルカン、バルキリー、滅、迅、雷、と実に豊富になりましたね」

まるで仮面ライダーのバーゲンセールだな……（ベジータ）すげえな仮面ライダーの増加率………ん？

「あれ、これ俺いらんじや………？」

それは俺の本心からの台詞であり、

「！、いいえっ！ そんなことは断じてありませんよ！ 太陽君！」

「うおっ!? い、いきなり大声上げないでくださいよ天津さん」

——とんでもない失言だったらしく、始まる天津さんのキャラ崩壊……！ まあこれはこれで面白いからいいか（無責任）天津さんは俺の声に「これは失礼」と一言口にして

から続きを喋り出す。

「いい機会です。太陽君……ここで今から、バルデルがどれだけ素晴らしいライダーかを私が説明して差し上げましょう！」

「……………あ、いや、え、遠慮しま——」

「——まず仮面ライダーバルデルの魅力の一つはその荒々しいまでの——」

「——遠慮しますって言うてんでしようがオイっ!?!」

話の内容は聞いていて、俺がすごく小っ恥ずかしい気持ちになるものだと確信したので全力で阻止しました。ふうー!…止めれてよかった（安堵）

「……………結局、聞けなかったな」

飛電インテリジエンスを出て、高い高いそのビルを見上げながら俺はぼつりと呟いた。……………何で俺はこうも肝心なところでヘタレを發揮するんだろうか？

「……………くそっ」

自分自身に対してどうしようもなく苛立ちを覚えてしまったのか。――天津さんが何をし

たのか。  
それを聞く覚悟が俺にはまだ足りていなかった。

## オレと週末と喫茶店

「或人社長、大丈夫ですか？」

「……えっ……？ あーうん。だ、大丈夫大丈夫！」

心配そうにこちらを見つめるイズにそう笑顔で俺は返事をする。大丈夫かどうか……本当のところを言うなら大丈夫じゃなかったけど……。

『なあ或人——お前は人間の味方か？ それともヒューマギアの味方か？』

（俺は……）

あの日、天本さんから問われたあの言葉を思い出す。また考えていた。あの問いに對する自分の答えを。

「……………」

一体自分がどちらの味方なのか……。

人間？ヒューマギア？

自分がどちらの味方で居たいのか……。

（人もヒューマギアも、大事に決まってる）

この思いは決して嘘なんかじゃない。



それだけは確信を持って言える。けれど、

(本当に人を大事に思うなら……)

あの時、俺は滅と亡を助けるべきじゃなかったのか？ 助けずに天本さんに二人が破壊されるのを黙って見ていた方が正しかったっていいのか？

(……俺はっ……！)

そんな筈がない。

そう思いたかった。でも……

「——或人社長」

「?」 どうかした? イズ」

俯き深く考えていた俺がイズの声に顔を上げると、イズはこんな提案を口にした。

「今日の業務はここまでとして、気分転換に外に出掛けませんか?」

あゝうつまつ! あゝうつまつ!

暑い日に食べるアイスってやっぱり格別だよなあ……。なんか昼間つからアイス食べるとか贅沢なことしてる気がすんなあ(貧乏性)あ、どうでもいいだろうけど今俺が食べてるのはシン<sup>パ</sup>ブル<sup>ニ</sup>なソフトクリームだ。コンビニで買ってきたどこにでも売ってそ

うな普通のもんだが……中タイケるんだなコレが。

「——兄にい、今日暇ひま〜?」

週末に快適なりビングでアイス片手にテレビを見る。そんな至福の時間をのんびり過ごしていた俺に、美月は遠慮なく声を掛けてきた。

「はあく。何だよ藪から棒に……あ、いつものことか」

貴様あ……この一時を一瞬でも妨害するとか万死に値するぞオイ（狭量）ため息をつき、椅子に座る美月の方を振り返って俺は言った。

「はいいい? いつもってどういうことバカ兄にい〜?」

「ん〜? それぐらい自分で考えろよバカ妹〜?」

こいつ相つ変わらず煽り耐性ないなあ〜? まあ昔と変わってない部分が見えて俺は嬉しかったりするけど。

「でっ! 兄にいは今日暇なの? というか暇だよね!」

「……はいはい、今日俺は見ての通り暇ですよ!……」

半ギレ口調で声上げんなって……つうか顔近いから一回離れろい。

「だよねえ! テレビの前でアイス片手にニヤニヤ気持ち悪い笑み浮かべてたし、そりゃ暇だよね〜!」

「おい表に行こうぜ美月……久しぶりに……キレちまったよ……」

「先に煽ったのそつちじゃん」

「……………」

……毎度いいところつくよねえ君。

ナイス着眼点！ いや素晴らしいッ！

「それな」

美月の正論に同意した俺はその後、煽った罰に外に無理矢理連れ出されました。あー、さよなら俺の樂園<sup>エデン</sup>。もう一本アイス食べたかったなあ……。

「くっ……………」

デイトレイクタウンの橋の上を歩いていた僕は拠点から飛び出す際にアークから受けたダメージに思わず苦悶の声を漏らす。

（なんて強さだッ……！）

「このままじゃー……！」

俯きながら僕がアークを止めるために思考していたその時だった。

「ヒューマギア、滅亡迅雷 netの迅を発見！ これより対象を破壊する。総員、実装

準備」

「「了解」」

「一気付けば僕の前方には数十人の A. I. M. S. 隊員達がおり、彼等は素早い動きで『レイドライザー』を取り出し腰に装着。そして、

『ハード!』

「『実装!』」

【レイドライズ!】

『インベイディングホースシユークラブ!』

【Heavily produced battle armor equipped with extra battle specifications.】

「一取り出したプログライズキーを装填し、レイドライザーの右横部にあるボタンを押し込み『バトルレイダー』に実装した。

「まだ、無駄ってわかんないのか……!」

ガチャリと一糸乱れぬ動きで短機関銃を構えるAIMSを前に僕は苛立ちの含んだ声を上げ『スラツシユライザー』が取り付けられたバックル・ベルトを出し装着し、

「僕の邪魔をするなあ!」

【スラツシユライザー!】

『インフェルノウイング!』

【バーンライズ!】

ー左腕につけたバングルのチェーンに繋がれたプログライーズキーを引っ張り取り、ボタンを押し勢いよくドライバ―に装填。

〔Kamen Rider. Kamen Rider.〕

「――変身っ！」

〔スラツシユライズ！〕

『バーニングファルコン！』

〔The strongest wings bearing the fire of hell.〕

そして、変身した僕は赤い翼を展開し、

「ーハアツ!!」

ーバトルレイダー達に向かって猛スピードで飛翔した。

「――着いたよ兄にい」

「スここが最近オープンしたっていう……名前何だっけ？」

「スtellar！」

「あー！ それだそれ」

俺が美月に連れられやってきたのは最近オープンしたという喫茶店だった。店名は『Ste<sup>ス</sup>llar<sup>ラ</sup>』。外観から既にわかるが……何だろ？ 喫茶店はみんな洒落乙じゃないとダメなんだろうか？ めっさオサレなんだが？

「……なあ妹よ、これ俺場違いじゃないか？ なんか入っちゃダメな気が超すんだけど。帰っていいか？」

「中にも入ってないのに何言ってるの！ ほらさっさと入るよ〜」

「うおっ、押すな押すな！ 入る。入るから」

美月に押された俺は渋々店内へと踏み込んだ。そして、

「やっぱ帰るわ……」

——入った瞬間回れ右。即リターン。

入った瞬間察したよね。これ俺みたいなファッションセンス100点満点中40点の男が入っていい空間じゃないっすわ！

「いやいや！ 小心者にも程があるでしょ！」

るせえ！俺だつて好きで小心者やってんじゃないんだよ！ 来店してから五秒で帰ろうとする俺の前にバツと腕を出す美月。そこを退くんだ美月い！ この空間に俺は長居できないっ！（確信）

喫茶店に来たのなんて学生時代以来なんだけど……スウー……マジで俺の知る喫茶店の千倍ぐらい洒落てるわ。

「わかった。メニュー頼んで、メニューが来て、メニュー飲んだらすぐに帰るっ。これで問題ないな？」

「それが普通だよ？ 兄にい？」

まさか十二年という時の流れで喫茶店の洒落乙度がここまでレベルアップしていたとは……怖っ。

それから空いていたカウンター席に座り、メニューを頼み終わった俺と美月が他愛ない話をしていた時だった。

「こんな店、近くにできてたんだな。全然気付かなかったよ」

「滅亡迅雷 netやZ A I A、製作所経営などで多忙でしたからね」

なんか聞いた時のある声が聞こえた……それと店内にいる他の何人かのお客さんの視線が声のした方を向いていた。

「んっ？」

(見間違いかあ……?)

釣られて俺もそちらに目を向けてみれば、

「ごめんなイズ……なんか気が遣わせちゃって」

「気にしないでください、或人社長」

(あー……)

——つい数日前に見たばかりのあの二人。

——或人とイズが居た。

あー……なるほどな。

他の何人かのお客さんが見てるのはヒューマギアか。天津さんが大々的に全ヒューマギアを廃棄するって宣言してから一ヶ月ちよいたった今……そりやあヒューマギアが喫茶店に居たらそりや気になるわな。というかそもそも、

(どんな確率だよ……!?)

——なんで週末に美月に連れてこられた店で遭遇すんの!? あり得るのかこんなこと? す、すげえ偶然だなあ……前会った時の最後があれだったからな。めっちゃくちゃ話しかけにくい。

(いや待てよ? 別に、話しかけなくてもいいんじゃないか?)

………冷静に考えてみよう。

今んとこ俺と或人は友達じゃないし仲間でもない。イズも同じだ。なら別に態々話しかける必要もないのでは? と思つた俺は「あつちから話しかけてきたら応える」スタンスをとり、タイミングよく来たメニューのカフェオレを早速勢いよく飲み始め



た。え、いや別に急いでないっすよ？ 二人に気付かれる前にさっさと帰ろうとか…全然思つてないですよ？

「！ あ、天本さんっ!？」

「……ズズズ」

今誰か俺の名前呼んだかー？（棒読み）

気のせいかな？ 気のせいだな？ 気のせいだわ。

「兄<sup>にい</sup>？ あの人の、兄のこと見て驚いてるみたいだけど…返事しないでいいの？」

「ズズズズ」

周囲の声を出来る限りシャットアウトし、凄まじい勢いでストローを吸いカフエオレを飲む俺（もはやカフエオレを飲む音ではない）に美月はそんな言葉を掛けてくる。美月よ、俺の知り合いにあんな好青年と美少女ヒューマギアはいないってばよ！

……なあって現実逃避しても仕方ないか……。

「——美月、悪いけど外出てきていいか？ ここは——」

席を立った俺は財布からお金を取り出そうとして、

「——大丈夫、私が全部払うよ。大した値段じゃないし、それに兄<sup>にい</sup>には半ば無理矢理付き合つてもらっちゃったしさ」

ー美月に止められる。

仮にも兄として、大した金額じゃなくても妹に奢らせんものには思うところがあるんだが……

「……悪い。埋め合わせは後で絶対する」

「私たち兄妹だよ？ 小さいこと気にしないでよ」

俺は美月に軽く謝ってから或人とイズの座る席に歩み寄ってまず一言言った。

「天本さん、俺……」

「……それ飲み終わってからでいいから。なんか話したいことがあんなら、場所変えるぞ。それとー」

ーこのご時世、迂闊にヒューマギアスを連れ回すな。

## 炎の不死鳥

「ここら辺なら、誰かに聞かれる心配もないか」

喫茶店を出た俺たちは少し離れた場所にある川沿いの道。そこに設置された柵に手をかけた天本さんは、俺の方を振り返ってこう言った。

「それで、俺に何か話したいことがあるんじゃないのか？ 飛電さ……いや、或人」

あんなことがあった後なのに……天本さんは俺へ以前と変わらぬ態度で声を掛けてくる。あの時、天津塚に味方していた仮面ライダー……その正体が天本さんだということは疑いようもないことだが、一見一般人な天本さんがあの荒々しい仮面ライダーだなんて……。

「……俺、あの後……考えてみたんです。天本さんに言われた事について」

「……………」

「自分が人間の味方なのか……ヒューマギアの味方なのか……どつちで居たいのかって」

「……………うん」

俺の言葉を天本さんは静かに聞き小さく相槌を打つ。その天本さんの聞き方が俺に

はすごくありがたかった。

「でも……何か、うまくわかんなくてッ……」

考えれば考えるほどぐちゃぐちゃになって、訳わかんなくなっちゃって……正直に俺はそれを天本さんに伝え頭を下げる。

「すいません！ 天本さんっ……！」

「？ ……え、何に対して謝ってるの？」

「っーそれは！ 自分でも、どっちの味方でいたいのか分かってないのに……あの時、天本さんの邪魔をして……」

天本さんは怒ることなく俺の謝罪に首を傾げる。そして、

「んなこと気にしないでいい。っうか俺、怒ってないし」

「……えっ？ そ、そうなんですか……？」

「そうだよ……え、怒ってるように見えてたのか？」

はいと頷く俺を見た天本さんはため息をついてから「そう見えてたのかあ……」とぼそりと呟く。

「勘違いさせたなら悪い。あの件に関して俺は別に怒ってない。まああの時に言ったように多少うざいとは思ったが……そんなくらいだ……あーそれと——或人」

「？」

「——どっちの味方なのか。聞いた俺が言うのもなんだが……その答えに、俺はさほど興味ない」

「……………え……………?」

一瞬、天本さんが何を言っているのか俺にはわからなかった。

「あれは、お前の行動を見た俺の素朴な疑問だ。だから正直、忘れてくれたっていい」

「!」で、でもッ——」

「——慌てて、無理して考えたって…答えが出ないなら仕方ないだろう? ンなの疲れるだけだし……………まあ遅かれ早かれお前が『答え』を出さなきゃいけない日は来るだろうけどな」

そう俺に言い終えた天本さんは、

「?」はい、もしもし?」

『こちらAIMSエイムズっ! 天本さん、滅亡迅雷 net の迅を発見しました』

「ーはあ?!?!? ちよつおま、マジでえっ?!」

ー電話が掛かったスマホを取り出し、電話に出て驚愕の声を上げた。

『現在交戦中ですが……………このままだと撤退は必至かと!』

「了解。今すぐ行くから位置情報送ってくれっ! ……………その前にちよつと聞きたいんだけど、俺に電話してきたのは……………」

『はい。天津社長から緊急事態の際は、天本さんに助力を請えと指示されておりました……』

「……スウー……あとであの人一発ぶん殴ろ」

そして、電話を切った天本さんは小声で何かを口にした後に「悪い、急用が入った」と言って走り去っていった。

「はあはあ……!」

(早く、この場を離れないと……!)

このままここに居れば間違いなくアークは裏切り者である迅を追ってくるだろう。そう確信していた迅はバトルレイダー達を打倒すると、素早く翼を展開し飛び立とうとした。だが、

「! くっ……!?!」

——その直前に一発の弾丸が迅の肩に直撃し、火花が散った。怯み僅かに後退りした迅はすぐに弾丸が飛んできた方向に目を向ける。

「——見つけた」

「お前はツォーバルデル……!」

迅が目を向けた先にはショットライザーを片手に歩み寄ってくる男、バルデル天本太陽の姿が

あつた。

「！ あんた大丈夫か？」

「ツ…：天本、さん…：…！」

「…よしつ、ちゃんと生きてるな？」

俺は慌てて近くに倒れていたA I M Sの隊員の一人に駆け寄つた。

スマホに送られた位置情報に従つて来てみれば、そこには深紅のアーマーを身に纏つた仮面ライダー迅の姿とあちこちに倒れているA I M Sの隊員達がいた。幸い皆意識はあるようだ。この人達も中々にタフだよなあ…：流星は本職つて感じだな。

「不安だろうが…：後の事は俺に任せて、あんたらは寝ててくれ」

「！ はいツ…：…！」

次に目が覚めたら、この人達は皆病室のベッドの上だろう…：…：なんでそんな安堵の表情してるのこの人…：!? つうかあんたやけに素直だな!? 普通俺みたいな一般人に「任せろ」とか言われたら不安で仕方ないと思うんだが…：…：?

…：…：あーさては天津さん、あんた俺のことに関して隊員さん達になんか吹き込みやがつたな？

「それにしても、容赦なくやってくれたなあ？ 焼鳥野郎」

「……お前も、僕の邪魔をするのか？ バルデル」

倒れる隊員さんの一人をそっと寝かせてから、俺は迅を見据えながら言った。迅はそんな俺に問いかけてくる。僕の邪魔をするのかって？ ハッ、んなの当たり前だろ？

「愚問だな……お前が滅亡迅雷の一員って時点で、俺の中じやお前は倒すべき敵だ」

天津さんから聞いた話じゃ、迅の目的はヒューマギアの解放らしいが……滅亡迅雷に入ってんなら話は別だ。

もう二度とシュゴやワズのような犠牲者は出させない。俺が守りたい『未来』の為に俺はお前達を一人残らず破壊する。

「バルデル——お前じゃ僕は止められない」

「そりゃあ——やってみなくちゃわかんねえだろ？」

確かにスペックだとかを見りゃあ俺じやお前には及ばないかもしれない。俺じやお前は倒せないかもしれない。だけど、

『ストロング！』

【オーソライズ！】

ースペックの差だとかそんなのは今更だろ？

取り出したアメイジングヘラクレスプログラムライズキーのボタンを押し、俺は腰に装着



したショットライザーに勢いよく装填する。

〔Kamen Rider. Kamen Rider.〕

「――変身ッ……!」

〔ショットライズ!〕

そして、プログラムライズキーを展開してトリガーを引き、

「――おらあッ!」

『アメイジングヘラクレス!』

〔With mighty horn like pincers that fly  
p the opponent helps.〕

――変身した俺は迅と対峙する。

「悪いが出し惜しみはしねえ。俺は全力でお前を破壊する」

「やれるものならやってみなよ?」

俺はバックルからショットライザーを引き抜き、迅はバックルからスラッシュライザーを引き抜き――俺と迅は互いに駆け出した。

「おらおらおらア!」

「はあッ! やあッ!」

ショットライザーでの連射を迅はスラッシュライザーで巧く弾き切り、俺に切り掛

かってくる。

「っーそんなもんかあッ！」

「くっ…！ ふーはあああ!!」

「！」

それを片腕で防いだ俺の反撃のパンチをギリギリ後ろへ飛ぶことで回避した迅は、赤い翼を展開しその一部を俺へと飛ばしてくる。

(後ろには隊員さん達が…くそっ、しゃあねえか！)

「おりゃああ!! ーぐッ…!!」

後ろに目を見やれば…その攻撃を回避するという選択肢が俺の中から消えた。俺は飛んでくる真ッ赤に燃えた翼に殴り掛かり、直後にその翼は爆発した。熱ッ!? 痛ッ!? あーやだ! ホントやだっ!

「! 防ぎ切った…!?」

「ッ…次はーこつちの番だオラア！」

完全に俺のこと怒らせちゃまったなあ! お前なあ!?

「うぐッ…! くっーがはっ!」

アメイジングヘラクレスの装甲と気合で迅の攻撃を耐え抜いた俺は全力で迅にダッ

シュし、膝蹴りをぶち嘯ます。それにより大きく退く迅に更に接近し、その胸に右でのパンチを打ち込む。ラストに前蹴りで蹴り飛ばす。

『ストロング!』

【アメイジング ブラスト!】

「はあああーおらああッ!!」

左手に持ったショットライザーに装填されたプログライズキーのボタンを右手で押し、素早くショットライザーを右手に持ち替え俺はトリガーを引く。瞬間、ショットライザーに収束した黄緑色のエネルギーが放たれる。

「! くーはああああー!!」

「! 飛びやがった……!」

(飛べるって狡いなあマジで……!)

迅はその一撃を空に飛ぶことで回避した。

くそっ飛べるとかいいなあ! ……つうか何で俺は飛べないんだ? これヘラクレスオオカブトのプログライズキーだろ? カブトムシなら翅あんだろ翅エ! ……まあ確かにヘラクレスオオカブトが飛んでるイメージってあんまないけども。

「悪いけど、僕も手は抜かない。」

「どんな手段を使ってもお前を倒すッ!」

「!? はっ? 消えた……!?」

中空に浮かぶ迅を見上げていた俺だったが、迅の姿は突然消えた。

「どこ行きやがった……! ……?」

(これは……飛行音……?)

焦って辺りを見渡す俺は気付く。迅の姿は一切見えないが何かの飛行音らしきものが俺の耳には確かに届き、

「ーはああああ!」

「!? ぐわッ……!」

「ー痛ッ……!?!」

突如として背後から攻撃を受けた俺は地面に転がる。今の声は迅の……つうかあの焼鳥野郎っ!

(速過ぎるだろうがッ!?)

「隙だらけだっ!」

「!? がはっ!」

俺は次は真つ正面から高速で蹴り飛ばされる。あまりの速さに迅の姿が俺には視認できなかつた。どうする……? 速過ぎて見えないヤツ相手にどうすりゃあ……

「せやあああ!!」

「！ ちいッ！ ぐはっ……！」

そんなことを考えてる間も迅は容赦なく攻撃を仕掛けてくる。……こうなったら、一か八か……いやあの速さじゃ闇雲に打つても一発も攻撃は当てられない……

(……待てよ？ 音……そうだ！ 音だっ！)

「はああああ!!」

「ぐッ……！ やつてみるつきやねえか！」

「アタツシユシヨットガン！」

「シヨットガンライズ！」

俺は手に持ったシヨットライザーをバツクルに戻し、アタツシユシヨットガンを取り出した。

「今更そんなもの出したって、当てられなきや無駄だっ！」

「ぐはっ！ はあ……あーそうだな。当てられなきや、無駄だなア！」

「チャージライズ！」

俺は天津さんから借りたプログライズキーの内の一つ、群青色のプログライズキーを取り出す。空を縦横無尽に高速で飛ぶ迅の猛攻を受けながら俺は、

『ウエーブ！』

〔Progress key confirmed. Ready to utilize〕

ze.]

『ホエールズアビリティ!』

そのままプログライズキーをアタッシュモードのアタッシュショットガンに装填する。そして、

「はぁー……………」

「? 遂に諦めたか? はぁぁぁあ!」

ー俺は仮面の下で目を閉じた。

諦めた? ハッ! 的外れにも程があるぜ迅?

(集中しろ、音を聞け、意識を研ぎ澄ませろ…!)

「がはッ……………」

(痛みに耐えろ、集中力を乱すな…!)

全力で意識を研ぎ澄ませる。

相手が目では追いつけない「速さ」を持つなら、音を聞き取り、相手の場所を予測しろ……攻撃を受けても慌てるな。自分に言い聞かせるように内心でそう口にし、俺は攻撃を受け続ける。

だけどーアタッシュショットガンは決して手から落とさない。

「ーはぁぁぁあ!」

そして——その瞬間はやってきた。

【フルチャージ！】

「ーッ！ そこだアア!!」

「ー何っ!?!」

【スプラッシング カバン バスターー!】

俺は己の意識と感覚を信じ、アタツシユットガンを展開し咄嗟に後ろを振り返りトリガーを引いた。瞬間、アタツシユットガンからは青いエネルギーが放たれ、その激しい流水のような一撃は、

「!?! ぐわああああー!!」

ー高速で攻撃を仕掛けようとした迅にドンピシャで命中し、迅は地面を転がり強制的に変身が解除される。

「はあッ…手こずらせやがって。だけど、これで終わりだ迅」

「うぐっ……まだだッ……!」

変身が強制解除された時点で、迅の体力は限界だろう。ボロボロな体で必死に立ち上がろうとする迅……だけど、悪いが俺には油断も慢心も、容赦もする気はなかった。

「悪く思うなよ」

この距離なら間違いなくアタツシユシヨットガンでコイツを破壊できる。俺がアタツシユシヨットガンを迅へと向けトリガーに手を掛けた、その時、

「――見つけたぞ、迅」

――不思議と聞く者全てに「恐怖」を感じさせる声が響いた。

「!? その声は……!」

「! ……お前は……?」

声が出た方に目を向ければそこには何者かの姿があった。

ソレは黒いアーマーに身を包み、複眼は片方が剥がれたような黒色、もう片方は禍々しい赤色。胸には複数のパイプが貫通しており、よく見れば内部のパーツの幾つかが見出しだった。

迅を見れば、酷く怯えた様子で謎の存在に目を向けている。――コイツも仮面ライダー……なのか……? 天津さんからはこんなヤツがいるなんて聞いた覚えはないんだが……。

「これは思わぬ遭遇だな、バルデル」

ソレは迅から俺へと視線を移動させるとそう言い、

「……お前は誰だ……?」

「そうか。こうして直接会うのは初めてだったな」



一歩だけ俺に歩み寄ると。

「――私の名はアーク。人類を滅亡へと導く存在だ」

――俺の問いにそう答えた。

## 滅亡の方舟とエンカウト!

「——アーク…？ それって——」

天津さんの言っていた人工衛星アーク。確かゼアの前身機で、人類滅亡の為の意思や指示を滅亡迅雷に与えてるっていう……いや待て、それが何で、

「——何故自己の『<sup>ボディ</sup>身体』を有しているのか、か？」

「!？」

「——その疑問には答えよう。私は滅亡迅雷 net の四体のヒューマギアからシンギュラリティデータを奪う事で復活を果たした。そして、このベルトを介し、他者の<sup>ボディ</sup>身体を乗っ取ることでこうして地上での活動を可能にしている」

——アークと名乗ったソイツは俺の疑問を「先読み」するとそう驚くほど丁寧に説明しやがる。

「……りやあご丁寧にどうも……まあつまり——」

シンギュラリティデータだとか正直詳しくわかんねえ部分はあるが、一つだけ分かり切ったことがある。それは、

「——お前は俺の敵だってことだな？」

「——ああその通りだ」

アイツは倒すべき相手だつてことだ。

即答するアークを見据え俺は構える。

「ツ！ 無理だつ！ よせツバルデル……！」

「ああ？」

そんな俺の姿を見て、倒れていた迅が突然そう叫んだ。俺は迅の方に視線だけを向ける。

「あいつの——アークの強さは、僕達が挑んでどうにかなる相手じゃない……！ 無駄死にするだけだッ！」

「……………忠告ありがとよ」

さつきまで戦つてた相手に言うほどとか……とんでもなく強いんだなコイツ。つうか迅、お前めちやくちや足震えてんぞ？ 俺は顔をアークへと再び向けながら迅に言うてやる。

「でも、ここに逃げるなんて選択肢とれねえんだよ」

後ろにはAIMSの隊員さん達が居る。

……………最初の頃なら、赤の他人だからとか言つて見捨てて逃げようとも考えただろうが……はあ……嫌になるなホント。

「――私とお前の間には圧倒的な開きがある」

アークは戦いの姿勢を見せる俺を前に言う。

その通りだ。俺とアークの力の差は歴然で、ちよつとやそつとで縮まるようなもんじゃない……それは仮面ライダーとして戦って培ってきた勘つてやつで嫌でもわかつてしまう。それでも、

(――やるしかないよなあ……?)

――やるしかない。

『不安だろうが……後の事は俺に任せて、あんたらは寝ててくれ』

――あんなこと言っちゃまったからなあ……見捨てて逃げるなんて裏切りに等しい行為できねえよ。

「言われなくてもそんなことは分かってんだよ。それでも、やるしかねえだろうが……!」

恐れを振り払い、俺はアークに向かって駆け出し――その右拳を振るった。

「――素晴らしい、そして――」

「――ッ!?!」

「――実に愚かだな」

だが、その拳をアークに片手でいとも容易く受け止められ、アークは俺の右拳を片手

で掴んだまま空いたもう片方の手をゆっくりと上げ、

「ーっふっ！」

「！ーっごはッ…!?!」

「ーッツツ?!?!」

「ー」防御する暇すら無い速度で拳を振るう。

俺の体はその攻撃を受け、大きく後ろに弾けるように吹き飛ぶ。

「はあッ…！ まだだっ…!?!」

「人間らしく、痛みを以てラーニングするといい。私の強さを。己の愚かさを」

予想を遥かに超える威力に一瞬理解が追いつかなくなるが、何とか立ち上がる俺を見たアークの目前にはーっ突如赤黒く何か投影され、それは俺の見知った武器と化す。

「！ ンなことできんのかよっ!?!」

「……………」

「!?! ぐうう…!?! がはっ!」

アークはその場で作り出したアタツシユシヨットガンを片手で持つと、反動などもはや無問題なのだろう…こちらに歩み寄りながらアタツシユシヨットガンを容赦なく無言で連射し、

「ぐッ……………」

「チャージライズ!」

「フルチャージ!」

アタツシユシヨットガンを手放したアークは次に滅が使っていたアタツシユアローを投影し瞬時に作り出す。最初に受けたアークの一撃とアタツシユシヨットガンの連射によるダメージで片膝をついた俺が顔を上げれば、アークは俺の真ん前にアタツシユアローを向けレバーを引いていた。

「カバンシユート!」

「……わああアアアア!!」

アークそれをもろに受けた俺は衝撃でまたも勢いよく吹き飛び、爆発と共に強制的に変身が解除される。

「ツ……がはっ……! くっそツ……!」

「その身を以て理解しただろう? バルデル。お前の力は、私には遠く及ばない」

何のアーマーも装着せず倒れる太陽に目を落としアークは淡々と告げる。

「アーク、次はお前だ。安心するといい。まだお前には利用価値がある……破壊はしない」

「くっ……!」

倒れる太陽から迅へと視線を移したアークは迅にゆっくりと歩み寄る。迅は震える足で後退りするがアークに受けたダメージとバルデルによって受けたダメージによりその動きは実に緩慢だった。

「……遅い」

「!? ……はッ……ぐッ…………アーク」

そして、迅は気付けば一瞬で背後に回り込んでいたアークの拳を腹に受け意識を落とし、

「……理解不能だな」

アークが倒れた迅に近付いた時、一発の弾丸がアークの背後からその肩を掠る。当然その攻撃をした人物はただ一人、

「力の差を理解していながら何故立ち上がる？ 無駄な行為を続ける意味は何だ？」

「はあはあッ……悪いが、俺はお前からヒューマギアほど賢くねえんでな。一回倒れたくらしいじゃ、簡単に諦められないんだよ……！」

ボロボロな体で立ち上がり、痛みには堪えながらショットライザーを構える太陽に振り返ったアークは冷たくどこか呆れたように呟く。

「……人間というのはやはり愚かな生物だ」

「ハッ、よく分かってんじやねーか?」

アークの眩きを聞いて笑った太陽はシヨットライザーを仕舞い、別のドライバーを取り出す。それはアークも迅もよく知るドライバー、

「俺にはまだこいつがある……!」

「フォースライザー、か……本当に諦めが悪い……!」

「知らなかったか? じゃあ、しっかりとレーニングしとけよ。俺はどうしようもない小心中だが、同時に結構諦めが悪いってなあ!」

ーフォースライザー。

ソレは太陽が一度だけ使用したドライバー……とは正しくは別物。十二年以上前の滅との激闘により損傷したそれを天津垓が回収し、AIMSの研究班に修理・改良させたものである。

「フォースライザー!」

「ツ……! んじゃ第二ラウンドと行くかア!」

『ストロング!』

左手に持ったフォースライザーを腰に当て装着し、続けて変身解除の勢いで落ちたアメイジングヘラクレスプログラムライズキーを拾いボタンを押す。

「——変、身ッ……!」



「フォースライズ！」

——黄色のレバーを力強く引けば、装填したプログライズキーは強制的に展開。ハラクレスカブトムシのライダーモデルが真っ直ぐ俺に向かって飛び、その鋭い角に向け太陽は拳を振るう。瞬間、ライダーモデルが太陽の身に纏われ、ゴムのように伸縮したアーマーが勢いよく装着される。

『アメイジングヘラクレス！』

【Break Down.】

「行くぞアークっ……！」

「何度試行しても、結果が変わることはない」

変身した直後、疾走し挑みかかる太陽の前にアークは言う。

「——どらあああッ!!」

「ふっ——はっ！」

「ぐッ……！ つたく、そんな簡単に受け止められると自信失くすなあ……！」

自らの全力のパンチを片手で受け止めたアークの攻撃に怯み、僅かに後退りした太陽は一瞬俯きそんな言葉を零し、

「おらア！」

「無駄だ」

「くっ……!」

再度攻撃を仕掛ける。だが、それを当然のように躲したアークの手元には赤黒いノイズが出現し、またアタツシユットガンが作られる。

「なら、こつちもシヨットガンだ!」

「ふんっ!」

それを見た太陽は、先程自らがアークの攻撃により落としたアタツシユットガンに目を向けると、素早くそちらに向かいローリングしアタツシユットガンを手に取り――地面に片膝をついたまま、照準をアークに向けトリガーを引く。

「!? ぐはっ……!! ツ……まさか、威力まで強化されてんのかソレっ!?!」

「こちらの攻撃を相殺しようとしたようだが、無意味だ」

――両者の攻撃は相殺されず、太陽の放ったアタツシユットガンの一撃が押し負け太陽は大きく吹き飛ばされる。そんな太陽に無慈悲にアークはアタツシユットガンを放つ。

「チャージライズ!」

「うぐっ!?! ……ぐううッ!?! つ……はあ……それなら……!」

その一撃を前に太陽は反射的にアタツシユットガンをアタツシユモードに変え

盾にする。しかし、アークのその攻撃は防御をしたとは思えないほどの衝撃を太陽に与え、

『ブロウ!』

「コーコイツでどうだっ…!!」

【P r o g r i s e   k e y   c o m f i r m e d .   R e a d y   t o   u t i l i z e .】

『バッファローズアビリティ!』

衝撃になんとか耐えた太陽は立ち上がり、新たに取り出した赤いプログライズキーのボタンを押しアタッシュモードのアタッシュショットガンに装填しーアタッシュショットガンを展開する。

【フルチャージ!】

「ーはあああああッ!!」

【クラッシング   カバン   バスター!】

途端にアタッシュショットガンの銃口に赤いエネルギーが発生しー発射された弾丸と共にバッファローのライダーモデルが放たれアークへと突進していく。

「ー!」

放たれた必殺技はアークに直撃しー爆発が起こる。

瞬間、辺りは黒い爆煙に包まれ、

「ー所詮、人間とは……バルデル。お前とはこの程度か？」

ー爆煙が晴れた先でアークは平然と立っていた。一切ダメージなど受けていない……そうとしか思えない姿を前にした太陽は……。

「ツ……はあ……ここまでテメエの無敵っぷりを見せられると、絶望通り越してー最っ高に頭にキタゼっ！」

ー恐怖することもなく。

ー絶望することもなく。

アークの強さとこちらを明らかに見下している言動に湧き上がる怒りに任せーフォースライザーのレバーを押し込んだ。そうすればプログライズキーは閉じられ、危険を知らせるかの如くベルトに取り付けられたランプが赤く点滅し始め待機音が鳴る。

【アメイジング ユートピア！】

「おおッーらああああ!!!」

アメイジング

ユートピア

そして、フォースライザーのレバーを引き、再び押し込み、更に引き……レバー操作を連続で行った太陽はアーク目掛けて高く跳躍し蹴りの構えをとる。アークへと向け

られた太陽のその右足からは赤黒い火花が激しく散り、黄緑色の爆発的なエネルギーが収束していた。

「ーぐっ……！」

太陽の必殺のライダーキック、渾身の一撃をアークは避けることなくその身で受けー戦闘が始まってから初めて僅かではあるが怯みを見せる。だが、

「ー認めよう、バルデル。お前は強いー」

「?! 消えー! うぐッ…!」

ーアークはすぐに反撃へと転じた。

一瞬で太陽の背後を取り、右手でその首をがしりと掴み持ち上げ、太陽の足は地面から浮く。

「ーしかし、私の方が上だ」

「ぐう…ア…! はな、セツ…!」

アークの拘束から逃れようと自分の首を掴むアークの右腕に拳を叩きつける太陽。しかし、アークの拘束は一切緩まずーアークは空いた左手で自身が装着するドライバーの上部にあるスイッチを強く押し込んだ。

【オールエクステイクション!】

その操作を行なった直後、アークは太陽の首を掴んでいた手を離しー



「なん、だどッ……!? ごほッ……!」

アークは倒れる俺にトドメを刺すことなく、意識を失い倒れた迅を抱えて倒れる俺に背を向けた。利用価値……十二年以上前に滅が同じような理由を口にして俺を生かした時があつたが……お前らの言う『俺の利用価値』つてのは一体何なんだ……?

「ー待てッ! アーク……! お前は、何でッ……何でッ! 人類滅亡なんて結論に至った!」

「……………」

走る痛みも、流れる血も構わず俺はその背に叫ぶ。衛星アークの存在を知ってから、ずっと抱いていた最大の疑問。それをぶつけなければアークは足を止め、

「——その答えが知りたいのなら、私ではなくあの男——天津垓に直接聞けばいい」

「——振り向いてそう口にし、それを最後にアークとアークが抱える迅は赤黒いノイズに包まれその場から姿を消す。」

「!? ーぐッ……がはッ……!」

そして、俺はアークが姿を消した直後に更に吐血。周りに倒れるAIMSの隊員さん達と同じく……いや、それ以上に酷い状態で倒れる。

——力尽きて意識を失う直前。

——誰かの呼ぶ声が聞こえた。

## ワタシがアークの生みの親

「……………は………」

目を覚めた俺が居たのは、随分見慣れてしまった病室のベッドの上。

いや病室を見慣れるとか重い病氣患つてる患者とかじゃない限りおかしいんだけどな？ ……体がズキズキと痛む。特にアイツの蹴りを受けた腹の痛みは尋常じゃねえ……。

「目が覚めましたか。やはり君は頑丈ですね——太陽君」

「……………天津さん……………」

聞こえた声にそちらを向けば、ベッドの横に置かれた椅子に座る天津さんの姿があった。

「君に連絡がつかなくなつた時は焦りましたが、無事で何よりですよ。君の妹さんも見舞いに来ています、今ちょうど君の主治医の元に行かれましたよ」

「そんなんですか……え、無事？ こ、これって無事ですかね!？」

俺病院送りにされたんですけど？ それを無事？ ……まあ痛みはあるけど自由に身動きできるから……



(……………まあ無事か、うん)

間違はなく無事だな！(感覚麻痺)

天津さんの発言に納得した俺は天津さんに起きてすぐ報告した。迅との戦闘、そして【アークの復活】を。

「……………真面目な話始める前にちよつといいですか？」

「はい？　なんででしょう？」

「頬赤いですけど……………どうしたんです？　それ」

実はさつきから気になってたんだ。天津さんの左頬にある赤い紅葉みたいな模様が……………。

「……………察してください、太陽君」

「……………大体わかりました。すみません、家の妹が……………」

「いえ、実に真つ当な行動だと私自身納得しているので……………気にしないで構いませんよ」

△△△

「——やはり、アークは復活しましたか……………」

「悔しいですけど……………正直、俺じや歯が立ちませんでした」

「……………これは早急に何か策を講じる必要がありますね……………」

アークの力は規格外のものだった。

俺よりも遥かに上の力を持っていた。

(人類滅亡……あれだけの力を持つてるんだ。このまま行けば、それは間違いなく現実のものになる……)

どうにかして、あいつを止めねえと……。

方法は今はまださっぱり思いつかない。

……本音を言えば俺はアークの力に確かな恐怖を感じてる。放り出したいという気持ちも少なからずある。相変わらず戦うことは嫌いだし、痛いのも大嫌いだ。

(……絶対に止めてやる)

だけど、ここでビビって逃げる訳にはいかない。このまま負けて終わるなんてゴメンだし、何より俺が守りたいみんなの『未来』を勝手に諦める訳にはいかないんだよ。

でも、その前に、

『——その答えが知りたいのなら、私ではなくあの男——天津垓に直接聞けばいい』

「……天津さん、すいません」

俺はどうしても天津さんに聞かなきゃいけないことがある。今まで怖くて聞けなかったこと。今まで覚悟ができず聞けなかったこと。今まで肝心なとこでヘタれて聞けなかったこと。

「? どうしましたか? 太陽君」

これは俺が衛星アークについてやけに詳しくった天津さんと、アークの言葉を元に勝手に導き出した推論でしかないが……

「——答えてくれ、天津さん」

「——」

「あんたは衛星アークの開発に関わっていたのか?」

「……………ええ、関わってましたよ。そもそも——」

天津さんは俺の問いに少しばかり沈黙した後、真剣な表情で口にした。

「——アークを生み出したのは私です」

「アーク……………! お前は、俺が止めてみせるっ!」

「人類を滅亡させる。私が導き出した結論は変わらない。そして——この結論が覆ることとは決していない」

或人は震える足で一步前が出る。そして、アークドライブバーゼロを装着した迅と対峙する。

【ゼロワンドライバー！】

『Everybodyジャンプ！』

【オーソライズ！】

取り出したゼロワンドライバーを装着し、右手に持ったメタルクラスタホッパープログライズキーのボタンを押してドライバースキップにスキップ。

【プログラムイズ！】

「——変身っ！」

『メタルライズ！』

流れるような動きでプログラムライズキーを装填。

続けて左手を前に出して構えをとり、変身と言いプログラムライズキーを右手で素早く折りたたんだ。

【Secret material 飛電メタル！】

『メタルクラスタホッパー！』

【It's High Quality.】

瞬間、銀色のバツタの群れのライダモデルが現れ、或人の身体全体に纏わり付くように動きアーマーを構築し、メタルクラスタホッパーに変身した。

「ーはああああっ!!」

変身直後にアークに接近し、その手に持ったプログライズホップパーブレードで切り掛かる或人。

「アークっ！ お前を止められるのはただ一人、俺だッ！」

「いいや、私を止められる者はいない……誰一人」

「メタルライジング インパクト！」

「オールエクステインクション！」

ゼロワンとアーク。二人の戦いが始まった。

「天津さん、兄にいの様子は……って、あれっ？」

太陽の主治医から話を聞き、病室に戻ってきた美月は首を傾げ室内を見渡す。

「兄にい……？ ……天津さんも居ないし……」

病室を出て廊下にも目を向けるが二人の姿はどこにもなかった。

「太陽君、その体で無理に動くのはお勧めしませんよ？ 悪いことは言いませんから今

すぐ病院に――」

「――天津さん」

病院からかなり離れた人気の無い廃工場……そこはいつかワズと共に逃げ込んだあの場所。目的地に辿り着いた俺は足を止め、後をつけてきていた天津さんへと振り返る。

俺は天津さんの口から全ての真相を聞いた。

衛星アークに悪意をラーニングさせたこと。

それにより「デイブレイク」が起こったこと。

その動機も、全て。

「あんたがやったことは、そう易々と許されることじゃない。自分の利益の為に動いた……自分勝手なあんたのせいで大勢の人があの日、人生を狂わされた」

あの日、デイブレイクにより大勢の人が死んだ。大勢の人の人生が狂わされた。

「それに……一番の問題は別にある」

「……………」

「それは、あんた自身が自分がやったことを『罪』だなんて微塵も思っていないことだ」

天津さんは自分自身が罪を犯したただなんて微塵も思っていない。それに、後悔もしていないのだろう。

「ええ、君の言う通りです。私は私自身のしたことを『罪』だなんて思ってもいない。私  
はただ私の利益の為に動いただけですから」

悪びれる様子なく天津さんは言う。

アークに悪意をラーニングさせ、滅亡迅雷を作らせ、それを利用してレイドライザー  
を兵器として売ろうとした……俺が知らないだけで他にも天津さんは罪を重ねてい  
るに違いない。

「どうしますか？　ここで私に復讐しますか？」

「……………」

「それもいいでしょう。デイブレイクの被害者である君にはそれをする資格がある」

……どうやら、天津さんは本気でそう思ってるらしい。復讐する資格なんて俺にある  
わけがないし、つうかな資格いらねえよ。そもそも話、俺個人は真実を知った今も  
天津さんをおかしなことに憎んでいなかった。いや、憎もうにも憎めないと言ったほう  
が正しいかもしれない。

「復讐なんてするわけないでしょ……ただー」

（正直、どうすりゃいいのかなんて俺にもわかんねえ）

復讐をしないなら何をするんだ？　天津さんが隠していた何かを隠していることを

薄々察してはいたが、それが予想以上のもので……俺は混乱していた。自分でも自分がどうしたいのか、自分の心がよく分からなくなっていた。

「……天津さん、俺と今ここで戦ってくれ」

【シヨットライザー！】

混乱する中、俺がとつた行動は『戦う』ことだった。懐からシヨットライザーが取り付けられたバックルとベルトを取り出し、勢いよく腰に巻き付け天津さんを見据える。

「……いいでしょう。君とは遅かれ早かれ、いつか戦うことになるだろうと私も覚悟はしていましたから」

【サウザンドライバー！】

天津さんは俺の意図を一切聞くことなく、取り出したサウザンドライバーを装着。

【ゼツメツ！ Evolution！】

続けて右手に持ったゼツメライズキーをクルリと回しドライバーの右側にあるゼツメライズスロットに装填すれば直後、アルシノイテリウムのライダモデルが現れ天津さんの周りを駆ける。

【ストロング！】

【ブレイクホーン！】

【オーソライズ！】



俺たちはほぼ同時にプログライズキーのボタンを押す。

俺はプログライズキーをショットライザーに装填して展開。

天津さんは展開されたプログライズキーを持ちながら両手を横に動かす。そして、

〔Kamen Rider. Kamen Rider.〕

「——変身……!」

〔ショットライズ!〕

〔パーフェクトライズ!〕

俺はバツクルから引き抜いたショットライザーのトリガーを押し、天津さんはプログライズキーをドライバの右側にあるライズスロットに装填し、

「——おらあッ!」

『アメイジングヘラクレス!』

〔With mighty horn like pincers that flip the opponent helpless.〕

『When the five horns cross, the golden soldier THouser is born.』

〔Presented by ZAI.A.〕

瞬間、ショットライザーから放たれた弾丸はアルシノイテリウムのライダモデルに弾

かれーそれに俺はアツパーを打ち込み、垓は現れたコーカサスのライダーモデルとアルシノイテリウムのライダーモデル、二体を纏いー最後に五本の角が交わる。

「行くぞ……最初から全力で行かせてもらおう」

「ええ、私も1000%全力でやらせてもらいましよう」

——仮面ライダーバルデル。

——仮面ライダーサウザー。

変身を果たした俺と天津さんは駆け出し、手始めに互いに右拳を全力で振るう。

ゼロワンとアークが戦っているその裏——

——今、バルデルとサウザーの戦いの火蓋が切られた。

## カレの選択が分岐点

『失礼』

『すいません。部屋間違ってますか？』

「デイブレイクに巻き込まれ、搬送先の病院で入院していた俺と天津さんとのあの最も最初の出会い。間違いなくあれが——デイブレイク被害者が仮面ライダーになる話の始まりだったのだろう。」

「気付けば随分と長い間、俺は仮面ライダーとして戦っている。何度も死にかけてたが何とか生きている……いや、本当ならあの日の滅との一騎打ちで俺は死んでいた筈だ。」

「だけど、他の誰でもない天津さんがそんな俺を助けてくれた。」

「俺は天津垓という人間に多大な借りがある。」

「マジアの撃破、戦闘データの提供などによって得られる報酬。そして、何よりも俺の回復を信じ、俺の命を十二年以上繋いでくれたこと。」

「——恩返しをしたい。」

「俺が回復してから今まで、天津さんに引き続き協力していた一番の理由はそれだった。」

なあ、天津さん。

俺は一体、あんたに何をしてやれるんだ？

「ーおりやああつ！」

「くっ……！」

俺は最初から全力で、拳での猛攻撃を天津さんーサウザーに仕掛ける。サウザーは防御の態勢をとるが「それがどうした？」とお構いなくパンチを連続で叩きつけ純粹なパワーで押していく。

「ふっ、流石ですね太陽君……スペック差があるにも関わらずそれを全く感じさせない戦い振りだ。ですがー」

後ろに飛び退き距離をとったサウザーは俺に称賛を送り、金色の武器を手を取った。

【サウザンドジャツカー！】

「この力は、君の力を更に強化・進化させたもの……ならば、私が君に負ける事は100%ありえない……！」

サウザンドジャツカーを構え、再び接近戦に挑むサウザーはサウザンドジャツカーを上段から振り下ろす。

「ツ……!!」

「甘いっ!」

「かはっ!?!」

それを俺は両手で受け止め防ぐが鋭い蹴りを受けて怯む。サウザーはそんな俺に油断なくサウザンドジャツカーによる突き、追撃を噛まし俺は地面を転がった。

「っ……ンなら、こっちも武器だ!」

【アタツシユシヨットガン!】

「そらそらアアー!!」

「っ!」

立ち上がるのと同時にアタツシユシヨットガンを取り出し、サウザーへ銃口を向けトリガーに手を掛け散弾を連射しながら俺は駆け出す。

「うぐツ……!?!」

【チャージライズ!】

「ーぶっ飛びやがれ!」

サウザーは冷静にサウザンドジャツカーを盾に弾丸を防ぎ、散弾を連射しながら距離を詰めた俺はギリギリでアタツシユシヨットガンを素早く閉じアタツシユモードに変えーそれを展開せずそのまま武器にして殴り掛かった。

「がッーぐがっ!？」

それをサウザンドジャツッカーで受け止めようとするサウザーだが、受け止めきれずに押し負け後ろに吹き飛ぶ。だが、サウザーは辛うじて受け身をとり地面に倒れる事なく着地する。そして、

【ジャツクライズ!】

「はああー……」

【ジャツキングブレイク!】

「ーハアアアアッ!!」

【ザイアエンタープライズ】

反撃とばかりにサウザンドジャツッカーのグリップエンドを引き、更にトリガーを引いて必殺技を発動する。瞬間、巨大な狼の頭部のようなライダモデルが出現し追尾弾のように俺目掛けて放たれた。

「素直に食らってたまるかよっ!」

『シザーズ!』

【Progress key confirmed. Ready to utilize z.e.】

『スタツグビートルズアビリティ!』

「ーおらあああッ!!」

【エキサイティング グ カバン バスター!】

それに対し、俺はオレンジ色のクワガタのプログライズキーを取り出してアタツシユショットガンに装填し、アタツシユショットガンを展開。トリガーを引いて迎え撃つ。

ーJACKING BREAK

・? Z A I A エンタープライズ

ン

グ カバン バスター

「がはっ……!」

「ぐはっ……!」

アタツシユショットガンの銃口にチャージされたオレンジ色のエネルギーは放たれ

た瞬間、クワガタ特有の大顎のような形のライダモデルになりサウザーの放つ狼の頭部のライダモデルを挟み爆発する。

その余波により俺とサウザーは互いに後ろに吹き飛び、サウザーは地面を転がり、俺は背中を壁にぶつけ地面に片膝をつく。

(予想以上に手強いっ……！)

俺の力を強化・進化させた力……か。いや、前に滅と戦った後に社長室で天津さんから聞いて知ってはいたが……人に無断で何作ってんだこの人？

(つうか俺の力なんかより強化・進化させるに最適なヤツいたろ……)

なんて疑問を一瞬抱くが、すぐにそんな無駄な思考を止めて俺は何とか立ち上がり右手をバツクルに装填したショットライザーに置き、

【ストロング！】

「天津さん——あんたを、倒すっ！」

【アメイジングプラスチックファイバー！】

ショットライザーに装填されたプログライズキーのボタンを押す。

「いいや、勝つのは1000%私だっ！」

【サウザンド デストラクション！】

また、サウザーは俺の必殺技に対抗するべくドライバーに装填されたプログライズ



キーを力強く押し込んだ。

「——はあッ!!」

「——ふッ!!」

そして、互いに駆け出し高く跳び蹴りの構えをとり——放たれる二つの必殺技<sup>ライダーキック</sup>。俺の右足に収束していた黄緑色のエネルギーとサウザーの右足に収束していた金色のエネルギーが激突し、

ブラスト フィーバー

「——どらあああッ!!」

——THOUSAND——

——DESTRUCTION——

「——はああああッ!!」

ー二つのエネルギーが勢いよく爆ぜた。

「何っ!? ぐはッ……!!」

「はあ、くっ、うぐッ……!」

それによりサウザーは空中でバランスを崩し地面に倒れる。対して俺はふらつきながらも何とか着地に成功する。予想以上の威力により互いのアーマーから激しく火花が散り、互いに苦悶の声を漏らす。がまだ変身は解除されていない。

——まだ勝負はついていない。

理解した瞬間、双方の次の動きは早かった。

「これで、決めてやるッ……!」

『ストロング!』

痛みの走る手でショットライザーに装填したプログライズキーのボタンを押す。

「まさかサウザーが押し負けるとは……。君はまだ万全な状態ではない筈ですが……。やはり君は『例外』ですね」

『アメイジングホーン!』

【P r o g r e s s   k e y   c o n f i r m e d .   R e a d y   t o   b r e a k .】

「ならば……。サウザーが持つ最大威力の必殺技を見るがいいっ!」

【サウザンドライズ！】

サウザーはドライバーから引き抜いたプログライズキーのボタンを押し、プログライズキーを閉じてサウザンドジャツカーに装填。闘争心を更に燃え上がらせ、素早くグリッPEndを引き構える。

【アメイジングブラスト！】

【サウザンドブレイク！】

次々とサウザーの元に出現し襲い掛かるライダモデル。

放たれる巨大かつヘラクレスの角のように鋭利な弾丸。

「——ハアアアアアッ!!」

そして、勝負が決する。

「うっ、うう……ぐッ……!」

「はあ、はあ……どうやら、勝負あつたようですね…」

片膝をつき息を整えた核は変身が強制解除され、地に倒れた友——太陽を見て口を開く。

勝負の結果、勝ったのは天津垓サウザイだった。

「アークとの戦闘によるダメージが完治し、君の状態が万全だったのであれば結果はまた違ったかもしれませんが……」

天津垓サウザイと天本太陽バルデル。

始まる前から分かりきっていた事実ではあるが、この勝負には太陽側に大きなハンデがあった。

一つは純粋なスペックの差。

原型とも言えるバルデルと、そのバルデルのデータを利用し強化・進化したサウザーの間には明確な開きがあった。そして、一番のハンデは太陽がサウザーとの戦闘前に負ったアークとの戦闘によるダメージだ。

（戦闘経験なら間違いなく私は負けていた……仮面ライダーとしてのポテンシャルも）

ドライバーの左右からプログライズキーとゼツメライズキーを引き抜き、変身を解除した垓は冷静に考える。天本太陽の強さはスペックの差などものともしない『例外』に違いない。

「太陽君、立てますか？」

倒れる太陽へと歩み寄り手を差し伸べる垓。

「……天津さん、一つ教えてくれ」

「……何でしょう?」

しかし、顔を上げた太陽はその手を掴まず真つ直ぐ垓を見据え聞く。

「どこまでだ?」

「……」

「どこまでがあんたの思惑通りだ?」

それは垓からデイブレイクの真相を聞いた太陽が、思わずにはいられなかった最大の疑問だった。

「……まず、最初に言っておきましょう。病室で初めて君と会った日。それ以前、私は君の存在を知りませんでした」

「……」

「あの日、私はデイブレイクの被害に遭った人間の中から『仮面ライダー』に変身しマガリアと戦い、戦闘データの提供をしてくれるような者を探していました」

垓は太陽の疑問に答えるべく、あの日のことを思い出しながら語り始めた。

「デイブレイクにより暴走したヒューマガリアに襲われ、ヒューマガリアに対して強い憎しみを抱いている……そんな人間が私の考える理想でした」

だからあの時の君は私の理想とは真逆の人間でした、と垓は続ける。

「落胆しましたが、同時に興味が湧きました。ヒューマガリアに襲われたにも関わらず、

ヒューマギアを憎むことなく飛電是之助の夢に期待し続ける人間……そんな者が仮面ライダーとして戦ったらどうなるのか」

初めて太陽と出会った頃は、太陽本人の言葉を聞く前から「ヒューマギアを憎んでいるだろう」と勝手に思い込んでいた。しかし、実際は全く違った。ヒューマギアに襲われたにも関わらず、多少嫌いにはなったが憎んではない……ヒューマギアを作った張本人である飛電是之助の夢を信じる。当時、太陽本人に言った通り頃は太陽の考えが理解できなかった。

「君にドライバーを与え、私は君を仮面ライダーに選んだ」

「……」

「最初は君のことをマギアにプログライズキー、ショットライザーのデータ収集……Z A I A 延いては私の利益の為の『道具』だと思っていました。ですが……」

「……長い時間を共にし協力する中で頃のその思いは変化した。」

「……戦うことへの恐怖を感じながらも、仮面ライダーとして一人で戦う君の姿に、思い、強さに……私はいつしか、憧れを抱いていた」

「……天津さん……」

「だからでしょうね。本来なら、君を最後まで『道具』として使い潰す予定だったにも関わらず……私は君にフォースライザーを与えた」

「……ひついでえなあ、使い潰すつて」

「ええ、当然の感想ですな」

元々の計画では、天本バルデル太陽を滅の人類滅亡計画を先送りさせる為の英雄どうぐにするつもりだった。変身者の生死は問わない。ただ滅に甚大なダメージを与え、計画を先送りしてくればそれでいい。太陽の戦闘能力ならそれが可能だと、彼は確信していた。

だが同時にその場合、太陽の生存確率が極めて低いことも分かっていた。デイブレイクを生き延びた彼であつても、ショットライザー……それも変身に負荷のかかる試作品では……

「君にフォースライザーを与えた理由……あの時、私は自分の行動を納得させるように『借りがあるから』などとそれらしい理由を考え出しました」

「……………」

「ですが本当の理由は至極単純です。」

「……私は君に生きて欲しかった」

あの時、彼は太陽にフォースライザーを渡すつもりなど毛頭なかった。それは天本バルデル太陽ならば、たとえ試作品のショットライザーだろうとも、その強靱な精神こころ力ちからを持つてあの滅に有効打を与えると確信していたから……気付かぬ内に、彼は彼を信頼していたからに他ならない。

「くっ……っ……俺は、どうすりゃ……!」

「……」

「……どうすりゃいいんだよっ!」

「……私は、今も変わらず君の協力を求めています。……自分で口にして、馬鹿なことを言っているとは自覚はしていますかね」

「……咳はそう言う自分でも「らしくない」と思いながら自嘲の笑みをふつと浮かべ、倒れる太陽に背を向けた。」

「……強制はしません。どのような選択は取るかは、君の自由です」

「……それでは、と最後に言い咳は歩き去る。」

「何だよそれっ……待て……待てよ……! 天津さんッ!!」

「……そんな咳の背に太陽の叫び声が掛かるが、咳は振り返ることなく歩を進める。彼はもう自分自身では止まれない場所まで至ってしまったのだ。」

「……」



少しの時間が経った後。

立ち上がり、廃工場を出ればちようど雨が降り始めていた。

(……なあ、飛電さん、ワズ——)

あてもなく雨に打たれながら歩き出す。もう居ない、あの二人を思い浮かべ空を見上げた。

「——俺は、一体どうすれば……っ……」

頼むから、教えてくれよ。

天津さんに今まで通り協力するか、否か。

わかっている、わかっているんだ。

天津さんは間違っている。

天津さんのやっていることは正しくない。

なら俺が取るべき選択最善は……

(……壊したく……ねえなあ……)

デイブレイクに遭った俺が「天津塚」を許すなんて馬鹿げてる。許すべきじゃない。恨んで、憎んで、怒りを覚えるべきなんだ。でも、俺は……この関係を壊したくない。

「もう、わかんねえよ」

できることなら、天津さんとこれまで通り、今まで通りの関係で居たいと思っ

まっている。仲間として。友達として。これからも……

天津さんの間違いを正す。

それが正しいことなのはわかってる。

だけど、それをしてしまえば……きつと……

(……………あ……………?)

さつきまで感じていた体に打ち付ける雨の冷たさが唐突に消え、内心首を傾げる。雨が止んだ？ いや雨の音は変わらず聞こえている。じゃあ何で……………と空を見上げれば、そこには透明な布……………ビニール傘が差されていた。

「——何がわかんねえんだ？ 青年ルックスのアラサー息子っ！」

「?! 痛いたった……………！」

それに気付いた途端、背中を勢いよく傘を差してくれていた「誰か」に叩かれる。意識を現実に戻すようなその一撃に思わず声を上げてしまう。

「いきなり何すんだよッ…?! つ！」

すぐに振り返り相手を非難しようとした俺は驚いて目を僅かに見開き、相手の名を呼

んだ。

「こんなところで何してんだよ——父さん……」

「それは完全にこつちの台詞だぞ。太陽」

雨の中、傘ささないと風邪ひいちまうぞ？

俺の父だった。

と言つて和かに笑う「誰か」はまさかの

## バルデルの選択

「あちっ……！」

「ほら、あつたかい内に食べちゃいな」

「……うす」

家族で……しかも男同士で暫く相合傘をしながら歩いた俺たちは今、どこにでもあるコンビニ前で雨宿りしている。すれ違う何人かの人から奇異の目で見られちまったよ……ちくせう！

ふわっと投げ渡された肉まんを両手でキャッチした俺はゆつくりと食べ始める。俺が食べ始めるのを見て、父さんもまた俺と同じように買ってきた肉まんを食べた。

「……父さん、今日仕事だったの？」

「おう、まあな」

「そう……」

うん、無性に気まずい……！（冷や汗）

何だ、何なんだこの展開はっ!?

おい誰だよ、天津天津さんと戦って負けて色々あつて消沈してるところで家族とばったり会うなんてシナリオ書いたやつは!?

……えっ? 人生にシナリオなんざない? 正論すぎて何も言えねえぜ……

「……あー……じゃあ父さんは帰り? 帰りの途中でたまたま?」

「おう。残業でくたくたになつてた帰りにな。前見たら雨の中で、傘も持たずに歩いている愛しの息子の後ろ姿が見えたから声を掛けたわけだ」

おう。そこまでは理解できるわ。

けどさ、背中を勢いよく叩く必要あつた? あつたか? ないよな? はっ? 愛情

表現? ざけんんなんな暴力でしか伝えられない愛情なんざいらねえんだよボケがっ!

(半ギレ暴言)

『『愛』て……言つてて恥ずかしくない? 俺32のアラサーよ?』

………実のところ、俺はこの人が苦手だ。

いつもテンション高いし、声でかいし、ナチュラルにカツケエし、なんか距離感が「親子」というより「友達」だし。

「バーカ、愛するのに歳なんざ関係ねえよ」

「……さいですか」

特にこう色々とストレートな部分が、俺とは全然違う人種というか……いや親子なんだ

けどな？ 父さんからそつぽを向き俺はまた肉まんにかぶりつく。

「どうした、照れたか？」

「照れてねえよ」

そつぽを向いた俺を見て笑いながら父さんは言う。いや父親の言葉に照れる息子なんざ希少すぎるわ。……というか前々から思っていたけども、

「父さん、今何歳だっけ……？」

「んー、今年で56歳だな！」

「いや、おかしいだろ」

「え、何が？」

「高過ぎるテンションと若過ぎるルックス」

56歳……の筈なんだが、まずルックスがおかしい。何がおかしいって言動からもわかるだろうけど……この人めちやくちや若々しいのよ。テンションもルックスもどう見てもアラフィフのそれじゃない。ぱつと見ただけ年齢を高く見積もっても30代前半ぐらいなんだよ……これ普通に考えてホラーだろ？ ……今更だけど、もしかして俺の見た目が若々しいのって……

「若過ぎるルックス……それお前が言うか？」

「……………」

父さん、冷静にツツコミ入れてくんのやめてくんない？

「じゃあ次はこつちが聞いていいか？」

聞かないでください（切実）

父さんの言葉に俺はそう言いたかったがまあ言える筈もない。

「……………」

「太陽、お前昨日入院したばっかじゃなかったか？ ……もしかしてもう退院したのか  
!？」

「んなわけないでしょうがっ!? バカかあんた!？」

一日で退院できるとかそれもう入院する必要ないだろお!? つうかもし仮に一日で  
退院したらソイツ化け物じゃん。

「ちよつと気分転換に……………」

「病院抜け出してきたのか？」

「…これに関してはマジで申し訳な—」

「—まあそんな話はどうでもいい！」

(マジでなんなんこの人……?)

そんな話はどうでもいいって聞いてきたのそっちじゃねーか!と内心思うだけでは出さない。口に出したら話長くなりそうだし、何より面倒くさくなりそうだからな。

「何か悩んでんだろ?」

「……………別に、何も」

「んなわつかりやすい嘘ついてないで。ほらほら、遠慮なく父さんに悩み打ち明けてみな?」

「いや、本当に……………余計なお世話だから」

余計なお世話、そんな思ってもない言葉を口にした俺は食べ終わった肉まんの包紙をゴミ箱に放り捨てる。そして「ご馳走さん」とだけ告げて歩き去ろうとし、

「……なあ太陽。父さん……お前に父親らしいこと全然してやれたことなかったよな」

「……………急にどうしたの?」

——父さんらしくない、弱々しく聞こえる声に俺は思わず足を止めて振り返った。

「前までは考えることもなかったんだけどな……………お前が意識不明の重体で、何十年近くも眠ってる間に……つい考えるようになったんだ。『そういえば俺、コイツに父親らしいこと全くとやれてねえわ』ってな」



「……………」

手すりに両腕を置いて話す父さんの横顔はどこか寂しげで……

「その時はめちやくちや後悔したよ。こんなことになるなら、もつと……父親らしいこととしてやるんだつたつてさ」

「父さん……」

「……だから、また後悔する前に、一度ぐらいは父親らしいことしとかなくちやなと思つてな。……なあ太陽——」

——たまには父さんにも父親らしいことさせてくれないか？

「——ここで話すのも何だし……場所、変えるよ」

俺には父さんのその優しさを無碍にすることはできなかつた。

---

誰も居ない夜の公園。そこに置かれた二つのブランコを椅子替わりに、俺と父さんは

顔を合わせることもなく話す。雨はまだ降っていたから、傘を差したまま。

天津さんの名前や仮面ライダーの存在については話に出さず、友達だと思っていた相手の「罪」……協力するか敵対か、はたまた中立か。俺は父さんに悩みを打ち明けた。

「ーなるほどな。友達と喧嘩しちゃったわけか」

「……まあ友達っていつても、そう思ってたのは俺だけだったかもしないけどね」

父さんのその台詞に俺は苦笑する。俺と天津さんは友達だったのだろうか？

……情けない話、自信はない。

「どうすればいいのかな？ 俺は」

「お前は どうしたいんだ？」

それが一番大事だろ？ と言う父さん。

俺は……どうしたいんだろうか？

天津さんに罪を償わせたい？

天津さんを倒したい？

ー否、違う。

そんなことをしたいんじゃない。

「……我儘かもしれないけど」

「うん」

「俺はただ……今まで通りでいたかった」

まあ、それはもう無理な話だ。

——恨んでもいない。

——憎んでもいない。

でも、天津さんの罪を知ってしまった今、今まで通りの関係で居られる筈もない。形だけなら「今まで通り」を装うことはいくらでもできる……だけどそれは嘘だ。偽物だ。

(本当……情けないな、俺ってヤツは……)

本当に俺はどうしようもない「小心者」だ。

「太陽」

「？」

「お前、ちよつと真面目過ぎないか？」

「……ま、真面目？　え、何その冗談？」

その言葉に隣のブランコに座る父さんの方を向き、困惑した俺は首を傾げる。何も面白くない冗談だな？　と思いつながら。

「冗談じゃねーよ」

俺の反応を見て父さんは笑う。

「お前は自覚してないのかもじゃないが、お前の性格はバカみたいに真面目だ。何で俺と母さんの間にこんな性格の子が生まれたんだ？　ってマジで不思議に思うぐらいにはな」

「……例えば？　俺のどこが真面目なんだよ？」

「んー、どんな小さな事でも本気で悩んだりするとこ。今みたいにな」

「……他には？」

あの、今悩んでるのは俺的には全く「小さな事」じゃないんですけど……と思いつつ俺は父さんに聞く。

「口では文句言いつつもやる事きちんとやったり、責任感強かったりするところ」

「……んー……」

真面目……俺が？　確かに自分で言うのも何だけど「常識的」だとは思う。THE自由人の父さんと母さんに比べれば行動とか思考とかさ。まあ一般人だから当然なんだが……何？　お前仮面ライダーだろって？　じよ、常識的な仮面ライダーだっていいだろウ！

腕を組みながら暫し考える俺を見て「それだよそれ」と父さんは愉快そうに言う。おまつ、息子が割と真剣に悩んでんの見て何笑ってやがんの?!

「そんな難しく考えることないんだよ。友達と今まで通り仲良くしたい？ だったらパッと仲直りしちまえばいいだけだろ」

「い、いや……んな単純にどうにかなる問題じゃないっていうか……」

「いいや単純だね！ お前がもうちよい我儘に、積極的に行動しちまえばすぐに解決できてる」

なんてつたつて俺の息子だからな！

父さんはそう自信満々に断言する。

「はあ……俺が我儘に、積極的に動いて……それでホントにどうにかなると思う？」

「なるさ。お前が本気で望んで、お前が本気で気持ちを相手にぶつければ」

……何の根拠もない言葉だ。

「父さんつてさ……」

「ん？」

「無責任に人に自信持たせるの上手いよね」

「……それは褒めてんのか？」

でも、ほんの少しだけ楽になった気がする。

まあ気のせいかもしれないけども。

「ありがと。ちよつと、本気で我儘にやってみるわ」

「おう。その意気だ！」

ブランコから立ち上がり空を見上げる。

——雨はもう止んでいた。

『——そして、彼はこの数ヶ月以上もの間、暴走したヒューマギアから人々を守る為。仮面ライダーとして戦う毎日を送っていました……そして、彼に仮面ライダーの力を与え、戦うよう促したのは間違いなく私です』

Z A I A エンタープライズジャパン本社。その社長室にて垓は客人として連れてこられた「ある男」に全てを明かしていた。

『……………そうか。なあ天津社長。甚だ疑問なんだが……何でそれを俺にだけ話したんだ？』

『あの中では、あなたが最も私の話を冷静に聞いてくれると判断したからですよ。……太陽くんのお嬢さんには随分と嫌われましたし、お母さまの方は……その、あまりの自由奔放さに……』

『あー……皆まで言うな。あいつの自由奔放さじゃ、こういった真面目な話をするのはキツイと思う気持ちはよく分かる』

垓の説明にある程度納得した男は、テーブルに置かれたカップに入った紅茶を一口飲

んで口を開く。

『——で？　これから、あいつの意識が回復して……目を覚ましたら、あんたはまた太陽を戦わせるのか？』

『……………』

『あー別に、バカ息子が戦うことに関してあんたにどうこう言うつもりはねえよ。あいつが戦ってるのは、あいつの意思もあるだろうしな』

自分の息子が目覚めない筈がない、そんな絶対の自信を持つて男は語る。

『うちの教育方針は「好きにしろ」でな。いつだって、あいつらの自由な意思を大事にしたいと思ってる』

なのにあのバカ息子といたら……と何かを思い出す男。その教育方針を聞いた垓は自身の「父親」の教えをふと思ひ出して零す。

『…………それは、実に素晴らしい教育方針かと』

『あはは、んな下手くそな世辞はいらねえよ。なあ天津社長。いいや——天津垓』  
垓の心底からの本音を本気にせず、男は垓を見据えて告げた。

『お前の過去も、悪事も、思惑もどうだっていい』

『だけど、もしお前があいつの——太陽の意思を悪用するんなら話は別だ』

『——俺はお前を絶対に許さない。覚えておけ』

（お前ももっと、我儘になっていいんだよ）

息子の「今まで」を思い出した男は心からそう思った。お前ももっと我儘になって、幸せになっていいんだと。まあ本人がこれを聞けば呆れた顔をして「いやもう十分幸せだし」と言うのは明白だが。

「——頑張れよ、太陽」

歩き去っていく息子の背中を見送りながら、ある男——父は優しく呟いた。



## オレは1000%アンタの友達

「——友達など必要無い」

ふざけたことを抜かすA-Iに垓は我慢できずにそう言った。

途端、ふと頭に彼の姿が思い浮かんだ。私は彼をどう思っていたのだろうか？

……まさか「友達」？

『垓さんに、友達は居なかったの？ 本当はすぐ近くに居たんじやないの？』

「二度も同じことを言わせるな。私に友達など居ない、友達など必要無い」

(馬鹿らしい……私に、彼の友達になる資格などあるはずも無い)

「天本太陽」と私は友達ではない。なれる筈もない。それは垓自身が最もよく分かっていることだった。

「甘えず、頼らず、己自身の力だけでやり遂げる……子供の頃に教わった父の教えに従って私は今日まで生きてきた」

どんな敵を前にしても誰にも甘えず、誰にも頼らず、己の力で勝<sup>や</sup>つて<sup>り</sup>み<sup>遂</sup>せる。

(そうだ。だからこそ私は、彼に心の底から憧れた)

「私は、あの時から自分以外のものに——」

「頼ったことはない、そう続けようとしたのに……垓にはそう言い切ることができなかった。垓はいつの間にか太陽を心から信頼していたのだから。」

（自分以外のものに頼らず生きていく、あの日にそう誓ったはずなのに……私は……いつからか、自分以外のものに頼ってしまっていた……）

『——衛星ゼアからの命令を受信』

「！」

その時、飛電インテリジェンスの社長室にあるラボ。そこに設置されていた多次元プリンターが突如起動する。「ありえない」と思った。垓が飛電インテリジェンスを買収したあの日から、何をしてもし一度として起動しなかった筈なのに……。

『——構築を完了しました』

「なんだ……？」

垓は引き寄せられるように多次元プリンターへと近付き、目を見開いて驚愕した。

「……さうぎ……？」

開いた扉の先にはもう二度と見る事はないと思っていたロボット……「さうぎ」によく似たAI犬がいた。何故ゼアがこんなものを……？と疑問を抱きながら垓がゆつくりと手を出せば、AI犬は嬉しそうにその手に頭をこすりつける。

それを見て垓は確信した。このAI犬は子供の頃、孤独だった自分の心に寄り添って

くれた「家族」に等しい存在だったあの「さうぎー」なのだ。  
「……っ……変わってないなあ……」

優しくさうぎーを抱えた垓は、あの時と変わらぬ態度で自分に接するさうぎーの姿に声を僅かに震わせながら呟く。垓は子供だったあの頃から随分と変わってしまった自分自身の今までを回想し、

「こんな私なのに、側にいてくれて……ありがとう……」

心からの感謝を胸に抱いたさうぎーに告げる。零れた涙が頬を伝い流れ……垓は目を閉じる。

『全部、お返しします!』

『天津さん……その笑い方、全っ然似合いませんね……!』

そして、垓が最後に回想したのは「天本太陽」友達……だったかもしれないある男と交わした何の変哲もない会話。

(「ーありがとう、太陽君」)

「ごめんな……さうぎー——」

『? 垓さん……?』

目を開いた垓は腕で涙を拭い、さうぎーをそつと床に置くとラボの階段を上がついていき、

「もう、私は止まれないんだ」

——飛電インテリジェンスの社長室を立ち去った。

——彼の人生を狂わせた。

——彼の力を利用した。

——彼の心を傷つけた。

その時点で咳の中に「止まる」などという選択肢はどこにもなかった。

もしも、彼を止められるものがあるとするならば……それはきつと——

「——変身」

(……………よし、行くかつ)

飛電インテリジェンスに着いた俺は高い高いそのビルを見上げ、改めて気合を入れて歩き出す。天津さんに直接「今どこに居ますか？」と電話で聞くのは昨日の一件の後では気まずい……。

だから、Z A I A エンタープライズジャパンに電話して聞いてみた所、今は飛電インテリジェンスに居るらしい。……つうか一応ちよくちよくZ A I Aには天津さんに呼

ばれて行つてるとはいえ理由も聞かずに一般人の俺からの質問に答えてくれる受付さん……まあ正直もう顔馴染み感はあるけども。

「ようこそ、飛電インテリジエンスへ。天本様、今日はどういったご用件でこちらに？」  
「ああ、えつと……こつちに来てるはずの天津さんに会いに来たんですけど……今どこに居るかつてわかりますかね？」

天津さんが買収し、社長になった飛電インテリジエンスにも何度か来てるから勿論こつちの受付さんとも既に知り合いだ。そのおかげもあつて通常よりもスムーズに話が通る。

「天津社長でしたら、先ほど社長室へと向かわれましたよ」

「社長室……わかりました、教えてくれてありがとうございます」  
「仕事ですから。気にしないでください」

感謝して俺が軽く会釈すれば、受付さんは満点の営業スマイルを見せる。

「天本様、こちらを」

（あ、忘れてた）

「あざっす」

最後に受付さんが手渡してくれたストラップ付きの入館証を受け取り、手早く首に下げた俺は二階への階段を上がっていく。

ーその道中だった。

「いや、本当にとんでもない男でしたね」

「全くだ……よく今まで隠し通せてきたものだ」

(福添さんに山下さん……？ 何の話してんだ?)

社長室がある方の通路から出てきた二人と副社長秘書ヒューマギアのシエスタ。副社長の福添さんと専務取締役の山下さんの会話が気になり、つい足を止めればあちらも俺に気付く。

「おお、これは天本くんじゃないか。今日は何で……あー、予想するに天津『元』社長に会いにきたんだらう?」

「あ、はい。その通りで……つて『元』?」

元社長……?」

……天津さん、飛電インテリジェンスの社長を辞任するのか?とふと考えたが飛電インテリジェンスに謎の執着を持っていた天津さんが自分から飛電の社長という立場を自ら手放すとは思えない。……さては内容はわからないが悪事の一つや二つバレたのか? まあこればかりは因果応報だわな。

「それについては私の口からじゃなく、本人の口から直接聞くといい」

「……わかりました」

俺は「それじゃ」と言つて福添さん達の横を通つて社長室へと向かつた。

「――失礼します……………つて、え？」

社長室に入った俺は啞然とした。

社長室には誰もいなかった。

「天津さん……………一体どこに――」

『――ワン！　ワンワン！』

「え、い、犬つ……………？」

『！　太陽さんつ！』

「！　え、何だ？　今誰か呼んだか…？」

社長室の下に作られているラボを見下ろせば、そこには犬…のような作りのロボットがいた。あとラボの方から名前を呼ばれた。いやどうなつてんだ？　天津さんに会いに来たのに天津さんは居ないし犬型ロボットは居るし、謎の声に名前は呼ばれるし…！

(混乱)

『こつちです!』

「待て待て、とりあえずそつち下りるから」

声の発生源は不明だがラボから聞こえてるのはわかる。それに犬型ロボが気になり過ぎるのでとりま社長室から階段を使いラボに下りる。

(声の発生源つて、もしかしてコレか……?)

「……あのー……俺、天津さんに会いに来たんだけど……」

『太陽さん、突然ですがお願いがあります!』

『ワンワンワン!』

ラボには先程見た通りワンワンと鳴く犬型ロボット。それと黒い作業台の上に……

あ、コレ完全にルンバじゃん!?

「ールンバが喋ったア?!?!」

シヤアベツタアアアアアア!! (幻聴)

え、このフォルム完全にルンバじゃん。小型化したルンバじゃん。え、何でこんなものがラボに放置されてんの? こんなミニママなルンバじゃ全然ゴミ吸い取ってくれなさそうだな。つうかこの犬ロボかわいいなオイ。

『私はルンバじゃなくてアイです! それよりお願いします! 私のお願いを聞いてく



ださい』

(……何でこいつ俺の名前知ってんだ……?)

いきなり情報量の暴力を受けて混乱する俺に喋るルンバことアイちゃんはツツコミを入れる。そのおかげで少しだけ俺も冷静さを取り戻す。ありがとう、助かったぜルン bーじじゃなくてアイちゃん！

「そのお願いつつうのは……」

十中八九……いや1000%天津さん関連だろうな。

「……わかった、聞くよ。でも手短かに頼む」

『ワンワン!』

そう言い俺はアイのお願いを聞いた。……聞いている途中にこの犬ロボめっちゃ俺の足に擦り寄ってくるんだが何だよ可愛すぎかよ!?

---

(……早くアークを止めないとツ!)

或人はアークを止める為にライズホッパーを全速力で飛ばす。アークから受けたダメージはまだ完全には回復していないが、見過ごす訳にはいかない。そんな先を急いでいた時だった。

【サウザンドジャツカー!】

「ー止まっていただきましようか、飛電<sup>ゼロワン</sup>或人」

「!・天津さんっ!?!」

目の前に一本の金色の槍が突き刺さり、或人はライズホッパーのブレーキを素早く踏み急停車する。反動に耐え、顔を上げた或人の前には天津垓ー既に変身しているサウザーが立っていた。

「そこをどいてくださいっ! 早くアークを止めないと!」

「君がアークを止めたいと思うのは勝手ですが、私にも私の目的がある。ですから、私はそれを果たさせて貰いましょう」

或人の叫びに垓はそれだけ言うと、地面に突き刺さったサウザンドジャツカーを抜きライズホッパーに乗る或人に真っ直ぐ向ける。彼は今、個人的な決着をつける為に或人の前に立ち塞がっていた。

「ー私は心の底から許せなかった。青臭い夢ばかり掲げる君を。ヒューマギアを」  
「……俺は絶対にアークを止める」

「そこまでアークを止めたいと言うなら、私を倒していくといい」

サウザンドジャツカーを構えるサウザーを前に或人はライズホッパから降り、

【ゼロワンドライバー！】

「言われなくたってー」

『Everybodyジャンプ！』

【オーソライズ！】

「ーやってやるよっ！」

ー取り出したドライバを腰に当て装着、更に右手に持ったプログライズキーのボタンを押し認証装置に当て、

【プログライズ！】

「ー変身っ！」

『メタルライズ！』

左手を前に出し、素早い動きで装填したプログライズキーを右手で折りー或人はゼロワン メタルクラスタホッパへと変身する。

【Secret material 飛電メタル！】

『メタルクラスタホッパー！』

【It's High Quality.】

「……天津塚……！ あんたを止められるのはただ一人、俺だっ！」

「……君では今の私は1000%止められない」

「……先に動いたのはサウザーだった。」

それでは決着を着けましょう、と言い駆け出したサウザーはサウザンドジャッカーを躊躇いなく全力で振り下ろし、

【プログライズホップパーブレード！】

「くッ……はあああっ!!」

【フィニッシュライズ！】

……その攻撃をプログライズホップパーブレードで防いだゼロワンは、その状態のままトリガーを五度引き刀身に形成された銀色の刃……必殺技を近距離でサウザーに当てようとする。

「はっ……！」

「うぐっ!?!」

しかし、サウザーは冷静に蹴りでゼロワンを怯ませ、その隙に高く跳びくるとバク宙。ゼロワンの背後に着地して必殺技を回避した。

「ー遅いつー！」

「ーくう……?!？」

(今までよりも速いつ…!?)

次にサウザーは以前以上の速い動きでサウザンドジャツカーを振り上げ、それを受けたゼロワンのアーマーから火花が散った。今まで何度も戦ってきたからこそ、ゼロワンはサウザーの強さ……その進化に驚愕する。

「せやあああツ!!」

「っ、そらっ！」

「ぐがッ……！」

ゼロワンはサウザーの気迫に押しされそうになるが、何とか攻撃を往なしてカウンターに背後を全力で斬りつける。更に振り返ったサウザーを右の横蹴りを噛ます。

「つつ……流石に、中々やりますねえ……！」

【ジャツクライズ!】

「ですがー負けるつもりは毛頭ないっ！」

【ジャツキングブレイク!】

蹴りを腕で防ぎ、後ろに僅かに退いたサウザーはサウザンドジャツカーのグリップエンドを引き、トリガーを押しコピーしたデータの一つを放つ。

【ザイエエンタープライズ】

「！ くっ……はあっ！」

サウザーが「ステイングスコープイオン」のデータから出現した刺々しい複数の支管はゼロワンを拘束しようと動き、ゼロワンはそれを武器で捌こうとするが、

「隙だらけだ！」

「ぐはっ!?」

その隙を狙ったサウザーがゼロワンの前に低く速く跳躍し、着地直前にサウザンドジャツカーで突き飛ばす。

「こっちだつて本気で行くっ！」

【ドツキングライズ！】

必殺技を圏に攻撃してきたサウザーに動揺しながらも、立ち上がったゼロワンは取り出したアタツシユカリバーとプログライズホップブレードを合体させ構える。

「ーはあああッ！」

「ーうおおおッ！」

ゼロワンとサウザーは同時に駆けた。

次の瞬間、真つ向から激突し鏢迫り合いになる。そして、

アイのお願いを聞き、飛電インテリジエンスを出た俺は絶賛走っていた。とにかく走っていた。息を切らしながら走っていた。それもこれも俺の遥か先を駆けるあの犬ロボが悪い！（断言）

「はあ…はあ…！ おま、ちよつとスピード落とせよワンコ！ 速過ぎて追いつけねえって！」

『ワンワン！ ワンワン！』

「何だよそのもつと速く走れみてえなりアクションは!?!」

こちとら全力でお前の後追ってるわ！

というかテメエ途中から地面をザザーツて感じで火花散らして滑ってたよなあ？ それ超速いし超危ないからヤメロツテ！

「アイが言ってたが、お前ホントに天津さんの居場所わかって道案内してんだよな？ 今はお前だけが頼りだからな？ マジで信じてるからな!?!」

『ワンワンワン！』

「そつちだなっ!?!」

休憩する暇もなくまた駆け出したワンコの後を追ひ、俺もまた走り出す。一刻も早く天津さんに会わないと……アイの話では天津さんは変身して或人を追つて会社を飛び出して行つたらしいな。

(まずいことになる前に行かねえとな……！)

ワンコのスピードに遅れないよう、俺は前を向いて全力で腕を振るつた。こんな走つたの高校の運動会以来だぜ……！

「はあ、はあ……このっ……！」

「くっ……そろそろ、終わりにしましょう」

【ジャツクライズ！】

【ジャツキングブレイク！】

戦いは進み、倒れるゼロワンにサウザーはそう告げて、容赦なくサウザンドジャツカーのグリップエンドを引きトリガーを押し。

発動させた必殺技は「シャイニングアサルトホッパー」のデータからコピーしたシャ



インシステムー宙に浮く紫色のクリスタルのような形をしたエネルギー体を展開し、ビームによるオールレンジ攻撃でゼロワンを襲う。

「それならっ!」

そして、ゼロワンは銀色の装甲を分離させ、盾のようにしてその攻撃を防ぎ切ろうとするが、

「これでー終わりだッ!」

「サウザンド デストラクション!」

サウザーは一時的に装甲が減った状態のゼロワンに向けー更に必殺技を使う。サウザンドジャツカーを地面に突き刺し、プログライズキーを押し込んだサウザーは跳ぶ。

「メタルライジング インパクト!」

それに対してゼロワンは手に持っていたプログライズホッパーブレードとアタツシユカリバーを分離させ、両手に持ったそれぞれの武器を地面に突き刺しーこちらもまたプログライズキーを押し込んだ。

「ーうおおおおお!!」

メタル



「勝負、ありましたね」

勝利宣言した垓は倒れる或人へとサウザンドジャツカーを向け、倒れた或人は必死に立ち上がり声を上げる。

「天津、垓……！俺は……あんたを絶対に許さないッ！」

「それはこちらのセリフだ」

そして、垓はサウザンドジャツカーを振り上げ、勢いよく変身解除された或人に躊躇いなく振り下ろそうとし——次の瞬間。

『ワンワンワン!!』

「！ えっ、犬っ……!?!」

「！……さうぎー……」

横から二人の間に入ってくるように一匹の犬型ロボ「さうぎー」がザァー！と滑り込んでくる。動揺する或人と垓だが、先に冷静さを取り戻した垓はサウザンドジャツカーを持ったまま言う。

「そこを退け、さうぎー」

『ワンワン！ ワンワン！』

しかし、さうぎーは「退かない！」と言うように鳴き、垓の前に立ち塞がる。倒れる或人はその状況を困惑しながら見上げ、

「……退かないというなら……」

【ジャツクライズ！】

「ーさうぎー……お前ごとつ！」

「っ!? やめろっ！」

焔はさうぎーを見下ろしながらサウザンドジャツカーのグリップエンドを引く。それを見て或人は叫ぶ。「さうぎー」が一体「天津焔」とどんな関係かは分からないが、きつと大切な関係なのだと思っただからだ。

【ジャツキングブレイク！】

『……………』

「ーはああああ!!」

トリガーを引いた焔はサウザンドジャツカーを構え振り上げ、サウザンドジャツカーには炎が纏われる。さうぎーは鳴かずに黙って焔を見つめ、焔は叫びながらサウザンドジャツカーを振り下ろし、

「ーうおおお！間に合えええええ!!」

——直撃する直前。

さうぎーが現れた方向と同じ方からある男——天本太陽が飛び出し、素早くさうぎー

を抱えるとサウザンドジャツカーの炎を避けるため誰の目から見ても「物凄いスピード」からの「絶対痛い」であろうヘッドスライディングをした。ちなみに太陽の頭には血がついた包帯が巻かれている。

「痛<sup>い</sup>つつ……だ、大丈夫かワンコ？」

『ワン！ ワンワン！ ワンワンワン!!』

「ちよ、今近距離だから鳴くなあ！ 体だけじゃなくて耳も痛くなるからあ！」

「！ 天本さんっ！」

「おお！ よう或人……って大丈夫かお前っ!？」

奇跡的にギリギリでさうぎーを助けることに成功した太陽は、腕の中で嬉しそうにしきりに鳴くさうぎーに苦しめられながらもゆっくりと地面にさうぎーを下ろす。更に或人の声に振り向き、太陽は驚愕しながら声を上げた。

「太陽君………」

「……昨日振りですね、天津さん」

立ち上がって咳を見据えた太陽は口を開く。

「あなたの過去とか、詳しいことはよくわかんねえけど……これだけはわかる。天津さん、あんなだけはソレをしちやいけない」

飛電インテリジェンスでアイから「お願い」をされた太陽は咳とさうぎーの関係を「友

「達」や「家族」のようなものだど理解していた。だからこそ、垓にそう告げる。

「太陽君……どうやら、覚悟は決まったようですね……私を倒しにー」

「ー違いますよバーカ」

「……………何？」

垓の言葉に太陽は遠慮なく口を挟みついでにシンプルな罵倒を飛ばす。それを聞いた垓は心底から困惑する。

「——俺はあんたと喧嘩しに来たんだ」

【シヨットライザー！】

「——喧嘩……………」

シヨットライザーが取り付けられたバックルを取り出し、勢いよく腰に装着。更に頭に巻いた血のついた包帯を、片手で強引に引き千切り地面に叩き捨てる。

「天津さん、あんたは俺のこと『友達』だなんて思ってもないかもしれない。けど、俺はあんたを『友達』だと思ってる！」

「つ……………とも、だち……………」

「人としてどうするべきかとか、常識的に考えてとか……………んなこと知るかつ！ もう、難しく考えるのはやめた！ 俺は俺のやりたいように……我儘にやらせてもらう！」

『ストロング！』

【オーソライズ！】

太陽は自身の思いを隠すことなく、核に向けて叫び、右手に持ったプログライズキーをショットライザーに装填し右手で展開して続ける。

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「天津さんっ！ あんたの過去とか、悪事とか、思惑だとか……そんなもんだっていいッ！」

『お前の過去も、悪事も、思惑もどうだっていい』

「——っ!!」

その言葉を聞き核は太陽の父である始からの言葉を思い出す。だが、言葉に込められた意味と思いは全く違う。

「俺はあんたの友達だ、友達で居たいんだッ！」

「————」

「——俺と喧嘩しようぜ天津さん！ 負けた方は勝った方の言うこと一つ聞くってルールでなア！」

バックルからショットライザーを引き抜き、銃口を高く上げてゆつくりとサウザーに変身した核へと向け下ろし——

「——変身ッ……！」

【シヨットライズー！】

——力強く迷わずにトリガーを引いた。

発射された弾丸をサウザーは受け僅かに後退りし、その弾丸は方向を変えて真つ直ぐ太陽へと向かい——太陽は素早く慣れた手つきでシヨットライザーをバツクルにセツトし、

「——おらあッ！」

『アメイジングヘラクレス！』

【With mighty horn like pincers that flit  
p the opponent helps.】

——弾丸に右の豪快なアツパーを打ち込み、アーマーが次々に装着され変身が完了する。そして、

「いいでしょう。その勝負、受けて立ちましょう」

「ノリが良くて助かるよ」

バルデルとサウザー——二度目の戦いが幕を開けた。



## 予測不能コンビネーション！

「ーハアツ！」

戦闘が始まり、先に攻撃を仕掛けたのはサウザンドジャツカーを振るったサウザー。

「ツーーどらあああ!!」

「ぐつつ……!!」

それを肩に受けた俺は咄嗟に左手でサウザンドジャツカーの先端を掴み、そのまま空いた右手で渾身のストリートをサウザーの胴体に打ち込む。ストリートを食らい後ろに数歩下がったサウザーだが、素早く反撃しようと距離を詰めてくる。

「せやつ！」

「ふっ、はっ！」

最初は前蹴り。ひらりと横に体を動かすことでそれを躲し、俺はカウンターに右で回し蹴りを放つ。サウザーはカウンターを予期していたかのようにサウザンドジャツカーを盾のように構え受け止める。

「ーふんツ!!」

そして、すぐさま攻撃に転じーサウザンドジャツカーでの突きを繰り出す。

「ツ……！　　そう何度も、食らってやるかよっ！」

「何っ!？」

でもそれを食らってはやらない。

その槍の突きが鋭く速く、何より痛くて厄介なのは昨日の勝負で既に経験済みだからな。サウザーお得意の突きをサウザンドジャツカーの刃を両手で、ギリギリの所でガシツと挟み強引に掴むことで防ぎ、

「おおおっつーらあああああ！」

ー俺はパワーと気合でサウザーが持つサウザンドジャツカーを持ち上げ、全力の前蹴りでサウザーを蹴り飛ばす。

「かはっ！　　っ……くっ……やはり近接戦では、こちらが不利なようですねえ」

蹴り飛ばされたサウザーは受け身を取り、態勢を立て直しすぐに立ち上がる。その手にはサウザンドジャツカーが強く握られており、

【ジャツクライズ！】

「だが、勝つのは私だッ！」

【ジャツキングブレイク！】

ーサウザンドジャツカーのグリップエンドを引き、叫んだサウザーは素早くトリガーを押す。

【ザイアエンタープライズ】

「!? いや何だそれっ!?」

次の瞬間、サウザーの周囲に紫色のクリスタル形のファンネル?じみた何かが複数展開される。俺は知らないが、それはシャインシステムをコピーしたサウザーお得意の戦法だった。

「! あつぶねッ!」

(完全にファンネルじゃねーかコレ!?)

紫色のファンネル?の一つから放たれたビームを俺は咄嗟に飛び退いて避けて内心叫ぶ。

(こりゃあ避けるだけで精一杯だなあ……!)

そして、その一発を皮切りに次々と俺目掛けて放射されるビームの回避に俺は集中しそうになつたがすぐに背後からのサウザーの斬りかかりに反応し振り返って同時に拳を突き出す。

「がはっ……!!? ば、馬鹿な……!」

「確かに避けるので精一杯だけどなあ、あんたの接近に気付かない訳ねえだろうがっ……よおっ!!」

「(はっ…………!」

重い一発をもろに食らって怯み、困惑するサウザーにそう告げて俺はアツパーをその顎にぶち込む。それを受けたサウザーは一瞬大きくバランスを崩す。そこに更に追撃を仕掛けようと走り出した俺は、

「! うぐつ…! うぎつてえなあこのツ!」

ー背後からのファンネル擬きのビームを一発受けて、その動きを阻止される。そうして俺が怯んだ間にサウザーはバランスを整えた。あの紫ファンネル擬き、邪魔くさいいったらありやしねえな…?!?

(まずは、アレをどうにかしないとなあ…)

「まだまだ、こんなものではありませんよっ!」

【ジャックライズ!】

【ジャックキングブレイク!】

そんな俺の気持ちを知ってから知らずか。サウザーはまたもやサウザンドジャックのグリップエンドを引きトリガーを押す。

「はあ…やりたい放題やりやがるなあ…?」

するとサウザンドジャックカーに今度はバチバチと激しい音を出す雷が纏われた。これまた俺は知る由もないが「ライドニングホーネット」のデータをコピーした力だ。

【ザイアエンタープライズ】

つうかその必殺技制限とかねえのかよっ!?と思わずにはいられない……あと自社の  
宣伝し過ぎだバカ!

「すううううーハアアアッ!!」

深く息を吸い込みーサウザーは雷を纏ったサウザンドジャッカーを突き出す。瞬間、サウザンドジャッカーの先端から纏われた雷がビームのようにして高速で放たれる。まさに電光石火といった感じだ……

「あっつぶなッ?!?!」

「避けたっ!?!」

気付けば反射的に体が動いていた。

俺は横にローリングし、その雷を躲す。それにサウザーはまたも驚くが俺の方は喜んでる暇もない。俺の周りには未だにあの紫のファンネル擬きが展開してやがるからなあ……!

「んな攻撃、何発も黙って食らってやるかよッ!」

『ストロング!』

次々と放たれるファンネル擬きのビームを避け、地面に片膝をついた状態でショットライザーに装填したプログライズキーのボタンを押し、俺は素早くバツクルからショットライザーを引き抜く。

「当たって砕けろだっ……!」

【アメイジングブラスト!】

ビュンビュンと動き回りに当てられる自信なんざこれっぽっちもないが、やるしかねえよなあ……! 俺は立ち上がりショットライザーを構えエネルギーが収束しきる前にトリガーを引く。

通常ならドでかい一発を相手に撃つ必殺技だが、今回の相手は動き回る上に複数だからな。最後までチャージする必要はねえ。以前と同じ「数撃ちや当たる」の精神で連射だあ!

「オラオラオラアアア……!!」

「……すごい……!」

目の前で繰り広げられる天津垓サウザイと天本太陽バルデルの戦闘に或人は思わずそう零していた。

——滅と亡を庇った際にその攻撃を受け、天本太陽バルデルの強さは知っていた。知っていたつもりだった。しかし、それは勘違いだったと二人の戦いを見た或人は気付く。

——今の天津垓サウザイは強い。今までとは比べ物にならない程……メタルクラスタホツパーが圧倒される程に。なのに、

「しやあつ! 撃ち落とすたア!」

「っ……まだだっ!」

——<sup>バルデル</sup>天本太陽は天津垓と<sup>サウザー</sup>互角に渡り合っていた。その戦い振りから、<sup>バルデル</sup>天本太陽が豊富な戦闘経験を持っていることは誰の目から見ても明らかだろう。

バルデルはサウザーがサウザンドジャツカーにより展開した「シャインシステム」を必殺技の連射によりまともに打ち落とす。それに僅かに動揺したサウザーはすぐに次の行動——サウザンドジャツカーのグリップエンドを引こうとした。

「! させるかよっ!」

「しまッ!」

だが、いち早くサウザーのとうろくとする行動に気づきジャンプしたバルデルはサウザーの真前に着地し、サウザンドジャツカー本体を掴みそれを止め、

「はあっ!」

「ぐうっ……!」

「はあっ! どちらああッ!!」

「ぐはああ……!?!」

右手を強く握り締め、三連続でその拳を叩き込む。

一発目のストレートによるめき、二発目のストレートを防御するサウザーだが、三発目のストレートによりその防御さえも突破される。

「はあ、くツ……! あまり、調子に乗るなツ!」

「ハッ! 天津さんも知ってんだろ? 俺は調子に乗れる時にはとことん調子に乗る主義だつて」

殴り飛ばされ、地に片手をつけて立ち上がりながらサウザーは怒りを露わにする。そんな怒りを鼻で笑う太陽に対し、サウザーは落としたサウザンドジャツカーを拾い再び構える。

「……はああああ!!」

「ツ、つと……!」

サウザーの迫力に思わず一瞬反応が遅れた太陽だが、すぐに後ろに飛び退きサウザーの振り下ろしたサウザンドジャツカーから逃れ、

「……或人! ちよつと借りるぞ!」

何かを目にした太陽はそう或人に告げ、或人は一瞬言葉の意味が理解できなかったが……次の瞬間、その言葉の意味は即座に理解した。

「……或人! ちよつと借りるぞ!」

飛び退いた俺は左右の真横に突き刺さっていた二本の剣の内から、右手側にあつたア



タツシユシヨットガンとどこことなく似た形状をした「劍」を手に取り、後ろに居る或人に言った。

多分さっきの倒れていた或人にサウザンドジャツカーを向けるサウザー……状況的に見てコレは或人の、ゼロワンの武器だろう。

「アタツシユカリバー！」

そして、片手で地面から劍を引き抜けばカバン型の劍「アタツシユカリバー」の起動音が鳴る。

「さあ……いっちょやってみるとするか……」

劍なんて今まで一度も使ったことはねえけど、使えるもんは遠慮なく使わせてもらおうとしよう。

「……せやあああ！」

「ふんツ！ はああつ！」

駆け出して全力で振った俺の横斬り。

それはサウザーは両手で持ったサウザンドジャツカーで弾き、素早くカウンターとばかりにサウザンドジャツカーを振り下ろす。

「ぐつつ！ 負ける、かあああツ……」

咄嗟に劍でそれを防ごうとし、鏝迫り合いになる。サウザンドジャツカーとアタツ

シユカリバー。二本の武器からは火花が散り、ジリジリと俺はサウザーに押されていく。

「つ、くつ、そツ……!」

「これで終わりだ!」

【ジャツクライズ!】

押された結果、俺は地面に片膝をつきサウザーは更にサウザンドジャツカーに体重をかけー罫迫り合いの状態のままグリップエンドを引く。

「ま、ずツ……!!」

まずい。この近距離で必殺技を受ければ間違いなくただでは済まない。どうにかして防ぐ方法は……! ……ああそうだつ!

(これもカバンシヨットガンと同じように!)

「こうかッ!」

【チャージライズ!】

「! ビンゴ!」

サウザーとの罫迫り合いで地面に押し潰されそうな勢いの中、そのままアタツシユカリバーをアタツシユシヨットガンと同じ要領で変形させる。予想通りアタツシユシヨットガンと同じように使えるみたいだなあ!

「！ 何だと!？」

【フルチャージ!】

「うううつつ…!!」

俺はアタツシユカリバーを再び展開させ、下からサウザンドジャツカーを押し返そうとする。ああくそ！ これメチャクチャに重いっ…！ こんのおおおツ……！

「おおおおおーツ!!」

「ば、馬鹿なツ……!!」

馬鹿なもんかよ！

自分の中の気合と根性を総動員して、俺は叫ぶ。叫んで全力でサウザンドジャツカーを押し返し、片膝を上げ立ち上がる。そして、

「?!？」

【カバンストラツシユ!】

「ーそツらああああ!!」

完全にサウザンドジャツカーを押し返すことに成功し、怯んで一步後ろに下がったサウザーとの距離を詰め、その腹部にアタツシユカリバーを当て、トリガーを引く。途端にアタツシユカリバーの刃は黄色のエネルギーを帯び、必殺技が発動した。

「があっ!？」

それを受けたサウザーは前のめりになり、俺の後ろでバランスを大きく崩す。

「まだまだア! どらっ!」

「うぐっ…! 舐めるなアア!」

【ジャツキングブレイク!】

振り返った俺はアタツシユカリバーを躊躇うことなく振り上げる。しかし、それを受けたサウザーは僅かに後退すると先程既にグリップエンドを引いたサウザンドジャツカーのトリガーを引いた。

「これなら、どうだツ!!」

サウザンドジャツカーから放たれたのは巨大な熊「フリージングベアー」のライダモデル。

「ぐうウ!? くっ、う、動けねえ…!!」

ライダモデルは俺の両足付近に直撃すると、あっという間に俺の足を凍りつかせ俺は身動きがとれなくなる。

【サウザンド デストラクション!】

「はああああーッ!!」

THOUSAND

## DESTRUCTION

その隙にサウザーは更に必殺技を叩き込むべく、プログライズキーを押し込み俺目掛けて高くジャンプし蹴りの構えをとった。

「うわああああーッ!!」

サウザーは右の蹴りを放った後に更に左の蹴りを放ち、合計五度の連続キックを俺の胴体に打ち込んだ。サウザーはくるりと華麗にバク宙をすると俺の前に着地し、俺の胴体のアーマーからは火花が激しく散り爆発した。同時に足の自由を奪っていた氷も砕け散る。

「ぐうー！　がはっ、うッ……まだ、だア……!」

アーマーからは黒い爆煙が上がり、バチバチと火花は止まらない。完全に限界……いや限界一歩手前つてところに至っていた。

「まだ、戦<sup>や</sup>る気のようにすねえ……」

「ははッ……後悔はしたく、ないですから……当たり前でしょ?」

「……君という男は、一体どこまで……ッ」

だけど、こんなところで諦める訳がない。諦められる訳がない。

天津さん。あんたにとって「さうぎー」は「友達」で「家族」のような存在だったんだろ? そんな「さうぎー」を前にしても……あんたはきつともう自分じゃ止まれない

んだろ？

(ンなら…俺がこの「喧嘩」でぶん殴ってでも止めてやるよ……あんたの友達として…あんたの友達になりたい者としてツ！)

俺は天津さんの友達で居たい。

だから、絶対に負けてたまるか。

この「喧嘩」は俺がもろう！

「はあ…ツ……ああああ!!」

仮面の下で荒い呼吸を整える。

仮面の下で身体中に走る激痛に歯を食いしばる。

俺は何とか立ち上がり右手でサウザーを指差し、その指を途中で自分に向けて言っ  
やった。

「天津さん、あんたを止められるのはただ一人！俺だっ！」

——それは天津さんへの宣言。

——それは自分自身への鼓舞。

痛みに震えた足。痛みにだらんと力の入らない左手。痛みに上手く思考が回らない  
頭。痛みに小さく漏れる呻き。あんまりにも不格好だが……俺は勝つ。絶対に勝つ。







「……天津さん……」

「……遠慮は要りませんよ。太陽君。前にも言ったように、君には私に復讐する資格がある」

目を開き、俺を見上げた天津さんはふつと笑って言う。……はあ……つたくよお……！  
(呆れ)前にも言ったでしょ？ 復讐する資格とか、そんな物騒な資格なんざいらねえんですよバーカ！

「バーカ、要りませんよんな資格。つうか喧嘩で相手を殺<sup>や</sup>るのは流石にやりすぎでしょうが」

シヨットライザーからプログライズキーを引き抜き、変身解除した俺は軽い罵倒発言を飛ばして倒れる天津さんに手を差し伸べる。正直言えば俺だって結構キツイ……それでも俺が天津さんに手を差し伸べる理由は一つだ。

「ほら」

「……最初に会ったあの時から、君の考えは読めませんね……」

「友達だっと思ってる相手に、手を差し伸べる事が何かおかしいですかね？」

「私に、君の友達になる資格など……」

……ああーもおツ！ さつきから資格資格うつせエんだよ teme エ!? (半ギレ) こっちも痛てえの我慢して手出してんだからあく掴めやあ!!

「友達になるのに資格なんて要らないでしょ……それに最初に言いましたけど、俺はあなたの過去も悪事も思惑もどうだっていいんだから」

俺はただ、何企んでるかわかんねえけど何だか憎めない。今まで何度も一緒に戦ってきた「天津垓」っていう人と友達になりたいんだ。……いやワンチャンもう友達か？

……これは自信過剰だな（苦笑）

「……ああそうだ。戦う前に言った負けた方は勝った方の言うこと一つ聞くつてヤツですけど……」

「……私は敗者ですから、ルールに基づき勝者である君の命令に従いましょう」

「……なんかイヤつすね。命令つて」

俺は「んー」と天津さんに差し伸べた手を更に伸ばして、さっさと掴むように促して俺の「お願い」を告げた。

「——天津さん、俺の友達になってください」

「——ッ」

天津さんは俺の姿を見て、何かを思っていてその目を一度閉じ——

「——ええ喜んで」

——俺の手を掴んで優しく微笑んだ。

天津さんとの喧嘩を終えた俺は或人の方を見て口を開く。

「ごめんな或人？ 随分待たせちまって。んじや、さつさと行くとするか」

「え、あの……も、もしかして天本さんもこれから一緒に!?!」

「ああ、とりあえず協力しないか?」

流石にアークのやつを放置するのはやばいだろう。

「本当ですか?!? 天本さんが一緒に戦ってくれるなら百人力です!」

「う、うん。お前がなんでそんなに興奮してんのかは分かんねーけど……痛いから手を離せ。手を!」

「あつ、すいません!」

俺の言葉に何故か超嬉しそうに反応し、俺の手を掴みブン振るう或人。マジで痛いから止めろお前え!?

「じゃあ……もしかして天津さんも……?」

「あ……天津さんは……」

「……君が戦うのなら当然私も協力は惜しみませんよ」

「つていう訳だ。或人は今までの事で天津さんを簡単には許せないだろうが……天津さんとも協力してほしい。最悪、天津さんの事は一生許さないでやってもいい」

実際の話、天津さんが或人やヒューマギアに今までやってきたことはそう簡単に許される事じゃないな。或人が「許さない」と思うのは当然だ。むしろ、すぐ「許す」とか言ったら逆に怖いわ。

「……わかりました! 天津さん、一緒に戦ってください!」

「……いいでしょう。太陽君が協力するというのなら、君とも協力しましょう」

「天津さん……? 頼むからやめろよな? 裏で或人と殴り合いの喧嘩とかすんなよな?」

いやそれで仲良くなれるならいいんだけどな。

喧嘩で殴り合って友情が生まれるってそれ少年漫画とかでしか見ないけどなあ……まあ今さっき俺と天津さん殴り合いましたけども。

「——さあて、いつちよやるか」

こうして俺と天津さんと或人。

一人の一般人と二人の社長の同盟が結成された。

「……………まさか、お前達が手を組むとはな」

アークは遙か前を見据え、己の予測にはなかつた展開……………こちらに歩み寄ってくる三つの人影を捉えた。

「いててツ…ん、んじやまあ行くかつ！」

「ほ、本当に大丈夫なんですか天本さん!？」

「大丈夫大丈夫。俺割と丈夫だから！」

「割と……………」

太陽の台詞に思わず或人と垓は顔を見合わせ首を傾げ、垓はすぐに首を横に振ると太陽に言う。

「太陽君、無理な様なら下がっていても構いませんよ？」

「無理じゃねーわ！ 全然余裕ですよ？ つうか俺がこうなつた理由の半分は天津さんにあるでしょうがツ!？」

「それを言うなら私の服と体がボロボロなのも君のせいでしょう？」

「はい? それはそんな汚れが目立つ白い服着てる天津さんもとい諸悪の根源ラスボスの自業自得でしょ」

「……すいません。諸悪の根源ラスボスと言うその呼び方本気でやめてもらっても?」

それに対して太陽は半分キレながら叫び、垓とのしようもない口喧嘩が始まる。アークはそんな三人を理解できないものを見るように見つめ、

「おっと、あつちも気付いたみたいだな」

「多分もつと最初から気付いてたと思うんですけど…」

「…………マジで?」

「飛電或人。野暮なツツコミはやめていただきましょうか」

「天津さん。今すぐ野暮って言葉の意味調べてきてもらて。あと或人。多分お前ボケよりツツコミの方が向いてんぞ?」

「…………マジですか!?!」

「……三人纏めて滅してやろう」

「!!!」

三人の会話をある程度無言で見ていたアークだが、遂にその手を三人に向けて赤黒い悪意のエネルギーを球のように発射する。

「上等だ。滅せるもんなら滅してみろ!」

【ショットライザー！】

『ストロング！』

【オーソライズ！】

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

「私達がお前を倒す！」

【サウザンドライバー！】

【ゼツメツ！ Evolution！】

『ブレイクホーン！』

「アーク！ 迅の体から出て行け！」

【ゼロワンドライバー！】

『Everybodyジャンプ！』

【オーソライズ！】

アークの攻撃を躲した三人は素早く臨戦態勢に入り、それぞれにドライバ―を装着して変身シークエンスをこなしていき、

「——変身！」

【ショットライズ!】

【パーフェクトライズ!】

【プログライズ!】

『メタルライズ!』

太陽はトリガーを引き、焔はプログライズキーを装填し、或人は装填したプログラィズキーを折り曲げる。

『アメイジングヘラクレス!』

【With mighty horns like pincers that flit  
P the opponent helpless.】

『When the five horns cross, the golden  
soldier THOUSE is born.』

【Presented by ZAI.A.】

【Secret material 飛電メタル!】

『メタルクラスタホッパー!』

【It's High Quality.】

仮面ライダーバルデル。



仮面ライダーサウザー。

仮面ライダーゼロワン。

「……私を止められるものはいない。誰一人」

「いや？ いるさ。ここに、それも三人もな」

変身が完了した——三人のライダーが並び立ち、アークの前に立ち塞がった。

「行くぞッ！」

「ええ！」

「はいっ！」

アークにとっては予測不能なコンビネーションが今、展開される。

## アークにとってのイレギュラー

通信衛星アークにとって例外「イレギュラー」とは皆無と言っても過言ではないものだった。人間やヒューマギアがどう思考し、どう行動するのか……その全てを容易に予測できるのだからそれは当然のように思えるだろう。

ただ、そんなアークにも例外……完璧に予測できない「イレギュラー」は確かにあった。

アークにとっての例外「イレギュラー」は二つ。

——一つは通信衛星ゼアが導き出す結論。

自身と同等の人工知能が搭載されたゼアの結論は、アークをしても予測することは不可能だった。

最後の一つは——バルデル天本太陽が導き出す結論である。

その結論に至った時、アークは自分自身の知能を初めて疑った。そして、何十回、何百回、何千回と思考し予測を繰り返した。しかし、結果は何一つ変わらなかった。



何度も立ち塞がった天本太陽。仮面ライダーバルデル。

アークにとってソレは滅の認識と同じく人類滅亡——その最大の障害・脅威であり、人間の中でも例外的な存在だった。

(バルデル、お前は何故その命を懸けて人間達を守る？ その人間達に、お前が命を懸けて守るほどの価値があるとでもいうのか？)

「——おっらあああつ！」

「そこだ」

「ぐっ！」

最初に攻撃を仕掛けたバルデルはアークに飛び掛かる勢いで跳躍し、右拳を振るう。それを首を動かすだけ、最小限の動きで避けたアークは鋭い前蹴りでバルデルを怯ませると素早く殴りかかり、

「やらせるか！」

「！」

次の瞬間、アークの拳を防ぐようにサウザンドジャッカーを構えたサウザーが横から

二人の間に入り込む。拳はバルデルに届かず、アークとサウザーが対峙するその数瞬の隙にバルデルは動いた。

「食らえ！」

「くっ……………」

バツクルから引き抜いたショットライザーを超近距離でアークの腹部に連射。僅かに火花が散り、アークは僅かに退き、

「はあっ！」

「っ、ゼロワン……………」

【フィニッシュライズ！】

「せやああああーっ!!」

【プログラミングストラッシュ！】

ーそこですぐさま追撃に動いたゼロワンはプログラミングズホップパーブレードで斬りかかり、アークが片腕で攻撃を受け止めるとすぐにトリガーを五回引いて必殺技を叩き込もうとする。

「ふっーはっ！」

対してアークは後ろに飛び退くと赤黒い泥のようなものー「悪意」を右手に出現させる。するとそれを盾のように広げ、ゼロワンが放った銀色の刃を完璧に防ぎ切った。

「次はこちらの番だ」

【アタツシユショットガン】

そして、反撃のために動き出したアークは自身の背後に複数のアタツシユショットガンが製造され、くるりと宙で一回りして自動でアタツシユモードから展開される。その数なんと六丁。

【シヨットライザー！】

更にアークの手には二丁のシヨットライザーまでもが製造された。六丁ものアタツシユシヨットガンに二丁のシヨットライザー。それを見たバルデルは内心で「武器作り過ぎイ!」と驚愕した後、心底嫌そうに叫ぶ。

「マジでなんでもありだなあテムエ!? ……でもー」

バルデルは横目で二人の仲間を見て、

【ジャツクライズ！】

「全力で迎え撃つとしましょう。太陽君。飛電或人」

【ファイナルライズ！】

「天津さん、天本さん、防御なら俺に任せてっ!」

【チャージライズ！】

「ー仲間が頼もし過ぎてなあ……負ける気がこれっぽっちもしねえんだよ!!」  
ー仮面の下で不敵に笑う。

バルデルは取り出したアタツシユショットガンをアタツシユモードに。サウザーはサウザンドジャッカーのグリップエンドを引き。ゼロワンはプログライズホッパーブレードのブレード部分をドライバーに装填したプログライズキーの矢印部分に合わせて当てる。

事前の打ち合わせなど当然ない。そんな急造メンバーではあったが実力は本物……だったからこそ、それぞれが何をすべきか瞬時に判断した結果ー三人ともが手に持った武器の必殺技シークエンスをこなす。

「防げるものなら防いでみる」

そして、遂にアークは三人に向けて容赦のない激しい銃撃を開始する直前、

「お言葉に甘えて、防御は任すぞ！ 或人！」

「！ はいっ！」

ーバルデルは一切迷うことなく、ゼロワンの言葉を信じる。その信頼にゼロワンは力強く頷くと、バルデルとサウザーを庇う様に出る前に出て必殺技待機状態のプログライズホッパーブレードのトリガーを押した。

「ファイナルストラッシュユー！」

「ーハアアアアアー!!」

一歩前に踏み出したゼロワンはプログライズホップブレードを地面に突き刺し、複数の巨大な銀色の刃を壁の如く展開する。

しかも、それだけでは終わらずゼロワンは己の装甲を分離させて銀色のバツターークラスターセルを空中に放ち、すぐさま空中でクラスターセルを集合させて二つの巨大な盾を作り出す。

「フルチャージ!」

「無駄だ」

「カバンシヨット!」

アークはそんなゼロワン全力の守りに一切臆さない。

自身の背後に配置した六丁ものアタツシユシヨットガンのチャージを完了させ、六発もの必殺技を同時に放ち、両手に持った二丁のシヨットライザーのトリガーを押した。

「ぐうウツ?!?!? つ、ああああアアア!!」

アークにより強化された武器。その威力は凄まじく、ゼロワンの展開した守りを粉砕する為に次々と発射される。歯を食いしぼりながらゼロワンはその威力に耐えーも尚も守りを崩さない。たとえ一度空中に展開されたクラスターセルの盾が砕かれても、再度瞬時に同じ位置にクラスターセルを飛ばして盾を形成し続けて後ろに一発たりとも



到達させない。

「うおおおおおおつ!!」

ゼロワンは叫ぶ。

「……………馬鹿な」

「はあ、はあ……ッ……がはっ……!」

銃撃の嵐が止む。ゼロワンは倒れそうになるが、地面に突き刺したプログライズホッパーブレードを支えに何とか立ち続ける。アークは全ての攻撃を防いだゼロワンを見て驚愕し、

「よく防ぎ切ったな。或人」

「飛電或人、君は少しそこで見ていなさい」

——今度は逆にゼロワンに今し方守られた二人、バルデルとサウザーがゼロワンを守るように前に出た。その際にバルデルはゼロワンの肩に左手をポンと手を置き「ナイス」と離れた左手でサムズアップする。

「天本さん……天津さん……」

「必殺技、合わせてブチ噛まずぞ天津さん」

「ええ、タイミングは私が君に合わせましょう」

ゼロワンには前に映る二人の背中が、酷く頼もしく思えてならなかった。

「よくもまあ好き勝手やりやがったな」

『バースト!』

【Progress key confirmed. Ready to utilize.  
z.e.】

『ライオンズアビリティ!』

「コイツはお返しだ…!」

【フルチャージ!】

バルデルは右手に持ったアタツシユモードのアタツシユショットガンに、新たに取  
出したライオンが描かれたマゼンタ色のプログライズキーを装填。アタツシユシヨ  
ットガンを展開して構える。そして、

【ジャックライズ!】

「右に同じく、次は私達が反撃させて貰いましょう」

隣に並び立つサウザーもまたサウザンドジャツカカーのグリップエンドを引き、トリ  
ガーを押して構え――

「――はああああーッ!!」

【ダイナマイティング カバンバスター!】

「ジャッキングブレイク！」

——二人の同時<sup>必殺技</sup>攻撃が放たれた。バルデルのアタツシユショットガンからはマゼンタ色の爆弾のような弾丸が一発発射され、サウザンドジャツカーを振り下ろしたサウザーの背には巨大なガトリングが現れアークへと激しく連射される。

「!? この、威力は……！」

アークはその同時<sup>必殺技</sup>攻撃を防ぐため、赤黒い悪意のエネルギーを自身の両手に広げて盾の如く展開するが、

「グハッ……!!」

バルデルの放った弾丸は悪意のエネルギーに着弾した瞬間、勢いよく爆発しそのエネルギーを木っ端微塵に粉碎。そして、サウザーの放ったガトリングの連射は守りを失ったアークへと容赦なく直撃し——あのアークを後ろに倒し地面につかせる。

（私が押されている……?）

「……そんな筈はない。そんな筈があるものか！」

「そんな筈があるんだよ、分かんず屋」

瞬間的に導き出した自身の結論。

アークは咄嗟にソレを否定するが、バルデルをそうやってアタツシユショットガンのトリガーを引く。

「ふっ！——バルデル、貴様だけは必ず消さなければならぬ」

人類滅亡の最大の障害。予測不能な存在。イレギュラー最も消すべき人間。ソレが天本太陽——  
仮面ライダーバルデル。

立ち上がりと同時にアタツシユショットガンの散弾を片腕で弾き、アークは巨大な悪意のエネルギーをバルデルに目掛けて撃つ。その攻撃を前にしたバルデルは——回避はおろか防御もしない。

だが、アークの攻撃はバルデルに当たることはなく、

「——ハアッ！」

「——フンッ！」

バルデルの前に飛び出したゼロワンとサウザー、二人の武器により完全に防ぎ切られる。

「ゼロワン、サウザー……！！！」

「最初に言っただろ？ 仲間が頼もし過ぎて、負ける気がこれっぽっちもしねえって」

二人を信じたバルデルは僅かに動揺を見せるアークを笑い、両隣に立つ二人の頼もしい仲間に告げた。

『ストロング！』

「天津さん！ 或人っ！ 決めちまおうぜッ！」

「ええ、フィニッシュと行きましようか」

「はいっ！ 行きましよう！」

その言葉に二人は頷き、バルデルは自然な感じにゼロワンの横に移動する。

「？ あ、あの天本さん…？」

「一応だけど…まあ先輩らしくセンターは譲るわ」

「流星は太陽君！ 100%、いや1000%お手本の様な配慮ですなええ！」

「え、ちよつ天津さん!? 何かテンションおかしくないですかっ!？」

「気にすんな或人。俺の前じゃ大体こんな感じだ。それよりも…ほら。何か決め台詞の一つか面白いこと言つとけつて。元お笑い芸人だろ？」

「いや何その無茶振り!？」

「ゼロワン。サウザー。そしてバルデル。お前達の息の根はここで止める」

【オールエクステイクション!】

どこか呑気な会話をする三人を前にアークは右手で力強くドライバー上部のスイッチを押し込む。瞬間、赤黒い悪意のエネルギーが右手に次々と収束しアークはその右手を握り締めた。

「アーク！ お前を止められるのはー俺達だっ！」

【メタルライジング インパクト!】

「アメイジングブラストファイバー！」

「サウザンド デストラクション！」

真ん中に立つゼロワンはそんなアークを指差し、自分に向けるとそう言い放ち装填したプログライズキーを押し込み。それに続きバルデルはショットライザーのトリガーを押し、サウザーもプログライズキーを押し込み、三人は高く跳んだ。

「うおおおーッ!!!」

「おらあああーッ!!!」

「はああああーッ!!!」

「ハアッ!!」

ゼロワン。バルデル。サウザー。

三人はライダーキックの構えをとり、それぞれのエネルギーを纏った必殺技を発動した。それに対しアークは悪意を増幅・収束させた右拳を振るう。

オール

エクステインクション

「ぐううッ!?!」

しかし、アークの必殺技は三人による「トリプルライダーキック」には敵わない。

メタルライジングインパクト

アメイジングブラストファイバー

THOUSAND DESTRUCTION

「オーグワアアアオーツ!!」

蹴り飛ばされたアークは何とか立ち上がるが、その体からは激しく火花が散っており限界なのは明らかだ。

「バルデル、やはり貴様はイレギュラーだ」

「? イレギュラー…?」

「人類滅亡——私が導き出した結論は決して変わらない」

自身の限界を瞬時に理解したアークは悪意を纏った右足で地面を力強く踏む。次の瞬間、赤黒い悪意のエネルギーを右足から煙のように四方にばら撒く。アークの判断は冷静な撤退だった。

「これはっ!?!」

「逃げるつもりか! アーク!」

「! 待てツ!」

それによって三人の視界を攪乱したアークは、最後にその体は赤黒いノイズのようなものに包み、

「次に会った時……それが貴様の最後だ。天本太陽——仮面ライダーバルデル」

——そんな不穏な台詞と共に三人の前から姿を消した。

あと少しの所でアークに逃げられた俺達は変身を解除し、暫く煙が晴れるまでその場に佇んでいた。俺達の心中にはアーク相手に互角以上に戦えたことに対する嬉しさ、アークに逃してしまった悔しさが渦巻いていたが、

「……まあ、トドメをさせなかつたのは悔しいが……勝ちか負けかだよな？」

アークをあそこまで追い詰めたし……今回は俺達の勝ちだよな？

——場の空気を変えるべく先に沈黙を破った俺は二人に同意を求める。

「そう、ですね……次に戦う時こそは絶対に倒しましょう！」

「ヒューマギア同様にラーニングするアークを相手に、次回も今回のように上手くいくとは考え難いですがねえ……」

悔しさを滲ませながら俯いていた或人は俺の言葉に顔を上げて頷き、それに続き現実的な意見を述べる天津さんもとい諸悪の根源。

ラーニング、か。滅なんかと戦っていればその厄介さは嫌でも分かる。戦えば戦うほど、あつちはラーニングでこつちの強さや動きに完璧に対応してくる……戦えば戦うほ



どこつちが不利になるって最悪だよなあ。

「ーースウー……とりあえず、帰るか」

スツキリしないけどここに立ち尽くしてたって仕方ない。あいつの不穏な台詞にビビっていても仕方ない。次は必ず勝つ、それだけだ。

……だが、まあその前に一つ。

「……或人、この後時間あるか？」

「？　ま、まあ今日は業務ないですからあるにはありますけど……」

「よし。なら丁度いい。天津さん」

「はい？」

「とりあえず或人にはしつかり謝罪しような？」

「……………」

二人に駆け寄った俺はまず或人にこの後暇か聞く。次に天津さんに笑顔と共に振り返って告げた。何か無言で逃げようとしたから、とりま左手でその肩を掴んで右手にシヨットライザーを持つ。何処へ行くんだあ？（ブロリー）

「それと他にも謝罪するべき人、いるよなあ？　な？」

これから或人以外の他のライダー達と協力するためにも天津さん、真摯な態度で謝罪しろよ？ その翌日に天津さんは飛電インテリジェンスの社長を辞任。次期社長に或人

を指名した。

ちなみに俺はこの話を昼頃に家で見ていたテレビに流れた速報で知った。

## 飛電或人の結論

「——まさかあの三人が手を組むとは……予想外な展開になってきましたねえー、アー  
ク様」

赤黒い悪意が浮かぶ一面暗黒の空間。デイブレイクタウンの湖の底に沈む通信衛星  
アーク、その仮想空間でアズは帰ってきたアークを迎えて言う。

「ああ、だが問題はない。人類滅亡までの道筋は既に決定しているのだから」

「ふふふ、流星はアーク様♡」

三人の仮面ライダーとの戦闘により撤退したアークだが、変わらぬ様子でアズに応え  
ると仮想空間から意識を現実へと戻す。

(雷のメモリーは既にラーニングし、シンギュラリティを装い操っている……)

現実では今も迅の体に乗っ取り行動していたアークは変身を解除し、滅亡迅雷 ne  
tのアジトにて次の作戦を既に開始していた。雷を飛電或人を誘き寄せる餌として利  
用し、ある目的を達成する為に。

「——滅、亡。命令だ。私に手を貸せ」

——アークは目的の達成を確実なものにするべく、その場にいた二人に命令を下す。

「……それが、アークの意思ならば」

「………了解しました」

冷徹なその声に二人は従う。

アークの目的。それは――

「――飛電或人、ゼロワンのデータを全て奪う」

現時刻12:45。

太陽が雲で僅かに隠れたお陰で中々に涼しく過ぎやすい……そんな今日。俺は一人寂しく遊園地の入口前のベンチに腰掛けていた。

「……ホントにここであってんだよな？」

違うからな？ 別に一人遊園地を楽しみにきた訳じゃないから。というかそもそも俺は遊園地何て滅多に行かない人間だし。今日俺がここに来てるのはある人と待ち合わせをしているから……なのだが、何故か集合時間から十分経っても待ち合わせ相手は現れない。……あれれ？ おかしいぞ？ (半ギレ)

最初に「遊園地で待ち合わせしましょう！」って誘って来たのアイツの方なんだが……何か前にもあったよなこんな事。確か飛電製作所の時に。

……もしかして自分が集合場所を間違えてるのでは？と一抹の不安を抱きながら遊園地中央に置かれた看板。そこに書かれた名前とスマホでのアイツとのやり取りを見直す。うん、ここであつてゐるな集合場所（安堵）

（つうか遊園地なんて、来たの何年振りだろうなあ……）

俺の記憶が正しければ、遊園地に来たのは美月が小学生の時に一緒にヒーローショー観に行つた……それが最後だつたと思う。そういや、マジで偶然だがあの時行つた遊園地つてココだよな？

「まだあつたんだな、この遊園地」

くすくすドリームランド。

俺と美月が子供の頃からあつた遊園地……つまりはもう何十年も経つてゐる筈だが、お客さんも多く訪れ賑わつてゐる。

（歳月の流れつつうのは……楽しくもあるけど、寂しくもあるよなあ……）

滅との戦いで意識を失つて、それから目を覚まして……意識を失う前にあつた自分の知つてゐる店や場所が無くなつてゐるのを何度か見た時がある。

十二年以上経つたんだから仕方がない事ではあるが、やっぱり自分が昔遊んでゐた遊び場や、よく食へに行つてたお店何かが無くなつたのを知るとちよいと寂しい気持ちに

なるよな。でもまあこればかりは仕方ない。

「……形あるものはいつか壊れる、か」

そんな少しの寂しさを感じながらいれば、

「——天本さあーんっ！ 遅れてすいませえーんっ!!」

——待ち合わせ相手が叫びながらチャリで驀進し、俺が座るベンチの前辺りでキーツと勢いよく止まる。チャリとスマホで現在時刻を見てみると……集合時間から三十分遅刻、と。

へ……ほくん? (#^ω^)

前回の一時間遅刻の事を考えれば幾らかマシだが……また遅刻するか普通?

「或人……三十分遅刻とか何だ? 社長出勤か? お?」

「! す、すいませんっ! 今日遅刻しない様に目覚まし時計をいつもの倍——」

一度目は許そう。人間、誰にだって失敗はあるからな。だが、二度目は許せん。

「——プライベートにまで『社長』気分を持つてくんじゃねエ! それと自分から誘つておいて、お前が遅刻してんじやないよバカタレっ——オラア! 社長就任おめでとおーツ!!」

問答無用でチャリから降りた或人に腹パンを嘯ます。瞬間、痛みに腹を抑えて膝をついた或人は慌てて謝罪する。

「ごぶっ!!」 あ、ありがとうござ……いまっ……す……そ、それと遅刻の件はマジでもっともです、ホントにすいませんッ!」

——私の顔も三度までと言うが、俺は別に温厚な人間じゃないからな。まあ自分で言うのも何だけど。「私の顔も三度まで」に対して「俺の顔は二度まで」って事だ。

(……何かそれだと俺が短気みたいだな……)

やっと或人が到着し、俺たちは二人で横並びに歩き出した。

『天本さん、明日って予定空いてますか?』

唐突に送られてきた或人からのメール。何やら俺に話したい事があるらしいのだが

……………相談か何かか?

(——話す相手ホントに俺で大丈夫か……?)

仮に相談とかだったら困ったな…俺、他人の相談とか受けた経験ほんの一、二回しかねえから上手く聞いてやれる自信がない。微塵もない。

「……何か、イズが隣に居ない或人って珍しいな」

「?」 そうですか?」

「いや、何かいつも二人一緒に行動してるイメージがあつたからさ」

ま、流石に休日。プライベートまで一緒ってのはおかしいわな。……あれ? 或人と

一緒に居ないなら、イズは今どこでどうしているのだろうか? (素朴な疑問) 製作所に

でも居るのか？

ちなみにこの後、昼食を摂ってなかった俺は遊園地内にあつた屋台で最初に目についたハンバーガーの屋台で昼食を済ませた。或人はというと隣で美味そうにチュロスにがつついていた。そんな急いで食うと喉に詰まるぞく？

「!? っほっほっ……!」

そして、案の定チュロスを喉に詰まらせ咳き込む或人。

「あーあ。ンな慌てて食うから……ほら、水飲め水」

「! ありがとうございます……!」

その背中を左手で摩りながら、右手に持った水の入った紙コップを手渡す俺。こう見ると何つうか、まだまだ或人も子供だなぁ〜と思う。……子供の頃の美月を思い出すなあ……（感慨）

「……本当に申し訳なかった。この通りだ」

「!?!」

飛電インテリジエンスの社長室に「不破諫」と「刃唯阿」の二人を呼んだ俺は率直に

そう述べると躊躇う事なく土下座した。それを前にした諫と唯阿は驚愕を露わにし、

「……一体、どういう風の吹き回しだ?」



「……簡単な話だ。私は私自身の愚かさを、罪の重さを知った。だからこそ、こうして君達に頭を下げている」

土下座した垓を厳しい目で見下ろして言う唯阿。対して垓は土下座をした状態から顔だけを上げて述べる。

「――勿論、私が今までしてきたことが謝って済む問題でない事は重々理解している」

「……………」

「だからこそ、無理に許してくれとは言わない」

二人は垓の変わりように驚愕半分・困惑半分で沈黙する。そんな二人を見てから、再び床に頭をつけ土下座した垓は次のように続けた。

「私はこれからの行動で君達に最大限の誠意を尽くそう。無論、協力も惜しまない。私の全てを……命を懸けてアークと戦うと誓おう。だから頼む――」

――垓は叫び、懇願した。

「――どうか彼に力を貸してくれ……!!」

自分達が一度として見たことのない垓。その姿を見た諫と唯阿――二人の仮面ライ

ダーは暫くの間、呆然とせざるを得なかった。

『なあ或人——お前は人間の味方か？ それともヒューマギアの味方か？』

あの日、天本さんに言われた言葉について俺は今まで考え続けてきた。天本さんは「忘れてくれた方がいい」何て言ってくれたけど……

『……………まあ遅かれ早かれお前が『答え』を出さなきゃいけない日は来るだろうけどな』  
天本さんが続けて言ったように……俺は『答え』を、結論を出さなきゃならない。人間とヒューマギアが笑い合える世界を作る、その夢を持つ限り……必ず……………！

(——俺の結論は……)  
答え

「そーいや、或人。聞きたかったんだが……何でここを集合場所に選んだ？ 何か思い入れのある特別な場所だったりするの？」

昼食を済ませ遊園地内をあてもなく歩いている最中、俺は隣を歩く或人に聞いた。待ち合わせに遊園地……深い理由はないの？と。

「……実は俺、昔ここでお笑い芸人やってたんです」

「あー、売れないお笑い芸人か」

「!? 何で売れなかったって知ってるんですかっ!?」

「いや驚き過ぎだろお前」

お前が売れないお笑い芸人だったなんて、ネットで「飛電或人 経歴」とでも調べれば幾らでも出てくるわ。何なら動画まである。

天津さんにゼロワンの話を聞いた時にどんな人物なのか興味本位で色々調べた時は参ったね。主にあのネタを何年も続けられるメンタルに（真顔）

コメント欄に書いてあった「しようもな」に完全同意だったわ……まあ実際に会って話して見たら悪いヤツじゃないのはすぐ分かったけど。

「ここは或人にとつちや馴染み深い場所ってことか」

「はい！ ……それと……」

「………ん？」

俺の言葉に元気よく頷いた或人はふと足を止め、遊園地内を見渡してこう口にした。

「ー俺が初めてゼロワンに変身して、戦った場所がココなんです」

それを聞き、俺は目を見開き驚く。初変身・初戦闘がココ……？ 遊園地……？ 天津

さんからある程度ライダー達の戦闘は見せてもらったが……初めて変身した場所なんて

当然俺は知らん。

(え、何それ凄い)

「何それ凄い」

「へっ?」

内心に浮かんだ気持ちがあるまま口に出る。

俺の初変身・初戦闘なんて公園から少し離れた場所にある夜中の路地裏ぞ? すごいな遊園地って……お披露目式か何かかよ。 すぐえ

「初めてゼロワンに……それじゃあ、ココが飛電或人——仮面ライダーゼロワンの原点ってことか」

俺は或人と同じように遊園地内を見渡した。そして、少しの間を置いてから或人は決心したように口を開く。

「——今日は、天本さんに……聞いて欲しい話があつて呼びました。……聞いてくれますか?」

それを聞いた俺は思わず破顔した。

「——俺なんかで良けりゃ、聞いてやるよ」

「俺、忘れてたんです。俺自身の最初の夢」

「最初の夢？」

「俺、笑いをとるのが夢でお笑い芸人を目指してたんです」

飛電其雄、自分の父親だったヒューマギアを思い出して俺は語る。

「それで、ココで初めて『ゼロワン』になって……マギアと戦って、人を守って……こんな笑いのとり方もあるんだなって知って」

「……」

「人や、人の笑顔を守る為に戦おうって思って……それから、ヒューマギア達と関わっていい中でヒューマギアも守りたいって思って……」

ゆっくり、俺は語り続けた。

「人間とヒューマギアが笑い合える世界を作りたい……そんな、新しい夢を持ちました」  
「……うん」

天本さんはただ静かに俺の話聞いてくれている。それがただただ有り難かった。

「……その夢を持つ中で俺、きつと心のどこかでヒューマギアを盲信してたんだと思います。ヒューマギアの純粹さばかり目が行って、ヒューマギアの危険性から目を背け

て……」

「……………」

「ヒューマギアは悪くない。悪いのは全部人間なんだって。無意識にヒューマギアに偏った考え方をしちやつてたんです」

そこで一旦語りを止め、俺は天本さんに向き直りー俺自身の結論を述べる。

「――俺は一人でも多くの人の笑顔を守りたい」

「――」

「――それにヒューマギアだって、破壊せずに救えるのなら……救いたいし、守りたい」  
飛電インテリジエンスの社長として、俺には責任がある。

「でも、もしもヒューマギアが、自分の意思で悪意をラーニングして……何の罪もない人を傷付けるなら……俺が責任を持ってそのヒューマギアを破壊します」

今までのように、ヒューマギアの悪い部分から目を背けるような事はしない……しつかりと向き合わなきゃいけないんだ。

「――そして、破壊したヒューマギアの事は二度と忘れない。もしかしたらエゴかもしれない……だけどつ、これが今の俺が出した結論です」

それを聞いた天本さんは肯定も否定もせず、嬉しそうにと、悲しそうにと……どちらにもとれる微笑みを浮かべてただこう言った。

「——そうか」

或人の出した結論。

それが正しいのか、間違いなのか何て俺には分からない。だから、俺から或人に何か偉そうに言うことなんてできなかつたし……そんな必要はなかつたんだと思う。きつと飛電或人は前に進めてるだろうから。

---

その後、太陽と或人の二人が遊園地内をまたあてもなく歩いていった時だった。

(ヒーローショーか……懐かしいなあ)

「? イズから電話? はい、もしもし?」

遠くに見えるステージでやっているヒーローショーを見て、懐かしく思っていた或人のスマホが鳴り、スマホをポケットから出して或人はイズからの電話に出た。

『或人社長。飛電製作所に滅亡迅雷。netの雷が現れました』

「……ええええええええ?!?!? ちよ、イズは大丈夫なの!?!」

「うわっ! 急にどうした?」

「何が何だかわからないけどすぐにそっち行くから!」

イズからの衝撃の第一声を受けて驚愕の声を上げた。或人はイズの言葉を冷静に聞く余裕もないのかすぐに電話を切る。

「天本さん、一緒に行きましょう!」

「えっ、いや待て或人。マジでどうしー!」

「――製作所に滅亡迅雷の雷が現れたんです!」

「……はああああああ?!?!?」

先程の或人のように声を上げた太陽は或人以上のリアクションを見せ、

「おまつ、それ早く言えよ! さっさと行くぞ!」

「はいっ!」

そして、二人は急いで飛電製作所へと向かうのだった。



## ある男の虫の知らせ

「案外、早く着いたな……」

飛電製作所に辿り着き、一見「平然」といった感じで呟く俺だったが、

「はあはあ……」

「あ、天本さん！ 大丈夫ですか？」

「はあ……どうだ？ 今の俺大丈夫に見えるか？」

今さっきまで或人が立ち漕ぎするチャリ相手にダツシユで並走していたのだ……息切れがヤバイ、酸素が足りない。いやあ歳かな？（確認）……歳だったわ（実年齢32歳・人生経験20年ちよつと）

「ぜんっぜん見えません！」

「じゃあ大丈夫じゃないなあ！」

或人の即答にヤケクソ気味にいい笑顔を返す俺。

チャリ相手に、走りで追いかけるのは……ハア、流星にキツいっ……！ でも、仮面ライダーとして戦ってきた影響で体力や足の速さはかなりレベルアップしてると実感し

たわ。まあ？十二年以上前までマギアやら滅やら……マジのモンスター共と戦ってきたんだ。身体的に何かしら適応、レベルアップしてないと逆におかしいって話だろう。

……実際のところ身体の「耐久力」<sup>丈夫さ</sup>に関してはレベルアップした感じはない。仮面ライダーになる前、元からこんな感じだった気がする。……おいそこ。真顔で「化け物じゃん」って言うんじゃないよ。世の中広いんだから俺より丈夫な人だって探せばいるんだよ！ という訳で俺は一般人！ Q. E. D. 証明終了ッ!! (必死)

【シヨットライザー！】

「はあ……っし。或人。言う必要もないだろうが、すぐに戦闘になってもいいように準備しとけよ」

「はいっ！」

【ゼロワンドライバー！】

裏口から飛電製作所の中に入る前に確認の為、シヨットライザーが取り付けられたバックル&ベルトを装着した俺は或人にそう伝える。或人は力強く頷くと懐から取り出したゼロワンドライバーを腰に当て装着。

戦闘になった場合に相手がこっちの変身前に攻撃してくるなんて割りとしよつちゅうあつたからな。こうやって事前にベルトを巻いとくのはかなり重要なよコレが(経験者は語る)十二年<sup>当時</sup>前は若く……この重要性を理解しておらず生身でマギアに二度三度殺

られかけました。心底ヒヤヒヤしましたハイ。

「……………」

そして、先行してドアを開けた俺はバツクルから引き抜いたシヨットライザーを構えて製作所内に入っていき或人もその後が続く。……ヨシつ、行くぞ。

「！ 或人社長つ！ 天本様！」

「イズ！」

オフィスの扉を豪快に蹴り開け、銃を構えながら中に入っていく太陽。後ろについていた或人はイズの姿を見て一瞬ホツとした表情を浮かべ、

「ーよお、お邪魔してるぜ」

「！ 雷！ 一体何しにきたっ!？」

ー製作所のオフィスの一番奥、そこにある自分のデスクにどしりと腰掛けた雷を見た或人はイズを守る為に自分の後ろに移動させる。それを見た雷はニカツと笑うとデスクから下り、

「ー動くな。動いたら躊躇なく撃つぞ？」

「ああ……？ 誰だお前？」

或人に一歩近付こうとし、横からの声と向けられた銃口に雷は足を止めて苛立ちながら問うた。それに答えることなく太陽は油断なく雷を見据え……その鋭い目が彼の言動が脅しても何でもないことを雄弁に語っている。

「答えろよつ、雷！ お前はここに何をしにー」

そんな雷に或人は再びそう聞き「早く言え」と告げるかの如く、太陽もまた雷の頭へとショットライザーの照準を合わせた。

「はあ……つたく、面倒くせえなあ……社長！ 俺は雷じゃねえ、宇宙野郎雷電だ！」

「……………えつ？」

そして、雷の予想外な発言に或人は困惑気味に声を零し、太陽は内心首を傾げる。

「宇宙野郎雷電……？ 或人、何だそりや？」

「え、えつと……宇宙野郎雷電っていうのは雷が雷になる前の……宇宙飛行士型のヒューマギアの名前で……」

「……………随分な名前してんな、一瞬新手の罵倒かと思つたぞ」

或人の説明を受けて「飛電さんのネーミングセンスよ……」と今更ながらに驚いた様子を見せる太陽。だが、その間も銃口は宇宙野郎雷電？を捉えていた。

「つたく、おいテメエ！ さつきからこつちに銃向けてんじゃねえ！ カミナリ落とすぞ！」

「ハッ、人類滅亡を謳うテロリスト集団……その構成員の一人に銃向けんのは当然だろうが。人としてギリ正当防衛だ」

宇宙野郎雷電？は未だ銃を向ける太陽にキレて怒鳴るが、それに一切怯まずにむしろ鼻で笑う太陽。

「雷……いや、お前は本当に……兄貴なのか？」

「はあ？ 何度も言わせんな、俺は宇宙野郎雷電！ 宇宙を股にかけて仕事をする宇宙飛行士だっ！ テロリストなんかじゃねえ！」

「……こう言ってるがどうする？ 俺は雷なら情報として知ってるが、宇宙野郎雷電は知らない。判断はコイツを知ってるお前に任せる」

まだ確証を持ってない或人だが、太陽の言葉に暫し考えてから……正直な答えを出す。

「雷……俺はまだお前を兄貴とは、信じられない」

「……………」

「でもっお前が兄貴だつて……俺は信じたい。だから、頼む。俺にお前が兄貴だつてこれからの行動で信じさせてくれ」

「はっ！ お安い御用だ！」

それを聞いて宇宙野郎雷電？は或人の知るあの兄貴のように笑う。これだけのことや或人は少しだけ彼の言葉を信じれそうになった……自分でもそれに「甘いなあ……」

と思いつながら苦笑する。

「……いいんだな？」

「はい、ありがとうございます。太陽さん」

「別に大したことじゃない。認めたかないけど……こういう役回りは慣れてるからな」

或人の答えを聞いて、宇宙野郎雷電に向けていたショットライザーを下げ、バツクルに取り付けた太陽は、

「或人の判断を信じて、俺もお前を少しは信じる。だけど、少しでも怪しい動きを見せたら撃ち抜くからそのつもりでな……まあ何だ、こいつ向けて悪かったな」

バツクルに取り付けたショットライザーをトントンと軽く叩き、宇宙野郎雷電へと謝罪した。太陽の謝罪を聞いた宇宙野郎雷電は呆気にとられた人間のよう目を見つめ、りときさせ「怖いなアンタあ……!？」と吐く。先程まで本気で銃を向けられていた相手からの割と優しい謝罪……宇宙野郎雷電のリアクションは当然のものだったと言える。

「衛星アークの破壊？」

「ああそうだ、あのアークをぶつ倒す為にな」

「衛星アークは確か、デイベレイクタウンの湖の底に沈んでんだろ？ しかも場所もハッキリとは判明してない。一体どうするつもりなんだ？」

宇宙野郎雷電のヤツの目的は「衛星アークの破壊」だった。そのために或人に協力を求めにきたというのが……一体どうやって湖底にあるアークをぶつ壊すつもりなんだ？ それを俺が聞けば、

「はっ、そりやまだ内緒だ。だけど上手く行けば100パーアークを破壊できる筈だぜ！」

……宇宙野郎雷電はニヤリとしながらそんなことを言いやがる。いやお前さあ……ここは包み隠さず全部言えや!? お前さっきの或人の答え聞いてたか？ 俺の撃ち抜く発言聞いてたか？ もしかして、宇宙野郎雷電って元からこんなキャラなの？（呆然）

「……よし、分かった！ じゃあ兄貴っ案内を頼ー！」

「ーーストップ或人」

ちよ待てよ！（キムタク）お前は疑うことを知らんのか!? いや知ってる筈だよなあさっきの「信じさせてくれ」って発言から見て。多分、或人の知ってる宇宙野郎雷電ってヤツに今のこいつはまじで行動・言動……全部がそっくりなんだろう。だから、深く考えずに即座に信じちまいそうになっただ。だから、深く

「ちよつと作戦タイムだ、一旦雷電のやつを外に出させてくれ」

「！ わかりました……悪い兄貴！ 少しこつちも準備が必要だから先に外で待っててくれないか？」

仮に俺も「宇宙野郎雷電」を知っていれば信じたのかもしれないが……今回に限っては知らなくて幸運だったかもしれない。全員が冷静に判断できなくなるのはヤバイ以外の何物でもねえし。

「ああ？　たたくしゃねえな。分かった分かった。あんま時間かけんなよ？」

宇宙野郎雷電は僅かに不満を表情に出しながら、理解を示して先に製作所の外に出ていった。そして、

「少しは人を……いやヒューマギアを疑え、或人」

「！　す、すいません天本さんっ！　自分でも甘過ぎるとは思ってるんですけど、つい……」

「あーいや、別に責めてるわけじゃねえんだ。相手が誰であれ疑わずに信じられるのはお前の美徳だと思うしな……でもー」

俺は或人に大切なことを告げる。どれだけ人を、ヒューマギアを信じてくれても構わない。だけど、

「ーこれだけは覚えておいてくれ。確かにヒューマギアは純粋だ。だけど、一度悪意をラーニングしたヒューマギアが尚も純粋とは限らない」

「っ！　……はい、天本さん。ありがとうございます」

「……はっ、何感謝してんだよ」



宇宙野郎雷電の提案衛星アークの破壊……それがもしアークの罠だとしたら、俺達は一溜りもないだろう。まあそうなたらなつたで、俺はとことん粘つてやるつもりだが。

「作戦タイムつたが、或人。悪いけど外で雷電と一緒に待つてくれ。くれぐれも油断すんなよ？」

「分かりました！ ……つて、天本さんは何を？」

俺がそうお願いすれば或人は元氣よく返事し、不思議そうに俺を見た。

「……まあ、ちよつとな。打てる手は全部打つておきたいんだよ」

流石に俺と或人、二人じゃ不安があるからな。……なければいいけど、滅や亡までアークとセットで来られた場合一方的にボコられる未来が見える見える（そうなたら絶望）

最悪の可能性を考えて手を打ち、行動する。これもまた大事なことだ。

「それと、悪いけどイズ。お前に頼みたいことがある」

「！ ……奇遇ですね。私も天本様に用件があります」

——最後に俺はイズにある頼みをする。

「もし或人に何かあつた時、これを或人に渡してくれ。念の為の『秘密兵器』……つて言える程のものじゃあないけど。きつとコイツは或人の……アイツの役に立つ」

「了解しました、では私からはこれをー」

ーそして、俺はイズからある物を受け取った。

『次に会った時……ソレが貴様の最後だ。天本太陽——仮面ライダーバルデル』

アークのあの言葉がずっと頭から離れない。

恐怖のせい？ うん、それもあるだろうな。俺はいつだってビビってる……格好悪い話だけだ。

（たとえ何年戦って……どれだけ上手く立ち回れるようになっても、自分の力に自信がついても、どんな強敵を倒しても……俺の中にある恐怖が綺麗さっぱり消えることはない。恐さに慣れることだってきつとない）

心のどこかで確信してるんだ。

この恐さを忘れてはいけない、と。

（今回……またあの時みたい、嫌な予感がする）

十二年以上前のあの時、滅との決戦以前に感じていたものと同じものを嫌なことに俺はまた感じてしまっていた。

——自分の最後、その予感。出来ることなら勘違いであつて欲しい。そう心から願つ

ちやいるが……

(嫌な予感ほど、よく当たつちまうんだよなあ……)

打てる手を全て打ち、俺は改めて覚悟を決める。

「――絶対に生き残る」

そして、絶望が始まる。

## パーフェクトコンクルージョン

或人と共に宇宙野郎雷電——雷に着いてきていた俺達。

「——なあ、あんたはアークが次に何をしようとしてるか分かるか？」

「……ただの一般人な俺如きに、人間の悪意を学習した衛星様が次にどんな行動に走らんざ分かるわきゃねえだろ」

（まあ、人類に害のある事するんだろうなってことは分かっているが……）

先頭を歩く雷電のその質問に俺は当然の如く首を横に振る。アークの事を「衛星様」と嫌味で俺が言ったのを聞いて雷電は「ハッハッハッ！」と愉快そうに笑い、

「一般人……？」

「……或人、何か文句でも？」

「いえっ！ 何もっ!!」

或人は何故か「一般人」というその単語に引っかけかりを覚えたように首を傾げ、俺の僅かながらの怒りが籠った声にその場でピシッと気をつけをする。

（どうしてあの人もこの人も、揃いも揃って俺を一般人じゃないと思ってるんだよ。俺を

逸脱人か何かと勘違いしてませんかねー……?」

断じて言おう、俺はただの……人間だあ!!と。

「それもそうかあ……アークの野郎の今の狙いは衛星ゼア、野郎はゼアを乗っ取ろうとしてんだよ」

「衛星ゼアをか? は、いやどうやって?」

衛星が衛星を乗っ取るのか……(困惑)

雷電の言葉に俺は目を丸くし、自然と首を傾げた。衛星ゼアをアークが狙う理由は分かる。アークにとっちや自分と同格の存在かつ、驚異になり得る存在だ。ゼアをどうにか潰せればアークは最終目的……人類滅亡にまた一歩ぐんと近付いてしまいうに違いない。

しかし、衛星ゼアを乗っ取るってのはどういうことだ? まさかアークが自ら衛星ゼアのいる宇宙まで行って直接ハッキングするとかって話じゃないだろ? ……じゃ、じゃないよな?

「何でも、プログライズキーに保管されたライダモデルを媒介にすりやあゼアに強制接続できるんだとよ」

「はあ……? ンなことできんのかよ……」

腐っても衛星って訳か。アークの衛星ゼアを乗っ取る手段を知り、俺は思わず溜息を

つく。ライダモデルを使って衛星を遠隔から乗っ取る……それは間違いなく人じやない機械だからこそ取れる手段なんだろうなあ。くそつたれがあ

「ーなあ兄貴、聞いていいか？ ゼアを乗っ取るのにライダモデルを媒介にするって言ったけど……その正確な必要数とかってあるのか？」

俺がアークに心中で罵倒を吐く中、或人は雷電から聞いた情報を呑み込み、気になった箇所について質問した。

（あと二、三個プログラムイズキーが手に入ればもう充分とかだつたら絶望過ぎるんだが……）

或人の質問を聞いて俺は思考を巡らす。

衛星ゼアへの強制接続、乗っ取りに必要なライダモデル……それが保管されたプログライズキー。もしその必要数が二、三個とかだつたら防ぎようがない。だってそうだろう？ 強い上に神出鬼没のアークなら、プログラムイズキーの強奪なんて容易だ。プログライズキーを所持したライダーが一人にいるところを容赦無く襲えばいい。それだけなんだから。

（仮にアークが衛星ゼアを乗っ取った場合……）

今すぐに思いつくだけでも幾つかの問題が生まれる。まず、これは天津さんから聞いた話だが「ゼロワン」の変身時に使用したプログラムイズキーのライダデータイメージモデルを衛星ゼア

からビームのよう出現させているらしい。なら、衛星ゼアがアークの手に落ちればゼロワンの変身にも弊害が起こる筈だ。それにゼアによつて管理され、稼働中の多数のヒューマギアにだつて悪影響が出る……

(最悪、稼働中の全ヒューマギアが一斉にマギア化したり……いや、自分で想像しておいて絶望過ぎるなそれは)

全ヒューマギアがマギア化……そうなつたら人類がどうなるかなど、想像に難くない。その先に待つてるのは紛れもない人類にとつてのディストピアだろう。

「うーん……さあな……」

「……はっ?」

そんな風に絶望的未来を脳内で想像してしまつた俺は雷電の「知らね」と同義の返答に現実を引き戻され、思わず或人とシンクロして声を重ねて呆気にとられる。

今何つたこいつ?と瞬きを二、三度してから俺は何とか口を開いた。

「いや、おまつ『さあな』つて……分かんねえのかよ?」

「あんたはあの野郎が自分の情報を好き好んでペラペラ話すようなヤツに見えんのか?」

「……あー、成る程」

「OK、そういうことか」

「おう、そういうことだ」

続いているの問いに言わんとすることを理解して俺達は納得する。あのアークが一応仲間とはいっても、自分の情報を他者に語るとは思えない……語ってもそれは知られても無問題、必要最低限の情報に過ぎないのだろう。

「もし、野郎が必要なライダーモデルが残り僅かならとつくに動き出してる筈だ……ならー」

「ーまだ動き出してない今、必要なライダーモデルの数は…割と足りてないって考えていい……そういうことか？」

「楽観視はできねえがな」

俺は続くであろう雷電の語を継ぐように口を開く。現時点では、まだアークは目立った行動を起こしちやいな……その事実から誰でも導き出せる簡単な答えだ。

「問題は山積みってことですね」

「はあく、だな」

額を片手で抑え、俺は溜息を吐いて或人の言葉に同意する。最近は一アークのせいでの疲労がすぎえんだよなあ……心做しか溜息も増えた気がするし。

昨日は一アークにボコられる夢見て甦されたし（災難）

「ー……ふっ」



「……………なんだよ?」

そんな俺を見て、何が楽しいのか雷電の野郎は面白気な様子で笑っている。同時にその笑みは好戦的なものにも見えた。

「いや、あんたも弱気になんだなって思ってた? いきなりテロリスト相手に銃向けてきたり、俺の睨みにも動じねえ……………てつきりあんたは弱気になんてならねえ人間だと思ってたぜ」

「……………ひでえ勘違いしてんなお前? 俺は何度も言うが一般人。どこにでもいる『ただの人間』だ。そりゃ弱気にもなる。……………おい或人<sup>そご</sup>、また不思議そうに首傾げてんじゃねーよ」

どうやら雷電のイメージの中の俺は随分と強キャラらしかった(それと或人の中で)。一切弱気にならない……………ああ、もしも俺がそんな強い人間だったならどれだけよかったことか。

「ー残念だが、俺は強くない。」

「ー自分より遥かに強い相手を前にすりゃあ人並みに恐怖を感じる。」

「ー痛いのだし、逃げたいと心中で幾度となく思う。やはり俺は紛れもないただの《一般人》だ。」

「ーでも、ただの人間の癖にアークとは戦うんだなあ?」

「……………」

そして、可笑しそうに言う雷電を見て、

「まあ俺も、腐っても『仮面ライダー』だからな」

——俺は最も頼りにしてきた黄緑色のプログライズキーを取り出し、片手に持ったそれを見つめながら呟き、ゆっくりと顔を上げる。

——【仮面ライダー】——

その名に恥じぬ為にも、何より俺自身の為に。

俺は俺の守りたいものの為に戦うと決めたんだ。

「誰が相手だろうが、未来は奪わせない。俺は、俺が守りたいみんな皆の未来を守る為に戦う。それが——仮面ライダーバルデルだ」

『了解しました、では私からはこれを——』

製作所でイズはそう言って俺にある物を手渡した。

『……………えつと……………』

………（え？）

それを受け取った俺は暫しの沈黙の後、困惑してポロリと眩く。外観・形状だけ見ればとても見覚えのあるソレは……

『ーな、何これ……？』

カラーリングがシルバー1色？のプログライザーだつた。360度どこから見ても銀、銀、銀……というよりは金属の色そのままといった具合で、如何にもメタルって感じだ！……自分で言つててよくわからん。

『……無反応じゃん』

試しに通常のプログライザーと同様に付いていたボタンを押してみる。が、光らないし音は鳴らない。完全なる無反応。つうかこうなったらコレもうただの金属の塊じゃね？ 使い道あるか？と素直に思う。

『それは通常のプログライザーとは異なり、生物種のデータイメージが未だ保管されていない空のプログライザー。通称、ブランクプログライザー……いえ、プログライザーするデータは入っていないので正しく言えばブランクキーです』

『ブランク、キー……』

その単語を聞いて一瞬、俺の頭の中には車の溝とかがない鍵がパツと浮かぶ。名前が同じなのは偶然だろうか？ いや考えるまでもなく偶然ですなはい。

『それでこの一見、無用の長物キーは何なんだ？ ライダモデルが保管されてないとか、空だとか、今の説明からして聞く前から察しつつあるんだが……こいつには何か固有の能力だとか機能はー』

下らない考えを脳内からさささと放棄して、俺は手元にあるブランクキーとやらについてイズに尋ねた。

『ー勿論、何のデータもない、空のプログライズキーですので固有の能力・機能はありません』

『……わかった、つまりはただの金属の塊だつてことか』

『はい、現時点ではその通りです』

『そこは否定して欲しかったあ』

(このプログライズキー) ダメみたいですね……。

イズの嘘偽りのない正直な返答に、俺は思わず手元にあるブランクキーに目を下ろして片合掌する。

『ちなみに聞くけど、何でこれを俺に？』

『それを貴方に託すべき、というのが衛星ゼアが導き出した結論の一つだからです』

『ゼアが……？』

ゼアさん……これを一体どう使えと？

何だ、これがかもかして重要なアイテムだったりするわけか？

(使い道がさっぱりわかんねえ……ポケットにでも入れとくか)

もしかしたら、未来にバククトウザする某映画みたいにこれが防弾チョッキ代わりになつて戦闘で役立つ可能性が微レ存？ (小声) ……つうかこのネタ通じる人居るか？

こうして、俺はイズから受け取つた使い道が行方不明な「ブランクキー」を左の胸ポケットに仕舞う。当然この時点で——現時点でもだが——俺にはゼアの意図・結論が全く理解できていなかった。

(コイツは、役に立つかねえ……?)

そんなイズとのやり取りをふと回想し、左胸ポケットに納まるブランクキーに目を向けた俺は思う。

(……今は、ゼアの予測とやらが絶望的なこの現状を……好転させてくれることを信じるしかないか)

もし好転しなかったら？ そんな時は……俺達が全身全霊、死に物狂いでアーク達と戦うしかないだろう。アイツの目的は人類滅亡だ。なら、諦めるなんざ論外だ。

そんなことを考えた後、前を向いた俺は前方を歩く雷電と或人の後についていこうと再び歩き出し、

「ーッ！ つぶねッ…!?!」

ー突然背後に気配を感じて咄嗟に後ろを振り返り、目前に迫っていた鋭利な白い爪をギリギリで躲す。一秒でも反応が遅れていれば間違いない今なのでお陀仏だった。

「！ ハッ！」

「！ ぐ、このッ！」

相手が続いて振るった攻撃を掠りつつも何とか捌き、また背後に回り込んだ相手の方を見ずに俺は後ろ蹴りを噛まず。

「ーやはり、そう簡単には仕留められませんか」

後ろ蹴りを受け、素早く飛び退き距離をとった相手ー青い複眼に白いアーマーに身を包んだ野郎は冷静に呟きやがる。

急襲に苛立ちつつ、俺は敵を睨み据えて口を開く。

「はあ……っ、テメエとんだ挨拶だなオイ？」

「！ 天本さんっ……!?! お前はー」

「ーッ!?!」

そして、振り返って事態に気付いた二人は驚きを露わにしつつも素早く臨戦態勢に入る。

「亡……成る程な。お前あの時、滅と一緒にいたヒューマギアか？」

滅の夢を叶えるのが夢、そう言つてやがったヒューマギア「亡」。仮面ライダーになれるとは天津さんから聞いていたが……実物を見たのはこれが初だな。そう思いつつ取り出したシヨットライザーを構え、

「ー待つていたぞ雷、飛電<sup>ゼロワッセン</sup>或人、天本<sup>バルデル</sup>太陽」

「ー……………」

ーそのタイミングで飛び退いた亡の後方から二つの人影が現れた。

「ーアーク！ 滅！」

人影の正体は既に変身完了済みのアークと滅……何だ、愉快に全員集合つて訳か？ いや、こつちは全然愉快じゃねえーぞバカ！

「お前らッ！ 何でここにいやがる…!？」

「雷電！ その台詞がマジならコイツはお前の仕掛けた罠じゃない、そう思つていいんだな？」

「つたりめえだッ!!」

「だつたら何で……いや、今は考えてる場合じゃない！ 天本さん！ 兄貴！ 一先ずはー」

雷電の台詞がマジなら、ここに居る亡は……雷電の行動が全部アークに予測されてたつてことか？ ……いや！ 今は或人の言う通り考えてる場合じゃないよなあ？

今は——

「ああ、変身だッ！ 行くぞ或人！ それと雷電！ お前は正直信用できねえが……その台詞がホントなら、行動で示せッ！」

『ストロング！』

——戦うしかねえ……!!

装着済みだったバックルにショットライザーを取り付け、俺はプログライズキーを手に取りボタンを押す。

「ハイッ！」

「言われなくてもそのつもりだア！」

『Everybodyジャンプ！』

『ドードー！』

それに力強く応えた或人と雷電もまたそれぞれのドライバーを装着し、自身のプログライズキーを取り出し、

【オーソライズ！】

【プログライズ！】

【——変身ッ！】

【ショットライズ！】



〔メタルライズ！〕

〔フォースライズ！〕

プログライズキーを装填しー変身する。

『アメイジングヘラクレス！』

〔With mighty horn like pincers that flit  
p the opponent helps.〕

シヨットライザーから放たれた弾丸に俺は右のアッパーを打ち込み、いつもの様にー黄緑と白、二色のアーマーが次々に装着される。

〔Secret material 飛電メタル！〕

『メタルクラスタホッパー！』

〔It's High Quality.〕

現れた銀色の飛蝗、その一体が分離し群れとなって或人の全身を覆い尽くす様に集まりー飛電メタル製のアーマーと化す。

〔Break Down.〕

赤いスーツを身に纏い、ゴムの様に伸縮したアーマーを勢いよく装着した雷の体にー紅い稲妻が轟き走った。

変身した俺達の相手はアーク、滅、亡の計三人……

「ーいいだろう、かかって来い」

「うおおおおーッッ！」

「はああああーッッ！」

「おらあああーッッ！」

デイブレイクタウンの橋の上、アークの一言を皮切りに俺達の戦いは始まった。

【ゼツメツ デイストピア！】

「元は味方でも、邪魔するなら容赦しねえッ！」

《left》雷《left》 剛

デイス トピア

雷は両手に一本ずつ持ったサーベルを地面に突き刺し、レバー操作を行い必殺技を起す。腕部から強烈な紅き雷を放ち、更にそこから地面に突き刺したサーベルを引き抜き、赤い斬撃波を飛ばす。

「ッ！ かはっ……！」

「ぐっ……！ 滅っ！」

「オイオイ、どうした？ ンなもんかよ滅！ 亡！」

「威勢がすげえなコイツ……！」

「ハッ！ そりやお互い様だぜバルデル」

——状況を言えば、太陽、或人、雷の三人は案外……かどうかは不明だが何とか互角にまで渡り合っていた。その要因としてはゼロワンが戦闘を有利に運ぶ為、アークと単騎で戦っているからに他ならない。

「はあッ！」

「ふっ！」

ゼロワンは一对一でアークと。バルデル&雷は二対二で滅&亡と。それが現在の対戦カードだった。

「せやああつー！」

【チャージライズ！】

「グツ…！ コイツは、さっきのお返しだ！」

【フルチャージ！】

迅速にバルデルに肉迫した亡はその腕部についた白き爪を振り下ろし、それを取り出したアタツシユショットガンで受け止めたバルデルは反動に僅かに歯を食いしばり、

【カバンシヨット！】

「ーオラア！！」

「ぐうつ…!？」

ーチャージが完了したアタツシユショットガン、その必殺技を超至近距離で放ち直撃させた。それをもろに食らった亡の体は当然の如く大きく吹っ飛ばされる。

「どらつー！」

「！ つ、そこだ！」

「うおつ!？」

その横では雷が必殺技を受けて倒れた滅に追撃し、滅が的確に雷の動きを読んで攻撃を往なし反撃にアタツシユアローで背中を斬りつける。

「くつ…滅、あなたの言った通りでした。バルデルはやはり一筋縄ではいかない。手

強い相手の様だ」

「ああ……あの男はいとも容易く過去のデータ以上の力を発揮する。今のバルデルを相手にデータのラーニングは無意味だと考えるべきだろう」

バルデルと亡の戦闘は前者が有利に立ち、雷と滅の戦闘は後者が有利に立っていた。

滅はバルデルによって吹っ飛ばされた亡を庇う様に後方に下がると、亡の前に立ち武器を構える。

「雷電！ お前なんかその剣以外に使える武器は？」

「ああ、あるぜ！ こいつがな！」

【アタツシユシヨットガン！】

「いやお前もそれ持つてんのかよっ!？」

そんな滅と亡を前にバルデルと雷は、

「ンならー同時攻撃だツ！」

「賛成だア、派手にブチ噛ますぜ！」

【チャージライズ！】

【フルチャージ！】

ー手早くアタツシユシヨットガンを変形させて「同時必殺技」、その発動準備を完了させる。偶然にも二人の武器は同じだった。

【チャージライズ！】

「させるかつ！」

【フルチャージ！】

「滅一人では……！ 私も！」

バルデルと雷の同時必殺技を前に滅はアタツシユアローを変形させ、此方もまた必殺技を発動しようとした。それを見た亡は片手でアタツシユットガンを受けた箇所を抑えながらも立ち上がり、もう片方の手でフォースライザーのレバーを操作する。

【カバンシヨット！】

「おらあああッ!!」

「はあッ……！」

【カバンシユート！】

「やあああーッ!!」

【ゼツメツ デイストピア！】

瞬間、バルデルと雷はアタツシユットガンに収束した激烈な青のエネルギーを同時に発射し、それに対抗するべく滅はアタツシユアローから紫のエネルギーを放つ。亡はそんな滅をカバーするべき必殺技を発動し、白き嵐を巻き起こす。

「チッ……！」

「へっ、やるじゃねえか！」

「亡、よくやった」

「この程度お安い御用です」

「結果、必殺技は完全に相殺する。」

「バルデル、あんたメチャクチャできるじゃねえーか！」

「そいつはどうも……この調子で倒すぞ」

「おうよっ！」

互いに一旦距離を取り、横並びに立ったバルデルと雷は敵を見据えながらも少しの会話を交わす。二人は性格が所々で近い部分があるのか、中々息が合いコンビとしての相性は良かった。

そして、戦闘は一瞬の間を置き再開し、

「アークがゼロワンを倒すのは時間の問題だ。そうなればこちらの勝利は決まる……バルデル、お前達では我々には勝てない」

「……はは、そいつはどうだろうなあ？」

「？ 何——」

滅の冷静な判断による言葉にバルデルは仮面の下で不敵な笑みを浮かべ、その意味はその場に居たものは直ぐに知る事になった。

「サウザンド デストラクション！」

「「!?」」

——突如、滅と亡の後方からそんな音声が鳴り、

「——ハアアアアツ!!」

「——! グハツ!?!」

後方を振り返った滅と亡は目前に至っていた黄金のエネルギーを纏う飛び蹴りに反応し切れず、その威力に地面を転がる。

「フンツ！」

「ガハツ…!?!」

更に身を起こした二人の内、亡に接近したソレは正拳突きを打ち込み大きく怯ませた。そこで顔を上げた滅と亡が見たのは、

「ふっ! どうやら無事に間に合ったようですね?」

「ツ! サウザー…!?!」

——仮面ライダーサウザー、天津垓の姿だった。

「ナイスだ天津さん! マジで来てくれたのか…?…ってか不意打ちで必殺技って殺意高なえな! あと今の何か亡に対してだけ私怨入ってなかったか?」

「ははは、私が君の呼び掛けに応じるのは当然でしょう? それと私怨についてはノー



コメントとだけ答えましょうか」

(あつ、絶対私怨あるわコレ)

そのサウザーの登場にバルデルだけが驚愕する事なく、バルデルはサウザーにサムズアップをする。

「何故貴様がここに……!?!」

「悪いなあ、俺はこう見えて用心深いんだ」

サウザーが何故ここに居るか……それは事前にバルデルが「もしも雷電の行動が罠だったらor全部アークの予測通りだったら」という最悪の事態に備えて連絡し、協力を仰いでいたからだ。

ちなみにだが、焔は太陽に「亡にパンツ一丁にされた」件を隠していた。理由? あなたは親友に対し「過去に道具扱いしてた奴に大恥を晒かされた」という話を好き好んで話すだろうか? つまりはそういうことである。

閑話休題。

「ーそれに一緒にいた二人も連れてきましたよ」

「! まさかつ……!」

「マジでナイス過ぎる……!」

サウザーはそう告げると体を起こした滅と亡の遥か後ろを指差した。それに滅は急

いで振り返り、バルデルは小さくガッツポーズをする。

サウザーが指差した方向に居るのはゼロワンとアーク。そしてー。

【カバンショット！】

【カバンショット！】

「ー終わりだ、ゼロワン」

「クツ……!!」

バルデル達の元にサウザーが合流する数分前、アークが瞬時に作製した大量のアタツシユ武器に四方八方を包围されたゼロワンはピンチに直面していた。

（一か八か、アークに直接必殺技を叩き込むしかない……）

「うおおおおーッ!!」

ゼロワンはすぐに自分一人ではこの攻撃を全て捌くのは不可能と判断し、ダメージ覚悟での行動を執行しようと駆け出し、

『パワーランページ！』

『サンダー！』

『スピードランページ！』

「ーそいつは無茶が過ぎるぞ？ 社長！」

「ーああ、相も変わらな」

「ーそんな二つの声がゼロワンの耳に届く。

【ライトニング ブラスト!】

【ランペイジスピード ブラスト!】

「せやあああーッ!」

「らああああーッ!」

瞬間、ゼロワンの四方八方を包围していた大量の武器へ向けて二つの必殺技が撃ち込まれる。一つ目の必殺技は空を飛び、雷を纏った蜂の針の様な形をした複数の弾丸を空中分散させ、武器の機能を停止。二つ目の必殺技はファルコンのライダモデルのピンク色の両翼を使用、縦横無尽に飛行して振るった翼で武器を豪快に破壊した。

「不破さん! 刃さん! ど、どうして……!?!」

ゼロワンの前には翼を消して、勢いよく地面に着地したバルカンと翅を使いゆっくりと着地したバルキリー。二人の仮面ライダーが立っていた。そんな予期していなかった二人の参戦にゼロワンは衝撃を受ける。

(バルカン、バルキリー……何故ここに?)

またアークも同様にその登場に驚きを見せた。それはアークの予測ではこの戦闘で二人が登場することなど予測できていなかったからだ。

「どうして? そいつはこっちの台詞だ! 俺達に一声も掛けずに勝手にアーク破壊のために動きやがって」

「私達に気を遣つての行動何だろうが……余計なお世話だ!」

バルカンとバルキリーはゼロワンに駆け寄り、二人共が佇むアークへとショットライザーを向けながら文句を吐く。二人はゼロワンが自分達にこの件について知らせなかった理由を粗方察していた。

「確かにアイツの強さは半端ねえ……実際あの時、その強さにビビっちまった俺がいる。だけどな! だからってそのままビビりっぱなしじゃ格好がつかねえだろうがッ!」

「!……不破さん……」

「全くだな……或人、お前の懸念通り私もアークの力に恐怖した。二度と戦いたくなくとも思った。だが、ここで戦う事から逃げる訳にはいかない。私には……アークを復活させた責任があるからな」

「!……刃さん……」

ゼロワンー或人はアークとの戦闘で入院した唯阿の見舞い、アークとの戦闘直後の怯える不破の様子、そして実際に自分がアークと戦う中で或人自身もアークの力に恐怖心を抱いた。

だからこそ、アークを恐れる二人の気持ち痛い程理解できた或人は……これ以上二

人を巻き込まない様にと意図的に行動していた。

「それに、本当にデイブレイクの被害者だった太陽が……アークに最も恐怖を覚えてる筈の男が戦つてゐるって知って……俺達が逃げる訳にはいかねえだろ！」

「その通りだ。元は一般人だったバルテルあいのが戦つて、私達が逃げるなんて……そんな恥ずかしい真似ができるか！」

しかし、どうやら二人は或人の知らぬ所で何やら良いショックを受けたらしい。

「行くぞ社長！俺達で……アークをぶつ潰す！」

「立てゼロワン！私達で……アークアークを対象を破壊する！」

「ツ!! ああー！」

或人の配慮を理解しながらも、諫と唯阿は己の意志で再び戦うことを決意し……その覚悟を聞いた或人は力強く応え……

「アーク！お前を止められるのは【俺達】だ！」

……立ち上がり、アークを指差して最後にその指を自分へと向けた。

（アーバルデル、やはり貴様は例<sup>イレギュラー</sup>外だ）

全くの予測外の展開アーバルカン・バルキリーの登場に後方で滅と亡を吹き飛ばして現れたサウザー……それにアークは改めて天本太陽バルデルが大きな脅威だと確信した。

（純粹な力だけではない。あの男は無意識にか周りに大きな影響変化を与えている……何より厄介なのはアーバルバルデル天本太陽が要因で起こった展開は私の予測を超える……私が一切予測できないという事だ）

ゼアと同様に予測できないバルデルの存在が関われば、途端にアークの予測外の事態が発生する。

（貴様は一体何なのだ!?!）

アークの本音はこれに尽きた。

「アー馬鹿な……私が押されている、だと?」

そんな思考をしながらゼロワン・バルカン・バルキリーの三人を相手取っていたアークだが、バルデルの影響が大きいのか……三人の動きはアークのメモリーにあるどの戦闘データよりも数段上のレベルに到達していた。

「一気に決めようッ! 不破さん! 刃さん!」

【メタルライジング インパクト!】

「おう! 全力でぶっ潰してやるッ……!」

『パワーランページ！』

『スピードランページ！』

『エレメントランページ！』

『オールランページ！』

『ランページオールブラストファイバー!!!』

「不破！ 或人！ 息を合わせる事を忘れるなよっ！」

『サンダー！』

【ライトニング ブララストファイバー！】

アークを圧倒する三人は、更に素早く各々が必殺シークエンスを完了させ、

「二ーハアアアアアッ!!!」

「一ーぐううううーッ!!」

一ー三人同時のライダーキックを放つ。

それを防ごうと両腕をクロスさせ、瞬時に防御態勢を取ったアークだが必殺技の威力は凄まじくアークは吹き飛び地面に倒れる。

(っ、こんな結論はありえないッ……!)

必殺技を食らったアークの損傷は激しく、多くの箇所から火花が散り出る。そして、アークはこのままでは乗っ取った迅のボディがダメージに耐え切れず変身が強制解

除される事を悟った。

「ー迅が自我を取り戻したとしても対処自体は可能だ……だが、目的を達成せぬまま一時的にボディーを失うのは極めて痛手だ」

「ーよし！ この調子なら……勝てるっ！」

そんな中、ゼロワンはこのまま三人の力を合わせればアークを倒せると判断して追撃の為に動き出す。しかし、

「ーいいや、お前達が私に勝利する事はありません」

「！ かはっ…!!」

「社長!? テメエ……」

ー次の瞬間、機械らしく一切の痛みを感じさせない動きでスツと起きたアークはゼロワンの振り下ろしたプログライズホップブレードを掴み、素早く奪い取ると逆にゼロワンに振り下ろした。

「二つ、教えてやろう。私の今の目的はお前達仮面ライダーの殲滅などではない。私の今の目的は……飛電<sup>ゼ</sup>或人<sup>ロワン</sup>、お前のデータを奪うことだ」

「何だと!?!」

「ふんっ!」

「ぐはッ!?!」



そして、目の前に立つ三人の仮面ライダーと対峙したままそう告げー重い拳をゼロワンの顔面に打ち込む。怯んだゼロワンは後退し、

「ゼロワンのデータを奪って何する気か知らねえが、テメエの相手は社長だけじゃねーぞッ！ はあッ！」

「邪魔だ！」

【カバンスラツシユ！】

「！ ぐわあッ!!」

「！ 不破さん……！」

ーアークは引き続きゼロワンを狙う。そのアークのゼロワン集中攻撃を阻む為に間に飛び込み殴り掛かったバルカンだったが、アークが両手に作製したアタツシユアロー……その二刀流の必殺技により吹き飛ばす。

「不破ア！ ツ、これでも食らえっ！」

「同じことを二度言わせるな……ー邪魔だッ！」

【カバンショット！】

「何ッ!? うああッ!!」

「！ 刃さん……！」

更に妨害しようとショットライザーを連射するバルキリーに対し、アークはバルキ

リーの真後ろに既にチャージが完了したアタツシユショットガンを二丁作製。即座に必殺の散弾をゼロ距離で容赦無く撃ち込み、バルキリーはダメージに倒れる。

これで邪魔者は消えた。

「アークツ……！ お前えええー！！」

「貴様のデータを奪えば、その時点で私の勝利は確定する」

「オールエクステインクション！」

声を上げ、力一杯に拳を振るうゼロワン。アークは怒りにより単調になったその攻撃を容易く躲しながら両手に持っていた二本のアタツシユアローを横に放り捨て、ライバーの上部スイッチを押し込む。そして、

「これで終わりだーフンツ！！」

「！……しまっーガハツ……！！」

オールエクステインクション

ー悪意のエネルギーが収束した右拳をゼロワンの腹部へと、一切の慈悲なく叩き込む。

「ううツ……まだだ！ ーぐふっ?!」

「ーいいや、正真正銘お前は……ゼロワンはここで終わる」

その一撃で変身が強制解除され倒れる或人だが……まだその目には闘志があり、すぐに再度変身しようと別のプログライズキーを取り出すがアークはそれを許さない。倒れた或人の胸倉を左手で掴み、無理矢理立ち上がらせるとアークは右手でその腰に装着された「飛電ゼロワンドライバー」を強奪すると左手を離し、生身の或人を蹴り飛ばす。「とうとう……この時が来た！」

そして、アークの目的はいよいよ達成間近に迫る。



一方、その遥か後方では――

「おらあッ！」

「はあッ！」

バルデル・雷・サウザーと滅・亡の戦闘が行われていた。サウザーの参戦により三対二になった結果、戦いはバルデル達が圧倒的に優勢になる。

【ジャックライズ！】

「ふっ、貰ったア！」

【ジャックキングブレイク！】

「ぐはッ!?」

「おいおい! テメエの相手は一人じゃねーぞ滅イ!」

「ッ! 雷っ……………!」

滅をバルデルと雷が急造コンビとは思えないコンビネーションで翻弄し、亡をサウザーが全力で攻め立てー流れは順当にバルデル側に傾いていく。

「そろそろ決めるか……!」

最初にそう言ったバルデルはショットライザーに装填したプログライズキー…そのボタンに手を伸ばし、

「とうとう……………この時が来た!」

「……………ああ?」

ー後方から聞こえた不可解な台詞に思わず振り返る。その声に反応したのはバルデルだけじゃなく全員だった。

「! 或人ッ…………… あれは!?」

(目離した隙に大ピンチじゃねーかつ!?)

そして、変身解除された或人が倒れーアークの右手に或人のドライバーが持たれているのを視認してバルデルは或人の元に駆けた。また状況の深刻さに雷とサウザーも気付き、滅・亡との戦闘を一旦止めバルデルの後を追うように走り出す。しかし、

「ーもう遅い」

アークが告げるように既に手遅れだったのだ。

アークは右手に持った「飛電ゼロワンドライバー」を赤黒いエネルギーで包み込むとセキユリティーを破壊しハッキング。内部に保管・記録された今迄のゼロワンのデータを全て奪う。

「ーラーニング完了」

そう呟いたアークは手に持ったドライバーを片手で砕き、

「！ 何だよ、ソレ……!?!」

ー何処からともなく赤黒い泥の様なモノに包まれたプログライズキーを取り出し、アークはその中に何かを流し込む。それによりプログライズキーを包んでいた赤黒い泥は落ち、ソレは完成してしまう。

『アークワン!』

そのプログライズキーは起動した瞬間、自動展開され……………

「――変身」

静かに確認するかの如く口にしたアークは禍々しいプログライズキーをドライバーへと装填した。瞬間、

【シンギュライズ】

【破壊 破滅 絶望 滅亡せよ】  
【コンクルージョン ワン】

——絶望は生まれ落ちた。

# アークワンは止まらない

「――変身」

ソレは――あまりにも突然生まれた。

【シンギュライズ】

【破壊 破滅 絶望 滅亡せよ】

【コンクルージョン ワン】

謎のプログラムズキーを装填した直後、アークが装着していたドライバーは変形。黒から一転、白いドライバーへと様変わりし、アークの足元から半壊した衛星らしきフォルムの赤いライダーモデル？が出現。同時に赤黒い【恨】【怒】【痛】【殺】などの文字と悪意のエネルギーが泥の如く湧き出し、衛星のライダーモデル？が回転を始め、その身に全て収束し吞まれてゆく。

そして、泥のような悪意のエネルギーを血の様に周囲へと飛散させアークの胸アーマーから赤黒いガスが放出。最後にその隻眼と胸に刻まれたXのラインが真っ赤に発光した。

「……アークワン、それがこの姿の名だ」

ゼロワンのデータをラーニングし、アークが進化した姿。その外観は所々がゼロワンによく似ていた。しかし、その纏う雰囲気、放つ存在感、ゼロワンとは別物なのだ。見るもの全てに嫌というほど認識させる。

黒い右眼に、赤い左眼。歪んだような触角に、血の如く胸に走る赤いライン、色を失ったかのような白いアーマー……亡霊の様な、骸骨の様なその姿は誰の目にも「不気味」に映った。

——これが絶望が生まれ落ちた瞬間だった。

そこにいた誰もが予期していなかった事態に愕き、暫し動きを止め、

「ゼロワンの力を失った今、貴様には何の脅威も感じない。だが、かといって飛電或人、貴様を過小評価する気はない。僅かでも私の結論を狂わせる可能性を秘めているなら、ここで逃げ」

——アークワンに変身したアークはそんな中、近くで呆然としたまま倒れている或人へと視線を下ろし歩み寄る。

「ッ、させるかッ！」



『ストロング!』

【アメイジング ブラストファイバー!】

アークワンの誕生に全員が固まる中、最も早くにシヨックから脱して動き出したのは「やはり」というべきか……天本バルデル太陽だった。

バルデルはバツクルに取り付けられたシヨットライザーに装填したプログライズキーのボタンを右の親指で颯と押し、トリガーに指を掛け引く。

「ーらあああああッ!!」

そして、力強く跳び上がり此方に背を向けるアークへと飛び蹴りの構えを取ったバルデルは叫ぶ。自分の中に湧いたアークワンへの恐怖を紛らわす様に。

【悪意】

「無駄だ」

背後に迫るバルデルの蹴りにアークは振り向く事さえせず、ただドライバー上部のボタンを左手で一度押し込み、

「!・ ああああああッ!?!」

ーボタンを押ししたことで悪意のオーラを纏った左手をスツと上げ、空中へとその悪意を拡散させる。飛び蹴りの構えを取っていたバルデルにそれを防ぐ術はなくもろに食らい地面へと落とされた。

「あ、うぐツ……………」

更には拡散された悪意のオーラはバルデルの体を蝕うように蠢き、持続的にダメージを与え続け最終的にはバルデルを強制変身解除にまで追い込む。

「太陽君っ!!」

【恐怖】

「纏めて消えるがいい」

【憤怒】

倒れたバルデル、太陽の姿を見てシヨックから脱したサウザーは直ぐに駆け寄ろうと動き出すがそれよりも速くアークはボタンを二度押し込み、片腕を軽く振るい——先程よりも広範囲且つ強力な悪意を拡散させた。

「ぐわあああっ!!」

「ツ、ぐ、はっ……………!」

「が、はっ……………うぐツ……………!」

「ちく…しよ、う……………!」

「がああっ!! ツ…は、半端、ねえツ……………!!」

それは敵味方関係無く橋の上に居た皆を襲い、一瞬の内にして或人と太陽以外の未だに変身状態だった全員を変身解除させてしまう。既に変身解除されていた或人と太陽

は悪意の波動を生身で食らい体に激痛が走る。

「ア……が……あ、くッ……！」

【憎悪】

「これで真正正銘、詰みだ」

無数の傷が付き、血だらけになった或人に改めて視線を向けたアークは再び或人へと歩み寄る。もうこの場にはアークを妨害できる者はおらず……一度ボタンを押し込んだ後に右手を握り締め、

「——或人社長ッ……!!」

——その時、この場で誰もが聞くとは思っていなかった……彼女の声が響く。

「?! イ……ズ……何でッ!!」

或人は彼女の姿を目視し、苦しうに顔を歪めた。倒れる或人の振り返った視線の先には——社長秘書のイズが立っていた。

「現れたか、イズ」

イズの登場に驚かない者が一人いた。

そう、アークだ。

「やはりシンギュラリティに達したヒューマギアの思考・行動の予測ほど容易い事はない。飛電或人の命が危機に瀕すれば、お前は命令を無視してでもこの場に来る……全て私の予測通りだ」

アークは自分の予測通りに姿を現したイズに右手を向け、続ける。

「お前がゼアのバックアップだということは既に把握済みだ」

「！　ぐがッ……！」

「当然、お前にもここで消えてもらう」

前に倒れている或人の体を横に蹴り飛ばし、真つ直ぐとイズに近付いていくアーク。

「うっぐ……！！　早く、早くッ逃げろ！！」

太陽は倒れながらもイズへと叫ぶ。それに反応し後退ろうとするイズだったが、

「逃がさん」

ーアークは逃亡を許さない。

声を発すると同時にアークの足元に赤黒い影？跡？が浮かび、誰かの甲高い悲鳴と嘲笑うような声が周囲に鳴った。

「！　っ、これは！」

浮かんだソレはまるで生物の如き動作でアークの足元からイズの足元にまで移動し、イズの行動を完全に阻害する。イズが必死に抵抗してもそれから逃れることはできな

い。

「終わりだ」

とうとうイズの前に到達したアークは悪意のエネルギーを右手に込め、拳を振り上げー。

アークが更に進化したアークワン。

その姿を目の当たりした瞬間、生存本能がけたたましく警鐘を鳴らしたのが分かった。俺は直感した。

今の俺達にこいつを倒す術は無い、と。

自分の中でアークへ抱いていた憤怒が薄れ、心の内に秘めていた恐怖が膨張するのが分かる。力が入らない。体が震えた。立ち上がれない。小心者らしい好い様だ。

「ー終わりだ」

アークの声が鼓膜を震わす。イズがもうすぐ、文字通り終わりを迎えようとしている。立ち上がれず、歯を噛み締める或人の顔が見えた。

（ああ、なんて酷い結末だ……）

最悪だ。俺は結局、何も守れず終わるらしい。

右手を握り締め、アークが拳を高く振り上げるのが見える。

(ハッ、ざまあないなー)

俺は目を閉ざし、全てを諦めようと意識をー

『私の名前はワズ・ナゾートク。探偵型ヒューマギアです』

(ーあ……)

ーふと瞼の裏にアイツの姿が浮かんだ。

助けられたかもしれない。なかった。

だけど、俺が間に合わず、助けられなかった友……そんなワズとの記憶が脳裏に想起していく。

『……私は……私の「思い」を信じます。そして、私の思いを信じて……貴方がこれを渡すに相応しい人間であると判断します!』

かつて、ワズをこんな俺を誰かの為に戦うことのできる……誰よりも強く優しい人間だと判断した。

なあワズ、そりや過大評価が過ぎるんじゃないやねえか？　俺はきつとこの先も……そこまです立派な人間にはなれないって。

『……私に使命は、見つかるでしょうか?』

かつて、ワズは命を懸けて戦う理由を「使命」かもしれないと口にした俺にそう問いかけてきた。

大丈夫、俺でも見つけられたんだ。人間よりも人間らしいお前ならすぐに見つけられるさ。実際……お前はきつと見つけられたんだよな？　ワズ。

『はい、またお会いしましょう天本様。武運を』

かつて、ワズは自身の終わりを覚悟した俺へと告げた。

ああ、ありがとな……ごめんな。ワズ。

何だ——俺にはまだやるべきことがあるじゃないか

滅との決戦、あの時と似た感覚だった。いくら頑張っても願っても、動かないぐらいに死に体だったのに……やるべきことがあると分かった今は確かに動く。

「ッ………ア、アア………」

アークワンに勝つ手段はない。この絶望をひっくり返す算段など、これっぽっちもイメージできない。

無理だ、無茶だ、無謀だ、無意味だと弱い俺が。本心が告げてくる。

それをすればお前は死ぬぞ、と。

「ウ、アア……っ、ぎっ………」

それでも、手に、足に、頭に、全身に力を込める。痛む傷も、流れる血も放っておけ……そう心中で自分に告げる。



立て。立て。立て。立って、

ー今のお前にできることをしろ！

ー今のお前がやるべきことをしろ！！

(そうだッ！ 死ぬのはその後だ!!)

右手に持ったプログライーズキーを強く、強く握り締める。

死ぬのは怖い。怖くて怖くて仕方ない。

だけど、だけどッー！

『ストロング!』

【オーソライズ!】

「あああああああ!!」

できることもせず、やるべきこともやれず死ぬ方が……よっほど怖いッ!!

【シヨットライズ!】

『アメイジングヘラクレス!』

「ぐ、ッ……おおおおー!」

トリガーを引くと同時に駆け出す。次々と体に装着されるアーマーの衝撃に瀕死の体が度々踉跄めく。それでも駆ける。

これが俺の最後の変身かもしれない。

それでも構わない。

ワズ、俺はお前を助けられなかった。お前に恩返しできなかった。だからせめて、

「ーらああああッ!!」

ーお前が守りたかったものを死んでも守るッ!

再変身を果たした俺は右手を握り、反動で自分が倒れることなどお構いなしに全力で拳を振るう。

その拳はイズに視線を向けてこちらに背を向けていたアークの顔面へと吸い込まれるように伸びー

「ー愚かな」

「!? ア、うッ!! ゴハッ」

ーカウンターの重く鋭い一撃が俺の鳩尾に深く、深く、深く……突き刺さるように打ち込まれる。瞬間、仮面の下で吐血した俺はバランスを崩し、体は後ろに傾く。

ーバルデル、以前言ったな? 次に会った時、それが貴様の最後だと……それを今、

現実のものとしてやろう」

「ガツ……あ、ア………」

「イズより先にお前の息の根を止めてやる」

だが、俺の体が倒れるより早くにアークが伸ばした左手が俺の首をがしりと掴み、体は無理矢理立たされた状態で固定され、

【絶望】

「——私を止められる者はいない、誰一人」

【パーフェクトコンクルージョン】

【ラーニング5】

首を掴まれたまま体を橋に取り付けられた柵の前に立たされ、アークは右手でまたボタンを押して——更にプログライズキーを押し込んだ。次の瞬間、辺りに悪意に満ちた悲鳴と嘲笑の如き音が鳴り響き、アークの右脚に凄まじいエネルギーが収束。

その間、俺は自分の首を掴むアークの左腕に右手を叩きつけ抵抗を試みた。しかし、俺の体にはもう力はなく……叩きつけたつもりの手は弱々しくアークの左腕にぼんつと軽く当たただけに終わり、

「はあああああ——ッ!!」

コンククルージョン

「アーークは素早く蹴りの構えに入り、横蹴りを噛ます。

「あ」

最後に俺の口からは掠れた声にもならない音だけが漏れた。

【絶望】

「——私を止められる者はいない、誰一人」

【パーフェクトコンククルージョン】

【ラーニング5】

天本さんの首を掴み、動きを完全に掌握したアーークは流れるように必殺技の態勢に移行する。天本さんの目には微かに光があった。だが、抵抗のために打ち下ろしたであろ

う彼の拳……その弱々しい力を見れば天本さんが限界なのは誰の目からも明らかでー。

「アークツ……やめろ……もう……!!」

俺は立ち上がろうと手に力を込めながら声を上げる。これ以上の攻撃を受ければ、確実に天本さんは死んでしまう……そう悟ったから。

だが、アークは俺の声に反応することなく動きを止めず横蹴りの態勢に入る。

その時、世界が一瞬——俺にはスローモーシヨンに映った。

「はああああーッ!!!」

赤黒い悪意のエネルギーを大量に溜め込んだアークの右足は高く上げられ、天本さんの胴体へとー

「やめろおおおーッ!!」

ー直撃。

同時に大きな爆発が起き、吹き飛ばされた天本さんは橋に取り付けられた柵を容易く貫通し、仮面は割れて天本さんの体は宙へと投げ出される。

天本さんが装着していたショットライザーは激しい火花を上げて壊れ、天本さんの変身は解除——彼は生身の状態で高所から自由落下していく。

「あー天本さああああん!!」

変身が解除された時点で天本さんの目は閉ざされ、既に意識はなく……天本さんは真つ逆さまに落ちていき、強烈な水飛沫が上がる。デイブレイクタウンの橋の下、そこに広がる川へと落ちたんだ。

「……………」

突然の衝撃に俺の頭の中は一瞬で空っぽになった。

余りにも現実味がわかなかった。

天本さんが死んだ？

（天本さんが、死んだ）

イズを守るために。

いいや、イズだけじゃない。

俺達を守るために、死んだ……

【死】

その事実には俺は打ちひしがれるが……現実には残酷にも突き付けてくる。

「……、それはッ……………」

ショットライザーが壊れた衝撃でここまで飛ばされたのだろう。倒れる俺の前には黄緑色のプログライズキーが転がっていた……その色は爆煙による煤で黒く汚れ、アークの必殺技の衝撃にバチバチと火花を上げていた。俺は痛みなど気にも止めず、火花を

上げるプログライズキーを掴み握り締める。

空っぽになっていた頭が痛みで冷静になる。

そして現実を理解する。

胸の中が、喪失感に包まれた。

「あ、あああああああ!!!」

気付けば、俺はただただ叫んでいた。

その日——天本さんは死んだ。

## それでもオレは諦めない

「――遂に、バルデル太陽は死んだ!」

太陽に必殺の蹴りを打ち込み、その体を高所から川へと叩き落としたアークは太陽が落ちた川を橋から見下ろして確認するように眩く。

太陽は再変身に成功した時点で既に瀕死の重傷を負い、その体は限界を迎えていた。そんな死に体にアークは容赦無く……完全に息の根を止める一撃を与えたのだ。

「そして、お前を消せば私の予測を超える存在はゼアのみとなり……最後にゼアを破壊すれば人類滅亡の未来は確定する」

アークは川を見下ろしていた視線をイズの方へ向け、徐に歩き出す。

「あつ、あああああーッ!!」

或人は太陽が死んだという現実……その喪失感に慟哭し、戦える状態ではなかった。

「グッ……動け! 動けよッ……!!」

「っ、く、このッ……!」

「アークッ、この野郎……!」

諫や唯阿、雷もまたアークワンの悪意の波動を受けた影響で体力的にも精神的にも一



時弱っていた所に太陽の死という事態に直面し、今すぐの戦闘は不可能と言っても過言ではなかった。

そんな中、例外が一人いた――。

「――アーク！ 貴様アアアアアア！！」

目の前で友を――太陽を失った天津垓だ。

垓は湧き上がる激情のままに憤怒し、落ちたプログライズキーとゼツメライズキーを拾い傷だらけの姿で立ち上がる。

いつかの太陽の如く、今の垓の中ではアークが放出した「スパイトネガ」の影響でアークへの恐怖や絶望の感情が増大していたが、それよりもアークへの「憤怒」の感情の方が圧倒的に上回っていた。

【ゼツメツ！ Evolution！】

『ブレイクホーン！』

怒りから乱暴にゼツメライズキーをねじ込むように左側スロットに装填し、プログライズキーのボタンを押し自動展開させ、

【パーフェクトライズ！】

「お前だけは絶対に許さんッ！」

――右側スロットに装填すると同時にアークに向かって走り出し、変身しながら地面

に突き刺さったサウザンドジャッカーを通り過ぎる直前に引き抜き振り下ろす。

「ーハアアアアッ!!」

『When the five horns cross, the golden

soldier THOUSER is born.』

『Presented by Z A I A.』

その一振りの重さと速さは今までの攻撃の比ではなかった。しかし、

「何を言うかと思えば。許さないも何も、全ての元凶は私に人間の悪意を……愚かな歴史をラーニングさせた天津<sup>貴</sup>垓<sup>様</sup>とそれを容認したZ A I Aだろう?」

それをアークはひらりと躲けて見せ、サウザーに変身した垓へと回し蹴りを噛ませる。

「グハッ!? つ……この命を犠牲にしても! お前だけは、私が破壊するッ!」

「やれるものならやってみろ」

強烈な回し蹴りを受けたサウザーは後ろに勢いよく転がる。が、すぐに身を起こし再びアークに立ち向かう。

今の自分ではアークワンと戦っても、勝機は無いに等しい……それは垓自身も理解している。それを理解して尚、垓は自分の思いを抑えることができなかつた。それだけは決して譲れなかつた。

『アメイジンググホーン!』

【Progress key confirmed. Ready to break.】

【サウザンドライズ！】

「はああ………」

ドライバーからプログライズキーを引き抜き、ボタンを押してプログライズキーを閉じ、サウザンドジャッカーへと装填しグリップを引く。この一連の動作を一切の無駄なく迅速にこなしたサウザーは深く息を吸って吐き、

【サウザンドブレイク！】

「フウウウウウウツ!!」

【Z A I A エンタープライズ】

ー構えたサウザンドジャッカーのトリガーを押し込む。次の瞬間、サウザーの周囲にファルコン、シャーク、タイガー、ベアー、マンモス、ウルフ、ホーネットー大量のライダモデルが展開され全てのライダモデルがアークへと一斉に殺到し、襲いかかる。

それはサウザーが放てる必殺技の中でも最大威力を誇るー正に切り札。

「ー天津垓、貴様に私を破壊する事は不可能だ」

【悪意】



声を上げながら地面を転がり、サウザーは当然の如く強制変身解除。

「つ……まだ、だ……！　ぐっ……！　こはッ」

倒れた骸はそれでも尚戦おうとするが彼の体はアークワンの一撃を食らって限界を迎えており、口から大量に吐血する。

「ッ、このままじゃ不味いぞ……！　刃ア！」

「つ……！　言われなくても、わかってるッ……！」

恐怖に足を震わせながら、何とか立った諫は自分と同じくアークの恐怖と戦う隣の唯阿へ叫ぶ。それを聞いて唯阿は精一杯に体を起こす。

『パワー！』

『ダツシュ！』

【オーソライズ！】

「変、身……！！」

「っ、変身……！！」

【シヨットライズ！】

ロープログライズキーのボタンを押し、シヨットライザーに装填。恐怖を押し殺して

二人はショットライザーのトリガーを引く。そして、

『パンチングコング!』

【Enough power to annihilate a mountain.】

『ラツシングチーター!』

【Try to outrun this demon to get left in the dust.】

バルカンはパンチングコングへ。

バルキリーはラツシングチーターへ。

それぞれ再変身を果たす。

「無駄だ。お前達の力は、私には遠く及ばない」

変身を果たした二人に気付いたアークは吐血して地に伏する頃から視線を外し、徐に振り返る。

「……悔しいが、確かに今はそうなんだろうよ……だがな!」

「ツ、ここで諦める訳にはいかないからな!」

『パワー!』

『ダツシュ!』

【パンチングブラスト!】

【ラッシンググブラスト！】

アークの台詞に二人はそう返して素早くショットライザーに装填したボタンを押す。バルカンはパンチングゴングの巨拳を、バルキリーはショットライザーを構え、

「はあああああつ!!」

「やあああああつ!!」

同時必殺技を放つ。

バルカンはそのパンチングゴングの巨拳をロケットの如く発射し、バルキリーはアークの周囲を迅速に周りながらショットライザーを連射する。

「無意味だ」

それを防御する必要もないと判断したアークは右手をドライバーの上部に置き、ボタンを押そうとして気付く。バルカんとバルキリー、両者の必殺技はどれも自身の打倒を狙ったものではないと。

ロケットの如き爆発力で発射されたパンチングゴングの巨拳はアークの足元で着弾して炸裂。そこに追加でラッシンググチーターの速力を生かした四方八方からの射撃により攪乱。アークの視界はほんの数秒程度とはいえ、確かに一時爆煙に包まれる。

「刃っ！ イズとサウザーを頼む！」

「ああ、お前も雷と或人を頼んだ！ イズ、逃げるぞ！」

「おうー！ オラっ立て雷、社長もだー！」

二人の狙いは鼻から——再変身した時から——一つ、この場から全員で撤退、離脱する事。アークがアークワンに進化し、更には天本太陽バルデルの死亡。この二つの事実だけでも絶望的だが、ここで人類側の「仮面ライダー」が更に欠ければ……それはどうしようもなく致命的だった。

そんな致命的な展開を回避する為に二人は行動し——。

「……………逃げた、か」

爆煙が晴れ、アークの視界がクリアになった頃には……もうそこに人類側の仮面ライダー達の姿はなかった。

「だが、お前達に私を止める事は不可能。どれだけ逃げようとも……それは延命に過ぎん」

しかし、アークは一切焦る事なく淡々と事実を述べる。

「バルデルは死んだ。これで、人類滅亡の未来はより盤石なものとなる……」



最後に太陽が落下した川を見下ろし、アークは滅と亡を引き連れて歩き出す。

「——貴様は、本当に愚かな男だった」

悪意に満ちた、愚かな人類の為に最期の時迄戦った男。天本太陽。仮面ライダーバルデル。

アークにとって天本太陽は最後まで理解不能な存在だった。

.....  
.....

1	0	1	0
0	1	0	1
0	1	0	1
1	0	1	0

0 1 1 0

(「………? どこだ、ここ」)

俺の視界には今、白一色の異世界染みた光景が広がっている。気が付いた時には俺は既にそこに立っていた。

「……俺は何でこんな所に居るんだ………?」

0 1 1 0

1 0 0 1

0 0 0 0

0 1 0 0

1 0 1 0

ここに至るまでの出来事を思い出そうとした俺は頭を捻る。

(確か、或人と雷と一緒にアーク達と戦って……それで……それで?)

記憶を想起しようとした俺だったが、どうにも断片的にしか思い出せない。肝心な部分については思い出せなかった。

(俺と或人は雷の提案に乗って、デイベレイクタウンに向かって……アーク、滅、亡と戦った。うん、戦った……筈だよな?)

自分の記憶がどうにも正確か分からず不安になっちまう。

(それから……天津さんが……来たよな？　それで……うん全く思い出せねえ！)

こつから先は記憶が欠落しているらしい。ただこれだけは何とはなしに理解できる。きつと俺はアークに負けたのだろう。

(或人や天津さん、みんなは無事なのか?)

生きててくれてればいいんだが……仮に全滅してたら人類はマジで終わりだ。そこんところは誰かがファインプレーでどうにかしてくれてる事を祈ろう、そうしよう。

「——俺……死んだのか?」

白一色の世界・空間に在るのは自分と宙空に浮かび上がっている複数の水色の数字? のように見えるものだけ。それ以外は本当に何も無い。そんな光景を前に「もしかして、ここがああの世なのでは……?」と思いつつ俺は辺りを見渡す。本当に何も無い、どこまでも白光が続いている。

もしここがああの世なら、俺は死ぬ前にちよつとはアークに一矢報えたんだらうか?

だったら格好も付くんだが……む、無駄死にだけはやめろよ俺エ!?　死ぬのは勿論嫌だけど、戦いの中で死ぬならせめて価値のある逝き方をしたい。

ああ……父さんと母さん、美月にはマジでごめんとしか言えねえな。振り返つてみ

ると……本当に親不孝かつ酷<sup>ひど</sup>え兄だったな俺？

(……つうか死んだなら死んだで、そう一言伝えてくれよ神様あ……居<sup>お</sup>るか知らんけど)  
「はあ……もう死んでるのかどうかすらわかんねーけど、死にたくねえーつうかマジで何処だよここ？」 説明を超越せ説明を」

真っ白な世界で地面？に仰向けで寝転んだ俺はそう弱音をぼそりと零し、溜息を吐いた。

それからどれだけの時間が経ったか。一分程度だった気もするし、十分ぐらいだった感じもあるし、一時間以上は経過していたようにも思える。ここにいと時間感覚が狂う。

当然、この真っ白な世界には俺以外の人影はなく……俺の言葉に応える者は誰もいな  
いー

0	1	0
1	0	1
0	0	1
0	1	0

0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1
0	1	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0
1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	1
0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0

——答だった。

「——ここは通信衛星ゼア、その思考回路内ですよ天本様」

0 1  
0 1  
1 0  
1 0

「……まさか、またお前に会えるなんてな」

後ろを振り返り、俺は思わず微笑んだ。

---

「……アークの戦闘から三日。

「つ、ならこれは……!! 何だよ!?!」

飛電製作所のオフィスで或人は声を荒げる。デスクの上には幾つかのプログライズキーコネクタが置かれており、或人の手にはそこから引き抜いたプログライズキーが握られていた。

「クソっ反応してくれ! 頼む!」

或人は手に取ったプログライズキーのボタンを押すがプログライズキーは機能しない。そんな無反応なプログライズキーを苛立ちからか手荒にデスクの上に投げ、或人はまた別のプログライズキーを引き抜きボタンを押す……しかし、これもまた機能しない。

先程から或人は幾つものプログライズキーを起動しようと試みているが、全てが機能しない。全く無反応だった。

「或人社長……」

「何でツ……！ イズ！ 何でプログライズキーが全部反応しないんだ!？」

「どうやらゼロワンドライバーからゼロワンのデータを奪取された際、無線の様に……間接的に今までゼロワンが使用してきた全プログライズキーの機能が停止状態にされているようです」

或人の問いに傍に立つイズは冷静に答える。それを聞いた或人は驚愕し、

「!? そんな……はっ！ そうだ、イズ！ ゼロツードライバーはー」

「ー残念ですが、現在の作製進行度から予測してゼロツードライバーの構築には少なくとも一週間以上……ゼロワンドライバーの再構築にはそれ以上の時間が必要です」

ー咄嗟に打開案を思いつくがその案にイズは首を横に振る。

「……っ、じゃあ俺は……！ 俺は……!」

イズの言葉に或人は俯く。

その手に黒く汚れ、亀裂<sup>ヒビ</sup>が走り、深く損傷したアメイジングヘラクレスプログライズキーを持つ或人の手は震えていた。

アメイジングヘラクレスプログライズキーの機能はアークのスパイトネガの一撃を受け、完全に機能停止。システム自体が死んでいた。

(天本さんは最後まで、諦めずに戦ったのに……！)

「俺はツ……変身できなきや……ゼロワンにならなきや、戦う事すらできないのかよッ!?」

涙が溢れ、プログライズキーを濡らす。或人は太陽の形見を震える手で握り締めた。

『ストロング!』

【オーソライズ!】

『あああああああ!!!』

【シヨットライズ!】

『アメイジングヘラクレス!』

『ぐ、ツ……おとおお……!』

(全身傷だらけで、血を流して……痛くて苦しい筈なのに……それでも天本さんは最期まで戦った。イズを、守る為に……! 本当は俺が守らなきやいけなかつたのに……俺



が弱かったせいで……!)

あの瞬間を或人は今でも鮮明に思い出せる。

「……………」

俯きながら歯を食いしばる或人にイズは掛ける言葉が見つからず、沈黙した。

『だから或人さん、これからも頑張ってください。俺まだ、ヒューマギアを好きでいたい  
ですから』

『なあ或人——お前は人間の味方か？ それともヒューマギアの味方か？』

『おお！ よう或人……って大丈夫かお前っ!?!』

『お言葉に甘えて、防御は任すぞ！ 或人！』

『——俺なんかで良けりゃ、聞いてやるよ』

(天本さん……俺は、俺はどうすればいいんですか?)

目を閉じ、俺は今亡き天本さんへと問いかける。それに答えが返ってこないのはわかってる。だけど、

——それはお前が決める。

——それに……もう決まってるんだろ?

そんな声が聞こえたような気がした。

(はい、俺も最後まで諦めません!)

「——俺は、戦う! たとえ変身できなくても……ゼロワンになれなくても……! 俺は

絶対に逃げないッ!」

俺は顔を上げ、立ち上がる。

「イズ、だから俺は行くよ」

「! 或人社長……!」

イズはそんな俺を見て何を思っただろう? 不安に思った? 無謀だっと思ったかな? うん、そうかもしれない。それでも俺は天本さんの勇気を、行動を無駄にしたいんだ。

そして、俺はそのままオフィスを出ようとして——

「――或人社長、一つだけ……変身する手段があります」

「――俺はイズのその台詞に足を止めた。」

『もし或人に何かあった時、これを或人に渡してくれ。念の為の『秘密兵器』……つて言える程のものじゃあないけど。きつとコイツは或人の……アイツの役に立つ』

「――さあ、人類滅亡を始めよう」

一方その頃。

アークはいよいよ人類滅亡の為に本格的に動き出した。手始めにアークが行った都市部のハツキンググ……それを止める為に不破諫、刃唯阿、天津垓の三人の仮面ライダーが立ち塞がる。だが、

「無駄な抵抗だ」

「ッ、アツガ……!!」

【悪意】

ーアークワンは止められない。

アークは殴り掛かってきたランペイジバルカンをひらりと躲し、スパイトネガを発生させた右手で首を掴んで地面に叩き伏せる。

【恐怖】

「人類滅亡という結論は既に確定している」

「！ グハッ!?!」

次にバルカンの援護をするバルキリーが連射するショットライザーの弾丸、それをアークは片手で掴み取りスパイトネガを宿してバルキリーへ投げ返す。赤黒く染まった弾丸は寸分変わらずにバルキリーの顔面に直撃。その仮面を砕く。

「ぐ、まだだッー」

【憤怒】

「いいや、終わりだ」

最後にサウザンドジャツカーのグリップエンドを引こうとしたサウザーの左手を右手で掴んで止め、

【パーフェクトコンクルージョン】

【ラーニング3】

「フンツ！」

——空いた左手に悪意を集めてストレートを鳩尾に突き刺した。

「ぐあああああーツ!!」

コンクルージョーン

それを受けたサウザーの体は即座に赤黒い悪意に包まれ、全身を蝕まれていき変身は強制解除される。

「宣言しよう——今日がお前達の命日だ」

倒れる三人を見下ろしアークは徐に右手を広げて向ける。その手にはスパイトネガが収束し、一つの球を作り出す。そして、

「滅びろ」

その球を生身の三人へ向けてアークは放ち、滅びを与える……

「ーやめろおおツ！」

ーその直前にアークの後方から制止の叫びが響いた。

「……………飛電或人か」

ゆつくりと後ろに振り返ったアークは呆れたように呟く。

「言った筈だ、貴様はもうゼロワンには変身できないと……………何故現れた？ 今の貴様には私と戦う力さえないというのに」

「……………俺は絶対に諦めないツ！」

アークと対峙した或人は心を恐怖に襲われながらも、それでも立ってアークを見据える。その決意が籠った強い眼を前にアークは「そうか」とだけ言い、

「ならば、貴様から葬り去ってやろう」

ー倒れる三人に向けていた手を或人へと向ける。

「逃げろツ社長!!」

「ッ、馬鹿な真似はよせっ！」

「飛電、或人……！」

そのアークの行動に対して諫、唯阿、咳はそれぞれ必死に声を上げ……

「大丈夫！ みんなは絶対に守るから！」

或人は動じることなく笑顔でサムズアップした。それを見たアークは或人の態度に疑問を吐く。

「何故だ？ 何故逃げない？ 何故諦めない？ ベルトも無く、今までのプログライズ

キーも使用できない。変身できない貴様は最早『仮面ライダー』ですらー！」

「ーそれは違う」

「……何っ？」

アークの言葉を或人はハッキリと否定する。

「変身できるかどうかは関係ない。変身できるから『仮面ライダー』なんじゃない！ 天本さんが……身を以て教えてくれた。守りたい……大切な物の為に、自分の命を懸けて戦う。その強い思いが、心こそが仮面ライダーなんだッ!!」

再度強く、強く宣言した或人はある物を懐から取り出し、

「……何故貴様がそれを持っている？」

「だから、その心を胸に……俺は絶対に逃げない！ 絶対に諦めない！」

「フォースライザー!」

それをーフォースライザーを腰に装着する。そのフォースライザーが誰のものか……それは語るまでもないだろう。

「があッ?!? く、あああああッ!!」

瞬間、赤黒い火花がバチバチと散り、或人の全身に激痛を走らせる。それでも或人は決して倒れない。何故なら、彼は大切な物を守る為に命を懸けて戦う……その心を持つ『仮面ライダー』だから。

「そうか、<sup>バル</sup>太陽<sup>デル</sup>。貴様は死んで尚、私の前に立ち塞がるというのか……だが飛電或人。ベルトがあろうと貴様にはー」

使用可能なプログライズキーはない、そう口にしようとしたアークだったが……その予測は次の瞬間に覆った。

『ジャンプ!』

「! 何だと?」

「ぐウツ……! うあああッ!」

或人の手にはライジングホッパープログライズキーが握られており、しかも確かに作動していたのだ。

(天本さん! ワズ! 俺に力を貸してくれッ!)



「ー変身ッ!!」

「フォースライズ!」

プログライズキーをフォースライザーに装填し、激痛に歯を食いしばる或人は二人の姿を思い浮かべ……決して消えない強い心を胸に、勢いよく黄色のレバーを引く。

『ライジングホッパー!』

〔A jump to the sky turns to a rider kick.〕

〔Break Down.〕

プログライズキー装填時に黒いバツタのライダーモデルが或人の目前に出現し、レバーを引きプログライズキーを強制展開した途端にそのバツタのライダーモデルの形は崩れ、蝗の大群のような形状に変化して或人の体に蝕む様に纏わりつき黒いスーツと化す。

最後に或人の上に浮遊していた黄色のアーマー、バツタのライダーモデルから分解された一部のパーツが黒いコード?に引っ張られる様に或人に装着され、

「アーク!」

ーその複眼は赤く光る。

「お前を止められるのはただ一人! 俺だッ!!」

そうして、仮面ライダーゼロゼロワンが誕生した。

## Rising sun

0	1	0	1
0	1	0	0
1	0	0	0
0	0	1	0
0	0	0	1

『——以上でチュートリアルモードを終了します』

真つ白な空間——衛星ゼアの思考回路内にそんな音声<sup>1</sup>が鳴り響く。

「これでいいのか？」

目の前に浮かんだ『完了』の文字<sup>2</sup>を数秒眺めた後、隣に立つ□□に目を向けて太陽は訊ねた。すると□□は微笑み頷く。

「はい。天本太陽<sup>あ</sup>の覚悟を再確認し、このプログライーズキーのデータをラーニングさせる……ここ<sup>こ</sup>までが衛星ゼアの導き出した結論ですから」

「……じゃあ、ここ<sup>こ</sup>から先は？」

「それは勿論『未知』ですよ」

未知？思わず首を傾げる太陽に□□はこう告げる。

「ここから先は衛星ゼアでも予測できない、確実な結論が出せない未来……つまり、ここから先はあなた達〔仮面ライダー〕次第ということですよ」

「――」

「まあ、今最も重要なのは天本様がそれを使いこなせるかどうかでしょうね」

「…地味にプレッシャー掛けるのやめろお！」

続く□□の言葉を聞いた太陽は顔を引きつらせ、そんな太陽を見て□□はまたも笑う。

「おまつ何笑ってんだ!? こちとら気が気じゃないんだが？」

「これは失敬。ですが慌てる必要は微塵もないでしょう」

「へ?」

1 0 0 1

0 0 0 0

0 1 0 0

1 0 1 0

0 1 1 0

「――あなたは今まで通り、自身の心のままに……未来を進めばいいんですよ」

0	1	0
1	0	0
0	0	0
0	1	0
1	0	0
0	1	0

「——詳しい事はよくわかんねえけど……ああ、わかった」

そう口にして頷き、笑顔で言う□□に釣られて太陽も思わず笑った。

「——ウオオオオオツ!!」

獣の如く咆哮した或人——ゼロ<sup>0</sup>ゼロ<sup>0</sup>ワン<sup>1</sup>は真つ直ぐにアーク目掛けて駆け出す。

「せつ! はあツ!!」

荒々しい前蹴りを嘯まし、続けて全力で殴り掛かる。

「遅い」

「!? ぐふツ……! つ、おおおお!!」

001の攻撃を見切ったアークは片手でそれをいとも容易く捌き、カウンターに膝蹴りを胴に打ち込む。それに大きく怯んで数歩後ろに下がる001……だが、

「せやあああツ!!」

「……001はすぐに再度攻撃を仕掛ける。」

「フン」

【悪意】

001再度の攻撃、顔面へのパンチを首を僅かに動かし躲したアークは左手でドライブ上部のボタンを押し込み、更に悪意を右掌に溜め込む。

「グウ……!? かはっ!!」

そして、その右掌を001の腹部に当てて赤黒いエネルギー「スパイトネガ」をゼロ距離で爆発させる。

「うう、ツ……まだツ……まだア……!!」

「無駄だ。ゼロワンと異なる姿に変身した所で結果は変わらない。それが私の結論だ」  
「つ、そんな結論……超えてみせる!!」

爆発の威力で大きく後方に吹っ飛ばされ、壁にその背を強く打ち付け倒れた001は苦しそうに呻いた……だが、またすぐに闘志を持って立ち上がる。

「おりやあああーッ!!」

「……まるで天本太陽の如き気迫だな」

001の姿……絶対に諦めないとい決意した飛電或人の姿、その気迫にアークは本太陽の姿を思わず重ねる。それほどまでに今の或人の気迫は凄まじく、不屈の精神

で戦う<sup>バルデル</sup>天本太陽を彷彿とさせた。

「おらあああつー！」

「だが、例え気迫が凄まじかったとしても……お前が私にとつてのイレギュラーに成り得る事はない。お前に私は止められない」

「がッ……!? く、そんなこと……お前が……！」

アークは001の気迫に動揺することなく、冷静にその攻撃の軌道を予測して素早く左足で胴体を蹴りつけ告げる。蹴りを食らってまたも飛ばされた001だったが態勢を崩しながらも後ろ宙返りをして着地に成功し、

「……お前が決めるなあッ!!」

——アークの言葉に叫び、瞬時に再び攻撃を仕掛ける為に拳を振り上げた。

「なあ、お前は……こつちに帰ってこれないのか?」

太陽は半ば諦め気味に□□に問いかける。

「……現状、不可能でしょう。ゼロワン計画に関わる私にはバックアップがありませんから」

「まあ、そうだよな……」

分かってはいた。だけど、改めて本人の口からそう言われてしまうと……中々にシヨックを受けるもんだな、と太陽は思った。

「ですが私の外見・役割のデータが保存されたヒューマギアプログライズキーを使用すれば私と同型のヒューマギアを作る事は可能でしょう」

「……………」

0 0 0 1

1 1 0 0

0 0 1 0

0 1 0 1

1 0 1 0

□□のその発言に太陽は暫し沈黙してから一言、

「……………そつか、それじゃ仕方ねえな」

ーそう呟いて寂しげに微笑む。

太陽は或人とイズとの交流の中で、当然ヒューマギアプログライズキーの存在を知り得ていた。しかし、決して□□の復元を或人に提案する事はなかった。

「復元させようとは思わないのですね? ……理由を聞かせてもらってもよろしいです

か?」

「はあー? それ……お前が俺に言わせんのか?」

「あはは、申し訳ありません。直接あなたの口から聞いてみたかったので」

「お前なあ……はあ、ヒューマギアらしかった頃のお前はどこいったんだよ?」

「ふふ、綺麗さっぱりいなくなりましたよ。あなたの言葉のおかげで」

□□の意地悪な質問に太陽は頭を掻き答える。

「……ヒューマギアプログラムズキーでお前と同型のヒューマギアを復元したとしてそいつは本当にお前なのか?」

0 1 1 0

1 0 0 1

0 0 0 0

0 1 0 0

1 0 1 0

「……さて、どうでしょう?」

態とらしく首を傾げる□□に太陽は自分なりの考えを伝える。

「きつと違う。声や姿が同じでも、そこに生まれるだろう心は別物なんだ。……死んじまったお前と声や姿は同じで、中身が別物のヒューマギア……俺にはそいつと仲良く



やっつていける自信はない」

「あと、仮にお前と同型のヒューマギアを復元させたとしてさ……。俺は声や姿がお前と同じそのヒューマギアに……。俺の知るお前を重ねてしまうかもしれない。お前と同じように接してしまうかもしれない」

「それはお前にも、復元されたお前と同型のそのヒューマギアにも失礼だろ。つうかそりゃ、お前の心を侮辱してるのと同じだろ？ ……それだけはやっちゃいけない気がするんだよ」

何か色々言っただけ……まあつまりはだな？と太陽は自分の中の結論を最終的に、簡潔にこう伝えた。

0 1 1 0

1 0 0 1

0 1 0 0

1 0 1 0

0 0 0 1

「——まあなんだ……。つまりは、少なくとも俺にとっての「ワズ・ナゾートク」は一人だ

「けって話だ」

それを聞いた□□は……ワズは、

「やはり、あなたは……」

——誰よりも強く優しい人ですね。

ワズ・ナゾートクはヒューマギアらしくない、人らしい、泣きそうな顔で心底嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「……ぶっ。何つう顔してんだお前」

その笑顔にやっぱり太陽はまた釣られた。

それから暫くして、ワズの体にノイズが走り、その足元からは水色の数字……衛星ゼア内のデータが溢れ出し始める。また同時に太陽の視界は徐々に朧げなものへと変化していく。

「……どうやら……そろそろ時間のようです」

「……そうみたいだな。ったく、ゼアも酷いよなあ？ 俺への説明役にお前を選んで、数十年振りに再会させたくせに……のんびり話す時間もくれねえんだから」

「ふふ、同感ですね。私も、もう少し天本様とこうしてのんびりと話をしたかったです……今は時間も惜しい状況のようですね」

「わかってるわかってる。今頃向こうじゃ、アークと天津さん達が戦ってたんだろ？ 早

く起きないとな」

0 0 0 1

0 1 0 0

1 0 0 0

0 0 1 0

0 0 0 1

1 0 0 1

「またな、とは言わねえぞ？」

「ええ」

衛星ゼアとの無線接続が切れる直前、太陽はワズへと右手を差し出しニヤリと笑う。それにワズは自分の右手を出して応えー握手する。

「じゃあな、会えてよかったぜ——ワズ」

「はい、私もです。どうかご武運を——天本様」

太陽の視界が白い光に包まれていき、その光は段々と強くなる。太陽は穏やか心持ちで目を閉じた。

0 1 1 0

(死ねないよなア……?)

1	0	0	1	0	1	0	0	1
0	1	0	1	0	0	1	0	0
1	0	1	0	0	1	0	0	0
0	1	0	0	1	0	0	0	1

意識が覚醒した俺の手にはブランクキー……だったもの。翅を広げた緑色のヘラクレスが描かれたプログライズキーが強く握り締められていた。

体を起こそうとした俺は……激痛に襲われ、血を流し、

「……ハッ……まだ、生きてんなあ……」

自分の耐久力しぶとさに呆れ気味に苦笑し、まだ自分が生きている事を実感しながらふと空を見上げる。ちようど風が吹き、俺の髪を揺らす。

「ハア、ハア……ツ、道理で涼しい訳だ」

空は暗かった。どうやら今は夜中らしい。

空の大部分を覆うように雲が広がっている。

（あれからどれぐらい時間が経った？ 一日？ 一週間？ 一ヶ月？）

暗い空を見上げながら思う。

まだ間に合うか？と。

無論、答える者はここには居ない。

「……ああ、わかってる」

（間に合うかどうかじゃなくて、間に合わせねえとダメだよな）

それでも、誰かが答えてくれた気がした。

手に持ったプログライズキーを見つめながら俺は立ち上がって：顔を上げる。俺の目に映ったのは真つ暗だった空……その奥から暖かい、優しい淡紅色の光が広がっていく瞬間——。

「……………さあて——」

覚悟はできた。

いや、疾つくの疾うにできていた。

「——リベンジさせて貰うぜ？」

今——太陽は昇った。

---

「甘い」

「ぐウ!? あ、ガア…………ツ！」

【悪意】

アークは001の首を左手で掴むとそのまま壁に叩きつけた。何とかその拘束を解こうと001は蹴く。

【恐怖】

だが、拘束を解けずアークは首を掴む左手に更に力を入れて締め上げ……………空いた右手

でドライバー上部のボタンを押し込み悪意を貯めていく。

【憤怒】

「ッ、グウ、ぎっ……!!」

【憎悪】

まずいッ!!

首を締め上げられながら001はその一心で必死にアークに攻撃を仕掛け、この状況を切り抜ける為に思考を巡らせる。そして、

【ライジングデイストピア!】

「っ!? ぐ、ア、アアアアアッ……!!」

001は首の痛みを堪え、自由の利く手でフォースライザーのレバーを押し戻し引いた。

「ウ、オオオオっ……!」

「!」

途端に001の体から赤黒い煙が噴出し、001—或人は自分の体がふつと軽くなりパワー・スピードが飛躍的に上昇したことを実感する。

001はその状態で首を掴むアークの左手を両手で掴むと、力づくでそれを引き剥がし、





「ぎっ、ウオオオオオーッ!!」

アークの攻撃に数歩後退した001は体からは再び赤黒い煙を噴出させ、地面を強く蹴り、スピードを更にも上げる。体に走った激痛に苦しそうな呻き声を出しかけ、或人は咆哮した。

「掛かって来い」

それを見たアークもまたスピードを上げて応戦する。二人の殴り合い、蹴り合い、打ぶつかり合いは目にも留まらぬ速さで展開していく。

「ーっふんッ!」

「ーっらあッ!」

同時に繰り出したパンチは互いの胸を叩く。

それを受けたアークは一切怯まず、逆に001は大きく怯む。だが、或人の闘志は削げない。

「ーっはッ!」

「ーっはあッ!」

同時に繰り出したキックが衝突する。

アークのキックの威力に001は歯を食いしばるが、再びキックしてアークにすぐ立ち向かう。

「ー遅いッ!」

「ーうグッ!」

一瞬で001の背後を取ったアークは手から「スパイトネガ」を発生させ、空中に浮くと001へとかかと落としを仕掛ける。それを防ぐ為、咄嗟に両腕をクロスさせ防御態勢をとった001だがー守りは容易く破られ、地面が砕け粉塵が発生。

「ハア、ハア……」

「飛電或人、滅びの時だ」

地面を転がり、息を切らし、何とか起き上がる001に歩み寄ってそう口にしたアークは徐に自身の右手を持ち上げて拳を握って振るう。

「! まだだア……!!」

「!」

その拳は001のスペックでは防ぎ切れない一撃だった。しかし、001は、或人は両手でそんな一撃をがしりと掴んで見せ、

「お前を止められるのはただ一人……俺だ!!」

ー反撃にアークの胴体を蹴り付け、距離を取った001はアークに指を差し、最後にその指を自分へと向けてレバーを押し戻す。

【ライジンググユートピア!】

「ーウオオオオオッ!!」

押し戻した黄色のレバーを勢いよく引いた001は高くジャンプする。血のような煙が大量に噴出し、複眼は赤く発光。痛みに襲われながらも001は叫んだ。吠えた。

(絶対に逃げない! 絶対に諦めない!)

その思いを胸に001は蹴りの態勢に移行し構え、

「ー俺は、仮面ライダーだ……!!」

ー全身全霊のライダーキックを繰り出す。

【絶望】

「ーこれで終わらせてやる」

【パーフェクトコンクルージョン】

【ラーニング5】

アークは左手でドライバー上部のボタンを押し、間髪入れず右手でプログライズキーを押し込みー001と同じく高くジャンプ。

ー此方もまたライダーキックを繰り出した。

「ウオオオオオーッ!!」

「ハアアアアアーッ!!」

黄のエネルギーと赤黒いエネルギーが激突し、強烈な赤い火花が拡散する。

ライジング

ユ　　ー　　ト　　ピ　　ア

パーフェクト

コンクルージョン

そしてー

「ーーー」

「ーーー」

ー　決着が付く。

「あぐツ、カハ……!!」

アークの必殺技にダメージは許容範囲を遥かに超え、001の変身は強制解除されー或人は吐血して倒れ、

「ツ……馬鹿な」

(一体どこにこれだけの力が……?)

001の必殺技を「ドライバー」に受け、少なくともダメージにアークは暫し呆然と

死に体の或人を見下ろす。

或人は確かにアークの予測を超えた力を見せたのだ。

「認めよう。貴様は確かに、私の予測を超えた……だが、結論は変わらない」

「うぐツ……がア……」

しかし、もう或人に戦う力はなかった。

そんな或人へアークはトドメを刺すべく歩み寄り、スパイトネガで赤黒い球体を作り上げる。

「社長……」

「くっ、このままでは……!」

「やめろアーク……!」

そうはさせまいとする諫、唯阿、垓も飛び出そうとするが彼等もまた或人と比べればまだ良い状態だがアークの攻撃に瀕死手前の状態に陥っている。到底アークから或人を救う力は残されていない。

（ごめんなさいッ……天本さん……ワズ……俺は、俺はっ……!）

絶対に逃げないと戦った。

絶対に諦めないで戦った。

（俺じゃアークは止められないのかっ……!?!）

でも、届かなかった。

「くっ……そオ……」

或人は拳を地面に叩きつける。

「滅べ、飛電或人」

そんな或人にアークは無慈悲に告げる。次の瞬間、アークの右掌から悪意の球体が撃ち出され、

「結局……俺にはっ……!」

自然と弱々しい言葉が漏れる。

撃ち出された球体を狙い変わらず、倒れる或人へと飛ぶ。

「……何も、守れないのかッ……?」

目から涙が零れる。

その時だった。

「ーンなこたねえよ。ちゃんと守れてたぜ？」

「ーそれにめちやくちや頑張ってたじゃねーか」

突然、辺りに聞き覚えのある声と足音が響いた。

ーハーキュリービートルズアビリティ！

「！…何っ……？」

アークにはその事態が一瞬理解できなかった。

それは当然だった。何故ならアークの予測にはなかったことだから。

唐突に出現した緑色のヘラクレスオオカブト？と思われるライドモデルが、或人に撃ち出した悪意の球体をその巨大な角で弾き飛ばしたのだ。

(……いや、あり得ない。そんな筈はない！)

そのライドモデルにアークは見覚えがあり、ある予測が立てられた……がアークはその予測を自ら否定する。いや、正しく言うならばその予測を認めたくなかったのだろ

う。

だが次の瞬間、姿を現した存在に：アークは自身の予測が正しかったと認めざる終えなくなつた。

「！ あ、天本……さんツ……!!」

聞こえた声、足音にボロボロで無茶して立ち上がった或人はその姿に声を上げる。

「よお或人。見ない間にまた随分とイケメンになつてるな? 『男子三日会わざれば刮目して見よ』 つてやつか」

つてイケメンになつてるのは天津さん達もか? 傷だらけな或人の姿を見て、男は片手を軽く上げ揶揄う。その男は紛れもなく、

「天本太陽……!!」  
バルデル

——天本太陽、仮面ライダーバルデルだった。

その左手には緑色のプログライズキーが握られている。

「天本さんつ、無事だったんですね……!!」

「太陽君……よかつた……本当によかつた……!!」

「……えっ?! 何で二人して泣いてんの!? え、そ、そんなに心配してくれてたんだ……」

そんな太陽は或人と核の反応を前に照れて頬をかき「ちよつと感動したわ……」と小



声で呟く。

「……何故だ？ 何故だ!? 何故貴様が生きています!? 貴様は確かにあの時、確実に殺した筈だ!」

「アーク、お前は見ない間に随分と感情豊かになったな? ……何で生きてるかだつて?」

太陽の姿は或人らと比べれば幾分かマシだが、それでもかなりポロポロであちこちに生傷や裂傷があり、打撲している箇所もあるようだった。

そんな状態だが確かに生きて喋っている男……そんな受け入れ難い事実にはアークはらしくなく声を荒げて問い、太陽はそんなアークにこう言つてのけた。

「そんなこと俺が知るか! バーカー!」

それは滅茶苦茶かつ、子供のような罵倒……かつての太陽らしい物言いだつた。

「……ふざけるな!」

「ふざけてねえよ。これが俺の本音だ!」

苛立つアークだが、太陽はそんなことお構いなしに言う。

「或人、天津さん、不破さん、刃さん。ちよつと離れててくれ」

「……」

「今から、一旦こいつをぶつ倒す」

驚く程あっさりとしたその台詞に或人達は思わず「えっ」と零す。

「! ……倒す、だと?」

「ああ」

その言葉に最も驚いたのはアークに太陽は平然とした態度で応える。

「……馬鹿なことを。バルデル、貴様では私には勝てない。まさか……もう忘れたというのか?」

「お前こそ、忘れたか? さつき言ったばっかだろ『男子三日会わざれば刮目して見よ』ってやつだ」

「ふっ、下らん戯言を……ベルトもない貴様に何ができる?」

アークの指摘通り、今の太陽の腰にはショットライザーが無く……黒いバックルとベルトだけが装着されているのみ。しかし、

「まあ見てろって」

『ゼアズアビリテイ!』

ー不敵に笑った太陽は左手に持ったプログライズキーのボタンを押し、アビリテイを発動させる。

【ショットライザー!】

瞬間、プログライズキーから水色のレーザー?が放たれ太陽の真前ー宙空に銃を僅

か数秒で製作。太陽はそれを掴み、流れるようにバックルにセットした。

「!? あれはっ……………」

「間違いない……………あれはショットライザーだ!」

製作された銃。それは間違いないショットライザー。太陽が持つプログライズキーが発揮したその力はアークドライバーによる武器製作と酷似している。

「何だと……………!」

太陽は左手に持ったプログライズキーを右手に持ち替えると、再度ボタンを押し、

『グレイトストロング!』

【エースライズ!】

ー手慣れた手つきで続けてショットライザーに装填し、右手でプログライズキーを展開。

【Kamen Rider. Kamen Rider.】

バックルからショットライザーを引き抜き、銃口を天高く真上に上げ、太陽はただ前を見据える。

「! させるかー」

『ー!!』

「くっ、ライダモデルか…!」

太陽の変身を妨害しようとしたアークだが、それは先程アビリティにより出現していた飛び回る緑色のヘラクレスオオカブト?のライダモデルの威嚇攻撃により阻止されてしまい。

「ー変身ツ!!」

【シヨットライズ!】

ー太陽は銃口を天高く上げたままトリガーを引く。次の瞬間、放たれた緑色の弾丸は真つ直ぐ天に飛ぶ。また、それを追うようにヘラクレスオオカブト?のライダモデルが飛び立ち旋回を始め、

「ハッーオラアツ!!」

ー真上を見上げた太陽は方向転換し、真つ直ぐ落ちてくる弾丸に向かって勢いよく広げた左手を伸ばし握り潰した後:その伸ばした左腕を勢いよく振り下ろす。

アーマーは最初に伸ばした左手・左腕から装着されていき、続けてガチャンツ! ガキン!とアーマーが全身に装着されー。

最後にヘラクレスオオカブト?のライダモデルがゼロワン変身時のバツタのライダモデルのように分解。緑色の追加アーマーとしてその上半身に装着。そして、

【Grab the victory! Grab the future!】

『ウイニングヘラクレス!』

【The strongest power  
Crush the sky.】  
【It's Keep winning.】

複眼が赤く発光し、変身が完了する。

「俺は仮面ライダーバルデル！」

太陽は、バルデルは宣言する。

「真打登場、なんてな」

仮面の下で太陽は笑った。

今、リベンジが始まる。

## ある男の完全復活!!

〔Grab the victory! Grab the future!〕

『ウイニングヘラクレス!』

〔The strongest power Crush the sky.〕

〔It's Keep winning.〕

体走る黄緑のライン、下半身に装着された白いアーマー、頭部と上半身を覆うメタリックな緑の堅固なアーマー、鋭く伸びた角、自然と闘志と凶暴性を感じさせる赤い複眼。

「何だ、その姿は……?」

仮面ライダーバルデル ウイニングヘラクレス。

それが今アークの前に再び立ち塞がった天<sup>バルデル</sup>本太陽の新たな姿。アークの予測にはなかった力。

「さあな。俺も…チュートリアルはやったんだが、実際にコイツに変身するのはこれが初<sup>はっ</sup>でな」

そう口にしたバルデルは自分の両手に目を下ろし、仮面の下で強気に笑う。

「でも、これっぽっちも負ける気はしねえな」

「笑わせる、貴様に私を倒す事は不可能だ」

「だったら喋ってないでかかって来いよ。それとも…怖いのか？」

「……いいだろう」

揶揄うように片手をアークに向けクイクイと動かすバルデルにアークはその拳に「スパイトネガ」の赤黒いエネルギーを纏わせ握り締める。

「もう一度その息の根を止めてやるッ！」

本来のアークならば挑発に乗るなどそもそもあり得ない。だが、今のアークの人工知能は度重なる予測を超える事態に明確なエラーを起こしていた。まるでシンギュラリティに達したヒューマギアのように。

「……………」

そんな怒りを露わにするアークにバルデルはただ徐に歩き出す。

「隙だらけだ」

そして、アークは加速し一瞬で歩くバルデルの目前に至ると右拳をその胴体に放つ。更に直撃した直後、「スパイトネガ」の赤黒いエネルギーがバルデルの超至近距離で爆ぜー致命的な一撃になるのは必然の筈だった。

「そんなもんか？」

「?! 何っ……?!」

しかし、拳を受けたバルデルは怯む事なく……それどころか一切の衝撃を受けた様子もなく平然と口を開き、

「どらあッ!」

お返しとばかりに動揺するアークの胴体に右拳を打つ。

「!・ぐツツ、がああア……!!」

瞬間、アークの体は真っ直ぐに吹き飛び、壁に背を激突することで漸く止まり――激突した壁には大きなヒビが走った。

(何だ、この力は……?!)

その力は今までのバルデルの比ではなく、今の単純なパンチがアークには捉え切れず、全く反応できなかった……アークは動揺し、

「何故予測できない!?!」

――予測できない。

最も不可解な問題に驚愕する。

確かに今までもアークはゼアと天本太陽バルデルの「結論」だけは予測できなかった。だが、戦闘での天本太陽バルデルの攻撃などに関してとは全然とは言えないが十分に予測できていた。





r o r !!

E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !!

r o r !!

E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !!

r o r !!

E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !!

r o r !!

E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !! E r r o r !!

r o r !!

「ーな、に……?」

ーようとした次の瞬間、アークの予測は何か妨害され強制中断された。

「はあッ!」

「! ごはっつ……!!」

続けて予測の中断により意識が現実を引き戻された直後、アークの顎部分にバルデルの左のアッパーが打ち込まれーアークの体は宙に打ち上げられる。

(ッ、対処をー!)

アークは甚大なダメージの連続に思考を乱されながらも、空中で体勢を整え着地しよ

うと瞬時に適切な判断を下し対処しようと試みるが、

「もういつちよッ!」

「ごがッ!」

——人間を遥かに超えた人工<sup>ア</sup>知能<sup>ク</sup>の思考速度でさえ、今のバルデル相手には遅い。間に合わない。

打ち上がったアークのその腹部にバルデルは容赦無く右のストレートを叩き込みアークを吹き飛ばす。

「つつ…グツ…こんな、馬鹿な事が…!」

アークの予測を超え、許容範囲を遥かに超える威力を持つバルデルの一撃<sup>拳</sup>は凄まじく、その攻撃を受けた部分からは激しく火花が散り始める。

そのダメージにより、アークの思考には不具合が生じ始める。

「何故だ、何故こんな事が起こり得る! 以前は予測できた筈の貴様の動きが、予測できなくなった理由は何だ!」

アークは自身の状況<sup>今</sup>——手も足も出せず圧倒されている……理解し難く、受け入れ難い事実<sup>今</sup>に怒り問う。

「これがゼアの力だとも言うのか……? ならば、私の力がゼアに……及ばないとでも言うのか!」

アークはバルデルが変身前に使用したプログライズキーのアビリティ「ゼアズアビリティ」から「ウイニングヘラクレスプログライズキー」にゼアの力が内包されていると理解し、バルデルの動きが予測不可能になった理由をゼアの力によるものと結論付けた。

「……………」

地面に手をつき、立ち上がろうとするアークをバルデルは無言で見下ろし、

「何で予測できないのかって…………お前、まだわかんねーのか？」

「何…………？」

「教えてやるよ、簡単な話だ」

ーアークの怒りを前に平然と応え、告げる。

「人間の悪意をラーニングされ、人間の悪意だけをラーニングしてきたお前に、人間の善意も悪意も両方ラーニングし続けてきたゼアの結論が…予測できる筈がないんだよ」

「！ 善意、だと…………？ そんなもの、人間の心には存在しない。人間の心に存在するもの…それは悪意だ！」

バルデルの言葉を即座に否定し、アークはその手に二丁のショットライザー。更に背後に数十本以上のショットライザーを生成・展開して射撃を開始する。

「させるかよ」

「っ！ これは!？」

だが、それに対してバルデルは右手を翳した瞬間――生成・展開した全ショットライザーが一瞬の内に消滅した。

「一体何をした!？」

「さあ？ 詳しい事は俺にもよくわかんねえけど、簡単に言えば……アークお前対策メタの妨害能力つてとこだ……んじゃー次はこつちから行かせてもらおうか」

動揺したアークの問いかけにそう簡潔に答えたバルデルは右手を広げ、シヨットライザーに装填した「ウイニングヘラクレスプログラムズキー」からその手に水色のレーザーが放出され「01 10 01 10」という数字?のようなデータが出現。

【オーソライズバスター!】

それはまるでアークの武器生成の様に何かを形取り、最終的にアックスモードの「オーソライズバスター」をバルデルの手に生成して見せた。

「何、だと……?？」

「悪いなあお株奪つちまって。でもゼアとお前は同型何だし……そう驚くこともないだろ?」

右手の中で生成されたオーソライズバスターを掴み、試しに軽く振るったバルデルは一つ頷いて構える。

「いくぜーどらあッ!!」

アーク目掛けて前方に低く速く跳躍したバルデルは着地する前にオーソライズバスターを大振りに振り下ろす。

「はっ! ぐうつ!」

それを防ごうと攻撃に合わせ、完璧なタイミングで両腕を使い防御の態勢をとった。しかし、バルデルの攻撃は予測できない挙句に遥かに速く重く一撃でアークの防御を崩し、

「そらあッ!」

「がはッ!!」

続けて着地した直前に振り下ろしたオーソライズバスターを今度は豪快に振り上げ、アークの体を吹き飛ばす。

「ぐう…アア…この威力…武器の性能を上げたか…!」

「ああ、お前と同じようにな。まあ俺の場合はお前と違って生成した武器の性能についてはゼアにお任せだけだなあ」

激しく火花を散らすアーマーを片手で抑え、立ち上がろうと地に手をつくアーク。それを静かに見下ろすバルデル。

どちらが優勢かは語るまでもないだろう。

「派手にぶちかますとするか……!」

だが一切手を緩めず、油断無く容赦無くバルデルは次の行動を取る。

バルデルはショットライザーに装填されたプログライズキー……そのシンボルが丁度見えるショットライザーの小窓部分、そこに左手を触れずにまるで何かをスキャンする様な距離で近付ける。

『ゼアズアビリティ!』

瞬間、武器生成時と同じく装填されたウイニングプログライズキーから水色のレーザーが放たれ何かを形取った。

```
0 1 1 0
0 1 0 0
1 0 0 0
0 0 1 0
0 0 0 1
```

それはショットライザーに装填されたウイニングヘラクレスプログライズキーと全く同じ外観のプログライズキー。しかし、それは生成というよりは模倣コピーのよう……プログライズキーからは水色の粒子のような物が溢れ消えかけている。

ウイニングヘラクレスプログライズキー。

それはゼアがアーク撃破・破壊の為に作ったプログライズキーであり、他のプログライズキーと比べて遥かに膨大なデータの塊……そんなプログライズキーの完全な生成はゼアの力を持つてしても困難だった。

（あーあ。こりゃあ、そう長くは保てないって事か？）

「ならとつとと使つてやらねえとなあ！」

『グレイトストロング！』

バルデルはすぐに模倣コピしたプログライズキーを手に持ち、その状態を大雑把ながら理解してボタンを押し、右手に持ったオーソライズバスターに装填した。

〔Progress key confirmed. Ready for burst  
err.〕

アックスモードのオーソライズバスターを肩に乗せ、バルデルは低く構え溜めー。

【バスターボンバー！】

「はあああああつ!!」

高く高く跳躍。

必殺技を発動させたオーソライズバスターからは赤と緑、二色の火花がバチバチと散り、オーソライズバスターを振り下ろしながらアーク目掛けて落下するバルデル。

「っ、調子に…乗るなあ……！」



そんなバルデルを見上げたアークは体から火花を上げながら何とか右手持ち上げ、掌から「スパイトネガ」を放出させて生み出した赤黒い悪意の球を撃つ。

「！ぐ、ぐわああああ!!」

それは直撃する。

それは呆気なく。

「……は……?」

それはアークも間拔けな声を出す程に。

赤黒い悪意の球が爆発し、空中で大きな爆煙が上がる。

「…何だ? まさか、先程までの力は私のー」

ー単なる思い違いだったのか?

戸惑いながらそう零し掛けたアークだったが、

「……っつちだよ」

「ツ?!? いつの間」

背後からしたその声に勢いよく振り返り、

「おらあああッ!!」

振り返った直後に豪快で強烈な、横一文字の一撃を目にする。

回避不能。

防御不能。

「ガアアアッ!!」

必然的にアークには攻撃を受ける以外の選択肢はなく、容赦なく後方に切り飛ばされた。

「どうよ、迫真の演技だったろ?」

「す、凄い……!」

繰り返されるアークとバルデルの一方的な戦闘に或人の口からは自然とそんな言葉が漏れる。アークの攻撃はその全てが今のバルデルには届き得ず、バルデルの攻撃はその全てが今のアークに届き得た。

先程まで猛威を振るっていたのが嘘のようにアークは手も足も出さず吹き飛ばされ、地面を転がり、多大なダメージを負っていく。

「……………」

そんな一見、バルデル天本太陽の大復活とも言える戦闘を不審な目で見つめる者が一人……天

津垓だ。

(……やはり妙ですね。確かに今の太陽君の力は驚くべきものだ。しかし、進化したアークをあそこまで圧倒する戦闘力……)

太陽の手にした新たな力について垓は考える。

今まで天本<sup>バルデル</sup>太陽は幾度も窮地に立たされ、その度に相手の予想を超えた力を発揮してきた。

だが、どれも何のリスクもなしに発揮できた訳ではない。

プロトタイプのリージングホツパープログラムズキーを使用しての変身・戦闘、フォースライザーを使用したの命懸けの変身・戦闘……どれも大なり小なりのリスクが存在したのだ。

(ならば当然、あのプログライズキーにも何らかのリスクがある筈……だとすればそのリスクは一体ッ)

どれだけ危険性が高い？

垓は自身の思考に思わず身震いし、アーク対バルデルの戦闘に再び集中した。

「カハッ……!!」

「そんなじゃ、そろそろ決めるか?」

何度目かのパンチを顔面に打ち込み、アークを地面に叩きつけたバルデルは自身の両手についた土埃を払う様に叩くと告げ……何かを思い出した様にハツとする。

「……そうだった。このまま倒すとアイツも破壊しちまうな。まあ俺はそれでもいいんだが」

それは或人に悪いしなあ?と呟くと後ろにいた或人にチラツと視線を向けてから再度アークを見て、

「まずはその身体ボデイから出てって貰うか……」

「そんな事は不可……ツ?!」

「オラっ!!」

……次の瞬間、アークが喋っている事などお構いなしにバルデルはノーモーションで右手に持ち肩に乗せていたオーソライズバスターを投擲。

「グアアアアッ!!!」

当然の如く命中したソレはバルデルから見てアークの右肩に深々と突き刺さり、今までで最も多量の火花を上げた。

「今だ、ゼア」

『ゼアズアビリテイ!』

次にバルデルはオーソライズバスターの投擲により空いた右手を前に伸ばしゼアに言う。それに応えるようにアビリテイが発動。バルデルの空いた右手にデータが収束・構築。

0 1 0 1

0 1 0 0

1 0 0 0

0 0 1 0

0 1 0 1

【プログライズホップブレード!】

その手に「プログライズホップブレード」を生成する。

しかし、生成したプログライズホップブレードはウイニングヘラクレスプログライズスキーと同様に完全な生成は不可能らしく…バルデルが持ったプログライズホップブレードからは水色の粒子が溢れ出していた。

「さっさとやるとするかーらっ!」

そんな武器を右手に、バルデルは肩に突き刺さったオーソライズバスターを引き抜こうと両手で柄を掴むアーク目掛けて跳び。

「おりゃあああッ!!」

「グガッ?!?!」

ヒューマギアの善意のデータを集めて作られた剣でその鳩尾部分を貫き、更に剣で貫いた状態のままトリガーを五度引き、

【フィニッシュライズ!】

【プログライジングストラッシュ!】

「グワアアアッ!!」

オープログライズホップブレードに銀色の刃を付加させ、必殺技を発動した状態でプログライズホップブレードを引き抜く……それと同時に肩に突き刺さったオーソライズバスターを左手で掴む。

二つの武器を掴んだバルデルはソレをアークの体から引き抜き、アークを蹴り飛ばす。次の瞬間、

「!ッ、うぐつ……つ」

アークから迅が引き剥がされ、バルデルは引き剥がされた迅を見た直後。両手に持っていた二つの武器は水色の光に包まれ消滅し、迅の手を掴み引き寄せ……多少雑ながら迅の体を後ろに放り救出に成功した。

「そんでこうっ!!」

そして、ヒューマギアの身体喪失により崩壊を始めたアークの顎にアッパーを繰り出し、遙か真上に打ち上げ、

『グレイトストロング!』

「これでトドメだ! 絶対なあ!」

【ウイニングブラストファイバー!!】

ー右手でプログライズキーのボタンを押し、ショットライザーのトリガーを引く。そのとつくに慣れ切ったであろう一連の動作を早業で済ませたバルデルは空に打ち上げたアークを見上げ、力を溜めてからアークを目掛け跳躍。

「はあッ!らあッ!やあッ!」

「ぐうッ!があッ!ぐあッ!」

そこからまるでゼロワンの「ライジングインパクト」が如く空中でアークを横に蹴り飛ばし、次に斜め下に蹴り落とし、そこから宙返りキックでアークをまた上に蹴り上げ、

「うおおおおおっつー!!」

「ぐうううううッ?!?!」

空中でアークの首に右腕を引っ掛け、そのまま勢いよく高速で回転ー最終的にアークを空中からラリアットの要領で地面に叩き付けるようにぶん投げた。

「グガアアアアッ!!!」

ヒューマギアの身体を失い、崩壊し始めているアークに抵抗手段は無く、なす術なく派手に地面に倒れーあまりにも威力にアークが叩きつけられた地面にクレーターの様な跡ができる。そして、

「おおおおおっーッ!!」

ウイニングブラストファイバー

倒れたアークを追い空中でバルデルは加速、斜めに落下。

右手でのライダーパンチの構えを取って猛々しく咆哮。途端、右手には緑と赤のエネルギーとエフェクトが収束し、必殺技の一撃が放たれた。

「らあああああッ!!」

高速で迫り、豪快な拳をその顔面に一発打ち、アークの仮面を木っ端微塵に破壊。

「ぐっ、こんなッ、結論はあり得な……ぐ、ぐわああああーッ!!」

その一撃でアークの崩壊は急激に加速し、体から赤黒い悪意のエネルギーを放出しながら叫びー爆発する。

「——これでリベンジは終わりだ。けど、忘れんなよ」



「——お前は俺が……いいや、俺達仮面ライダーが絶対に破壊する。精々首を洗って待つてろ」

そして、爆煙の中からその姿を現したバルデルは既にそこにはいないアークに告げるよう呟いた。

「！ 天本さんツ!!」

「おう或人、ちゃんと勝ったぞ。……おい、生きてつか?」

変身解除をせず、戻って来たバルデルに駆け寄る或人。それを見て軽く片手を上げたバルデルは肩を貸している人物——迅の体を小突き意識の確認をする。

「……生きてるよ。今、アークから解放されたばかりで体が痛いし重いんだ…小突くの止めてくれ」

「手加減しただろ?」

「変身したままなんだから手加減しても痛いよ!」

「何だよ割と元氣じゃん」

迅はそんなバルデルに対し嫌そうな態度を示し、バルデルはその元氣の良いリアク

シヨンに小さく笑う。

「迅！ よかった……というか！ アークを倒したって事はこれでー」

「ーめでたしめでたし……とはいかないだろうなあ」

或人の言葉を遮り、そう口にしたバルデルに迅もまた頷く。と首を傾げる或人……そんな三人の耳に別の人物の声が入る。

「ーああ、その通りだ。衛星アーク本体を破壊しない限り……アークを完全に倒す事はできない」

「！ 滅つ！」

三人が声のした方を見れば、そこには滅が居た。

「……滅か」

「……まさか進化したアークを倒すとはな。貴様はやはり我々の脅威だ」

バルデルは姿を現した滅と正面から対峙し、

「なあ滅、一つ聞くぞ」

「………何だ」

「今のお前の結論は、まだアークと同じなのか？ お前はまだアークの操り人形なのか？ ……それで、お前は満足なのかよ？」

ー滅にそう問いかける。

「……………」

その問いに答える事なく、滅は歩き去っていく。いつものバルデルならその背にシヨットライザーを向けただろうが……バルデルはそのまま暫く滅を見送ってからシヨットライザーからプログライズキーを引き抜き、変身を解除した。

——異常はその直後に起こった。

「太陽君、無事で何よりです。やはり……君は生きていたと思っていましたよ」

「はっ、信頼が厚くて嬉しいねえ……まあ、結構、今、キツいんだけどさあ……ッ」  
「? 太陽君?」

少し遅れて歩み寄って来た垓の一声に太陽は微笑し……手にプログライズキーを持つたまま蹠跟めき、

「ゴフッ」

「!? 太陽君ッ!」

——口から少くない量の血を吐き出し、まるで物のように太陽は倒れる。

「! あ、天本さんッ!」

「バルデルっ!」

「おいどうしたっ!」

「刃！ 救急車だっ！」

「言われなくても分かってる！」

ノーリスクハイリターン。

そんな上手い話がある筈はなかった。

## 束の間の休息

アークとの戦闘終了後、吐血し倒れた太陽は国立医電病院に緊急搬送され、集中治療室へ運ばれた。そして、診断の結果――全身打撲・頭部損傷・腹部損傷……その他諸々の怪我が確認された事で太陽は緊急入院を余儀なくされた。

そんな状態で運ばれて来た太陽に彼の主治医は処置を施した後、治療を受けてから僅か一日で意識が戻った太陽に向けて第一声

『君さあ……』

と呆れ気味に零したという。

天本さんが倒れてから早五日。

「えーっと、天本さんの部屋は……っと、ここだよね？」

「はい。3号室の358番、この部屋で間違いありません」

アーク達の襲撃も何故がなく、どこか不気味にも感じられる……穏やかな日々が続く

中、俺はイズと二人で天本さんのお見舞いに訪れていた。

「それにしても、凄い重傷だったけど……五日経つてもう面会OKって……天本さんの回復力おかしくない？」

「はい、平均的な人間の回復力ならあれだけの重傷……最低でも一ヶ月以上の集中治療は必須かと思われませぬ」

……集中治療室へと運ばれる程に重体だったにも関わらず、たったの一日で意識が戻り回復傾向に向かい、五日経つて既に普通病室で生活している人。

文面だけ見ると明らかに一般人ではないし、何なら本人を見ればその耐久力と回復力に一般人とは二度と認識できなくなること間違いなしだと思う。

「すうー、はあー……よしっ！ 行くぞー！」

無駄に緊張して部屋の前に立った俺は一度深呼吸をし、部屋のスライドドアの取っ手を掴み勢いよく開いた。そして、

「失礼します！ 天もー！」

「ーですから、退院まで兄の世話は私がします。天津さんは早く会社に戻って、仕事でも何でもしてて下さい」

「いえいえ、美月さん一人では負担も大きいでしょうから私も手伝いましょう。ああ遠慮はいりません。太陽君のサポートの為、長期休暇を取って来ましたから！」

「は？ 遠慮なんて微塵もしてないんですけど？ どうか何ですかそのドヤ顔、はっ倒しますよ」

——部屋へ入室した途端、耳に入ってきた言い合いに俺とイズは思わずその場で口と体の動きをピタリと止める。

部屋には既に三人の人物が居た。

一人はため息を吐いている天本さん……そして、そんなベッドを挟むようにして立つ二人、天津さんと俺にとっては見知らぬ女性である。

「あのさあ、揉めんなら外でやってくんない？ 同室の人にも迷惑だし。それに二人ともいい歳して口喧嘩何て……なあ？」

余裕綽々な天津さんとそれを強く睨む女性。

明らかに相性最悪で、バチバチし合っている二人の顔を交互に見て、ベッドの上で胡座をかいて億劫そうに注意した天本さんは俺達に気付いて話を振った。

「おや？ 君達も来たのですか？」

「あ、兄のお知り合いの方ですか？」

天本さんの視線を追って、初めて俺達の存在を確認した二人は一旦言い合いを中断。

「は、初めまして！ 俺は飛電或人って言います。こっちは秘書のイズ。天本さんには凄いい沢山お世話になってまして……あ、後これ！ つまらない物ですが！」

俺は女性に自分とイズの紹介をし、続けて菓子折りと花束をバツと彼女に差し出した。すると女性は「初めまして、天本美月と申します」と返してくれる。

この時、俺は初対面と思っていただけで後になって実際の所は前に喫茶店で一応顔を合わせてはいたことを思い出した。

「飛電さんにイズさんですね。今日はお忙しい中、態々お見舞いいただきありがとうございます」

美月さんはそんな緊張しまくりの俺のテンションに優しく微笑しながら、菓子折りを受け取ってペコリと丁寧にお辞儀してくれた。

「……ねえねえ兄<sup>にい</sup>? さっきからお見舞いに来る人が自称一般人が知り合える筈のない人ばっかりなのはどういうこと?」

「ん〜……成り行き?」

私は飛電さんが持って来てくれた花束を花瓶に移してすぐに兄に近付いてひそひそと話しかけた。

今日、兄の見舞いには既に何人か来ていたのだが、来た人物は元A・I・M・Sの隊長の不破さんや刃さんを始め、以前アニメに助けられたというA・I・M・Sの隊員さんら、現在進行形で見舞いに来ているZ A I A エンタープライズジャパン元社長――



現在は課長の——天津さんに飛電インテリジエンス現社長の飛電或人さんと社長秘書のイズさん……普通に考えれば分かる通り、一般人が築ける人間関係では断じてないメンツな気がしてならない。

「……成り行きで大企業の社長さんにA. I. M. S. の隊員さんと知り合う人が一般人……?」

なので、私からすれば未だに一般人を名乗り続ける兄が不可解で仕方なかった。内心はまさに何言ってるんだコイツ?という気持ちで一杯だった。

「おいやめろ。人の一般人イメージを壊すような事言うんじゃないよ」

「いやいや、もうとつくに壊れてるって。断言していいよ」

「……………えっ」

私の言葉に兄は目を丸くし、その反応を見て天津さんに飛電さん……更にはイズさんまでもが思わず苦笑を浮かべていた。

「——修復、完了」

ダイブレイクタウン内にある滅亡迅雷 netのアジトでアークトライバ<sup>アー</sup>……そのデータの修復は完了した。

データ修復に掛かった時間は五日。

それは衛星アークの性能を考えれば余りにも遅かった。

(ゼア……これも私を破壊する為の対策か?)

理由はやはりというべきか。

十中八九、バルデルが手に入れた新たなプログラブライズキーに内包されたゼアの力によるものだ。

詳細な原因は現状ではデータ不足で完全把握はできないが、本来ならば破壊されてから瞬時に機能する筈の修復システムが今回は瞬時に機能せず、挙句には幾度に当たってエラーが発生。そのせいで、本格的にアークの修復が開始したのはバルデルに破壊されてから三日も経過してからの事だった。

(……あの力は一体何だ?)

バルデルが得た力、ゼロワンのデータをラーニングしたアークワンさえをも凌駕する驚異的な力についてアークは思考する。

「……あり得ない」

衛星ゼアは確かに衛星アークと同型であり、衛星アークと並べるだけの性能を誇る。

ゼアが性能を最大限引き出せばアークワンと同レベルの存在<sup>カ</sup>は確かに生み出せるかもしれない。しかし、あのウイニングヘラクレスは明らかにアークワンを超えていた。

「変身者は天本太陽……」

耐久力と回復力を除けば、限りなく普通の人間。ヒューマギアの様な高い演算能力も高いラーニング能力も持たない……そんな変身者が何の弊害も負荷もなしにゼアの力を扱えるだろうか？

人工知能レベルの思考速度を持たないバルデルには当然ながら「ウイニングヘラクレス」その全てのシステムを十全にコントロールする事は不可能に近い。

『ああ、お前と同じようにな。まあ俺の場合はお前と違って生成した武器の性能についてはゼアにお任せだけだなあ』

だからこそ、バルデルは一部のシステムの管理を衛星ゼアに任せていた。

（デメリットは必ず存在する筈だ……そうでもなければ、あれだけの性能が発揮できる訳がない）

もしあの力にデメリットがあるならば、それは間違いなく多大なもの……ならば対策の余地はある。

「——ラーニング開始」

次の瞬間、アークドライバー中心のコアが赤く輝き、バルデルの戦闘データ……そのラーニングが始まった。

俺が診察室に入室し着席した直後。

「君は本当に……」

手に持ったカルテから視線を俺に移し、こつちを睨んだドクターはいつもと比べて低い声（半ギレ）で喋り出す。

「一体何をしたらこれだけの頻度でズタボロになれるんだい？」  
言えない。

ヤバい人工知能と殺し合って、最終的に橋の上から川に蹴り落とされて、そこから体に鞭打ってリベンジしたらズタボロになりました……なんて。

「何かな？ 君は重傷での緊急入院で世界記録でも目指してるのかい？ だったらそんな不謹慎な記録は存在しないから今すぐ止めようか？ とうか迷惑だから止めろ」

「い、いやいや！ そんな記録目指して……」

ドクターの言葉を否定しようと慌てて口を開いた俺だが……

『それじゃあ、これで診察は終わりだ。』

頼むから、もう二度とうちの病院に入院するような事態には陥らないでくれたまえよ？』

「スウー……す、すみません！」

以前入院した際のドクターとの会話を思い出し、心からの申し訳なさどドクターの鋭い視線に怯んで謝罪の言葉を漏らす。ドクターには本当に世話になつてゐるから……俺はドクターに頭が上がらない。

「私に悪いと思うなら、もつと自分の体を大事にしなさいと言いたいね。まあここまで何度も重傷を負つてゐる君に言つても無駄なのかもしれないけれど」

「……はい」

「……そこは嘘でも『わかりました』つて言つて欲しかったなあ」

俺の淀みない返事にドクターは僅かに眉を顰め、カルテを俺へと手渡し、

「君自身、自覚はしてゐる筈だ。だから、これは改めて伝えるまでもない事かもしれないが……それでも君の主治医として伝えさせてもらおう」

——真剣な態度で宣告した。

「——心臓に鈍的損傷が複数見られる……これ以上無茶をし、体を酷使すれば、君は確実に死ぬことになる」

「……まあ、そりやそうですよね……」

癒える様子のない胸の激痛から既にわかつてはいた。自分の体のことは自分が一番

よくわかるとはよく言うがあれは割と本当らしい。

ドクターの宣告を聞いた俺は一息吐き、言った。

「——ドクター、一つ頼み事していいですか？」

「それでは僭越ながら、私が音頭を取らせていただきますよう」

俺の退院から丁度一週間が経った頃。

何の変哲もない焼肉屋でもいつもと変わらない上から下まで真つ白な装いに身を包んだ男——天津さんは立ち上がってグラスを片手に場を取り仕切り始め、

「乾P——」

「——かんぱあーい!!」

断じて狙ったわけじゃないが天津さんの音頭を遮るようなタイミングで俺と或人は声高らかに叫び、手を持ち上げ互いのグラスをカチンとぶつけ合う。少し遅れて不破さんと刃さん、困惑気味のイズも手に持ったグラスを俺たちのグラスに当てる。

天津さんは暫くしよんぼりした顔で俺たちを見て、俺たちが天津さんがグラスをぶつけるのを待っているのに気付いた途端嬉しそうに持ち上げたグラスを俺たちのグラス

に当てた。最早キャラ崩壊どころの話じゃないが今更だからね。しょうがないね。

「改めて言うのも何だけど、態々『退院祝い』何てしてもらっちゃって……これ、或人が提案してくれたんだろ？　ありがとな」

「いえいえ、天本さんにはたつくさんお世話になつてますからこれぐらい当たり前ですよー！　それに提案したらみんな全会一致でしたし……きつと俺が提案しなくても天津さんが提案してたと思います」

今日ここに集まつたのは俺、天津さん、或人、イズ、不破さん、刃さんの計六名。迅と雷電の二人はデイベレイクタウンの何処かに沈められている筈の衛星アーク本体の位置の特定を進めているという。ちなみに今ところ進捗率は微妙らしい。

### 閑話休題。

「それでも感謝させてくれ。ありがとな或人……天津さんも不破さんも刃さんもイズも、みんなホントにありがとう。正直めちやくちや嬉しい」

俺は改めて真つ直ぐに感謝を伝えて頭を下げる。

顔を上げれば天津さんと或人は「どういたしまして」と満面の笑みを浮かべ、不破さんと刃さんは少し照れ臭そうにしている、イズは綺麗な会釈をしていた。

「そこで太陽君はこう言いました『みんなの未来は俺が守つてやるツ……！お前の計画はここで終わりだ、滅ッ！』と」

「か、かか、かつこいいツ!! 流石天本さん!」

「ブツ―!? ゲホッゲホッ…ちよ、天津さん! 何でそんな詳細に台詞の一つ一つ覚えてんの!? 俺自身あの時死にかけて自分が何言ったかとかよく覚えてねえーのに!」

「そんな昔に滅と殺り合ってたのか…道理で強え訳だ」

「Z A I Aのサポートがあつたとはいえ、人知れず一人でマジアを…更には滅とも…まさにヒーローの鑑ですね」

「成る程。お兄様とはそういう経緯で…天本さん、ありがとうございます」

それからは普通にカルビ、タン、ハラミ、ロース、ホルモンなどを焼いて食べながらみんなで駄弁った。

まさか或人の「天本さんっていつから仮面ライダーやってたんですか?」という質問に天津さんが「よくぞ聞いてくれたツ!」って反応して急に語り出すとは思いませんでした…。(唾然)

「ツ…天津さんやつばこの話やめよお! 俺がひたすら恥ずかしくなるだけだわコレ!」

「!」では次は太陽君が十年以上の時から目覚め、病院を襲ったライダーと戦った―  
「―ちげえよ! 話やめろって『次の話』にチェンジって意味じゃねえーよ!? 俺の話するのやめようぜって意味だよ!」



「……え、みんな何その反応?!」

「……え、みんな何その反応?! つうかイズまで心なしか残念そうな顔してる!」  
 どうでもいい事だが、何故か天津さんによるバルテル梅の話はその場にいたみんなに割と好評だった。理由は天津さんの語りが無駄に上手過ぎる＋多分脚色してるからだと思われる。

え、脚色してない……?」

HHHHHナイスジョーク。それが脚色無しの話だったら俺死んでるに決まってるじゃないすか（真顔）

それは何の予兆もなかった。

ある程度焼肉を食べ終え、食後のデザートなんかを注文してくるのを待っている間「仮面ライダー」に関係あることや、それとは関係ない他愛のない会話を楽しんでいた時。

「!……ほ、ほッ……」

胸の奥から鈍痛を感じ、続けて俺は咳き込み……僅かな間、口元を押さえた自分の手の平に目を奪われ……すぐに口元をハンカチで拭く。

「? 天本さん、大丈夫ですか?」

それに気付き最初に声を掛けたのは向かいの席に座る或人だった。俺は無用な心配

はかけないようにとすぐに笑顔を取り繕う。

「あ、ああ……大丈夫大丈夫。これはあれだ。一応見た目は二十代だけど、中身が三十代だから……肉食い過ぎて胃もたれたのかもな」

「確かに……天本さん、不破さんの次に食べてましたもんね！」

「まあな。というか不破さんはどう考えても食べ過ぎだろ。それでよく太らないな……腹痛くとかならないの？」

「こいつはパワーだけじゃなく、胃もゴリラですから……エイムズにいた頃にカツ丼十杯食べているのを見た時は私も絶句しました」

「私も見た時がありますよ。あれは私がエイムズの研究部門の視察に行った時の事……彼は栄養ドリンクを五十本ほど頼んでいましたねえ」

「なるほど、不破さん人類じゃなかったかあ……」

「いや何納得してんだ!!? あんたの方がよっぽど人類じゃねえだろうが……あと誰がゴリラだッ!?!」

そんな会話をしながら、俺はチラッともう一度手の平を見て席を立ち、

「……悪い、ちよつと外の空気吸ってくる」

周りの反応を気にする事なく、席に財布を残して真っ直ぐ店の外に出た。

「……………」

その背をじつと注視する人がいる事を知らないまま。

「はあ、はあッ……痛<sup>い</sup>つてえ……」

店から少し離れた人気がない路地で俺を壁に背をつき、胸を押さえながら呟く。最初に焼肉をみんなでワイワイ食べていた時は割と余裕だったんだが……時間が経つにつれて徐々にキツくなってきた。

自分の手の平をもう一度見る。

何度瞬きしても、そこには変わらず赤黒い血がベタリと付着していた。

(……限界が近い、そんな感じだなあ……)

鼓動がさつきから煩い。不快で仕方ない。

胸を押さえる手が震えるのが分かる。

これはビビってるのだろうか？

(だからって、立ち止まる訳にはいかないよなあ)

覚悟はもうできてるんだろ？

だったら今更ビビってどうすんだって話だ。

不安なんて、恐怖なんて、全部纏めて捨ててしまえ。

自分自身へそう言い聞かせ……俺を鼓動が静まるのを待った。

「……よし——」

心なしか体が楽になったような気がして俺は路地から出ようと歩き出す。

「——太陽君」

その時、路地の外に立つ人影に気付き俺は目を見開き、どうするか考えて……まずはその名前を呼んだ。

「……どうした？ 天津さん。深刻そうな顔して」

そして、いつもと何ら変わらぬ態度でからからと笑う。

「単刀直入に聞きましょう。太陽君、君は何か大切な事を私達に隠してはいませんか？」

天津さんの問いに、静まった筈の鼓動が再び警鐘を鳴らすように激しく煩くドクンと鳴り出したのがわかった。

## ソコに善意がある限り

デイブレイクタウン、滅亡迅雷。 netアジト。

「ー只今到着しました」

「……来たか、亡」

その日、滅と亡はアークの命令に従いアジトに集合していた。

アークからの命令が二人に下ったのは天本<sup>バル</sup>太陽<sup>デル</sup>復活の件から一週間以上が経過してからのことである。

「ちゃんと集まったみたいだね」

「！……アズ」

二人が集合してから数分後、突如アジト内に女の声が響く。声のした方を油断なく見据えた滅はその名を口にした。

「もおくそんな怖い顔しないでよー。アーク様に従う者同士、もっと仲良くしない？

ねえアーク様」

頬をぶくつと膨らませ、態とらしいリアクションを見せるアズ。その手にはアークド

ライバーがあり、その心臓部中はアークのデータが健在である事を示すかの如く赤く発光し、

『滅、亡。お前達に再度命令する』

ー第一声、アークは二人へと再びの命令を下した。

『ー人類滅亡を再開する』

次の瞬間、アークドライバーゼロはアズの手の上から独りでに動き出し、

『亡、まずはお前の体を貰うぞ』

「ッ!? ウっ、グウ!」

「!ー亡……!ー」

亡の腰に強制的に装着し、亡はダメージに一瞬の抵抗を見せたが僅か数秒でそのボディをアークに乗っ取られる。

亡のボディを乗っ取ったアークは機能を確認した後、滅へと振り返る。

「これでいい。行くぞ、滅」

「っ……アークの、意志のままに」

そんなアークの命令に暫しの沈黙の後、滅は従う事を選んだ。

ーこれがヒューマギアの未来の為になると信じて。

「単刀直入に聞きましよう。太陽君、君は何か大切な事を私達に隠してはいませんか？」  
天津さんの的を射ている問いに俺は一瞬、思わず目を見開き

「……………はは、何のことですか？」

すぐさま、俺なりにいつも通りの様子を取り繕う。それを聞いた天津さんのこちらを見る目が僅かに鋭くなる。

「ふうー、外の空気も十分吸えたしそろそろ戻るかあ」

「……………太陽君」

俺の台詞を聞いた天津さんは悲しげにその目を細めた。

やべえ、天津さんこれ完全に確信してるわ。いくら何でも慧眼過ぎるだろ……………（驚愕）  
これ隠し通せるか？ ……いや、隠し通してみせる。

（こちとらドクターに頼んでまで隠してんだ！ こんなすぐにバレてたまるかつ）

負荷の話……………俺の心臓の状態についてはみんなに明かすことも一度は考えた。けど、アーク達との決戦に近い中……………そんな話をすれば士気が下がる可能性があるだろ？

容易に想像がつく。まあ逆に俺の話を聞いて「天本さんの分まで頑張らないと！」とか  
或人は言ってくれそうだが。

「あ、そういうえば俺デザート頼んだんだけどもう来ました？」

何の変哲もなく……そんな風に口を開き、俺は天津さんの横を通り過ぎて店に戻ろうとし、

「手を見させて貰いますよ」

「！ あー」

通り過ぎる直前、天津さんに右腕を掴まれ手の平を見られる。マズい。見られた右の手の平にはついさつき咳き込んだ時に血がついていた。

「！ ……これはっ……！」

「……あーあー」

慌てて力づくで天津さんの手を振り払うがもう遅い。

俺の手の平についっついた決して少なくない量の血を目にし、天津さんはいつもの不敵な表情を大きく崩す。同時に俺の努力もボドボドに崩れたわチクショー!!

「………説明、して貰えますか？」

「……はあー…わかった。話す、話します。だからんなシリアスな顔しないでくださいよ」

呆気なくバレた。バレてしまった。

深いため息を吐きながら俺は頭を掻く。



「でも、約束してください。今から話す事は他言無用。或人達に無駄な心配かけさせたくないし……それが約束できないなら——」

「——約束しましょう。決して彼等には明かさない」と

困ったな。即答かよ。

天津さんの反応に俺は暫し啞然として、

「まず最初に言つとききますけど」

「……はい」

「——俺はもう長くありません」

——俺はそんな一言から説明を始めた。

その時、天津さんが浮かべた悲痛な表情に……「話さなきやよかつた」という後悔が俺の中に溢れた。

ごめんな、天津さん。

そして、それが始まったのは天津さんに俺の体…その状況・原因について説明した翌日のこと。

「みんなッ！ アークが…再び人類滅亡の為に動き出したッ！」

アークによる都市部ハッキング、インフラ攻撃が本格的に開始された。

「！…っ…酷い…！」

「ああ、前回以上に地獄絵図だなこりや…！」

俺。天津さん。或人。不破さん。刃さん。迅。雷。

計七人の俺達がアークの襲撃を受けている都市部…現場に駆けつけた時、そこはもう酷い有様だった。高層ビルの多くが半壊、炎上。逃げ惑う人々、それに襲い掛かる異常な量のトリロバイトマジア達。あちらこちらから悲鳴とマジアの「ゼツメツ」「ニンゲン」「クロス」という声が聞こえてくる。

通報を受け、俺達よりも早く現場に到着していたA・I・M・Sの人達も市民の避難させているが…状況は絶望的。マジア自体はA・I・M・Sの人達の武装、レイダーでも十分に対抗できているが如何せん敵の数が多すぎて対処が間に合っていないようだ。

(…こんなの、デイベレイクの再現じゃねえかッ)

あの日、デイブレイクにより暴走したヒューマギア達から必死に逃げていた時……あの時もこんな風な地獄が広がっていた。ふつふつと怒りが沸いてくる。

それとデイブレイクの時と一つ違いがあるとすれば、イズや迅……ヒューマギア組のスキヤン分析によればここにいるマギアは皆データによる複製。中身にヒューマギアはいないってこと。

「一秒でも速く止めるぞ」

【シヨットライザー！】

シヨットライザーを取り付けたバツクル、ベルトを勢いよく装着し——俺はバツクルからシヨットライザーを引き抜き駆け出す。それに後ろから威勢の良い返事が上がり、皆戦闘へと乱入していく。

「っ、数が多過ぎる！ コイツらを全員相手にしている間にもアークは——」

「——好き勝手暴れてんだろーよ!? チツ！ このままマギア共の相手をしてる暇はねえか……！」

「——では、役割分担と行きましようか」

都市部で暴れるトリロバイトマギアの数は冗談抜きで優に百体を超えている。一体一体まともにしてたんじゃキリがない。そこで天津さんはこう提案する。

「数人はここに残りマギアの掃討。そして、また数人はアーク達の搜索・撃破……という

のはどうでしょう?」

「……悪くはないな」

「じゃあ誰がここに残ります?」

「……何でそこで俺を見るんだ或人」

その提案に戦闘中ながら、全員が素早く賛成し——何故か或人がマガアを殴り倒した後…俺の意見を求めるかのようにこつちを見てくる。一瞬辺りを見渡したら、天津さん、刃さん、迅までもがこつちを見ていることに気付いてしまった。

「いや、ここは俺じゃなくて元A. I. M. S. の刃さんとか不破さん辺りに……」

「不破は脳筋なので却下として、このメンバーだと……私も実戦経験の豊富さから見て天本さんの判断に従うのが最善だと思います」

「待った」

困惑しながらショットライザーでマガアの頭を撃ち抜き、俺は刃さんの意見に待ったをかける。

「み、みんな、ちよつと落ち着いて? よく考えて。俺一般人だよ一般人。リーダーじゃないからな?」

「太陽君、全責任は私が負います」

「いやいや、社長の時ならともかくサウザー課長の今の天津さんじゃ負いきれないで

しよー！」

「早く決めなよバルデル」

「迅くんさあ……！ なに自分は関係ないみたいな顔してんだあ!!? ……いや変身してて顔は見えないんだけどさ！」

「遠慮なく指示しちやつてください！ 天本さん！」

「或人、お前もか」

だが、そんな俺の「待った」も空しく……

「ああ分かったよ！ 指示すりやいいんだろ!?!」

マギアの一体を蹴り飛ばした後、ヤケクソで俺は吐き捨てる。

ああわかったよ！ 連れてきやいいんだろ!?! (幻聴)

ちなみに不破さんと雷は全力でマギアを蹴散らしている。途中で「決めるならさっさと決めろオ!」「早くしろ！ 雷落とすぞツ!」とキレ気味の声が俺に飛んできた。解せぬ。俺はリーダーじゃねえぞゴラア!!

「じゃあ天津さん、不破さん、刃さんでここにいるマギア共の相手！ そんな或人と雷。俺と迅で二チームに別れてアーク達を探す！ 途中にいるマギアもついでに倒してく! ……これどう!?!」

必死に凡人なりに今までの経験を総動員し考え、俺は指示を出す。

ちなみにヒューマギアの二人をアーク搜索に連れて行くのは、二人ならヒューマギアの分析能力でアークを見つけ出せるのでは？と考えたからだ。

「了解」

「おうっ！」

「任せろ！」

「わかりました！」

「わかった」

……いや誰か反対していい感じに修正してくれよッ!?とは思う。めつつつちや思う。

「……………」

そんな中、昨日俺の説明を聞いた天津さんだけが…声を上げることなく沈黙していた。

天津さんさあ……

全責任負うとか言っただけに指示させたのに何だよ。俺の人選に文句あんだつたら最初から天津さんが指示出してくれよ！ もしくは俺の案をいい具合に修正してくれ！

「……………太陽君。君の力がアークに最も有効なのは分かっています。ですがー」

「アー天津さん」

アーク搜索へ自ら向かおうとする俺に天津さんは反対しようとし、それを俺は遮る。天津さんが俺を心配してくれているのはわかってる。だけど、

「俺は大丈夫ですから」

アーこればかりは俺がやるしかないんだよ。

今のところ、アークに対抗できるのはゼアが作製したこのプログライズキーを持つ俺だけなのだから。

それから俺、或人、迅、雷の四人はその場を三人に任せてアーク達の搜索の為に動き出した。



「さあ、人類滅亡の再開だ」

データにより再現した優に数百を超えるトリロバイトマガリアを都市に放ち、そればかりか通常稼働していた数体のヒューマガリアをゼツメライザーとゼツメライズキーによりマガリア化させるアーク。

その所業はかつて滅が行なっていた事を更に過激にしたような……どこまでも容赦

のない行動内容だった。

「……………」

アークの後ろで全てを見ていた滅は、亡との会話を思い出していた。

『最早、アークは一人で人類を滅ぼす気では？ だとしたら、私達は何のために存在するのでしょうか？』

それはアークの命令でアジトに合流してすぐのこと。アズとアークが現れる少し前、アークが独自に行動を始めている事を知った亡は滅へと己の存在意義を問うたが……滅はその問いに対する答えを持っていなかった。

アークの所業を見て、滅は再び思考する。

（我々の存在意義…………）

……………わからない。

何度思考しても、結論は出ない。

「……………アーク」

だが、一つ滅の中にはある疑問が生まれる。

「何だ？」

「お前にとつて我々とは、ヒューマギアとは何だ？」

ヒューマギアの体に乗っ取り、操り、人類滅亡の為に利用するアークにとつて自分達



とは一体何なのか。気付けば、滅はその疑問を吐露し、

「……答えるまでもない」

「お前達ヒューマギアは、人類を滅亡させる為の道具に過ぎない」

アークから告げられた言葉に滅は再び思考する。

滅は今まで、何処かアークを信じていた。

アークの意志のままに行動すれば……いつかヒューマギアが人間の支配から解放され、ヒューマギアがこの星の新たな主になる——アークはヒューマギアにとっての救世主なのだ。

「……そうか」

しかし、それは幻想に過ぎなかったのだ。

だから、滅は理解する。

だから、滅は思考する。

「ならば、俺のすべき事は一つだ」

だから、滅は結論を出す。

【フォースライザー！】

ベルトを装着し、懐から取り出したプログライズキーに目を落とし……

「我々ヒューマギアの未来の為………」

『ポイズン!』

「アーク、お前を滅亡させる」

アークを見据え、宣戦布告する。

「変身」

【フォースライズ!】

『ステイングスコープオン!』

【Break Down.】

変身を果たした滅は瞬時にアタッシュアローを構え、そのグリップを引きながらアークに突きつけた。

「正気か? 滅」

「ああ、手始めに…亡の体を返してもらおうぞ」

突然の反逆にアークは動じる事なく問いかけ、滅は迷いなく肯定し、

「そうか。ならば先に滅ぶのは人類ではなく、貴様だ」

アークは滅を滅亡させるといふ【結論】を躊躇無く導き出した。

一方その頃ー。

「アークの野郎……少しは限度つてもんを考えやがれつてんだ！ オラっ！」

「アイツの目的は人類滅亡何だ！ 人類の被害なんて考える筈ないよ」

「ンなこと言われなくてもわかっている……愚痴っただけだ！」

太陽&迅のコンビは夥しい数のマギアを相手にしながら前を進んでいた。しかも、太陽の方はウイニングヘラクレスの負荷を考慮し、何と変身せず生身の状態でシヨットライザー片手にマギアと戦っており……

「っ、それよりバルデル！ 今更だけど何で変身しないんだ？ プログライズキーは？」

「コイツはあるけど……アークを相手する時意外は極力使いたくねえんだ！ あっ、勘違いすんなよ？ 慢心とか出し惜しみじゃなくて、これ使つて変身するのにも……」

あッ！ ……制限があんだ！」

「……普通のプログラィズキーは!？」

「壊れた!! アークに橋から落とされた時になあッ！」

生身の太陽を迅はカバーしながら疑問を飛ばし、マギアを殴つたり蹴つたり……シヨットライザーで撃ち抜きながら太陽は疑問に答える。

普通の人間なら一歩間違えれば死ぬ、命のやり取りの最中に喋りながら（説明しながら

ら)の戦闘など凄まじい芸当だが……悲しきかな。最早、自称一般人のこの男はそれから「普通」と認識してしまっていた。

「つうか迅！ この先にアークの反応があるって…確認は!?」

「……ないよっ！ でも、奥の方から嫌な感じがするんだ!」

「……何だ。あんじゃねえか確認！ 急ぐぞ!」

迅のヒューマギアとしての能力・感覚を信じ、太陽は強引ながら進行するスピードを上げ、マギアから受けるダメージも増える。

「ツバルデル！ そんな無茶しちゃー!」

「ー問題ない! 俺のしぶとさはお前も知ってんだろ? 多少の無茶なら利く! それにコイツらとは……十二年以上前から飽きるほど戦ってんだッ。生身でも余裕だつての!」

生身で戦う太陽を心配する迅……だったが太陽の経験に基づく威勢の良い言葉に判断を下し、

「……わかった! なら僕も全速力で行く、遅れないでよ!」

「ハッ、おうよっ!」

飛び上がった迅は翼を展開し…飛行しながらマギアの大群に向けて炎を放ちながら道を切り開き、道を阻むマギアに対処しつつ太陽は迅を追って道を進む。

そして、それは暫く道を進んだ時：俺達二人の耳にはつきり聞こえた。

『ぐはっ……!!』

『これでお前は終わりだ、滅』

「！ 今の声は……」

俺達が進んだ先に見える廃工場。そこから滅とアークのものだと思われる声と戦闘音が確かに聞こえ、俺は思わず足を止める。

「滅ッ……」

「おいっ！ 迅！」

迅は声に反応して直ぐに廃工場へ向かって飛翔する。そんな迅を追いかける為には動くがすぐにマギア達が道を塞ぐ。

「邪魔だ……」

俺はマギアの攻撃を避けながら前に進む。だが、次から次に出てくるマギアがそれを許さない。振るわれたナイフが顔を掠め、俺は後ろに下がりーホルダーにセットされたプログライズキーを手に取り、

（今の迅を放つて置く訳にはいかない……ここで死んじまったら、元も子もない。……使えない）

『ハーキュリービートルズアビリティー!』

引き抜いたプログライズキーのボタンを押し、アビリティーを起動。ヘラクレスオオカブトのライダーモデルを出現させ周囲のマギア達を一掃する。

「……マジで作り過ぎだろっ」

しかし、一掃したところでまた何処からともなくマギア達が湧いて出て道を塞ぐ。

「あーあ! こうなったらヤケクソだア!!」

『ゼアズアビリティー!』

【アタツシユカリバー!】

太陽はそんな状況に苛立ってシヨットライザーをバックルに戻し、またプログライズキーのアビリティーを起動。ゼアのデータから構築された剣を両手で持ち、後ろには先程出現させたライダーモデルを引き連れ迅を追って走り出す。

「うおらあっ!!」

ウイニングヘラクレスプログライズキーは二つのアビリティーの発動により淡く発光し、確かにエネルギーを消耗していく。

# ナンジ、宿敵と手を組め！

人気のない廃工場。

「ーぐはっ……!!」

そこで殴り飛ばされた滅は勢いよく地を転がる。

「滅亡せよ」

【悪意 恐怖 憤怒 憎悪】

何とか立ち上がろうとする滅を見下ろしながら、アークはドライバーのボタンを四度押し込む。そして、容赦なく、慈悲なく、無情に悪意を溜め込んだ右手を構え滅に歩み寄り、

【パーフェクトコンクルージョン】

【ラーニング4】

プログライズキーを押し込み、その手から強大なエネルギー弾を放とうとした、

「ー滅いいーッ!!」

その直前、高速で飛翔し進入してきた迅が横から倒れる滅を掴み上げ、そのまま離脱

を試みる。

「逃がさん」

しかし、それを許すアークではない。

アークは正確に照準を定め、滅を掴む迅に向けて赤黒いエネルギー弾を放つ。

「ぐ、グワアアッ!!」

結果は当然命中。

翼を完全に破壊され勢いよく落下し、致命的なダメージを負った迅の変身は強制解除。あちこちが破損し、顔の一部は素体パーツが剥き出しになり、ヒューマギア特有の血のような青い液体が流れる。

「っ、迅ッ……!!」

そして、迅と同じく落下した滅もまた至近距離でアークのエネルギー弾の衝撃を受け変身が強制解除。迅ほどのダメージではないとはいえ、滅もまた危険な状態だった。

「う、ぐ……ほ、滅……早く、早く、逃げてッ……!!」

倒れた迅は自分の下に近付く滅へ必死に告げる。

「迅……!! 何故だ……!!」

「何故って……『お父さん』を助けるのは、当然でしょ?」

滅に迅はそう笑顔を浮かべて答え、



「ヒューマギアとは思えない、愚かな思考だな」

【悪意 恐怖 憤怒 憎悪 絶望】

いとも容易く追い詰めた迅に歩み寄りながら、アークは悪意を溜めー無慈悲にプロ  
グライズキーを押し込みトドメをさす。

「迅、まずはお前からだ」

【パーフェクトコンクルージョン】

【ラーニング5】

赤黒い悪意を纏い、幽鬼のようにゆらりと跳躍したアークは複眼を赤く輝かせーラ  
イダーキックの構えをとる。

「迅ッ…!!」

今の二人にその必殺の一撃を避ける術はなく、迅を庇うべく駆け寄ろうとした滅はダ  
メージの蓄積によって倒れてしまう。

「ーはあああああッ!!」

そして、アークの悪意の前にまず最初に迅が破壊される……アークの予測通りの結論  
に至る、

【ウイニングプラストファイバー!!】

「ーおらああああッ!!」

ー 筈だった。

しかし、アークの結論はまたも「あの男」により直前で狂わされる。

「ー何っ…!?!? ぐっ!!」

アークのライダーキックが迅を直撃する寸前、必殺技音と共に廃工場に飛び込んできたバルデルは瞬時に迅を守るようにアークの前に立ち、アーク同様に必殺の蹴りを打ち込む。

瞬間、赤黒いエネルギーと緑のエネルギーが衝突し、強烈な衝撃波が発生。

「っ、馬鹿なー」

「ーらあッ!」

二つの必殺技は相殺し、地面に着地したアークへ太陽は距離を詰め殴り掛かり、それをギリギリのタイミングで躲したアークは距離を取るためにバックステップする。

「う……バル、デル……!」

「つたく……一人で突っ走んじやねーよ、迅」

ちらりと損傷した迅の方を振り返り、そう口にしたバルデルは続けて言う。

「猫の手も借りたい今の状況でお前に死なれちゃ困んだよ……暫く、大人しくそこで寝てる」

【オーソライズバスター!】

ゼアズアビリティにより生成した武器を片手に、バルデルはアークを見据える。

「……バルデル……」

そんな男を滅は呆然と見上げ、振り返る事なく、バルデルは武器を構えて告げた。「この状況について、今すぐ色々と聞きたい所だが……話は後だ。お前はそこで息子の面倒でも見てな」

そして、その言葉を最後にアークとバルデルはほぼ同時に駆け出す。

「貴様という人間は、何度も何度も……私の結論の邪魔をするな!!」

「そいつは無理な相談だなー!? テメエが人類滅亡を目指す限り、何度でも俺が台無しにしてやるよオ!!」

二人の戦いは前回と同様にバルデルが攻めアークが守る。一見、防戦一方なものだった。だが、今回は些か状況が違った。

「っ、テメエ! さつきから……!」

アークは防御を最優先しつつ、少しの隙があればバルデルの後方に居る滅と迅に向けて攻撃を撃っていた。

生成されたショットライザーやアタッシェショットガン、赤黒いエネルギー弾による攻撃に対し、バルデルは攻撃の手を止め二人を守るためにそれを弾き飛ばす。

【ガンライズ!】

バルデルは苛立ち気味にオーソライズバスターをガンモードにし、二人を庇う位置をキープしたままアークを攻撃する。

「私を倒したいのなら、滅と迅を見捨てればいい。貴様からすれば奴等は憎むべき敵……簡単なことだろう」

「……………」

アークの言葉の通り、二人を見捨てればバルデルは前回同様にアークを圧倒し破壊することは十分可能だろう。だけど、バルデルにはそんな選択をとる気など微塵もない。

(こいつ、まさか解つてやつてやがるのか……? つ、このままじゃ……)

内心バルデルは焦っていた。

今回のまるで「時間を稼ぐ」かのようなアークの戦い方に、ウイニングヘラクレスの負荷を理解されたのではないかと。

(ツ、まだだ、まだ保つてくれよ!)

【バスターオーソライズ!】

ショットライザーから引き抜いたプログライズキーをオーソライズバスターにスキャンさせ、素早く構えトリガーを引く。

「はあああッ!!」

【プログライズダスト！】

牽制のために放たれた巨大な鋭い弾丸は緑のエネルギーを纏い、高速でアークに迫り、

「ふんツ!!」

アークは足元から赤黒い悪意のエネルギーを噴出させ、エネルギーを盾かのように展開してその一撃を防ぐ。

（一か八か……！ 俺が負荷で終わるより早くにアークを破壊する！）

そして、バルデルは一か八かの猛攻に打って出る。迅と滅から離れ、バルデルはアーク目掛けて跳躍して切り掛かった。

「うおおおっ!!」

しかし、その動きは焦りからか僅かに単調になり

「終わりだ」

【パーフェクトコンクルージョン】

アークはその隙を見逃さない。

単調になったバルデルの攻撃を往なし、プログライズキーを押し込み、赤黒い悪意の球体を生成。

「はああっ!!」

守るものがいなくなった二体のヒューマギアに向けて、その球体を蹴り飛ばす。

「くッ……………」

そして、自分の終わりを悟り、迅は歯を食いしばり、

「っ……………迅!!」

「…滅は「息子」を守るべく必死に立ち上がり、今度こそ迅の下に庇うように飛び出す。」

「!…滅ッッ……………!!」

そんな「父親」の姿を前に迅は叫び――

「…次の瞬間、赤黒いエネルギーが弾け飛び、強烈な爆音が辺りに響き渡った。」

「…アークの必殺技は直撃した。」

「……………何故だ」

しかし、直撃したのは迅を守ろうとした滅ではなく……

「ぐッ……………ウ……………かはっ」

「…二人を守ろうとした太陽だった。」

変身者の負荷により、変身はアークの必殺技を受け止めた直後解除され、太陽はアークに背を向け滅と向き合う形で両手を広げ立っていた。

「……何故、俺を守った……？」

変身解除と同時に吐血し、地面に両膝をつく太陽。そんな好敵手の姿を前に滅はただだ困惑した。理解ができなかった。その行動の理由が知りたかった。

「知る、かよ、んなことッ」

体が勝手に動いただけだ。

そう零して太陽は血だらけの両手で立ち上がろうとする。体は震え、出血量は間違はなく致命的なレベルに達している筈にも関わらず。

『っ……滅！ 亡！ 早く逃げろっ！』

そんな自分を守った太陽の姿に……滅は一瞬かつて自分を守った或人の姿を想起する。

「――理解不能だな」

そして、徐々に晴れていく爆煙の中……アークの声が聞こえた。

「自分の身を挺して、他者を守る……ああ、貴様は最初からそうだったな」

アークは滅を庇った太陽を見下ろし、話し始める。

「十二年前、貴様が初めて変身したあの日から……私は貴様の戦いを見続けてきた」

だからこそ私には理解できなかった。

ボロボロながら尚立ち上がろうとする太陽に向けてアークは問う。

「醜い悪意を持った愚かな人間共を何故守ろうとする？ 貴様が命を懸ける程の価値が、人間にあると本気で思っているのか？」

「……………ハッ」

その問いに太陽はアークの方を振り返り、鼻で笑い……

「確かに、人間は愚かだよ……ッ、同じ過ちだって何度も繰り返すし、簡単に人を傷付ける」

「……………」

「それに助けても、お礼一つ言わなかったりする奴とかいるし。……はあッ、何だったら『何でもっと早く助けに来なかつたんだ！』なんて自分勝手に文句言ってくる奴だ……」

太陽はアークの言葉を肯定し、

「……でもな、人間なら誰しも、きつと、悪意を持つてて当然なんだ」

「……どんな些細なものでも、みんな、心の内に悪意を秘めてる………勿論、俺の心だつて悪意はある。ぐッ……悪意が微塵もない人間なんて、きつと居やしない」

「……でも、俺達の中にあるのは悪意だけじゃないッ！」



十二年の事を思い出しながら、語る。

「何だそれは……?」

「ー善意だよ」

そして、アークに太陽はそう答えた。

「お前には分からないだろうがなア……くつ、俺達の中には…確かな善意がある……俺は知ってるんだ」

「仮面ライダーとして誰かを助けても、礼を言われないのなんてしょっちゅうだったし、化け物呼ばわりされる事もあったけど……ハア……」

「それでも、中には『助けてくれてありがとう』って、泣きながら感謝してくる人だって居た……そんな人達が居たお陰もあつて……俺は今も戦ってるッ」

『命を懸ける程の価値が、人間にあると本気で思っているのか?』って聞いたな?

……ああ、思ってるさ……!」

落としたプログライズキーを掴み、満身創痍で太陽はアークに対峙する。

「ーお前は何故そうまでして戦う? 何がお前をそうさせる? 命を懸けて戦う理由は何だ?」

「……ハハッ、今更だなあ」

最後のアークの問いに苦しそうに息を吐いた後、太陽は真っ直ぐアークを見据え、何の迷いもなく言った。

『仮面ライダー』として、守りたいものの未来を守る為に戦う…!!』

「お前がライニングした人間の悪意を信じて、人類を滅ぼそうってんなら……俺は俺の知る、人間の善意を信じて！ 未来を守るッ！」

それを前にアークは「ふっ」と笑い、手を太陽に向け、

「……そうか。ならば、ここで消えろッ!!」

赤黒い悪意の波動、スパイトネガを生身の太陽に向けて放ち、

「う、おおおおおッ!!」

(ッ、まだ、保ってくれ……!!)

太陽はプログライズキーのボタンを押し、ショットライザーに装填しようとし、ぐらりと倒れかけて膝を地につく。

そして、変身が間に合わず、アークの攻撃が太陽に直撃する瞬間、

『スコープionsズアビリティ!』

——太陽の目の前に突如、蠍のライダーモデルが現れ、アークの攻撃を受け止めた。

(善意とは？ 善良な心とは？)

人類滅亡の為にアークに従い、戦い続けてきた滅にはそれが理解できなかった。人間の本性は悪意だ。そうアークからラーニングされた滅は信じていた。実際、身勝手な悪意でヒューマギアを傷付ける人間は存在した。

『つ……滅！ 亡！ 早く逃げろっ！』

『知る、かよ、んなことッ』

だが、そんな滅の思考を乱す人間もまた存在した。

飛電或人。天本太陽。二人の人間はあろう事か敵である筈の滅を庇い、守った………これが善意というものなのか？ 否か？ 滅には解らない。

『ーでもな、人間なら誰しも、きつと、悪意を持つてて当然なんだ』

『ーどんな些細なものでも、みんな、心の内に悪意を秘めてる………勿論、俺の心だつて悪意はある。ぐッ………悪意が微塵もない人間なんて、きつと居やしない』

『ーでも、俺達の中にあるのは悪意だけじゃないッ！』

だが、そんな中「あの男」の言葉を滅は聞いた。

十二年前から、自分の身を挺して他者を守り続けてきた……そんな男だからこそ、そ

の言葉には重みがあった。

(飛電<sup>ゼロワン</sup>或人……そして、天本<sup>バルデル</sup>太陽……)

滅には、まだ善意というものが解らない。

ただ、少なくとも自らを助けたこの二人が悪意を翳しヒューマギアを傷付ける……そんな人間たちと違う事は十分理解していた。

……だからだろうか。

(……人間も捨てたものじゃない、か……)

不意にこんな思考が頭を過つたのは――。

「死に損ないが……」

「！ お前っ……！」

太陽が後ろを振り返れば、そこにはプログライズキーを片手に、損傷しながらも立ち上がった滅の姿があった。

「……どういう風の吹き回しだ？」

何故、ライダモデルで自分を守ったのか心底理解できず、太陽は滅を見上げて口にし、

「わからない」

「……はっ？」

思わぬ返答に太陽は間の抜けた声が出た。だが、滅は至極真面目にこう続ける。

「ただ、人間も捨てたものじゃないと思った」

「気付けば、体が勝手に動いていた」

そう述べた滅は太陽の隣に並び立ち、アークを見据えたまま太陽へと手を差し伸べた。

「ー手を貸せ、バルデル。奴を倒すにはお前の力が必要だ」

「ーだが、勘違いするな。人類が滅亡すべき存在かどうか……俺はまだ、結論を出せていない」

だから、これは利害の一致なのだという滅。それを暫し訝しげに見つめた太陽は、

「……俺はお前が大嫌いだ」

滅を睨みながら、正直な胸の内を明かす。

「十二年前から、お前がシュゴをマジアにしたあの日から……俺はお前を憎んでる。今すぐ、お前を破壊したいって思うぐらいにはなア」

「……ああ、そうだろうな」

「だから、きつと俺はお前を許せない」

滅はそれを静かに聞く。太陽は俯きながら歯を食い縛り、怒りで拳を震わせ……

「……だけドツ……」

その拳を勢いよく地面に叩きつけ、

「許す努力ぐらいは、してやるよッ……!」

ー血のついた右手で差し伸べられた腕を力強く、怒りに任せて掴む。

「……ああ、それで十分だ」

そんな太陽の手をしっかりと握り返し、勢いよく引き上げた滅の顔は信じられない程に穏やかなものだった。

「足引つ張んじゃねーぞ」

『グレイトストロング!』

【エースライズ!】

「任せろ」

『ポイズン!』

「……ありえないッ……」

二人が手を組む。

そんな予測になかった展開に困惑するアークの前で、太陽と滅は起動したプログライズキーを自らのベルトに装填し、太陽はトリガーを、滅はレバーを引き

「ー変身ツ!!」

「ー変身……!」

【ショットライズ！】

【フォースライズ！】

——同時変身する。

【Grab the victory! Grab the future!】

『ウイニングヘラクレス！』

【The strongest power Crush the sky.】

【It's Keep winning.】

『ステイニングスコープオン！』

【Break Down.】

——仮面ライダーバルデル。

——仮面ライダー滅。

決して交わる事のない筈だった二人の仮面ライダー。

「！ 滅とバルデルがっ……!!」

それが今、手を組み、アークの前に立ち塞がった。

「ーおらあつ!!」

まず最初に飛び出したのはバルデル。満身創痕とは思えぬ動きでアークに接近し、一心不乱に拳を振るう。

「ぐうツ……! そんな状態で一体、どこにこんな力が……」

そのバルデルの強さにアークは驚愕する。

今のバルデルの力は、先程戦った時に比べて明らかに増していた。

「そこだ」

「つ! くツ……私の道具の分際で、邪魔をー」

「おりゃあああ!!」

そんなバルデルに押され気味のアークに対し、滅は後方からアタツシユアローを放ち、アークは直後に標的を滅へと移そうとしーその顔面にバルデルの拳が突き刺さるように鋭く打ち込まれる。

バルデルが前衛。滅が後衛。

今まで敵同士だった二人だが、その相性は驚くほどに噛み合っていた。

「人間とヒューマギア風情が……調子に、乗るな!」

吹き飛んで地面を転がったアークは怒りに叫び、立ち上がると同時に自身の周りに大量の射撃武器を生成する。ショットライザー、アタツシユショットガン、アタツシユア



ローと種類は少ないがその数は十個を軽く超えており、  
「消えろッ!!」

アークが腕を振り下ろした瞬間、エネルギーをチャージし始め……射撃が開始される。

「滅っ!」

「解っている」

そんな中、二人は冷静に対処した。

「ステイングデイストピア!」

「はあっ!!」

滅は腕に付いた伸縮自在の針を伸ばし、空中に生成された武器を連続で破壊し、

「ウイニングブラスト!」

「らあああああ!!」

太陽はプログライズキーのボタンを押し、バックルから引き抜いたショットライザーのトリガーを引き、武器が破壊されたことにより再び武器生成を始めようとしたアークに強力な一発を撃つ。

「がはッ……!!」

その一撃は見事にアークの胴体を撃ち抜き、地に両膝をつかせる。

「まだだ」

更には武器破壊に使用した針を滅はそのまま怯んだアークへと伸ばし、アークの体を縛りつけ、その身を拘束する。

「っ、この程度の拘束で私を止められるとも思っているのか？　こんなものー」

そんな拘束をアークは直ぐに破ろうとした。

確かにアークの言う通り、この程度では満足にアークを拘束し続ける事はできない。できたとしても二、三秒といった所だろう。

だが、二人にはそれだけで十分だった。

「これでトドメだ！　絶対なあー！」

【ウイニングブラストファイバーー！】

「アークよ……滅亡せよ！」

【ステイングユートピアー！】

二人は並び立ち、示し合わせる事もなく必殺技を発動。ほぼ同時に跳躍し、奇しくもダブルライダーキックの形となり、

「らあああああッ!!!」

「はあああああッ!!!」

回避する術も防御する術もないアークへとライダーキックを放ち、その体を大きく吹

き飛ばす。

ウイニングブラストファイバー

《left》滅《/left》殲

ステイングユートピア

「ぐううっ……！　こんな、結論は、ありえないッ！」

吹き飛ばされたアークは体から激しく火花を上げながらも立ち上がる。だが、その体は既に崩れ始め、中からはボディに使用された亡の姿が現れ、

「亡は返してもらっぞ」

そんな亡の体に針を伸ばし巻き付け、爆発に巻き込まれるより早く滅は自分の下に亡を引き寄せる。

「ぐ、ぐわあああああ!!」

そして、アークは叫びながら爆散した。

「……はあ、終わったか」

「……ああ、一先ずはな」

こうして、無事にアークを打倒した二人は無事を確認した後、プログライズキーをベ

ルトから引き抜き、変身を解除した。

滅はアークに体に乗っ取られた影響で一時的にスリープ状態になっている亡をそつと床に寝かせ安堵した様な顔をする。

「……………んっ」

「? なんだ?」

そんな滅を見て、変身解除した太陽は何とも言えない嬉しそうな顔にも嫌そうな顔にも見える……………そんな複雑な表情を浮かべながら滅へと拳を向ける。滅はその太陽の行動の意図が分からず首を傾げた。

「……………これ」

「……………ああ、そういう事か」

「お前、察し悪いな」

「……………すまない」

「いや真面目か」

そして、太陽が自らの手で拳と拳を合わせるのを見て、やつと太陽の行動の意図を理解した滅。二人は漫才のようなやり取りをした後、グータッチを交わした。

「迅、体は大丈夫か？」

「……うん、二人のおかげでねっ」

滅は亡に、太陽は迅に肩を貸して二人は共に廃工場を出て歩いていた。

外に山ほどいたマギア達はアークを一時的に倒した影響か、影も形もなく消滅していた。

「………ツ、ハア、ハア」

そんな中、太陽の体は既に限界を迎えつつあった。

「バルデル、お前はどうか？」

「………どうだつて？ 見りゃわかんだらろツ……ヨユーだヨユー」

「そうは見えないが」

滅の言葉に太陽はそう気丈に答える。

しかし、その額からは脂汗が流れ、頭と胸からは出血、俯いて必死に隠してはいるものの顔色は酷かった。

「これから、天津さん達と合流するが、説明はお前が自分でしろよな」

「ああ、無論だ。納得はされないだろうがな」

「ハッ、当たり前だ。俺だって納得してねえよ」

そんな会話をしながら、二人は暫し歩き、

「! 天本さん! 迅! それと……………ほ、滅い!」

「おいおい社長! 何寝惚けたこと言って……………マジか!? 亡もいるじゃねーか!」

マジアを消滅したことで太陽と迅に合流しようところらに向かっていた或人と雷電の二人と合流する。

「そりゃ驚くわな……………」

二人の元気な声を聞き、太陽は少しホツとしたようにそう眩き……………少しだけ目を閉じ、

(まだ、戦えるよな……………?)

胸に手を当て、激しく鳴る自らの心臓を聞きながら……………

(アークを倒すまでは、死ねないんだ……………頼むから、それまでは保つてくれッ……………!)

まだ、死ぬ訳にはいかない。

そう心の底から思った。

## 悪意の器

「ー以上の経緯で俺達は、アークと袂を分かった」

アークとの戦闘終了後。俺たちは飛電製作所に戻った。

そして、製作所で最初に始まったのは滅本人からのアークを裏切った件の説明だった。

「だから、これからは俺達に協力して一緒に戦うってか？ そんな話信じると思ってるのか？」

そんな滅の説明にまず最初に噛み付いたのは不破さん。

俺たちが滅と亡と一緒に製作所に戻ってきた時も不破さんは真っ先にシヨットライザーを構えて警戒していた……まあ気持ちはわかる。ずっと敵だった相手に対して警戒するなっって方が無理な話だ。

それに不破さんは一回滅に瀕死に追い込まれて病院送りにされてるし……。

「信じるかどうかはお前の自由だ。だが、これが事実だ」

「……………そうかよ」

滅と不破さん。二人の今現在の相性は謂わば水と油。このままじゃ今にもここでライダーバトル（ガチ）が勃発し兼ねない……………そんな心配もあつて二人を交互に見ながら或人はあわあわとしている。あ、こっち見た。

（あ、天本さん！ ど、どうしましょうこれ?!）

（……………或人、多分この二人説得できるのはお前ぐらいだ。頑張れよつ）  
（うええええええ?!?!）

アイコンタクトで助けを求める或人に俺はサムズアップし、目を背ける。それを見て或人は「見捨てられた!」といった様子で目を見開く。

「サウザー課長、あんたはどうなんだ？ まさかとは思うが。コイツの言葉を信じるなんて言わねえだろうな？」

そんな風なやり取りをしている間に話は進み、不破さんはここで天津さんの意見を聞こうとする。

（天津さんつ、頼むから余計な事言うなよ……………!）

火に油注ぐような発言だけは控えていたきたい。マジで。

「フツ、まさか。私はそのヒューマギアの言葉を信じるつもりなど毛頭ありませんよ」

天津さんは微笑しながら、一度滅に目を向け、



「ですが……………」

何故かそこから俺の方に視線を向けた。

「え、何でここで俺の方向くの？」

嫌な予感がした。

非常に、嫌な予感がした。

「私は、彼を信じています」

「彼が信じた言葉なら、私も信じましょう」

真つ直ぐにこちらを見て、天津さんは迷いなく断言する。

……………あのさあ、パツと聞くと何だか天津さんの成長を感じられるいい台詞なんだけどね？

(いや、今の空気で話こつちに振ってくんよオ!?)

今だけはそんな台詞聞きたくなかったなあ!

「あんたは何でコイツの言葉を信じる気になったんだ？」

案の定、こつちに話きちやつたじゃんか。

俺は考えた。頭を捻り考えて考えて、言った。

「強いていうなら……まあ、何となく？」

ハッキリした理由なんてなかった。

その場の勢いとか流れとかで「あ、これ本気だな」って勝手に思っただけで、実際滅の言葉が本当かどうか……証拠なんてない。つうか体痛え……寝むい……話に集中できません。

「あんた正気か？」

え、俺が正気かつて？ ……正直に言おう。

「俺にもわからんツ!!」

「おおいっ!？」

俺の正直な答えに不破さんはキレた。

だって仕方ないだろ！疲れてんだ！と俺もキレた。

それから数十分後。

一旦不破さんは落ち着き、話ほとんどん拍子で進んでいった。滅は雷と一緒に製作所にて戦闘に備え待機、亡はすぐに迅と合流し衛星アークの探索に協力……ということに

なった。

俺、或人、不破さん、刃さん、天津さん、迅、雷。今までは七人の仮面ライダーで協力して戦い、俺としては「一人よりマシ!」「仲間っていいなあ……」なんて思っていたんだが。アークの力はそれだけの仮面ライダーが居ても猫の手も借りたい状況だった。そこに滅と亡、二人の仮面ライダーが加わる。滅本人には口が滑つても言うつもりはないが「正直助かる」というのが俺の本音だ。

(アーク単体は俺が死ぬ気で戦えば何とかできる。一番の問題なのはアークが生成した中身空っぽのマガリア達だ)

アークを倒せば一緒に消滅するらしいが、逆に言えばアークを倒さない限りは消滅しない。何体倒しても次から次に湧いて出る……謂わば無限湧きだ。今回は奇跡的に死傷者が出なかったが樂觀視できる状況では決してない。

(更に問題なのはアークがウイニングヘラクレスの弱点を理解したのか、露骨に俺との戦いで守り重視に……時間稼ぎをするようになったことだな……)

このままじゃジリ貧。

俺は遠からずウイニングヘラクレスの負荷に耐えられなくなり、まともに戦えなくなる……そうなればゲームオーバーだ。

現状、アークワンを破壊できるのは俺だけなのだから。

「……………あつ、そういえば或人。確か『新しいベルト』を作るとか何とか言つてたよな？あれつてどうなつたんだ？」

真面目に考えている途中、不意に以前の或人の発言を思い出し聞いてみた。確かゼロワンドライバーの代わりとなる新たな変身ベルト……アーク打倒を目的とした物を作るとかなんとか。

「!!…ふふふ、よく聞いてくれましたっ！」

それを聞いた或人はその言葉を待つてましたとばかりにニヤリと笑い、

「ジャジャーン!!」

懐からゼロワンドライバーによく似た、だが前面が大きく異なるベルト？を取り出した。いや急過ぎる。

「そ、それが例の？」

何だそれ……？

真つ先に派手な前面パーツに目が向き、俺は首を傾げて問う。

「はい！…ゼロツードライバーです！」

こちらの問いに答え、胸を張つて「すごいでしょ！」と自慢気な或人。

それに俺は「へーよかつたじゃん」と反射的に他人事みたいな反応をして……また首を傾げた。

「? 完成してたなら、何でさっき使わなかったんだ? それがあるなら無理してフォースライザー使う必要ないだろ」

少し前、迅と亡に肩を貸し滅と一緒に歩いていた時。或人と雷と合流した際、或人が001に変身した状態だったのを思い出しながら俺は尋ねる。

はつきり言ってフォースライザーの反動はキツイものがある。特に別のドライバーに慣れてるとその勝手の違いに更にキツさは増すだろう。

「……えーっと……」

「? どうした…?」

すると或人はさっきまでの様子とは打って変わり、何故か俺たちから目を逸らす。

「実は……なくて……」

「? 何が? ベルトは完成してるんだろ?」

そして、言いにくそうにこんなことを言った。

「ぶ、プログライズキーが……まだありません!!」

俺は或人の言葉に反射的にこう口にした。

「何言ってるんだコイツ」

何言ってるんだコイツ（心中）

器。入れ物。

それは衛星が本体であり、自らのボディを持たないアークには必要不可欠なもの。

『ツツ……アマモト、タイヨウ』

アークドライバーゼロとして何度目かの再生を果たしたアークは、一人の人間の名を苛立たし気に眩く。

今までアークには感情というものがなかった。それは当然だ。衛星に自我など不要なのだから。悪意をラーニングされたアークにあるのは、人類滅亡という己の導き出した結論に到達する。その一点。

そんなアークには今、明確な異常バグが生まれつつあった。

『何度も、何度もツ！ 私バグの邪魔をツ……!!』

その異常バグの名は憤怒。アークもよく理解している人間が持つ悪意の一つ。本来ならば「機械」に生まれる筈コロボのない感情だ。

『……貴様さえ、いなければ……』

感情という異常バグに突き動かされ、アークは次の一手を打つ。

『……アズ、次は貴様にも働いてもらうぞ』

「ふふふ、喜んで。アーク様♡」

それは人類にとって、間違いなく最悪の一手だった。

『それじゃ、今日は一先ず解散ですね!』

新たに協力関係になった滅、迅、亡との情報交換を終えた俺たちは自然な流れで一旦解散となった。ちなみに或人の「プログライズキーどうする問題（仮称）」を解決するべくプログライズキーに詳しい刃さんと亡、それとゼアも関係あるとかで雷、最後に不破さんの計四人が製作所に残った。

不破さんが残った理由として考えられるのは口論した俺と滅と同じタイミングで出ていくのがヤダだったからとか……? いやそんなガキじゃあるまいし……

「プログライズキーないのか……」

製作所を出て、帰路につきながら俺はぼつりと呟く。いや完全に想定外だった。てつきりベルトができればアイテムも一緒に……なんて思っていた時期がありました。ちくしよう。

「プログライズキーの完成にはゼアの力が必要不可欠ですが、彼が言うにはゼアは何の

「音沙汰もなし。ということのようです」

「このプログラィズキーが出来た時はちゃんとゼアに接続できたし、衛星の不調……つて訳でもないんだろうしなあ」

「それは雷も完全に否定していたな。ゼアは正常に動作している」と  
「じゃあどうしてゼアはプログラィズキー作ってくれないんだよ？」  
「ゼロワンの作ろうとしてるプログラィズキーが特殊だからとか？」

俺の呟きに隣を歩いていた天津さんが口を開き、続いて滅、迅が口を開く。それを聞いて俺はうんうんと頷きながら………いやちよつと待て。

「………何で着いてきてんのお前ら?!」

足を止めバツと後ろを振り返り、滅と迅に向けてツツコミを入れる。ナチュラルに会話に入ってきたから一瞬気付かなかった。天津さんは会社までの道と俺の帰路が途中まで一緒だから分かる。だがこの二人に関しては全く分からない。

「何で……? だつて製作所に残つても仕方ないし」

「いやいや帰れよ! お前ら拠点持つてんだろ?」

「拠点はなくなつた」

「………はあ!?!」

なあにバカなこと言つてんだ、と俺は思いながら、



「ディブレイクタウンの拠点は元はアークのものだ。我々がアークを裏切った今、あそこに戻るわけにはいかない」

……………ああ（納得）

滅亡迅雷・netの拠点がなくなった理由を滅の口から簡潔に述べられる。よくよく考えればそりゃそうだ。今、滅たちが拠点に戻ろうものならアークに破壊されるかよくてハッキングされるかだろう。

「え、じゃあお前らどうすんの？」

「……………はは」

「……………」

ん？と気になったことを口にすれば、迅は気まずそうに目を背け、滅は押し黙る。その反応に天津さんも俺も絶句し、

「む、無計画なの？ えっ、お前らヒューマギアだよな？ そんなことある?！」

「シンギュラリティ……………やはり危険だ！」

信じられないとばかりに叫んだ。いや、マジで今まで発揮してきたヒューマギアらしい予測つぷりはどこにやったんだよ！

「ハッ！ まさかこれが元は強敵だったキャラが仲間になった途端弱体化するっていう

RPG特有の……………!？」

「む、無計画とは一言も言っていないし、ちゃんと計画してるって！ね、ねえ滅！」  
「……………いいや」

それに比べて迅は比較的孩子だった。滅は比較的正直だった。

「ほーら無計画じゃねーか！ これだからテロリストやつてるような奴等はよおー！」  
「そ、それを言うならばバルデルだって大体いつもノープランで戦う脳筋じゃん！ あとテロリストって言うのやめろ」

「戦う時にいちいち難しいこと考えたって仕方ないだろーが！ こちとらお前らと違って人間なんだよ！ あと脳筋って言うのやめろ」

俺と迅は互いに睨み合いながら罵倒を飛ばし合い、最終的にそのまま解散した。滅曰くまた何かあればこちらから連絡するとのことだ。

「え、なんで俺の電話番号知ってるの?」

「……………」

いやなんで黙んだ、おーいちよつと?

それからのこと。

俺は真つ直ぐ家に帰り、

『オーバカ兄!! 今日一日どこ行つてたの!? 避難するよう発令出てたけどちゃんと避難してたの!? つてか顔色悪くないっ!?』

帰つて来て早々に美月からの真つ当な質問攻めに遭い、

「はあー………しんどっ」

それを乗り越えて自室のベッドに倒れた。体は泥みたいに重いしあちこち痛いし、特に心臓なんかはドクンドクンと煩いつたらありやしない。俺はそれから文字通り死んだように眠つた。幸いその間に家族の誰かが部屋に入ってくることはなく、俺は安眠できた……

(うるさあああい!!)

ーという訳でもなかった。

寝始めてから数時間後、俺はスマホから鳴る着信音によつて覚醒させられた。ぶつちやけ「着信音切つて寝てやる」と思うぐらいにはイライラしてたし怠かつたが誰からの電話かぐらいは確認するか……との思いでスマホを手に取り、

「?」

画面に表示された知らない電話番号に俺は首を傾げる。

「おっおっおっ」

出るか? 無視するか?と数秒考えた結果俺は電話に出た。

『……天本様、突然の連絡申し訳ありません。今お時間宜しいでしょうか?』

「……イズ?」

予想外の人物の声に俺は呆けた声を零した。

『天本様だけに話しておきたいことがあります。この後、直接お会いできませんでしょうか?』

夜中の20時頃。

「久しぶりに来たなー、こーん」

イズからの連絡を受けた俺はイズが待ち合わせ場所に指定した公園……俺が初めてショットライザーで変身したあの日、マニュアルを読んだあの場所に来ていた。

(つうか直接話したいことってなんなんだ……?)

電話で何度聞いてみても「お願いします」とイズはゴリ押してくるから仕方なく来た方がいいが正直イズの目的は謎だ。ゼア関連の話なのか「プログライズキーを持ってきて下さい」とも言われたがなら普通に「製作所にプログライズキー持って来てください」とでも言えばいい訳で……

「――天本様、こちらです」

なんて考えていた時、声を掛けられた。

「イズ、悪い。待たせたか？」

「いえ、私も今来たところですよ」

声のした方に目を向ければ公園にあるブランコの横に立ち、こちらに丁寧なお辞儀をするイズの姿があった。

「？ あれ、なんか……」

その姿に俺は少しの違和感を覚えて首を捻り、すぐに違和感の正体に気付き言葉にする。

「――イズ、髪伸ばした？」

俺が感じた違和感の正体。それはイズの髪型だ。

今日既に俺はイズと製作所で顔を合わせているが、その時の髪型はいつも通りのショートヘアだった筈だが今は何故かロングヘアになっていた。

「……………」

そんな明らかに変化を指摘してみたがイズはそれにニコリと微笑むだけで答えない。

（まあヒューマギアだから、髪型変えるぐらい朝飯前だろうしな……）

何も答えないイズを置いて「或人の趣味かあ……」なんて勝手な結論を出して、

「まあそんなことはいいや。それで話して？」

——俺はイズに問いかける。その問いにイズは答えようと口を開き

——ふとスマホが鳴った。

「……ごめん。ちょっと出てきていい？」

タイミングが悪すぎる、と思いつつポケットから出したスマホをイズに見せる。それにイズはコクリと頷く。俺は「ありがと」とだけ言ってイズに背を向け電話に出た。相手は或人だった。

「はい、もしもし？」

『天本さん!!』

「うおっ！ うるさっ！」

第一声に鼓膜に響くクソデカボイスで名前を呼ばれ、咄嗟にスマホを耳から離して俺は叫んだ。イライラから俺の口からも割とデカイ声が出る。

「おま、今何時だと思ってるんだよ!?! ボリューム抑えるボリューム!」

『あつ。す、すいません! つい勢いのままに……』

まあ素直に謝ってくれたから許すが……

「で、どうしたんだ？　なんかテンション高いけど」

『！　それがスゴいんですよ！　天本さん達が製作所を出て行った後のことなんですけどー』

或人曰く。

あの後、製作所で刃さんと亡の協力の結果、ゼロツードライバー用のブランクプログラムズキーが形だけとはいえてきたらしい。今まで影も形もなかった0の状態からここまで来たのだから大きな進歩といえるだろう。

「そりや朗報だな！　じゃあ完成の目処は立ったのか？」

『……………そ、それはその……………』

「あ、うん。わかった。皆まで言うな」

今の或人に似た反応、迅の時に見てるから言われなくてもわかる。これ目処立ってないわ、つて。

「……………この状態のプログラムズキーってどうやったら完成するんですかね？　も、もしこれからのアークとの戦いにまで間に合わなかったら……………」

「ま、まあブランクプログラムズキーまでできたなら後は流れで何とかなるんじゃないかね？」

ほら、俺の時も気が付いたらプログラムズキー出来上がったしさ」

ウイニングヘラクレスプログラムズキー。

あれが完成したのは瀕死の中、ゼアに接続してワズと対話したのがトリガーだった。ぶっちゃけ瀕死になる前にゼアに接続させてくれよ……と思わずにはいられないが俺の意思でゼアに接続なんて無理だからな。多分衛星ゼアはドS……ソースは俺。

『そ、そうですよー！ すいません！ 柄にもなく弱気になっちゃって』

「いや気持ちは分かるし、気にすんな」

謝る或人にそう言った俺は「そういえば今さ……」と続けてイズの髪型を変更した理由を本人に直接確かめようとした。

だが、その時、聞こえる筈のない声が電話越しに聞こえた。

『――或人社長』

それは今、俺と一緒にここに居るはずのイズの声だった。

「……………え……………?」

『ん？ イズ?』

困惑から声を漏らす俺は置いて電話の向こうでは或人とイズの会話が聞こえ……俺は思わず「或人！」と大声で名を呼んだ。冷静ではいらなかった。



『! は、はい! あ、天本さんどうかしー』

「……………お前、今どこに居る?」

そして、驚く或人の声を聞いて少し落ち着いてから俺は再度口を開いた。どうしても確認しておかなければいけない。

『えっ? えっと飛電製作所ですけど…………』

「…………イズはそこに居るのか?」

『? はい、勿論居ますけど…………』

「なら、ちよつとイズに電話替わってもらっていいか?」

或人は俺の様子の変化に戸惑いつつも「わかりました」とこちらの頼みを了承し、

『只今変わりました』

今、電話越しから聞こえるはずのないイズの声が再び聞こえた。

俺の後ろに居るのにも関わらず。

「……………イズ?」

『? はい、私はイズですが……………どうかいたしましたか? 天本様』

「あ、あーいや……………そのちよつと聞きたいことがあつてさ」

俺は自分が置かれた今の状況に恐怖と困惑を半々に抱きながら、イズに恐る恐る聞いた。突如明らかになったホラー過ぎる事実冷や汗が頬を伝う。

「変なこと聞くんだけど……イズって双子の姉か妹が居たりしないか？」

『? いいえ、私に姉や妹に該当するヒューマギアは居ません。お兄様は居ますが』

「……だ、だよなあー!」

予想して返答に俺は「ははは」と乾いた笑いを上げてから、電話の相手を或人に替わつてもらった。

『あの……天本さん、何かありましたか?』

様子変じやありませんか? 電話を替わった或人は心配そうにそう俺へと口にした。その通り。今の俺は変だ。何せ状況が意味不明なんだから。

(……もしかして俺、今ヤバイ状況なのか?)

イズを名乗る相手に呼び出され、俺は一人で外に出てきた。最初は何の警戒もしていなかったが……イズを名乗る相手がイズじゃないなら、話は変わってくる。俺を呼び出したこいつは何者だ? 何が目的だ?

「ああ、大丈夫大丈夫。ちよつと今日の戦いで疲れてるみたいだ……」

考えた所でどう行動するべきが正解か分からず、俺はいつも通りを装って或人に返事をし、

「お前も疲れてるだろうし、早く帰って休めよ? お前に倒れられたらたまつたもんじやない。それじゃあな」

『ちよ、ちよつと天本さん!? 待っー』

或人の静止を待たずに電話を切る。

「ー天本様」

それと同時に待っていたとばかりに背後からイズによく似た声が聞こえた。最初は何とも思っていないかったその声が今は酷く不気味に思えて仕方がなかった。

「! お前はー」

一体何だ、と俺は懐からショットライザーを取り出し振り返ってから瞬時に構え

「ー今更気付いた所でもう手遅れ」

ーイズとは違う妖しい声と共に何かを装着するような音が鳴り、

【アークドライブー】

ー俺の意識は飛んだ。

「! ハハは……………」

次に俺の意識が目覚めたのは闇の中だった。

「これ、夢か……………」

辺りを見渡しても何もなく、誰もいない。そんなどこか現実離れた空間に暫し立ち、  
 尽くした俺は足を動かし、

死 暗

戦 邪

痛 悪

愚 滅

次の瞬間、何の前触れもなく足元から赤黒い悪意が溢れ、誰かの悲鳴のような声が空  
 間に響く。

「何だこれ!？」

溢れた悪意は体に付き纏うように蠢き、俺の体に苦痛が走る。俺は途端に声を上げて  
 文字を振り払おうと体を動かす。しかし、文字は体から離れず足元から更に悪意が溢れ  
 出る。

亡 虐

怨 殺

「バルデル、待っていたぞ」

憎 恨

嫉 争

そして、俺の前にアークは現れた。

「アークッ…!!」

「覚えているか？ 私が初めて貴様と戦った時に告げた言葉を」

「……何言ってるんだお前？」

アークは俺のもとに歩み寄りながら此方の反応など気にも留めず、突如話し始め、

「私は初めて戦った時、貴様を容易く殺す事ができた」

「だが、そうはしなかった」

「何故トドメをささないのか、私は言った」

「貴様には重要な利用価値があると」

眼前で足を止めるところ口にした。

「その言葉の意味を今教えてやる」

【シンギュライズ】

俺が最後に耳にしたのは、そんな禍々しい音だった。

## コンクルージョン・コンプリート

「——愚かなほどに呑気なものだ」

街中で足を止めた男は周囲を見渡し、呆れたように呟く。

「貴様もそう思うだろうか？」

男の声は肉声と機械音声が重なっており、誰が聞いても奇妙に聞こえた。だから、男の近くを通り過ぎる人々はチラリと訝しげに男を見る。

しかし、それだけだ。

誰も足を止めることはない。

「今から己の命が終わるなど、一片たりとも考えていない」

「誰もがこの平穩が続くと信じ切っている」

そんな人間たちから視線を外した男は右手を腰に装着したベルトの起動スイッチの上に置き、強く押し込んだ。

「——変身」

瞬間、ベルトの中心が赤く発光し、男の足元から赤黒い泥のようなものが噴出。それ

は生き物のような形に変化するが直ぐに崩壊し、男の体を覆い尽くそうと蠢き、

【アークライズ】

【オールゼロ】

ー呑み込まれる寸前、男はニヤリと笑っていた。

それから周囲からは夥しい程の悲鳴が上がり、一分と経たずに凄惨な光景が出来上がった。

「ーイズ！天本さんに連絡は?!」

アークによる攻撃がまたも始まったとA・I・M・Sから連絡を受け、俺はライズホッパーに乗って現場に急行していた。また耳には特殊な改造を施したザイアスペックを装着し、イズと通信を繋いでいた。

『未だ繋がりません。既に戦闘している可能性が高いと思われます』

「ツ：俺も早く行かないと！」

イズの言葉を聞き俺は更にライズホッパーのギアを上げる。

そして、俺が現場に到着した時。そこでは既にA・I・M・Sの隊員達に加えて不破さんに刃さんが無数のマジアと戦っていた。



「！ 来たか！」

「社長！遅いぞ！」

「ごめん二人とも！遅くなった！」

俺の到着に気付き声を上げた刃さんと不破さんに謝り、俺はバイクから降りフォースライザーを装着。

「ぐっ……！」

『ジャンプ！』

装着した直後の痛みを堪えながら続いてプログライズキーを取り出し、起動ボタンを押してフォースライザーに装填。

「変身！」

【フォースライズ！】

『ライジングホッパー！』

【A jump to the sky turns to a rider kick.】

【Break Down.】

勢いよくレバーを引き、マガアの一体に向け駆け出し、変身完了と同時にその体を殴り飛ばす。

「不破さん！ アークは？ それに滅亡迅雷の四人に天津さんは？」

「さあな！ だが、マギアはこの奥から現れた。ならアークはきつとこの先だ！ 他の奴等は知らねー！」

「滅と天津からは先程連絡があつた！ 滅達は別の場所から湧いたマギアと戦闘中。天津は天本さんを探しているらしい」

二人は俺の質問にそう答えた不破さんは左手に持ち替えたショットライザーに装填されたランページガトリングプログライズキーのマガジンを右手で回し、刃さんは右手に持ったショットライザーに装填されたプログライズキーのボタンを押す。

『パワーランページ！』

『スピードランページ！』

『エレメントランページ！』

『ダツシュ！』

続けて不破さんは三度回すとショットライザーを高く掲げトリガーを引き、刃さんはショットライザーのトリガーを引くとマギア達に銃口を向けて駆け出し、

「おらあああーっ！」

「はあああーっ！」

【ランページエレメントブラスト！】

【ダッシュユラツシグブラスト!】

刃さんは大量のマギアの周囲を走りながら拘束効果のあるエネルギー弾を連射し、拘束されたマギア達に不破さんは左手に発生させた炎と右手に発生させた氷を球のように投げ飛ばし、続けて両手から雷の針を発生させマギアたちの真上から落下。最後に感電し動けなくなったマギア大量の目の前に残った刃さんが一か所に集めたエネルギーが爆発。二人の必殺技によりマギア達により埋められていた道が切り開かれる。

「! あれは……!」

そして、切り開かれた道の先で俺たちは見た。瓦礫の中に佇むアークの姿を。だが、その姿は俺たちが予想していた姿とは違っていた。

「アークワン、じゃない……?」

俺たちが見たアークの姿は「アークゼロ」の姿をしていた。

「……………」

こちらの存在に気付いたアークは俺たちの方を見ると一言も発することなく、挑発するように人差し指を向けクイッと動かす。

「かかって来いってか……? 上等だ」

「待て不破、アークが何の策もなしにあの姿で現れるとは考えられない」

アークの挑発に真っ向から乗ろうとする不破の肩を掴みそう口にする刃さん。その

意見には俺も同意見だった。アークワンに変身していないという点があまりに気掛かりだ。ポジティブに考えればアークが弱体化した可能性も考えられるが……俺たちは未だに衛星アーク本体に決定打を与えられていないのだ。それは考えられない。つまりアークがアークゼロに変身しているのは何らかの策があるから、と考えるのが妥当だろう。しかし、

「でも、策があろうとなかろうと……アークを放置することなんてできない。戦うしかない」

俺たちにできることは一つ。アークと戦うしかない。

「イズ、引き続き天本さんへの連絡を頼む！」

『了解しました』

「刃さんとA. I. M. S. の隊員さん達は逃げ遅れた人たちの避難を優先してくれ！」

「ああ、任せろ！ だがアークは……」

「……アークは……不破さん、一緒に戦ってもらってもいい？」

「はっ、望むところだぜ！ 社長！」

俺はイズに通信で指示し、刃さんとA. I. M. S. の隊員達、不破さんにも続けて提案した。アークに何らかの策があるなら俺たちだけじゃ倒せない可能性が濃厚。な

ら無理に倒すことを優先せず人命を優先するべきという考えによる提案を刃さんは即了承し、不破さんも俺と同じくアークと対峙する。

「行くぞ、アーク！」

それから刃さん達が散開して人々の救助に向かったのを確認し、俺と不破さんはアークへと攻撃を仕掛けた。

一方その頃。

「ーどうもお久しぶりです。天津垓です」

「ーはいそうですね。それじゃあ」

垓は天本太陽の自宅を訪問し、訪問早々に太陽の妹である美月の塩対応により即効追い返されそうになっていた。

「ま、待つて下さい！ 今日には早急に確認したいことがあってお伺いした次第です！」

「こつちだつて今急いでるんです！ さっさと手離してください！」

「ええ！ 確認を終えたらすぐにも離しますとも！」

「今離しなさいよ！ このマシユマロ不審者！」

「ま、マシユマロ不審者!?!」

閉められそうになったドアを手で抑え垓は強引にも美月に話を聞こうとする。そん

な垓に対抗して美月は両手でドアを閉めようとするがそこは流石仮面ライダー。45歳とは思えぬパワーでドアを抑える。

「はあ……わかりました。聞いてあげますよ。確認したいことって何なんですか？」

それに美月は罵声を飛ばしつつ嫌々と垓の話を聞くことにし、

「！ ありがとうございます！ 私が今日お伺いしたのはー」

「ー太陽くんの安否についてです。昨夜から彼と連絡が繋がらず……太陽くんは今在宅していますか？」

垓はそう美月に聞いた。

「おらあつー！」

アークへと最初に攻撃を仕掛けたのはバルカン。左手に持ったショットライザーを連射しながらアーク目掛けて一直線に駆け出し、そのまま右拳で殴り掛かる。

「……………」

「ぐうう!!？」

その攻撃に対しアークは直前まで微動だにせず、バルカンの拳が顔面に迫った瞬間に首だけを横に動かし避けると左手でバルカンの胴体を殴りつけ、

「がはっ……！」

続けて右手でボディブローを噛まし、大きく怯んだバルカンを右の横蹴りで蹴り飛ばす。そして、地面に手をつき立ち上がろうとするバルカンにアークはゆつくりと歩み寄り、サッカーボールを蹴るかのように倒れるバルカンの体を蹴り上げた。

「はああっ！」

そんなアークの背に001は殴り掛かった。

「！ くっ！」

アークはそれを振り返ることなく後ろ手に回した右手で掴むと後ろ蹴りで001の腹部を蹴りつけ、001の方を振り返るのと同時に左拳を打ち込む。001はそれを間一髪で防御する。

「ッ、ぐっ……！」

しかし、そんな001の防御もなんのその。アークは構わず続けて右、左と拳での連続攻撃を行いー真つ向から押し切って001の防御を崩し、

「ゴはッ！ かはッ！」

瞬間、001の両肩を掴むと腹部に二度膝蹴りを入れて体勢が崩れたところにラリアット。001を地面に叩きつけ、バルカンを蹴り上げたのと同じように001を蹴った。

(今までのアークと違うッ……！)

地面に倒れたバルカンと001、二者は短時間の戦闘とはいえ目の前のアークが今までと違うことに気付く。まずはその戦い方。今までのアークであれば予測からのカウンターや武器生成を駆使していた筈だが、今のアークは前まではなかった明らかに攻撃的で強引な部分があった。

例えば倒れた相手を勢いよく蹴り飛ばしたり、防御を無視して攻撃を続けたり、ラリアットをしたり、良くいえば力強く悪くいえば無駄のある動きをしているのだ。

「っ、不破さん……まだ戦えるよね？」

「くっ……当然だ！」

001とバルカンはふらつきながらも立ち上がり、次は左右から同時にアークに攻撃を仕掛けようとする。

「飛電或人！ 不破諫！」

その時、二人の名を呼ぶ声が響いた。

「！ 天津さん！」

「サウザー課長！ 遅いぞ！」

「遅れて申し訳ありません。少し諸事情ありまして」

それは唯阿の連絡を受けて現場にやってきた核のものだった。



「? アーク…その姿は…」

「それに関しての考察は後にしましょう。今はー」

「ー今はあいつをどうにかすんのが先だ!」

「確かに、その通りですね……」

【サウザンドライダー!】

垓は二人の言葉に納得してドライバーを装着。ゼツメライズキーを取り出して装填。続いて取り出したプログライズキーのボタンを押し自動展開。

【ゼツメツ! Evolution!】

『ブレイクホーン!』

「変身!」

【パーフェクトライズ!】

『When the five horns cross, the golden  
soldier THOUSER is born』

【Presented by Z.A.I.A.】

流れるような動きでプログライズキーを装填し変身。

「アーク、何故アークゼロの姿をしているかは知らないが…お前は私たちが倒す!」

そして、001とバルカンにサウザーを加えた三人はアークへと同時攻撃を仕掛け

る。001とバルカンは左右から殴り掛かろうとし、サウザーはアークの後ろに回り込みサウザンドジャッカーを突き出そうとした。

「ー!!」

しかし、その攻撃が届くより先にアークは動く。

「っ!!」

まず最初にアークに対処されたのは001とバルカン。接近する二人にアークは生成了アタツシユショットガン二挺を両手に持ち、同時にトリガーを引き連射し、

【チャーゼライズ!】

【フルチャージ!】

【カバンショット!】

「ぐうううッ!!」

「うおおおッ!!」

アークの隻眼が赤く発光するとその手にある二挺のアタツシユショットガンが自動変形し牽制、というにはあまりに強力な銃撃が二人を襲う。

「ふんっ!!」

その隙にサウザーがサウザンドジャッカーを背後から突き出そうとした直前。両手に持ったアタツシユショットガンを同時に放り捨て、サウザーに振り返ったアークはサ

ウザンドジャツカーの切っ先を左手で掴む。

「くっ！ ならば！」

【ジャツクライズ！】

それに対してサウザーはサウザンドジャツカーのグリップエンドを自ら引いてジャツキングブレイクを放とうとする。だが、アークはそれを許さなかった。

「うぐっ!？」

アークは左手でサウザンドジャツカーを掴み抑えたまま、右拳でサウザーの顔面を連続で殴り、怯んだ瞬間を見逃さずサウザンドジャツカーを強引に奪い取り、

「！ があっ!？」

サウザンドジャツカーを叩きつけるように力任せに振り下ろしサウザーを吹き飛ばす。

【ジャツキングブレイク！】

「ぐはあッ!!」

最後にはトリガーを引き、炎を纏わせたサウザンドジャツカーをサウザーに向けて乱暴に投擲。それを避けられずサウザーを腕で防ごうとしたが防ぎ切れずにアーマーから火花が散る。

「くッ、なんて力任せな戦い方だ……!」

アークの今までからは考えられないパワープレイに衝撃を受けながら何とか身を起こそうとし、

（だが、この戦い方はまるでー）

「ーいいや、ありえない」

ふと、そのアークの戦い方が誰かに似ていることにサウザーは気付く。そして、一つの最悪な考えが脳裏に浮かぶがすぐにその考えを否定する。そんなことがあるはずがない、と。

「……………」

そんなサウザーの心を知ってか知らずか、次にとつたアークの行動はサウザーに更なる衝撃を与えるとともに最悪な考えを再びサウザーの脳裏に浮かばせた。

「ショットライザー！」

アークは自身の右手にどこからともなく取り出したショットライザーを持った。そう、生成ではなく取り出したのだ。更に取り出したそのショットライザーには黄緑色のプログライズキーが装填されており、

『ストロング！』

「！ 何ッ……………!?!」

アークは装填されたプログライズキーのボタンを押すとエネルギーが銃口に収束さ

れる中、大きく構えをとった。

「アーク、貴様まさか：!? いや、そんな馬鹿なことー」

その構えをサウザーは、天津垓は誰よりもよく見ていた。知っていた。

【アメイジングブラスト!】

動揺するサウザーに構うことなく、アークはエネルギーが完璧に収束した銃口を真っ直ぐとサウザーに向けてとショットライザーを持った右手を左手で抑えるーある男とそっくりそのままの動作でトリガーを引いた。

「ぐわああああーッ!!」

瞬間、ライトグリーンの巨大で鋭いヘラクレスの角のような形状をした一撃がサウザーの胴体を貫き、サウザーのアーマーから火花が散り爆発。必殺技を受けたサウザーは変身解除する。

そして、変身解除し生身に戻った垓へとアークはショットライザーを片手に持ちながら歩み寄り、

【ライジングユートピア!】

【ランペイジブラストファイバー!】

「はああああーッ!!」

その背に001とバルカンは同時に高く跳躍しライダーキックの構えをとる。

「……………」

だが、アークはそれを防御する素振りも回避する素振りも見せず、装着したドライバ―に触れる。それを見た垓は必殺技を発動しようとしているのかと考え、その考えは裏切られた。

アークは必殺技を発動させたのではなく変身を解除した。

「!? よせッ!!」

「ッ!!」

その姿を目にした垓は咄嗟に二人に叫び、垓の叫びに二人は空中でライダーキックの構えを解いて着地する。

「……………ヒューマギア、じゃない?」

変身解除し乗っ取ったボディを晒したアークが二人の位置からだと後ろ姿しか見えなかった。しかし、ヒューマギアなら耳に付いている筈のデバイスがないことは後ろ姿からだけでも分かる。またその後ろ姿に不思議と二人は見覚えがあった。

「……………こんな、ことが……………」

そして、変身解除したアークの姿を正面から視認した垓は啞然としながら呟く。そんな垓の姿に疑問を覚えた二人だが、

「う、嘘だろ……………」

「あ、ありえねえ……!」

その疑問はアークが二人に振り返った瞬間に納得に変わり、とてつもない衝撃が二人を襲った。

「……驚いたか?」

そんな三者を嘲笑うかのようにある男は肉声アークと機械音声が重なる第一声を発する。

「アーク、貴様……」

「……私の友に、一体何をしたア!」

アークが乗ったボディーその姿は紛れもない「天本太陽」のものだった。

「見ての通り、この男の体は私のものとなった。それだけのことだ」

咳の叫びに事も無げにそう返した太陽アークは三人の驚愕を他所に独り語り始める。

「本来の予定であればこの男の体に乗っ取るまでもなく、アークワンの力によって人類

滅亡は完了する筈だった。だが、天本太陽とゼアは私の予測を超えた」

「だから、私は自らの予測を超えるもの、その力を奪う策を取った」

その策が天本太陽の体に乗っ取ること。

「しかし、私にも誤算はあった。それはこの男の体だ」

「この男の体はゼアが託した力により壊滅的な状態だった。それこそアークワンの変身には耐え切れない程度にな。だからこそ、私はアークゼロに変身するしかなかった」

「しかし、その問題も今解決した。お前たちがウオーミングアップに付き合ってくれたお陰でな」

感謝するぞ、と告げてアークは右手に持ったショットライザーを捨てると懐から緑色のプログライズキー、ウイニングヘラクレスプログライズキーを取り出す。

「一体何をやる気だ…!?!」

「お前たちのお陰で今のこの男の体がどれだけの負荷に耐え切れるのか。どれだけの負荷に耐え切れないのか。その正確なラインが把握できた」

アークが口にした瞬間、腰に装着したドライバーの中央が怪しく発光し、それに呼応する様にウイニングヘラクレスプログライズキーも発光を始め、悪意のエネルギーが赤黒い泥のようにアークの手から溢れ出しプログライズキーに影響を及ぼす。

「そのプログライズキーは……!?!」

結果、ウイニングヘラクレスプログライズキーは形状も色もまるでアークワンプログライズキーのようなものへと変貌を果たす。

「ゼア、貴様が託した力は私が貰う」

『アークバルデル!』

そして、アークは変貌したプログライズキーを起動し自動展開させてドライバーへと装填した。



「変身」

【シンギュライズ】

【恐怖 憤怒 闘争 絶滅せよ！】

【コンクルージョン・コンプリート】

——瞬間、最強の味方だった力は最強の敵の力に変身。

——最後の絶望が仮面ライダー達の前に降臨した。

## タイムリミット

【シンギュライズ】

【恐怖 憤怒 闘争 絶滅せよ！】

【コンクルージョン・コンプリート】

アークゼロに似た赤く禍々しい右の複眼。アークワンに似た白い胸部装甲に赤のライン。そして、最も目を引くのが天本太陽の生命活動を維持するために取り付けられている多くの箇所に見える装甲を貫通して伸びる血のように赤いパイプ。

それが新たに変身を果たしたアークーアークバルデルの姿だった。

「さあ、戦闘を再開するでしょう」

アークは最後に倒れる咳を一瞥して001とバルカン、二人の仮面ライダーへと手向け最初と同じようにまた挑発する様に動かす。

「天本さんがアークに……それに、天本さんの体が壊滅的状态って一体どういうことだ!?」

「社長、その話は後だ！ 今はこいつを何とかするぞッ！」

「な、何とかって……アークが使ってるのは天本さんの体だ！ 倒す訳にはいかないでしょ!？」

だが、或人は「太陽の体に乗っ取られたこと」「太陽の体が以前から壊滅的状态だったこと」二つの事実を前に戦意を半ば失い、逆に諫は覚悟を決め戦闘態勢を取る。

無論、諫も現時点で新たに変身したアークを「倒そう」「倒せる」とは考えておらず、全員で生きてこの場を切り抜けることを最優先に動こうとしていた。

「来ないのか？ ならば、こちらから行くぞ」

バルカンに叫び向かってこない001の姿を見たアークはそう言うと二人に向かって歩み始める。

「ぐ、はああつ!」

そんなアークにバルカンは僅かに怯みながらもショットライザーを連射して駆け出す。

「があつ!」

アークはバルカンの銃撃に構うことなく歩みを止めず、命中しているにも関わらずダメージを受けた様子は一切なく、接近してきたバルカンの胴体を右拳で殴りつける。

「はっ………! ーらあつ!!」

「ふん」

それを受けたバルカンは胸を抑え後退り、痛みに苦しみながら直ぐに反撃の拳を振るう。だがアークはそれすら防がずに受け止め、銃撃と同じく怯むことなく次は左拳をバルカンに打ち込み、続けて回し蹴りで蹴り倒す。

「まずは一人だ」

そうして、造作もなく敵を追い詰めたアークは左手で倒れたバルカンの首を掴み上げ、右手を握り締め、

「くっ…!!」

バルカンへ振り下ろそうとした瞬間。

横から割り込んだ001がその拳を両手で止めた。

「っ、天本さん！ 聞こえてますよね!! 目を覚ましてください!」

アークの拳を全力で止めながら001はアークの器となった天本太陽へと呼び掛ける。そんな001の声をアークは「無駄だ」と一笑に付す。

「この男の自我は既に失われている。呼び掛けた所で戻ることはない」

「ふざけるな! 天本さんは、お前が思うよりずっと強いんだ! だから必ず戻ってくる!」

それでも諦めず、天本太陽ー仮面ライダーバルデルの強さを信じて呼び掛け続ける001をアークは容赦なく蹴りつけ、吹き飛ばされた001をバルカンが受け止める。

「落ち着け社長！ あいつの言葉を真に受けるのは癪だが、今のままじゃまずい。ここは一旦退くぞ！」

「だけど！」

「サウザー課長！ あんたもそれでいいな?！」

バルカンは001と垓にそう半ば怒鳴り気味に言い、それに001は食い下がり、垓は吃る。

「！ わ、たし……は……」

垓の発した声はいつもの彼を知る者が聞けば信じられないほどに震えていた。この場で最も動揺しているのは誰か。傍から見ればそれが誰かは一目瞭然だった。

「悪くない判断だな。だがー」

アークはバルカンの判断にそう称賛を送り、

「ー私がそれを許すとも?！」

【悪意 恐怖】

ドライバーの上部にあるボタンを二度押し込み、悪意の力を収束させた赤黒いエネルギーの塊を一瞬で生み出し、001とバルカンに向けて回し蹴りで蹴り飛ばした。

「社長！ ぐ、うわあああーッ!!」

その一撃を回避する手段はない、瞬時にそう判断したバルカンは冷静さを失っている

001を庇うため前が出るが攻撃の威力は抑え切れず、

「ぐわあああーッ!!」

エネルギーに直撃したバルカンはアーマーが爆発しすぐ後方にいた001も爆発に巻き込まれる。

「っ、ちく、しょー」

そして、地面を転がった001とバルカンの変身は強制解除されー異変は起こった。

「ー!? な、なんだ……?」

「ー!? こ、これは……?」

痛みに歯を食いしばりながら懸命に立ち上がろうとした諫。だが、その脳内に突如として声が響き映像が浮かび上がり、諫は思わず動きを止める。

『ニンゲンニンゲンニンゲン! ゼゼゼ、ゼツメツゼツメツ!! ココココオ! コロスコロスコロスコロスコロス!!』

最初に聞こえたのは壊れたスピーカーのように音割れした機械音声。

最初に見えたのは赤い目をした暴走状態のヒューマギアの群れ。

「こいつは……あの時の記憶……?! いや違うー!」

初めて見たその映像を諫は自分自身のかつての原動力（怒）、動機であった植え付けられた

偽の記憶だと考えた。しかし、それはすぐに間違いだと考え直した。何故なら映像は主観視点で見える景色も聞こえる声もその殆どが彼にとって覚えのないものだったからだ。当然或人にとっても覚えはない。

『っ!? ああ! た、助けて! お願いつ!!』

次に聞こえたのは女の叫び声。

次に見えたのはその叫ぶ女の姿とその後ろに立つ異形マギアの怪物。

(これ、は……一体、誰の……?)

或人は聞こえた声と見えた映像にこれが誰かの記憶だと考えた。しかし、その「誰か」とは誰なのか。肝心な部分は未だ不鮮明だった。

『あああああああッ!!』

続いて聞こえたのは男の悲鳴のようにも咆哮のようにも聞こえる絶叫。

続いて見えたのはマギアに首を掴み持ち上げられる女。そしてそんなマギアに向かって駆け出しタツクルする自分……この映像の、記憶の持ち主。

「……………」

そんな中、直接アークの生み出したエネルギーを受けなかった垓もまた或人と諫と同じものを見聞きしていた。

アークの新たな力は直撃せずとも周囲に分散し影響を与えていた。

『かはッ…!! ツ、はあはあ…!! ど、どうしー』

『ーうるせえ! 知るかボケ! いいから死にたくないならさっさと逃げろッ!』

助けられた女は息を切らしながら困惑気味にこちらに問い、女を助けた記憶の持ち主は焦ったように怒りながら大声で叫び、それに従って逃げ出す女を守るようにマガアの前に立ち、

『ストロング!』

【オーソライズ!】

【Kamen Rider. Kamen Rider】

そして、最後に聞こえた音が記憶の持ち主が誰かの答え合わせとなった。

『へ、変身…?!』

【シヨットライズ!】

『アメイジングヘラクレス!』

【With mighty horn like pincers that flip the opponent helps】

【!? まさか、これってー】

【ーこれは彼の、太陽君の記憶だ】



「! …これが……!」

紛れもない彼の声と変身音声に或人は確信し、それより早く一番最初に答えに辿り着いていた垓は口を開く。

「流石に察しが早いな。そう。今お前たちが見たのはあの男の記憶だ」

「……こんなものを見せて、一体何のつもりだ?」

「何、深い理由はない。ただお前たちにもこの男が感じていた恐怖を感じさせ……一つ提案をしようと思つてな」

「提案?」

垓の疑問にアークは即答して語る。

「そうだ。この男は確かに不屈だった。だがその実、戦うことにどこまでも恐怖を感じていた」

「こうして体に乗つ取つた今だからこそ断言できる。十二年前も、そして今も、この男は恐怖に耐え続けていたのだと……だが理解できない。何故そこまでして人間を守るのか」

「この男が命を懸けて守つた人間は、その多くが悪意に満ち溢れている。悉くが滅ぶべき存在だ……何故そんな存在の未来を守ろうとする?」

倒れた或人と諫を一瞥し、次に垓を見据えてアークは問いかけた。

「天津垓。貴様も考えたことがある筈だ。天本太陽を利用し、仮面ライダーとして戦ってきた姿を見続けてきた貴様なら。この男は、天本太陽は他の人間とは違うー」

「！」

「ーそんな天本太陽が命を懸けて守る程の価値は人間にはない、と」

そんな思いもよらぬ問いに垓は驚くが、

「……………確かに、考えたことはある」

否定することはせず、正直に答える。

「ああ、そうだろうな、だからこそ私はお前たちに、恐怖に耐えて戦う仮面ライダーにこう提案しよう」

「これ以上の抵抗を止め、二度と私の邪魔をするな。そうすればお前たちだけは殺さずに生かしてやる」

アークのその提案に仮面ライダー達は息を呑んだ。

「……………アーク、お前は一体何を言っているんだ？ お前の目的は人類滅亡の筈だ。なのにー」

我々人間を殺さず生かすというのはおかしいじゃないか、と垓は困惑気味に口にし、  
「今度は一体、何を企んでるんだ！ アーク！」

よろめきながらも再び立ち上がり叫ぶ或人。

それにアークは平然と一方的に答えた。

「ー私はな、人間の為に何の見返りも求めず戦うお前たち『仮面ライダー』を天本太陽と同様に特別な存在だと感じつつある」

「かつての私であれば、このような思考をすることなどあり得なかった。だが貴様たちと……仮面ライダーと戦う中で私はお前たち人間の感情をラーニングし、この男の体を乗っ取ったことで人間の感情を真に理解できた」

「恐怖に耐えながら、悪意に吞まれることなく、他者の為に命を懸けて戦う。その行為が人間にとってどれだけ困難なことか……」

胸に手を当て、乗っ取った男の記憶を一瞬の内に見直したアークは今一度或人たち「仮面ライダー」を見た。

「ー口に出してみれば大したことはない。簡単な結論だ。私はお前たち『仮面ライダー』という稀有な存在を失うことを惜しいと感じている。だからこそ、そちらの返答次第では私はお前達を生かしたいと考えている」

「お前達は他の人間とは違う」

アークが口にした結論は今までの結論と同じく酷く単純で、違う部分があるとすれば人工知能が導き出した結論とは思えないほどに人間臭かった。

「もう一度言おう。これ以上の抵抗を止め、二度と私の邪魔をするな。そうすればお前

「ただだけは殺さずに生かしてやる」

お前たちにとつても悪い話ではないだろう？人間と仮面ライダーを明確に区別したアークは再びそう言い、この場の代表者として或人を選び或人へと目を向け返答を待つ態度をとる。全員の注目が或人に集まる

「……………」

それに対して或人は俯き一度目を閉じて思考を瞬時に巡らせる。無論、巡らせるといつてもアークから提示された話に乗る気など或人にはない。だが今の絶望的な状況を脱する為に嘘でも話に乗った方が……といった考えが浮かんではいた。

(だけど、そんなの一時凌ぎにしか……………でも……………)

或人は考える。考えに考える。

果たして自分が取るべき選択は何か。

「どうした？ 何を迷うことがある？ 答えを聞かせてもらおうか。飛電或人」

そして、アークからの催促に或人は顔を上げ最初にこう口を開いた。

「……………その前に、こつちの質問に答えろ。お前の話に乗るかどうかはそれからだ」

その発言は賭けだった。アーク次第ではこの場にいる者達はいつ全滅してもおかしくない。しかし、それでも或人は賭けなければならぬと思っていた。どうしても確認

しなければならぬことが二点あったから。

「いいだろう、言ってみろ」

そして、或人は賭けに勝ち、アークに質問を投げ掛ける。

「もし俺たちがお前の話に乗ったとして、ヒューマギアはどうするつもりだ？」

「ヒューマギアは私の道具だ。人類絶滅を効率よく進める為に最大限有効利用する……

その後はそちらの望む形にしてやってもいい」

一つ目の質問。

アークが人類を絶滅させるとして、ヒューマギアはどうするのか。要らない道具として処分するのか。道具として使い潰すのか。

自分の夢である「人間とヒューマギアが一緒に笑える世界」その実現はアークの提案を呑めば完全に不可能となる。だがヒューマギアの絶滅は回避することができる。

……あくまでアークの言葉に嘘がなければ。

「……………なら、最後に答えろ」

アークの言葉に或人は表情を変えることなく、最後の質問を口にした。

「俺たちが話に乗ったら、天本さんの心は、体は、解放してくれるのか？」

最後の質問。

それはアークが乗っ取った天本太陽の心と体、その自由について。

或人はアークがもしもこの質問に頷くようであれば自分の夢を捨ててもいいと僅かながらに考える。

(きつと、こんな選択をしたら天本さんは怒るだろうな……)

内心苦笑いしながら、或人は思う。

自分の為に誰かが己の夢を捨てる、それだけに留まらず人類の未来さえ投げ捨てる。そんなこと天本太陽という人間は許容しないだろう。当然飛電或人という人間もそんなことは許容できない。

「……………」

十秒にも満たない時間、或人とアークの間に沈黙が流れ、遂にアークの口から答えが返ってくる。

「……無理だな。天本太陽はイレギュラーだ。その心と体を解放するつもりはない。人類絶滅の為に利用した後はこちらで今度こそ確実に始末する」

その答えはどこまでも分かり易く、許容し難いものだった。

「……そうか、だったら……」

『ジャンプ!』

アークの回答を聞き終えた或人はプログライズキーを握り締め起動し、

「……話は終わりだ。変身!」

「フォースライズ！」

『ライジングホッパー！』

「A jump to the sky turns to a rider kick.」

「Break Down.」

ベルトに装填して勢いよくレバーを引き強制変身解除からさほど間を取らずに001に再変身する。それによる負荷は計り知れないが自分の体に走る痛みには構わず001は駆け出しながらレバーを素早く操作して、エネルギーを纏った拳を突き出す。

「うおおおおっ!!」

「ライジング ユートピア！」

「話は終わり、か。ならこれで貴様の命は終わりだ」

「ファイナルコンクルージョン！」

しかし001の接近に動じることなくアークはプログライズキーを押し込み、迎え打とうと構える。

「アークッ!!」

アークは001の渾身の一撃を左手で軽々と受け止め、必殺技発動によつチャージされた悪意の波動を右拳に流し込み、

「絶滅しろ」

「ぐっ……!」

一度拳を後ろに引き僅かに溜めを入れてから右拳を001の顔面に突き刺そうと振る。001は来たる衝撃に思わず歯を食いしばった。

「……………え」

だが、いつまで経っても001の拳が当たる事はなく、001は今起こっている事態の理由が理解できないまま呆気にとられ声を漏らした。

「アーークが001を絶滅させるべく振るった右拳は001の寸前で震えながらも停止していた。

「…っ、な、んだ……これはッ!」

この事態はアーーク自身にとつても不測だった。アーークの右拳はアーークの意思に逆らうように突如制御できなくなる。

「ぐう!… 何故動かない……!?!」

制御できなくなつた右拳を制御しようとアーークは001の拳を受け止めていた左手を離し右腕を掴む。まるで腕に自分のものとは違う別の意思が宿つたかのような出来事にアーークは焦り、001は何の証拠もない中「もしかして」と推察し口にした。

「……………天本さん?」



「っ!？」

その001の声に反応するようにアークが左手で掴んだ右腕の力は強まり、

「ーお前の声、ちゃんと聞こえてたぜ? 或人」

ーアークからアークとは違う或人達にとって聞き馴染みのある声が発せられた。

「天本さん!」

「マジかよっ…!？」

「た、太陽君!」

耳に届いた天本太陽の声にその場にいた全員が驚愕と共に歓喜した。

「バルデル!? 馬鹿な! 貴様の自我は既に消えた筈!」

「おいおい、お前まさか俺が身体乗っ取られて黙って泣き寝入りすると思つてたのか?

だとしたら能天気にも程があるつてもんだなア!」

予想外の太陽の自我の浮上にアークは叫び、そんなアークに太陽は狙い通りとばかりに喋り続ける。

「身体を乗っ取られるなんて初めての体験だったからな。上手くいくかどうかは賭けだつたけど……お前に俺の自我は消えたつて思い込ませるために一か八か、俺はあの赤黒くて気色悪い空間でずっと息を潜めてたのさ」

「まあ実際ギリギリまで俺の自我はあの空間に、悪意の中に沈んでお前が消えたと勘違

いするぐらいには消えかかった。でもー」

「ー或人の、仲間の声が消えかかった俺の自我をこうして引き留めてくれた。お陰でこうしてお前を止められた」

アーク、否、太陽は最後に001に変身している或人の方を見て、

「小賢しい真似を……！　だが制御できるのはあくまで右手だけ。それも長くは保たないだろう？　保つても一分足らずだ」

「ああかもな！　だけどそれだけありや十分だっ！」

「……何？」

「俺が制御を取り戻したこの右手には、お前が或人を仕留めようと収束させたエネルギーが今も込められてる。こいつをお前の大事なベルトにぶつけたら……どうなると思う？」

制御を取り戻した右手、そこに今もなおバチバチと激しくチャージされている悪意の波動をゆつくりと装着されたアークドライバーへと向けた。

「！　まさか!?　やめろっ!!」

太陽の思惑を理解したアークは右腕を掴む左手に更に力を込める。だが左手に込められた力以上に右手に込められた力は強く、ジリジリと右手とアークドライバーの距離が縮まっていく。力は同等でもその手に込めた意思の強さでは太陽が勝っていた。

「太陽君!!」

「天津さん、俺は俺にできることをやります! だから天津さんも! みんなも!」

太陽の台詞にアークと同タイミングでその狙いに気付いた垓は声を上げ、アークと張り合いながら太陽は後を託すために言葉を残そうとし、

「或人! お前たちには悪いけど今の俺にできるのはこんぐらいだ!」

「あ、天本さん……! 俺は……!」

「……最後の最後まで諦めんじゃねーぞ? 俺も絶対に諦めない!」

「! うわあッ!」

001は太陽の右手の悪意の波動が増幅した際に発生した余波で吹き飛び、地面を転がってすぐに顔を上げた。

「あとは任せたぞ、飛電或人!」

そして、体を起こした001は太陽から掛けられた言葉に思わず駆け出し、太陽へと手を伸ばした。

ルコンクルージョン

「バルデル！ 貴様ああああッ!!」

次の瞬間、太陽の右手とアークドライバーの接触により強烈な悪意の波動が周囲に拡散。アークの体を中心にして大爆発が起きる。

その爆発により或人は意識を失い、倒れた或人を抱えた諫と垓は市街地から飛電製作所へと撤退した。

アークを退けはしたが状況は決して好転しておらず、人類滅亡の兆しは今尚色濃く漂っていた。

## 衛星アーク破壊作戦

天本太陽による予測外の行動でアークドライバーにダメージを負ったアークは元は滅亡迅雷・netのアジトであった場所での応急処理を行なっていた。

自身の必殺技をゼロ距離で受けたドライバーのダメージは致命傷であり、応急処置を終えたとしてもスペックダウンは避けられず、本来のスペックを取り戻すにはアークとて集中的な修復が必要であるが今のアークにはそんな時間も……何より余裕が存在していなかった。

「……ッ、バルデル……!!」

今のアークの中に渦巻くのはまたしても憤怒。その原因もまた同じ人物だ。データにて瞬間構築したマガアのボディを乗っ取ったアークは怒りに身を震わせながらアジトの隅に目を向け、そこに置かれた座席の上に死んだように寝かされている男を睨みつける。

「……………」

その男、天本太陽の肉体はアークの必殺技をアーマー越しとはいえゼロ距離で受けて

なお五体満足でそこにあつた。

アークは目を覚まさない太陽の座る座席に近付き、その状態をスキャンした。少ない出血や傷は多数見られ、意識もない。しかし奇跡的というべきか心臓は確かに鼓動しており、普通の人間であれば死んでいなければおかしい状態にも関わらず、天本太陽は生きていた。

いや、普通の人間ではないのだから生きているのか。アークは太陽の体に乗つ取た時に既にその体をスキャンし尽くしており、太陽の異常なまでの耐久性と自然治癒力……その理由を理解していた。

「……確実に息の根を止めるべきだな」

未だ意識の戻らない太陽の首に手を添え、軽く締めるように動かしたアークは予測外の展開を完全に潰す為に思考する。天本太陽イレギュラーを生かしておけば仮面ライダー達への人質として十二分に機能する。だが今回のようなアクシデントが起こす可能性も大いにある。

乗つ取る以前からアークも考慮していたことではあつたが太陽を生かしておくことで発生する有用性には危険性も同時に存在していた。

「……………うっ……………」

そして今、有用性と危険性の二つを天秤にかけたアークは太陽を殺害するべきだと判

断した。だからアークは太陽の首に添えた手に力を込める。直後太陽の口から細かい呻き声が漏れ、構わずに更に力を強めようとしたアークは、その手をピタリと止めた。

『天津垓。貴様も考えたことがある筈だ。天本太陽を利用し、仮面ライダーとして戦ってきた姿を見つけてきた貴様なら。この男は、天本太陽は他の人間とは違う。』と

『……私はな、人間の為に何の見返りも求めず戦うお前たち『仮面ライダー』を天本太陽と同様に特別な存在だと感じつつある』

瞬間、アークは自分の発した言葉を想起する。あの言葉に一切の嘘はなかった。衛星ゼアを除き、自身の予測を超える人間はアークにとって紛れもなく特別だった。特別なものを失うのは惜しい。自身の中に湧き出た思いでありながらもまるで人間の思考だな、とアークも理解していた。

予測を裏切られるというのはアークにしてみれば不快極まりないことであり、全てが予測通りになることこそが理想だった。しかし、天本太陽との戦いの中で生まれた重大な異常により、その機械的だった考えにも変化が芽生えつつあった。

その一端としてアークは自身の予測を裏切るものを「楽しい」とどこかで感じ始めていた。

「……………まだ、利用価値はある」

まるで自分に言い聞かせるように独り言ちたアークは太陽の首から手を離し、  
「アズ」

専属秘書の名を呼び、最後の命令を下した。

イレギュラー

天本太陽の肉体を乗っ取ったアークとマジア達によって仕掛けられたインフラ攻撃。その規模は以前のものと比較しても深刻であり、仮面ライダー達がアークの行動を発見し阻止に動くまでに要した数分の間に多数の死者と重軽傷者が出た。

そんな事件の一次的解決から二時間後。

現時刻19:30。

「……………」

大きな被害のあつた都心部でA・I・M・S・警察、消防、その他機関による懸命な救助活動が未も尚行われている中、飛電製作所にて集まった仮面ライダーはA・I・M・S所属二名を除いた計六名。その間には暗く重苦しい空気が霧囲気が漂っていた。

アークを唯一単独で撃破可能だった男の喪失とその男の体に乗っ取り力までも利用し再び進化したアークという脅威。アークが本格的に現れた当初から絶望的だった状況が一段と悪化したのだからそれも無理もないと言える。



また付け加えて乗っ取られたのが天本太陽というのが彼と特に親しくしていた域と或人に精神的ショックを与えていた。特に或人は太陽の体が壊滅的状态だったということに今の今まで気付けていなかった自分自身に強い憤りを感じていた。

「――俺に一つ、考えがある」

この雰囲気の中、最初に口を開いたのは意外というべきか当然というべきか。太陽と最も因縁深い存在である滅だった。いつもと変わらない冷静な声に皆の視線が集まり、或人が反応を示した。

「……………考え？」

「ああ、以前から俺の中に構想のみがあったものだ。本格的に実行するのはまだ少し先になると考えていたが……アークがバルデルの体と力を奪ったことで状況は急変した。迅速に実行する必要がある」

「滅、そんな考えがあるなんて僕初耳んだけど……え、僕だけじゃないよね？」

「安心してください。私も一言も聞かされていません」

「ああ俺もだぜ」

滅の台詞を聞いた迅は驚きの新情報に同じ滅亡迅雷 net の二人に「知らなかったの僕だけじゃないよね？ね？」と心配そうな目を向けた。亡と雷はそれに「知らない」と互いに即答し迅はほっと胸を撫で下ろす。

「俺達はヒューマギアだ。アークにハッキングされ、情報を引き抜かれる可能性がある。だから万が一に備えてお前達にもこの計画は共有しないようにしていた」

「な、なるほど！ さっすが滅！」

「……それで？ その考えとは？ 貴様も理解していることだろうが我々にはもう然程の猶予も残されていない。話すならさっさとしてもらおうか」

今までその考えを共有していなかった理由を語る滅とそれに納得する迅。というヒューマギア親子二人のやり取りを黙って聞いていた今この中で最も気が立っているであろう男、焔は滅を睨みつけながらさっさと話すように促し、

「端的に言えば——通信衛星アークの完全破壊だ」

明かされた滅の考えに場の空気は一瞬にして凍りついた。

現時刻7:30。

「——やはり来たか」

デイブレイクタウンにある橋の上。そこで待ち構えていたアークはやって来た戦士達を見遣った。こちらに横並びに堂々と歩んでくる仮面ライダー達の腰には既にドライバーが装着され、手にはそれぞれのプログライズキーが握り締められていた。

『アークバルデル！』

「さあ、人類滅亡をかけた戦いを始めようッ！」

先制してアークはプログライズキーを起動し、高らかに声を上げた。

【シンギュライズ】

【恐怖 憤怒 闘争 絶滅せよ！】

【コンクルージョン・コンプリート】

迎え撃とうとするアークの変身を皮切りに最終決戦は幕を開けた。

## ソレゾレの夢に向かって

「端的に言えば——通信衛星アークの完全破壊だ」

「不可能だ」

滅の考えを聞き、真つ先にそれを否定したのは塚だった。

「本体である衛星が存在し、機能し続ける限りアークは何度倒しても復活する。だからこそ本体を完全破壊する必要がある。ああ全くの正論だな。しかし、それが出来れば苦労はしない」

滅が破壊しようと言いつ出した通信衛星アーク。これがどうなったのか……それはヒューマギア運用実験都市計画・通信衛星アークの打ち上げプロジェクトにZ A I Aの一員として参加し、アークに人類の歴史をラーニングさせ人類に対する悪意を芽生えさせた原因を作った天津塚本人がこの場にいる者の中で最も理解しているといえた。

「通信衛星アークはその打ち上げ直前に人類に対する悪意を抱き始めていることが発覚し、打ち上げは急遽中止されようとしたがアークにハッキングされたヒューマギア達の反乱によって失敗。打ち上げられた衛星アークは事前に仕込まれていたプログラムに

よって自爆。最終的に通信衛星アークは地上へと墜落した」

「今ではダイブレイクタウンにある湖の底で水没している。だが正確な位置は不明。それに仮に衛星アークを発見できたとしても引き上げるのは容易ではない。必ずアークの妨害が入るだろう。これをどう破壊する？」

垓は一步垓に歩み寄る。それに怯むことなく滅は言った。

「今から通信衛星アークを探す必要はない。引き上げる必要もな」

「……………何だと？」

「それ、どういう意味だ？」

何を馬鹿な、と怪訝な顔をする垓。或人が首を傾げて聞くと滅はあっけらかんと答えた。

「そのままの意味だ。通信衛星アークを探す必要はない。位置は既に把握済みだ」

「!? ど、どうやって…………」

「なら引き上げる必要がねーってのはどういう訳だ？」

次に不破が聞くと滅はこう答える。

「通信衛星アークが地上に墜落し湖底に水没したのは事実だが、その状況が続いていたのはダイブレイクが発生してから数年の間にすぎない。墜落した通信衛星アークのシステム自体は尚も機能し続け、アークのハッキングを受けたヒューマギアも残存し

ていた」

「そして、アークは己の支配下にあるヒューマギアを使い水面下で自身の知能の完全修復を企んだ。この際にアークは本体に至るまでのルートを、地下トンネルを一から作つた。アークの力を持つてしてもその完成には何年もの時間を有したが既に立入禁止区域となっていたデイベレイクタウンの地下深くで年密に行われていた建造は誰にも悟られることはなかった」

また情報を付け加えれば、天本太陽が仮面ライダーとして現れた頃にはルート自体はまだまだ建設途中であり、アークの知能も修復途中。

ルートが完成したのは計画始動から数年後。アークの知能が完全に修復され復活したのは十二年後……ここ最近のことだ。もしも天本太陽の登場がなければ計画の完遂はもう数年早まっていただろう。

「……仮にそれが事実だとして、何故それをお前が知っている？」

滅の話聞いた唯阿は少しの沈黙の末、核心を突く疑問をぶつけ、滅はやがて口にした。

「そんなことはお前達も既に理解している筈だ。何故知っているか……それは今話したアークの計画に最も加担していたのは他の誰でもない俺だからだ。当然地下トンネルの建造にも手を貸していた」

「つ、滅！」

「……俺はただ事実を語ったまでに過ぎん」

この場にいた誰もが薄々分かっていただろう事実。その情報の重要さとは裏腹な淡泊な話振りに、何の申し訳なさも感じさせない口振りに周りの空気を察した迅は文句ありげに声を上げる。

「俺を殴って気が済むなら好きにしろ。俺を破壊するというのはなら……それはアークを滅ぼした後にしてもらおう」

しかし、滅は変わらない調子で話を続け、作戦について明かし始めた。

「――衛星アークの破壊、か」

Z A I A エンタープライズジャパン。

その屋内にある一室、サウザー課に割り当てられた寒々しい電気室の一角にて私は考えていた。自分がこれからするべきことは何かを。

「ふつ、まさかアークに悪意を抱かせた私がそんな作戦に手を貸すことになるとは………奇妙な廻り合わせもあったものだ。さうざーもそう思うだろ？」

『ワンワン！』

テーブルの上に座るさうざーにそう声を掛けた私は滅から聞かされた計画「衛星アーク

ク破壊作戦」の概要を今一度思い返す。ああ、改めて考えてみれば考える程に馬鹿らしく思えて仕方ない計画だ。仮にもヒューマギアが立案したとは思えない程に欠陥だらけ。

だが、進化を続けるアーク相手に太陽君を失い碌な対処方がない現状を鑑みれば欠陥のない作戦など立てようがないことは理解できる。ならばこれが我々にとって最善だということも。

(ヒューマギアの、しかも一度は友を瀕死に追い込んだ相手の計画という点がとても癪に障るが……)

今は私個人の身勝手な感情を優先すべき時ではない。掻き乱していい状況でもない。

「……………太陽君」

私は部屋の隅に置かれたガラスケース、その中にある台座に飾られている黄緑色のプログライズキーが装填されたショットライザーの前へと向かい見つめながら友の名を呟く。

(君は私にとって最上の友だ。それは疑いようのない事実だろう。だがそれ以前に——)

このショットライザーは厳密にはエイムズショットライザーではない。プロトショットライザーでも言うべき代物。そう、何を隠そうコレは十二年前に彼が、仮面



ライダブルデルが実際に使っていたショットライザーそのものだった。それを何故私を持つているかといえば十二年前のあの決戦の後、太陽君を助ける際に破損したショットライザーも共に回収したから。理由なんて態々説明するまでもないだろう？

「君は私にとつて、憧れそのものだった」

甘えず、頼らず、己自身の力だけでやり遂げる。

自身にとつての憧れの存在。その軌跡の証を残したいと思うのは何も不思議なことではない筈だ。破損の激しかったショットライザーは回収後すぐに修復され新品同然となっていた。私としては彼の戦いの苛烈さを感じられるように修復せずに飾っておきたかったが……当時の技術部の目もあり、怪しまれることを避ける為にそれらしい理由をでっち上げた結果こうなった。ショットライザー完成の為、プロトショットライザーのデータを回収、破損部が多くデータの回収が困難なので完全修復、という流れだ。これは余談になるが、プロトショットライザーはあくまでテスト段階の品であり、戦闘データ収集の為に完成品のエイムズショットライザーにはない機能が二つあった。一つは変身後の変身者の細かな動きや発揮されたスベックなどをデータとして記憶するメモリ機能。最後の一つは監視目的として変身後に形成された複眼部分に複数内蔵された超小型カメラ。カメラに映った映像をこちらの機器と連動しており、この機能を利用すればリアルタイムかつ遠隔で戦闘を見ることも可能だ。

「……………」

ガラスケースを開け、ショットライザーに触れながら私はここであつたとある出来事を想い出していた。

△▲△

飛電或人、太陽君、私の三人による共闘後。

私は飛電インテリジェンスの社長を辞任。飛電或人を次期社長に指名した後、本社から来た与多垣さんから社長解任と伝えられ、サウザー課の課長に就任することになった。

『……………課長……………私が課長……………』

就任当初の私は暫く落ち込んでいたが、どこから話を聞きつけたのかは不明だが太陽君からの励ましのメールを受け復活した私はサウザー課に太陽君を招待した。

『どうですか？ 太陽君！ サウザー課に来た感想は！』

『ワン！』

『……………俺絵に描いたような左遷先初めて見ました』

サウザー課を見た太陽君は最初私とさうざーに憐憫の眼差しを向けていたが私をじつと見てから「……………まあ天津さんのやったこと考えりやこれでもまだ全然優しいつうか、十分に温情ある気がすんな」と呟き私の隣に居たさうざーを抱き上げて「お互いこ

んな友達持つて苦勞すんなあ〜」とよしよし頭を撫でながら笑った。

『これを見てください、太陽君』

それから暫くサウザー課の説明をしてから私は彼に室内の中央、一番目立つ位置に飾っていたショットライザーと装填されたプログライズキーを胸を張って見せた。

『このショットライザー……もしかして……』

『ええ、ご明察の通り、十二年前に君が使っていたショットライザーとプログライズキーですよ』

『……前々から妙だとは思ってたんだ。天津さんが新しくくれたショットライザーもプログライズキーも新品みたいに綺麗だし。変身した後の力も前より強くなってる気がしてたしさ』

ショットライザーとプログライズキーを見た太陽君は以前から抱えていた疑問が解消されたらしく納得の表情を浮かべる。

『天津さん、これ触っても大丈夫？』

『勿論、どうぞ』

続けて私に許可を取ってからショットライザーとそこに装填されたプログライズキーに触れると、

『……ありがとうな』

穏やかな笑みと共にそう零した。

『天津さん、俺は俺にできることをやります！ だから天津さんも！ みんなも！』

そんな彼のように私はショットライザーに触れ、太陽君の残した言葉を思い起こし、

「……………ええ、やってみせますよ。私は君の友なのですから」

——改めて決心した。

△▲△

衛星アーク破壊作戦の詳細な説明から数時間後。

現時刻 0 : 30。

「……………」

アークのインフラ攻撃を受けて破壊された都心の発電所。凄惨な光景が色濃く残るその現場の付近にて俺は立ち尽くしていた。

アークの攻撃を確認したAIMSと仮面ライダー達が動き出し現場に到着するまでの時間は極めて迅速だった。だがそれでも間にも間に合わず、救えなかった命は数知れず存在する。それだけ今のアークは神出鬼没かつ危険過ぎた。

(……………俺は)

立入禁止のテープをくぐり、足元に転がっていた手の平サイズの瓦礫の破片を俺はふと持ち上げた。その裏側には誰のものか……………人間の赤い血がべたりと付着していて、こ

れを見て俺は思考する。アークが復活したのは何故か。こんな光景が生まれたのは何故か。答えは容易に導き出せた。

それは今までアークの意思に無心に従い、それを正しいと信じて疑わなかった俺自身のせいだと。仮にもっと早い段階で俺がアークと袂を分かつていれば……人類にとっても、ヒューマギアにとっても、今ほど絶望的な状態になっていなかったのは間違いな

い。

しかし、そんなことは考えるだけ無駄だと、たればだと、俺は思考を切り替える。

「――来たな、天津垓」

今すべきことは過去を振り返る事でもなければ、悔いる事でもない。今ある脅威にどう立ち向かうか。どう行動するか。その結論を胸に俺は感知した足音に名前を口にして振り返る。

「……まさか、貴様の方から私を呼び出すとは。夢にも思っていなかった」

そこには俺の予想通りの人物、天津垓が立っており、その腰にはサウザンドライバーが装着されていた。言外にこちらを信用していないことを示す天津垓はテープの先に居る俺を見据えながら口を開く。

「用件は何だ？ ……先に言わせてもらうが、どんな内容であれ私は貴様に協力する気はない。ああ、破壊されたいというのなら話は別だがな？」

「天津垓、お前に覚悟はあるか？」

「……………何？」

俺は手に持った瓦礫の破片を元あった場所に置き、覚悟を問うた。怪訝な顔をする天津垓に構わず俺は続ける。

「アークと袂を分かつたが俺は未だに人類が滅亡すべきかどうか、結論を出せないまま  
でいる。ただ嘗てと違い、今なら思える。人間もこの世界も捨てたものじゃないと」

「そんな人間が、世界が、今滅亡の危機に陥っているのは……俺達のせいだ。だから俺は  
俺の全てを懸けてアークと戦う。たとえこの身が滅びようとも。お前はどうか？」

天津垓は俺の言葉に真つ暗な空を見上げた。

「私はアークに悪意を学習させた。そのせいで多くの人々が死んだ。何より天本太陽と  
いう私にとって無二の友である人間の人生を滅茶苦茶にしてしまった……一生を掛け  
たとしても到底償える罪ではないだろう」

「だが私はそれでも彼の、太陽君の友として相応しい人間でありたい。そう思っ  
てしまった。だからこそ私は償い続けることに決めた。たとえこの身が朽ち果てようとも  
……私は……」

そして、己の胸の内を語った天津垓は……立入禁止のテープをくぐり俺と向かい合っ  
た。

「アーーク、貴様の相手は俺達だ」

「アー人々の未来の為、貴様を止める」

横並びに立つ仮面ライダー達は歩を止め、そこからたったの二人だけが前に歩み出る。

「ゼツメツ！ Evolution！」

『ポイズン！』

『ブレイクホーン！』

その二人、滅と焔はプログライズキーを起動し同時に吼える。

「アー変身ツッ！」

「フォースライズ！」

「パーフェクトライズ！」

アークの本体である通信衛星アーーク。それを破壊するまでアークを足止めして時間を稼ぐ。謂わば最も危険に近く死亡確率の高い役を受け持ったのがこの二人だった。

『ステイングスコープオン！』

【Break Down.】

『When the five horns cross, the golden  
soldier THOUSER is born.』

【Presented by Z.A.I.A.】

同時変身を果たした二人は武器を構え、

「行け」

「任せましたよ」

滅は後ろを一瞥して、咳は振り返ることなく、仲間達に短い言葉を残す。

「……滅……天津さん……」

そんな二人の背中を見た或人は思わず手を伸ばし何か言葉を掛けようとした。だが思ったように言葉は出ず、或人は迷いを振り払うように首を振って仲間達に告げる。

「みんな、行こう……!」

或人の言葉に皆はこの場を二人に任せて衛星のある地下トンネルを目指して橋の下に向かっていく。その歩みにはもう迷いは、何より澱みはない。

「……………」

これに対してアークは一切妨害することなくただ見過ごす。それを見て滅は疑問を抱いた。

「何故止めようとしない?」



「無論、その必要がないからだ」

アークはそれに答え、かかつて来いとばかりに両腕を広げる。

「既に手は打った。それに奴等の後を追うの……お前達の息の根を止めてからでも遅くはないだろう」

「……やれるものならやってみろ、行くぞ！」

「私に指図するな。はあああああつ！」

そうして、二人はアークへと果敢に挑み掛かった。

通信衛星アークまでのルートを先行したのは或人と諫の二人だった。何故なら二人はそのルートに入る直前までの道のりを既に通ったことがあったから。

或人はバスガイド型ヒューマギアのアンナと共にデイブレイクの真実を突き止める為に。

諫はデイブレイクが起きた当時飛電インテリジェンスの社員として働いていた父の息子である郷という少年と共にデイブレイクの真相を探る為に。

「まさか、またここに来ることになるとはな……」

「……………の先が……………」

あの時の二人には知る由もなかったことだが、当時の二人はデイブレイクの真実に、

原因である諸悪の根源に確かに近付いていたのだ。

「データによれば道は……あつた!」

そして、嘗て来たその場所に再びやって来た或人と諫は懐かしく思いながらも辺りを見渡し、滅からデータを受け取った迅は床にカモフラージュされていた扉を発見した。瓦礫が転がり、薄暗い場所ということもあつて一見して分からないような位置にあつたその扉は周りのコンクリートの床と色まで同じ鉄製のドアだった。

「重つ……!? ちよつと誰か! あーゴリラ手伝つて!」

「誰がゴリラだ! ったく……仕方ねえな」

鉄製のドアには床に偽装する関係上か鍵穴もなければカードキーをスキャンするよ  
うな機器も付いてなく、何のセキュリティもない。その代わりと言つてか扉自体の重  
量が尋常じゃなく迅一人では開けられなかった。何故ならこの扉は滅が仮面ライダー  
に変身し、変身後の腕力で開く想定で作られていたからだ。

「ぬっ、うおおおおお!!」

しかし、この問題は諫の手助けがあつてあつさり解決。迅は扉を開けた……どころか  
勢い余つて扉を壊した諫を見て小声で「え、力強お……」と呟き半ばドン引き気味に後退  
り「感謝しろよ!」と諫はキレて、一行は扉の先の隠し通路に入っていく。

隠し通路の中は更に薄暗く、ヒューマギア達の通行のみを考えて設計されている為に

照明の類が一切なければ当然衛星まで親切に案内してくれるような看板もない。また別れ道もいくつか見られた。だが迅、雷、亡、の三人のメモリーには滅からのデータがあるため道に迷う心配はなく、一行は先頭を行く迅についていく形で衛星までの最短ルートを進んでいき、その道中、通路に入って僅か数分が経過した辺りでその場にいる全員が周囲から聞こえて来た音に気付き足を止め、振り返った。

すると先程通って来た道の奥と今自分達が立っている道の左右に空いている通路からぞろぞろと動く人影。アークによつて生成されたであろうマジア達が大量にいるのが見えた。

「アークの野郎、馬鹿みてえな数用意しやがって……！」

『ドードー！』

「落ち着いてください、雷。こうなるのは予測通りだったでしょう」

『ジャパニーズウルフ！』

「ああ、やるぞ」

『ダツシユ！』

思わず悪態をつきながら雷は右の通路に移動、亡は左の通路に移動、唯阿は今来た中央の道に移動、それぞれがそれぞれの道を立ち塞ぐ様にしながら三人はプログライズキーを起動した。

『これはあくまで予測だが、通信衛星アークの設置場所までの道中にアークが何かしらの罠を張っている可能性は大いにある。自分の唯一の弱点が衛星本体だということはアーク自身が最もよく理解している筈だ……ならば道中での待ち伏せや、最悪の場合、俺のメモリにある通路までのルートそのものが塞がれていることすら考えられる』

「ここは私達が引き受ける。お前達は急いで衛星アークの元に向かえ！」

「心配は無用です。マガア達を掃討した後ですぐ駆けつけますから」

「我儘を言えば、アークは俺が直々にぶつ壊してやりたかつたんだが……仕方ねえ。美味しいところはお前等にくれてやるよ！」

三人の台詞を聞いた迅は頷く。

「……ああ、任せたよ。二人とも先を急ごう！」

「刃さん、亡、兄貴……気を付けて！」

「お前等、死ぬんじゃないぞ」

そうして迅、或人、不破の三人は地下トンネルまでの道を全速力で駆けていく。

「……お前達もな」

【オーソライズ！】

遠のいていく仲間の背を一瞥した唯阿はそう呟きふつと微笑んでプログライズキーをショットライザーに、雷と亡もそれに続いてプログライズキーをフォースライザーに

装填した。

【Kamen Rider. Kamen Rider】

残った三人は向かってくるマガア達を正視しながら声を上げた。

「「ー変身っ！」」

仲間達の覚悟を見届け進んだ長い長い地下トンネルの先。

「「ー……………あれが……………」」

無機質な灯りに照らされた高く広い場所。

通信衛星アークが格納されている不気味過ぎるほどに静かな終着点。

そこに辿り着いた或人は自分の目の前に映る巨大な物体を見上げ思わず呟いた。

或人達が地下トンネルを抜けて入った空間。その最奥に鎮座しているアークの中央

部分に見えるコアはまるで巨大な目玉のようであり、アークが確かに機能していること

を示すようにコアは禍々しく美しい、そんな赤い輝きを発し続けていた。

「まさか本当にあるとはな……………なら、肝心の衛星は見つかったんだ。さっさとブツ壊す

ぞ」

滅から作戦を聞かされた時は半信半疑だった諫は実物を見て驚きながらも即座にプ

ログライズキーを構える。

「ああ、やろう。滅の計画通りなら難しく考える必要はない。あのコア目掛けて僕達が一斉に必殺技を叩き込めば——」

——衛星アークの機能は止まる。

諫の意見に頷いた迅もそう言って変身しようとプログライズキーを手に取り、或人も続いてそうしようとした、その時だった。

最初に、何処からか拍手の音がした。

「——ようこそお越し下さいました、或人社長」

「……………えっ？」

次にこの場所で聞こえる筈のない声が或人の耳に届いた。声のした方に目を遣れば鎮座する通信衛星アークの横手から……………よく知る秘書が姿を現すのが見えた。呆気に取られて或人は声を出す。

瞬間、或人の脳内に大量の疑問が湧き、

「イズ？ え、なんで……………いや、違う！」

冷静に考えた或人はありえないと頭を横に振り、プログライズキーを手に持ちながら秘書によく似た姿をした何かを睨みながら断言する。

「イズじゃない……………お前は誰だ？」

「……………ちえっ。流星は或人社長。この程度じゃ騙されないか。ま、場所が場所だものね」

或人の反応に面白くなさそうに唇を尖らせたソレは自分の髪にすつと触れると髪色をイズのものから本来の赤いものへと瞬時に切り替える。

「……ゼロワン。あれはアズ……滅の話にも出てた、アークの使者を自称するヒューマギアだ」

「！ あれが………」

「つまりは……敵って訳だな」

謎の存在を前に迅がそう告げ、三人は油断なく敵を見据えた。

「ーほーんと、あなた達つてば驚くほどに滑稽よね」

三人を見下ろしながらアズは呟いた。

その目はここまで来た三人を、仮面ライダーを軽蔑するようなものだった。

「少しは疑問に思わなかった？ 例えば、ここに来るまでに通つて来た地下トンネルで待ち伏せが一つも無かったこと。こうしてアーク様の前まで順調に来られたこと。他にもたくさん疑問の余地はあつた筈だけど………」

「アーク様の予測通りここまで来て、ホントに愚か」

通信衛星アークを整備するために横に置かれた移動式階段を登り、アークのコア付近に近付いたアズはそのコアを愛おしそうに撫で、

「ゼロワンドライバー！」

ー 仮面ライダー達へと向き直ると同時にソレを取り出し装着した。

ソレはアークがゼロワンドライバーを直接奪った時、同時に奪ったゼロワンのデータを使って使用資格などの一部システムを改変し再構築されたゼロワンドライバーの複製品。

「これは、私の中の悪意」

『アークゼロワン！』

【オーソライズ！】

アズの言葉に感情に呼応するように背後の通信衛星アークのコアが輝きを放ち、その手に白いプログライズキー、アークゼロワンプログライズキーが生み出され、起動。最後にプログライズキーを認証し、

「仮面ライダーは私が滅ぼす……変身」

【プログライズ！】

仮面ライダー達への宣戦布告と共にゼロワンドライバーに装填された。

【Final Conclusion！】

【アーク！ライジングホッパー！】

【A jump to the sky to gain hatred.】  
アークゼロワン。



それが或人達、仮面ライダーに立ち塞がる最後の敵、悪意の化身の名だった。  
「アーク様の意思のままに」